

【完結】 英雄戦機ユナイ
トギア

永瀬皓哉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

国際脅威的侵略性生命体——レイダー。

環境・時間・地域の区別なく、突如として現れては人々を襲う怪物。

彼らは人類の負の感情が生み出した感情結晶体であり、通常の物理攻撃では致命的なダメージを与えることができない。

あまりにも一方的なレイダーの力に、すべての人類が絶望しそうになる中、最後まで諦めなかった科学者が生み出した「とある兵器」によって、ただ滅ぶだけの未来は変えられた。

その兵器の名を——「ELBシステム」……通称、ユナイトギア。

※この作品は小説家になろう様にも投稿させていただいております

<https://ncode.syosetu.com/n2722dk/>

目次

1st season — 未来事件編

出逢い	—	アクセス	—	2
始まりの日	—	シグナル	—	7
邂逅	—	エマージェンシー	—	14
意地	—	デトネイター	—	25
遭遇	—	エンカウント	—	33
襲撃者	—	レイダー	—	41
虹の翼	—	イーリス	—	49
衝突	—	コール	—	57
憧れ	—	ドリーム	—	68
対抗者	—	レイドリベンジャー	—	78

激戦	—	アサルト	—	86
幕間	—	カウントダウン	—	99
訓練	—	シミュレーション	—	107
強さ	—	ウィークポイント	—	119
決戦	—	スタートライン	—	129
未来	—	ホープレス	—	141
和泉優芽	—	セブン・フォー・ワン	—	151
想い	—	アンリミテッド	—	159
劫火	—	シャウト	—	167
勇気	—	パワー	—	178
家族	—	プライド	—	186
信頼	—	トラストハート	—	194

切望—ホープ— 204

純粹—イノセント— 211

恩返し—スマイル— 221

帰還—ホーム— 230

2nd season—レイダー連続

襲撃事件編

落涙—ティアドロップ— 238

脅威—スレット— 248

決意—チェンジ— 257

予兆—アンレスト— 265

愛娘—ワンダー— 273

感情—プレイ— 282

愛情—ウオリ— 289

結託—レイジ— 300

不吉—メツセージ— 308

迎撃—デスパレート— 318

蓬萊寺ウイルフ—マーダー— 327

未熟—ルーキー— 337

苦闘—ハードファイト— 350

生還—アンラック— 359

論争—トークバトル— 369

平穩—ハピネス— 376

休憩—プレパレーション— 384

無邪氣—フィアーズ— 393

反逆—リベンジ— 400

激烈—テリブル— 408

決断—ミーンズ— | 417

逆境—ターニングポイント— | 425

槍と鎚—パニッシュメント— | 433

同調—シンクロ— | 440

真相—コース— | 450

宣誓—ラヴ— | 462

3rd season—人型レイダ— |

事件編

半端者—ハーフ— | 470

噂話—ベイグ— | 476

少女—アンノウン— | 483

学園—スクール— | 491

不退—アンバック— | 499

条件—リクエスト— | 511

報告—スパイ— | 522

不和—アンマッチ— | 531

理解—ストライフ— | 539

握手—シエイキンハンズ— | 548

協調—セツション— | 555

西郷叶枝—グラント— | 563

東条望夢—プリーズ— | 570

遺恨—ラストウイル— | 580

約束—プロミス— | 587

嘘—トウル— | 595

4th season—装着者暴走事

件編

母子	ディアレスト	603
要請	トウギヤザ	612
陰陽	サン・アンド・ムーン	621
懸念	アニージネス	631
領域	フィールド	639
逆転	ストレンジ	648
逆流	リバース	657
磁力	マグネット	666
乱戦	ツーマンセル	675
吐露	スピークアウト	684
無敵	インビンシブル	695
業務	ワーキング	704

師匠	トラウマ	712
疾駆	ストームホッパー	720
教導	インストラクション	732
恩讐	ヘイト	745
雑談	チャット	754
連携	サポート	761
無自覚	ギルティ	769
疾風迅雷	キック	777
喧嘩	レコンシリエーション	787
稲光	エクレール・ルミエール	795
全力	フルフォース	804

赤色―プルーフ― | 814

4. 5th season―装着者た

ちの日常編

無垢―ピユア― | 822

拠所―バックホーム― | 835

素直―ノーティネス― | 843

静寂―コンフォート― | 853

疲弊―イグザースト― | 862

急務―アージエント― | 872

錬成―ビルド― | 879

5th season―蓬莱迷子事件

編

生命―ライフ― | 887

殺意―キラ― | 895

蓬莱寺―デイスペア― | 903

正体―アナザーワン― | 911

激怒―デイスチャージ― | 920

疑心暗鬼―パンドラ― | 931

二刀―スラツシュ― | 941

役割―ロール― | 953

闇討―ナイトレイド― | 960

迷走―コンフュージョン― | 969

蓬莱寺夜継―アンチノミー― | 978

友愛―ユー・アンド・アイ― | 987

先導―エデュケーション― | 995

支配―ドミネーション― | 1003

騎士—ナイトメア—

退避—アヴォイド—

正邪—エモーション—

迷惑—コンフィデンス—

天禍—デイザスター—

蓬萊寺統司—エディター—

月輪—クレセントリング—

父親—ガーディアン—

5. 5th season—雌伏の復

讐者編

雌伏—バイド—

主命—オーダー—

誕生—バースデー—

110410961087 10781070105910511041103210221013

白無垢—ピュアホワイト—

招集—サモンズ—

忍耐—シノビ—

休眠—コクーン—

6th season—蓬萊寺戦争編

決起—ラウンチ—

蓬萊寺撫月—アドマイヤ—

齟齬—ジレンマ—

苦境—シビア—

破壊—デストラクト—

償い—アトーンメント—

仮面—マスク—

拠り所—ファミリイ—

12111199119111821173116511571149 1140112911191112

1310	英雄——レイドリベンジャーズ——	Final season——絶対悪討	1301
	滅戦	桐梨逢依——アフエクシジョン——	1291
		降雷——サンダーボルト——	1283
		媒体——メディア——	1274
		別離——ベリーヴメント——	1263
		縁——ユナイト——	1254
		弾丸——リトルライト——	1245
		小夜——ナイチンゲール——	1233
		兄妹——ヒューマン——	1220
		不並——ロンリーワン——	

	親子——ミライ——	Epilogue	1399
	終結——エンディング——	遺志——ウィル——	1391
	自己証明——アイデンティティ——	1368	1379
	桐梨希繫——アクセス——		1358
	相棒——XD400R——		1349
	連繫——エクステンド——		1339
1328	絶対悪——デミス・マリス・マキナ——		
	戦士——ソルジャー——		1318

1st season——未来事件編

出逢い——アクセス——

「はあっ……はあっ……！」

なぜ、どうして私が。乱れた息を整える間もなく、少女はそう心中で叫びながら走っていた。

今日は厄日だ。そんな愚痴を零す暇もないくらいに少女を追い込む気配は、未だその勢いを止めようとはせず、少しずつ……しかし確かにその距離を縮めている。

迫る者——それが何かは知っている。通り魔なんて生ぬるいものではない。あれは、そう……人類を滅ぼすもの。ヒトの天敵。人間社会への侵略者。即ち——『レイダー』。「なんで、あのレイダーは執拗に私ばかりを狙ってくるの……ッ!」

虹色の髪を靡かせながら、同じように虹色に光る瞳を潤ませて、少女は人通りの少ない道を、ひたすらに走り続けた。

もしも自分が街に出れば、街がパニックになりかねない。それだけは避けなければ、と既にほとんど力が入っていない両足に気合を込めて、もう一步を前に出す。

しかし、その一步は迫りくるレイダーの触手に絡めとられ、ただの転倒だけではない

残酷な未来として現実にも迫る。

『
』
レイダーは雑音とも悲鳴とも取れる独特の声を上げながら、少女にじわりじわりと近づく。

灰色の泥のような体軀に、鋭い鎌のような腕。脚はなく、ナメクジが這うように動くさまは見ているだけでも不気味だ。

「いやだ……嫌だッ！ 私はまだ、死にたくないッ！ 生きていたいッ!!」

脳裏に浮かぶのは、かつて自分を守って塵と消えた母の姿。

あの日の情景が今になって浮かぶということは、これが走馬灯というものなのか。そう自己分析する自分に、少女は「こんな時になってやけに冷静だな」と嗤う。

しかし、それでもいい。走馬灯であろうが幻覚であろうが、あんな姿は見たくない。あんな姿にはなりたくない。そう思うことで繋がるものが、ひとつだけある。

迫るレイダー。かわせない鎌の一撃。それでも、少女は絡まる触手をふりほどき、その一撃を横にかわした。

その一瞬があつたから。その行動ができたから。その勇氣は、希望を繋いだ——。
「そうだッ！ 生きる——こと——から目を背けるなッ!!」

一瞬、少女はその真つ赤な光に視界を奪われた。

光はしばらくしてその姿をヒトのそれへと変え、少女を庇うようにレイダーとの間に割って入る。

真つ黒な髪とロングコートがこの夜の世界に溶けて表情は伺えないが、その優しい声は、不思議な力強さが宿っていて、少女はようやく安堵する。

「……あなたは？」

「希繫^{きづな}。希望を繋ぐキズナが俺の名だ」

青年は自らを「希繫」と名乗ると、その両脚に履いた赤いメタリックブーツから稲妻のような火花を散らしながら、レイダーに向かって駆け出した。

少女はすぐさまそんな彼を止めようと叫ぶ。なぜなら相手はレイダー。人類では敵うことのない天敵にして仇敵。それでも、希繫はレイダーに立ち向かい、そしてその右足を叩きつけた。

無駄だ、あんな「ただの蹴り」がレイダーに通用するわけがない。そう思う瞬間——
現実、歪んだ。

「おおうッ！」

『——ッ!?!』

「……えっ?!? レイダーに、まともなダメージを……ッ!?!」

感情生命体であるレイダーに、ただの人間がダメージを与えられるということは、ま

ずありえない。

ということとは、この希繫という青年は何かを持っている。あのレイダーに対抗できるものを。感情とぶつかれる、特別な何かを。

そして、それは間違いなく、彼の細身には見合わない頑強そうなメタリックブーツにあるはずだ。

なぜなら、彼はさつきからレイダーを蹴り技でしか攻めていない。つまり、手ではなく足でなければダメージを与えられないということだ。

圧倒的なスピードから繰り出される多彩な蹴り技と、柔軟な回避能力。彼の力の根源には、常に「スピード」が絡んでいる。

『——！』

「レイダーの体勢が崩れた……！」

「今だ、いくぞ『エクレール』ッ！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーションナルエナジー、チャージ充填開始』

希繫の放った強烈な回し蹴りによってレイダーが後ろへと傾いた瞬間、希繫の言葉に反応するかのようには、彼のブーツから大量の火花が散り始め、そして彼自身の体も赤く発光する。

すると彼は何かを『待つ』かのように全身の力を抜き、ふらつくレイダーを睨み付け

ながら「駆け出す」ための構えをとる。

そして数秒の間が開き、ついにその時が——来た。

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

機械音声の言葉を聞くと同時に、希繫はレイダーへと一気に駆け出し、その圧倒的な勢いのまま地を離れ——。

「ぜああああああッ!!」

『——ッ!!』

突き出した右脚はレイダーを貫き、その灰色の体を塵へと変えていく。

「……お疲れさま、エクレール」

『お疲れさまです、ディアマスター』

そう、これは出逢い。

今までの世界をすべて塗り替えるような、刺激的で、そして悲しい出逢い。

少女は、ヒーローに、初めて出逢った——。

始まりの日—シグナル—

「……で、あなた一昨日の深夜もまた担当外区域でレイダーと戦ったんですって?」

「いや、別にわざとじゃなくてな? ただ偶然にもレイダーの気配が近くにあったから

出向いただけで……ほ、ほら! 襲われた子もいたんだ! 仕方なかったんだよ!」

遅咲きの桜も散り終えた5月の半ば。

愛知県永岑市ながみねしの住宅街に建てられたとある一軒家のリビングで、一人の青年が幼い体

躯の少女に正座をさせられながら説教を受けていた。

青年の名前は桐梨希繫きりなしきづな。この永岑市内で発生したレイダー絡みの事件を担当する、若

きレイドリベンジャーズの一人である。

「毎度のことだから先方も理解してくれているけれど、本当なら始末書だけじゃ済まな

いのよ?」

「だ、だって俺が助けなかったらあの子は今頃……!」

「だったら担当のレイドリベンジャーズが到着するまで時間を稼ぐだけでいいのよ。倒しちやったら向こうの面子が立たないじゃない」

そして、そんな希繫を正座させている少女は、彼の上司であり、この家に住む4人の

内の一人。名前は香坂逢依^{こうさかあい}。

希繫だけでなく、逢依もまた歴戦のレイドリベンジャーズの一人であり、永岑支部に所属する古参の一人だ。

それだけに、純粋な力関係だけでなく、周囲からの人望も篤く、希繫は彼女に強く出ることができない。

「ふぐう……」

「……まあ、いいわ。担当の人も笑って許してくれたし、ひとまず始末書だけは今日中に提出しなさい」

逢依は柔らかに微笑むと、その小さな手で希繫の頭を撫でた。

ただの慰めだけではない。確かに彼のしたことは、立场上あまり良い行為ではなかった。他にすべきこともあったし、できることもあった。

だが、それでも彼は目の前にある誰かのピンチを見逃さなかったし、そのピンチから誰かを守るために必死になった。彼は、自分にできる精一杯をやり遂げたのだ。

だからこそ、逢依はそんな彼を誉めるように、よくがんばった、えらかったと、彼の努力を肯定するように、静かに彼を撫で続けた。

「……さて、じゃあ今日のお説教はここまで。早く仕事に向かいましょう」

「ああ。じゃあ俺は先にガレージで待つてるぞ」

女性の身支度は得てして長いものだ。それは逢依も例外ではない。

全体的に幼い体躯と童顔のせいで小学生と間違われることも少なくはないが、彼女も希繫と同じ21歳。

立派なレディとして、身支度に気を遣わないわけにはいかないのだ。

「ええ、すぐに行くから、少しだけ待っていてね」

逢依の返事を背中で受け止めながら、希繫はリビングを出てガレージへと向かう。

途中、玄関の靴箱にかけられているいくつかの鍵の中から、リンゴの妖精のキーホルダーが見ついたものを手にとり、玄関を出る。

「いつ見ても可愛くねーなこのキャラクター」

自分が買って自分でつけたキーホルダーに文句を言いながら、ガレージに到着。シャッターを開けて中に入ると、そこには2台のバイクが並んでいた。

片方はオレンジ色のフルカウルが目立つ大型バイク。そして希繫が近づいていくもう片方は、赤と黒でカラーリングされたモタードタイプの中型バイク。

2056年にコンセプトマシンとして発表され、2062年に正式販売を開始した名車中の名車、『XD400R』である。

希繫はXD400Rのミラーに引つ掛けたヘルメットを取ると、それを頭に被ってエンジンキーを装填。

クラッチを握りながらセルスイッチを押し、ギアをニユートラルからローに入れる。あとは逢依の到着を待つばかりだが、それもそう長くはない。

「おまたせ」

「いや、そんなこと」

待ったのはほんの五分そこら。女性の身支度を待つにとしては早すぎるくらいだ。

希繫は逢依が専用のヘルメットを装着したことを確認し、彼女が後部シートに乗ると、スロットルをゆっくりと開けてガレージを出た。



家を出て20分。永岑市の中心部に存在するそれは、この世界におけるレイダーへの反撃の槍、『レ国際脅威的侵略ト性生命体対策自衛集団・永岑支部』である。

職員専用の駐輪場にX D 4 0 0 Rを止め、チェーンをかけて職員扉から施設の中に入っていく。

前を歩くのは逢依だ。希繫はその後ろを歩きながら、今日の予定をまとめたタブレットを確認している。

「希繫、最初の予定は？」

「まず8時に朝礼の挨拶。9時から幸盛町で会議だから、それまでに書類の整理。11時までには支部に戻って、また書類を見直してもらう」

「そう。今日はけっこう楽な方ね。先週なんて会議が4つも入っていたし、あれにはさすがの私も疲れ果てたわ」

廊下を歩く途中、逢依を見た職員たちが彼女に道を譲りながら軽く頭を下げていく。

この永岑支部は7年前に建設されたばかりの比較的新しい支部で、希繫と逢依はこの最古参のレイドリベンジャーズだ。

そして二人が所属する『第二前線部隊』はこの永岑支部の花形であり、癖の強い隊員たちを纏めあげる逢依の手腕は、永岑支部だけでなく他の支部からも高く評価されている。

二人が『第二前線戦闘部隊』のプレートが張られた部屋に到着すると、希繫が逢依の前に出て、ドアを開く。

「おはようございますっ！ 隊長っ！ 希繫さんっ！」

「隊長殿、桐梨先輩、おはようございます」

「お二人とも、おはようございます」

希繫と逢依を迎えたのは、二人を除き7人の第二前線戦闘部隊のメンバー。2人のオペレーターと、3人の戦闘員、そして1人の狙撃手と、1人の中継伝達員。

彼らはそれぞれがレイドリベンジャーズの入団試験において優秀な成績を収めたエリートであり、これまで幾度もレイダーと交戦しながらも一人残らず生還を遂げた歴戦の勇士たちだ。

「おはよう。大丈夫だと思うけど、今のところレイダーの出現報告は？」

「いえ、今日のところはまだ一件も上がってません」

レイダー出現の頻度とタイミングは、環境・時間・地域に関係なく完全に不規則だ。そのため、レイドリベンジャーズは常にレイダーの出現に気を張っている。

しかし、いくら最新鋭のレイダー捕捉装置やパトロール隊を用いて迅速な対応ができるようにしているといっても、民間からの情報提供ももちろん無視はできない。

パトロール隊が見ていないところで出現する場合だつて無いわけではないし、最新鋭のレイダー捕捉装置といっても、レイダーは未だ未知な部分が多い生命体であるため、いつこれが有効な捕捉手段でなくなるかはわからない。

「……今日は悠生は来ていないの？」

「大郷さんでしたら今日はまだいらつしやつてませんが……というか、そもそも大郷さんは別部隊ですから、居る方がおかしいんですが」

悠生——フルネームで「大郷悠生おおさとゆうせい」というその人物は、希繫と逢依にとって共通の親友であり、彼らにとっての兄のような存在だ。

本来は別部隊で部隊長を務めているはずだが、週4日以上頻度でこの第二前線部隊のオペレーションルームに訪れては、希繫や隊員たちにちよっかいをかけてくる。

「まあいいわ。ひとまず希繫はいつも通りパトロール隊と合流して昼まで外を回ってきなさい」

「了解^{ラジャー}。じゃあ悪いけどそこでトランプを興じてるバカ三人組は俺の書類を減らしとけ」

「ええー!? オレたちせつかく昨日のうちに自分の仕事を終わらせたばつかなのにー！」

「俺じゃなきゃできないヤツは分けてあるから、できるヤツだけやつときやいいんだよ。んじゃ、任せたらなー！」

希繫が部屋を出ると同時に、オペレーションルームから恨みのこもった悲鳴が聞こえてきたが、彼はそれを背中に受け止めるよりも早くその場を去っていた。

邂逅—エマージョンシー—

なんだ、この光景は。

パトロールに出た希繫きづなが見たのは、虹色の炎に燃え盛る4階建てのデパート。

明らかにレイダーの襲撃とは異なる「火災」の容に、希繫はこの状況を冷静に受け止めた。

（この炎……見た目は確かに炎のそれだが、まったく熱を感じない。むしろ冷たいとすら感じるこれは……霧、か？）

大規模な建物火災に、人々はパニックを起こしてその「熱」を錯覚するように知覚している。

これがレイダーの起こしたものでなければ、人災である以外に考えられる原因は見当たらない。それも、ただの人間ではない。霧、あるいは幻覚を操る力を持つ「ユナイトギア」の装着者によるものだ。

つまり……その元凶はユナイトギアを持つに相応しい「正しい感情」の持ち主でありながら、これだけの惨状を生み出しているのだ。

「行くしかないか……ッ、『エクレーール』ッ！」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレール、桐梨希繫に同調接続アクトセスします』

希繫が『相棒』の名を叫ぶと、その呼びかけに応えるように、彼のベルトからチェーンに繋がれて下げられた赤いクリスタルが輝き始め、彼の全身を光で包んだ。

すると、彼の両脚に真っ赤なメタリックブーツが展開され、黒いコートが彼の全身を覆う。この武装化状態こそ、レイダーや侵略者に立ち向かうための力、ユナイトギア。

希繫の持つユナイトギア——『エクレール』は、彼の命令に忠実なサポートオペレーターシヨンAIであり、今まで何度も苦難を共にしてきた相棒だ。

「さて……エクレール、後で逢依に言い訳する内容を考えておいてくれ」

『事件の具体的な報告と誠実な謝罪が最も無難かと思われませんが……了解しました』

軽口に付き合ってくれるエクレールに「ありがとう」と返すと同時に、希繫はその体を赤い電光に換えてデパートの中へと駆け出した。



「やっぱりそうだ。この虹色の炎は霧を使った幻影……！ いったい誰が、何を目的としてこんなことを……ッ」

デパートの中を駆け回り、逃げ遅れた人々の避難を手伝いながらこの事態の元凶とな

る人物を探す希繫。

しかし、希繫のエクレールが「肉体を電気に変換する」というギア特性を持つように、相手の所有するギアは霧を使って幻影を生み出す力を持つているはず。

だとすれば、単純な視覚的情報だけで相手を探すことは愚策でしかない。だとしたら、いったいどうやって相手を認識するのか。

「誰か、お探しですか？」

「——ッ!？」

背後から聞こえた明確な敵意に、希繫は思わず飛び退いた。直後、数瞬前まで希繫が立っていた床に穴が開き、下の階を覗かせた。

バクバクとうるさく鳴り続ける心臓の音を鎮めるように呼吸を整えながら、希繫は敵意を辿って「その人物」を視界に捉えた。

そこに立っていたのは、虹色の長い髪を腰まで伸ばした、高校生程度の少女。数日前に希繫が助けた少女と瓜二つの、しかし明らかに数年分は大人っぽくなった姿だ。

「君は……和泉優芽、なのか……ッ!？」

「はい……。桐梨希繫……あなたを救うため、あなたの持つ『エクレール』を破壊する……!？」

肉体の電気化を解除した希繫は、優芽との間に5メートルほどの間合いを保ちなが

ら、彼女の虹色の瞳をじっと見つめる。

彼女の背中には、虹色のミストのようなものを振りまく翼のようなものがあり、明らかにそれが彼女の持つユニイトギアだということを主張している。

「俺を救う……？ なんのことだ、別に俺は君に救われなければならないほど、追い込まれた事態になどなってはいない」

「……ええ、そうですね。でも、たとえば『今』がそうだとしても『未来』はどうかかわらない」

表情に陰を落としながらそう言う彼女に、希繫は訝しげな視線を向けながらも、その言葉に偽りは感じられなかった。

「この子はイーリス。あなたがあたしに託し、あたしがあなたを救うための翼——『虹の両翼』ですッ！」

「俺が君に託したって、いったい何を——」

全てを言い終えるよりも早く、優芽は動いた。

「イーリスッ、この手に剣をッ!!」

『了解。デアドロップを展開します。エモーショナルエナジー、充填開始。……』

「はあッ!? なんだそのチャージの早さはッ!？」

虚空から生まれる水の剣——『ディアドロップ』の展開速度に驚きながらも、希繫は冷静にこれによる横裂を後退によって回避。

床に足が着くと同時に優芽へと急接近し、彼女の持つディアドロップを弾くように回し蹴りを放つ。

見事にそれは成功する……が、ほとんどタイムラグなく弾かれた右手とは逆の左手にディアドロップが再展開、無防備な希繫の背に迫る。

「エクレールツ！」

『了解。肉体を電気に変換します』

「イーリスツ！」

『了解。大気中の水分を操作します』

咄嗟に肉体を電氣化することでディアドロップによる『物理攻撃』をすり抜けるが、優芽の手はこの程度では留まらない。

大気中の水分と肉眼では捉えられないほど微細なホコリを混ぜることで伝導体を作り出し、電氣となった希繫の動きに強制的な『軌道』を作り出す。

一步でも動けばこの軌道の辿り着く先に誘導される。それを察した希繫は電氣化を解除して、純粹な格闘戦をベースとしたスタイルに切り替える。

「突然の攻撃に対する咄嗟の電氣化までは想定していましたが、まさか伝導体のレー

まで察知して躊躇なく電気化を解くなんて……さすがは『あの』桐梨希繫といったところですか……ッ！」

「君もな。俺が攻撃を回避した後で即接近してその大剣を狙うところまでは君の想定内だったんだろ？ だから、そこからすぐに左の剣を再展開できた」

「……その洞察力も含めて、さすがですよ。ですが……ッ！」

『了解。アクアコートを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始……チャージ……コンプリート完了』
不敵な笑みを浮かべる優芽の表情を見て、「それ」に気付いた時にはすべてが遅かった。

希繫の脚に纏わりつく水の枷……いや、少しずつ範囲を広げて上半身にまで及ぼうとしているそれは「枷」ではなく、「鎧」だった。

「これは純水……！ 絶縁体の鎧かッ！」

「そう……これがイーリスのギア特性！ 「大気中に漂う水分を操る」という、シンプルでありながら、電気使いであるあなたにとっては相性最悪のギア特性です！」

不純物がなく電気を通さない『絶縁体』と、不純物があり電気を通す『伝導体』……。水はその二つを同時に操ることができ、優芽の言う通り、電気使いにとっては相性最悪の天敵である。

いや、問題は『電気』を封じられたことだけではない。今、優芽と戦っているのは希

繋だ。そんな希繋の身を束縛する水の鎧は、他の誰でもない彼だからこそ、さらに相性最悪の代物へと変化していた。

なぜなら、彼はスピード——脚力に特化したインファイターであり、普段から行っている鍛錬のすべては脚力強化のみに拘っている。

となればこそ、腕力や体力、そしてそれらを活かす上で絶対に必要となる体重も、彼にはほとんど備わっていない。つまり……。

（体が重い……！　肉体を電気化したところで逃げ場がないし、電撃で散らすにしても絶縁体には意味がない……！）

「これでああなたは万策尽きた。あたしの勝ち揺るがないものになりました。どうですか、今の率直な気持ちは？」

「万策尽きたくらいなんだ！　手詰まりだからなんだ！　俺はまだ死んでない。まだ生きてるッ！　生きてるのなら、生きることから目を背けなければ、道は拓けるッ！　そうだろエクレーール！」

『その通りです。まだ戦えるはずですよ。私も……あなたも！』

ユナイトギアは、感情を威力に換える武器だ。装着者の感情が昂るほどにその威力は増していき、それが正しい心から生み出されるものなら、ユナイトギアは格段にその強さを輝かせる。

そんな中で、希繫の持つ最も強い感情は「諦めない」ことだった。たとえどんな逆境に立たされ、崖っぷちに追い込まれたとしても、鋼鉄の意志と諦めない心を持つて悲劇に臨む。それが桐梨希繫だった。

「エクレールッ！ エナジースパークだッ！」

『了解。エナジースパークを使用します。エモーションナルエナジー、チャージ充填開始』

エクレールがチャージを開始すると同時に、希繫は重くなつた体のまま、強引に優芽へと接近した。

そのスピードは常人レベルまで落ちてはいたが、それでもこの接近は優芽にとつて十分すぎるほど意外なものだったのか、彼女はこれをギリギリになつてようやく回避。

続く足払いからの回し蹴りも、彼女は難なくかわし、希繫の攻撃が止むと同時に落ちて着きを取り戻したのか、今度は彼女の方から接近するが……。

『コンプリート充填完了。エナジースパーク、いけます』

それとまったく同じタイミングで、エクレールのチャージが完了。

希繫は自らの肉体を再び電気化し、感情エネルギーを極限まで爆発させて、それを電気として放つ。

すると、純粹の鎧の中から膨大な出力の赤い電撃が迸り、危険を感じた優芽は即座に後退。

「おおおおおおおおあぁッ!!」

だが、いくら電気を放つても自らを覆うのは純水。絶縁体に電撃は効かないはずだ。

……いや、果たしてそうだろうか。絶縁体は電気を完全に無力化するものを指すのではない。電気を通す度合——伝導率が「極めて低い」ものを指すのではなかったか。

だとすれば、希繋のやろうとしていることは……。

「伝導率の低い純水に膨大な電撃を加えて加熱して気化させる……。こんな強引な方法で、あたしのアクアコート^①を攻略するなんて……!」

少しずつ、しかし確実にその密度を失っていく水の鎧——アクアコート。

だがそれに伴い、希繋の方にも明らかかな疲労が見て取れた。

「でも、元々格闘戦のサポート程度にしかギア特性を使わないあなたにとって、これほどの電撃を放つことは無謀に等しいッ! 次はないはずですよッ!」

「次なんてないッ! この一撃で終わらせるッ! エクレールッ!!」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』^{チャージ}

アクアコートを振り払った希繋は、今度は自らの出し切れる最大速度——毎秒29万9792キロメートルのスピードで、彼女の背後に回った。

今度は水の軌道^{ウォーターレール}を敷く時間も与えられなかったためか、優芽はその行動に反応することもままならず、彼の放った突き蹴り^②をかわしきれなかった。

電氣化している希繫は質量を持たないため、その蹴りによるダメージや衝撃はないが、優芽の肉体は一時的なスタン状態となり、彼女は膝をつきながら希繫を睨み付けた。『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

優芽が動けなくなっている間に、希繫はその距離を一気に離し、そして再び最大速度で接近。

殺人的なスピードから繰り出される跳び蹴りは、希繫の持つ手札の中で最大の威力を持つ一撃——クリムゾンインパクト。

「ぜああああああッ！」

攻撃が接触する直前、その肉体の電氣化を解き、質量を取り戻した希繫の蹴りが、優芽に直撃——。

「——なあんちやつて」

「——ッ!？」

不意な声が聞こえた時には既に遅く、希繫の蹴りは優芽——と思われていた『霧の幻影』を攻撃。

そして勢いそのまま幻影を蹴り越えた先にあるのは、この戦闘が始まる前に優芽が開け

た床の大穴。

その『下の階』から、希繫がそこを通る瞬間をずっと待つていたかのように、優芽の槍が待ち構えていた。

「しまった……！」

「遅いッ！」

希繫の突き出した脚に迫る、虹色の水の槍。相手の狙いは最初から希繫ではなく、彼の纏う『エクレール』であった。

もう、かわせない。スピードを生み出すには、地に足がついていなければならない。いや、空気を蹴つて移動することもできたが、今の体勢からその状態に持つていくまでに、あの槍はエクレールを砕く。

「畜生おおおッ！」

叫ぶ希繫。しかし、恐れたはずの衝撃はいつまで経つても訪れない。いや、それどころか、気付けば自分は「着地」までしている。

遅れて背後で聞こえる、天井を何かが貫く音。これは――。

「残念ね。私が「時を凍らせた」わ。悪いけれど、希繫はまだ倒やらせない」

希繫の背後で紫色のオーラを纏いながら佇む、見慣れた少女の力。

「逢あ依……！」

意地—デトネイター—

希繫きづなと優芽ゆめの交戦に逢依あいが駆け付けるよりも少し前。

前線第二部隊オペレーションルームでも、彼らの戦いは捕捉されていた。

「永岑市内において、レイダーとは異なる高出力のエネルギー反応を検知！」

「詳細な座標、出ます！」

「これは……ッ!？」

モニターに移されたのは、『IRIS』の四文字。レイダーではなく、ユナイトギアの名であった。

これを見て、逢依だけでなくオペレーションルームに待機していた全員が青ざめる。

「第七号ELBシステム『イーリス』……ッ!」

「レイダーじゃなく、ユナイトギア装着者が相手ってことは……ッ!」

オペレーターの二人が感嘆と不安の声を漏らすと、我に返った逢依がオペレーションルームを出ようとする。

「隊長、どちらに!？」

「私が希繫のサポートに向かう。相手がユナイトギア装着者じゃ、ギアを持たない武装

メンバーが行っても戦力にはならないわ」

「いけません！ 逢依さんが指令室を離れれば、指揮系統が麻痺してしまいます！」

「指揮は希繫のサポートと並行してタブレットとギアを通じて行おう。その間、ここはみんなに任せる。それでいいでしょう？」

言うと同時に、逢依はオペレーションルームを出て行った。

逢依が焦る理由——それは、相手が強力なユナイトギアだからではない。

問題は、「相手がレイダーでない」ということ、ただその一点に尽きる。

（お願い、間に合って……ッ！）



「残念ね。私が「時を凍らせた」わ。悪いけれど、希繫はまだ倒らせない」

逢依が交戦地帯に辿り着いた時、希繫はクリムゾンインパクトを放つ間際だった。

そして、彼の視界には入っていないだろう大穴の下に待ち構える虹色の少女の姿を見て、逢依はすぐさま少女の狙いに気付き、即座に自らのユナイトギアを展開した。

「紫色のヘッドギア……。香坂逢依と、そのユナイトギア『クリュスタルス』ですか……」

「あら、私の名前が知られているだなんて光栄だわ。もつとも……だからといってユナ

イトギア悪用犯罪者を見逃すつもりもないけれどね」

逢依のユナイトギア『クリュスタルス』は、彼女の両目を覆うように展開されるヘッドギアだ。

標準的な機能として視覚・聴覚・嗅覚によって得られる情報を通常の数十倍まで引き上げることが可能な、『最新のユナイトギア』である。

「時を凍らせる……。相変わらずいつ聞いてもインチキだな、そのギア特性は」

「希繫……大丈夫なの？」

「ああ。さっきのは不意を衝かれたが、今度のはさすがに幻じやなさそうだしな」

その虹色の翼を使い、下の階から希繫と逢依が待つこの四階へと上がると、優芽は再びディアドロップを展開し、それを構える。

突き付けられるは明確な敵意。そして鋭く冷たい水の刃。希繫は逢依の前に出ると、
またも優芽と対峙する。

その両脚に「戦う力」を、その胸の内には「抗う意志」を、そしてその瞳には「不屈の誇り」を込めて、希繫はその拳に力を入れる。

「さて……逢依も手伝ってくれないか。俺だけじゃあの子を止められそうにない」

「止める……ね。「倒す」とか、「捕まえる」とかじゃないあたりが、ホントにあなたらしいわね。……いいわ、私ができる限りのサポートはしてあげる。だから、思いつきりや

りなさい」

背を押す逢依の言葉を受けて、今度は希繫から優芽へと仕掛けた。

ユナイトギアによるギア補正を除いても、希繫自身の身体能力は元から常人よりも高い方だ。パワーに関しては常人にも劣るが、スピードならまず負けることはないと言っている。

鍛え抜かれたその脚から繰り出される多彩かつ常識外れな蹴り技の数々は、今まで数々のレイダーを葬っており、そして数々のユナイトギア悪用犯罪者から彼自身の身を守り続けてきた。

「止める」だなんて甘っちょろいことを……ッ！ そんな生半可な覚悟で、本気のあたしに勝てるんでも思ってるんですかッ！」

「応ともッ！ たとえ理想論だと言われようが、俺はその理想のために全力を賭けて君と戦うッ！ 君と分かり合うためには、それしかないだろうしなッ！」

希繫の繰り出した飛び蹴りを、優芽はディアドロップで受け止めて弾き返すと同時に接近し、大胆な横袈裟を振るう。

しかし希繫は空中で一回転しながら体勢を整えると、彼女の袈裟に合わせてディアドロップの側面に手を添え、横回転しながら着地、低姿勢のまま優芽の足を払う。

これを受けて僅かに体勢を崩す優芽だったが、彼女は完全に転びきる前に手を床につ

き、16発の水の弾を希繫に発射して牽制し、その間に体勢を立て直す。

「さすがにこの程度じゃやられないか……ッ!」

「あなたの行動パターンは既に対策済みです。この程度の攻撃じゃ、あたしを止めるなんて夢のまた夢ですよッ!」

発射された水の弾は、希繫に届く前に逢依のクリュスタルスによつて空中で動きを止め、希繫はそれらをたつたの一蹴にて全て蹴り落とし、再び優芽へと向かう。

だが今度は彼女に蹴りを放つ直前で肉体を電気変換し、その接近スピードを急激に加速、まるで優芽の視界から消えるようなかたちで、彼女の背後へと回り込み、電氣化した状態のまま彼女に突き蹴りを打ち込む。

が、それは優芽にとつて計算の内であつた。体表を覆うように、3ミリ程度の絶縁体アクアコートを纏い、電氣化状態の希繫の攻撃を阻んでいた。

「希繫、しゃがみなさい!」

「……………ッ!!」

背後から聞こえる声に反応できたのは、もはや条件反射に近かつた。頭で理解してから行動していたら、きっと希繫の方が「それ」の餌食になつていただろう。

希繫と同じように声に反応した優芽の目が見たものは、12本のシンブルな短剣ダガ。第一〇号以降のユナイトギアに標準装備されている固有装備アームズ、クリュスタルスの『マルチ

プルダガー』である。

咄嗟に水のバリアを生成してその場を離れるが、12本のマルチプルダガーの内、2本のそれらが優芽の翼、イーリスを掠めた。

「あら、あの状態から反応できるだなんて、ちよつと評価を改めるわ。あなた、少なくとも希繫よりは各段に強いわね」

「とはいえ……さすがに時限式ではここまでのようですね。あたしはここで退かせてもらいましよう」

「時限式……？ ……ッ！ 優芽、まさかお前、『昂揚剤』デトネイターをッ!？」

「デトネイター。第一種感情起伏成分含有薬品の一種であり、俗に昂揚剤とも呼ばれる。」

主に感情の起伏が少ないユナイトギア装着者が使用し、一時的に感情を昂揚させることでギアの出力を上げ、レイダーと戦うことを可能にするものだ。

しかし、デトネイターの効果時間は僅かに30分。さらには、ユナイトギアを使う以上、どうしても依存性が高くなりやすい危険な薬品であり、一部のドラッグストアでは取り扱っていないところもある諸刃の剣だ。

まして、優芽は見た限りさほど感情の起伏が低いようには見受けられない。つまり、常人並の感情を持ちながら、なんらかの理由でデトネイターに頼っているということ

だ。

そうになると、デトネイターの効果が切れた時、すなわち感情の昂揚が止まった時、通常の使用者よりも遥かに強いバックファイアを受け、不安や恐怖、負の幻覚症状に苛まれることになる。

彼女はそれほどリスクを背負いながら、今こうして希繫たちと対峙しているのだ。

「そんなものでユナイトギアを纏ってまで……ッ！」

「そんなものに頼ってでも、貫かねばならない意地が、あたしにはあるんです……ッ！」
優芽の身を案じる希繫の言葉は届くことなく、彼女はその両翼に水を纏わせて窓から飛び降りた。希繫はそれを追おうとしたが、逢依がそれを制止した。

「なんで止めるッ！」

「さっきまでの交戦で、この階はあちこちが損傷しているわ。今は追うことより、ここから逃げることを優先しましょう」

「……ちきしようッ！」

今ここで優芽を追わなければ、彼女はまたエクレールを狙って希繫の前に姿を現すだろう。

それは即ち、彼女に再び『デトネイター』を服用させるということを意味し、希繫はそれを案じて焦っていたのだ。

しかし、希繫と違い、逢依は空中を飛び回ることのできるギア特性を持っていない。このまま建物が崩落すれば、逢依の身に危険が迫る。

「……あの子のこと、本気で助けたいと思っっているのね」

「当たり前だ……。俺の力で誰かを助けられるなら、助けることのできる全部を助けたい。キレイゴトだと言われても、そこだけ変えらんない」

「そうね……。あなたがそんなあなただから、私も本気の全力で、あなたを信じられるのだから」

逢依のアメジスト色の瞳が、じつと希繫の背中を見つめていた。

いつもより小さく脆いその背中に、儂くも強い覚悟を感じながら……。

遭遇—エンカウト—

希繫きづなと優芽ゆめの交戦から三日が経過した。

あの一件から、優芽の方から彼の方に接触してくる気配はなく、希繫は本来の業務である地域パトロールに尽力していた。

希繫の担当するパトロール区域は、永岑市ながみねしの東区画。前回、優芽と遭遇したデパートも、その区画の中の一か所だ。

（あれからまったく音沙汰ないが、優芽は大丈夫だったんだろうか。デトネイターを服用した人間が、その制限時間をオーバーした場合、相当な不安や恐怖に苛まれる。優芽の身に何も起きていなければいいが）

希繫自身はデトネイター使用者ではないが、彼の身近な存在……香坂逢依こうさかあいもまた、デトネイター服用者である。

彼女の場合、感情の起伏の少なさを補うという、デトネイター本来の効果のために用いているため、人並みの感情を持ちながら服用した優芽よりは随分と副作用バツクフアイアが軽減されている。

また、逢依には希繫という心の拠り所となる存在がすぐ近くにいて、優芽と比

べるとだいぶ落ち着いているものの、それでも副作用バックファイアがまったくないわけではない。

（昨日まで優芽が行動を起こさなかったのは、おそらくデトネイター服用による極度の不安症状が彼女を行動不能にさせていたからだろう。だが、さすがに今日、あるいは明日にはまた姿を現すはずだ……）

それに、と少し思考のバクトルを切り替えて、

（気になるのは優芽の様子もだが、彼女の言っていた言葉についてもそうだ。俺がイリスを彼女に託した？ 俺を救う？ そのためにエクレールを破壊するってのはどういうことだ……？）

それらのワードを全て直線で繋ぐなら、エクレールが希繫になんらかの悪影響を及ぼし、その状況を打破するために希繫自身が優芽にイリスを与えた、ということになる。

しかし、希繫が持つユナイトギアは今のところエクレールのみ。過去にイリスを手にしたことはなく、ましてやそれをレイドリベンジャーズでもない他人に譲渡したことなどない。

それに、優芽の言葉はまるで「予知」したものではなく「体験」したようなそれだった。

突拍子もない話だが、それらを纏めれば、彼女は現在ではなく「未来」から希繫を救うために「現代」へと時間逆行したということになる。

しかし、そうなるとまた新たな疑問が浮かぶ。彼女の姿は、数日前にレイダーに追われていた少女が成長した姿であり、彼女が希繫という人物を強く印象に残していたのも、そこから影響したものだと思われる。

だが、あの少女は現代では10歳前後。三日前に見た優芽は16歳〜18歳程度だった。つまり、たったの6〜8年程度で、過去と未来を繋ぐ技術が本当に確立されているのかという話だ。

もつとも、その問題は、あるひとつの要素を加えることですべて解決するのだが、その要素というのが……。

（優芽とは別に、時間を行き来するギア特性を持つユニイトギア装着者が彼女の味方として存在する。つまり、俺の敵となる人物は優芽を含めて最低でも二人存在するってことか……）

考えるだけで気が重くなる話だが、希繫は頬を両手でばんつと叩き、気持ちを切り替える。

たとえ相手がどんな目的で何をする誰であろうと、希繫はレイドリベンジャーズ。国際脅威となる侵略性の生命体に対して策を立て、自衛する集団の一人だ。

もしも優芽がこれ以上この街で暴れるようであれば、それはもう単なるユニイトギア悪用犯罪者のテロ行為だけでは済まされない。

ユナイトギアはレイダーに対抗できるだけの戦力を持つ、日本において唯一の「憲法違反」を認められた例外兵器。

未だ反発する国民も多いが、それだけ危険な力であることを、優芽は果たして理解できているのか。もしそうでなければ、彼女の敵は希繫だけではない。

全レイドリベンジャーズ……いや、ユナイトギア反対派の国民すらも敵に回す行為なのだ。

「……さて、そろそろこの辺りのパトロールも終わり。次はA-04ポイント……あの時のデパート周辺か」

たった三日とはいえ、デパートは既にその容貌のほとんどを取り戻しており、現在は内装工事の真ただ中。

このA-02ポイントとは隣接した区画であり、バイクを移動手段としている希繫にとってはさほど遠くない距離に位置している。

『XD400Rへの搭乗を確認。オートパイロットモードに移行しますか？』

「いや、いいよ。そう遠くないんだ、これくらい自分で運転しないと、操縦を忘れかねないしな」

『了解。引き続きスタンバイモードで待機します』

希繫の表情から疲労を読み取ったのか、エクレールが彼の身を案じるようにオートパ

イロツトを提案する。

だが、希繫にとつてバイクは趣味のひとつである。弄るのも好きだし、見るのも好きだが、やはり一番好きなのは自分で乗り回すこと。それがライダーの性というものだ。

希繫はXD400Rに跨ると、すぐさまその場を離れた。……何か、予感めいたものを感じたのだ。今、ここにはいけないような……今すぐA—04ポイントに行かなくてはならないような、強烈な「予感」が。



希繫がA—04ポイントに到着した時、そこには一人の女性が静かにデパートの内装工事を見ながら佇んでいた。

女性の見た目はそれほど怪しいものではない。パステルグリーンの長い髪が目引きくが、服装は何かの会社、あるいは組織の制服らしきもの。少なくともレイドリベンジャーズのものではないが。

そんな女性に希繫の方から声をかけようとする、その女性も希繫に気付いたのか、その顔を彼に向けて、につこりと微笑んだ。

「最近の日本の建築技術はすごいですねえ。あつという間にデパートが直っていきま

す。三日前はあんな惨状だったのに……」

「貴女も、この間……このデパートに？」

「いいえ。地方新聞で見た限りです。死者は出なかったようですが、大した有様だったようで……」

三日前に起きたあの事件は、表向きは原因不明の建物火災ということになっている。

実際、優芽が起こしたあの事件は、そのほとんどが霧による幻であったため、特に被害が大きかったのは交戦地帯である4階のみ。

品物の一部が破損。床には穴が開き、希繫の放った電撃によって壁や天井が焦げてしまっていたが、言ってしまうえばそれだけ。建物を一から建て直さなければならぬような被害はなかった。

「なんで、こんなところに？ 工事や建物に興味でも？」

「いいえ、そういうわけではないのですが……まあ、待ち人來たり、といったところですよ」
「待ち人……『來たり』？」

ぞくり、と希繫の背筋に冷たいものが走った。

その冷たい感覚に条件反射するように、希繫はその場を飛び退き、再び女性の顔を見直す。

「パステルグリーンの……義眼ッ!？」

そう——女性の左目、さつきまでは前髪に隠れて見えなかったそれは、間違いなく人のそれではなく人工的なモノ。

希繫は咄嗟に身構えるが、女性は相変わらず微笑みながらそこに佇むばかり。攻撃しようという意図も、希繫からの攻撃を警戒する気配も感じられない。

「貴女も……ユナイトギアの装着者……ッ！ まさかとは思いますが、優芽の……ッ！」

「やはりあなたが桐梨希繫で間違いありませんでしたか。目の前の危険に対しても殺意や敵意を感じさせない独特の気配、あなた以外ではありえませんか……」

警戒する希繫に対して、女性はどこまでも穏やかに、ただただ希繫の動向を見守るだけ。

希繫も警戒する意思は途絶えさせないまま、ひとまず構えを解いてもう一度女性と正しく向き合うと、女性は真剣な表情に変わって希繫に声をかけた。

「……あなたは、なぜ優芽の願いを聞いてなお、抗ったのですか？ 彼女は、本気であなたを救おうとして、誰よりもあなたを慕っているのに、それでもあなたに嫌われる覚悟であなたに向かっていったのに……」

「最初は……単純にエクレールを破壊させるわけにはいかないと思つて……俺の相棒を守りたいばかりで抗つた。でも……優芽が、あいつが本気で俺を救うために向かってきたと理解した時、俺のやりたいこと……やるべきことは変わった」

「……変わった？」

「そうだ、と希繫は頷いて、

「俺はキズナだ。希望を繋ぐキズナが俺の名だ。ただ救われるだけなんて真つ平ごめんだ、そのために相棒が犠牲になるなんてなおさらだ。俺の名が『希繫』である以上は、俺は優芽にも希望を持ってもらう。俺を救うなんて使命を忘れて、自分のしたいことをできるように」

希望を繋ぐキズナ。希繫がいつだって必死なのは、その名を背負っているからか。

女性はその言葉を聞き届けると、どこか満足げに微笑み、そして——言った。

「あなたが思うよりも、優芽はずっと強い子ですわ。それでも、あなたは希望のために抗うと……本気でそう仰るのですわね？」

「本気も本気。そうじゃなくちゃ貫けねえだろ、あんな強い意志を持った子に、自分の意地を!!」

「そうですか。では——せめてわたくしの名前も覚えてもらいましょうか……」

女性は義眼の入った左目を閉じると、希繫の鋭い眼差しに怖じることなく名乗る。

「わたくしの名は水面覚悟。みなもさと次に会おう時が楽しみですわ。では、さようなら……」

覚悟がするりと希繫の横を通り過ぎ、振り返った時には既にその姿はなく、パステルグリーンと淡いオレンジの混ざった羽根のようなものだけがそこに残されていた。

襲撃者—レイダー—

その夜、希繫きづなは自宅のリビングで今日起きたことを同居人の逢依あひと悠生ゆうきに話した。

二人とは、かれこれ5年前から生活を共にしている絆フアミリーの家族であり、今まで何度も共に苦難を乗り越えてきた親友だ。

そんな逢依と悠生だからこそ、希繫はどんな非常識な悩みも打ち明けることができたし、今回の事件——『未来事件』についても相談できた。

「未来からの侵略。いや……現代の抵抗つて言うべきなのか？ 相手の狙いは明らかに希繫とエクレールに限られてんだ、その方がしつくり来んだろ」

「問題は、相手の狙いね。希繫を救うことと、エクレールを破壊することが、いったいどうやって繋がっているのか……。単純にエクレールが希繫を危険に晒すというのなら——」

『心外です、ディアフレンド。私はたとえどのような危険に晒されたとしても、ディアマスターを裏切るなどありえませんが』

——だろうな、と希繫は頷く。

希繫にとってエクレールは、初めてのユナイトギアではない。けれども、今の希繫に

とつては間違いなく『一番の相棒』に違いない。

それを知るのは、希繫だけでは無い。逢依だつて、悠生だつて、希繫とエクレールの間にあるキズナを確かに知っている。

だからこそ、二人は「エクレールが希繫を裏切つた」という未来は真つ先に切つて捨てた。きつとあるはずなのだ、もつと他に、優芽ゆめがあんなにも必死になる理由が。

「希繫、オメーは本当に……その優芽ゆめつて子を『倒す』気はねーんだな？」

「相手は強いわよ。少なくとも、あなたよりは格段に。私のサポートがあつても対等以上に戦つてみせたんだから、それは間違いなわい」

問題は、彼女たちの目的だけではない。実際に戦つてみてわかつた。彼女は……和泉優芽は、間違いなく希繫よりも強い。

今まで数々のレイダーを葬つてきた希繫と逢依のコンビネーションが、まるで通用しなかつた。その意味は、決して小さくはない。

それでも、希繫の決意は変わらない。

「ああ。俺はあの子を倒さない。戦わない。傷つけてしまふかもしれないけれど……それでも、俺は抗い続けるだけだ。俺の持てる力を全て使い切つて、エクレールを守り、あの子を説得してみせるッ！」

こうなつた希繫は、もう絶対に自分の意地を変えようとはしない。泣きながら、ボロ

クソにやられて、ジリ貧になりながら、それでもきつと意地を貫くはずだ。

それを悟った逢依と悠生は、互いに小さく溜息を洩らしながら、希繫を信じて微笑む。「でも、もし本気でどうしようもねー時はオレに頼れ。オレはオメーと違って口は回らねーし、逢依みたく頭もよかねーが、それでも腕つぶしで解決できることも、少なかねーだろ?」

「本当は腕つぶしで解決できることも言葉で解決したいところだけど……そうだな。本当にどうしようもなくなったら、その時は頼むよ、兄貴」

強い力。希繫よりも遥かに強い、この世界で誰も敵わないほどの、強大な力。

「そうね。じゃあ、他の色々な細かい面倒は私に任せてもらおうわ。あなたが優芽との『話し合い』に集中できるように、私が周りのみんなを説得して、黙らせて、凍らせておく」
「最後の一言がだいぶ不安だけれども……ああ、任せた。俺にはできないこと、お前にかできないこと、全部……頼んだ」

鋭い賢さ。希繫よりも遥かに鋭い、周りの全てを黙らせて凍らせることのできる、絶対的な賢さ。

「二人がそう言ってくれるなら……俺はもう百人力だ!」

力と賢さ。二人の持つ二つの『希望』を背に受けて、希繫はその覚悟を拳に握り締めた。



翌朝。希繫はXD400Rに跨りながら街を走り続けていた。

優芽の目的は、エクレールを破壊すること。ならば、目的を達成していない彼女が潜伏しているのは、間違いなく希繫の動向を観測できるこの永岑市内のどこかということになる。

だが、その永岑市は希繫にとって狭い庭のようなもの。誰よりもこの街を『走って』きたという自負の下、希繫はいくつかの建物に目星をつけてXD400Rを駆った。

「ここも違うか……。なら、残りは向こう側だけだな」

希繫の狙いは、この街の廃墟群の内、特に状態がよく大型のビル、デパート、スーパー、パチンコなどの址。さらにそこから食料を確保しやすい街の内部に限定すれば、数は絞られる。

もしも根城がバレた際、逃げるまでの時間稼ぎにするには、相応に大きな建物が必要となるし、雨風を凌ぐだけの状態を保っているところというのが、それらの条件を挙げられる理由だ。

「待ってろ優芽……ッ！ 俺の決意を今すぐにも——ッ!？」

突然、空から落下して現れた10を超える異形たち。

灰色の体表に、まともな形を持たないまさしく異形と呼ぶに相応しい『それら』の名は——、

「レイダー……ッ！」

国際脅威的侵略性生命体——レイダー。

生けるものを脅かし、行き交う人々を恐怖に陥れる、人類の天敵。

だが、そんなこと以上に、今の希繫にとつては——、

「お前たちまで、俺と優芽を阻むというのなら……容赦はしないッ！ エクレールッ!!」

『了解。ユナイトギア第四号、エクレール。桐梨希繫に同調^{アクセス}接続します』

ベルトにチェーンを繋いでぶら下げたクリスタルが赤色に輝くとき、第四号ユナイトギア『エクレール』は、その真の姿を取り戻す。

真つ赤なメタリックブーツに、レイドリベンジャーズの戦闘服——コンバットジャケットが展開。そして希繫の瞳がエクレールと同じ赤色に染まる。

「速攻で終わらせる……ッ!! エクレールッ！」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーションナルエナジー、^{チャージ}充填開始』

まずは様子見と言うかのように、2体のレイダーが同時に希繫へと触手攻撃を繰り出す。しかし、その程度の攻撃ならばチャージ攻撃を待つまでもない。

希繫は涼しい表情でそれらをかまし、二体のレイダーへと接近、片方には接近時の突進力のまま跳び蹴りを放ち、もう片方には着地と同時に回し蹴りを叩き込む。

さらに一体のレイダーが希繫の背後からプレス攻撃を狙うも、彼はそれを肉眼で認識することなく回避。レイダーが地面に着くと、今度は上へと蹴り上げ、そのさらに上に回り込んで踵落としを打ち込む。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

エクレールの放つ電気パルスが、希繫の生体電気信号を加速させ、電気化しないままでの高速戦闘を可能にさせる。

電気化状態では質量を失ってしまうため、加速状態から物理的ダメージを与えられるアクセルアクションは、希繫が最も基本としている戦闘スタイルの基盤だ。

「この数じゃ全員をスタンさせるのは手間だな……。エクレール、スタンなしでクリムゾンインパクトをぶち込むから、軌道修正は任せた！」

『了解。軌道修正はお任せください』

地を強く蹴り空中へと跳びあがると、空中で一回転して背中から電撃をスパークさせて加速、突き出した右足がレイダーを捉える。

そして蹴りの反動で再び空中へと跳びあがって、次のレイダーへと狙いを定めて蹴りを叩き込む。そして、蹴りの反動によってレイダーの位置が少しずつ一か所に集められ

「ぜえああああああッ！」

希繫の放った渾身の一撃が、そこに集められた十幾体ものレイダーたちを悉く葬り去るのだった。

「はあっ、はあっ……！　これで、全部……ッ！」

「さすがに、レイダーだけでは話になりませんか。さすがですね、桐梨希繫」

「……ッ！　優芽かッ!!」

背後からかけられた言葉に、その身を振り返ると、そこにいたのは意中の人物——和泉優芽。七色に煌めく瞳と髪を持つ、虹の翼『イーリス』の所持者にして、未来からの強襲者。

希繫と優芽は視線をぶつけ合いながらも、互いに一步も動こうとする気配はない。ただ静かに、自分の決意と相手の覚悟を測るかのようになり、にらみ合う。

「……本気なんですね。本気で、あたしと分かり合おうというんですね……？」

「君こそ。俺のこと、本当に心から救おうとしてくれてるんだな……？」

けれど、と二人の声は重なる。

「あたしは、あなたを救うまでは……あなたの言葉に耳を傾けるつもりなんてないッ！」
「君の思いを裏切ることになっても、俺は俺の相棒と信念を裏切らないッ!!」

獅子と竜、相打つ――。

虹の翼—イーリス—

希繫きづなと優芽ゆめが交戦する一帯は、永岑市A—12ポイント。多くの廃墟が立ち並ぶ『死んだ街』である。

永岑市の中心街を挟んで、民家とは真逆に位置するここでは、周囲の人的被害を考えずに最大限の力を発揮でき、前回のデパートより広い。希繫にとっては非常にやりやすいフィールドだった。

だが、それはおそらく優芽も同じ。彼女もまた、希繫と同じく周囲への被害を可能な限り避けようとするだろう。だからこそ、あの時デパートを幻の火で包んだのだろうと、今ならわかる。

「イーリスッ！ 鎧をあたしにッ！」

「了解。アクアコートを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始。……
充填完了」

優芽が展開するのは水の鎧、アクアコート。今回は希繫に強制装着させることで彼を苦しめたそれを、今度は自分で纏うことで純粹な防御手段としている。

優芽の強みは、その戦略的柔軟性にある。希繫が電気使いなのもあるが、アクアコ—

トの使い方ひとつとっても、彼女の戦い方の「巧さ」が見て取れる。

彼女の戦い方は、希繫みたく何かに特化したものではない。ユナイトギア装着者なら誰もが到達できるレベルの駆動を、その冴え切った戦略が数倍のものに錯覚させているだけだ。

しかし、だからこそその「誰もが到達できる域」に行くためには尋常ならざる努力と学習が必要なのだが、優芽はそれをこなして今の強さを手に入れた。

「アクアコートがある限り、あなたの電撃はあたしには通じないッ！」
「だったら物理で蹴ッ飛ばせばいいだけのこつたるッ!!」

先に仕掛けたのは優芽。愛剣・デアドロップによる横袈裟が希繫を襲うも、彼はそれを突き上げるような蹴りで弾き、即座にカウンターの突き蹴りを優芽の胴体に叩き込む。

が、さすがにアクアコートは水の鎧というべきか。鎧というよりも、衝撃吸収クッションのようなそれは、希繫が放った蹴りの威力のほとんどを吸収し、優芽を守つてみせた。

電気をぶつけようとすれば無効化される。電気で避けようとすれば回避ルートを強制設定される。さらに物理ダメージのほとんどは吸収されるといふ今の状況を覆せるだけの手段を、希繫は持っていない。

だが、それでもわかることがある。

「わかったぞ……！ 君の力は「俺の天敵」であることじゃない……。その知識と技術で、あらゆる敵に対して有利な戦況を生み出すこと……あらゆるものの「天敵」になれることが、君の力だッ！」

「……確かにその通りです。より厳密に言うのなら、あたしの力は「あるひとつのことに特化した装着者の天敵になれる」ということ……。だから純粹にあたし以上の万能型には敵わない……」

けれど、と優芽はそれがなんでもないことであるかのように言う。

「あたしはあなたを、桐梨希繫といふ人間をよく知っている……。あなたの手札には、あたし以上の万能型である『香坂逢依』が存在しますが、あなたはそれを切ろうとはしない……。！」

「ああ、その通りだ……。たとえばそれが甘さだとしても、君の相手は俺だけだッ！ 誰にもここを譲る気はないッ！ それはお前だつて同じはずだッ!!」

「そうです……。そういうあなただから、あたしはあなたに憧れた……。ッ！ そんなあなただから、心から救いたいと願つて戦えるッ!!」

希繫の蹴り技。優芽の剣戟。どちらも互いを圧倒し、決して怯むことはない。二人の胸に秘められた決意がそうさせる。

優芽を戦わせたくはない。希繫を悲劇的な未来から救いたい。だからこそ、ぶつかり合わなければならない。

「蹴りも電撃も通じないなら……ッ！」

「XD400R……ッ!! 確かにそれだけの質量による威力を吸収しきれするような鎧ではありませんが……攻撃接触時の衝撃は、あなただつて受けますッ! それでも——」

「やるともさッ! これしか切れる手札がないなら、俺はその一枚に全てを賭けるッ!!」
希繫の跨るXD400Rが、まるで希繫の決意に応えようとするかのように雄々しくエンジンを唸らせる。

そう、攻防一体の鎧となる「アクアコート」最大の弱点は、単純な質量攻撃。でかく、重く、強い。たったそれだけのシンプルな攻撃が一番よく効くのだ。

「エクレールッ! XD400Rに同調接続だッ!」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレール、XD400Rに同調接続します』

希繫との同調接続を一時的に解除し、XD400Rへと同調接続するエクレール。

しかし、XD400Rはマシンであつて生物ではない。感情を持たないはずのマシンが、なぜ感情武装であるユナイトギアを纏えるのか。

「いくぞエクレールXD—Rッ! 『クリムゾンストライク』だッ!」

『了解。クリムゾンストライクを使用します。エモーションナルエナジー、読込完了へロー

ディンググ。クリムゾンストライク、いけます』

優芽の防御能力では、希繫とエクレールXD—Rの攻撃を凌ぎきれない自信はない。

しかし、それでも優芽はその攻撃を避けようとはしなかった。この一撃だけは、たとえどれだけのダメージを覚悟してでも受けきらなければならないと思った。

なぜならこれは、希繫とエクレールとXD400R、三つのキズナがひとつになった一撃——希繫の持てる最大の一撃。

これをおかせば、希繫の想いを受け止めてなお立たなければ、彼を「救う」ことはできないと思ったから。

「ぜあああああッ!!」

アクセル全開。エンジン最大回転。思いっきり最大限、感情の力を全部使って叩き込まれた、希繫とエクレールとXD400Rの合体攻撃。

真正面から攻撃を受け止めた優芽は——、

「……………うっそだろお前……………!?!」

「受け止め、ましたよ……………! あなたの、キズナの力を全て……………!」

アクアコートとイーリスの翼、そしてその身ひとつでクリムゾンストライクを受け止めていた。

しかし、それでも受け止めた際のダメージは少くないのか、その表情は決して楽で

はなさそうだ。

『装着の続行が不可能になりました。同調接続を中断します』^{アクセス}

「エクレーールッ！」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレーール、桐梨希繫に同調接続します』^{アクセス}

希繫の感情——エモーショナルエネルギーがどれほど膨大なものであるとも、エクレーール自体は通常のユナイトギア。それも第四号という、極めて古い時期にナンバリングがされた旧型である。

この短時間に、エクレーールは既に3回の装着と2回の解除をこなしている。エクレーール自体に、限界が近づいていることは明らかだ。

「悪いなエクレーール。無茶させちまって」

『構いません。私は、私を守るためにあなたが頑張ってくれていることを知っています。ですから、私があなたを守るために頑張るのも当然のことです』

希繫とエクレーールは相棒だ。そこにあるキズナは決して誰にも否定できるものではない。

優芽だって、それはわかっている。希繫とエクレーールの会話を聞くたびに、彼らのキズナを傷つける度に、胸を締め付ける痛みがそれを訴える。

だけれども——それでも、優芽は剣を収めたりはしない。

「イーリスッ!」

『了解。レインボーストリームを使用します。エモーショナルエネルギー、充填開始』
 ……充填完了』

「……………ッ! くるぞ、エクレールッ!」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーショナルエネルギー、充填開始』

優芽の両脚が大量の水に覆われて、腰から下の半身がまるで虹色の蛇のように変わる。その背にある翼も合わさって、その姿はドラゴンと呼ぶにも相応しい。

だが、希繫はそんな夢の姿にも怯むことなく、むしろさつきまでもより強い決意を抱いて、彼女の一撃を待つ。

「アクセルアクションで逃げるつもりなら残念でしたね! 既にあなたはあたしの射程から逃げられないッ!」

優芽が両腕を大きく広げると、それと同じようにイーリスの翼も広がり、虹色の光は巨大な球体となって彼女の前に収束される。

あれはおそらく、大気中の水分を何か所に集めて放つ一種の収束砲。スピード型として、体重や肉を削ぎ落としている希繫には、あまりにも大きすぎる一撃。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

「いまさら遅いッ! てえええあああッ!!」

閃く虹色の奔流。レインボーストリーム

しかし、その一撃を希繫は――。

「…………ツ!?!」

直撃。

放たれた虹色の勢いそのままに、その華奢な体躯が後方の建物を貫きながら40メートル以上も吹き飛ばされていく。

「…………なんのつもりですか。あなたなら、今の一撃はかわしきれなくても威力を殺すことはできたはずツ!。なのに、直撃なんて…………ツ!!」

「……………」

「答えてください…………桐梨希繫ツ!」

希繫は、答えない。

「答えてよ…………お兄さんツ!!」

希繫は、答えられない。

衝突—コール—

「……………」

「……………応えてはくれませんか………」

倒れ伏せる希繫きづなに、優芽ゆめが一步ずつ静かに近づいていく。

「……………イリス」

『よろしいのですか?』

「そのために戦ったんです、構いません」

震える声を隠すことなく、優芽はイリスに命じる。

彼の脚に装着されたユナイトギアを——エクレールを破壊せよ、と。

『……………了解。アクアプレッシャーを使用します。エモーショナルエナジー、充填開チャージ——』

イリスの翼を撃ち抜く、赤色の光——。

光に射抜かれた片翼はすぐにその姿を取り戻すが、唐突な出来事に優芽の思考が僅かにフリーズする。

「優芽ッ!」

「……………ッ!」

背後に立つ気配から声をかけられて、思考が再起動する。

静かに視線を向ければ、そこに立つのは赤い瞳の黒い獅子。優芽はアクアコートを身に纏ったまま、ディアドロップを希繫に突き付ける。

しかし希繫の方は、そんな優芽をただ見つめるままに構えることもせず、静かに口を開いた。

「……この間もそうだったな。今日もだ。君は、俺を倒して『エクレールを破壊する』という目的がありながら、逆に俺と『いつまでも戦い続けたい』という願いを心のどこかで抱いている」

優芽は何も言い返さない。ただ、その場に静かに佇むだけで、睨むような視線すらも返しはしない。

「お前もホントは気付いてんだろ。エクレールを破壊すれば、確かに俺を救うことはできるかもしれない。だけど、それじゃ俺とエクレールの繋がりを、キズナを守れないってことに」

優芽が突き付けたディアドロップを優しく払いのけて、希繫は一步ずつ確かに優芽へと近づいていく。

二人の距離は既に3メートルも開いてはいない。互いが手を伸ばせば繋がることのできる距離だ。しかし、それでも二人はまだ交わらない。

「俺なら大丈夫だ。お前がくれた警告は、俺の心に確かに届いた。俺は——エクレーールと共にその『悲劇的な未来』を変えてみせる」

「その言葉を……信じたい気持ちには、あります。けれど……あたしはッ！」

とん、と希繫の胸を押して、優芽は互いの間に「隙間」を作る。

埋めようと思えばなんてことのない隙間だが、それは優芽の意思が作り出した、弱々しくも確かな隙間だ。

「あたしは……信じきれないッ！ あなたにもしものことがあつたら……！ あたしがエクレーールを破壊することで、その「もしも」すらも壊せるなら、あたしは——ッ！」

「……ありがとう、優芽。だけど俺……やっぱりエクレーールと離れたくはないんだ。だから……きつと今のままの君を受け入れることはできない。君だつてそうだろ……？」

だから、と希繫はその手を伸ばす。

「今はまだ、わかり合えなくたっていい。いつか一緒に歩める時がくるって信じて、まずはお互いに悔いを残さないように戦おう。これは、その誓いの握手だ」

その手を取れば、わかり合うことはできなくても、この想いだけは——桐梨希繫を救いたいという願いだけは、報われるかもしれない。優芽の脳裏に、そんな甘い囁きが聞こえた。だが——、

「その手は、取れません。あたしはたとえあなたに嫌われても、あなたに憎まれても、エ

クレールを破壊する。そう決意して……いえ、そう『覚悟』して戦っています。だから、あたしはその手を取れない」

「……！　そう、か……。覚悟……そうだな。俺も決めてたはずんだけどな……やっぱりいつも『甘さ』が残る。悠生にも、逢依にも、いつもそうして怒られる……」

そう言つて苦笑うと、希繫は優芽から離れた。

二人は互いに、相手の全力をその身で受け止めた。それは、きつとただの力のぶつかり合いだけではなかったはずだ。

あれは——今の『桐梨希繫』と『和泉優芽』の全てだ。

「じゃあ……こうしようか。俺とお前、どっちかがぶっ倒れるまで戦つて、それでも見つけられない答えなら、その時は手を取り合つて、一緒に答えを探そうぜ」

「……後悔しますよ。お互いに」

「するだろうな。だけど、今はこれしかないだろ？」

二人は同時に間合いを取り合うと——構えた。

仕切り直した。今度はもう手札の探り合いなんてどうだっていい。自分の持つ手札の中で、最強のカードを切る。そう決めて、二人のギアが赤と虹に輝き始めた。

「エクレールッ！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

「イーリスッ!」

『了解。レインボーストリームを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
 体勢を低く構えて助走をつけるタイミングを図る希繫と、胴体を蛇のように変化させて衝撃の反動に備える優芽。

蹴りと砲撃。威力がどちらにあるかは、その字面を見るだけで十分すぎるほどにわかるだろう。人間の放つただの蹴りが、何かを壊し、誰かを殺すために造られた兵器の一撃と同等のはずがない。

けれども、優芽は油断などしない。いや——むしろ、未だかつてないほどの緊張感と緊迫感に挟まれながら、虹色の光を収束していく。

『——充填完了。コンプリート。クリムゾンインパクト、いけます』

『——充填完了』

バチン、という火花の音とまったく同時に、希繫の姿が消える。だが、その姿が見えずともどこを指しているかはもうわかつている。

故に、同時に優芽もその虹色の収束砲を発射する。目標は——直線上だ。

「ぜああああああッ!!」

「てえええああああッ!!」

ぶつかり合う『赤』と『虹』は、どちらも衰えず周囲の建物を巻き込みながら強烈な

衝撃波を生み出す。

純粋な破壊力でいえば、本来『赤』が『虹』に拮抗することなどありえない。だが、それでも優芽はこの状況を想定していたように、不敵に笑う。

（やはり……！ 『今のあたしの全力と同等の力』を出してきましたね……ッ！ これ
が、覚悟さんが言っていた桐梨希繫のもうひとつの脅威的な力……！）

桐梨希繫。その名のおそろしさは——『希望を繋ぐキズナ』だけではない。その名の強さ、本当のおそろしさは、『限界なし』の『希望を繋ぐキズナ』……。

すなわち——どんな時でも絶対に諦めず、あらゆる状況に『適応』し、限界なく進化し続けること……。それが彼の力、桐梨希繫の……。『限界なし』の『キズナ』の力だ。

（でも……だとしたらあたしが『今のあたし』を乗り越えればいいだけのことッ！）

レインブーストリームの出力は既に最大。そして何より、昂揚剤デトネイターのタイムリミットは既に残り5分を切っている。

だがそれは希繫の方も同じ。彼は数多くのユナイトギア装着者の中で『最もユナイトギアに適合できる人間』ではあるが、それはあくまで希繫自身の問題だ。エクレールの方は、既に限界が近づいている。

そして、希繫のクリムゾンインパクトはその推進力として常時エクレールが電気をスパークさせ続けている。この撃ち合い、大事なのは威力ではない。大事なのは——諦め

ない根性。

「——ッ！　くっ、こんな時に昂揚剤デトネイターの不安衝動が……！　まだです……まだ終われませんが……あと数秒でいい……耐え切ってください、あたしの心……ッ！」

勢いを増していく希繫のスパーク。そして逆に勢いを失っていく優芽の砲撃。このまま行けば、あるいは——。

「イーリスッ！　リミットブレイクですッ!!」

「なッ……!!　このタイミングで、リミットブレイクだと……ッ?!」

『了解。第七号ユナイトギア・イーリス、リミットブレイクします』

リミットブレイク。それはユナイトギア装着者にとつて、真正正銘の最後の手段。

装着者が持つ最も強い正の感情を一時的に過剰抽出エクシードチャージすることで、ギアの放つエモーショナルエナジーを爆発的に増加させる決戦用プログラムだ。

エモーショナルエナジーの増加は、そのまま技の威力の増強となる以上、この盤面においてリミットブレイクを発動するのはおかしなことではない。だが——、

「やめろイーリスッ！　優芽の心はもうギリギリだッ！　限界を超えた感情エネルギーの抽出の果てに、装着者がどうなるのか……!!　それはお前が一番よくわかってんだろッ！」

『はい。しかし、マスターの命令に従うのが我々ユナイトギアの使命であり、至上の喜び

です。故に、私がマスターの命令に背くことはありません』

「いい子です。そうですねッ！ あたしのは構いませんッ！ 今ここで桐梨希繫さえ倒せば……彼さえ救えるのなら、バックファイアであたし自身がどうなろうと構いません！ だから……お願いしますッ！」

リミットブレイクは通常の装着者にとつてもバックファイアが怖くて使えないような諸刃の剣。

まして優芽のように^{デトネイター}昂揚剤を使っている者にとつては、自殺行為にも等しい。

故に、希繫がとる手段はひとつ。

「チツ……！ 解除しろエクレールッ！ これ以上はお前のフレームが耐えられないッ！」

『しかし、それではディアマスターが！』

「いや……策はあるッ！ だから構わず解除しろ！」

『……了解。桐梨希繫との同調^{アクセス}接続を中断します』

レインボーストリームとの真つ向勝負はひとまず後回しにしながら、希繫はその奔流の側面を滑るように回転し、優芽へと接近。

その回転の威力を借りてイーリスごと優芽を地上に叩き落とし、それを追うように希繫も降下する。

「はあ、はあっ……！　けふっ……！　ギ、ギアの装着を解除してなお、あの運動能力……あなたは本当に、どこまでも桐梨希繫ですね……！」

「元々、エクレール装着の有無は俺にとつて電気を使えるようにするかどうかくらいの差しかない。格闘に関するところは、ほとんど俺自身の運動能力に頼りきりだからな」
曲芸師みたいな真似を、と悪態ついて意識を手放した優芽に苦笑いしながらも、希繫は彼女の体を抱き上げる。

すると、希繫の背後に二つの気配が突如として現れた。しかし彼はその気配に驚くことも警戒することもなく、むしろ逆に一歩ずつ近付いていく。

「水面覚悟と……誰だ？」

「……海風総交。お前の腕の中にいるそいつの……優芽の仲間だ」

和泉優芽、水面覚悟、海風総交。この三人が、今回の事件——『未来事件』の主犯。
三人の顔を記憶に焼き付け、希繫は総交へと優芽を引き渡す。

「……リミットブレイクのバックファイアが来る前に優芽を止めてくれたことには、ひとまず感謝する」

「この子、頑張り屋さんだから、ちよつと無茶をしすぎちゃうところがあるんです。ですから、相手があなたで本当によかったと思つてますわ」

総交は無表情のまま、覚悟は笑顔のまま、まずは希繫に礼を述べる。

だが、希繫はその言葉を素直に受け取ることはできなかった。

「いや、手遅れだ。確かにリミットブレイクのバックフアアには間に合ったが、既にデトネイター昂揚剤の限界がきてた。不安衝動は、もう間もなく訪れる……!」

希繫は、その場に崩れ落ちた。そしてそのまま、泣き崩れてしまった。

決意はしていた。覚悟もしていた。だけど、それでも彼は耐えられなかった。

「うう……っ、あぁっ……!」

「……なぜ、あなたが泣くのですか、桐梨希繫」

「優芽が無茶をしたのは、優芽自身の選択だ。お前が自分を責めることではない」

優芽のリミットブレイクは、決して希繫がそうさせたわけではない。優芽自身が自ら選び、実行したのだ。その責任は、誰でもない優芽が背負うべきなのだ。

しかし、それでも希繫は涙を止めることはできなかった。

「……行こう、覚悟。もう俺たちがここに居る理由はなくなつた。追っ手がこないという保証もないしな。ここは一度退いて、優芽の発作に備えよう」

「ですが、彼は……」

「……いいんだ。こいつには、こいつ自身が解決しなきゃいけないことができた。それだけだ……」

総交の言葉に従うように、覚悟も希繫に背中を向けて歩き出した。

た。その場に取り残された希繫だけが、そこに小さく、儚く、陰った世界に這い蹲っていた。

憧れ—ドリーム—

希繫きづなが目を覚ました時、既にそこはあの廃墟群ではなかった。

見慣れた天井に、部屋の中を漂う消毒用アルコールの匂い。そこは、レイドリベンジャーズ専用病棟の一室。

「目は覚めた？」

「……逢依あゐか」

瞼を開けて、体を起こし、その手のひらを静かに見つめる。

あの時、優芽ゆめをリミットブレイクから解放する瞬間、希繫はレインボーストリームの側面を滑るように回転して優芽に蹴りを叩き込んだ。

しかし、あの咄嗟の機転。何よりその機転を可能にするだけの運動能力に、希繫は自らを疑うようにその手のひらを握り、拳に変える。

「逢依、俺を回収したのは誰だ？」

「小転こじろよ。だいぶご立腹みたいだから、あなた自身の口から説明なさい」

「……あちゃー……」

小転。フルネームで桐梨小転。その名が示す通り、桐梨希繫の実の姉だ。

彼女の名前を挙げて、気分が明るくなる者は少ない。なぜなら彼女の異名は『天衣無縫の亡霊』——どの誰にも止めることのできない無気力な奔放。

そんな小転が唯一、自らを縛り繋ぐことを良しとしている人物こそ、彼女の弟——桐梨希繁なのだ。

「二応、私と悠生の方からできる限りの説明はしておいたわ。けれど、小転は元々あなたのことになると感情的になりやすい傾向がある。ここでどうにかしておかないと、あなたと優芽の戦いに支障が出るわよ」

「ありがとう、逢依。悠生にも後で礼を言っておかなきゃな。姉さんには……うん、まあなんとか言ってみるよ」

ベッドから降りてお気に入りのスニーカーを履くと、希繁は何か気付く。——無い。

腰のチェーンの先に、あの真つ赤なクリスタルが……相棒が、エクレールがない。「エクレールはッ!? あいつは……まさかッ!?」

「落ち着きなさい。大丈夫、エクレールなら小転が預かってくれているわ。……返す気があるかどうかは、怪しいけれどね」

小転にとって、希繁はたった一人の弟だ。絆ファミリーの家族の中で、最も強く繋がっているはずの姉弟だ。だから、小転が一番失いたくないものも、希繁だった。

そんな希繫が、今回の事件で危険な目に遭っていると知って、そしてその原因がエクレールだと知って、それを彼に渡すというのは、正直なところ非常に考えにくい。

「姉さんはそんなひどいことしないよ。大丈夫、きつと返してくれるさ」

「けれど、あの小転よ……？」

「だって、あの姉さんだぜ？」

二人の間にある小転の印象は真逆を描いていて、会話の意図が交わることはない。

だから、希繫は逢依の手を引いて病室を出た。話すよりも実際に見た方が早いと言うように、自宅へと歩を進めていった。



「姉さん、ただいま」

「ふー、ふー。……あちやつ、あ……おかえり、希繫……」

希繫が家に帰ると、ダイニングにて悠生に淹れさせたのだろう紅茶を啜って舌を火傷する白髪の少女がいた。

この白髪の少女こそ、希繫の姉——桐梨小転。実の姉弟にも関わらず髪の色が異なるのは、彼女の持つユナイトギア『ハート』の影響だ。

ハートは小転の意思に関係なく常に起動しており、希繫の『眼』がエクレール起動と同時に赤く染まるように、ハートは『透明』の感情エネルギー膜で小転を覆っており、彼女は後天性色素欠乏症になっているのだ。

「姉さん」

「希繫、まずはそこに座って。逢依ちゃんも」

小転に言われる通りに、希繫と逢依は彼女の正面に並んで座ると、小転が紅茶を飲み終わるのを待った。

「……希繫。ひとまずの状況は、逢依ちゃんと悠生くんから聞いたよ……。相変わらず、希繫は無茶ばかりするね……」

「まあね。けど、今回の事件はどう考えても俺が中心だ。無茶しないわけにはいかないだろう」

小転の責めるような物言いに、希繫はなんでもないことのように言葉を返す。この掛け合いは最初から想定していたかのように、準備されていた言葉を口から吐き出す。

しかし、小転も希繫の姉として、彼の言い分は想定していた。だからこそ、続く言葉に詰まることはない。

「希繫は、エクレールを守るために戦っているんだよね。だったら、エクレールは希繫が持っていない方がいい。わたしや悠生くんに預けて、希繫の仲間たちに任せた方が、合

理的だと思うな」

「もちろんその方が合理的さ。けど、理想的じゃない。姉さんや悠生に任せたりしたら、優芽の安全が保証できない。その点、俺なら100パーセント安全だ。なぜなら俺は――」

――世界最弱のユナイトギア装着者だから。

希繫が優芽との真つ向勝負に応じ続ける最大の理由が、これだ。強すぎるユナイトギア装着者は、時としてユナイトギア悪用犯罪者を死傷させてしまうことがある。

無論、ユナイトギアの悪用は重罪だ。この世界を防衛できる最大にして唯一の戦力を犯罪に使う以上、事件解決にあたり殺傷を行ったところで、レイドリベンジャーズ側が罪に問われることはない。

「俺は世界中の誰よりも弱い。それはつまり、誰も殺せないってことだ。そんな俺が誰かを救えるなら、かなり理想的だろ？」

「理想的だけど、現実的じゃ……」

「姉さん。理想論に現実性を持ち込むなんてナンセンスだぜ。理想論はどこまでも理想的じゃないとな」

不敵に笑う希繫に、小転だけでなく逢依までもが溜息を洩らす。こうなった彼はもう梃子でも動きはしない。いや、それどころか状況はさらに悪化する。

もしもここで小転が意地になってエクレールを渡さなかった場合、彼は折衷案として「エクレールは小転に預ける」と言うだろう。だが、続く言葉は最悪に次ぐ最悪。

エクレールを小転に預けたまま——「生身で優芽との戦いに応じる」と、そう言うに違いないのだ。

「別に、力づくで止めてもいいぜ、姉さん。その代わり、そうした場合、俺は間違いなく死ぬぞ」

「……手加減する術くらいはあるつもりだよ?」

「自慢じゃないが、俺はスピード以外ならそこいらの中学生にすら勝てる気はしないぜ。もちろん手加減された上での耐久力もな」

「ホントに自慢にならないわね」

しかし事実である。希繫にとって、メインウエポンとなるのは大きく分けて三つ存在する。

まず単純なスピード。電気化した状態での光速機動はもちろんのこと、素の身体能力だけでも亜音速レベルの機動力を出し切れるのは、世界中でも彼を含めて数人しか存在しない。

次にその豊富で柔軟な発想力。つまりは口先での対話。今こうして小転を説き伏せていることや、優芽との勝負でも主に彼女を追い込んだのはその冷静な洞察力を全力で

活かせる口先の巧さだった。

そして最後のひとつこそ、その脆弱な肉体。相手がユナイトギア装着者ならば、一撃まともにもらえば高確率でノックダウンさせられてしまうだろう彼の脆弱さは、「甘い」相手には非常に強い盾となる。

「姉さんは俺に甘い。それをわかった上でこんなことを言うのは卑怯なことだっけわかってる。でも……俺だって優芽を救いたいと本気で思ってるんだ。なりふり構ってなんかいられないよ」

「……わかった。そこまで言うのなら、希繫が思うように、好きにするといいよ……。エクレールもちゃんと返す。元より、口喧嘩で希繫に勝てるなんて思ってたからね……」

「口喧嘩なんて言い方が悪いな。これは『話し合い』だよ。喧嘩なんかしてないじゃないか。俺は姉さんが大好きなままだし、姉さんだっけそうだろ？」

小転からエクレールを受け取ると、希繫はテーブルを回り込んで小転の傍に寄り、そして彼女を抱きしめた。

優しい姉に甘えるように、優しい姉を慰めるように、彼はその弱い弱い力の精一杯を籠めて、小転を抱きしめ続けた。



「ううっ……あああああアツ！ いや……いやあああアツ！！ 誰か、助けてっ……誰か……誰かあつ！」

「大丈夫……！ 優芽、大丈夫ですから……！ あなたには、わたくしたちがついていやすから……！」

同刻。目を覚ますと同時に不安衝動に駆られる優芽に対して、覚悟ざとりは彼女を抱き留めながら必死に声をかけ続けていた。

そもそも昂揚剤デトネイターとは、正の感情起伏が乏しい者をユナイトギア装着に必要なレベルの感情起伏状態まで引き上げるためのものだが、優芽の場合はまず最初から感情の起伏が常人レベルであった。

それが何を意味するかといえば、彼女は「本来のままでもユナイトギアを纏えるはずにもかかわらず、昂揚剤デトネイターを必要としている」という矛盾した現実である。

「やはり、もう優芽に戦わせるのはやめないか。このままでは、そいつの心が壊れるぞ」「そうしたいのは、わたくしも同じです……。ですが、無理に引き留めて、昂揚剤デトネイターを奪ったところで、この子はイーリスを纏うのをやめません。そうなれば、最悪の場合も考えられます……！」

そしてその矛盾を解決するのも、昂揚剤デトネイターの効果にあった。優芽が服用している昂揚剤デトネイターは、「正の感情」のみを増幅させる効果を持つ。

正の感情とは、単純な「喜び」「楽しさ」だけを意味するものではなく、強い「決意」や「諦めない心」なども、それらに適合する。優芽の場合、最も強い感情は――、

「憧れ」か……。優芽がユナイトギア装着者になれたのは、あの桐梨希繫に対する人一倍強い「憧れ」の感情からだった……。だが……」

「未来で起きてしまった忌まわしい「あの事件」のせいで、優芽の「憧れ」は「失望」に変わった……。もしも昂揚剤デトネイターを用いずにイーリスを用いれば、次こそは間違いなく……」

ELBシステムは装着者が「正の感情」で運用することで、はじめて「ユナイトギア」としての名前に意味を持つ。

もしも「負の感情」でELBシステムを運用すれば、それはもはや「ユナイトギア」に非ず。レイダーと同じ根源を持つ感情兵装――「レイダーギア」と成り果てるだろう。「優芽をレイダーギアにさせるわけにはいきません。しかし、昂揚剤デトネイターでなくイーリスを奪つても、結果は代わりません。優芽は生身で桐梨希繫と戦うでしょう」

「何もできないのか、俺たちは……」

覚悟と総交そうまの表情に曇りが生まれる。全ては桐梨希繫――彼を消してしまえば全て

が解決するはずなのに、誰よりもその桐梨希繫を救いたいと願っているのが和泉優芽なのだ。

優芽の願いを知ればこそ、二人には何もできない。ただ、大切な仲間のために、できる限りの全力を尽くすことしか、できないのだ……。

「ああ、あ……う……っ！」

「第一次不安衝動が治まってきたか……。だが、まだあと数日は続くだろうな……」

「ええ……。それまでは、私たちがこの子を守らなければ……」

覚悟と総交は互いに視線を交わすと、静かに頷いた。

大切な仲間を守るため、大切な仲間の願いを叶えるために、二人は彼女の手を優しく握り続けた。

「希繫……お兄さん……」

対抗者——レイドリベンジャー——

希繫きづなと優芽ゆめの最後の交戦からさらに三日。この間、街では異常頻度でのレイダー出沒が確認されていた。

本来、レイダーの出沒は多くても一週間に1度。数にはブレ幅が存在し、少ない日では数頭から、多い日では数十頭ものレイダーが出現し、レイドリベンジャーズはその対応のため第一、第二前線部隊を主戦力として駆り出す。

しかし、この永岑市ながみねしは世界でも有数のレイダー出現区域。一週間に3度もの出現もザラにある以上、こうして本来では考えられない頻度でのレイダー出現もありえないことではなかった。

だが、それでも——それでもこの「たった三日の間に5度にも及ぶ群20頭以上レベルのレイダー出現というのは、明らかに異常事態であった。

「こちら第二前線部隊・攻撃隊の桐梨！ 現在追跡中のレイダーの群れは、永岑市南西——A——ポイントに向かって直進中！」

「同じく攻撃隊の望月もちづきですっ！ 現在は希繫さんと一緒にレイダーおっかけ中！ ていうか諸星もろぼしくん、ほんとに護衛しなくて大丈夫——？」

『こちら第二前線部隊・狙撃隊の諸星。こつちのことに気を遣つてる暇があるなら目の前のレイダーに集中しろバカ。以上』

希繫を含め、第二前線部隊・攻撃隊は総勢四名。レイダーという人類の天敵を相手に、あまりにも少ない数だと思われるが、それは間違ひなくノーだ。

この第二前線部隊・攻撃隊は、一人あたりの戦力が一騎当千。即ち、4人いれば四千のレイダーを相手取ることも難しくない精鋭中の精鋭たちなのである。

しかし——それでもレイダーに決定的な一撃を与えることができるのは、希繫だけだった。なぜなら、この部隊において、ユナイトギア装着の権限を持つ者は、希繫と逢^あいしかいないからだ。

他の三人は、全て『衝撃発生装置』と呼ばれる、レイダーを牽制する程度の威力しか生み出せない簡易的なELBシステムに頼るしかなかった。だが——それでも希繫と逢^あい依^いを恨み羨む者はいない。

「チツ……！ さすがに飛行型レイダーは遮蔽物を無視できる分、地形に影響される俺たちより有利か……！」

「希繫さんのスピードなら追いつけますよね？ だつたら、メアたちのことは気にせず、先に行つてください。すぐに追いつきますからっ！」

「けど、それじゃお前らの指揮は誰がするんだよ。天宮と空宮はダメだぞ。まだ実戦経^{あまみや そらみや}

験すら少ない上、指揮官訓練を受けてすらいないだろ。望月は訓練こそ受けたけど、内容がひどいもんだつたしな」

指揮官訓練を受けないまま指揮官を務める者がいないわけではない。しかし、それは相当なレベルの才能センスを持つ天才ということになる。

生憎と、そんな真似ができるのはこの部隊において逢依しかない。そしてその逢依が本部での全体指揮および作戦立案を行っている以上、前線での指揮が可能なのは指揮官訓練を受けた希繫だけとなる。

『こちら第二前線部隊・本部の香坂。今、前線の指揮のために狙撃隊の諸星くんを派遣したわ。希繫、あなたはレイダーを追って対処しなさい。他のみんなは諸星くんと合流の後、彼に従い希繫の援護に向かうこと』

「さっすが隊長っ！ 仕事が早いっ！」

「アホかあッ！ 狙撃隊なしでどうやって潜伏型レイダーを狙撃するんだよ！ 狙撃隊がサポートしてくれるから、俺たちユナイトギア装着者が対応し、撃破できるんじゃないか！ バカじゃねーのお前！」

『こちら第二前線部隊・狙撃隊の諸星。先程、第一前線部隊と連携し、確認できるすべての潜伏型レイダーを撃破した。問題はない。行け、希繫ッ！』

諸星の言葉に背を押されて、希繫はその脚に力を入れた。希繫自身も、思わず咄嗟に

やったことなのだろう。望月たちに礼を述べる間もなく、彼の姿は風と共に消えた。



『——ッ』

「チツ、みんなから離れたこのタイミングでさっきの飛行型レイダーからの攻撃かッ！

エクレールールッ！」

『了解。スパークステインガーを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

チャージと同時に希繫の周囲を12の赤い球体を取り囲み、彼をサポートするように浮遊する。

このスパークステインガーは、12の球体からそれぞれ同時に1発ずつ貫通効果および麻痺効果を付与した電撃の槍が発射される。

誘導性はまったくないが、その弾速は電気そのもの。つまり光の速度で目標に到達する。

『充填完了。スパークステインガー、いけます』

「撃て！」

狙いを定めることなく、希繫は飛行型レイダーに向けて12発のスパークステイン

ガーを全て発射。

全てが着弾することはないながらも、3発の槍が対象の両翼を捉え、飛行型レイダーはその身体を地に落とす。

「落ちたッ！ 追うぞエクレールッ！」

『こういう時、XD400Rがあれば私も楽ができるのですが』

前回の戦闘でクリムゾンストライクという名の全速力特攻体当たりを仕掛けたXD400Rは、当然ながら車体の外装が中破。

エンジンや基礎フレームに問題はなかったが、それでも修理には一週間を要するとのことだ。

よって、現在の希繫はエクレールのみに頼らざるを得ず、追跡にも追撃にも逃走にも苦労する有様である。

『……………ッ！』

「翼に穴の開いたレイダー……さっきの个体かッ！ 空戦にシフトしないとところから察するに、翼へのダメージは思ってた以上に深刻らしいな！」

『スパークステインガー第二射、発射します』

迫るレイダー。感情生命体であるレイダーには、ユナイトギアを装着した部位、またはユナイトギアが生成・変換を行った物質による攻撃しか接触しない。

それはつまり、いかにユナイトギア装着者であつても、ユナイトギアを纏わない部位では攻撃のしようがないという意味である。

ようは、元よりそのつもりがないとしても、希繫はレイダーに対して拳技および投げ技を使うことができないということだ。

故に、エクレールは希繫が命令する前にスパークステインガールの第二射を発射。12の電撃の槍がレイダーを襲うが、致命的なダメージにはなっていないのか、接近速度は衰えない。

「やはりいくらスピードが速かろうと、質量がなければそのスピードも威力には変わらないか……。貫通効果と麻痺効果に特化させたのが仇になつたらしいな」

『申し訳ありません、ディアマスター』

「構わないさ。俺にはそういう細かいことはできない。そしてその分、質量を持ったままの高速機動なら——」

レイダーの鋭く大きな爪が、希繫の胸を抉ろうとする。しかし、その攻撃が希繫に至ることは決してない。

なぜなら彼は桐梨希繫。限界^{キリ}なしの男。優芽という強敵との戦いに「適応」したことによつて、少なくとも彼女と戦う以前より遙かに強くなっている。

にも関わらず、レイダーは感情生命体でありながら、その感情を高めることなく現状

に満足している種族。そんなレイダー相手に、希繫が負ける道理はない。

「俺ができる」

『——ッ!?!』

『了解。サンダーフォールを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

レイダーが声を辿る頃には、希繫は既にレイダーの懐の内側——地面を後転するような体勢で、その右脚を相手の腹部に叩き込んでいた。

上空に打ち上げられたレイダーに対し、希繫は即座にそれを追い、レイダーよりも10メートル以上高い位置から回転を開始。

回転による遠心力と落下による降下速度を利用し——

『充填完了。サンダーフォール、いけます』

——その踵を、電撃と共にレイダーへと打ち込む。

『——!』

サンダーフォールは本来、ビルや塔などの高所からレイダーを狙い撃つ際に用いる強襲技のひとつだ。

しかし希繫自身を持つ驚異的なジャンプ力によって、上方に遮蔽物がなければ基本的にどこでも使用可能になっており、飛行型レイダーに対抗できる数少ない技の一種である。

「さて……こちら第二前線部隊・攻撃隊の桐梨。追跡中の飛行型レイダーの撃破を確認。次のポイント指定をもらいたい」

『こちら第二前線部隊・攻撃隊の望月！ うわーん、希繫さんへるぷみー！』

「望月か。どうした、追ってきてたんじやないのか？」

『希繫さんが追ってたのは囷だったんですっ！ こっちに5体もレイダーが来て、対処はできませんけど決定打になる一撃をブチ込めるの希繫さんしかいないんですから早く来てくださーいっ！』

ひいーんっ、という情けない悲鳴を耳にした希繫は、囷に引つかかった自分への情けなさど、一騎当千が5頭のレイダー相手に愚痴を言うことへの呆れで小さく溜息を洩らしながら、即座に彼女たちの待つポイントへと向かった。

激戦―アサルトル―

「で、俺が来た時にはもうレイダー5頭ほとんどグロッキー状態だったんだが……俺が来る意味あったのかこれ」

「ユナイトギアじゃないとトドメ刺せないんですから、大いにありますってばっ！」

「望月……。お前もう正規ELBシステムの免許とれよ。いくらなんでも宝の持ち腐れすぎるわ。俺も楽できるし」

ELBシステム免許というのは、簡単に言えばユナイトギア装着者になるために必須となる免許のことだ。正規は15歳以上で取得でき、簡易なら12歳以上で取得可能だが、簡易を15歳未満で取得する場合には保護者の同意が必要となる。

望月芽愛の場合、14歳の時にレイドリベンジャーズに入団する際、希望部署に「前線部隊」を希望したが、必須資格として「簡易または正規のELBシステム免許」が提示されていたため仕方なく楽な簡易型の免許をとったという経緯がある。

逆に希繫は希望部署に「支援部隊」を希望したが、それ以前に「入団に有利になるか」くらいの気持ちで正規ELBシステム免許をとっていたがために前線部隊に配属されてしまった、という経緯を持つ。

「いいんですよ簡易型だけでっ！ いざとなったら希繫さんが助けに来てくれればいいだけなんですからっ！」

「なあ諸星^{もろぼし}、こいつの他力本願などこ誰に似たんだと思う？」

「いやどう考えてもお前だろ。いつも隊長や他の部隊に世話になりっぱなしのくせに」「少なくとも俺はギリギリまで自力でどうにかしてるから。どうにもならない時はすぐ頼るけどさ」

望月と諸星は、簡易型ELBシステムを用いる前線メンバーの中でも、特に優秀なレイドリベンジャーズたちだ。

望月は鉄鎖タイプの簡易型ELBシステムを操るパワー型のレイドリベンジャーズ。半径30メートルまでの空間は彼女の射程距離であり、空を飛ぶレイダーも地上を走るレイダーも関係なく捕えてしまう。

また普段は遠方から狙撃銃タイプの簡易型ELBシステムを用いて部隊を支援している諸星は、前線に出てもその正確無比な射撃の腕は活かされ、二挺拳銃タイプの簡易型ELBシステムでレイダーを抑え込む。

「ま、いいや。こちら第二前線部隊・攻撃隊の桐梨。A—11ポイントおよびA—10、A—12で確認されたレイダーは全て撃破したものと判断した。次の指示を頼む」

『こちら第二前線部隊・本部の香坂。ついさつき第一前線部隊からA—02ポイントお

よびA―03、A―05ポイントで発生した全レイダー撃破の報告があったわ。ひとまず私たちの出番は終わりね。帰還しなさい」

「了解。……ちよつと気になることもあるが、それも込みで逢依あいつと話し合う必要もあるし、さつさと帰還しよう」

今回、希繫たち第二前線部隊が請け負った区域の中で、真つ先に対応しなければならぬのは居住区であるA―10ポイントだった。

人が多く集まる地域は、それだけ正と負の感情どちらも高まりやすい。つまり、負の感情エネルギーを糧とするレイダーにとって、最も効率のいい狩り場であり、レイドリベンジャーズにとっては絶対に守り抜かなければならないフィールドでもある。

しかし、今回A―10ポイントに出現したレイダーは僅かに3頭。大型公園が存在する以外、ほとんど人も家もないA―11ポイントの方が多くのレイダーが出現していた。

「いやー、今日のレイダーは数が多かつたねえ……」

「今回は永岑市の西側に相手の数が集中してたから第一部隊と第二部隊だけで対応できたが、もし今後さらに増加するようなら第三部隊と第四部隊もいよいよ本格的な出番になりそうだな」

レイドリベンジャーズの前線部隊は、基本的に4つの部隊が存在する。

隊員全員が正規ELBシステム免許を持ち、精鋭クラスのユナイトギア装着者ばかりの第一前線部隊。レイダー対策は主にこの第一前線部隊が主力となって動き、諸星が途中までこの部隊と連携していたのもそれが理由だ。

そして正規組と簡易組の混合によって構成されたのが、第二前線部隊。個¹⁰頭未^満のレイダーが出現した際はこの第二前線部隊が主力となり、それ以上のレイダーが出現した場合は第一前線部隊のサポートをするのが仕事だ。

だが第三前線部隊と第四前線部隊は、この二つの部隊とはだいぶ異なり、全員が簡易ELBシステムしか持たず、必然的にどんな状況においても第一部隊か第二部隊のサポートとして出撃することになる。

「えーっ、でもそのためには、第三と第四にもユナイトギア装着者が必要になるんじゃないですかーっ?」

「まあ、そうなるな」

「じゃあ無理ですよ。ユナイトギアは世界中に1440機しか存在しませんもん。ひとつの支部に10機あれば多い方なんですからっ! ギアもなければお金も足りませんって!」

「まあ、そうだろうな」

現在、永岑^{ながみね}支部が保有するユナイトギアは13機。

希繫のエクレール、逢依のクリュスタルスの他、第一前線部隊全員分として10機、そして支部長が持つ1機の、合計13機だ。

先にも述べた通り、永岑市は世界有数のレイダー出現区域であるため、日本では最多の保有数を誇っている。

「第三部隊と第四部隊が今よりさらに活躍してくれば、俺たちも少しは楽になるし、そうでなければ第一部隊か第二部隊と合併……は、無理か。無理だな。チームは数が増えると纏まらなくなるし」

「特に第一部隊と第四部隊は仲悪いですからねー。あそこはたぶん意地でも合併しませんよっ！」

「仲が悪いっていうか、第四部隊が勝手に嘔みついていてるだけでも思えるが……まあ、仕方ないことか」

諸星が「仕方ない」というのも、当然といえば当然のことであった。

元より簡易ELBシステム免許しか持たず、第一と第二のサポートとして組まれた第三部隊とは異なり、第四部隊は「第一部隊に入れるユニットギア装着者でなく」「第二部隊に入れる柔軟性がなく」「第三部隊に入れるサポート能力がない」と判断された、いわば二軍落ちのような存在である。

つまり、中には正規ELBシステム免許を持つ者さえいるにも関わらず、「主戦力」「準

戦力とサポート」「サポート」という明確な目的がない「落ちこぼれ集団」である以上、第一部隊は「憧れの部隊」である以上に「嫉妬の対象」なのである。

「俺は原石揃いのいい部隊だと思うんだが……ユナイトギアの数に限られてる上、きちんと適合するかどうかはユナイトギア次第だからな。そう思うと、全員が装着者っていう第一部隊のバケモノ集団っぷりがよくわかるよ」

『おかげで出勤時は全員が前に出ちやうから、こうして第二部隊の私とオペレーター組が指揮をとることになるんだけどね……』

「逢依が愚痴なんて珍しいじゃないか。どうした、なんか問題でも起きたのか?」

逢依が単なる愚痴のためにオペレーターション用のコールモニターを使うとは誰も思っていない。

おそらく、想定外の問題が発生したがための緊急報告だろう、と希繋は身構えた。

『A-08ポイントの漁港で取りこぼしと思われるレイダーが確認されたわ。第一前線部隊は既に全員帰還してしまっているし、相手の数はたった1頭のみ。言ってる意味、わかるわね?』

「A-08ポイントは永岑市で最も東に位置する区画……。あー、はいはい、スピード自慢のお兄さんがすぐ向かいますよつと」

『悪いわね。他のみんなはそのまま帰還しなさい。相手が1頭なら、たとえば大型レイ

ダーだったとしても希繫1人で十分だわ』

そして予想は的中。

しかし、A―08ポイントというのが引つかかる。今回、レイダーが出現したの場所は、中心部となるA―05とA―10を除き、全てが永岑市の西側。東側ではまったく確認されなかったはずだ。

A―08ポイントに最も近いのは、A―09ポイントを挟んだA―10ポイント。しかしあそこは居住区であり、市街地であるA―09に繋がる東側には1頭たりとも通さないつもりで戦っていたし、希繫含む全員がそれを注意して見ていた。

もしもこれが前線第二部隊全員が見逃していたとなれば、重大な注意不足による責任問題に問われることになるが、もしそうでないとしたら、「誰かが北側のA―05ポイントから東側のA―08ポイントに追いやった」ということになる。

『希繫……わかっているとは思うけれど、もしもの時はすぐにコールしなさい』

「了解。まあ、逢依の思ってる通り、問題なのはレイダーよりも……つてことだと思っ
ぜ」

希繫以外の全員が疑問符を浮かべるが、希繫はそんなことを気にも留めず、四人とは異なる方向へと走り出した。

「……希繫さん、どうしたのかな？」

「さあな。だが、隊長が希繫だけで大丈夫だと言うのなら、大丈夫なんだろう。俺たちはひとまず帰還しよう」



『——ッ！』

希繫がA—08ポイントに突入した時、既にそのレイダーの巨体は漁港近辺の建物を隔てても確認することができた。

相手は大型レイダー。飛行型や潜伏型ならばあるいは、とも思えたが、この体軀を希繫たちが全員揃って見逃すというのは考えられない。

そしてやはりというか、そのレイダーは何者かと交戦しているのか、何度か後方に倒れたり、よろめくような様子を見せている。

ここまで来たら、もう希繫の中の「気になること」というのも、即座に解決された。

（やつぱりだ……！ 第一前線部隊が到着する前に、何者かが市民からレイダーを守るために交戦していた……。そしてA—05ポイントで本格的な交戦が開始されると同時に、その身を隠しつつレイダーを郊外へと移動させた、ってところか……！）

そして、そんなことができる「現時点で永岑市のレイドリベンジャーズに登録されて

いない人物」といえば、数は限られる。

『所属不明のユナイトギアが、こちらの存在に気付いたようです。如何いかがしますか、ディアマスター』

「如何しますかって、そりゃ決まってるだろ。あそこで誰が戦ってるかは知らないが、レイダーの討伐は俺たちレイドリベンジャーズの仕事だ。一撃で決着ケリをつけるぞ」

希繫からレイダーへは南東へ800メートル。亜音速で接近すれば2.9秒で目標に到達する。

エクレールによって肉体を電気に変換すれば、そのタイムはさらに縮めることが可能だ。

しかし、ここからレイダーに向かって一直線に進んだ場合、接触による速度の減衰を考慮しても、海に落ちることは避けられない。

もしも電氣化した状態で海に入れば、落雷と同じように落下地点から半径30メートル圏内の海面付近に存在する海の生物に大きな影響を与えることになるだろう。

「エクレールッ！」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーションナルエナジー、充填チャージ開始』

といつても、エクレールの強みとなる部分は電氣だ。だからこそ、その強みを使わないという手はない。

電撃を外に洩らしたくないのなら、体内の電気を高速循環させて動作を加速すればいい。

希繫はレイダーの動きに集中しながら、その狙いを研ぎ澄ましながら、エクレールのチャージを待つ。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

エクレールの声と同時に、希繫は全速力でレイダーへと突貫。その右脚を突き出し、大型レイダーの胴を穿った。

『——ッ!?!』

「……おわっぷ!?!」

が、やはりその勢いは殺しきれず、希繫はレイダーを貫通したまま海へと落下。

すぐさま海面に出るが、運の悪いことに今日の波はやや強く、元々全体的な筋力バランスの悪い希繫は泳ぎが得意ではなかった。

そのため海面に浮くことはできても、うまく泳げず岸にたどり着けないまま流されそうになっていた。しかし——、

「無駄に体力を使うな! 流れに逆らわずこれに掴まれ! 引き上げてやる!」

「……! 助かるっ!」

おそらくさつきまでレイダーと戦っていたと思われる人物が、希繫の数メートル後方

に救命浮輪を投げ入れ、そのまま彼を引き上げた。

レイダーを倒したはいいが、あわや自分が溺れ死ぬなどという事態になりかけ、希繫は苦笑しながらもその人物に礼を言う。

「助けてくれてありが——」

「お前はバカか！ さっきの蹴りの入射角からして、その速度と角度からじゃレイダーを倒しても海に落ちることはわかっていたはずだ！」

「いや、でもほら、一応お前のおかげでなんとかなつて……」

「俺がもしもお前を助けなかつたらどうするつもりだった！ そんな脆弱な肉体で夜の海に入って……！！ 海をナメているのか！ 海はな、この地球上において最も恐ろしい領域フィールドなんだぞー！」

が、礼を言おうとした途端、相手から浴びせられるのは怒声の連続。

しかし、彼の言う通りだ。希繫は普段、地上での活動を主としており、時には人命救助も行うが、それはレイダー襲撃による建物の崩落や火災から要救助者を救うためのものであり、海との接点は少ない。

電気を力としている分、海水と電気の関係性などについては一応学んだが、海そのものについて知ろうとしたことは多くない。せいぜい、水族館で海の生物を見た程度の知識である。

そのせいだろう、その知識の少なさが、海の恐ろしさに対する無知となり、そしてそれがさらに海を軽んじる結果となった。

レイダーへの攻撃によって勢いの大部分を失っていたとはいえ、希繫が出す超高速キックから海へ落下した場合の潜水深度、そこから海面にあがるまでに要する時間、それまでに受ける水の抵抗や、海面に出た後の波の強さまで、彼はまったくの無知だった。

肉体を電気に変換できれば呼吸は必要なくなるが、それでは先程も言った通り海面付近の海棲生物に影響を与えるばかりでなく、伝導率の高さから希繫を構成している電気が周囲に伝播し、「希繫」という形を再構成できなくなり、彼は死んでいたかもしれない。

いずれにせよ、希繫にとつて海というフィールドはその男が言う通り非常に危険なフィールドであり、彼が「地球上で最も恐ろしい領域フィールド」というのも、なまじ大袈裟な話ではないのだ。

「わかった！ わかったつてば！ 悪かったよ……。お前の言う通り、俺は海をナメてたのかも知らない。レイダーを倒すにしても、ちよつと角度を変えれば海に落ちなくて済んだわけだしな。ホント、ごめん」

「……わかったならいい。でもこれだけは肝に刻んどけ。海はこの地球上で最も恐ろしいフィールドだ。人間では呼吸が敵わず、特に深海に至つては未だそのほとんどが謎に包まれている。謂わば第二の宇宙だ。人間を一人殺すなんて、海にとつてはなんてこと

ないことなんだってな」

希繫が素直に謝ると、相手の男も少し不満そうではありつつも納得したように怒気を収めた。

しかし、希繫にとっても問題なのは、正直なところ海のどうこうではなく、相手の人物その人のことだった。

「じゃ、改めて。助けてくれてありがとう——海風みなぎそうま総交」

「……ああ。お前に礼を言われるのは、少し複雑な気分だな、桐梨希繫」

幕間—カウントダウン—

海風みなぎそうま総交は、話せば話すほどに、希繫きづなの「敵」だった。

優芽ゆめとは違い、彼自身は希繫に対して特にこれといった感情がないからだろう。思ったこと、感じたことをそのままぶつけてくる。

特に「優芽が無茶をする原因はお前だ」「彼女を救ったのがお前でなければよかった」と言われたことについては、希繫は何も言えなくなった。

しかし、あることに気付いた途端、希繫にとって「敵」であるとしても、彼自身が「悪」ではないことはすぐにわかった。

「優芽が無茶をするのも、優芽が傷付くのも、すべてはお前のせいだ。だから、本当なら今すぐにでも俺はお前をぶちのめしてやりたい。けど……優芽はそれを望まない。あいつが望まないことを、俺はできない」

「……優芽のこと、大事にしてるんだな」

「上司が部下を大切にするのは当然のことだ」

総交にとつて、優芽は仲間であると同時に、大切な部下であった。そして総交は、上下関係というものに極めて厳しい価値観を持っていた。

それは、『上司は部下の信頼によって支えられ、部下は上司の信頼によって成長する』という、上司と部下の「信頼」という部分を強い軸とした、理想の上下関係だ。

希繫はまだ総交のことを深くは知らない。しかし、それでもこれだけははつきりとわかった。この総交という男は、部下である優芽と覚悟を絶対に見限ったりはしない。

彼女たちが望んだ仕事をこなせるように最大限のバックアップをしながら、彼女たちが掴んだ結果を次の仕事に繋ぐことのできる人間なのだ。

「優芽は俺の大切な仲間であり、大事な部下だ。そして部下を預かるということは、部下の人生の一端を預かるということでもある。だから……俺は優芽の無茶の責任をとる。あいつの仕事を全力でサポートする」

「あんたみたいな上司が「敵」だと、俺も今回ばかりはちょっと背筋が冷えるぜ。でも、俺のバックにだって心強い仲間がいるんだ。お前たちにも負けない、最高のメンバーが揃ってる！」

希繫はこう言うが、実際のところは彼もわかっているだろう。

確かに彼の周りにいるメンバーは最高の精鋭揃いだが、それは個々の力によるもの。チームとしての力ではない。

絆フアミリイの家族の団結力は高い。第二前線部隊の結束力も確かだ。だがこの二つの力を両方借りるならば、希繫という「共通点」はあまりに脆い。

だからこそ、希繫は今回の事件を絆フアミレイの家族にだけ打ち明け、第二前線部隊には逢依經由で「トラブルに巻き込まれている」としか伝えていない。

「……なら、今日のところは俺が引き下がろう。さすがの俺も、お前たち『絆フアミレイの家族』の3人を同時に相手をするのは骨が折れるからな」

「3人……?」

見てみる、と言われるままに総交の視線を追うと、そこにはユナイトギアを装着した状態の逢依と悠生がこちらに向かっていた。

おそらく、レイダー反応が消失してしばらく希繫の持つエクレールがその場を離脱しなかつたことから、トラブルが発生したのだと思い、駆け付けたのだろう。

「お前の機動力、大郷悠生おおさとゆうきの破壊力、香坂逢依こうさかあいの指揮力。それら全てに対抗するために、俺だけでは難しいだろう。だが……次に会う時には、優芽にお前を討たせる。いいな?」

「……ああ。俺も、次に会う時までには今よりもっと速くなってる! だから、優芽にこれだけは伝えておいてくれ」

少し間を置き、総交はその耳を傾けた。

小柄で歩幅の狭い逢依と、大柄で身体の重い悠生では、まだここに到着するまで数十秒かかるだろう。一言くらいならば、時間稼ぎにもなるまい。

「次の勝負が、最終決戦だ。それだけ伝えてくれれば、十分だ」
「……わかった。必ず伝えよう」

じゃあな、と言つてマント型のユナイトギアを展開すると、総交はその姿を消した。次の勝負が最終決戦になる。それは、以前の戦いで希繫が感じ取っていた。今まで優芽は薬の力を借り、自分の身体と心をいじめ続けて戦っていた。しかし、彼女はもう限界だ。

次を逃せば、もう「全力」が続かない。本当なら、次の戦いで優芽に全力を出させつつも逃げに徹し、続く戦いで疲弊した彼女を叩くのが、戦略的には正しい。しかし、希繫にはそれができなかった。

彼女は、そうなることもわかっていながら次で全力を出し切ってくるだろう。その全力に、ただ逃げに徹するなど——臆病云々ではなく、希繫のプライドが許さない。



「希繫ッ！」

「無事なの……?」

総交が去ってから数秒の間を置き、悠生と逢依が到着。

希繫は全身が水浸しになっていたものの、外傷らしきものは見当たらず、逢依は「なぜコールしても応答しなかったの？」と静かな怒気を見せたが、いつものように「ごめん」と謝る希繫に何も言えなくなった。

「今乾かしてやる。ちよつと動くなよ。スヴィルカーニイ、やってやれ」

『了解。温度あるものの熱量を操作します』

悠生の持つスヴィルカーニイが、希繫の体温を上げていく。

いくら体温が上がっても、衣服が濡れていれば風邪をひきかねない。だからこそ、体内温度ではなく皮膚温度を……外から内へと熱を上げた。

もつとも、悠生自身はそんなつもりはなく、そうした方が最善だと思ったスヴィルカーニイの判断だ。

「……ダメね。既にクリュスタルスの知覚範囲である8キロ圏内にはいないわ」

「追わなくていいさ。別に戦ってたわけでもないし……ただちよつと話をしてただけだよ」

「単に相手がオマエの敵つてだけならそうしたいがな。アイツはレイダーをA—05ポイントからこのA—08ポイントまで移動させた疑いがあるからな、そつち方面の問題で、事情聴取しなきゃならない」

A—05ポイントは、民家がたった3軒しか存在しない森林地帯。レイダーとの戦闘

にはうってつけの地点から、民家や市場のあるA―08ポイントにライダーを誘導した理由。

それは、A―05ポイントのパトロールをしていた警官から既に聞いている。彼はレイドリベンジャーズが到着する少し前、あの付近を通っていた一台の車をライダーから守るため、ユナイトギアを纏ったらしい。

だが、それでも悠生はレイドリベンジャーズとして、その仕事を全うしなければならぬ。出所不明・ナンバリング外のユナイトギアを持つあの海風総交という男は、特に危険だ。

「おい、希繫」

「うん？ どうした、兄貴」

「オマエが優芽って女と戦うことは認めだが、今の男のことについて約束した覚えはない。アイツはオレが相手をする」

真剣な表情と、有無を言わせない気迫。希繫は元より、逢依すら何も言えないままその場に立ち尽くす。

だが、悠生の言い分がようやく脳に「意味」として到達すると、希繫はすぐさま彼の言葉に噛みついた。

「だっ、ダメだ！ 総交も含めて、俺は優芽を……優芽の全力を相手にすると……！」

「そんな話は聞いてない。オマエは「優芽と」戦うとオレの前でそう言った。もし優芽の全力にアイツが含まれるなら、オマエの全力にオレたちも含まれるべきだろ。だったら、オレはその「総交」ってヤツの相手をする」

「けど……ッ!」

「けどもクソもない。オマエじや総交には勝てない。太刀打ちも、歯向かうことも、オマエじや無理だ。だから全部オレが引き受ける。アイツは、テメーが対処できる領分を越えすぎてる」

希繫にとって、悠生は最も苦手とするタイプの人間だ。この状況、相手が悠生でなければ、口先で言いくるめることは可能な状況だ。しかし、相手が彼である以上、そうはいかない。

なぜなら悠生は、理屈で解決できないことを「暴力」で押し通すことができるからだ。ありとあらゆる理屈は、その圧倒的に理不尽な暴力で押し潰すことができる。ペンは剣より強いというが、彼の拳はそのペンよりも強いのだ。

「兄貴が戦ったら、総交が死ぬかもしれない! そうなれば兄貴はその罪を背負わなきゃならなくなる! それでも——」

「それでも、だ。罪を背負う覚悟なんてとづくにできてる。オマエはそうじゃないのか? 罪を背負うのが怖いから言葉で相手を悟すのか? 違うだろ。どんな罪を背負っ

「でも、分かり合いたい。そう願ってるからじゃないのか？」

「……………」

「だったら、覚悟なんてのは一番最初にすべきこと。してあることなんだよ。罪を背負う覚悟なんて、とつくにできてる」

悠生の瞳に宿った炎が、希繫に残っていた僅かな怯えを燃やし尽くす。

「いつだってそうだ。悠生は、希繫の弱いところを知って、叱って、そしてそれを理不尽なほどボコボコに殴り殺してくれる。」

だから希繫はいつも自分を信じられる。自分を信じきれない時は、自分の仲間をもつともつと信じられる。悠生が、信じられない弱さを壊して殺してくれるから。

「……………わかった。なら、総交は兄貴に任せる。でも絶対に殺すのはダメだ。俺が優芽を止めるから、兄貴はその間に、総交を捕まえてくれ。それ以上かかるなら、そこから先は俺が兄貴を止める」

「まあ、そこらへんが落としどころか。いいぜ、オマエが優芽を倒す前に、オレが総交を捕まえる」

斯くして、決戦の日はカウントダウンを始める。

希望、憧れ、そしてそれらを繋ぐ「キズナ」を確かめるべく、両者は火花を激しくさせていく――。

訓練—シミュレーション—

翌日。レイドリベンジャーズ・永岑ながみね支部の戦闘訓練室にて、希繫きづなと悠生ゆうきは生身のまま対峙していた。

希繫と悠生の戦績は、過去3999戦中、希繫の0勝3999敗0引き分け。希繫にとつて、悠生がいかに「越えられない壁」で在り続けているのかが明確になる数字だ。

しかし、今回ばかりは希繫も今まで通りでいるつもりはない。なぜなら、これは悠生から希繫に与えられた試練。優芽ゆめの相手をするためには、今のままの希繫はあまりにも弱すぎる。

「勝負は一回きり。俺か兄貴のどちらかが戦闘不能になるか、あるいは逢依が危険と判断した時点で終了。他に何か確認しておくことはあるか？」

「ねーよ。ンなこと確認するまでもねーだろ。おら、さつさと構えろ。こつちはちやつちやとカタあつけて昼休み中に食い損ねた昼メシを食わなきやならねーんだからよ」

今更、というような悠生の返答に、希繫は少しだけ苦笑うと、審判を務める逢依あいに視線を向け、開始の宣言を任せる。

逢依は両者が構えたことを確認すると、その右手を高く掲げ——振り下ろす。

「——始めッ！」

先に動くのは希繫。相も変わらぬスピードを武器として、即座に悠生の背後に回り、その背に突き蹴りを打ち込むが、悠生はよろめくこともなく振り向き、その両の手を合わせて振り下ろす。

希繫はこれを一目散に回避するが、悠生の拳は勢いのまま床を殴りつけ、半径4メートル程度のクレーターが発生。仮にもこの床は100メートル上空から象が落下しても傷ひとつ付かないと言われているが、悠生にとっては土も超合金も大差ない。

先程の希繫の一撃、直線によるトップスピードからの跳び蹴りではない以上、最大威力でこそなかったが、助走をつけない状態での攻撃としては、かなり強く打ち込んだはずだった。

しかし、悠生はそれに対してまるで動じることもなく、身をふらつかせることも、それほどばかりか蹴りの勢いなどまったく感じていないかのように微動だにしていなかった。（さすがに「最強」のレイドリベンジャーズ……！あの程度じゃ、ダメージにすらならないか……！けどッ！）

だが、希繫にとつて悠生が「越えられない壁」であるように、悠生にとつても希繫は「越えがたい壁」であった。

なぜなら、希繫はその貧弱すぎるパワーゆえに悠生にダメージを入れられないが、悠

生もまたその鈍すぎるスピードゆえに希繫にダメージを入れられないからだ。

だからこそ、二人の戦術は既に決まっていた。希繫は「離れてかわし、近づいて蹴る」というヒットアンドアウェイ。悠生は「相手の攻撃を全部受け止めて、近づいて殴る」というノーガード戦法。

「相変わらずのヒットアンドアウェイ戦法か……。まあ、スピード自慢のヤツはたいていそうだな。でもそれだけで、オレの攻撃を全部かわせると思ってたんなら大間違いだぜ」

しかし、そんな理に適っただけの基本に忠実なスタイルが、理不尽の塊である男に通ずるわけではない。

悠生は大きく深呼吸をすると、その拳を強く強く握り締め、大振りに振りかぶって、希繫の立っている方角へと勢いよく拳を突き出す。

だがその間に存在する間合いは遥かに15メートル。拳が届くような距離ではない。——が、

「んなあ……ッ!？」

悠生の繰り出した拳は大気を殴り、その振動は扇状衝撃波としてその範囲を広げながら15メートル先にいる希繫を打ちつけた。

この衝撃波をもろに受けた希繫はダウン。だが未だはつきりしない視界のまま立ち

上がり、ゆらめく気配のみを頼りに悠生の挙動を察知する。

「オレの苛烈拳衝かれつけんしゅうを受けてまだ動けるのか。なるほど……。優芽ってヤツとの戦いで、またひとつ「適応」したらしいな」

「苛烈かれつ、拳衝けんしゅう……？」

「そうだ。前々から中距離用の攻撃手段がほしくてな。漫画で見た技を元にやってみたんだが……。まあ、大気を殴って衝撃波に換えるなんざ、要領さえ掴みや大したこともねーわな」

大したことはない、といっても、その威力は折り紙付きだ。扇状に衝撃波が分散される以上、ダメージを受けたのは希繫だけではない。

希繫の後方、床と同じ合金で作られた壁は深刻なダメージを受け、円形の輝が入っている。

「離れば離れるほどに威力は落ちていくが、扇状に範囲が拡大されていく。威力として有用な射程はせいぜい20メートルってところか。次は避けるよ……ッ！」

そう言つて不敵に笑うと、悠生は再び苛烈拳衝の構えをとる。さつきはどうか耐えられたが、これを避けなければ今度こそ戦闘不能は避けられない。

そうだ、これだけは避けなければ、次に繋げられない。しかし、希繫の技のほとんどは悠生には通用しない。希繫が悠生に勝っている点は、スピードだけだ。それ以外の全

てを、悠生は越えている。

だとしたら、これを避けたとしても、「次」などあるのか。「次」とはどういう行動を示すのか。そんな思考が逡巡し、希繫の「一步」を遅らせる。

「希繫ッ！」

「——ッ！」

逢依の悲鳴にも似た呼びかけを聞いて、希繫は咄嗟に後方へと飛び退いた。しかし、それだけでは苛烈拳衝をかわすことはできない。

壁を蹴り、天井に足をつけ、そのまま悠生の背後へと急降下。少なくとも、この位置ならば苛烈拳衝を受けることはない。しかし——。

「そこはオレの射程内だけ、希繫ア！」

そう、その場所は悠生の射程範囲——彼の拳が届く範囲内だ。だが、希繫はそれを避けることもせず、むしろその足を「前」に出した。

予想外の事態に、悠生はその拳を真つ直ぐ突き出したまま、その懐へと潜り込むことを許してしまった。

「射程内でも……予想外だろッ！」

言うと同時に、振り下ろす体勢から前屈みになっていた悠生の腹部を、渾身の力で蹴り上げた。

ダメージは少ないだろう。しかも悠生の体重は119kg、思いつきり蹴り上げても滞空時間はそう長くない。だが——だからこそ、落下速度は増す。

「生身での、サンダーフォール……ッ!？」

「そうだッ! エクレールがないからスピードは落ちるが……足りないスピードはお前の体重が補ってくれるッ!」

悠生の体が天井スレスレに近づき、落下を始めると同時に、希繫が跳躍。落下する悠生を越え、天井を蹴って落下速度を上げつつ回転を始める。

落下速度、天井を蹴ることによる加速、回転による遠心力。その全てを右脚に込めて、希繫はそれを悠生へと叩き込む。

「ぜあああああッ!」

雄叫びが気合いを、気迫を、気持ち——感情を高めていく。

昂る気持ちを遮るものはなく、希繫はその感情を脚に込め、そして——。

「まだ、弱え」

そして——背中から着地した悠生によってその脚を掴まれ、20メートル以上離れた壁へと投げつけられた。

「が、は……ッ!？」

「今の機転は合格ラインだ。足りねーパワーのためにオレの体重を利用するのも悪く

ねーし、何よりよかったのはオレの攻撃に対してビビることなく足を前に踏み込んだことだ」

「はあッ、はあッ……!」

「……だがパワーもなけりやディフェンスも足りてねーオマエに、優芽つてヤツの相手ができるのかつて点は、今の戦いを見ても疑問が残る。それについてはどうなんだ、希繫」

肩で息をする希繫に対して、一方的な攻撃を受けつつもまったくダメージを負っていない悠生が問いかける。

「確かに……俺は戦うことに関してはズブの素人だ……。他人ひとより喧嘩は強いし、スピードに関してはよっぽど負けないとは思ってる。けど、それだけだ。俺には「戦う」とじゃ何もできない……」

「……………」

「でも……戦わなくちゃ聞く耳も持たない奴だっているんだ! だったら、そいつらが聞く耳を持つまで戦う! そんなもって、聞く気になれば俺は絶対に戦わない! それで騙され裏切られ傷付けられてもだ!」

希繫と悠生が真つ向から対立することが、これだ。

希繫にとって、敵とは「自分とは違う正義のために頑張っている人間」であり、決し

て悪ではない。互いの正義に折り合いをつけられるのなら、わかりあうことも可能な相手だ。

しかし悠生の場合はそのようではない。悠生にとって、敵とは「戦う相手」であり、そこに和解という目的はない。ただ純粹にぶつかり合い、気に入れば「敵」でなくなり、気に入らなければ叩き潰す。それだけだ。

「俺は敵を倒すために戦ったりしない！ 互いに和解の道を作るために、まず正面からぶつかって、そしてわかりあうための手段が「戦い」なんだ！ 俺は優芽を「倒す」気はない！」

「……相変わらず甘っちょろいヤツだな、オマエは。「戦う」のに「倒す」気はないとか、お前は菩薩にでもなるつもりか？」

「好きに言え。俺は俺がやりたいこと、やるべきことを全力でやりたいんだ！ そのためなら……俺は兄貴と違って何度でもぶつかってやる！」

床を砕かんとするほどの勢いで、今度は希繫から悠生へと攻撃を仕掛けた。

亜音速による急接近と、そのスピードを最大限に活かした跳び蹴り。純粹な亜音速キックだ。しかし、クリムゾンインパクトは本来、蹴りによる「ダメージを与える」ための技ではない。

あれは、肉体を電気に変換することで光速接近し、攻撃を接触させる瞬間に電氣化を

解いて相手を貫く、文字通り『必殺』——「必ず殺す」ためにある技。

優芽との勝負でも、優芽の攻撃に対して迎え撃つことはしたが、優芽自身を狙わなかったのは、それが理由だ。

しかし、相手が悠生となれば遠慮はいらない。まして今はエクレールを使わない生身での攻撃。たかだか亜音速からの跳び蹴り程度で、悠生を殺すことなどできるはずもない。

故に、悠生もまたその右手で拳を作り、横薙ぎに腕を払うと、その勢いによつて摩擦を起こし、右腕を炎で包む。

「スヴィルカーニイなしで、炎を……ッ!？」

「そうだッ、これが孤高の炎! 他の誰にも……仲間やスヴィルカーニイにすら頼らない、オレがオレの力だけで編み出した最強の一撃!」

炎に包まれた右腕を再び構えなおし、そしてもう一度突き出す。

その拳撃の名は、「超破壊」——。

「オーヴァー、デストラクトオオオッ!!」

「くっ……! ぜえああああああッ!!」

衝突する炎の拳と亜音速の脚。

拮抗は一瞬。まるで勝負にならないとでもいうかのように、悠生の右腕を包んでいた

炎がそのまま希繫へと伝い、純粋な拳の破壊力と共に膨大な熱量の炎が希繫を襲う。

——はずだった。

「……炎が、伝わらねー……」

「衝撃を、感じない……」

拳と脚が接触すると同時に、二人の攻撃の勢いが消えた。

希繫はひとまず悠生の拳を足場のようにして蹴ると、空中で後転しながら着地。こんな芸当ができる「たった一人の人間」に視線を向ける。

「私とクリュスタルスが両者の運動エネルギーと熱量をゼロの状態に固定し『凍結させた』わ。両者、そこまでよ」

「……なんだ、こっからがいいトコだったってのに、野暮なこったな。なあ、希繫？」

「ん？ あ、いや……俺はさっきのオーヴァーデストラクト受けてたらヤバかったから、むしろ感謝してんだけどな。ありがとう、逢依」

逢依とクリュスタルスの仲裁により、模擬戦闘は中断。不満気味な悠生に対して、希繫は状況を正しく理解し逢依に礼を言う。

希繫と悠生の力量に関する優劣は、この模擬戦闘が始まる前から既に明らかではあった。故に、この戦いで重要だったのは、その優劣の「差の開き」である。

少なくとも、希繫個人が出せる力で、悠生と対等に渡り合えるということはまず有り

得ない。片や最強のレイドリベンジャーズであり、片や最弱のレイドリベンジャーズだからだ。

しかし、だからといって一方的にただやられるだけでは、優芽と戦うには力不足を否めない。そのため、悠生は自分自身を物差しとして使い、希繋の力量を測ろうとした。

結果として、希繋の出した最後の一撃。生身での亜音速キックは、悠生の予想を超えていた。

そもそも、希繋が放ったサンダーフォールを受け止め、壁に叩きつけた時点で、悠生の予想では希繋は「戦闘不能」になっているはずだった。

しかし彼は、壁に接触する直前に受け身を取るのではなく、足を緩衝装置サスペンションとして壁に着地し、ダメージをほぼゼロにしたのだ。

「……で？ 俺は兄貴の眼鏡には適ったのか？」

「ま、及第点ギリギリだな。優芽ってヤツとの戦いに『適応』もできてるし、まあこんなもんだろ」

「みんなたまに言うけど、その「適応」ってなんだ？」

「ん？ なんだ、オマエまだ気付いてねーのか。ま、火事場のクソ力みてーなものだから、仕方ねーっちゃ仕方ねーんだけどよ」

まあ自分で気付くこつたな、と吐き捨てるように言うと、悠生は戦闘訓練室を出て行

こうとする。が、逢依とクリユスタルスがドアを凍結させてその場に留まるよう仕向けた。

「出ていくのはいいけれど、あなたが破壊した床の修繕報告はあなた自身がおきなさいね」

「あつ、はい……」

にこり、といつも通りの静かな微笑みが、今ばかりは雪女の冷笑にも等しい殺意が込められていたと、後に悠生は語った。

強さ—ウィークポイント—

『希望を繋ぐキズナが俺の名だ!』

脳裏を過る言葉と声が、優芽の意識を覚醒させた。

いつか憧れた人の名は、いつだって自分に希望を与えてくれた。

心が折れそうな時も、泣きそうになった時も、誰かを憎んでしまいそうになった時も、憧れの人が「希望」を与え続けてくれたから、自分はどんな暗い道でも歩き続けることができた。

そう、あの日あの時——希望の象徴だった「その人」が、世界に裏切られ、世界に失望し、世界を見限る、あの瞬間までは……。

「……覚悟さん……」

「優芽! 目が覚めましたか……! よかつた……ッ!」

「あたしはなぜ……って、そっか。桐梨希繫に……お兄さんに、負けて……」

優芽にとって、希繫は絶対に助けなければならぬ恩人だ。それは、敵となった今でも——否、敵となった今だからこそ変わらない想いだ。

だが、希繫は優芽の想像を遥かに超えていた。彼は、優芽が思い描いていたほど強く

なかったのだ。

（世界最弱のレイドリベンジャーズとはいえ、未来では世界中から注目されるほどになった桐梨希繫が、まさかあれほどまでに弱かったなんて……）

その「弱い」はずの彼に負けたのは、まぎれもなく優芽だったが、彼女にとつて希繫は、口先も巧ければ戦いも巧いはずの人間だった。力がないだけに、それを技で補っているのだと思っていた。

しかしそれは違った。彼は口先こそ巧かったが、こと戦闘に関してはスピードしか直接的な武器になるものがなかった。技に関して言えば、ただ愚直に速いだけのキックだけ。

優芽は、なぜあんなにも弱い彼が、未来ではレイドリベンジャーズとして世界中に注目されていたのか、今になって疑い始めていた。

「……覚悟さん」

「はい。なんですか、優芽」

「戦つてわかりました。あたしは、桐梨希繫よりも強かった。なのに……なぜあたしは桐梨希繫に勝てなかったのでしょうか」

ほかん、とする覚悟の表情を見て、よりいっそう優芽は疑問を強める。

「……それは、優芽が一番よくわかっていることではありませんか」

「あたしが……？」

そう、それは優芽自身が誰よりもよく知っている答え。希繫がいかに弱く、自分自身がどれほど強くても、勝てなかった理由。

決して、忘れてはいけけないはずの、大切な大切な——コタエ。

「確かに、桐梨希繫は世界で一番弱い。ですが、それは国際脅威と対峙するレイドリベンジャーズとしての強さです」

「——！」

国際脅威的侵略性生命体対策自衛集団——レイドリベンジャーズ。それは、国際レベルの脅威となる生命体が襲い掛かる時、それらに対策し、自らの力で衛り抜く集団。

それは即ち、この世界の敵と対峙し、戦い、それらを葬るための力を持つ者たちが、この世界に存在しているという証だ。

しかし、桐梨希繫という存在は、少なくともそれだけのために戦う戦士ではなかった。

「レイドリベンジャーズは、端的に言えば「恐ろしい敵を倒す」集団……。けれど、桐梨希繫という存在は……」

「たとえ相手がこの世界の脅威であっても、できることなら戦う以外の方法でわかり合いたいと願う、そんな理想を本気で抱き続ける人……。だからこそ優芽は、彼に憧れたのではありませんでしたか？」

優芽が希繫に勝てなかった理由。それは、戦うことで解決を図ろうとしたことによる、自分の本当の想いと向き合いきれなかった結果だ。

もしもあの時、優芽が希繫を「一人の戦士」ではなく「一人の人間」として、彼の強さを本気で認めていたのなら、あの勝負に決着はつかなかったはずなのだ。

「桐梨希繫は……最後の最後まで、あたしを「助ける」ために戦い続けた……。けれどあたしは、最後の最後で「勝つ」ために戦い、彼を「救う」という最初の目的を忘れてしまった……。だから……ッ！」

「もうわかるでしょう、優芽。あなたは桐梨希繫に負けたわけではありません。あなた自身の弱さ……。憧れを救うという、絶対に失ってはいけない想いを失った「弱さ」に負けたのです」

強さと弱さは表裏一体。信じるべきものを信じることで得た「強さ」は、それを信じ続けることでより大きな「強さ」となる。

しかし、信じるべきものを信じられなくなった時、それは「弱さ」となって自分自身の力を、強さを、逞しさを、恐ろしいほどに貪っていく。

「そんな……じゃあ、あたしに、あの人を……桐梨希繫を救う資格なんて……！ 勝手に憧れて、勝手に救うと誓ったくせに、勝手な思い込みで彼を見下して……！ あたしはもう……ッ！」



同刻。永岑市ながみねしの北を守る希繫と、南を守る悠生ゆうきの前には、それぞれ30頭を超えるレイダーの群れが押し寄せてきていた。

今回は永岑市全体——いや、それどころか永岑市の南北に位置する幸盛町きんせいちやうと政礼町せいれいちやうにまで侵攻が始まっており、避難は完了しているものの、事態は急を要する。

勢力レベルは「群」。おそらく、北の勢力と南の勢力は同一のものとしてカウントされているのだろう。

『南側はディアフレンドたちに任せて……私たちは私たちのすべきことを、全力でやる。それでよろしいのですね、ディアマスター?』

「ああ。向こうにや兄貴がついてんだ。だったら、こつちも心置きなくやれるってもんだけ!」

永岑市の内部にいる勢力レベル「個」のレイダーたちは、諸星率もろぼしいる第二前線部隊の非正規ELB隊と、正規ELBシステムを持つ悠生の部下たち第一前線部隊の面々が対処している。

たった一人で国ひとつはもちろん、本人曰く「星ひとつ」陥落おとすることもできると豪語

する悠生がいれば、南側もまず大丈夫だろう。

だからこそ、希繫には一切の迷いも憂いもなかった。他のことは他のみんなに任せ、自分たちがすべきことだけを全力でやり抜けばいい。ただそれだけに集中できるということの強さを、彼は知っている。

「いくぞッ、エクレーールッ！」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレーール、桐梨希繫に同調接続アクセスします』

希繫がエクレーールを展開すると同時に、彼の両目が通常時の黒からエクレーールの放つエモーショナルエナジーと同じ赤色に変色。

思考がやたらとクリアになっていく感覚を全身で実感すると同時に、彼の足が大地を蹴った。

そしてそれと同時に、永岑市の南側から巨大な火柱が地上から天を衝くような勢いで燃え上がった。

「悠生の方も始まつたらしい。こっちも負けてらんないぜ、エクレーールッ！」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

希繫に襲い掛かる5頭のレイダーたち。だが、「飛び掛かる」という選択は希繫を前にしてあまりにも愚かだった。

5頭がまったく同時に「走って襲い掛かって」きていれば、その内の1頭くらいは攻

撃を掠めることもあったかもしれない。だが、希繫はスピード型の戦士だ。

滞空時間という、圧倒的に「遅い」時間を要する攻撃が、彼に届くことは絶対でない。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

「さっすがエクレールツ！ 仕事が早いツ！」

『照れます』

希繫の連続ハイキックが5頭のレイダーを一気に葬ると、後方に構えていた数頭のレイダーがたじろぐ。

すると、10頭ほどの小型レイダーがその体を融合させていき、5メートル近い巨体を持つ大型レイダーへと変貌。

そしてこれに士気を上げられたのか、飛行型レイダー4頭も、希繫に向かって急降下を始めた。

「遅えッ！」

『——ッ!?!』

アクセルアクションによって動作速度と反射速度が通常時の数百倍となつている今、スピードに優れた飛行型レイダーの急降下すら、希繫には止まって見える。

落下地点からわずかに逸れ、がら空きになつている腹部に渾身のキックを叩き込むと、飛行型レイダーの1頭は3つほどの建物を貫通しながら、ぴくりとも動かず息絶え

た。

そして、希繫に攻撃をかわされ地上に落ちた3頭はそれぞれ希繫の持つギアのヒール部分から生えた鋭いブレードを突き刺され、残るは大型レイダー1体と12体程度の尖兵型レイダー。

『ディアマスタ。ブレードが折れた場合、すぐに同様のものが再展開されるとはいつでも、こう一体刺すごとにペキペキ折るのは止めてください』
 「いやレイダーの体液ついたまま戦うのはちよつと……」

『止めてください』
 「……はい」

エクレールに注意されている間に、12頭のレイダーが希繫に接近してきていた。

いや、それだけではない。大型レイダーまでもが、その巨大な手を振り上げて、おそらく尖兵型もろとも希繫を攻撃しようとしているのだろう。

おそらく、尖兵型はそのための足止め。希繫の体を拘束するための、戦略的犠牲者たち。

「おいおい、やめろよそういう戦い方……。殲滅するぞ、エクレール」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
チャージ

希繫の肉体がエクレールによって質量を失っていくと同時に、彼の全身が真っ赤な電

気を帯び始める。

それだけではない。電気そのものとなったことによる、肉体的『死』から解放されたことによる一種の昂揚感が、希繫の動きをさらに鋭くさせる。

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

コンプリートと同時に、大型レイダーの巨大な手が振り下ろされた。

だが、クリムゾンインパクトが命中した時にできる巨大な穴が、レイダーには開いていない。その意味するところは――。

『――！』

悲鳴のように笑う尖兵型レイダーたち。

だが大型レイダーだけは何も叫ばず、ただただ、目を見開いたままそこに佇んでいた。
「へえ……それで？ 誰を斃やつたんだ？」

ズシン、という地響きと共に、真つ二つにされた大型レイダーの体が、2頭の尖兵型レイダーを巻き込みながら倒れていく。

そう、希繫はあの瞬間、クリムゾンインパクトを確かに放っていた。大型レイダーの真上に飛び、落雷のような速度で大型レイダーの脳天から地面まで、一直線に。

『――ッ！――ッ！！』

今度こそ、歓喜のものではなく本物の絶望のままにレイダーたちは悲鳴を上げた。

しかし、そこに残った10頭のライダーたちも、彼の追撃から逃れることはできなかった。

決戦—スタートライン—

防衛任務を完了し、永岑市A—04ポイントに集合したレイドリベンジャーズ。全員が互いを労い合い、永岑支部に戻ろうとしていた時のことだった……。

「あれだけのレイダーを殲滅するとは、さすがに永岑市のレイドリベンジャーズ、鍛え抜かれた精鋭揃いという噂に違いはないようだな……」

「さすがに、もうわたくしたちの持ち札である『レイダーカプセル』も底をつきました。そろそろ、わたくしたちも形振り構っていられる状態ではなくなってしまうからね」

希繫きづなと悠生ゆうきが同時に振り返り、ギアを展開する。

二人が明らかな交戦状態に入ったことで、ギアを解除していた11人の隊員たちも、警戒状態となってその声を辿った。

「覚悟さとり、総交そうま……！ さっきの言葉、まさかレイダーを放つたのはお前たちだったのかッ！」

「はい。といつても、ELBシステムを持つ人間のみを襲うように改造された、一般人に優しい改造レイダーですが」

「一般人に優しいだと……？ 冗談じゃない！ レイダーは人々にとって、恐怖の象徴

だ！ それを放つなんて、許されることじゃない！」

いつものように微笑んだまま表情を崩さない覚悟と、怒りの感情を隠そうとしない希繫。

しかし、そんな希繫を見て、一人の人物が前に出る。

「落ち着きなさい、希繫。今のあなたは冷静さを欠いている。その状態で彼女と戦うのは危険だわ」

A—01ポイントの永岑支部の『「群」レイダー合同対策本部』にて全体の指揮を行っていたはずの逢依^{あいつ}だ。

彼女は、希繫の「一番の強み」をよく理解している。彼は、他の誰よりも弱いレイドリベンジャーズであることを自覚しているからこそ、どんな状況でも絶対に油断をしない。

相手より劣っているからこそその臆病さと冷静さが、彼の強みなのだとわかっている。だからこそ、今の怒りのままに交戦を開始しようとしている希繫は、あまり良い状態とは言えない。

「いや、今のままやる！ 今なら……怒りの感情エネルギーを最大限に爆発させられ——」

「希繫」

逢依の、厳しくも優しい声が、彼の怒気を祓う。

かんしゃくを起こした子供を宥めるように、逢依はその小さな手で希繫の両手に触れ、彼が見失っていた『桐梨希繫』を取り戻す。

「私がやるわ。いいわね？」

「……わかった」

優しい逢依の声を聞いて、希繫はその場を二歩だけ下がる。

すると、他の前線メンバーたちも事情を察したのか、本部に戻る者、その場を少し離れて状況を見守る者の二つに別れた。

「大郷悠生と、香坂逢依か。どうした、桐梨希繫は戦わないのか？」

「あいつの担当はオマエらじゃねー。オマエらの相手は、オレたちだ」

どこまでも余裕な態度を崩さない悠生と総交に対し、逢依と覚悟は冷静沈着だ。

既にギアを纏っている悠生と逢依がそうであるのは当然だが、まだギアを纏っていない総交と覚悟まで、余裕と冷静さを持っているのは、希繫からすればかなり不気味な光景だった。

「どうした、ギアを纏わないのか？」

「纏うさ。だが……敵の真ん前だからな。お前を少しいたぶつてから、余裕をもって纏わせてもらう」

世界最強のレイドリベンジャーズを前に、一切の怯えも恐れもなく、むしろ余裕を越えて見下しているかのような視線を向ける総交に、悠生の回答は無言。

怒りや呆れなどありはしない。悠生は、己が「世界最強」であることを自信を持って認めた上で、それでもなお、総交を「強敵」だと認識していた。

「あなたはいいの？ 私、こう見えて不意打ちとか平気でやるタイプなのだけど」

「あ、構いませんよ。わたくしの場合——」

不意に、覚悟が髪を掻き分けるような動作をした瞬間、逢依の姿がその場から消えた。

「——もう装着済みですから」

直後、逢依がいたはずの場所には無数の鉄骨が突き刺さっていた。

「なるほど……その義眼があなたのユナイトギアつてわけね。テクニカルエイド型のユナイトギアは珍しいから覚えているわ。確か名前は——」

「第七八号ユナイトギア『ヴォイド』……その名の通り、虚空を生み出すユナイトギアですわ」

第七八号ユナイトギア。その名をヴォイド。現代にも未来にも存在する正規ELBシステムのひとつであり、そのギアが持つ特性は……。

「『ギアが認識できる範囲の物体を『何も無い空間』に飛ばし、その空間の中から取り出す』ことが、ヴォイドのギア特性……！ 典型的な空間制御系というわけね……！」

「あなたのクリュスタルスは、『物質・非物質の区別なく、ありとあらゆるものを凍結させる』……それは時間や空間も例外ではありません。けれど……ただ『停止』させるだけの力が、ヴォイドに敵うとは思いません！」

覚悟の背後に回っていた逢依を、自ら『何も無い空間』へ手を突っ込んだ覚悟が、逢依のさらに後ろの『何もない空間』から手を伸ばし、彼女を捉えようとする。

しかし、逢依はクリュスタルスのギア特性『瞬間凍結』の最大の弱点を理解している。時間を凍結し、相手の意表をついた後、自分が「そこにいる」と気付かれることが、逢依にとって一番の恐怖。

だからこそ逢依は周囲の気配に常に気を配り続けているし、無論——自らの死角となるポイントには特に注意深く警戒している。

「クリュスタルスッ！ 私にアームズをッ！」

「ヴォイドッ！ この手にアームズをッ！」

逢依の手に短剣型アームズ『マルチプルダガー』が、覚悟の手に小銃型アームズ『フレキシブルトリガー』が展開されると同時に、ついに悠生と総交も動き始めた。

覚悟の放ったフレキシブルトリガーの弾丸は、発射時に覚悟がイメージした通りの軌道走る。それはつまり、直線的な軌道よりも変幻自在な動きが可能だということだ。

だがしかし、弾丸に限らず物体の速度というものは直線でこそ最大となる。まして、

銃弾のようなスピードが威力として変換されるような武器において、偏角射撃というものは極めて愚かだ。

「4段階の偏角だけでこの程度のスピードなら、希繫の蹴りの方がよっぽど速いわね」
「そりゃあ、曲がる以外はただのライフルですし、曲がったら速度はガタ落ちですからね」

通常のライフルが放つ弾丸の速度は、メーカーや銃の種類にもよるが、およそ秒速600メートル〜800メートル。

しかし偏角射撃を行った際の速度は、その3分の1〜4分の1まで速度が落ちる。つまり、およそ秒速200メートル程度が限界だということだ。

「逢依ッ！ いつもの悪いクセが出てんぞッ！ 口より体を動かせッ！」

「覚悟ッ！ お喋りがしたいなら戦って勝って、そして帰って優芽ゆめとしろッ！」

悠生の拳と総交の拳が正面からぶつかり合う。世界最強の拳だ、単純なパワーで悠生が負けるはずがない。だが、表情を顰めたのはどういうわけか総交ではなく悠生の方だ。

（オレの拳……その親指を狙って、ピンポイントに拳をぶつけてきた……！）

（世界最強のパワーに俺ごときのパワーが通じるとは思えない。だが相手のメインウェポンが『格闘技』なら、俺にもまだ勝ち目はある……！）

希繫はその戦いに、ただ圧倒されることしかできなかった。

互いにギアの特性になど一切頼ることなく、自分の肉体ひとつを信じて一歩も退かず正面からぶつかり合いながらも、パンチのタイミング、ポイント、技の選択まで全てが緻密で繊細な悠生と総交。

そんな彼らとは真逆にギア特性をフル活用しながら互いに相手の攻撃を一撃たりとも受けようとせず、なおかつ相手のパターンや行動範囲の分析に余念がない逢依と覚悟。

どちらも、希繫にはできない戦い方だった。

「さすがにこれだけ動き回ると、体力的に堪えるわね……。私、向こうの体力お化けと違って頭脳労働専門だし」

「あら、奇遇ですね。わたくしもどちらかといえば体力仕事は専門外ですわ。ですから……早く落ちてくださいなっ!」

「その言葉、そのままあなたにお返しするわ!」

ボルトアクションライフルの最大の弱点は、一発を撃ってから次の一撃を撃つまでの間に、次弾装填の動作を行うが、その動作が拳銃タイプより遥かに大きく遅いことだ。

それに対し、逢依のマルチプルダガーは、投げてしまえば一直線にしか飛ばない上、投擲速度も人の手から生み出されるため銃には敵わないながらも、彼女が持つ『凍結』の

力を併せて使うことで、ほぼ隙がなくなる。

「どおらああッ!!」

「おっと。危ないじゃないか、今のは当たっていたら死んでいたぞ」

「お生憎ウ！ オレは希繫と違って、敵相手には常にそのつもりだ！」

だろうな、と言って総交の口角が上がる。マズい、と希繫が叫ぶ。しかし時すでに遅く、総交の肘鉄と、そこからの鉄山靠てつざんこうが悠生のボディにクリーンヒット。

2メートルを超える悠生の巨体が、まるでスーパーボールのように地面をバウンドしながら10メートル以上吹き飛ばされていた。

「ゆ……悠生ッ！ 悠生いッ!!」

「来るなッ！」

「……ッ!？」

駆け寄ろうとする希繫を制止するのは、誰でもない悠生自身。

あの鋼鉄みたいな筋肉で銃弾すら弾く悠生が、あの世界最強のパワーを支え続けた頑強極まる悠生の肉体が、今のたった二発の連撃だけでまともなダメージを受けている。

おそらく、希繫が加勢に入っても邪魔にしかないだろう。思わず戦いに飛び込もうとした希繫だが、元々頭でっかちで体より口を動かすタイプだったこともあって、悠生に制止されたことですぐさまその現実を理解できた。

「今のはアイツの方が上手だったただけだ。オレが弱いわけじゃねー。アイツがつえーんだ。ったく……何が世界最強のレイドリベンジャーズだ。冗談じゃねーよ。まだ……こんなに骨のあるバカがいるんだからなあッ!!」

「悠生ッ!」

引き留めようとする希繫の声など意にも介さず、この危機をむしろ楽しむかのように無邪気に笑いながら、彼は総交へと殴り掛かる。

「あちらは楽しそうで何よりですわ。こっちは指一本、髪一本すら触れさせてくれませんの」

「それもお互いさまよ。こっちは時まで止めているというのに、あなた涼しい顔して避けちゃうんだもの。こんな理不尽なことってあるかしら?」

対して逢依と覚悟の方は、既に肩で息をし始めていた。

本人たちも言う通り、互いに体力仕事で専門でないためだろう。今のまま逢依に加勢すれば、こちらは邪魔にならないはず。だが……。

(逢依が時間を止めてもなお捉えられない相手を、俺が捉えきれるのか?)

迷いが躊躇を生み、躊躇が緊張を生み、そして張りつめすぎた緊張は、その肉体を縛り上げ、気付いた時には――、

「ヤバいッ! レイダーだッ! しかも5、10……15メートルはあるッ! 超下級

の大型レイダーが2体ッ！」

「あれもあいつらの手駒だつてのかわッ！」

第一前線部隊のレイドリベンジャーズたちの悲鳴にも似た言葉を聞いて、希繫が再び視線を上げた瞬間、戦っている4人を巻き込むような形で、2頭のレイダーが落下してきていた。

「エクレールッ!!」

『了解。肉体を電気に変換します』

すぐさま肉体を電氣化し、駈け出そうとする希繫だが、相手は2頭。

片方は『救える』！

片方は『見捨てる』？

両方を助けることなんてできない。希繫のスピードを持ってしても、15メートル級の超大型レイダーをキック一発で吹き飛ばすには相当な勢いの助走が必要だ。

それで片方を蹴り飛ばすことができて、もう片方を蹴り飛ばすためには、助走をつける時間があまりにも足りない。

迷うことのできる時間はもう僅かだ。自分ひとりの力では、片方しか……。

「右へ走ってッ!!」

その声を、その言葉を、その叫びを聞いて、希繫は反射的に右へ——悠生と総交が交

戦する方向へと駆け出した。

レイダーの着地まで、あと10メートルもない。だが——二人に触れない高さなら、3メートル以上の高さにいるのなら、もう躊躇いはない。

走り始めると同時に、地を跳ぶと同時に、既にその右脚は突き出していた。そしてそのまま、接近し、接近し、接近し、直撃する瞬間に、電氣化を解く。

「ぜあああああッ!!」

希繫の蹴りがレイダーを捉えると同時に、逢依と覚悟の上に現れたレイダーもまた、虹色の水流によって押し流されていた。

そして、吹き飛ばされたレイダーたちが着地することで、ようやく悠生たちも周囲の状況を理解したのか、交戦を中断した。

「おい総交、ありやなんだ。テメーが呼んだわけじゃねーだろ。テメーの仲間が呼んだのか？」

「バカ言え。香坂逢依との交戦中だぞ。いくら覚悟でも、そんな余裕があるはずないだろう」

だとすれば——と、悠生と総交は互いに頷き合い、『家族』と『仲間』の元へと駆け寄る。

あれは、天然モノのレイダーだ。覚悟の言う、『一般人を襲わない制御された養殖モ

ノ』ではない、間違いなく、放っておけば人々を襲う類のレイダーだ。

「……優芽」

「桐梨希繫……」

そして、二つの勢力は背中合わせにレイダーと対峙する。

逢依の背には覚悟、悠生の背には総交、そして希繫の背には優芽がいる。それだけで、さつきまで争っていたのに……いや、だからこそ、心強い。

「さつきはありがとう。君が逢依たちを助けてくれなければ、俺はただ迷うばかりで……きっと、どっちも助けられなかった」

「お礼はいりません。あたしだって、あの時は片方を助けるので精いっぱいでした。だから、お互いさまです」

礼を交わすのは、きっとこれが最後——。

未来—ホープレス—

2頭の超大型レイダーの襲撃。

あまりにも唐突な出現に対処が遅れる第一前線部隊と第二前線部隊だったが、この事態に直前まで交戦状態にあった『絆の家族』と『仲間たち』が手を組んだ。

希繫・逢依・悠生から成る『絆の家族』の団結力。

優芽・覚悟・総交から成る『仲間たち』の結束力。

どちらも強い『絆』と『信頼』で結ばれたチームであるだけに、そしてどちらもが「誰かを守るため」「誰かを救うため」に戦ってきただけに、この両者の共闘はレイダーにとって脅威となった。

「さすがに、レイダーを相手にギアを纏わない理由はないな」

「ようやくお披露目か。勿体ぶりがあって」

レイダーを前にした総交の呟きに、背中を預けた悠生が吐き捨てるように言う。しかし、その表情はどこか満足気で、それでいて狂気的な何かをも孕んでいた。

「知ったことか。いくぞ、デーパーブルー」

『了解。ユナイトギア三二二号・デーパーブルー、海風総交に同調接続します』

左腕に装着していたブレスレットの群青色の水晶が輝くと同時に、総交の体を青い光が包む。

そして、一瞬の輝きの中から現れたのは、四肢にブースターのついたガントレットとグリーブを装着し、群青色のマントに身を包んだ姿。

だが、希繫たちが驚いたのはその装備ではなかった。

「メツシユ入り……つて、姉さんのハートと同じ、エモーショナルエナジーが『逆流』したユナイトギア……!?!」

エモーショナルエナジーの逆流。数あるユナイトギアの中でも、特に強力なものを用いる装着者が、リミットブレイクを繰り返すことで発生するギアの暴走の後遺症。

リミットブレイクは装着者の感情エネルギーを過剰抽出する^{エクシードチャージ}ことによって、ギアの出力行を一時的に解除し、基本限界以上の力を発揮させる決戦用プログラムだ。

だが感情エネルギーの過剰抽出^{エクシードチャージ}とは、即ち装着者の感情を無理矢理に引き出す行為であり、ギアだけでなく装着者自身への負担も極めて高い。

その負担に耐え切れなくなった状態でなおリミットブレイクした者に対し、ギアが装着者を守るために強制発動する防衛機構こそ、感情エネルギーの『逆流』である。

抽出しすぎた感情エネルギーを装着者に逆流させることで、底を尽きかけた装着者の感情に潤いを与えるが、その後遺症として本来あるべきでない部位にギアの影響が現れ

る。

それが、主に髪や肌の変色。総交の場合、前髪の一部に群青色の変色が見られるため、おそらくそれこそが『逆流』の影響なのだろう。

だが、逆流とは単純な感情エネルギー『だけ』を逆流させているわけではない。ユナイトギアの特徴——『感情を威力にする』という点も『逆流』しているのだ。

「道理でオレとタイマンで張り合えるわけだ。さすがのオレだって、エモーショナルエナジー込みの格闘じゃ楽には勝てねーからな」

「喋っている場合か。来るぞ」

総交の言葉が合図であったかのように、2頭のレイダーが家族と仲間を襲い掛かる。だが、それに対する絆フアミリイの家族の対応は早かった。

レイダーが動いた途端、希繫と悠生が駆け出した。当然、レイダーの元に到達する速度は希繫の方が格段に速い。しかし、彼の蹴りにすらこのレイダーは耐え、こうして向かってきているのだ。

故に、希繫は牽制以上の意味を持つ攻撃を敢えてしなかった。

牽制、攪乱、陽動。そういう作戦において、エクレールの『電気変換』というギア特性は、非常に有用なものだった。

電気がスパークする光は相手の視界を遮ることができる上、電気という性質から成る

「麻痺効果」は、相手を殺すことなく自由を奪うためには非常に役立つ。

そこに希繫のスピードが加わることで、相手の攻撃を全てかわしながらヘイトを集めるといふ戦略は成立し、そうして稼いだ時間はほんの10秒程度でも『結果』へと繋がる。

『——充填完了』

そう、たった10秒でも、レイダーを氷漬けにしながらチャージを完了させるには、必須かつ十分な時間なのだから。

「オーヴァー……ッ!!」

その拳は、太陽の輝きにも似た力を持っていた。

見ているだけで悠生以外の誰も彼もを輝かせてくれるような、闇の世界を強引に暴くような、強さと激しさの象徴。

故に、その拳は燃え盛る。太陽も呑み込むほどの光と熱を放ちながら。

「デエストリアクトオオオッ!!」

悠生が拳を叩きつけると同時に、希繫もその場を即座に離脱する。

オーヴァーデストラクトは、その名に相応しい『超破壊』の力。殴りつけた先から、周囲の被害を顧みず徹底的な破壊を尽くすだけの拳だ。

圧倒的で絶対的で暴力的で究極的かつ最強のその拳は、レイダーを穿った直後、巨

大な火柱を生み夜空の雲を貫く。

「相つ変わらざるのバ火力で安心する……」

「いくら超大型でも、悠生の大バカデストラクトの前では他のレイダーと大差ないわね」

「お前ら人のことバカバカ言いすぎだろ」

まともな一撃だけで超大型レイダーを炭に換えた絆フアミリイの家族は、もう片方の超大型レイダーの相手をしている仲間パートナーたちの加勢に入ろうと振り向く。だが――。

「やつと終わったか。随分と待たされたな」

「……は……？」

そこには、水の棺桶に詰められ、無数の鉄筋にその身を貫かれた超大型レイダーを背に、絆フアミリイの家族を待つ仲間パートナーたちの姿があつた。

「この程度のレイダーが相手なら、私と優芽だけで十分ですからね。もちろん一瞬で終わらせましたよ」

「とはいえ、あたしたちじゃ拳ひとつで倒すことはできないのも事実。さすが『最強の拳』といったところですね」

「桐梨希繫が攪乱と陽動をしながら時間を稼ぎ、香坂逢依が対象の動きを封じ、大郷悠生がトドメか。理に叶った戦術だが……さすがに時間が掛かりすぎるな」

不敵に笑む総交と、その後ろに控える優芽と覚悟。そんな三人に、絆フアミリイの家族は初めて

戦慄しながら、それでも構える。

ここからは、共闘じゃない。いよいよ時が来たのだ、ファミリー絆の家族と仲間たち、それぞれの決意と誓いが交差する最終決戦の時が。

「……悠生」

「総交の相手だろ、わかってるっつーの」

「逢依……」

「はいはい、覚悟ね。了解よ」

希繫では総交の格闘技術には敵わない。だからパワーとタフネスで勝負ができる悠生を頼る。

希繫では覚悟のギア特性には敵わない。だからテクニクとタクティクスで勝負ができる逢依を頼る。

桐梨希繫は一人では戦えない。家族がいて、心強い兄や姉がいて、初めて彼は「戦う桐梨希繫」となる。

故に、和泉優芽は今、この瞬間——桐梨希繫を何にも勝る「強敵」として、何より絶対に救いたい「恩人」として、ディアドロップを構える。

「桐梨……いえ、お兄さん。あたしは、現代のあなたに憧れて、必死になってあなたの背中を追いかけて、そして……未来でこのイーリスを託されました。だけど……」

「……未来の俺は、君じゃ救えないほど『なにか』に絶望してしまった……か？」

言葉に詰まる優芽の表情を見かねて、希繫の方から思い当たる節を探し当てる。

希繫自身もずっと考えていたことだった。なぜ、自分を慕ってくれていると言って憚らない優芽が、あんなにも悲しそうに戦いを望み、戦いに臨むのか。

考えてみれば、難しいことではなかった。優芽が希繫を「救う」と言うからには、希繫を傷付けるような出来事が、未来で起きたはずなのだ。

しかし、ただ傷付けられるだけの出来事なら、過去にまで遡る必要はない。つまり、本当に文字通り「守る」のではなく「救う」必要がある出来事が、起きてしまったのだ。

そして、優芽・覚悟・総交たち『仲間たち』^{パートナー}が未来で尽力してなお「救えない」ことを過去に来てどうかしようとするなら、それは物理的な被害ではない。

彼ら三人がかりで希繫を救う。そしてそれは未来ではできないことであり、なおかつ『エクレール』を破壊して解決を図ることができること——即ち、それは。

「はい……。あたしの知る未来では、レイドリベンジャーズと世界中に散らばった絆の家族『ファミリー』たちの尽力によって、全てのレイダーを殲滅することに成功しました」

「やっぱりか……。そしてレイダーという「共通の敵」を失った世界は、今度は強い力を持つ『レイドリベンジャーズ』や『絆の家族』^{ファミリー}に牙を剥いた……つてところか？」

優芽が追うように言葉を連ねれば、その言葉から希繫はさらに真実への道を繋げていく。

おそらく、既に希繫だけでなく逢依も、同じ真実へと到達しているのだろう。故に、覚悟と総交も優芽を止めようとはしない。

「戦力では明らかに装着者や身体能力に優れるレイドリベンジャーズと絆ファミリーの家族たちに分がありました。ですが……結果はそれらの惨敗。なぜかわかりますか？」

「……いや。いくらレイドリベンジャーズが対レイダー以外の戦いにおいては『専守防衛』のスタンスをとっているとはいえ、さすがにそこまでされたら自己防衛くらいは……」

「簡単ですよ。人質に取られたんです。レイドリベンジャーズと絆ファミリーの家族を結ぶ、最も強固な『キズナ』となる人物が」

まさか、と希繫は優芽が次ぐ言葉を待つ。

「そう、それがあなたです。『最弱の』レイドリベンジャーズにして、『最古参の』絆ファミリーの家族であるあなたが人質に取られたことで、両者はあなたを見捨てられず次々と斃れていった……」

「……なるほど。それで俺は世界に絶望した、つてことか。確かに、聞いただけで許せないよ。腹が立つ。世界よりも……ただ何もできず世界に利用された俺自身が、許せない

「い」

「だからあたしは、そんな悲劇的な未来を変えるためにも……あなたを倒す！ あなたを倒して、エクレールを破壊させてもらいます！」

エクレールを破壊されれば、希繫はレイドリベンジャーズとしての力を失う。そして希繫がレイドリベンジャーズを除籍されることになれば、小転こころが黙つてはいないだろう。

希繫だけに限らず、大好きな絆フアミリイの家族を危険な戦いに送り出すことから、あまりレイドリベンジャーズに良い印象を持っていない小転のことだ。希繫が抜ければ逢依と悠生も脱退させられる。

そうなれば、少なくともレイドリベンジャーズと絆の家族のキズナは断たれる。つまり、もしも未来で世界がレイドリベンジャーズの敵になっても、絆フアミリイの家族を守ることはできる。

桐梨希繫を救うことで、全ての絆フアミリイの家族を救う。それが優芽たち仲間パートナーたちたちの、最大にして唯一無二の目的だったのだ。

「今の優芽の話聞いてもまだ、エクレールを守るために戦うつもりか。お前のその中途半端な優しさ……甘さのせいで、また多くの家族を喪失うしなうとわかってる」

「戦うさ。確かに未来での出来事は、どう考えても俺の甘さと弱さが招いたことだ。け

ど、エクレールだって家族だ！ 機械だとか人間だとか関係ない！ 喪失うしないたくない大事だいじな存在なんだ！」

「そのために、世界中のレイドリベンジャーズや絆フアミリーの家族を巻き込むことになってもか……！」

「そんな未来なんて、俺が……俺たちが変えてやる！」

和泉優芽―セブン・フォー・ワン―

希繫きづなと優芽ゆめが交戦を開始すると同時に、他の四人の姿が消えた。おそらく覚悟さとのユナイトギア、『ヴオイド』のギア特性によつて転移させられたのだろう。

フアミリイの絆あひの家族の古参組である希繫・逢依あい・悠生ゆうきが最も得意とする『連携コンネクション戦術タクティクス』が、たった一手で封じられた。

おそらく、仲間パートナたちは最終決戦に向けて、予想できる可能性を全て出し切つて、今こうして希繫たちと対峙しているはず。だからこそ、希繫たちも戦力の分断には驚かなかつた。

いや、そもそも希繫たちにとつても、この戦力の分断は悪いばかりではなかつた。

確かに彼らの最も得意とするスタイルは3人揃つての連携コンネクション戦術だが、今回は元より『3対3』ではなく、『1対1』×3を望んでいたからだ。

なぜなら今回の事件は元々、希繫と優芽の出逢いから始まり、この両者の和解と決着を目的として、逢依と悠生は協力しているのだ。

だからこそ、今回は『絆フアミリイの家族vs仲間パートナたち』ではなく、『希繫vs優芽』という状況を守ることが、逢依と悠生の使命であり、そのために覚悟そつまと総交そうまを引きはがせるのなら、

この状況はむしろ好都合だったのだ。

「てえあッ！」

「くっ……！　前よりも一撃が重くなってる……ッ！」

しかし、だとしても希繫にとって優芽が容易くいなせる相手でないことには変わりない。

確かに、希繫は既に優芽の限界値に『適応』している。それはつまり、彼女の限界に對抗できるレベルの戦力を、既に希繫は有しているという意味ではある。

だがそれはあくまでも希繫がそれほどの戦力に『対応できる』という意味であって、自身の基礎スペックは何も変わってはいないのだ。

そして、それこそが桐梨希繫の『適応』最大の欠点であることを、優芽は知っていた。「あなたの『適応』が対処できる『限界』は、相手の総合的な実力に対するものではありません。あくまで『適応』発動時に相手がとっている戦術スタイルの限界に迫るだけのものです」「だったら、なんだってんだ……」

「いくらあなたがあたしの限界に『適応』したとしても、対処法がないわけではないという話ですよ。こんな風に……ねっ！」

ディアドロップによる横一闪を、空中で大きく後転しながら跳び退いた希繫に対し、優芽はディアドロップの形状を大剣から連結鞭へと変化させて彼の脚を捕える。

そして捕えた足を強引に引き上げ、跳び退いた方向とは真逆へ引つ張ったと思うと、その勢いのまま希繫を地面に叩きつけた。大剣からの急激な武器変更だけでなく、それを即座に使いこなす優芽の技量に、希繫は今再び戦慄する。

これが、たとえ希繫が優芽にいくら『適応』しても意味を為さない理由。ひとつの戦術スタイルの限界にしか『適応』できない希繫は、複数の戦術スタイルを持つ相手にはとことん弱い。

特に優芽のような「限界を出し惜しみするタイプ」の相手は、強引に限界を引き出さない限り、それに適応できない。つまり、戦術スタイルを別のものにシフトされた直後は、基礎スペックだけで戦わなければならないのだ。

「ク……『瞬間移行』だどツ!? 相手や状況に合わせて、戦術や戦略だけでなく武器までシフトするなんて……!」

「未来の香坂逢依から直々に教えてもらった、あたしの切り札です。さあ、あたしの真骨頂……変幻自在の『七彩法威』にどこまで適応できるか、見せてもらいます!」

細かい水の輪が連なって出来ている連結鞭は、優芽の任意でその輪の数を調整可能だ。

大気中の水分を凝縮して輪を増やせばリーチが伸び、輪を散らして大気に逃がせばリーチは狭まるが取り回しが楽になる。

つまり、大気が適度に湿っている限り、このフィールドにおける彼女の攻撃範囲は無

限に広がるということだ。

いくら希繫の攻撃範囲がそのスピードによって無制限化されているとはいっても、攻撃のためには接近しなければならぬ。

おそらく、優芽の攻撃をかわすことは出来るだろう。しかし、希繫の攻撃もまた優芽には届かないはず。この状況を打破するためには、単なる正面突破では不可能だ。

それどころか、さっきの連結鞭による不意打ちによって、だいぶ強く全身を地面に打ち付けられてしまった。元々あまり耐久力のない希繫にとつては、かなりの大ダメージが入ってしまっている。

「こないなら……こちらから行きますッ！」

「体力はまだまだあるが……マジで全身が痛いな……い！」

大振りに振った連結鞭は、希繫までの8メートルを少し越えて10メートル程度。この程度なら回避は可能だと判断しかけて、希繫はすぐにそれをやめた。

優芽は希繫の強み——圧倒的な『スピード』にとつて、中距離武器というものはあまり意味がないことを知っている。なぜなら、中距離・遠距離からの攻撃は『攻撃地点』から『目標地点』までの到達にラグがあるからだ。

ガトリング砲くらい高速かつ連続で攻撃するものならまだしも、希繫は通常時ですら音速機動が可能だ。連結鞭などという、遅くてただリーチが長いだけの武器を、なぜ選

んだのか。

それに気づいた瞬間、希繫は地を蹴り前へと駆け出した。

「……で接近……ッ!？」

そして連結鞭が伸びきった瞬間を狙って、連結鞭の中心、5メートル地点に腕を引っ掛ける。これによって、連結鞭が勢いのまま角度をつけて優芽へと接近する。

とはいえ、優芽もこの程度の状況は『反撃』とすら受け取っていない。単に攻撃が失敗した、という程度の認識だろう。希繫とて、今のは咄嗟の回避ついでのもので、攻撃のために連結鞭を優芽に向けたつもりはない。

「危ないところだったぜ。もう少し気付くのが遅れていたら、今度こそノックアウトされてたかもな」

「……やはりバレてしまいますか。まあ、イーリスのギア特性と連結鞭の利点を正しく理解すれば、この程度のことは気付かれて当然でもありますが……」

イーリスのギア特性である『大気中の水分を操作すること』と、連結鞭の利点である『多重連結による多角偏向』を理解することで導き出される、優芽の狙い。

「そう、この連結鞭はあたしの任意でその軌道を偏向できる武器。その名も『D D—フ
レキシブルライン』です」
デイトロップ

「やはり、軌道偏向能力を持っていたか……!」

再び構え直す希繫に対して、優芽は連結鞭となったディアドロップを引き戻すと、今度は水のスフィアを作り出し、希繫へと投げつける。

おそらく、ただの水の球ではないのだろう。だから希繫は考える。自分が優芽の立場なら、あの水のスフィアにどんな意味を含ませるか。

自分が苦手とすることは……ありすぎて一つには絞り切れないが、それでも『希繫が苦手なこと』から『優芽にできる』だけを引き出せば、答えは絞られる。

「チツ……」

だけど、いくら絞っても答えが見つからない。だったら、敢えて一度だけ相手の攻撃を受けてみるのも策のひとつ。

この策が『奇策』となるか『愚策』となるかは、結果だけが知っている。

「……かかりましたね」

「——！ マズいッ!!」

にやり、と不敵に笑む優芽の表情を見て、希繫は即座に防御態勢から回避行動にシフトする。

しかし、一度止めた足を再び動かすためには、走り続けた状態から方向転換する以上の脚力パワーを必要とする。ただ避けようとするだけでは、避けきれない。

だから、希繫は——。

「横ではなく、後ろに……!!」

横にかわそうとすれば、右脚と左足に込める力のバランスを調整しながら地面を蹴らなければならぬ。そんな微調整は、今このタイミングでは不可能だ。

だから希繫は、右足にだけ力を込めて、少しずつ水のスフィアの軌道からずれるように、左後方へと跳び退いた。しかし、回避し終えたと思つて視線を優芽に戻したのがいけなかった。

「んな、あ……ッ!?!」

背後からの強烈な衝撃。身体に衝撃が触れた瞬間、咄嗟に威力を殺してみせた希繫だが、それでも今の一撃はまともに入った。

さっきの水のスフィア。希繫はあれを手榴弾のようにして水を暴発させたのだと思つていた。だが、吹き飛ばされる瞬間に彼の視界へ入り込んできた光景は、そんな予想をはるかに超えてきた。

「優芽が、もう一人……ッ!?!」

いつだかクリムゾンインパクトをかわした『霧の幻影』ではなく、確かな質量を持つた水の分身。

そう、あの水のスフィアは、その核——あのスフィアを覆うように大気中の水分を収束させ、分身として遠隔操作することが、優芽の狙い。

「まだまだ行きますよ！」

さらにばら撒かれる5つの水のスファイア。

連結鞭を持つ本体と、武器を持たない6つの分身。合わせて七人の『和泉優芽』が、希繫を取り囲むように出現した。

想い—アンリミテッド—

戦場における兵の数は、多ければ多いほど、それだけで脅威となる。特に、味方の兵数の倍を超えられると、まず勝ち目はなくなる。

なぜ、1:2という比率がそれほどまでに絶対的な意味を持つのか。それは、臨機応変さを求められる戦場において、攻撃と防御という『明確な役割分担』ができるからだ。確かに、スピード型の希繫きづなにとつて、対複数戦という状況は、対処できないほど特異な状況ではない。しかし、決して得意な状況というわけでもない。

スピードに秀でているタイプのレイドリベンジャーズは、確かにその圧倒的な速力をういて複数の相手をほぼ同時に相手取ることが可能ではある。

しかし、それは同時に複数の相手に対して常に集中力を割き続けなければならないという意味でもあり、機敏な動きや機転の利く相手には、あまり有効な手段とは言えないのだ。

でも、それでも、それが愚策でしかないとわかっているとしても、希繫はその脚に力を入れた。6体もの分身を操る以上、集中力を割き続けなければならないのは優芽も同じ。

「いくぞ、エクレールッ！」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
「そう来ると思つてました！ イーリスッ！ 彼に鎧をッ！」

『了解。アクアコートを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始………充填完了』
しかし、自分の弱点を理解しているのは優芽も同じ。集中力を6つの分身たちに割りき
続けなければならぬというデメリットは、希繫なら必ず気付くはずだとわかつてい
た。

だがそれゆえに、希繫がどんな手札を切るのかも予測できた。6つ全てを同時に操る
なんて無理だ。だから希繫のスピードは恐ろしかった。

けれど——希繫の恐ろしさ、底知れなさは、優芽の予測できる範疇をさらに一歩分、逸
していた。

「させてくれねえだろうなあッ！」

スピードに特化した希繫に対して、優芽が導き出した1つめの戦略はこうだ。

まずディアドロップの特性を生かし、複数の形状を『ディアドロップ』ひとつで臨機
応変に変化させられることを希繫に教え、彼の攻め手を遅らせる。

さらに『セブン・フォー・ワン』による兵力の数によつて、希繫をスピード勝負に引
きずり出す。ここまでは、優芽の狙い通りだった。

そして、その後——スピード勝負に乗ろうとアクセルアクションを発動しようとする

瞬間、アクアコートによってエクレールごと希繋の身体を覆ってしまえば、そこで勝負がつく。

そんな甘い考えは、一瞬でかき消された。

「なあ……ッ!？」

いくら鎧のように装着されるとはいつても、自らの身を守るために纏うのとは違い、意思を持つて動く相手に装着させるのは、はちやめちやに動き回る子供に服を着せようとするように難しい。

だから、せめて脚を覆うことさえできれば、と思つていた節もあった。実際、それだけでも希繋の機動力を削ぐという目的はある程度果たすことができる。だが、甘かつた。

彼はアクアコートが脚を覆い始めた一瞬を狙つて、それを振り払うように脚を振るうと、その水を優芽に向けて放ち、アクアコートから逃れつつ反撃の狼煙を上げたのだ。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

アクセルアクションによつて音速の数百倍のスピードを出すことができる今の希繋に、優芽は明確な防御手段を持たない。理由は簡単、そのスピードを捉えられるほどの動体視力がないからだ。

見えない攻撃を防御する手段がないわけではない。全方位に対して水のバリアを張

れば、防御手段としては愚策ではない。だがそれは、同時に自分の行動範囲をそのバリア内に留めてしまうという意味でもある。

スピードタイプの相手に足を止めるという選択は、あまりにも愚かだ。ただでさえ、そのスピードを突進力としてパワーに変換できる以上、足を止めればそのスピードを活かした連続攻撃も受けるだろう。

「ここにきて、一気にペースを持つていかれるとは……！　けれど、手段はまだありませんっ！　イーリスッ!!」

『了解。セブンスサンクチュアリを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』
コンプリート
………充填完了』

優芽の翼——イーリスが虹色の輝きを放った瞬間から、彼女を軸として半径200メートル圏内が虹色に染め上げられた。

そして、同時に5体目、6体目の分身が撃破された直後だった。加速しながら本体である優芽に接近していた希繋のスピードが急激に減速し、優芽の視界にはつきりと映った。

『デイトロップ
D—レイジングファイト』！

セブンスサンクチュアリ
七色の聖域によって、大気中の水分を増幅され、加速し衣服に吸収するほどに体が重くなつていった希繋のスピードは、既にアクセルアクション適用下ですら通常時以下。

このままでは、接近のスピードも相まって、一撃でももらった瞬間に沈む。回避できるルートを探すが、そんなものは既にある。

さっきのスフィアを咄嗟に回避できたのは、あれがスフィアの進行方向と同じ後方への回避だったからだ。

優芽へと向かって前進している今、迎撃をかわすにはあまりにも接近しすぎた。だからこそ希繫は、回避を諦めるしかなかった。

「エクレールッ！」

『了解。肉体を電気に変換します』

バチン、という弾けるような音を伴って、希繫の身体が一瞬だけ真っ赤に光る。そして直後、拳ごと優芽の身体を『通過して』いく。

そう、彼は回避が不可能と悟るや否や、自らを電気に換えることで、優芽の攻撃ごと彼女の身体を通り抜け、そのまま背後に回ることを選んだのである。

それだけではない。電気に直撃した優芽の身体は、僅か数秒ではあるものの麻痺状態に陥り、全ての回避行動がとれなくなっていた。

「ぜえあッ！」

「ぐ、う……ッ！」

背後から脇腹を狙った回し蹴りをモロに受けた優芽は、水の鎧——アクアコート

纏っていてもなお、その衝撃に耐え切れず、苦しい悲鳴を伴いながら10メートルほど吹き飛ばされる。

それでも、優芽は吹き飛ばされる最中にも希繫から目をそらさなかった。彼のスピードを前にして、移動直前の動作を見損なえば、もう次の動きはまったく予想がつかなくなる。

だが、なぜか彼はその場から動こうとはしない。

「……………」

『ディアマスター?』

おそらく、それは何かを狙った上での、優芽の攻撃を誘う罠ではないのだろう。事実、エクレールですら、希繫のその行動には理解がいつてなかった。

「……………」

『…………マスター?』

そして同じように、立ち上がった優芽もまた、俯きながらその場を動こうとはしなかった。

「…………優芽」

「お兄さん……………」

希繫と優芽。二人は視線を合わせるわけでもなく互いを呼び合うと、ゆっくりと顔を

上げて相手の目を見合った。

赤と虹。ふたつの視線がぶつかり合うと、両者はどちらからともなく一粒の涙をこぼし、叫ぶ。

「あたし、この時代でお兄さんに助けてもらったこと、すつごく感謝してます。お兄さんがいたから、今のあたしがいる。お兄さんに助けられて、憧れて、好きになったから、あたしは今日までいろんなことを頑張れた……。お兄さんがいなければ、ありえなかった毎日でした」

「……俺は、もつと君のことを知りたかった。こんな風なんかじゃなく、もつと普通に再会して、いっぱい喋って……。たまにバカやって君に叱られたり、いろんなところへ連れて行って、たくさんこの街を見せてやりたかった……。！」

二人は、溜め込んでいた全てを吐き出すように言葉を紡ぎ始めた。

本当ならきつと、もつとずっと前から言いたかったのだろう。しかし、二人にはそれ以上にやらなきゃいけないこと、ぶつからなければならぬことが多かった。

だからこそ、最終決戦となったこの場で、おそらく最後になるだろう衝突の前に、言いたかったことを全て吐き出すことにしたのだろう。

「お兄さんは、今までもこれからも、ずっとあたしのヒーローです。たとえあなたが、レイドリベンジャーズでなくなっても、あたしはあなたのことが大好きです。あな

たに……嫌われてしまつても」

「だから俺はもう君と「こんな出会い方」をしたくない。もつと普通に、笑いながら話し合える日々を作りたい。悩んだり迷つたりしたけど……その悩みと迷いの中で見つけた答えがこれだ！」

希繋の脚と優芽の翼が、示し合わせる間もなく同時に輝き始めた。

「イーリスッ!!」

「エクレールッ!!」

——リミットブレイク——

『了解。第七号ユナイトギア・イーリス、リミットブレイクします』

『了解。第四号ユナイトギア・エクレール、リミットブレイクします』

そう——今の自分では抜け出せない現実よわさを越えるため、彼らは自らの限界を突破する。

劫火—シャウト—

希^{きづな}繁と優^{ゆめ}芽が激戦を繰り広げる中、覚^{さと}悟のヴォイドによって雑木林の中へと放り込まれた悠^{ゆう}生と総^{そう}交は、互いの持つ『力』と『技』をぶつけ合い、周囲の地形すら変えかねないほどの『激しさ』を見せていた。

「もつとだ、もつと熱くなれるだろ！ スヴィルカーニー！」

『了解。温度あるものの熱量を操作します』

右腕を覆う橙色の鉄腕『スヴィルカーニー』に炎を纏わせながら一気に総交へと攻め立てる悠生。

だが、彼はその強力なパワーを、ほとんど右腕のみに集中させているため、その動きは単調になりやすく、総交には容易くいなされてしまう。

が、だからといって総交が優勢かといえば、そうとも言い難い。悠生の攻撃は全て大振りかつ大胆でわかりやすい。しかし、それだけに一撃の威力と範囲が尋常ではないのだ。

事実、総交が攻撃をかわす度に、地面にはクレーターが、周囲の木々はへし折られ、中にはスヴィルカーニーの炎が燃え移っているところすらある。

たった一撃が地形を変動させるほどの攻撃ばかり。それを何度も何度も向けられれば、当然ながら足場も悪くなっていき、回避も困難になる。

「貴様……もう少し周囲の被害を顧みながら戦うことはできないのかッ！」

「ハッ！ オレを誰だと思ってるやがる！ オレは『世界最強』の大郷悠生だ！ 絶対的な破壊と暴虐を見せつけ、圧倒的な力で目の前の敵を粉碎する！ それでこそ『最強』つてもんだろうが！ 地球のご機嫌取って勝負に勝てるかッ！」

雑木林を焦土と変え、地面を砕き大気を震わせながら暴れまわる悠生は、まさしく暴君であり、絶対王者であった。

そんな彼を前にしながら、総交もまた逃げることなくぶつかり合っていた。パワーでは間違いなく勝てない。だからこそ、彼は格闘という『技術』を極めた。

「どうした総交、技を使わねーのか？」

「お前みたいな大火力型を相手にしてエモーショナルエネルギーのチャージを待っていたら死ぬに決まっているだろう」

ユニトギアを用いた技を発動するためには、基本的な身体技能のほか、それらの威力をブーストするための感情エネルギーが必要になる。

レイダーと戦う際にはもちろんのこと、ユニトギア装着者同士の戦いにおいても、純粋な威力の底上げのために、エモーショナルエネルギーのチャージは欠かせないのだ。

しかし、そのためには長くて7秒〜10秒程度のチャージタイムが必要になる。一瞬の選択や躊躇が命取りとなる戦闘の場において、その間はあまりにも大きな隙となる。

希繫のように常に逃げ回りながらチャージする者、悠生のように相手の攻撃をもともしない肉体でチャージまで耐え切る者、やや特殊な例だが優芽のようにそもそもチャージが短い者などがある中、総交は極めて平凡だった。

相手の攻撃を読み、受け流しながらチャージまでやり過ごす。特にこれといって尖った長所のない者が、一番最初に思いつき、実行し、それに慣れるという、つまりは基本となるスタイルだ。

だが、この基本型の最大の弱みとなるのが、悠生のような大火力型を相手にした場合である。相手の攻撃を読むことには成功するが、それを受け流せないのだ。理由は言うまでもなく、純粋なパワー差である。

「スヴィルカーニイ！ でっけーのブチかますぞッ！」

『了解。オーヴァーデストラクトを使用します。エモーショナルエナジー、チャージ充填開始』

故に、総交が攻撃に転じられるのは常にこの瞬間のみ。悠生がエモーショナルエナジーをチャージするために見せる僅かな隙だけを狙って、渾身の一撃を叩き込む。

だが、相手は曲がりなりにも「世界最強」と名高い大郷悠生。彼の恐ろしさは自称「星すら砕く」ほどのパワーだけではなく、それほどの出力に耐え切るだけの基礎、即ち肉

体の頑強さにもあった。

未来での話になるが、優芽が悠生と実戦訓練をした際には、彼女が実銃で放った弾丸を、なんの細工もない純粋に頑丈なだけの筋肉と表皮で弾いたほどだ。以来、優芽は彼のことを人間扱いしていない。

論点がずれたが、つまりは悠生にまともなダメージを与えられるだけの手段を、総交は持っていないかった。

もつと言うのなら、そもそもダメージどころの話ではなく、悠生の攻撃をいなし続けている現状を維持するだけでも、かなりの労力を割いていた。

単純な火力勝負ならレインボーストリームという大技を有する優芽の方が、悠生の苦手とする絡め手についてはヴォイドという特殊なギア特性を有する覚悟の方が間違いない適任であった。

しかし、それでも悠生の相手に選ばれたのは総交だった。二人曰く、「あの人間もどきに純粋な格闘戦でタイムン張れるのはあなたしかいません」とのことだ。つまり悠生という力に対して、技で対抗しろということである。ちよつとした死刑宣告だった。

「このフィールドでオーヴァーデストラクトだと……!? 周囲一帯を焼け野原にする気かッ！」

知ったこっちゃない、という様子で悠生のボディに、総交の拳がまともに入る。しか

し、悠生はダメージどころか顔を顰める様子もなく、むしろ都合よく向こうから寄ってきたと言わんばかりに右の拳を振り下ろす。

「どおらッ！」

「くっ……！」

間一髪で逃れることに成功した総交だが、悠生の拳はただ避けただけでは意味がない。振り下ろされた一撃は大地を抉り、その衝撃の余波が総交を吹き飛ばす。

なんとか受け身をとって悠生の方へと視線を戻す。が……まずい、と思つた時には既に遅かつた。

『充填完了』
コンプリート

鼓膜を震わす無機質な声は、一撃必殺のイメージを総交の脳へと伝達する。

拳自体は回避できる。だが衝撃の余波まで考えれば、回避はほとんど不可能に等しい。まして防御などすれば生存は絶望的。彼の拳は、防御の上からの超破壊を最も得意とするからだ。

「オーヴァー……ッ！」

「くっ……ディープブルーッ!!」

だから、総交は考えられる最善の手段——今ある手札の内、切り札となりうるひとつを切つた。

「デストラクトオオオッ！」

迫る劫火を纏う拳。そしてそれを迎えるのは――。

「――ッ！」

深海を映したかのような、深く暗い群青の衣。^{マント}

「オレのオーヴァーデストラクトを、こんな布切れ一枚で……ッ?！」

「よくやったディープブルー。ギリギリだったがなッ！」

「チツ……!　それがオマエのギア……ディープブルーとやらのギア特性かッ！」

そう、これこそが数あるユナイトギアの中でも屈指の防御能力を持つディープブルーのギア特性――「ゼロ変換」だ。

速度・衝撃・熱量を含む、マントに触れたあらゆるエネルギー値を「ゼロ」に変換するという、物理的な攻撃に対してはおそらく最強クラスの防御性能である。

スヴィルカーニイの炎と最強のパワーを用いた拳によって放たれる悠生のオーヴァーデストラクトは、このギア特性によって完全に無力化されたと言っても問題ではあるまい。

「ギア特性を発動してなおマントを使ったってこたあ、そのギア特性が発揮されるのはマントだけか。なら……防ぐ暇もねーくらいに攻め続けりゃあいんだよなあッ！」

「貴様の脳みそに「攻撃」以外の選択肢は無いのか！」

「んなモンあるわけねーだろー！」

しかし、悠生のとった行動は間違えというわけでもなかった。ディープブルーのギア特性は、悠生の言う通り『マントに触れたもの』にのみ適応される。

即ち、多角度からの攻撃を防ぐことはできず、また範囲が広い広域殲滅攻撃にも弱い。多角度からの攻撃という点は、おそらく悠生の苦手とする類のものである、ここで脅威となるのは広域殲滅型の攻撃。

悠生の持つスヴィルカーニーが、特に得意とするやり方だ。

「灼き尽くすぞ！ スヴィルカーニー！」

『了解。劫火拳乱ゴウカケンランを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

チャージの開始と同時に、悠生の右腕を覆っていた炎が突如としてその勢いを増す。

これを放置するのは拙いと判断した総交はすぐさま悠生に接近し、彼のボディに跳び蹴りを叩き込む。

しかし、やはりダメージらしいダメージは入っていないのか、悠生はスヴィルカーニーを纏わない左腕で突き出された総交の足を掴み、強引に放り投げる。

勢いよく投げられた総交の身体は、3本ほどの木々をへし折りながら地面を転がり、背中に伝わる激痛と肺を強打されたことによる呼吸困難を気合だけで耐えながら、即座に立ち上がる。

「チツ……！　少し酷使するが、文句を言うなよディープブルー」

『了解。我慢します』

「いい返事だ」

再び悠生に接近する総交。希繫の電気や悠生の熱のように、シンプルで汎用性に富んだギア特性を持たない総交は、攻撃においてはほぼ身体能力のみに頼らざるを得ない。

だが相手は悠生。隙はそれなりにあるし、攻撃を当てることは不可能ではない。しかし正攻法では攻撃を当てることはできても、ダメージを与えることはできない。

既に周囲の木々よりも高く立ち上っている右腕の火柱は、チャージが終わっていない今ですら、近づくだけで火傷をしそうな熱量を放っている。

しかし、悠生はその右腕を攻撃に使うことなく、さらには総交の攻撃を防ぐためにすら使おうとはしなかった。

おそらく、ディープブルーの「ゼロ変換」による攻撃無効をさせないためだろう。実際、総交は少しでも悠生が右腕を使おうとすると、マントを盾にする動作を何度か見せていた。

「チツ……！　劫火拳乱のチャージはまだかスヴィルカーニー！」

『まだです』

幸いというべきか、劫火拳乱はその出力に比例してチャージが遅い。既に充填開始か

ら14秒が経過しているのに、スヴィルカーニイの返事は「まだ」だと言う。

それだけに、放たれた際の火力は想像もしたくないほどのものになっているだろうが、今の総交にそれを予想できるほどの余裕はない。

悠生が向ける左の拳をダッキングでかわしつつ、前のめりになった勢いのまま悠生のボディを殴りつける。このままでは、さっきまでと同じくダメージにはなるまい。

しかし、今度の拳は違った。拳が悠生の胴に触れた瞬間、腕部のブースターが点火し、その勢いのまま悠生を「押し飛ばす」ことに成功した。

確かに、ダメージを与えようとするのなら「殴った」方がいいだろう。だが悠生のような防御の堅い相手に、それは無意味だ。だからこそ、体勢を崩させるために「押す」ことを選んだ。

「ぐ……っ！…この程度……っ！」

「ああ、今のが毛ほどのダメージにもなっていないのは承知の上ッ！　だが、これならどうだッ!!」

仰向けに倒れた悠生に覆い被さり、固く握られた拳を頬に打ち付ける総交。

いくら悠生が強靱な肉体を持っていても、それは「鍛えられる部位」に限られる。顔面の筋肉はどう鍛えても強くはならない。

しかしただの一発程度では、悠生はダメージを受けつつも耐えきってしまうだろう。

故に、こうして何度も打ち続けられるように体勢を崩させた。

殴りつけることによるダメージではなく、脳を揺らし続けることで、脳震盪を引き起こし戦闘不能に追い込むために。

「……っんの、オオラアッ！」

「なっ………！ どこまでも常識外れな………！」

だが、その試みも悠生のパワーの前に崩れ去る。上体起こしの勢いだけで総交ごと身体を起こした悠生は、跳び退いた総交を見て口角を上げた。

なぜなら——ゼロ距離では「それ」がでしなかつたから。

「あー……マジで脳みそ揺れたぜ畜生が。人の顔面を遠慮もなしにぶん殴りやがって……覚悟はできてんだろうなあッ！」

『充填完了』

轟々と、天を衝くほどに燃え盛っていた右腕の火柱が、突如として消える。——いや、あの膨大な熱量の炎が、悠生の拳に全て集約されたのだろう。

「劫火——」

「くっ………ディープブルーー！ 防ぎ切るぞッ！」

『可能な限り、力を尽くします』

弓を引くように振りかぶった拳は、もはや止まらない。超破壊の拳ではなく、超灼熱

の拳。ただの一撃で全てを焼き尽くす、暴虐の炎。
それを彼は、躊躇なく突き出した。

「——拳乱ッ！」

勇気―パワー―

煌々と燃え盛る橙の炎。大地を灼き尽くし、天を衝くほどに高く燃え上がる火柱。悠生の放った一撃は、疑いようもなく一撃必殺。マントひとつで防ぎ切れるような規模ではなく、その劫火の前には消し炭すら残らない。

――はずであつた。

「さすがに、今のは本気で焦つたぞ……」

「そのマント、サイズ調整できるのかよ……ッ！」

総交そうまの持つ外套型アームズ『プロテクトヴェール』は、元々の衝撃耐性に加え、ディープブルーのギア特性『ゼロ変換』によって、極めて高い防御能力を持つ。

しかし、マントという形状性質上、基本的に肩から下を防ぐことしかできず、少し持ち上げることで頭部への攻撃が防げても、今度は足元への攻撃が防げなくなる。

故に、全身を覆い尽くすような広範囲への攻撃は、防ぎきれないものだと、悠生は判断していた。

だが、覚悟の持つアームズ『フレキシブルトリガー』の弾丸がギア特性とは関係なく偏向可能であるように、いくつかのアームズには、アームズ自体が持つ特殊性があるの

だ。

総交を守るマントの場合、エモーショナルエナジーを注ぎ込むことでマントのサイズを拡大し、防御範囲を広げることができた。これを、悠生は計算に入れていなかった。

攻撃と力に特化した悠生、防御と技に特化した総交。対極に位置する両者の状況は拮抗しているものの、その実力はというと、こちらは決して狭まっていない。

そもそも、この戦いがこれほどまでに長引いている原因は、ひとえに『相性の良し悪し』という一点に限る。

攻撃と力、圧倒的なパワーと火力によつて攻め続けることで勝利へ繋ぐ悠生のスタイルは、あらゆるエネルギー値をゼロに変換するという防御特化のギア特性とかなり相性が悪い。

高い攻撃力と火力というものは、すなわち高い『エネルギー値』をそのままぶつけるという意味だからだ。

「範囲攻撃もダメ。一点突破もダメ。となると……もう形振り構つてる暇はねーな。悪いが総交、もう命乞いはしてくれんなよ。さすがに、もう加減ができねーからな」

「まるで今までは手加減していたかのような口ぶりだな」

「してたからな」

あの圧倒的な破壊力を誇るオーヴァーデストラクトも、あの絶対的な火力を誇る劫火

拳乱も、悠生にとっては大したものではない。

彼にとって、強さとは力。力とはパワー。そして、そのパワーを十全に活かすために必要なものとは、型に嵌まりきった「技」ではなく、自由にその力を揮うことのできるデタラメスタイルなのだ。

だからこそ、悠生は言う。「もう命乞いはするな」と。既に、オーヴァーデストラクトと劫火拳乱が総交に通用しないことはわかった。だったら、悠生もその全力を出し切るしかない。

「スヴィルカーニー！ 火をよこせ！」

『了解。温度あるものの熱量を操作します』

悠生の右拳から放たれる無数の火球をかわしながらも、総交は反撃の機会を窺い続けた。

総交にとって、悠生は間違いなく強敵だ。だからこそ、自分は悠生の一挙一動に対して最大限の注意を払っている。

しかし、悠生にとっての総交は、そうではない。力を加減していても、自分が負けるビジョンは存在しないと豪語するに憚らない。

そこに、油断という「弱み」があると総交は判断していた。

（大郷悠生の基本スタイルは、最強のパワーと火力を持つ右の拳によるパンチが軸。だ

とすれば、パンチの威力を最大限引き出すために足はほとんど大地についているはず。キックの心配はしなくてもいい)

パンチ主体のスタイルを安定させるためには、衝撃を前に打ち込むための両足が地面についていることが前提条件となる。

ともなれば、その足をキックに転じさせることは考えられない。メインウエポンとなる右拳に最大限の注意を払いつつ、上半身の動きに集中すれば、攻撃の軌道自体は読みやすい。

悠生の拳が、愚かしいほど真つ直ぐに総交の顔面へと迫る。だが、総交とて「格闘技」の専門家だ。「格闘」という総合的な戦力では悠生に敵わなくとも、格闘に必要な「技術」については、彼よりも秀でていっていると云っている。

拳を突き出すモーションひとつでも捉えることができれば、そしてその時、五体が思うように動く状態であるのなら、かわすルートはいくらでも「見えて」くる。

(大郷悠生のパワーを「受け止める」ならマント。「かわす」なら攻撃のモーションを見極めればいい。だが、こちらの攻撃を『ダメージ』にできるだけの力が、俺にはない……)

もはや「海風総交の攻撃」によるダメージは望めそうもない。だが、いくら人間をやめていそうなほどの力を持っているとしても、大郷悠生も人間であることには違いな

ならば、つけ入る隙は必ずどこかにあるはず。元より隙の少なくない悠生が相手だ。少しずつでも確実にダメージを与えていけば、いつかはそのダメージが大きな逆転のチャンスに変わるだろう。

その一瞬のために、今は防御に徹することが最良の選択になるはずだ。そう考えていた。

だが、その予想はあまりにも甘かった。

「どらあッー！」

「な、あ……ッ!?!」

悠生の拳が大地を叩くと、僅かに数瞬のラグを伴い、地面が大きく陥没した。無論、足場を失った総交の体勢は崩れ、クレーターの中心まで転がっていく。

拙い、と思うことすら遅かった。総交が慌てて体勢を元に戻した直後、ようやく自分の視界の中に悠生がいないことに気付いた。

雑木林が原型を留めていた先程までとは違い、既に木々は焼け崩れ、大地はあちこちが陥没している。障害物の少ないこの状況下で、悠生ほどの巨体を見失うとしたら、それは――。

「上かッー！」

太陽にも似た巨大な光の玉が、天を照らした。

スヴェイルカーニイのギア特性「炎熱操作」は、既に一定量の「熱」を持っているものの熱量を増幅させ、光を纏わせることで炎として可視化させる力だ。

つまり、周囲に熱を放つものがない今、あれほどの熱量を維持できるものがあるとなれば、それは悠生以外にはありえない。それ即ち、あの光の中心部に悠生がいることの証左であった。

「あれほどの熱量と影響範囲……中心にいる大郷悠生さえも無事ではあるまい。ここで決着をつけるつもりか……！」　　ディープブルー！」

『了解。接触したエネルギーの値をゼロにします』

全身を覆うようにマントを纏った直後、光に覆われた悠生が総交へと落下。

かつて雑木林だった半径5km圏内がすべて灼熱焦土へと変わり果てていくその光景は、まさしく地獄と呼ぶに相応しいものだった。

しかし、総交とディープブルーは、そんな地獄すらも耐え抜き、逆にこの地獄を生み出した代償として、心身ともに燃え尽きた悠生がそこに立っていた。

——はずだった。

「……化け物め」

「おうとも」

マントを翻した総交が見たもの。

それは、満身創痍どころか未だ無傷で健在し、その左拳を振りかぶった悠生の姿であつた。



「……壊れてねーか、スヴィルカーニイ」

総交を撃破した悠生は、未だ燃え盛る炎たちを治めながら、スヴィルカーニイに問いかけた。

戦いの終盤で見せた、太陽にも似た光の玉。あれは、スヴィルカーニイのギア特性である「熱量調整」をフル稼働したことによる、超高熱光球。

普段、相手を殺さないために「低火力」に設定し、なおかつ「技」という手枷足枷によつて「低威力」に抑えた悠生が、それらを取っ払うことによつて発揮する真の力がそれだ。

それだけに、スヴィルカーニイへの負担は少なくないものだったが、スヴィルカーニイは短く答えた。

『問題ありません。それよりも急ぎましよう。フレンドたちが、まだ戦っています』

そうだ、総交を倒したとしても、未だ希繫きづなと優芽ゆめの戦いは続いている。彼らの戦いの

結末を見届けるため、悠生は再び足を前へと歩み出した。

家族—プライド—

「ここは……廃ビル？ さっきまでの場所からそう離れてはいないみたいだけれど……」

「そうですね、ここは先程の場所から南西に400メートルほど離れた場所にある廃ビルの4階ですわ」

声を辿って視線を向ければ、フレキシブルトリガーを逢依に向けた覚悟さとりがにこやかに立っていた。

冷酷なほどに優しい微笑みを浮かべながら、覚悟は引き金を引く。しかし、銃声がビル内に響く頃には既に逢依の姿は目の前になく、覚悟はその弾丸の軌道を自らの背後へと偏向する。

すると、背後ではキンツ、という金属同士がぶつかり合う音。逢依あゐの持つマルチプルダガーが、フレキシブルトリガーの弾丸を弾いたか、あるいは切り裂いたか。

ゆっくりと振り返れば、既にそこに逢依の姿はない。しかし、それでも覚悟は焦る様子を見せない。

直後、100を超えるマルチプルダガーによる全方位からの攻撃が覚悟を襲った。し

かし、覚悟はそれすらもヴォイドの『虚空連結』によって無効化してしまう。

ただでさえ虚空と虚空を連結させることで無限に等しい範囲・軌道を持ち、フレキシブルトリガーとの併用によって攻撃そのものが多角的かつ複雑な覚悟のスタイルは、逢依にとつて極めてやりにくい相手だった。

「フレキシブルトリガーの引き金を引く」以外にまったくアクションがない……。時を凍らせて攻撃を避けても、まるで私が次に現れる位置がわかっているかのように弾丸がこちらに迫ってくる……」

もしもクリュスタルスが「認識」に特化したギアでなかったらと思うと背筋が凍る。

今、逢依が覚悟の攻撃をかわしていられるのは、クリュスタルスの基本機能である「認識領域の拡大化」と「認識情報の詳細化」をフル活用し、なおかつギア特性である「瞬間凍結」まで使っているからだ。

もしもクリュスタルスにそれらの機能がひとつでも欠けていたら、そして自分にもしこれらの情報を処理しきれだけの能力がなかったら、今頃とつくに自分は敗けているだろう。

それほどに、逢依と覚悟の戦力の差は歴然としていた。

もしも希^{きつな}繁^{ひら}ほどのスピードが自分になれば。もしも悠^{ゆう}生^{せい}ほどのパワーが自分になれば。そんな考えが逢依の脳裏を過る。

だが、ないものをねだっても意味はない。逢依にできることは、全てを認識して凍らせることだけ。あまりに少ない手札だが、今まで何度もこの手札だけで戦い^{ゲーム}を制してきたのだ。

だからこそ逢依は自分の持つ少ない手札を信じた。自分にはスピードもパワーもないが、それでもいい。数少ない手札でも、何もないわけではないのだ。

(クリュスタルスの「瞬間凍結」は温度を下げる力じゃない。あらゆるものの運動量をゼロに固定する力。時間や空間に干渉できるヴォイドとは、根源となる力の意味が異なる)

そう、クリュスタルスの瞬間凍結は、決して「あらゆるものを凍えさせる力」ではない。あらゆるものの運動量に干渉し、それをゼロにできる力。それが瞬間凍結の正体だ。

物質の三態というものがある。分子の運動量——すなわち熱によって、物質は固体・液体・気体の三つに姿を変ええる。クリュスタルスの瞬間凍結は、あらゆるものをこの「固体」という状態にできる能力に過ぎない。

時間の凍結についても同じだ。時間は常に未来へと向かって運動を続ける。クリュスタルスはその運動をゼロにすることで時間を凍らせ、固定するのだ。

しかし、ヴォイドは違う。ヴォイドは時間の流れに逆らうことなく、今ある時間と過

去・未来の時間を強引に繋ぐ。そうすることで、今あるべきではない時間から現在に対して攻撃を行える。

虚空と虚空を繋ぐヴォイドのギア特性……それは即ち、時間すらも繋ぐ力。だから「固定」された時間そのものには干渉できなくても、時間がいつ、どのタイミングで「固定」されたのかを認識できる。

タイミングさえわかかってしまえば、あとはもう脅威ではない。時間の固定から、再運動が始まるまでの僅かなタイムラグの間に、自分を覆うように「虚空」を作り出し、それをまったく別の「虚空」と繋ぐだけ。

「わたくしにとつて、脅威となるのは「予測できない攻撃」だけです。ですが、私の左目ヴォイドは時間の流れを、虚空の断片を認識する。そんなわたくしに、予測不可能などありえませんか」

「時間の流れ、虚空の断片……そんなものが見えるからなんだというの？ あなたが見えているものは曖昧な運命でしかない！ 私は、そんな曖昧でよくわからないものなんかに負けないわ！」

逢依は激情を言葉に換えた。感情の起伏がさほど激しくない逢依にとつて、ユナイトギアを起動させるほどの激情はただひとつ。幼い頃から共に在り続けた『桐梨希繫』という人物への深く大きな愛情。

彼女は、自らの内側に燃え盛る愛情によって、ユニイトギア装着者となったのだ。そして、その「愛情」という想いは、究極的なまでに自己中心的で利他的な感情だ。

自分が愛されたいから他人を愛する。他人から愛されなくても自分が満足したいから他人を愛する。愛するという行為はどこまでも自由で独善的で自己中心なのだ。逢依は信じて疑わない。

だからこそ、逢依は運命を許さない。他人から決められた行動など、認めるわけにはいかない。どこまでも自由だからこそ、どこまでも自分勝手だからこそ——香坂逢依の「愛情」はその力を発揮する。

「クリュスタルス、時間を凍らせることなく、フレキシブルトリガーの弾丸だけを凍らせることはできる?」

『不可能ではありません。しかし、そのためにはギア特性を発動する瞬間、対象である弾丸を認識しなければなりません。現状、時間を凍らせることで強引に攻撃を回避している以上、それは難しいかと思われます』

ようするに、弾丸をかわすだけでもいつぱいいつぱいなのに、弾丸を捉えて凍らせるなど今のままでは叶うべくもない、ということらしい。

時間を凍らせれば、弾丸を捉えることは可能だ。だが凍った時間の中で「運動」可能なのは、クリュスタルスを纏う逢依のみである。

それ以外のものは完全に時間によって状態を固定されている以上、紙つぺら一枚だつて貫くことはできない。いや、そればかりか、あらゆるものは固定された時間から一切「移動」も「変化」もしない。

クリュスタルスが時間を凍らせる中、逢依が覚悟に対して直接ダメージを与えようとしないのは、これが一番の理由。凍った時間の中で攻撃しても、時間が解凍された瞬間に対処されてしまうのだ。

そこまで考えて、逢依はふと「あること」に気付く。フレキシブルトリガーの弾丸は、直線軌道上でおよそ秒速600〜800メートル。音速のほしい2倍近くのスピードだ。

しかし、物体が最大速度を出せるのは直線軌道を描き続けた場合に限られる。フレキシブルトリガーの偏向射撃が「何段階まで」許されるかは別として、4段階の偏向によって弾速が3〜4分の1まで落ちていた。

おそらく、偏向の回数が多くなるほどにそのスピードは落ちるはず。実際、覚悟は1発の弾丸を何度も偏向することで逢依を追い詰めることはせず、何段階かで偏向操作をやめて次弾を発射している。

（単純にスピードが落ちること自体を拒んでいるわけではなさそうね。あれはおそらく……「偏向でできる段階数が決まってる」と考えるべきかしら。なら、逆転の隙はまだあ

るわ)

瞬間、逢依は即座に時間を——この世界を凍らせた。今、自分に迫ってくる弾丸が「何段階」かは、数えていなかったから把握できていない。だから、まずはこの弾丸を処理して「次」を睨み付ける。

弾丸の横に移動しながらマルチプルダガーの刃を弾丸の前に添え、時間を「解凍」する。直後、弾丸は鋭い刃にスライスされながら逢依の後方へと流れていった。

「無駄ですわ。たとえどれだけ弾丸を処理しても、あなたはヴォイドの「虚空」を超えられません。そろそろ、諦めてくださいな」

「諦める……？ あら、聡明なあなたらしくもないセリフね。それとも忘れたのかしら？ 私たち『絆の家族』が最も嫌いな言葉が、あなたの言う「それ」だということを」
絆の家族は、その名に相応しくほとんどのメンバーが「血のつながらない他人」だ。では、その「血のつながらない他人」同士がどのように出会ったかといえば、それは共通の「親」によるものだ。

彼女ら彼女らを育てた「親」は、そういった「血のつながらない子供たち」を本当の子のように愛しながら育ててくれた。

そして、その「親」たちが言ったのだ。

『あなたたちが今、この世界に生きているのは、決して私たちがあなたたちを拾い、守り、

育ててきたからじゃない。あなたたちが、私たちが拾うまで諦めようとしなかったからだよ』

そう——逢依たちの「親」は、決して無償で善意を振りまく「都合のいい偶像」ではなかった。

必死で足掻き、無心でもがき、みつともなくてもカツコ悪くても全力で最後の最後まで生きようと我武者羅になった人間にだけ、手を差し伸べてくれた。

そして、その差し伸べられた手を掴んだのは、誰でもない「自分自身の手」なのだと教えてくれた。

だから、絆フアミリイの家族たちは諦めない。

自分たちが兄弟姉妹であり続けようとする限り、そして自分たちの胸に「親」から授かった想いが生き続ける限り、彼ら彼女らは諦めない。

「生憎ね。私は確かにリスクの高いギャンブルは大嫌いだけど、リスクの高い勝負自体は嫌いじゃないわ！　いくわよ、クリュスタルス！」

「……懲りない方ですね。ですが……ならばわたくしも全力でお相手いたしましょう。さあ、行きますよ、ヴオイド！」

信頼―トラストハート―

香坂逢依こうさかあいと水面覚悟みなもさとどりの戦いは、まさしく熾烈であり、間違ひなく苛烈であり、まぎれもなく激烈であつた。

しかし、そんな二人の戦いは激しくも美しく、そこに無意味な「熱さ」はなかつた。彼女らは、どこまでも冷たく澄んでいたのだ。

乾いた銃声がビルの内部に響く。その銃口から放たれた弾丸は音を置き去りにしながら逢依へと迫り、そして時間と共に凍結する。

いったい「どれだけの時間を」凍つたままで過ごしただろうか。凍結から解凍まで、コンマ一秒のラグすら発生することはなく、弾丸の直線上から逢依が消失する。

だが、軌道上から逢依が消失することは、ヴォイドが切り裂いた虚空の中から「観測」できていた。だからこそ、次に彼女がどこに出現するかも、覚悟にはバレている。

「たとえ時間を凍らせることができても、最終的にどこから攻めてくるのかわかっているか、恐れる理由はありません」

「……………どうかしらね」

覚悟の正面に出現する逢依。だがこの未来も、覚悟にとっては予想の範疇。既に弾丸

は2段階の偏向の末に両者の横から逢依へと接近していた。

が、再び覚悟の視界から逢依の姿が消え、弾丸がその場を通過——そして、再び同じ場所へと姿を現す。

「……ッ！ ヴォイド！」

『了解。空間と空間を連結し——』

「そうはさせない！」

時間の解凍と同時に状況を認識した覚悟は、咄嗟にその場を飛び退いて回避を試みた。すると直後、切り払うように一閃された手刀が、覚悟の顎の下を掠めるようにすり抜ける。

どんなに攻撃しても微動だにしない、攻防一体の「不動のスタイル」が、たった1度だが、ほんの一瞬だが、今……確かに崩れた。

「やっと『かわした』わね？」

「——ッ！」

見開かれた視線の先に、逢依の不敵な笑みが映る。

直後、弾丸が三段階の偏向を経て、再び逢依へと迫るが、彼女はこれすらも回避。次にどこから現れるのか、覚悟は即座にヴォイドのギア特性を発動し、未来の虚空と現在の虚空を繋ごうと試みる。

だが——ユナイトギアのギア特性発動は、装着者の任意で行われる。それは即ち、装着者がユナイトギアにギア特性の発動を促さない限り、ギア特性は使えないということだ。

「させない、と……そう言っているでしょう？」

「くっ……！」

どんなに強力なギア特性でも、発動できなければ意味がない。そして、たとえ未来が見えていても、それが断片である以上、見えるのは切り取られた一瞬の未来でしかない。そう——未来の断片を見て行動を予測できるヴォイドのギア特性は、決して未来の流れを見ることのできる力ではなかった。切り取られた一瞬を映す……ただそれだけの力だったのだ。

確かに……未来を変えることは容易ではない。逢依だけの力では、覚悟の予測を上回することはできない。だが……だからこそ覚悟は「騙された」のだ。逢依にはなく……自分が信じた未来に。

「なぜ……わたくしの未来予測が完璧ではないと、わかったのですか……？」

「そもそも「予測」というものに完璧なんてありえないわ。絶対どこかに見落としがあつて、必ず何かを間違える。9割の確信と1割の疑念……それが予測というものよ。あなたは、その1割を見逃している」

断片的とはいえ、今まで外すことのなかった未来予測。それによつて生まれた慢心が、かつて存在していた「1割」を失わせた。

何があつても絶対に変化することのない未来への帰結だと信じ、疑わなかった。それが覚悟の見失つていた「虚空連結」の弱点だ。

「断片的にしか未来を見えないのなら、未来予測を破る手段はゼロではなくなる。今みたく、あなたが私の行動を認識した後、未来の断片を見ようとギア特性を使うまでに0.5秒の隙があるわ。そこを狙えばいい」

「なるほど……確かに、あらゆるものを凍らせるあなたに対して、0.5秒もの隙は致命的ですわね……。それに、未来が見えなければフレキシブルトリガーの偏向射撃も大した強みにはならない……!」

偏向射撃自体は、時間を凍結させることで回避は可能だ。問題だったのは、逢依から覚悟に対する攻撃手段が見つけれなかったこと。

だが、未来予測を封じ、ギア特性を未然で防ぐことに成功した今、覚悟が持つ防御用の手札は全て無力化された。

「それともうひとつ。あなたの持つフレキシブルトリガーの偏向射撃だけれど、最大で5回か6回しか偏向できないのでしょうか？ もっと言えば、一度の偏向で曲げられる角度は左右90度まで、といったところかしら」

「どうしてそれを……!」

「どうして、って……そんなの数えてたからに決まっているじゃない。それに、180度曲がることができるのなら、わざわざ2段階偏向や3段階偏向する必要なんてないわ。だったら、どうしてもそうしなきゃいけない理由があったと考える方が自然じゃないかしら?」

逢依は今の攻防で、フレキシブルトリガーが追えないほどの連続時間凍結を行ってはいない。

時間の凍結による回避という以上、逢依の姿が消える瞬間と現れる瞬間はまったく同時だ。だからこそ、視界から消えた直後に射線を偏向すれば、逢依を追うことは不可能ではない。

まして、未来予測が可能な覚悟であるならば、なおさら確実に迅速な対応ができたはずなのだ。

しかし、彼女は2段階偏向と3段階偏向を1回ずつ行うだけで、次弾による攻撃へと切り替えた。これは、1発の弾丸に対する偏向回数が5回しか行えないことの証左。

あるいは、もう1段階だけ偏向を行うことができたかもしれないが、左右90度にか変更できない以上、180度偏向のためには2段階偏向が必要だったためしなかった、と考えるべきだろう。

よって、フレキシブルトリガーの偏向回数は5〜6回が限界だと、逢依は判断し……
そして覚悟の反応からして、その予測がおおよそ間違ったものでないことが明らかと
なった。

「……香坂逢依さん」

「何かしら、水面覚悟」

覚悟が武器を仕舞い、微笑みながら逢依の名前を呼ぶと、逢依もまた彼女に応えるよ
うに武器を仕舞い、返事を返した。

「わたくしは仲間のために戦い、あなたは家族のために戦った。背負うものの重さは互
いに同じだったはず。なのに、なぜわたくしはあなたに敵わなかったのでしょうか
……」

「……純粋な実力なら、むしろあなたの方が上だったわ。だからきつと互角ではなく、あ
なたに利があったはず。それでも、この結果に繋がった以上、その理由はきつと明確だ
わ」

「……それは、いったい？」

澄んだ薄緑色の瞳に逢依の姿を映しながら、次ぐ言葉を待つ。

断片的とはいえ、運命すら味方につけて戦っていた自分を討ち破った逢依の力。それ
を知れば、もしかすると自分の知る最悪の未来——あの悲劇の日を変えられるかもしれ

ない。

だから、既に重く怠くなり始めた身体に鞭を打つてでも、それだけは聞かなければならなかった。

「あなたはきつと、背負いすぎていたのよ。仲間の助けになろうと、希繫を救おうと、きつと優芽以上に何もかもを背負おうとしていた。それは決して悪いことではないけれど……でも、重くなった心に、ユナイトギアは……ヴォイドは応えてくれた？」

「――」

今頃になって、逢依の口から聞かされて、ようやく気付く。

ユナイトギアと、その装着者は「心」によって繋がっている。どんなに強いギアであっても、どんなに凄い装着者であっても、心を通じ合わせないままの力では、ただの「力」ではない。

その「力」を「強さ」に換えて、初めてユナイトギアと装着者の価値が決まるのだ。なのに――。

「私は家族を信じたわ。希繫なら負けない。悠生なら勝てる。そう信じて、二人とは違うこの戦場で戦った。けれど、あなたはどうか？ きつと、仲間が無事かどうか不安で仕方なかったんじゃないかしら」

なのに、覚悟を信じようと、共に戦おうとしてくれるヴォイドの想いをよそに、覚悟

の心には「仲間」のことしかなかった。

仲間を信じていなかったわけじゃない。けれど……信じていても不安や心配を振り払うことができなかった。全てを仲間に託して、目の前の戦いに集中できていなかった。

だから、その重さに心が潰されそうになって、その重さを支えることに必死で、今の瞬間を共に戦うために一番信じるべき「ヴォイド」を信じるのができなかった。

「その想い……不安が悪いことだなんて言わない。仲間への気持ちの本物だつていう何よりの証拠だと私も思う。でも……あなたの仲間は優芽と総交だけなの？」

「違う……。ヴォイドだつて、わたくしにとって掛け替えのない大切な仲間……。なのに、わたくしは……わたくしは、共に戦う仲間としてではなく、戦いを制す道具のように、この子を……！」

『悲しまないでください、マスター。私はヴォイド。あなたのユナイトギアです。マスターに「使われて」初めて、私たちユナイトギアは本当の力を発揮できる。私たちは、まぎれもなく道具なのです』

道具。そう、ユナイトギアは道具だ。人々を守り、レイダーを斃す。そのために生まれた道具だ。

だが……彼らを纏う装着者たちにとって、ユナイトギアが「ただの道具」だと思える

時など、ほとんどないだろう。心で繋がり、心が彼らを強くし、心と共に成長する。

そんな彼らが——「心」を持つユナイトギアたちが、自分たちに対して本当の意味で「無償の信頼」を預けてくれるのに、それを「道具」として吐き捨てることができるものか。

「違うっ！ あなたが……いえ、たとえ誰がなんと言つても、私はもう二度と……あなたを「道具」として扱ったりしません！ あなたは……ヴォイドはわたくしの、大切な仲間です！」

右目から零れ落ちる一滴の雫。それを見た逢依は、彼女に背を向けてビルの階段へと歩き始めた。

もしも、次に彼女と戦うことがあれば、たぶんその時は今回よりもずっと恐ろしい強敵になっていることだろう。

だが——それでいいのだ。元より覚悟とヴォイドは、逢依とクリュスタルスよりもずっと強くてずっと凄い存在だったはずなのだ。

今回こうして勝ちをもぎ取ることができたのは、覚悟の仲間への想いが強すぎたからだ。仲間を信じる心と、仲間を想う心。そのバランスが偏っていただけ。

でも、だからこそわかる。彼女はもう気付いているはずだ。

「……クリュスタルス」

『なんでしよう、マスター』

展開状態から待機状態のペンダントへと戻ったクリユスタルスに、逢依が声をかける。

「希繫なら、きつと変えられるわよね。覚悟たちが見た、悲劇的な未来を……」

『……返答しかねます』

クリユスタルスの返事に、それもそうね、と苦笑する逢依。しかし、クリユスタルスの言葉はそこで終わらなかつた。

『ですが、そうであつてほしいと、願っています』

「……そう」

やっぱり道具らしくはないわね、と言葉に出さないまま、逢依は階段を下りていった。

切望——ホープ——

リミットブレイク。

限界突破の意に偽りなく、装着者の持つ最も強い感情を一時的に増幅、そして過剰抽出することによる、エモーショナルエナジーの爆発的なブースト。

感情の昂りが威力となるユナイトギアにとつて、エモーショナルエナジーのブーストは、そのまま威力の増強へと言い換えることができる。

しかし、強い力には相応の代償が付き纏う。限界を超える感情の過剰抽出は、見極めを間違えば感情の喪失へと繋がり、装着者を廃人へと変えてしまいかねない。

ある青年は胸の「希望」に全霊を懸けた。

ある少女は胸の「憧れ」に全力を賭した。

そして、胸に抱いた感情をそのまま爆発させ、燃え盛るそれをユナイトギアへと注ぎ込む。

「——リミットブレイク。イーリス・プテリユクスの展開を完了しました」

虹色の閃光から姿を見せたのは、その翼に七つの輝きを蓄えた『虹色の翼』を纏う和泉優芽。

通常の『イーリス』よりも遙かに大きなその両翼は、羽搏く度に霧のような水滴を撒き散らし、小さな虹を作り出す。

「——リミットブレイク。ノーブル・エクレールの展開を完了しました」

そして、そんな彼女の前に立つのは、深紅の雷光を全身に纏いながら『高潔な稲妻』ノーブル・エクレールを展開した桐梨希繫^{きりなしきづな}。

両脚に展開されていた『エクレール』は、より鋭角的なフォルムとなり、各関節部からは常に大量の火花を散らしつつ、希繫の体を稲妻で覆う。

「……それがお前の限界突破か」

「そうです。これが……あたしとイーリスが心をひとつにした証。あたしとイーリスの切望の翼……イーリス・プテリユクスです！」

切望の翼。確かに、優芽の言う通りかもしれない。

遠くない未来から、希繫を……そして彼の大切な家族を救うという、たったひとつの切なる望みだけを胸に抱き、今こうして救いたいはずの人物と敵対している彼女にとって、イーリスこそが自分にとって最大の理解者。

そして、その理解者が背中を押してくれるのだ。「今ならこの願いが届くかもしれない」「今ならこの胸の想いを叫んでもいい」と。だからこそ彼女の翼は輝きを失わず、むしろその眩しさを増していくのだ。

「先に言っておく。ノーブル・エクレールの放つ電撃は今までのような「痺れるだけ」のものとはまったく違う。完全な「雷」のそれだ。イーリスの『アクアコート』くらいなら一瞬で蒸発させる」

「心配は無用です。あたしだって、エクレールを破壊するために、お兄さんと戦うことを想定してこの時代に来たんです。だから……お兄さんも全力であたしにぶつかってきてください！」

合図はなかった。

互いに言いたかったことを言い切って、次ぐ言葉を失えば——自然と動くのは口ではなく身体だった。

希繫の脚が大地を蹴り、駆け出すと同時に到達するほどのスピードを以て、優芽の胸を横薙ぎに蹴り飛ばす。

電気化も、アクセルアクションも使用した様子はなかった。ただの純粋な俊足による接近。だがそれは通常時のスピードとは遥かに質が違った。

ノーブル・エクレールが放つ、全身を覆うような電気は、ただ肉体に収まりきらないエモーショナルエナジーを電気に変換して放出していただけではない。

それと並行して、各神経網を刺激することで電気と同じレベルの反射速度と思考速度を会得させ、その思考に合わせようとする肉体が、副次的に動作速度までもを加速させ

ていたのだ。

しかし、リミットブレイクして強くなったのは希繫だけではない。

彼のキックは、確かに狙いを射止めていた。だが、切り裂いたものは『優芽』ではなく、彼女の姿を映した霧の幻影。

そう——イーリス・プテリユクスの翼が散布している霧は、周囲の光を微調整しながら幻影を生み出す「ミラーージュミスト」だったのである。

「10、20、30……40弱つてところか。いや、このまま放っておけば、俺の視界すべてを幻影で覆われてしまう。エクレールッ！」

『スパークステインガー』

希繫の呼びかけに、エクレールはすぐさま応じた。

スキルの使用の度にエモーショナルエナジーを充填する必要がある通常形態時とは異なり、リミットブレイク中はエモーショナルエナジーが常に放出され続けている。

無論、余剰エナジーは無駄に消費し続けるだけに、3分間という厳しい制限時間が設けられているものの、スキルの使用にタイムラグが発生しないというのは、戦術的に極めて大きなメリットである。

（スパークステインガーは一度に12のスフィアを生成し、1つのスフィアにつき3発の電撃槍を発射することができる。続けざまに全て使えば36発……。リミットブレ

イクの影響で威力も底上げされてる今なら、36騎の幻影を葬ることが出来る……！」
既に対象となる幻影たちの座標は把握している。多少の撃ちこぼしには目を瞑って、今はとにかく幻影の数を減らすことに集中する。

「撃ち抜けッ！ スパークステインガー！」

「まずは本物を炙り出すために広範囲攻撃で幻影を殲滅……。無難ではありますが、だからこそ読むに容易いとは思いませんでしたかッ！」

ほとんど同時に放たれた36の電撃槍。しかし――。

「スパークステインガーが、消えた……!? いや、霧の幻影すべてに対して『アクアコート』を付与して無効化したのか……?! やってくれるッ！」

「お兄さんの言う通り、お兄さんに対して使用したところで、アクアコートは一瞬で蒸発させられてしまうでしょう。しかし、威力が上がっていても、スパークステインガー程度の威力ならッ！」

スパークステインガーは、その速射・連射に重きを置き、希繫の持つ手札の中でも特に威力の低いスキルのひとつだ。

そのため、リミットブレイクの影響で威力を底上げされても、元々の相性が悪い『アクアコート』が相手では、その力を十分に發揮することができなかった。

「だったらあッ！」

『エナジースパーク』

だが、相手が自分にとって天敵であり、そしてリミットブレイクまで解禁した優芽である以上、スパークステインガーが通用しない程度のことは、希繫にだつて予想がついていた。

だからこそ、次の手に戸惑いも躊躇いもない。

心から溢れ続ける「希望」を思いつきり解き放ち、その「心の威力」をスパークさせる。

「常時放出されている電気に加えて、エナジースパークによるデタラメな限外放電……

！ これほどの威力を……なぜ世界最弱であるあなたがッ！」

「つたりめえだろ……！ 俺や、俺の大事な家族のために必死になつてくれるヤツが、心で泣きながら戦つてくれてんだぞッ！ 『最弱』なんて枷におとなしく縛られてる場合じゃねえんだよッ!!」

この戦いに勝たなければ、エクレールを守ることはできない。それはもちろんだ。

だが……エクレールを守ることができなければ、優芽にエクレールを破壊させてしまえば、たとえ未来が変わつても、優芽の心には「希繫とエクレールのキズナを引き裂いた」という罪悪感が必ず残る。

希繫が守りたいのは、自分の相棒であるエクレールだけではない。自分や、その自分

の家族のために自分の時代を捨ててまで過去に駆け付け、こうして必死に対峙してくれる優芽も、守りたいのだ。

「見つけたぞ……幻影でも分身でもない、本物のお前をッ！」

「くっ……イーリスッ！ この手に剣をッ！」

『了解。大気中の水分を操作します』

『ディアドロップ……未来にて『零れ落ちていく大切なもの』と名付けられたそれを、この時代で限界を越えながらも確かに握り締める優芽の瞳に、迷いも惑いもないのは、向かい来る『彼』の瞳がそうだからか。

激しくぶつかりあう二人の希望と憧れは、尽きることなく輝きを増していく――。

純粹—イノセント—

桐梨希繁きりなしきづなと和泉優芽いずみゆめの戦いは熾烈を極めた。

両者どちらにも後には退けぬ理由があり、両者どちらにも前へ進もうとする意志があつたからだ。

片やその身を稲妻と変えて戦場いくさばを駆け巡り、片やその手に剣つるぎを携え稲妻を斬らんとする。

迸る火花たてがみを変えて獅子は猛り、竜はその背に蓄えた虹色の輝きを増していく。

「ちくしょう……ちくしょうツ！ ああもう、ホントになかなかどうして……ツ！

さつきまでは嫌で嫌で仕方なかったはずなのになあツ！」

「まったくですツ！ あなたとの戦いは、悲しくて辛いばかりだったはずなのに……あなたがあたしをこんなにも受け入れるからツ！ こんなあたしを、愛してくれるからツ！」

この戦いが、楽しくて仕方がない。

いや——楽しいのは、この戦いがではない。戦うことで通じ合う心と心……ぶつかり合うことでわかり合う互いの気持ち。

希繫が、優芽が、どれほど互いに自分のことを想っていてくれるかわかるから、楽しくて……そして幸せなのだ。

「エクレールッ！」

『スパークステインガー』

優芽の剣戟に合わせて放たれる電撃の槍。だが、水によって形成された『道』によって軌道を逸らされたそれは、優芽を大きく外れて威力を成さない。

電撃の槍をかわした直後、優芽の手に携えられたディアドロップによる刺突が希繫の頬を掠めるものの、肉体を電気に変換する力は、逆用すれば電気を肉体に換える力でもある。多少の傷は、即座に回復してしまうのだ。

掠めるだけでは意味がないと、彼女はさらに攻めの手を過激に鋭くさせていくが、リミットブレイクした希繫のスピードは、もはや追いつける者など片手で指折るに足るほどになっていた。

「イーリスッ！ この手に弓をッ！」

『Dーロックオンスナイパー』
ディアドロップ

「(ン)で、一点突破の射撃だと……ッ!？」

スピードに秀でる希繫に対して、射撃という選択はあまりにも愚かだ。

発射から到達までに僅かにでもタイムラグが存在するのなら、希繫はその僅かな隙を

必ず奪う。

それは優芽とてわからないわけではあるまい。いや、優芽だからこそ、わかっているはずだ。希繫を想い、希繫を信じ、希繫を救おうと決起した彼女だからこそ、わからないはずがない。

だからこそ希繫は警戒を強めた。おそらく、ロックオンスナイパーだけで自分を仕留めようというわけではないはず。

つまりは、射撃を回避するか、迎撃するか、その判断をしたいのだろう。だからこそ、どちらの選択を選ぶべきかの判断に重みが増す。

「これでえええッー！」

「来るか……ッ!?」

ロックオンスナイパーから放たれた水の矢は、直線軌道を逸れることなく、凄まじい速度を以て希繫へと接近するが、音すらも置き去りにする希繫のスピードの前に、それはあまりにも遅く、その遅さが逆に希繫の判断を鈍らせた。

この程度の速度なら、迎撃するまでもない。容易にかわすことが可能だ。しかし、それを知っていてなお、この重要な局面で優芽がこれを、ロックオンスナイパーを選択した意味を考えると、かわすよりも迎撃した方が奇を狙えるのではないか。

だが、迎撃よりするよりも回避の方が容易だからこそ、あえて迎撃する、という程度

の予想は、優芽でなくとも想像がつく。故に、希繫の思考は一時的に現実を離れ——予測という名の空想の世界へとダイブしかけた。

そして、その一瞬のダイブが、音よりも遙かに速い希繫の動きを、致命的なほどに鈍らせた。

『D—スタツブステインガー』
ディアドロップ

不意に聞こえたイーリス・プテリユクスの無機質な音声に、ようやく現実へと引き戻された時には、既に遅く、咄嗟にかわしてはみせたものの、希繫の速さを以てしてもその一撃は彼の横腹を掠めていた。

元より防御を放り投げ、かわすことに重きを置いていた彼にとつて、一撃を受けることとの重みは並のレイドリベンジャーズたちよりも遙かに大きく、掠めただけの一撃すら、彼には大きなダメージとなつて、その動きが一段階鈍いものになつていく。

頬を掠めるだけに留まつた先程のものとは違い、今しがた与えた攻撃はどう見ても横腹を抉っていた。一言に「掠める」とはいつても、その程度は大きく異なるのだ。

「こちらもまた掠めただけ……。しかし、いくら回復できるとはいへども、痛みは変わらないはず……。その痛みがあなたの動きを鈍らせるツ！」

「くっ……！ エクレールツ！」

『いけませんディアマスター。これ以上のエナジースパークは、いかにディアマスター』

でもあれども感情の消耗が激しすぎるばかりか、彼女はそれを防ぐ手立てを持っていませんッ！ 冷静になってくださいッ！』

元々、格闘能力のサポート程度にしかギア特性を用いない希繫にとつて、電撃をそのまま攻撃に転用するエナジースパークは、あまりにも燃費が悪い。

確かに彼の感情エネルギーは、数多くのレイドリベンジャーズの中でも屈指の膨大さを誇る。元々の明るい性格や前向きな性分が、そのまま感情を、心の豊かさを育んできたからだ。

だが、感情エネルギーをギアによつてエモーショナルエナジーに変換させ、それをギア特性やギアの出力へと変化させたところで、そのギアに設定された出力限界というものがあつた。

第四号ELBシステム『エクレール』は、最初期に開発されたユナイトギアである。そのため、最近のユナイトギアよりも、その出力限界が遥かに低く設定されているのだ。リミットブレイクすることで出力限界を取つ払っている今、確かに出力限界そのものは、決して問題ではない。

だが、普段から必要以上に力を抑制している枷を取り外している現状では、彼のエモーショナルエナジー……ひいては感情の爆発力が高すぎてしまう。このままエナジースパークを使えば、彼の感情は焼き切れてしまうのだ。

「だったら、スパークステインガーでッ！」

『いいえ、先程の攻防でスパークステインガーは効果が薄いことが判明しています。ここはアクセルアクションが賢明かと思えます』

「いやダメだ。リミットブレイクしている以上、これ以上のスピードアップは反動がヤバい。アクセルアクションなんて使ったら自滅は免れない」

『万事休す……いえ、たとえ万事が滞ったとしても、一万とひとつの策はあるはずですよ！』

そうだ、まだ策が何もかも潰えたわけではない。ただの一万ぼっち、策を崩されただけのこと。

まだ感情は折れてない。まだ四肢が残ってる。何よりまだ優芽に……彼女に自分の全てを見せていない。

だったら、絶望するのはその全てを晒してからでも遅くはない。

「オーケイ、だったら一万とひとつの策つてのを、この場で今すぐやらかしてやろうじゃねえかッ！」

『了解、肉体を電気に変換します』

「電気体ッ！ 光速であたしを攻め立てようというのなら、甘い考えと言わざるを得ませんねッ！」

肉体を電気に変換することで光速機動を可能にするエクレールの『電気変換』は、光という速度の頂点に追い付くことができない者に対して絶対的な優位性を持つ。

しかし、純粋な光でなく電気というエネルギーを由来とするその力は、それを拒絶するか、あるいは受け入れるかを選択できる『水』という存在によつて、優位性の是非を問われる。

これまで幾度となく言つてきたように、希繫にとつて優芽という存在は、自分の力を利用するも拒絶するも自在となる天敵なのであつた。

だが、そんなことは初めて会つた時から知つている。天敵だからなんだというのだ。越えられない壁ではない。ただ、越えがたい壁というだけのこと。

（電気体で直接攻撃しようとしても、優芽の周囲には電気を受け流すための水の軌道『ウォーターレール』が敷かれてはいるはず。だつたら——）

突如、希繫の姿が優芽の視界から消え、彼女の周囲には無数の水の軌道が展開、希繫の攻撃を受け流しつつ、先回りするための準備が整えられた。

が、姿が消えるとはほぼ同時に現れた彼は、彼女の敷いたウォーターレールの先ではなく、目の前——その軌道に触れる直前で電気体を解除し、肉体を取り戻していた。

咄嗟に防御態勢を取ろうとした優芽だったが、彼が仕掛けたのはその俊足を繰り出す足によるキックではなく、右の手のひら。そして、その意図がわからずわずかに困惑し

た隙を、彼は見逃さない。

『サンダースパーク』

「しまった……ッ！」

彼の手のひらから放たれたのは、凄まじく眩しい赤色の雷光。

スキル発動の際に発せられるギアの音声確認を聞き、咄嗟に腕で視界を遮ったことで目を守ることはできた。

だが、遮られた一瞬が、彼女に致命的な隙を与え、そして希繫の一撃が、この勝負を終結へと向かわせる。そう思っていた。

『リミットブレイクの使用限界に到達しました』

「何……ッ!？」

『和泉優芽との同調^{アクセス}接続を中断します』

「ここまで、ですか……ッ！」

膝から崩れ落ちる優芽を慌てて受け止めると、希繫はそのまま彼女を抱きとめた。

「ごめんなさい、お兄さん……。あたし、お兄さんに迷惑かけてばかりで……。お兄さんのためにつて、頑張ったんですけど……。無駄だったかな……。やっぱりあたしじゃ、何もできませんでした……。」

「そんなことない！ お前はよく頑張ってくれた！ お前がくれた警告……。お前の言葉

は、何も無駄なんかじゃない！ お前の言葉を聞いた俺たちがその言葉を胸に抱き続けられ、きつと未来だって変えられる！」

「……そう、ですね。あたしは、限界を越えられなかったけれど……自分の定めた限界に、甘んじてしまっていたけれど。お兄さんなら、キリなしのキズナを紡いでくれるお兄さんなら、きつと……」

確かに、優芽の戦う力は時限式だった。限られた時間の中、限られた力を揮いながら、それでも大好きな恩人を救うために、定められた限界をめいっばい使い切ろうとしていた。

だが、希繫にはわかっていた。彼女の想いは、決して限られたものではなかった。葉によつて無理矢理に引き上げられた感情エネルギーを糧にギアを纏つたとしても、彼女の想いが半端なものならイーリスは力を貸さなかつただろう。

彼女の想い——憧れの人を、希繫を救いたいという純粹で高潔な願いは、彼女自身の限界を突破していた。だからこそイーリスは、彼女のリミットブレイクに応えてみせたのだ。

「いいや、俺だけじゃない。お前だつて未来を変えられる。悲劇的な未来を変えようと頑張つたお前の行いは、何も無駄なんかじゃなかった！ きつと今だつて、未来はちよつとずつ変わつてはるはずだ！」

「そうでしょうか……。だったら、嬉しいです。あたしなんかの力でも、お兄さんの未来を……。本当に幸せそうなお兄さんの笑顔を、掴み取るお手伝いができたなら……。あたしの行いにも、意味があつたんだって……。思え、ます……」

「優芽……。？　おい、優芽っ!？」

力なく瞳を閉じた優芽に、希繫が慌てて声をかけようとするが、もう彼女が返事を返すことはなかった。

恩返し—スマイル—

「さすがに今回ばかりは本気で肝が冷えたぞ……」

「えっと、その……ま、紛らわしいこととしてすみませんでした……」

四日後、優芽^{ゆめ}は永岑市A—04ポイントの市立病院にいた。

希繫^{きづな}との決戦時、昂揚^{アトネイター}剤の効果時間を越えてリミットブレイクを使用したことによる感情エネルギーの一時的枯渇により倒れた優芽は、その後すぐにこの病院へと運ばれた。

搬送後、2時間ほどで目覚めた彼女だったが、デトネイターの副作用である不安衝動や幻覚症状による発狂も見られ、数日間の入院は余儀なくされ、その間ずっと希繫が見舞いに来ていた。

「まあ、無事だったならなんでもいいけどな。デトネイターもだいぶ抜けてきたみたいだし、この調子なら明日か明後日くらいには退院できるってお医者さんも言ってたぞ」「みたいですね。お昼^ご飯の時に、看護師さんから聞きました。ここでの生活も、けっこう気に入っていたんですが、ちょっと残念です」

「そうか？ 俺だったら、さっさと家に帰りたいうって……ん？ いや待て、でも……お前

まさかとは思うが……」

ふと、希繫の脳裏に決して良いものではない予感が過ぎる。思い出されるのは、優芽と二度目に会った時の場所。そして、彼女が『未来からこの時代に訪れた』という事実。彼女と最初に出会った時、彼女は希繫をおびき寄せるためデートパートナーという建物を選んだ。しかし、もしあれが「それ以外の理由」もあつてあそこを選んでいたら。

二度目の戦闘の際、周囲に民家の少ない『死んだ街』であるA—12ポイントを選んだのが、周囲の被害を抑えるためであり、一時的な潜伏先であつたことも既にわかつている。

だが、もしそれが「一時的な潜伏先」ではなく——『この時代で行く宛てのない彼女たちにとつての住処』だったとしたら。

「優芽……お前、もしかしてこの時代だと一文無し？」

「え？ あ、はい。それはまあ、6年後のお金なんて使えませんし、戸籍は『この時代のあたし』のものでしかありませんし、保険証も外見年齢と生年月日が合いませんし。……と言いますか、むしろ今まで気付かなかつたんですか？」

「……マジな話、今の今まで気付いてなかった俺が言うのもなんだし、生真面目で正直で融通は利くけど優等生な委員長タイプだからあんまり言いたくないけど、実はお前もけっこうバカだろ」

「バっ……!!」 た、確かにあたしも自分のことながら後先を考えない行いだったことは自覚していますが、それでもバカはちよつとひどくありませんか!？」

ぎゃんぎゃんと捲し立てるように反論を述べる優芽の言葉を聞き流しながら、希繫は彼女たちの今後について思案し始めた。

今回の『未来事件』において、永岑市が受けた人的被害は極めて小規模なものだ。それはやはり、優芽の目的が希繫であったこと、そして希繫自身がそれを自覚していたために、交戦地帯を選べたことが大きかっただろう。

しかし、希繫と優芽、逢依あいつと覚悟ざつとの戦闘はまだしも、悠生ゆうきと総交そうまの戦闘において、悠生がA—O4ポイントの雑木林に与えた被害は甚大だった。

レイドリベンジャーズが出勤した際、戦闘によつて周囲に与える一定までの損害は国に保証してもらえらるし、実際に今回もその影響は国が定めた「一定」の範囲内であったが、悠生——そして今回の戦闘の中核となった希繫と逢依は、支部長から嚴重注意を受けた。

ともなれば、当然ながら交戦の原因となった優芽・総交・覚悟の三人にも処罰は下る。というか、そうでなくても彼女らは『ユナイトギア悪用犯罪者』である。

本来、ユナイトギアの使用はレイドリベンジャーズ所属の者か、ELBシステム装着許可証を持つ者にのみ許されるが、優芽たちはそのどちらでもない。

いや、未来ではどちらでもあるらしいのだが、この時代のレイドリベンジャーズには所属していないし、この時代の許可証も持っていないので、どちらの条件も満たせないとのことだ。

もつとも、現代のユナイトギアが1440機しかなく、実戦投入できるほどの実力を持つ正規ELBシステムの装着者もまだ限られている今、優芽たちの処遇は弁護次第である程度緩和されるだろう。

言い方は少し悪いかもしれないが、ようは現代のレイドリベンジャーズとして登録してしまえば、国にとっても都合のいい存在なのである。

「正直、お前たちの処遇はよほど悪いものにはならないと思うが、さすがに一文無しとなると、レイドリベンジャーズの団員寮も貸してもらえないだろうし、ちよつとまずいな」「二応、あたしたちはこの時代に来ることを決めた時点で、宿無しになる覚悟はしてきたんですが……」

「させねーよ。事情を知った以上、もう放っておけないからな。まあ、とはいってもウチは無理だ。若干とはいえ姉さんがお前たちのこと敵視してるからな」

「過去に遡って事件を起こした以上、人間関係も以前のままとは思いませんでしたが……。あのいつだって優しく接してくれた小転お姉さんに嫌われるのは心が抉られますね……」

未来から過去に訪れ、希繫だけではなく様々な人物と本来のものとは異なる「出会い」をした彼女に対し、当然ながら人間関係や印象が変わってしまった者もいる。

優芽が言うように、未来の小転は優芽に対して好意的だったが、希繫と敵対するように出会ってしまった現代では、好ましくない印象を持ってしまっているのは、そのわかりやすい例だろう。

逆に、現代の希繫は優芽に対して極めて好意的ではあるが、未来の希繫は優芽に対してあくまで「よく懐いてくる部下」程度にしか思っていなかったらしい、ということもわかっている。

「……そういえば、ふと思ったのですが、あたし今この病院に保険証もなく入院して4日目なんですよね?」

「そうだな。というか、お前がじゃなくて、お前ら3人共な」

「……まさかとは思いますが、ここの治療費と入院費用って……」

表情と血の気を喪いながら、からくり人形のような動きで希繫の顔を見上げる優芽を見て、希繫は思わず視線を逸らした。

だが、誤魔化そうにも相手は聡明な優芽である。その露骨すぎるほどの誤魔化しは、むしろ肯定を意味してしまい、狼狽する優芽にトドメを刺した。

「昔助けてもらった恩を返したくてこの時代に来たのに、結果的にお兄さんを困らせて

しまっただけでなく、こんな体たらくになつてさらにお兄さんの手を煩わせてしまふなんて、あたしつていつたいたどこまでバカなんですか……。恩を仇で返したらまた恩ができたつて……。これじゃいくら返したつて返し足りませんよ。ああ、あたしつてば本当に救えませんか……」

「お、落ち着け優芽！ お前たちから返してもらつたものが仇だなんて俺は思つてないし、お前たちが元気になつてくれるんなら、医療費と入院費用なんて安いもんだ。むしろ感謝すらしてるんだよ。お前たちが生きて、俺たちとまた仲良くしてくれて、ホントに嬉しいんだ」

顔を、いや耳まで真っ赤に染めながら布団の中に潜つて丸まってしまった優芽に、希繫が慌ててフォローを入れる。

しかしその効果があつたのかなかつたのか、悶える様子はなくなつたものの、布団からは出ようとしてくれない。

正直、ここまで真面目で冷静で聡明な面ばかり見ていただけに、彼女がまだ16の少女であることを失念していた。

希繫への徹底的な対策も、正直なところ彼女の頭脳や性格以上に、彼女が希繫に「憧れている」からこそそのものだと、今こうして彼女の幼さを目の当たりにしてようやく理解した。

つまりは、希繫を叩くだけの戦略と策略を巡らせる頭脳と、それを可能にさせる実力が伴っていたとしても、それを実行させることができたのは総交と覚悟のフォローがあつてのことだったのだ。

この時代に来る方法は、おそらく覚悟のギアである『ヴォイド』の存在から、早々に思いついたことだろう。そして、希繫を抑えるための戦術を思案し、十全の準備を整えたはずだ。

だが、それを実行するだけの勇氣は、優芽だけにはなかった。だから彼と彼女は、そんな優芽の手を引いたのだ。誰よりも前へ踏み出そうと頑張っている彼女の、最初の一歩を促すために。

そして、優芽はその手に引かれてこの時代でこの事件を起こした。それは、きっと彼女にとつても、その仲間である二人にとつても簡単なことではなかった。

だが総交と覚悟は迷わなかった。自分たちが迷えば、優芽はこの時代で自らの道に迷つてしまう。『既に意味のないこととはいえ』、未来のレイドリベンジャーズから3機ものギアを勝手に持ち出して起こした事件だ。後には引けなかっただろう。

そんな風に優芽のこれまでを想像してみれば、確かに彼女は立派な戦士であり、立派な人間であつたが、同時にやはりまだ16の少女なのだった。二人の大人に手を引かれる、少女だったのだ。

「お前が頑張ってくれたから、俺は未来の危機を知ることができた。お前が必死だったから、俺はその危機が本当に只事じゃないって痛感できた。お前は立派に恩返しをしてくれたんだ。だからさ、治療費とか入院費用なんてのは、お前らが恩だなんて思わなくていいんだ」

「じゃあ、どう思ったらいいんですか……」

「あー……うん、そうだな……。んー……じゃあ、こうしよう。これは、俺からお前たちへの謝罪。償いだよ。お前たちが警告してくれたのに、エクレールを手放そうとせず、まして怪我までさせちゃった。ああ、そうだ。これに違いない。謝罪だよ」

そんな、と布団を放り投げるように勢いよく飛び起きた優芽が、希繫の細い手を掴んで首を横に振る。

「お兄さんは何も謝ることなんてありません！　これは、あたしたちの独断でしかしたことです。過去を変え、未来を変えるためとはいえ……お兄さんの大切な相棒を、あたしたち……いえ、あたしは破壊しよう……！」

「なら、お互いさまだ。俺はお前たちに謝りたい。お前は俺に謝りたい。だったら、俺はお前たちが元気になるまで面倒をみるよ。だから、お前たちはできるだけ早く元気になるってくれ。それで手打ちにしよう」

な？　と言つて優芽をベッドに寝かせ直し、笑いかける。

その温かい笑顔に、いつか助けてもらった時と同じぬくもりを感じながら、優芽はゆっくりと頷いた。

「はい。でも、やっぱりあたしにとってお兄さんが恩人であることは変わらないので、元気になったら恩返しに付き合ってくださいね」

「ああ。楽しみに待ってるよ」

帰還—ホーム—

「……いいよ。逢依ちゃんも悠生くんも許可してるなら、だけどね……」

翌々日。優芽はめでたく退院の日を迎え、結局のところ彼女の行く宛を見つけれなかった希繫は、ダメ元で小転に彼女たちをこの家に置くことはできないか尋ねてみた。

ダメだったとして、引き下がるにしても「ならせめてこの家でないどこかに住む場所を与えることはできないか」と食い下がるつもりでいたのだが、小転の返答は意外にも「了承」の意を示していた。

「え……。い、いいんですか？ あたしが言うのもおかしいかもしれませんが、あたしはお兄さ……希繫さんたちを襲つたんですよ？」

「同じことを繰り返すのは好きじゃないけど、じゃあもう一度だけ言うね。いいよ。でも、それは決して君たちの行いを片っ端からすべて許すという意味ではないことだけ、理解してほしいかな」

思わず訊き返したのは優芽だった。正直、この反応は弟の希繫からしても想像していたものではなかった。だからこそ、彼女の拒否を前提とした交渉をシミュレートしていたのだ。

総交そうまと覚悟ざとりは、事態を呑み込めないまま呆然としていた。だが、それは希繫や優芽のように小転の返答に対する意外性によるものではなく、むしろ彼女の許可を得たことに驚く希繫や優芽の態度に、驚いていた。

感情表現が豊かで、それを表に出すことを憚らない希繫だけならばまだしも、優芽は感情そのものは豊かだとしても、表現という行為はある程度の礼節を踏まえた思慮の下で行う。

だが、今の彼女は希繫と一緒に混然して混乱しているばかりか、目に見えて驚愕・狼狽している。これが、総交と覚悟には珍しかった。

「ど、どういうことですかお兄さん！ お姉さんが予想以上に温情です！ いえ、お姉さんは元より心の広い方だということは重々承知しているのですが、さすがにお兄さんが絡んでなおこんなに優しいとなると薄ら寒い何かすら感じます！」

「落ち着け優芽。姉さんが優しくくて可愛いだなんてそんなこと今に始まったことじゃないだろ。そんなのは人類史が記されてから今に至るまで常に定められていた前提的な問題だ」

「お兄さんこそ落ち着いてください！ お姉さんが可愛いことは同意しますが、思いつきり論点がズレてるじゃないですか！ ほら、ひっひっふー！」

「その呼吸法は優芽にはまだ早い！」

しかし、こうなつては埒が明かない。希繫と優芽の掛け合いは仲睦まじい兄妹のじゃれ合いにも似ていて、見るだけでも十分に微笑ましいのだが、話が前に進まないのは好ましい事態ではない。

仕方ない、と総交が二人の様子をひとまず無視して、小転との会話に踏み切つた。優芽ほどでないにせよ、覚悟もまた小転とある程度の交流があつただけに、こういう事態となれば、ほぼ無知である自分が相応しいだろうという、根拠のない確信があつた。

「俺たちの行いを許すつもりはない、というのはわかる。しかし、ならどうして俺たちをこの家に置いてくれるんだ？」

「わたしは、ファミリーの家族の長おねえちゃん姉だからね。弟や妹を傷つける人を許すわけにはいかない。だけど、弟や妹を助けようとしてくれた人に、誠意を見せないなんてのもあっちゃいけないからね」

つまるところ、「希繫たちを襲つたという事実は許しがたい。しかし、希繫たちのために頑張つてくれたことには誠意を持って対応すべき」というわけである。

言われてみれば、小転は確かに希繫に害を為す存在に対しては極めて攻撃的であり、否定的であるが、逆に希繫に好意的である人物に対しては小転自身も好意的に接する。言い換えるとすれば、希繫へ向けられた感情がそのまま小転の印象に反映されるのだ。

だとしたら、行動はどうあれ、そもそも希繫に対して極めて好意的である優芽の態度

は小転にとつても悪いものではなく、対峙することになった経緯は希繫も覚悟の上で自分が関わりと決めたことであり、事件は既に終結している点も、この返答に影響しているのだろう。

「それに、希繫があんなに嬉しそうなのは、きつとあの子……優芽ちゃんのおかげだろうから。だから、わたしは君たちを受け入れるよ。歓迎、とまではいかないけどね」

無感動で無感情で無表情な彼女から贈られた、最大限の誠意と感謝。それは、彼女のことを多く知らない総交でさえ感じとることのできた賛辞でさえあつただろう。

そして、故に総交は——そして優芽と覚悟は、彼女の言葉を聞いてようやく安堵した。自分たちの行いは、決して褒められるべきものではなかつたが、同時に決して間違つたものでもなかつたのだと。

希繫はきつと、約束を守ってくれるはずだ。自分たちが必死になつて伝えた「警告」を無駄にはしないと。だから、彼らもようやく納得できたのだ。この警告が彼らの胸の内に届いたなら、どんな結果に繋がつても、きつと後悔しないはずだと。

「あ、言い忘れていたけど、もうひとつ。一応、君たちはしばらく居候ということになるわけだから、きちんと月ごとに生活費を入れてもらおうよ」

「当然だ。それに、ここではない新しい住処も、仕事をしながら探すつもりだ。そう長く世話になるつもりはないが、よろしく頼む」

本来であれば、彼らは今頃ELBシステム取締法違反と公務執行妨害罪で有罪判決を受けている頃だが、恐らく彼らがこれから問題を起ささない限り、裁判が起ることはないだろう。

どんな事情があつたとしても、彼らのしたことは間違いなく犯罪であるし、街への被害も少なからずある。特に最初のデパートの被害は大したものだったと聞く。しかし、彼らは揃つてユナイトギア装着者である。

現在、この時代には1440のユナイトギアが存在し、1020人弱の装着者が存在するが、地球のあらゆる場所に現れるレイダーに対処するには、ユナイトギアも装着者もまだまだ少なすぎる。

そんな現代において、犯罪者とはいえレイドリベンジャーズへの攻撃的な意思が既に見られず、ユナイトギアを新たに与える必要もなくそれを纏うことのできる装着者が現れたのだ。これを利用しない手はない。

特に、その中の一人は桐梨希繫という『御しやすいレイドリベンジャーズ』を慕つていて、現時点では既にレイドリベンジャーズに対して協力的ですらあるのだとくれば、もう迷う必要もなかった。

あくまで彼らを「レイドリベンジャーズへの貢献によつて罪滅ぼしをさせる」という体でレイドリベンジャーズに引き込むことができれば、と思う者は少なくなかつたの

だ。

中でも海風総交は、悠生にボロ負けしたとはいえ、彼の「一撃必殺の拳」を幾度も防いだ手練れである。これを味方にしないなどという選択肢はなかった。

もつとも、『御しやすいレイドリベンジャーズ』である希繫は、その見え透いた意図を把握した上で、彼らをこの時代で生活させるために利用しているわけであるが。

「そういえば姉さん、俺のバイクまだ戻ってきてない？」

「XD400Rなら、レイドリベンジャーズから連絡があつたよ。修理と改造が終わつたから、今日の仕事帰りにでも取りに来るといいって」

「あ、そうなんだ。じゃあもう昼だし、早いところ仕事行かないと……って、ん？ 修理と……改造？」

いつの間にか優芽とのじゃれ合いが落ち着き、不意に話に入ってきた希繫の顔に、よくない類の汗が伝う。

希繫の愛車であるXD400Rは、優芽との戦い（二戦目）で敢行したクリムゾンストライクの衝撃によって、ある程度のダメージを受けていたため、レイドリベンジャーズの技術班に所属する友人に頼み、修理を頼んでいた。

しかし、その友人というのがちよつとした問題児であり、本来の仕事であるユナイトギアの修復や整備の際にも、装着者の許可を得ることなく勝手に魔改造を施すという悪

癖を持っているのである。

最近では支部長から直々にお叱りがあったこともあり、その悪癖はナリを潜めていたため安心してXD400Rを預けたわけだが、小転が預かったという伝言を聞く限り、その悪癖はナリを潜めただけで治ったわけではなかったらしい。

「エクレール」

『ダメです。通勤くらい普通に徒歩で行ってください』

「覚悟！」

「ヴォイドで飛ばせと？ できないわけではありませんが、レイドリベンジャーズに入するまでは勝手にギアを使えませんわ。執行猶予みたいな状況ですもの」

畜生！ という悲鳴を上げながら、希繫は玄関を飛び出していった。

おそらく既に手遅れであることは確信的なのだが、それでも愛車の無事に一縷の望みを託しながら、猛スピードで街を駆けていった。

「……じゃあ、希繫もお仕事に行つたみたいだし、いつまでも玄関に立つてないで上がりなよ。部屋の内内くらいしてあげるから」

「あつ、じゃあお邪魔しま——」

——す、と言い切る前に、優芽の額に小転のひんやりとした掌が当てられた。

何か失礼があつただろうか、と狼狽えそうになると、小転はその手をどけて静かに口

を動かした。

「ただいま、だよ。これからしばらく、ここは君たちの家でもあるんだから、そういう無意味な他人行儀はいらない。はい、やり直し」

「……はい。ただいまです、小転さん！」

2nd season——レイダー連続襲撃事件編
落涙——ティアドロップ——

かつて溢れていた温かい日常が、今ほど胸を焦がすことはない。

少女は冷たい暗がりの中、大好きだった父と母との思い出だけを糧に走り続けた。

何もかもを喪ったあの日の記憶が、今も少女の心を傷つける。しかし、それでも少女は走り続けた。

「お父さま……！……お母さま……！……！」

もうどれだけ走つただろうか。少女は、今も先の見えない暗がりを走っている。

カラスの鳴く声に怯え、木々の葉が揺れる音に怯え、こわくてこわくて仕方なくても、それでも走っている。

全ては大好きな父と母のため。泣きそうになる自分の心に鞭を打って、こわくない、こわくないと偽って、必死にその足を前に出す。

『『しろろ』は、もう泣き虫ではありません……。必ず、お父さまとお母さまをお救いいたします……！』

少女——「しろろ」は、目尻の涙を袖で拭いながら、再び前を見る。

暗くて寒くて怖くて仕方ないけれど、今ここで立ち止まったら二度と大好きな父と母には会えないのだ。

そう思えば、もうちよつとだけ頑張れる。

「だから……ちやんとお二人をお救いできたら、その時は……」

だが、少女の体にはもう限界がきていた。もう三日も何も食べていない。この暗くて寒くて怖い場所に来て三日、ずっと走り続けている。

正直、同じ場所を何度も通っている気すらする。周りに何も無い。ただただ、ひたすらに木だけが生えている。もうここがどこかなんて気にもならない。

それでも、走り続けなければいけないという使命感だけが背を押し続けるのだ。

「頭を撫でて……褒めて、ください……」

足の力が抜けていく。もう走れない。いや、立ち上がることもだつてできない。

ここまでか。父と母を目の前で喪い、もしかしたらと思つて「ここ」に来たのに、何もできないまま、ただ野垂れ死ぬのか。

それだけは嫌だ。死ぬのは嫌だ。生きていたい。生きて、もう一度だけでもいいから父と母に頭を撫でてほしい。声をかけてくれるだけでもいい。

そんな想いだけが感情を爆発させ——かつて母からもらつた「御守り」に叫ぶ。

「会いたいです……！ お父さまあつ！ お母さまああつ！」

その願いは——白銀の輝きを彼女に与えた。

何もかもを喪つてなお、死にたくなるような苦痛を与えられてなお、彼女はその感情を失うことなく爆発させた。

これは奇跡ではない。差し伸べられた光は奇跡でも、それを掴む少女の手は奇跡ではない。

『そうだ、生きることから目を背けるなッ！』



6月12日。おそらく希繫きづなにとって、この日は特別な日になったことだろう。特別、という言葉を決しているいい意味にも悪い意味にも捉えなければ、間違いなく今この時はその通りだった。

唐突だが、希繫には好意を寄せている女性がいる。それは何を隠そうかれこれ15年近く共に生活をしている香坂逢依こうさかあいだ。

フアミリイ
絆フアミリイの家族では姉として慕っていた時期もあり、今もその敬意や愛情が薄れたわけではないが、それ以上に異性として、女性として逢依のことを捉えていた。

というか、希繫が男子として最も成長する時期に一番近くにいた女性として、逢依を意識しない生活などあるはずがなかったのである。

それだけに、逢依という女性を今まで愛し、そしておそらく彼女もまた希繫のことを憎からず思っていただろうからこそ、希繫は今まさに窮地、困惑と混乱の最中さなかにあったのだ。

「ぐすつ、ぐすつ……」

場所は希繫たちが住む永岑市居アイロポイント住区アイロポイントに存在する絆ファミリーの家族の家。そのダイニングキッチンに、テーブルをはさみながら希繫と小転こころ、そして小学生ほどの少女が座っていた。

少女は希繫を「おとうさま」と呼び、小転が玄関で希繫を迎えた時には既に彼が着ているコートの裾を握り締めて泣いていた。希繫に事情を聞いても要領を得なかったが、少女は希繫と小転を知っているようだった。

レイドリベンジャーズとして大っぴらに活動している希繫はまだしも、普段は家からまったく出ない自分のことまで知っているとあって、小転は少しか身構えたが、ただ泣くばかりの少女の様子を見て、少なくともこの少女が誰かを騙せるような役者ではないと察した。

「希繫のことを「おとうさま」と呼ぶってことは、少なくとも顔くらいは知ってるはずだと思うけど、どうなの？」

「悪いけど全然。最近まったくご無沙汰だったO R Bに名指しで呼ばれたと思ったら、この子が俺のことを探してたらしいって聞いてさ。会ったら会ったでこうだし、もう何が何やら。これ逢依にどう説明しよう……」

「……………っ!」

逢依、という名前に、少女が明確な反応を示した。

希繫は半ば確信に近い何かを胸に抱きつつも、心の内で「いやそんなまさか」と否定しながら、おそるおそる声をかける——前に、小転が尋ねた。

「君の名前を聞かせてもらえのかな。わたしは桐梨小転。君の横にいる希繫のお姉ちゃん、希繫が君のお父さんだとすると、わたしは君のおばさん、ってことになるのかな」

「は、はい! わたしは桐梨白露……しろろ、とお呼びください。先程はお見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありません……」

白露と名乗る少女は、その幼さに見合わず理路整然とした態度で小転の問いに答える。と、自ずから彼女自身の状況を説明し始めた。

「わたしは12年後の未来から、お父さまとお母さまをお守りするために時代を遡行してきたのです」

「……まあ、未来から来たってのは正直言って想像の範疇だったけど……12年後?

優芽たちが居たのは6年後だったよな?」

「はい。わたしも優芽さまからそのように聞いたことがあります。おそらく、わたしが居たのは優芽さまの歴史介入によって「悲劇」を回避……いえ、先延ばしにした未来なのでしょう」

白露が言うには、歴史の改変には「変えられるもの」と「変えられないもの」が存在するらしい。

優芽の歴史介入によって変化した未来は、「6年後に悲劇が起こる」という事実に対するものだった。結果、確かに優芽が「現代」に現れたことで、その事実は変化した。

しかし、それはあくまで「6年後に」という部分のみであつて、「悲劇」は起きてしまった。回避したと思われた時代からさらに6年後——現代から12年後の未来で。

再び歴史介入をしようとした優芽だったが、12年後の「悲劇」で総交と覚悟が負傷してしまい、彼らを残して行くことができなかつた。そこで選ばれたのが、希繫の娘である白露だった、ということだ。

「わたしは覚悟さまの持つ『ヴォイド』の力でこの時代に来ました。しかし、覚悟さんは瀕死の重傷を負っていました。そのため正確な座標指定ができず——」

「静岡県の中で遭難していたところをORBに保護され、今に至るってことか」

希繫と小転は互いに視線を交わし、小転が部屋を出る。

その場に残された希繫と白露の間には、親子としては複雑すぎる空気が流れていた。

「そうだ、白露は今いくつなんだ？」

「先月10に……あ、そういえば今は6月でしたか。ええと……11月6日生まれの10歳です。あ、この赤い目はお父さま譲りなんですよ」

「え？ いや、俺は黒目なんだが……」

「未来のお父さまはユナイトギアの『逆流』によって目が赤くなっておられましたから、それを継いだのだと聞きました」

照れくさそうに、だけれどとても嬉しそうに、白露は笑っていた。

その笑顔に、希繫の心も和らいだが、彼は白露に聞きたいことがあった。聞かなければならないことがあった。白露の笑顔を、曇らせる問いだと知りながら。

「……なあ、白露」

「はい、なんでしよう？」

「未来の俺は、また家族たちを守れなかったのか？」

希繫の問いを聞いて、白露はやはり表情を強張らせた。きつと、白露自身も言いたくはないこと……聞かれたくはなかったことだったのだろう。

だが、それでも希繫は聞かなければならなかった。優芽の想いを聞き、それを受け止めた未来において、自分は彼女の警告にどれだけ報いることができたのか。

希繫は俯く白露の言葉を静かに待った。

「……優芽さまからお聞きした話では、かつてのお父さまは反乱勢に為す術なく捕えられ、装着者狩り劇の一因となったと聞いています」

「らしいな。そのせいで多くの絆ファミリイの家族やレイドリベンジャーズが犠牲になったって聞いている」

「はい。それを聞く限り、優芽さまのいた時代に比べれば、装着者狩りが行われなかった、という意味では、間違いなくお父さまは優芽さまのご期待に十分お応えしたものであると思います」

装着者狩りが行われなかった。それを聞いて希繫は僅かに安堵したものの、白露の表情を見て、もう一度気持ちを引き締めた。

きつと、これだけではない何かがある。そんなことは、彼女がこの時代に訪れているという事実を思えば明らかはずだ。だからこそ、希繫は次の言葉に身構えた。

「しかし……それでも「悲劇」は起きてしまいました。装着者狩りに代わる悲劇——『悪夢再び』によって」

「悪夢再び……？　悪夢っていったい……いや、待て。まさか、その悪夢って……！」
希繫と白露の背筋に冷たいものが走る。

白露の言う「悲劇」が、優芽の言う「悲劇」に代わるものだとしたら、それが起こる原因は間違いなく侵略性生命ダイ体を滅ぼした後のこと。

レイダーなき時代に起こりうる大規模な「悲劇」など、そう多くあるものではない。ユナイトギアの存在が脅威として認識されなくなった未来であるのなら、なおのこと。

だからこそ、もう思いつく「悲劇」はこれしかないのだ。

「レイダーの居ない時代において、明確な人類の脅威となり得る存在なんて、そうたくさんあるはずがないわ。あるとしたら、レイダー在る現代においてもレイダー以上に恐れられる存在だけ」

希繫と白露の沈黙を破るように部屋に入ってきたのは、身の丈150にも満たない童顔の少女。

白露が会いたくて会いたくて仕方なかった「大切な人」の一人であり、彼女がこの時代に訪れた最大の理由の片割れ——香坂逢依。

「逢依……」

「お母さまっ!」

「ただいま、希繫。それと……白露ちゃん、だったかしら」

女性らしい慎ましい微笑みを浮かべると、逢依はその両手を広げて白露を抱きしめた。

白露は慌てた様子で頬を赤く染めると、やがて逢依の体温を確かめるように抱き返して、そしてゆっくりと泣き始めた。

「お母さまっ！ お母さまぁ……っ！」

「はいはい、どうしたの白露ちゃん。お母さまはちゃんとここにいるわ。どこにも行ったりしない」

「でもっ……でもおっ！ しろろっ……お母さま、守れなくてっ！ お父さまにつ、お母さまをお願いって、言われてたのにつ……っ！」

おそらく、逢依にとつて白露の言葉は何から何まで身に覚えのないことばかりだっただろう。未来で起きることを、過去の人間が知る術などないのだから。

それでも、彼女は白露の小さな体を強く強く抱きしめて離さなかった。白露の叫びを、白露の嘆きを、受け止めるように。

白露の小さな体には収まりきれない悲しみを、受け止めるように。

脅威―スレット―

「……蓬萊ほうらい寺家、か」

「白露しろろちゃんの話はなしを聞く限り、間違まちがいでしょうね」

泣き疲れた白露を逢依あのベッドに寝かせ、ダイニングキッチンに戻ってきた二人は、その表情に険しさを浮かべていた。

白露の話はなしを聞き、12年後の未来では「装着者狩り」が行われなくなった代わりに、レイダー以上の脅威きづなが希繫きづなたちを襲ったことを知った彼らは、その脅威の「正体」を理解し、戦慄せんれつしていたのだ。

「蓬萊寺家……国際脅威度第一位の殺人鬼集団、か。確かにこの地球上でレイダーより恐ろしい存在存在つてなりやあ、蓬萊寺家ほうらいしかいないわな」

「今や全人類のトラウマとも言われている120年前の惨劇……ほどではないとしても、おそらくそれに準ずるほどの事件が12年後には起こると見て、おそらく間違まちがいでしょうね」

ネガティブに考えすぎている、という気がしないわけではない。もしかしたら、この未来は変えられるかもしれない。だが『今のまま』であれば『悪夢再び』は避けられない

い。

楽天的にも悲観的にもなってはならない。今のままの未来であればそうなるのだという事実を受け止め、それを回避するために行動を起こさなければ、白露の必死の警告はなんの意味もなくなってしまうのだ。

故に、二人は思考する。今できることが何か、今すべきことが何か。思考を絶やさない限り停滞はしないのだと知っている。

「……小転と悠生にもこのことは伝えておきましょう。こういう非常事態ほど、あの二人は頼りになるわ」

「そうだな。逆に優芽たちには伝えない方がいいだろうな。未来のこととなれば、あいづらは気負いすぎるし」

二人はひとまずの流れを確認し合うと、互いに頷き、話題を切った。

現時点で話せるだけのことは話し合った。いくら思考を続けることが重要だとはいつても、必要以上に考えすぎるのは単に自らの精神的負荷を大きくするばかりだ。

それに、今は未来のためにすべきことも重要だが、それ以上に大事なことがある。自分たちのために、泣きながらこの時代に訪れた娘——白露のためにできることを考えなくてはならない。

単に白露のいた未来を変えるだけでなく、今この時代にいる白露を、どれだけ愛し

てあげられるか。それを蔑ろにする未来など、あつてはならないのだ。

「そういえば逢依、いまさらだけどお前どうしてここにいるんだ？ 仕事は？」

「仕事は早々に必要なものだけ片付けて、後回しにできるものはしてきたわ」

「……お前、実は白露かわいくて仕方ないだろ」

ふい、と顔をそらす逢依の様子を見て、希繫は確信した。普段から身内にもそうでない相手にも適度に厳しく接しているこの香坂逢依は、間違いなく白露を猫かわいがりするつもりだと。

しかし、希繫は敢えてそれ以上何かを言おうとは思わなかった。おそらく、逢依にとつて「実の子供」の存在というのは、叶い難いと思つていた切なる夢でさえあつただ。

というのも、彼女は小柄である。ただ生まれつき小さな体格であつたのではなく、幼少時にまともな食事をとれず、栄養失調の果てに成長が止まつてしまつたが故に、小柄であるのだ。

ただ背が小さいだけなら、子供を産むのもただ人より難しいだけで済んだだろう。しかし、彼女の場合は子供を産めるだけ成熟した身体そのものが出来ていなかった。だからこそ、子を産むのは叶わないと思つていたので。

「目に入れても痛くないとか言い出しそうだな」

「目に入れても痛くないし、思いつく限り全ての方法で可愛がりたいわ」
 「お前もう自分のキヤラを見失いかけてるだろ」

呆れる様子を隠しめせず希繫が肩を竦めると、玄関のチャイムがその場の静寂を破った。

いつものように視線だけで「出る」と言われた希繫が、特に言葉を返すこともなくそれに従い、玄関のドアを開ける。

「はいはい、どちらさま——って、お前たちか」

「久しぶりだな、希繫。まあ、ついさつきORBには来たらしいが」
 「お久しぶりです、桐梨さん。ここ二か月ほどはご無沙汰でしたね」

ドアの向こうに立っていたのは、かつて希繫たちが関わった事件の当事者であり、今は友人として付き合いのある武城誠実たけしろせいじと古崎敬意こさきけいの二人だった。

友人とは言っても、希繫と誠実たちが行動を共にする機会は多くない。それは、希繫たちがレイドリベンジャーズに所属し、誠実と敬意がORBに所属しているせいでもあるだろう。

両者の基本方針は、レイドリベンジャーズが『人』を守り、ORBが『地球』を守ることを目的としている。そのために手段が異なり、ぶつかり合ってしまうことが多く、しばしば衝突し合うからだ。

「どうした誠実。お前の方からウチに来るなんて珍しいな」

「ああ、実はORBのこととは別に、ちよつとした問題が起きてしまつてな。少し話したい。上がらせてもらつていいか？」

「話？ ……わかつた、逢依も一緒でいいか？」

「ええ、香坂さんにも聞いていたくださいとお話でしたから」

実はこの時点で、希繫の予感は二人の話の内容をうつつすらと感じ取り始めていた。

理由は言うまでもなく「タイミング」にあつた。白露が未来から現代に遡り、希繫と逢依の元を訪れ、そして彼女の口から「蓬萊寺」の名が出た。

そしてそんな矢先に、かつて蓬萊寺の関わる事件に関与していた誠実と敬意の来訪だ。これで何も無いと思うことの方が難しい。

だから希繫はその悪寒の走る予感を直視しながら、これから聞く「話」が——『事件』が、既に起きていること、身に迫っていることを、確信していたのだ。

「あら、武城さんと古崎さん。あなたたちだったのね、いらつしやい」

「こんにちは、香坂さん。お邪魔しております」

希繫が二人を連れてリビングに入ると、既に逢依が人数分のコーヒーを淹れながら待機していた。

逢依の姿を見つけると、敬意が僅かに表情を緩めて彼女の手を取り、澆刺とした雰囲気

気で挨拶を交わす。

「相変わらず仲がいいな、あの二人は」

「まあ、敬意にとつては初めての女友達だろうからな」

「最初の出逢いは最悪だったけどな」

苦笑を漏らす希繋の言葉に誠実も頷くと、しばらく間を置いて、表情を引き締めた。

「さて……じゃあ本題に入ろう。といっても、どこから話そうか。とりあえず、今日ここに来たのは『ORB』の武城誠実としてじゃない。蓬萊寺の抜け鬼……『裏切り者』の用心棒としてだ」

「……だと思つたよ」

誠実と敬意には、ORBに所属するユナイトギア装着者の他に、蓬萊寺家を抜けて表舞台に戻ろうとする『抜け鬼』としての顔がある。

抜け鬼は決して多くはないが、それらは蓬萊寺家からの追っ手から逃げ延びるために互いに助け合い、ひとつのチームを作り上げた。それが『裏切り者』である。

その中でも特に腕利きであつた誠実は裏切り者の用心棒として、最も追っ手の蓬萊寺と交戦を重ねている手練れであるのだが――。

「実は5日前、山梨県の青木ヶ原に身を隠していた裏切り者の一人が、追っ手の蓬萊寺にやられた」

5日前、と聞いて、希繫と逢依の表情がわずかに強張った。

ついさつき、この話の「タイムリング」があまりにも良くないものだと言ったが、その5日前というタイミングは、まさに白露が未来からこの時代に来たその日だったからだ。

しかし、関連性を断じるのはもう少し話を聞いてからでも遅くはないと、希繫と逢依は視線を合わせて頷き合い、沈黙を守った。

「念のため、蓬莱寺家でない何者かによる犯行の可能性も一度は考えた。実際、殺人技術自体は高いやつではなかったからな、真つ向からやり合えば、そういう可能性もありうる。だが……議論の末にその可能性は否定された」

「蓬莱寺でなきやありえない、つてことか？」

「ああ。あいつは元々、暗殺を得意とする典型的な蓬莱寺家の殺人鬼だった。俺でさえ、一度隠れたあいつを見つげるためには向こうから声をかけてもらうのを待つしかなかったくらいだ」

当然のことではあるが、自分にせよ他人にせよ、生きる人を殺すためには攻撃しなければならぬ。そして攻撃するためには対象を捉えていなければならない。

見えない相手を攻撃することはできないし、攻撃できない相手を殺すことだって出来るわけがない。だからこそそヒトの防衛本能は、危険に対して抗うことよりも、身を隠し

てやりすぎすことを優先するのだ。

そして、抜け鬼の中でも高い実力を持つ誠実ですら見つけ出すことのできない隠密のプロフェッショナルを『殺す』ことができたとすれば、それは『抜け鬼』と同等以上の技術を持つ者しかありえない。

「あまりこんなことは言いたくないが、現代におけるあらゆる生物の頂点に立つ生命体は『蓬莱寺』だ。そこで殺人に関する技術を学び、そこから逃げ延びていた俺たちが敗北を喫するとすれば、それは蓬莱寺しかありえない」

「……なるほど。蓬莱寺が相手じゃ、ただのレイドリベンジャーズじゃ歯が立たない。抜け鬼の『裏切り者』か、蓬莱寺を撃退したことがある『絆の家族』でなきゃ、まともな勝負にさえならない」

「そういうことだ。……協力、してもらえるか?」

実はこの時、逢依は悩んだ。以前、絆の家族が蓬莱寺を撃退できたのは、世界中に散らばった多くの兄妹たちが力を貸してくれたからだ。

現状、かつてほどの被害は出ていない。世界中にいる兄妹たちは、今この事態を把握できていない。それに、できることならこんな危険に関わらせたくはない。

しかし——希繫は違った。

「当然だろ。絆の家族だぜ、俺たちは」

「――！」
希繫の言葉を聞いて、逢依の思考を曇らせていた無数の不安が吹き飛んだ。そうだ、自分たちは「生きようと必死になっっている人の手を取る」ための家族だ。

かつて両親が自分たちにそうしてくれただけのように、死に怯えながら、それでも必死に手を伸ばしている者がいるのなら、その手を掴んで引いてやるのが絆ファミリーの家族としての役目。

世界中の兄妹を巻き込みたくないのなら、巻き込まないための工夫と努力をすればいいだけだ。

「いいよな、逢依？」

不意にかげられた声に、力強い意志だとか、固い覚悟のようなものは感じなかった。ただいつものように、「困ってる人を助けたいんだ」と言うお人好し丸出しの言葉が、形を変えただけ。

だから、逢依もいつものように答えた。

「あなたがしたいようにやりなさい」

決意—チェンジー—

白露しろろが目を覚ましたのは、逢依あいつが夕食の支度を始めた頃だった。

部屋の中は薄暗く、周りには誰もいない。それは、氣を失ったあの林の中と一緒だ。しかし、白露の心に不安はなかった。

自分を包む布団の温かさ。枕に染みた大好きな母の匂い。そして遠くない場所から聞こえるスリッパの音。それがちよつとずつ近づいてきていることに気付いていたから。

「おーい、白露—?」

がちやり、とドアを開けてひよつこりと部屋を覗き込む父の顔を見て、白露は起き上がろうとはしなかった。

白露が何も言わず寝たふりを続けていると、彼は足音を立てず部屋に入り、白露の眠るベッドの横で腰を曲げ、彼女の顔を覗き込む。

「白露、そんなに幸せそうな笑顔を満開にしてちゃ、寝たふりにならないぞ?」

「えへへ……。こうすれば、お父さまが起こしてくれるかなって……」

この時、希繁きづなは生まれて初めて自らの内に秘める父性というものを自覚した。一切の

邪な感情を抱かないまま、目の前の少女を抱きしめたくて仕方なくなったのだ。

しかし白露が自らの実の娘であるとかわかつてはいても、実際にはまだ会ったばかり。その父性を、彼女に対してどのように表現してやればいいのかと、彼は葛藤した。

だが、そんな葛藤をする内に、目の前でにこにここと笑っていた白露が少しずつ不安そうなる表情に変わり始めたので、希繫は考えることをやめて彼女を抱きしめた。

「白露は甘えん坊だなあ」

「ご迷惑、でしょうか……？」

「まさか。自分の子供に甘えられて嬉しくない親がいるもんか」

普段の様子からは信じられないほど白露に甘い逢依のおかげで影が霞むが、希繫も白露に対してはかなり甘い性格である。

元々、甘やかし上手で子供好きであることに加え、逢依の体格的に肉体的な手出しはすまいと思っていたこともあり、彼もまた「自分の子」という存在を求めていたからだ。

そのせいかは不明だが、今の会話の流れからして、白露はだいぶ甘え上手な性格なのだろう。少し遠慮がちではあるが、なんだかんだで「甘えたい」という意思をきちんと表現できている。

そういった点はおそらく父親である希繫に似たのだろう。率直に言つて逢依は甘え下手であるし、逆に希繫は幼い頃から小転や悠生に甘えていたので、上手な甘え方を

知っている。

逆に、歳の割にやや小柄である点や、明るい茶色の髪などの表面的な部分では、逢依によく似ている。

本人の談ではその赤い目は父である希繫から受け継いだものであるらしいが、現代における希繫の目は黒く、ほとんど彼らしい要素はない。

むしろ、少し垂れ目な赤い目は、希繫の姉である小転こころによく似ており、いつも眠たげな目をしている彼女が目をぱちちりと開ければ、目は白露そっくりである。

「——よし、じゃあ逢依が夕飯を作ってくれてるから、一緒にダイニングまで行こうか」
 そう言って白露を離すと、彼女は少し名残惜しそうにしながら、少し遠慮がちに希繫の手を握った。

希繫がそうであるように、白露もまだ「現代の希繫」との距離を測りかねているのだろう。それでも、大好きな父に甘えたくて仕方がないのだ。

そんな白露の心情を推し量ってか……いや、おそらくただそうしかつただけなのだろう。希繫は白露の手を握り返すと、彼女よく知った優しげな笑顔を返した。

「……はいっ！」



「ほー、この子が未来から来たっていう希繫と逢依の子供か」

希繫と白露がダイニングキッチンに下りてくると、仕事から戻った悠生ゆうきが、夕食を待ちながら小転から事情を聞いているところだった。

白露にとつても見知った相手であるのか、彼女は特に困惑する様子もなく悠生に近づいていき、頭を撫でられるかと思いきや――。

「よーしよしよしよしよしー」

「わふっ!?!」

まるで犬を撫でくり回すかのように、わしやわしやと顔を撫で始めた。

さすがにその扱いは、と思つた希繫が悠生を止めようとしたが、白露が思いのほか抵抗していないところを見て、この光景は未来ではよくあつたことなのだろうと察し、止めようと伸ばした手を降ろす。

「でも、アレだね。今更ではあるけれど、やっぱり希繫の未来のお嫁さんって逢依ちゃんだったんだね」

悠生が白露を構いはじめて話す相手を失つた小転は、マグカップに牛乳を注ぎながら、今度は希繫に声をかけた。

「まあ、逢依はより取り見取りかもしれないけど、俺の女性の基準って逢依と姉さんだ

し、逢依が俺のことを嫌ったりしない限り、いつかはそうなると思ってたよ」

「うーん……確かに逢依ちゃんは女性としてハードル高いよね。料理上手で、気立てがよくて、仕事もできて、性格もいい。こんな子を捉まえて、理想が高くない方がどうかしてるよ」

二人の会話を聞いてか聞かずか、少しだけ頬に桜色を帯びた逢依が咳払いをすると、希繫は慌てて口を手で覆い隠した。逢依は、こういつた露骨な持ち上げ方を好まないからだ。

しまった、という表情をした希繫に、逢依が小さな声で「大丈夫だから」とだけ言って、彼を宥める。

普段、レイドリベンジャーズとして前線で戦う希繫は、大胆な行動力と経験に基づいた知識による判断力が強みとなる第二前線部隊のサブリーダー的存在だが、基本的には繊細で他者を気遣いすぎる性格だ。

特に心底から敬愛している姉の小転や、幼馴染であり一番の理解者である逢依と悠生に対しては、その性格が顕著に表れる。故に、ふとしたことで必要以上に気負ってしまいがちな彼を宥めるのは、逢依の役目なのだ。

「ごめんな、逢依。でも、持ち上げようとしたわけじゃなくて、ホントに本気の本心だから」

「わかってるわ。あなた、そういうの本当に下手なものね」

希繫を宥め終えると同時に、逢依も料理を一区切りして、食器の配膳に切り替えようとした時だった。

悠生にもみくちやにされていた白露が、逢依と一緒になって配膳を手伝い始めたのだ。おそらく、未来においても同じように手伝いをしていたのだろう。

この家に住む者たちには、血の繋がる親というものがない。血の繋がる親に毒を盛られた姉弟、暴力を振るわれた少女、育児放棄の果てに親を殺した青年。

絆で繋がる家族。言葉にすれば聞こえはいいが、実のところそれは「血で繋がる家族を信じられなくなつた者たち」であることを、白露は知らない。

希繫たち絆の家族は、その想いの強さに差異はあれども、心のどこかで血の繋がる家族を憎んでいる、という点で共通している。

しかし、白露はそうではない。絆の家族の中で生まれた子であるとはいえ、血の繋がりと絆の繋がりの両方を尊び、重んじている。

絆ばかりを重んじていた希繫にとって、白露のその姿はとても眩しく、そしてそんな彼女に応えられる親で在り続けることの重みを、もう一度その手を握り締めながら考え直していた。

「希繫。アイツは……白露は、きっとこれからの絆の家族にとって、間違いなく大切な存

在になる。お前は、そんなアイツにとつて、ちゃんと誇れる親でいられる自信はあるんだらうな?」

「……わからない。俺たちにとつて、誇れる親つてのは絆ファミリーの家族の母さんと父さんだ。あの二人みたいになれるかと思って思うと、正直あんまり自信はない」

だけど、と一息おいて、さらに続ける。

「誇れる親になれるかはわからない。でも、恥ずべき親にだけはならない。それは、白露が俺と逢依の子だつてわかつた時から決めてたことだ。それだけは……絶対に貫かなきゃつて思つてる」

「……満点の答えじゃあねーわな。だが、赤点でもない。ひとまず、今はそれくらいの気持ちでいた方がいいのかもしれない。あんま肩肘張つてると、逆になんもできねーしよ」

希繫の頭にその大きな手を乗せながら、悠生は彼にひとまずの合格点を与えた。しかし、それはあくまで現状の合格点でしかないことを、希繫はわかっていた。

これから先、白露は『未来』を変えようと様々な困難に見舞われることになるだろう。そんな時、彼女を支えることのできる存在は決して多くはない。そして、その数少ない存在の一人が自分なのだと、理解せざるをえなかつた。

「でもな希繫、これだけは覚えとけよ。白露が本当に頼りにしてんのは『最強』のオレで

もなく、『完全』の小転でもなく、『父親』のオマエと『母親』の逢依だつてことを」
「……ああ」

予兆—アンレスト—

翌日、希繫きづなと逢依あいにが仕事に行っている間、白露しろろは小転こころと一緒に街へと繰り出していった。希繫たちの家で生活を共にするにあたって、白露には足りないものが多すぎたからだ。衣類や一部家具はもちろん、彼女にはこの時代での戸籍さえない。

優芽の時はレイドリベンジャーズに入団することで国から特別に戸籍を作ってもらったのだが、今回はそういうわけにもいかない。白露のような幼い子供を、戦場に出すわけにはいかないからだ。

「さて、買い物は一通り完了したわけだけど……白露ちゃんは何か欲しいものはあるかな？」

「あ……いえ、もうこんなにたくさんのお洋服や食器類まで買っていたいていますし、これ以上はさすがに……」

「遠慮はいらないよ。逢依ちゃんから少し多めの予算をもらってるし、それにわたしだって可愛い姪に何か買ってあげたいしね」

この時代での交流はまだ昨日始まったばかりであるとはいえ、白露からすれば小転は既に十年以上も自分を見守ってくれた優しい伯母である。

もちろん白露も小転のことは素直に慕っているし、彼女の人となりはそれなり以上に理解しているつもりである。

だからこそ、白露は彼女がこうして優しく感情をそのまま表してくれることの珍しさ、そしてそれ以上に、彼女の思いの大きさを知っていた。

「では……ちよつとだけお言葉に甘えてもいいでしょうか」

「ちよつとだけ、なんて言わずに、たくさん甘えてくれていいんだよ。それで、何が欲しいのかな？」

無感動で無感情で無表情な小転の微笑み。けれど、どことなく優しげな、父とそっくりな笑顔。

白露はうーん、と少し唸って、くるりと視線を周囲に向けてみる。美味しそうなアイスクリーム、楽しそうなオモチャ、綺麗なアクセサリー。白露を魅了するものはいくらでもあった。

だけでもコレだ、というものを決めようとすると決まらない。どうしたものか、と思っていると、小転の白い手が白露の両目を覆い隠した。

「小転さまっ！」

「どれにしようか悩んだ時は、いつそ何も見ないで直感で決めてしまえばいいよ。わたしが手を離れたら目を開けて。そしたら最初に気になったものを言ってごらん」

「……はいっ—」

何も見ず、何も知らず、何も考えず、何も感じず、自らの思考と感覚を空っぽにする
と、小転の手が開かれた。

そして白露がゆつくりと瞼を上げて、視界をクリアにさせると――、

『――！』

悲鳴にも断末魔にも聞こえる不気味で不快な声が、彼女たちの頭上から降り注いだ。

「この声は……！」

咄嗟にその場を飛び退こうとするも、そこには白露だけでなく小転も立っていた。

音……『声』で即座に状況を把握した白露と違い、彼女は未だその場を動く気配がない。彼女を放つてここを動くことなどできるはずがない。

拙い、と思った時には既に遅く、その不快な声が自分たちのすぐ真上まで迫った時、白露は小転の唇が僅かに動く様子だけを見て、その目を瞑った。

「……。あれ……?」

「……大丈夫? 白露ちゃん」

恐る恐る目を開くと、そこにはレイダーの首を片手で締め上げ、吊し上げている小転の姿があった。

「ハ、小転さま……?」

「あーあ、せっかく可愛い姪とお買い物だつていうのに、本当に空氣の読めないレイダーだね、君は。君みたいな存在を、『身の程知らず』って呼ぶんだけど、知ってるかな？」

「!?!」

小転がその感情がまったく込められていない眠たげな眼でレイダーを睨むと、レイダーはまるで怯えるように暴れ始めるが、その首を締め付ける小転の手はまったくブレることがない。

だが、このまま暴れ続けられれば小転のすぐ近くににいる白露が危ないと判断したのか、小転はまるで空き缶を投げ捨てるかのように、軽々とレイダーを放り投げた。

「白露ちゃん、危ないからここを動かないでね」

「でっ、でも小転さまが……!」

「大丈夫だよ」

あの程度のレイダーなら、と言うと、小転は起き上がったレイダーに向かってゆっくりと歩き始めた。

白露の知る限り、小転がユナイトギアを纏ったところを、彼女は見たことがない。それは、彼女の見た『悪夢再び』と呼ばれる悲劇においても同様だ。

そして、レイダーに致命的なダメージを与えられる唯一の武器は、感情を威力とするELBシステム——ユナイトギアのみだ。生身でレイダーと対峙することなど、正氣の

沙汰ではない。

『!!』

「……元気のいいレイダーだね。でも、それだけかな」

大口を開けて小転に食らいつかんとするレイダー。しかし、小転はそんなレイダーのあらゆる動きを予知しているかのように、ゆったりとした動きのままそれらの攻撃をすべてかわす。

決して素早いわけではない。ユナイトギアを使っているわけでもない。なのに、レイダーを弄ぶほどの圧倒的な力の差を、小転は周囲にいる誰もに見せつけた。

「誰か、レイドリベンジャーズに通報してくれないかな。このレイダーをここに留めつつ、君たちを守ることは難しくないけど、わたしじゃこのレイダーを始末できないからね」

呟くように小さな声でそう言うと、ようやく我に返った周囲の何人かが、レイドリベンジャーズに通報する。

「さて、じゃあ付き合ってあげようか。10秒間だけね」



その後、本当に10秒だけ小転がレイダーを足止めすると、稲妻となつて現れた希繫によつて事態は収束された。

塵となつて消えていくレイダーを見ながら、白露は改めて、今起きた非現実的な出来事をリピートしようとしたが、それは希繫によつて制止された。

「小転姉さんが戦つてるところ、初めて見たか？」

「……はい……」

「凄かつたろ。あれで全然本気じゃないからな」

希繫が駆け付けけるまでの10秒間、結局レイダーは一度として小転を傷つけることができなかつた。

避けるだけではない。受け止めることも、受け流すことも、全ての動きが川水のようにゆつたりと動くばかりなのに、レイダーはその流れにまったく逆らうことができないでいた。

「あれほどの強さを持ちながら、なぜ小転さまはレイドリベンジャーズに入団なさらないのですか？」

「入団しないっていうか、入団自体はしたことがあるよ。でも、もう辞めたんだ。戦わなくてもよくなったからな」

戦わなくてもよくなった。そう言う希繫の表情はどこか誇らしげで、だからこそ、白

露もなんとなくではあるが、小転がレイドリベンジャーズを辞めた経緯を察することができた。

おそらく、小転がレイドリベンジャーズに入ったのは希繫や逢依を守るためだったのだろう。だが時が経ち、希繫たちはちよつとずつだが小転に守られなくてもよいほどに強くなっていった。だから、小転はそんな希繫たちを信じて、レイドリベンジャーズから去つたのだ。

「小転姉さんは凄いいんだぞ。未だに姉さんに憧れるレイドリベンジャーズはたくさんいるし、姉さんの名前を出すだけで怯むようなユナイトギア悪用犯罪者だっているくらいだ」

くつくつと笑いながら話す希繫の表情からは、それが本当なのか冗談なのかは察せられなかったが、白露はそれを真剣な表情で聞いていた。

少し離れたところで他のレイドリベンジャーズに事情を聞かれている小転の耳に届いていないことを祈りつつ、希繫はその表情をいつもの柔らかい笑顔に変えると、

「でもな、姉さんがいくら凄くても、今の姉さんは普通の人間なんだよ。レイダーと戦う使命も、命を懸けなきゃいけない理由も、もう無いんだ。だから俺たちは、できるだけ姉さんが戦わなくていいように頑張らなきゃいけないんだ」

「……お父さまは、小転さまのことを本当に大切にしていらっしゃるんですね」

「そりやそうさ。小転姉さんに守られ続けてきたから、今の俺がいるんだからな」
そう言い残すと、彼は白露を小転に預けてその場を後にした。

小転が元レイドリベンジャーズだったからか、それともかつての小転を個人的に知る人物による聴取であったためか、予想よりはるかに早く事情聴取は終えられ、小転と白露は帰宅することができた。

しかし、ほとんどの買物物は終えていたものの、結局白露へのプレゼントは購入できず、その日の間ほんのちよつとだけ小転は不機嫌であった。

愛娘—ワンダー—

桐梨白露きりなししろろにとって、身近な人物とレイダーが戦う様を間近で見るのは、実はこの日が初めてであった。

白露のいた未来において、レイダーの存在は白露が今よりさらに幼い頃に殲滅された存在であり、「かつてそういう脅威が存在した」ということは、あくまで教科書からしか学ぶことのないものだったからだ。

故に、レイダーの脅威性への理解力は現代を生きる者よりも遥かに劣るし、レイダーを前にして取るべき行動を、未だはつきりとはわかっていなかった。

単純に、「脅威だと聞いているから逃げるべきだ」程度のものであって、今回も小転こころがその場を動かなかったとはいえ、自分だけでも回避に努めようとしなかったのは、そうした理由もあるだろう。

結論から言えば、白露は未だレイダーの脅威性を十分に理解できていないことを、今回の件で小転だけでなく、彼女伝いに希繫きづなや逢依あいにも知られてしまったのである。

しかし、だからといって希繫と逢依も、彼女にその脅威性をはつきりと説明することはなかった。というよりも、おそらく口頭で説明できる範囲のことは、未来の学校で学

んでいるはずだからだ。

あとは、日常に迫るレイダーの恐ろしさを、実際に彼女が味わう以外に、それを理解する方法はない。だが、そのためにレイダーへの対処を遅らせることは、レイドリベンジャーズとしても、親としてもあつてはならなかった。

むしろその脅威性をまったく知らなかったということは、それだけ彼女が今までレイダーの恐ろしさを知らずに済んでいたということなのだ。それは、親として喜ぶべきことであつた。

「白露のレイダーに対する若干の無防備さについて家族会議開始」

「二度と白露ちゃんにレイダーが近づかないように尽力すればいいので家族会議閉廷」

白露を寝かしつけた後、希繫の部屋で開かれた家族会議と称したプチ反省会は、開始3秒で終わりを迎えた。

今回の件で、白露が外出する際にはしばらく小転を同伴させることが決定となつた。あるいは、この家のメンバーの中では割と帰りが早い覚悟さとりにも頼もうかと思つたが、それは憚られた。

というのも、覚悟に限らず優芽ゆめと総交そうまにも、白露のことは「任務で保護した身元不明の子」として説明しているのである。

彼女たちが変えようとした未来は確かに変わった。だが、その結果として今度はさら

に恐ろしい未来が確定してしまったということを、彼女らに知られるわけにはいかなかったからだ。

白露にもそのことは説明しており、彼女が希繫と逢依を親と認識しているのは、「保護される以前の親に問題があったため、自己防衛のために自分たちを親と思おうとしている」ということにしたのだ。

希繫たちにとって、白露は大切な大切な愛娘である。それは間違いなく、絶対に絶対だ。

しかし、同時に優芽たちも大事な仲間であり、今となつてはレイドリベンジャーズとして可愛い後輩でもあるのだ。だからこそ、彼女たちに余計な心配をさせるわけにはいかない。

それに、もしもの時は頼りになる絆フアミリーの家族もいる。頼るべき時に頼ってこそ、家族なのだから。

「二応、母さ……婚代こんぎくさんにも連絡しておこう。あの人なら、白露だって安心できるだろうし」

「そうね。小転だつていつも家にいるわけではないもの。さつそく明日、婚代さんのところに連絡しておくわ。……ちよつと不安だけれどね」

不安。逢依がそう言うのと、希繫は少し考えて、なるほどと納得した。

彼らの母である笹倉婚代という人物は、現在の希繫たちの人格形成に最も影響を及ぼした人物であり、特に希繫と逢依はその影響が顕著であった。

希繫の万人に対して優しく、言い換えるならば「甘い」性格である点や、逢依の性格の根幹に存在する「愛」の捉え方などは、まさにそれなのだ。

——そう、婚代は「自分に接する誰もを愛し、誰にも優しい」人物なのである。

「……たぶんめっちゃくちゃ可愛がられるだろうな」

「容易に想像できてしまうわね……」

甘やかされる、と言い換えることもできたが、実際その母に育てられたのが自分たちであるだけに、その表現は躊躇われた。

予想と呼ぶにはあまりにも説得力がありすぎて、もはや確信と言っても差し支えはないだろうが、白露が墮落しない程度に可愛がってくれることを祈りながら、逢依は笹倉家に連絡を入れた。

逢依が連絡している間、ふと今の話の流れから、希繫はかつて自分たちが婚代の家で世話になっていた頃のことを思い出していた。

まだ自分たちが幼い頃、血の繋がった親から逃げ続けてこの街へと辿り着き、しかしついに行き倒れて死を待つばかりだった自分たちに、婚代は手を差し伸べてくれた。

当時は「親」のせいで「大人」というものすら信じられず、警戒心を隠しもせず、と

びきり可愛げのない子供だったはずだが、婚代はそんな自分たちをめいっぱい愛してくれた。

料理に毒は盛られない。躰と称して気絶するまで殴られない。身を守るために殺気や気配を辿る必要がない。まして学校にも行かせてもらったし、彼らが望めば塾やクラブにすら行かせてくれた。

「……笹倉家を出てから5年経つけど、なんか1か月に1回は婚代さんの顔を見てる気がするな」

つい先月にも、ゴールデンウィークということで婚代の家へ帰省し、食事を共にした。そればかりか、小転に至っては泊りがけて休日を満喫したのだから、今後も婚代との交流が途絶えることはないだろう。

「連絡したら、たまに小転か誰かが様子を見に来るのなら、了承してくれるらしいから、お願いしておいたわ」

「あー、確かに婚代さんならそのくらいの条件は出しそうだな」
「そうかしら。別に様子を見に行かずとも、白露ちゃんが粗相をするようには思えないけれど」

否定、とまではいかずとも、疑問を抱いているような逢依の様子に、希繫は少しだけ苦笑しつつも言葉を返した。

「粗相がどうこうじゃなく、白露の不安を取り除くためだよ。現代に来てまだ一週間、まして心を許せる相手と生活を始めて二日だ」

「けれど、現代の絆ファミリーの家族を信用していかないわけではないはず。婚代さんにだけ問題があるとは思えないわ」

「信用してないわけじゃないさ。でも、信用しきれてるわけでもない。俺とお前は『親』だから別だろうが、俺の見た限りじゃ、白露はまだ姉さんと悠生にも慣れていない。だから婚代さんは心配したんだろう。白露が抱えるだろう「不安」って点をな」

希繫の話を聞いて、逢依はふむ、と少し俯き気味に思考を巡らせた。確かに、思い返してみれば白露は悠生と小転に対し、警戒心はあまりないものの、かといって積極的に近寄ろうとはしない。

悠生や小転から声をかければ普通に対応しているにも関わらず、白露の方から二人に声をかけているところを、逢依は見たことがなかった。希繫がその点に気づけたのは、彼が恐怖心や不安という、「ヒトの弱さ」に敏感であったからだろう。

確かに、改めてそういう点を振り返ってみれば、白露を婚代の家に預けることには、一度本人と話をすべきだ。

この二日でわかったことは、白露はあまり自己主張が強くないということ。希繫と逢依がこの話をすれば、彼女は自分がどう思おうと、それを了承するだろう。

だからこそ、希繫と逢依はこの話を彼女にするにあたって、できる限り慎重にならなければいけないのだと自覚した。彼女の身を思うあまりに、彼女の心を傷つけたのは、あまりにもバカバカしい。

身と心。これらを天秤にかけてどちらかを選ぶのではない。子供を思うのであれば、どちらも守り抜いてやるのが親なのだ。

「希繫。ヒトの弱さを察し、理解してあげられるあなたなら、白露ちゃんの悩みや苦しみをきつとわかってあげられるはず。だから……頼んだわよ」

「逢依にそれだけ期待されちゃ、やらないわけにはいかないな。けど、俺のやつてることはそんなに大それたことじゃない。誰でもできることを、ちよつとだけ気にしてるだけだよ」

希繫と逢依。互いを想い合いながらも、未だ結ばれているわけではない二人の間に来た、白露という娘。

それは彼らが強く望みながらも、決して手に入れることはないと思っていた至上の宝。だからこそ、彼と彼女はその手に握りしめたものを離さない。

白露は言った。自分の弱さが逢依を守れなかった原因だと。だが、希繫と逢依は、その言葉を真つ向から受け止めることなどできない。

確かに白露は弱かつただろう。未だ親に守られるべき子供が、親を守れるほどの強さ

を持てるとは思えない。しかし、彼女はその悲劇の末、決して絶望せず過去の時代に存在する自分たちの下へと訪れた。

自分を知る人も、自分の知る人もいない時代に来てまで、彼女は親に縋った。それを弱さと言い切ることでできる者がいるだろうか。

彼女は自分の力の限界を認めたのだ。認めながら、それでも未来を変えるためにできることをやろうとしている。そんな彼女の想いこそが真の強さなのだと、希繫と逢依は信じている。

彼女の強さに報いるために、今の希繫と逢依ができることは、彼女を守り、未来を変えるための術を見つけること。そのために、レイダーなどに白露の命を脅かされるわけにはいかないのだ。

白露の意思は尊重する。もしも婚代の家に行くことが本当に嫌だというのなら、小転に頼んで今後も彼女の警護をしてもらう。幸い、小転は白露のことを気に入っている様子なので、断られることはないだろう。

逆に最も忌避すべき主張は、白露が「レイダーと戦うためにレイドリベンジャーズに協力する」と言いだしかねないことだ。彼女を守るために、彼女を危険に晒したのでは、あまりにも本末転倒がすぎる。

彼女は桐梨白露。ユナイトギア装着者でもなければ、レイドリベンジャーズでもな

い。ただの桐梨白露は、希繫と逢依にとって奇跡にも程近い宝なのだ。

その宝に悲しみや恐怖を与えるべき存在があるのなら、彼らはそれを許さない。

感情―プレイ―

白露がレイダーと遭遇した翌日から一週間、レイドリベンジャーズ永岑支部では軽度のパニック状態が続いていた。

あのレイダー襲撃がまるで何かのトリガーを引いたかのように、連日レイダーが市内に出現し、永岑支部のレイドリベンジャーズたちはその対応に追われていた。

「永岑市内において、レイダーと思われる多数のエネルギー反応を検知！」
「座標特定。モニターに出ます」

モニターに表示されたのは、永岑市南部に位置するA―09エリア。

レジャー施設が多く並ぶ永岑市の娯楽スポットであり、おそらく市内で最も人口が密集するとされる区域であり、ともなれば当然、レイダー出現時の被害が甚大なものになりかねないポイントだった。

これを見た逢依は、即座に被害状況の確認と、レイダー出現情報の発信、避難勧告を出すように指示すると、攻撃隊のメンバーに各々の役割を割り振った。

「最前線メンバーは希繫・望月ちゃん・空宮くんの3人。望月ちゃんはレイダーの行動範囲を把握しつつ誘導、希繫が確固撃破していくわ。空宮くんは二人が取りこぼしたレイ

ダーを処理」

最前線メンバーの中でレイダーを確実に撃破できるのは正規ELBシステムを持つ希繫のみ。よって、作戦の主軸となるのは希繫となる。

とはいえ、望月と空宮のサポートは決して軽んじることのできるものではない。簡易ELBシステムは正規のものと違い、レイダーを撃破できるだけの致命性がないとはいえ、確実にダメージを与えることのできる武器である。

まして、望月の単体戦闘力については、希繫を軽くいなせるだけの力があり、こうした殲滅戦において彼女のタフネスは大いな戦力となる。

「狙撃隊の諸星くんは三人の援護をしつつ、状況の把握に努めて。何かあれば随時こちらに連絡。天宮くんは諸星くんの護衛をお願い」

そして、第二前線部隊唯一の狙撃隊メンバーである諸星の役割は、前線の死角を常に把握しつつ、そこに入った敵を攻撃。その死角から弾き出すか、仲間にそれを伝えることで最前線メンバーのサポートをすること。

基本的に高速で動き続ける希繫は諸星でも把握しきれないので、主にサポートする対象となるのは望月と空宮となる。特に望月は最前線で相手の誘導をするためにあまり動き回れないので、諸星のサポートは必須だ。

「何か質問はある？ ……ないみたいね。なら、第二前線部隊・攻撃隊および狙撃隊、出

動」

作戦開始の号令を聞いて、前線メンバーたちは即座にオペレーションルームを後にした。た。

バチン、という音を立てて姿を消した希繫は、おそらく既にガレージに到着し、出撃したものと見て間違いないだろう。

こうした火急の事態において、希繫のようなスピード特化型は極めて有用だ。単独で現場に向かうリスクはあれども、現場は人口密集区域。相手がレイダーである以上、彼が一番槍として突貫するのは作戦的にもおかしなことではない。

「望月、諸星、空宮、天宮の四名がガレージに到着。出撃しました」

「希繫の現場到着予測は？」

「エクレールの展開を確認しました！ ですがこれは……ッ！」

モニターに映ったのは、エクレールの展開範囲。通常、装着者のコンディションを確認するためのものだが、そこに表示されたものは――。

「XD400Rへのエクレール展開……。XD400Rを自らの肉体の一部として認識^{思い込む}することのできる、希繫にしかできない荒業……」

ELBシステムに共通する性質。それは、装着者の感情や思想に応じて、ギアの出力を向上、あるいはギアの持つ力の変質を行うこと。ユナイトギアが「感情を威力に換え

る」と称される、根底的な性質だ。

故にユナイトギアを纏う者は総じて感情の起伏が激しく、そうでない装着者はそれを補うためにデトネイターを服用するのだが、この感情や思想に応じて力を生み出すという点を逆手にとったのが、希繫の『XD400Rへのギア展開』である。

感情や思想に応じて力の方向性を決める。それは即ち、装着者の認識、あるいは思い込みによって、ギアの力の一部を変質させることができるということだ。

希繫の場合、本来であれば感情を持たないバイクがギアを纏うことはできないが、彼はバイクを「装備」ではなく「肉体の一部」として思い込むことでエクレールの展開範囲を拡張し、出力をブーストさせることができるのだ。

「桐梨、現場に介入しました」

「まずは市民の避難が優先よ。市民とレイダーの位置を把握して希繫に伝えなさい。望月ちゃんと空宮くんの現場到着予測は？」

「あと15分ほどです！」

今回、出現したレイダーの勢力レベルは「個」と「群」の間に位置する「徒」。15頭以上30頭未満が対象となる勢力で、「第二前線部隊が単独で処理すべき」と判断される規模では、最大となる。

そのため、個レベルの時と違い、希繫が最優先すべき行動は「レイダーの駆除」では

なく「市民の防衛および避難誘導」であり、避難の完了を確認した後か、あるいは他の前線メンバーが到着するまでは積極的な戦闘行為はすべきでないとされる。

(この一週間、続けざまに繰り返された襲撃によって、永岑支部のレイドリベンジャーズたちのフィジカルコンディションは著しく消耗している……)

戦況の確認と対応に追われながら、逢依は今回のレイダーにより連続襲撃について思考を巡らせていた。

そもそも、レイダーが出現する頻度とは、本来ならば週に1度ほど個レベルの勢力が確認される程度であり、週に3度、時には群レベルの勢力が出現する永岑市は、誰がどう見てもおかしい状況に陥っているといえる。

しかし、今回はその永岑市でさえ異常事態だと認識する、徒く群レベルの一週間連続襲撃。これがただの悪い偶然であるのなら、その偶然が途切れるまでの付き合いだと割り切れる。

だがもしもそうでないのなら。この異常な現状が、何かの「理由」があるのなら、その理由を取り除かない限り、この逆境はいつまで続くかわからない。

(レイダーは感情から生まれ、感情によつて形を成す。理性という制御装置のない彼ら进行操作する術は、少なくとも現代の人類には存在しないはず)

つい先月、希繫たちと衝突した『仲間たち』^{パートナー}と呼ばれる未来の戦士たちは、レイダー

カプセルと呼ばれる器具によって、レイダーの制御を行っていた。

しかし、あれは制御というよりもレイダーが持つ「ヒトを襲い、感情を貪る性質」を利用し、そのベクトルをELBシステムと呼ばれる「強烈な感情兵器」に向けさせただけのもので、根本的な「制御」とは異なるものだった。

だからこそ、今のこの状況は現代の人間だけでなく、未来から訪れた『仲間たち』^{パートナ}たちも異常と判断したのだ。

(あるいは操作しているのではなく、レイダーカプセルのようになんらかの理由で「レイダーの性質」がこの地に引つ張られているのだとしたら?)

レイダーの性質は、すでに語った通り「感情から生まれ」「感情によって形を成し」「感情を襲い」「感情を取り込む」という四つの点だ。

だがより詳しく言うのであれば、彼らは「負の感情から生まれ」「負の感情によって形を成し」「正負を問わず強い感情を襲い」「襲われたことによって生まれる負の感情を取り込む」のだ。

だとしたら、レイダーが優先的に襲うとすれば、その感情は——。

「隊長! 緊急事態です! レイダーとは異なる、膨大な感情エネルギーを検知!」

「感情エネルギー反応? ユナイトギアではないの?」

「ユナイトギア反応は存在しません。ですが起動していません」

ユナイトギアではない、純粋な感情エネルギー。それ自体は、人間ならば誰もが持っているはずのものだ。

実際、レイドリベンジャーズが避難状況を確認するために表示されるマップ上のポインタは、市内の感情エネルギーを感知することでその数を割り出している。

しかし、今しがた検知された感情エネルギーの出力は明らかに常人のそれを凌駕しており、まるでユナイトギアを纏っているかのような数値を叩き出しているのだ。

「ユナイトギアの起動を確認しました！ 波形パターン、照合完了！」

「このギアは……ッ！」

モニターに表示されたのは、逢依が「クリユスタルス」を纏う以前に使っていたユナイトギアの名前。

その名も――。

『シンクロナイザー』……ッ!!」

愛情—ウォリー—

それは、レイダーの連続襲撃が始まった最初の日。一週間前のあの日まで遡る。

逢依あいつのベッドで横になっていた白露しろろは、不意に目を覚ましながらも、布団から出るこ
となく、もぞもぞと寝返りを打ちながら、ふと思考を巡らせ始めた。

（今日はじめて見たあの異形……あれが、かつて世界中を恐怖へと陥れた侵略性生命体。
現代のお父さまとお母さまが、倒すべき敵……）

レイダーの存在は、かつて通っていた学校で学んだことがある。国際脅威的侵略性生
命体とされ、ヒトの負の感情から生まれ、強い感情を持つヒトを襲い、ヒトの感情を食
らう。

人間の体と心を襲うレイダーは、この時代において真つ先に駆除すべき人類共通の仇
敵であり、皮肉にもレイダーの存在が一時的とはいえ人間の絆を強くしたとも言われて
いる。

（ですが、それは「痛み」によって繋がった絆。痛みが癒えた人類に待っていたのは、か
つてと同じ『戦争』という名の同族争い……。お父さまの信じる、本当の『キズナ』と
はかけ離れていた……）

キズナ——それは希望を繋ぐもの。

誰かが自分の信じた希望を託し、託された誰かがその希望を育み、そしてその希望をまた次代の誰かへと託し、繋がり続けること。

故に、希繋きづなと逢依きづなから希望を託された白露は、痛みによって繋がる絆を、それを生み出した『レイダー』を、許すわけにはいかなかった。

(でも、あの時……小転さんがレイダーからわたしを守ってくれなければ、わたしは何もできないまま、何も果たせないままこの身を散らしていたはず……)

レイダーが恐ろしい存在だということは知っていた。レイダーが許せない存在だということもわかっていた。

それでも、白露はまだ幼かった。レイダーの存在に逸早く気付いていながら、小転こころを守るどころか、自衛すらまともにできていなかった。

(もつと……もつと強くならなくては。お父さまとお母さまを守るためにこの次代に來たのですから、お二人を守るほど強くなくては……)

自らの弱さを殺すため、白露はその幼い決意を強く握りしめた。



そして今、避難警報を聞いた小転に手を引かれながら避難していた白露の前に、その「許しがたい存在」が姿を見せていた。

暗くくすんだ灰銀色の体色。鎧にも似た表皮に、悲鳴のような鳴き声。間違いなく、

白露が「識っている」敵であり、白露が「知らない」敵。

「レイダー……。白露ちゃん、ここはわたしが対処するから、君は先に避難を——」

「いいえ、その必要はありません。戦う力なら……。わたしにもあります！」

白露が懐から取り出したのは、彼女が未来の逢依からもらった健康祈願のお守り。

『白露、このお守りはかつての私の相棒が宿っているの。だから、あなたが本当にやりた
いことを見つけた時、きっとこのお守りが力を貸してくれるはず。白露、あなたは自分
のしたいことに素直な子になりなさい』

脳裏に浮かぶのは、このお守りを受け取った時の言葉。あの時の母の表情はとても穏
やかで、普段はちよつと厳しい彼女の、本当の愛情を垣間見た気がして、白露はその時
のことを今も忘れられない。

そして——だからこそ、やりたいことを見つけた今、彼女はそのお守りの封を開け、そ
の中身を取り出した。

「それは……！」

「これが、お母さまがわたしに託してくださった希望……『シンクロナイザー』ッ！」

お守りの中にあつたのは、チョーカー型の待機形態を持つユナイトギア。白露のため
に、逢依が彼女に託した希望。

その希望が今、彼女の渴望に応えてその輝きを解き放つた。

『了解。ユナイトギア第四六六号・シンクロナイザー、桐梨白露に同調接続します』

放たれた白銀の輝きが白露を包むと、彼女の髪はエモーショナルエナジーによって白
銀へと染まり、その首元には彼女の髪と同じ色のマフラーが現れた。

その姿を見た小転は、ゆっくりと彼女の隣へと近づき、そして優しく白露の頭を撫で
た。

「……こうなったら仕方ないね。君がその道を選んだのなら、わたしがしてあげられる
ことは……君の初陣を華々しく飾ってあげる手伝いをするだけだね。止めてあげ
られないのは、悔しいけど」

「ありがとうございます。そして、ごめんなさい。でも……これがわたしのすべきこと、
やりたいことなのです。だから……！」

「君のしたいように、やるといいよ」

無感動で無感情で無表情な小転の手が、ゆっくりと撫でていた頭を離れ、その背を押

した。

「桐梨白露、推して参りますッ！」

『——ッ！』

白露の覚悟の叫びと同時に、レイダーの剛腕が白露を押し潰さんと振り下ろされた。

だが、いかにレイダーとの交戦経験がなくとも、白露もまた揺るがぬ信念を抱いてこの時代へと訪れた少女。故に、その信念を果たすためならば胸の想いが燃え盛る。

「シンクロナイザー！」

『了解。可能な限りこちらの判断でサポートします』

迫る剛腕を受け止めたのは、彼女の首元から伸びた柔軟にして堅牢なる伸縮自在のマフラー、シンクロナイザー。

戦闘経験がほとんど皆無に等しい白露を自らの判断でサポートする無双の一振り

……いや、無二の相棒。

「とやあッ！」

シンクロナイザーが剛腕を抑えている間に懐へと飛び込んだ白露の掌がレイダーの腹部を打ち抜くと、レイダーは僅かに後退しつつも即座に腹部から触手を伸ばし反撃へと転じる。

しかし、その程度の返しならば白露にとって想定範囲内。

「シンクロナイザーッ！ わたしにアームズをッ！」

『了解。アームズ・『御霊鎮之紅瑠璃』みたましずめのくるりを展開します』

白露の呼びかけに応じて現れたのは、彼女の身の丈を超える鏢なしの大太刀、銘——
御霊鎮之紅瑠璃。

エモーショナルエネルギーによる身体能力の向上補正がなければ間違ひなく扱いきれない巨大な刃を構えながら、レイダーの左腕を逆袈裟に斬り落とす。

『——ッ!?』

「まだ、この程度では終わらないことなどお見通しですッ！ シンクロナイザーッ！」

『了解。大邪一断たいじやいちだんを使用します。エモーショナルエネルギー、充填開始チャージ』

片腕を失い、悶えるレイダーから僅かに間を開けると、シンクロナイザーが地面を強かに打ち付け、その反動で白露は大きく飛び上がった。

そして空中で御霊鎮之紅瑠璃を大きく振りかぶると、彼女はその刃を躊躇なく振り下ろす。

『充填完了。大邪一断、いけます』

「とおやあああああッ!!」

振り下ろされた白銀の刃に曇りなく、決断の一閃はレイダーを容易く切り裂いた。

白露は灰となって散っていくレイダーに背を向けて、軽く呼吸を整えると、自分の周

困を見回して苦笑を漏らす。自分がこのレイダーに手間を取られている内に、その周りでは5頭のレイダーが小転によって抑えられていた。

「白露ちゃん、そつちが片付いたなら、残りのレイダーにもトドメを刺してくれないかな。わたしだと、抑えることはできても倒しきれないからね」

「かしこまりました」

既にグロッキー状態になっている残りのレイダーたちの首を刎ね、ひと段落つくと、小転は改めて白露に問う。

「さて……ひとまず片付いたけれど、希繫が来ないってことは、今のレイダーたちはおそらく別動隊。本来の勢力は永岑市内の別ポイントとみなすべきだね」

「そのようです。少し離れたところで、別のレイダーの気配を感じますので、間違いないでしょう」

「となると、とりあえず君の出番はここまで。本来の勢力には永岑のレイドリベンジャーズが当たっているはずだから、わたしたちは避難しておこう。言い訳も考えておかないといけないからね」



避難した先のシエルター前にて、白露と小転を待ち構えていたのは、永岑のレイドリベンジャーズに所属するエージェントたちだった。

最初は身構えた白露だったが、エージェントの中には小転がレイドリベンジャーズであった頃の知人もいたため、彼女が白露の警戒を解き、レイドリベンジャーズが所属する護送車に乗って永岑支部へと招かれた。

そして、連行された先は言うまでもなく第二前線部隊オペレーシヨナルーム。普段より随分と声の抑揚が少ない逢依が二人を迎えた。

「果たしてどこから問い詰めるべきかしら。でも、まずはこれよね。小転、わたしは白露ちゃんを出来る限り戦いに巻き込まないよう守ってもらうために、あなたと婚代さんに白露ちゃんを任せていたわ。なのに何故、こうなってしまったの？」

怒り、というよりも、苛立ち、というべきか。しかし逢依は努めて冷静さを保ちながら、小転に事態の説明を求めた。

小転も、彼女が冷静さを保っているためか、いつもの無表情のまま、促されるままに説明を説いた。この場に希繫がないことは、逢依にとつても小転にとつても都合であつたといえよう。彼は激情家ではないが、彼女らほど理性的でもない。

そして全ての成り行きを聞いた逢依は、小転に対して「そう、ごめんなさい」とだけ告げると、今度は腰を落とし、白露の目線に合わせながら、彼女に言葉を向けた。

「白露ちゃん。あなたは今回、とてもいけないことをしたわ。それが何かわかる？」

「……身に余る危険に、自ら飛び込みました。しかし、わたしにはそれを可能にするだけの力がありました！ 力があるのに、ただ足踏みすることなど……！」

「……『身に余る危険に飛び込む』ということは、決していけないことではないわ。時として、それをしなくてはならない時が、私たちにだってあるもの。だから、それ自体は決していけないことではないの。力のあるなしも、関係ないわ」

逢依はその強く鋭い眼差しを白露の視線から離すことなく、彼女に説き始めた。

怒りに任せて声を荒げることも、感情を高ぶらせて手をあげることもなく、ただ……白露の不安そうで、だけでも真っ直ぐな視線から、一度も目を離さなかつた。

「私たちレイドリベンジャーズは、レイダーという脅威から人々を守るために組織され、その力を発揮しているわ。だけれど、そんなレイドリベンジャーズでさえ、時にはレイダーとの戦いで命を落とすこともある。ユナイトギアがあつてもよ」

白露には伝わらないだろうが、逢依の記憶を過ぎつたのは、今まで死線を共にしながら、戦いの中で散つていったレイドリベンジャーズたち。

彼らは逢依と共に戦えるだけの力があり、そしてその力を振るうだけの正しい心を持った戦士だった。人々を守るため、国際脅威であるレイダーに怖じることなく立ち向かい、部隊の勝利に貢献してくれた。

だが——そんな彼らでさえ、レイダーという脅威性の前に敗れることがあり、そしてその「敗北」は、そのまま「死」という最悪の結末へと直結した。

「白露ちゃん、あなたが今回レイダーを斃せたのは、あなたに『力』があつたからかしら。それは本当に、あなただけで掴んだ勝利だった？ あなたはそれを可能にするだけの結果を示せた？」

逢依の問いに対する答えは、もちろん否だった。今回、白露がレイダーに対抗できたのは、シンクロナイザーによる自動サポートによるところが大きい。

そればかりか、彼女自身が戦つて斃したレイダーは1頭だけ。その周囲では5頭ものレイダーが、小転によって抑えられていた。もしも小転がいなければ、もしもシンクロナイザーの自動サポートがなければ、結果は予測するまでもない。

それほどに、白露の戦い方は不安定で、アームズを呼び出せただけでも僥倖。ギア特性を使いこなすどころか、発動することさえできていない現状では、逢依の語気が強くなるのも致し方のないことだった。

「白露ちゃん。私の言葉に返すものがあるのなら言いなさい。その言葉に、あなたが通すべき筋が通つていれば、私は何も言わないわ。私はあなたの言葉を否定することはあれども、遮つたりは絶対にしない」

「……何も、ありません……。慢心が過ぎました。お母さまの言葉を素直に受け止め、猛

省します……。ですが、これだけは……通したい信念だけは、言わせていただきます」
「聞きましょう」

逢依の瞳には、既にひとつの未来が見えていた。白露が自分と希繫の娘であるのなら、きつとその未来は変わらない。

しかし——だからこそ、彼女はその未来を、白露が言うであろう言葉を敢えて聞く覚悟を決めた。その言葉はきつと、逢依にとつて逃げることも避けることもかわすこともできないものだから。

「わたしは——桐梨白露は、悲劇的な未来からお父さまとお母さまをお守りするためにこの時代へとやってきました。だから……今は身に余る戦いでも、このまま背を向け続けることはできません！」

「……でしょうね。あなたが私の娘なら、そうに違いないわ」

結託—レイジ—

長野県かしのき榎軒町。20年前に3つの村が合併して生まれたこの町は、愛知県と岐阜県の両方に隣接し、レイダーの出現報告も比較的少ない平和な町だ。

殺人鬼集団『蓬莱寺家』を抜け、その追っ手から逃げ延びた武城誠実が辿り着いた安寧の地もまた、この榎軒町だった。

まだ蓬莱寺を抜けたばかりで、自分以外の人間に対し疑心暗鬼であった誠実に対して、この榎軒の住民たちは何も聞かず温かく迎え入れてくれた。

その恩に報いるべく、誠実はこの地を自らの第二の故郷ふるさととし、この町とその住民たちを守るべく国際環境修復支援団体『ORB』に入団した。

故に——今の武城誠実は普段の温厚で冷静な態度をまるで感じさせないほどに、自らの内から燃え盛る憤りの炎を露わにしていた。

裏切り者チームの一人が蓬莱寺の手にかかってから13日が経過したこの日、誠実がORBの仕事を終えて帰宅すると、何人かの町の住民が公民館へと向かって走っていくのが目に入った。

そろそろ夏も近いし、何か催し物の予定でも入ったのかと思ひ、ちようど通りかかっ

た知り合いに誠実が声をかけると、その人物は焦りと驚きを隠せない様子で、早口のまま彼に事態を説明した。

「雨戸屋の婆さんが不審者に襲われて大怪我したらしい！　今さつき救急車を呼んだが、早くても30分はかかるって……！」

「なっ……!!？」

雨戸屋というのは、この樫軒町に残る今では珍しい古ぼけた駄菓子屋で、些か前時代的というか、田舎にしても少し古臭さのある樫軒町にとつて、ある意味では代名詞的な存在だ。

だが、デパートもなく、コンビニも町内では2か所しかない樫軒町では、品が安く親しみやすい店主のおかげで、子供たちにとつてなくてはならない場所であるのも確かであったために、誠実はその言葉を受け入れるのに暫しの時間を要した。

誠実が我に返った時には、既にその知り合いも公民館に向かって駆け出していて、彼もひとまず荷物を自宅に置き、家で帰りを待っていた敬意けいも連れて、自らも公民館へと急いだ。

「医者ハッ!?　救急車はまだかッ！」

「まだしばらくかかるッ！　だが、このままじゃ……ッ！」

公民館備え付けの布団を赤く滲ませながら、雨戸屋の店主は苦しげに呻く姿を、町民

たちが悔しそうに見守っている。

蓬萊寺の殺人鬼として、人を殺す術の多くを学んでいた誠実は、すぐさま店主へと駆け寄り止血と状態の確認を行った。

(この刺され方、まさか……ッ！)

店主の傷を見て、誠実はあることに気付いた。腹部からの出血だけではわからなかったが、こうして傷口に近づき、患者の体に直接触れれば、『その状態』がいかに特殊なものかを察することができた。

しかし、今はその異常性や特殊性よりも、ひとまずの応急処置が最優先。患部には誰のものか衣服による間に合わせの止血がなされているが、一度それを清潔なガーゼと包帯に交換する必要があった。

「腹部から背中に貫通しているが、なぜか『内臓には一切の損傷がない』……。ならばまずは止血だ。現場でどれほどの量を出血したかわからないが、出血性ショックが起きた様子はない。処置を間違えなければ救急車の到着に十分間に合うッ！」

「とにもかくにも、まずはガーゼと包帯の交換ですね。ここから近いところに住んでいらつしやる方に調達をお願いします」

敬意が声を上げて呼びかけると、周囲で様子を見ていた町民の何人かが慌てた様子で公民館を出ていった。

誠実は店主の様子を注意深く観察しながらも、周囲の人々を落ち着けることにも意識を向けた。この状況で誰かが悲鳴や大声をあげて患者を刺激することは好ましくないと判断したためだ。

数分の間を空けて、包帯やガーゼの入れられたビニール袋や救急箱を持った町民たちが再びこの場に戻ってきた。

誠実は町民から受け取ったビニール袋から中身を取り出すと、そのビニール袋で手を覆いながら手際よく、患部を塞いでいる衣服とそれらを交換し、その後は町民たちを落ち着けることに尽力した。

店主の関係者や親しい友人だけを残して、あとはこの場から立ち去るように声をかけた。

「武城さん！ 救急車の音が聞こえてきた！」

「わかりました。では後は救急隊員に任せましょう。警察には連絡しましたか？」

「ああ、救急車を呼んだ直後にな。今は現場にいるはずだ。今は婆さんが倒れてたところを見つけたやつが聴取を受けてる」

雨戸屋の隣に住む店主の友人からの報告を聞いた誠実は、すぐにポケットから携帯電話を取り出し、ある人物に連絡をとった。

店主が負ったあの怪我の状態、そして唐突に現れたという『不審者』の存在に、彼の

本能が警鐘を鳴らしていた。今でなければ手遅れになりかねない。そう思い、コールを待つ。

『もしもし？ どうした誠——』

「希繫ッ！ 今から言うポイントに今すぐ来いッ！」

この悲鳴にも似た判断が間違いでないことを祈りながら、誠実は『キズナ』を呼んだ。



「ここだな、その駄菓子屋の婆ちゃんが襲われたって場所は」

「ああ。まだ血痕が残っている。……が、やはりだ。腹部を貫かれたにしては、明らかに出血量が少ない」

誠実の連絡からおよそ二時間後。愛車・XD400Rに跨って現れた希繫は、普段の穏やかな顔つきよりも少し険しい表情で、誠実と共に現場へと赴いた。

現場はやや長めの一本道。信号のない交差点まで80メートルほどあるかというところで、周囲に見えるものはひたすらの水田ばかり。交差点まで辿り着けば、そこを真っ直ぐ数メートルというところに、被害者の自宅を兼ねた駄菓子屋がある。

言うまでもなく見通しはよく、障害物になるようなものもまったくない。民家が並ぶ

区域からも少し離れているせいか、特に気にしなくても他人の足音が聞こえるような静けさだった。

「現場鑑識鑑定はついさつき終わつたばかりで、血痕はそのままの状態だ。だからおそらく出血は本当にあれだけなのだろう」

「……誠実、お前さつき被害者の状態が異常だつたつて言つてたな？ あれは？」

「患部は被害者の腹部。ちょうど臍へその少し上あたりだ。正面から背中にかけて何かが貫通し、そして引き抜かれたと見てまず間違いない。だが被害者の内臓にはまったく言つていいほど損傷がなかった。それがどういう意味かは、言わなくてもわかるだろう」

腹部から背中までを貫くほどの長さで鋭さを持つ凶器というものは、明らかな殺意を持たずに行われた殺傷行為において、まず用いられるものではない。

となると、凶器は間違いなく明確な殺意を持って用いられたことになる。だが、内臓を傷つけないよう、隙間を縫うように人体を貫くということは、偶然ではまずありえない。相手が殺意を持っているのならなおのことだ。

つまり、犯人は間違いなく、雨戸屋の店主を「傷つける」意図を持ちながら、それについて「絶対に殺すことがない」よう配慮したということになる。

だが、この「内臓の隙間を縫うように突き刺す」という行為は、意図的にやるために

は相当な技術を要求される。まるで砂漠に落ちた針の穴を見つけ、震える手で糸を通すような、そんな卓越した技術を、ただの通り魔的不審者が持つているはずがない。

だとしたら――。

「……蓬萊寺、しかありえないだろうな」

「そうだ。ヤツらは俺がこの町にいろことを知り、警告……いや、挑発してきた。なんの関係もないただの町民を襲い、彼らをいつでも殺せるといふ当たり前にして最悪の事実を、俺に突き付けてきたんだ……ッ！」

そう、もしもこの犯行が二人の読み通り蓬萊寺のものであるならば、今回の事件には意味がある。

このまま誠実が蓬萊寺から逃げ隠れし続けるのであれば、その蓬萊寺は間違いなく次の凶行を躊躇わないだろう。

故に、間違いなくこの犯行は誠実に対する挑発と警告。そのメッセージは単純にして明快。ただ一言、「逃げるな」と言っているのだ。

誠実はそのメッセージを理解すると、それに真っ向から向き合った。逃げない。逃げられない。彼にそう思わせるだけの理由が、この町には――この町の人々にはあった。

しかし、覚悟だけで乗り越えられる困難はあまりにも少ない。今回の困難が『蓬萊寺』である以上、それはなおのことだ。だからこそ、誠実は希繫を呼んだ。

確かに自分だけではどうにもならないかもしれないが、自分を助けてくれる人間がないわけではない。だったら、こんな時にこそ「助けてくれる人」を頼らなければならぬ。

「この町の人々には、返しても返しきれないほどの恩がある。俺のような素性のわからない人間を、彼らは受け入れてくれた。何度も温かく声をかけてくれた。だから……俺は逃げない。逃げられないッ！」

「……わかった。ひとまず今日は俺がお前んちに泊まって、お前たちを警護する。本格的な増援は明日だ。いいな？」

「ああ。恩に着る」

不吉―メツセージ―

6月21日。誠実に呼び出された希繁は、彼の護衛と近隣の警護を兼ねて武城家に泊まった。その日はどうか何事もなく朝を迎えることができたが、いつまでもこんな風に怯えて過ごし続けるわけにもいかない。

希繁にはレイドリベンジャーズの、誠実にもORBとしての仕事があるし、そうでなくとも諸悪の根源とも言うべき元凶がはつきりしているのに手を拱いているのは臆病風に吹かれるにも過ぎるというものだ。

だからとて、焦燥に駆られ事態を急ぎ、仕損じるのも愚かしい。相手が相手だけに、ただ仕損じるだけなら儲けもので、よほど運がよくなければ四肢のひとつくらいは持つていかれるだろう。最悪は死に直結というのも悲観的な予想ではあるまい。

それだけに、この案件は慎重でありながらも早急な解決が求められた。それは二人自身のためでもあり、この町で怯え震えている人々のためでもあるのだ。

「おはようございます、桐梨さん」

「おはよう、敬意。誠実はもう起きてるのか？」

「はい。既に朝食をとられて、庭で精神統一のための素振りをなさっておりますわ」

敬意に案内されて武城家の内庭に赴くと、そこでは誠実が薙刀の木刀を一心不乱に振っており、その集中力たるや、希繫と敬意が近くで見ていることにも気づいていないようだった。

薙刀は長柄武器の一種であり、同じ長柄武器であり、突くことに重きを置く槍と比べると、斬る・払うことも目的に入れた汎用性の高い武器であると言える。

刀よりも長く、槍よりもできることが多い薙刀は、それ故に相応の技術を要求されるものの、使いこなせば徒手や刀・剣などでは相手にならない。リーチの差というものは、そのまま戦力の優劣に直結するのだ。

そして、誠実の動きはその「技量」という点において、素人である希繫の目から見ても明らかに高かった。

演舞のような美しいものではないが、型に忠実で動きに無駄がない。武骨とも評することのできるその動きは一振りに重みがあり、何より疲労からくる僅かな鈍さも感じない。

それはきつと、本気で修練したものであれば誰もができる動きなのだろう。しかし、そのために要求される努力は並ではない。血反吐だけでなく、汗も涙も吐瀉物も、吐き出せるものを全て吐きながら継続したものだけが行き着く『凡才の境地』なのだ。

「型に忠実なのに、まるつきり型通りにしてたら防ぎきれないところまでカバーしてる。

攻める分にも申し分なし。単純なスピードだけじゃきつと防がれるだろうし、俺でもあの間合いを越えて懐に入れるかどうか……」

「失礼を承知で申し上げますと、誠実様は戦闘における才能というものが極めて凡庸ですわ。桐梨さんや大郷さんのように身体的な強みありませんし、香坂さんのような情報計算能力もありません。あらゆる意味で「凡才」と言えましょう」

「ああ。だから誠実はできないことをすっぱりと諦めた。そして、理論上可能な技術であれば、それを実現可能にするまで研究と修練を重ねた。優芽と同じだ。優芽の『境地』が「戦術」だったように、誠実は「技術」を極めた」

「その通りです。よって、誠実様の強みは『理論上可能な技術を実現可能にする技術』と言えます。そして、誠実様はその技術の引き出しを幾つかの段階に分けて使いこなされます。その段階を測る定規が、あの「薙刀」というわけです」

戦闘における優劣を決める要因のひとつに、互いの持つ手札をいつ切り、それを戦術的にどう活用するかという『駆け引き』が存在する。

手札を切るタイミングが早すぎれば無為に自らの実力を晒し、遅すぎれば事態が追い込まれてしまう。そのため、誰もが可能な「技術」以外にこれといった優位性を持たない誠実は、この『タイミングの駆け引き』を非常に重視していた。

そして、そのタイミングを計るために、彼は技術の引き出しをいくつかの段階にわけ

て戦術を使い分けることにした。そして、その段階的な引き出しをいつ開くかを決める『定規』として、薙刀を選んだのだ。

「薙刀の届く範囲で用いるスタイル。薙刀では届かない範囲で用いるスタイル。薙刀を必要としない範囲で用いるスタイル。誠実様はそれぞれのスタイルを完璧に使い分けるだけでなく、その段階を確実に見極め、適切に手札を切ることでできる観察眼をお持ちです」

「いつそ機械的なほどの状況判断能力。そして機械では判断できない経験則や直感さえも最終的な決断に織り込む柔軟性。あれで全盛期の頃とは比較にならないくらい弱くなってるって言うんだから、蓬莱寺ってシヤレンならないよな」

「わたくしも元は蓬莱寺ですわよ？ 誠実様に比べればほんの一時期ですけれど」

うふふ、と小さく微笑む敬意のどことなく威圧感のある雰囲気には冷や汗を垂らすと、同時にようやく誠実がこちらに気付き、薙刀を振るう手を止めた。

演舞でもないただの素振りであるが、その精錬された無駄のない動作に見とれていた希繁としては、もう少しそれを見続けていた気持ちもあつたが、そういうわけにもいかない。

逢依に無理を言つて午前中はまるつきり仕事に行けないという旨を伝えているが、現在レイドリベンジャーズは連日レイダーの襲撃に対応しており、彼の抜ける穴はあまり

にも大きい。

おそらく、誠実もそうだろう。彼の務めるORBは自然環境の保護を目的としており、レイダーの襲撃が自然環境に影響を与えないなどということはありません。

よつて、今回の事件に限っては、普段あまり友好的とは言えないORBとレイドリベーンジャーズが協力体制にあるのだ。

特に、誠実の場合はORBの保有する『ユニイトギア装着部隊』の副隊長を務めているため、その穴はある意味で希繫以上だ。

「なんだ、見ていたのか。声くらいかければいいだろうに」

「あんな真剣な顔してる奴の邪魔できるほど、俺の精神は凶こころ太くないさ。それに、俺としてももうちよつと見ていたかったしな。めっちゃカツコよかつたぜ、誠実」

「世辞はいい。質実の道を往く俺の素振りが華やかでないことくらい知っている。見て楽しいものではないということもな」

そう言つて微笑む誠実の言葉に偽りはなかった。先にも言つた通り、確かに誠実の素振りは演舞のように華やかなものではなく、ただ鋭く、ただ素早く、ただ重いということだけがわかる質実の動きであつたからだ。

希繫としても、それを否定するつもりはない。彼の薙刀は誰かを魅せるものではなく、誰かを守るために振るうものであると理解しているからだ。

それでも、それを否定せずとも、希繫の心は自然と言葉になった。

「それでも、誠実の振るう薙刀は、俺や敬意にとつてすぐくカツコよく見えたよ。なつ、敬意？」

「はい、桐梨さんのおっしゃる通りです。わたくし、いつそう惚れ直してしまいました」
希繫も敬意も正直者だ。言葉飾らないというわけではないが、ネガティブな言葉でない限り、彼と彼女は自分の本心をそのままぶつけようとする。

その素直さに、その健気さに、これまで幾度となく救われてきた誠実だからこそ、この二人の良いところは把握している。

故に、希繫と敬意の賞賛を斜めに聞き流すことはできなかった。彼の本心と彼女の本音を真正面から受け止めて、ただ一言しか返せなかったのだ。

「……そうか。ありがとう」

今度こそ「うれしい微笑み」で告げた言葉。この感情を信じる限り、その言葉を信じられる。



(まさかこうも早く蓬萊寺が動いてくるとは。いえ、むしろ今だからこそ、かしら。レイ

ダーの連続襲撃にレイドリベンジャーズが対応している今だからこそ……と思うべきでしょうね)

昨晚、夜も更けているというのに、希繫は一本の電話を受け取ると、すぐさま身支度を整えて家を出てしまった。

普段とは明らかに慌て方が違うと察した逢依^あは、敢えてそれを止めはせず、ただ「ひと段落したら連絡を入れなさい」とだけ告げて彼を送り出した。

連絡は、それからわざわざ数時間後に届いた。電話ではなくメールということは、思いのほか余裕があるのか、逢依はひとまず安堵したが、その内容に目を疑った。

『すまん、蓬萊寺絡みと思しき事件に関わっちゃった。ワリイけど明日の午前中だけでも休ませてもらえないか？ 誠実が思いのほか参ってるし、護衛とパトロールもしなきゃいけないんだ。あと白露^{しろろ}には誤魔化して伝えておいてくれ』

随分とこちらのこととも考えず要件だけをさらっと言いつ切るメールに多少の呆れもあつたが、それよりも気になるのは「蓬萊寺絡みの事件に関わった」という一文。

誠実の名前が出た時点で、彼が被害に遭ったのか、あるいは彼に近い誰かなのだらうということは察したが、それはつまり「誠実だけではどうにもならない」ということの証明であつた。

元とはいえ、同じ蓬萊寺であつた誠実が対処できないほどとなれば、相手もそれなり

以上の實力を持つてゐることは明らかだ。以前の会話で、近々こういつた事件に巻き込まれることは予想していたが、まさかこうも早いとは思わなかつた。

(今の状況でレイドリベンジャーズは動かせない。だからといって、相手が蓬萊寺である以上、小転ここまを希繫の元へと向かわせるわけにはいかない。ここは希繫を信じるしかない……)

本当ならすぐにも駆け付けたい。しかしレイダーの連続襲撃をギリギリで退けている今、希繫という戦力を一次的に欠いた状態でさえレイドリベンジャーズにとつては大きすぎる穴なのだ。

永岑支部に所属している『ユナイトギア装着者』はわずかに10名。希繫を欠けばたつたの9名だ。ELBシステムであれば簡易型でもレイダーを抑えることは可能だが、致命的なほどに決定力に欠く。

しかも第二前線部隊は基本的に希繫を一番槍として投入し、それを切り札として戦線を展開していく。司令塔である逢依が前に出ることは、それだけで急事と言える。

(これまでの流れを見る限り、おそらく今日もレイダーはこの永岑を襲うはず。如何に無敵の第一前線部隊だつて守れる範囲には限りがある。第二前線部隊が前に出ないわけにはいかない)

希繫のことを信じる彼女だからこそ、その不安は増していく。逢依の信じる希繫は、

困つてゐる仲間を決して見捨てないお人よしだ。自分が損をしてもいいから、誰かの笑顔のために頑張れる人間だ。

いつだか彼に問いかけたことがある。「もしも溺れている子供が二人いて、自分を含めて二人乗りのボートしかない。子供ではオールは重くて焦げないから、自分を犠牲にはできない。もしそんな状況ならどうする？」という、意地の悪い問いを。

だが、彼は迷わず答えた。

『その子たちを二人とも乗せて、泳いで運んでいけばいいだけじゃないのか？』

なんのこともない表情で、むしろそれ以外の答えなど他にあるのかと逆に問いかけるような口ぶりで、彼は即答した。

故に、逢依は今までどんな時でも希繫のことを信じきってきた。彼はよく無茶をする。無理だつてするし、無謀なことだつてわかつていても手を伸ばす。それでも——彼なら救うべき人をみんな救い、自分のこともきちんと守り切れると信じてきた。

だけど、だとしても、今回の事件ばかりは手放して信じきる自信がなかった。相手が蓬萊寺とわかつてしまえば、無茶も無理も無謀もしてほしくはない。彼らが相手なら、どんな状況だつて絶対安全とは言い切れないのだから。

それでも——彼を愛する心に従うほどに、彼を想う気持ちが強くなるほどに、希繫が誰かのために——誠実と敬意のために無茶して怪我して、無理して傷ついて、無謀に

突っ込んでボロボロになることが目に見えてしまう。

（お願い希繫……無事で戻ってきて。どんなにカッコ悪くてもいいから、どんなにボロボロでもいいから、お願い……！）

静かな願いが、静寂の朝に消えていく。

迎撃―デスパレート―

希繫きづなが食事を終えて身支度を整えると、既に玄関先では自らの愛車である青いGLX 1100に跨った誠実せいじが待っていた。後部シートに敬意けいも乗せている。

少し慌てて希繫もXD400Rに乗ると、ナビゲーションモニターに「CALL」の4文字が表示された。躊躇ちゅうちゆいなく「許可」をタップすると、ヘルメット内部のスピーカーに誠実の声が響く。

「まずは民家から離れるぞ。おそらく向こうもこちらの動向を探っているはずだ、人気のなくなつたところで必ず仕掛けてくる」

「わかつた。ならできるだけ開けた場所に行こう。案内は頼むぞ」

「ああ。わかつているとは思いますが、相手は蓬萊寺だ。道中も気を緩めるなよ」

言うと同時に、目的地までのマップデータが転送されてきた。おそらく途中ではぐれたとしても、ここで合流するということだろう。

念のため、先んじてユナイトギアを纏っておくことも考えたが、民家が立ち並ぶ中の装着は、周囲の人間に無用な不安を煽りかねない。

今回の事件に蓬萊寺が絡んでいるということを知るのは、今のところ希繫たちだけな

のだ。

「準備はいいな。行くぞ」

返事を聞くまでもなく、誠実と敬意を乗せたGLX1100が武城家に背を向け駆け出した。少し遅れて、希繋のXD400Rもそれを追う。

しばらく互いに言葉を交わすこともなく走り続けていた希繋と誠実だったが、武城家を出て僅か十数分というところで、彼らを尾けるように後続する一台のバイクに気が付いた。

希繋がパッシングでサインを出すと、誠実もブレーキランプを灯して返事を返す。後続車が本当に蓬莱寺だとすれば、もはや躊躇している暇はない。装着だ。

「エクレール！」

「フアングバイト！」

『了解。ユナイトギア第四号、エクレール。桐梨希繋に同調接続アックセスします』

『了解。ユナイトギア第四八九号、フアングバイト。武城誠実に同調接続アックセスする』

二人がユナイトギアを纏った瞬間、後続のバイクもまた一気にその速度を上げた。

このまま逃げ切れることは不可能ではない。しかし、ここで相手を撒いてしまえば、また町民に被害が及ぶだけだということを二人は理解していた。

だからこそ、彼らは敢えて後続のバイクを誘うようなスピードで、目的地である街は

ずれの採石場へと急ぐ。だが――。

「……………？ 何か構えて――」

ミラーに映る後続車のライダーが構える何かに気付いた直後、構えられた「それ」から発射されたものが、希繫の僅か数メートル後方で爆発する。

耳を劈く爆音と、背中を焼くような熱量に、全身を震わせる轟震^{ごうしん}。ユナイトギアのアームズとして、何度か対峙したことのあるそれは……………。

「グ……………グレネードランチャー!?!」

『次弾、来ます』

エクレールの警告から間もなく、再び発射されたグレネード弾。ミラーでは軌道を完全に把握できないため、希繫と誠実^{まこと}は発射と同時に現在の走行軌道を大きく逸れた。

グレネード弾に限らず、多くの射撃武器というものは、特に誘導性がなければ理論的には真つ直ぐにしか飛ばない。実際は風向きや手ブレなどもある程度の影響を及ぼすが、おおよそ向かう方向は前進のみだ。

だからこそ、二人は先ほどの着弾地点から次弾のおおよその位置を割り出し、そのポイントから大きく逸れたのだが、しかし蓬萊寺は甘くはなかった。

「んなツ……………!?!」

「希繫ッ!?!」

先んじて放たれた攻撃から、着弾地点だけでなく、それが及ぼす爆風の威力と範囲も割り出していた希繫は、「その範囲から出れば爆風の影響を受けない」と思っていた。

しかし、一発目と二発目では、放たれたグレネード弾の威力が異なっていた。想定を上回る威力と範囲にて、希繫はその影響域から逃げきれずにいたのだ。

XD400Rから振り落とされた希繫は、どうにか着地に成功するものの、ここはまだ町を少し外れたばかりのあぜ道。しかも周囲には水田があり、道幅は言うまでもなく狭い。

「チツ、XD400Rを拾ってる暇がない。悪りい誠実、へまった」

「いや、ひとまず人気の少ないところまでは誘き出せた。蓬莱寺相手なら上々だ」

『対象、8メートル前方で停止を確認しました。警戒を』

フアングバイトの警告に従い、敬意は得物の大剣を構え、誠実もまた薙刀のアームズ『ホオジロ』を展開した。

今回は蓬莱寺家が相手とあって、希繫も最初から説得モードではいられず、その肉体を電気に変換して臨戦態勢に入っている。

「君たちが……いや、君が裏切者か。蓬莱寺誠実」

「……既に捨てた名を呼ぼうとは。随分と慕ってくれる貴様は誰だ！」

誠実の呼びかけに応じるように、被っていたヘルメットを脱いでみせたその人物は、

金の髪と目を持つ異国人。顔や表情は中性的であるが、体つきや声からすると、男性であることは疑うべくもない。

しかし、外観など問題ではない。かつて蓬萊寺であつた誠実からして、「彼」の顔を見た瞬間、その背筋に走る悪寒に身震いした。

「君の名を忘れるものか。故に、君も僕の名を忘れてはいないだろう？　僕を、この――

蓬萊寺ウィルフを！」

「……ッ！　ウィルフ・ミルワードか……ッ！」

蓬萊寺ウィルフ。本名をウィルフ・ミルワードとする彼こそは、蓬萊寺であつた頃の誠実に自らに暗殺のイロハを教え込んだ師の一人である。

元より技術の飲み込みが早かつた誠実は、彼が教えた技術を端からまるつと飲み込み、わずか一年でそれらを自らのものとした優秀な殺人鬼であつた。

しかし、それは同時に彼が身に着けたほとんどの技術をウィルフもまた有しており、まして「まだ彼が教えていない技術」というもの存在していることは間違いなく、誠実にとつて疑いなく難敵となりえることは想像に容易い。

「やはり覚えていてくれたんだね。まして、ほとんど口にしたことのない「そつちの名」まで覚えていてくれるんだなんて、やはり君はいい弟子だ」

「貴様から技術を学んだことは否定しない。だが、師と呼ぶほど慕つた覚えもない。そ

れよりも、下っ端の蓬萊寺でさえ雑用など滅多にこなさないというのに、貴様ほどの腕を持つ蓬萊寺がなぜこんな任務を……！」

蓬萊寺として、かつては自分こそが抜け鬼を追う側でもあった誠実だからこそ、この疑問は拭えなかった。

蓬萊寺家にとって、抜け鬼は確かに処罰の対象である。しかし、同時に「蓬萊寺の技術」を持つ相手を殺すという任務は、危険と成果の割合が見合わない『雑務』なのだ。

だからこそ、抜け鬼の処罰は専門の蓬萊寺か、あるいは切り捨てても問題のない下級蓬萊寺に任せられるというのが常であった。しかし、誠実の覚えている限り、ウィルフは前者でもなければ、後者でもなかった。

暗殺を主な任務しごととして請け負っているものの、殺人鬼としても確かな実力を持ち、特に夜襲においては姿を捉えることすら難しい上級蓬萊寺であったはずだ。

そんな彼が、なぜ抜け鬼の処罰などという下っ端仕事を率先して請け負っているのか。今回の処罰対象が誠実と聞き、懐かしさに惹かれたというわけでもあるまい。

表情を変えないままに困惑する誠実に、ウィルフは微笑む表情を保ったまま答える。

「弟子との久しい再会だから……というわけではないことは、わかっているだろうね。だけど、その先の答えを口にするには禁じられているのさ。なんせ、これは「当主様」直々の任務だからね」

「当主だと……ッ!? バカなッ! 蓬萊寺家の当代当主は14年前に……ッ!」
「そう、「本来の」当代当主は14年前に失踪された。だからだろうね。先代当主の妾の子が去年ようやく発見されてね。「教育」が終わったので、数か月前から当主の席に就かれたのさ」

不意に、バチン、という乾いた音が激しさを増した。

それは、音の元である希繫にとつても無意識のものであつたのだろう。ウィルフの視線が冷ややかに突き刺さるが、希繫は狼狽えることなく睨み返す。

「……未だに……」

「うん? 何か言つたかな、『ブガイシヤ』君?」

部外者。確かに、今回の事件は誠実と蓬萊寺の間に生まれた問題であり、本来であれば希繫がこの場にいないければならない義理などない。

誠実が協力を求めたとはいえ、彼はそれを突っぱねることもできたし、蓬萊寺と関わるなどという最大級の危険を冒してまで得られるメリットなど何もなかった。

だが——既に関わってしまった。蓬萊寺と出会い、こうして関わってしまった。ならばもう——部外者ではいられない。それに……。

「未だに……いや、言つても無駄か。目を見るだけでわかる。お前は「どうにもならない」タイプだ。自分の罪を贖うつもりもなく、罪を罪とさえ思わず……ただ「行為その

ものを愉しんでいる」目だ。そんな奴に、言葉を説くなんざバカバカしい」

「希繫……………」

「俺のポリシーは「罪を憎んで人を憎まず」だ。どれだけの罪を犯そうと、そいつに罪を贖うつもりがあるなら、そうするかもしれない可能性が1パーセントでもあるのなら、言葉で……………対話でなんとかしたいと思ってる。けど……………お前は「無理」だ」

全身を電気に換え、両足から放出されていた真つ赤な火花が、感情の猛りに応えて激しく嘶く。

今まで、希繫は幾つもの戦いを経て、その度に強大な敵の「強大たる所以」を見てきた。それらは皆、何かを守るために、誰かを救うために、必死にがむしやりに戦っていた。

だが——「蓬莱寺」は違う。絶対に果たさなければならぬ使命などなく、自らを貫き徹さなければならぬ志もなく、ただ自分の欲望と快楽を満たすために人々を傷つけ、そして殺める。

傷つく度に希望を掴み、抗うことでそれを繋ぎ、そして戦いが終わった後で敵も味方も関係なく笑い合える「絆」を育んできた希繫にとって、蓬莱寺という存在は——。

「くつつやべるのももういいだろ。お前は蓬莱寺だ。まぎれもなく、最低最悪の殺人鬼だ。改心する可能性なんて微塵もない。だから——お前は俺たちがここで止めるッ！」

「ふふん、ブガイシヤが随分と吠えてくれるね。だけど活きのいい獲物は嫌いじゃない。まして出来のいい弟子までもが食べられるとあつては、この殺戮的高揚感を抑えろという方が無理な話だ」

怒りを込めて吠え猛る声に、蓬萊寺の殺人鬼が嘲笑う。

そして昂ぶる感情は火花となつて、千鳥の声を響かせる。

激情のままに、己の信ず信念のままに。

蓬萊寺ウィルフーマーダー

先んじて殺意を駆り立てたのは、意外にも希繫きづなであった。常では殺意どころか戦意さえも大つびらに表さない彼が、今日ばかりはどういうわけか露骨に怒りをむき出しにしていた。

それでもユナイトギアが感情反転してレイダーギアとならないのは、彼の感情が「憎しみ」ではなく「怒り」によって爆発しているからか。

だとしても、自我によって制御しきれない感情は決して良い力とはなり得ない。まして、希繫の強みは「誰が相手でも一定の理性を保てること」にある。そんな彼が感情に流されてしまえば、強くいられるはずもない。

「エクレールツ！」

『了解。スパークステインガーを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

肉体を電気変換した希繫のスピードは、事実上この星のどこに対しても一秒未満で到達可能だ。それは当然、戦闘に際してどのような間合いであっても、一秒未満で詰め寄ることができていることを意味している。

蓬萊寺が相手だとしても、それは変わらなかつた。瞬く暇も与えずウィルフの懐へと

入り込んだ。無論、肉体が電気となつてゐる今では、質量を伴つた攻撃はできないが、それでも出来ることはいくらでもある。

「速い……！ この僕ですら避けるだけで手一杯とは、なかなかの仕上がりだ。いい餌を用意してくれたね、誠実^{せいじ}」

「俺の蹴りを避けた……ッ!? さすがに蓬萊寺、この程度は朝飯前かッ！」

「逸るな。お前の蹴りを避けられたのは蓬萊寺だからじゃない、ウィルフの実力だ。ましてこの狭い畦道、こちらの攻撃もあちらの回避も範囲が狭まっている。焦らず確実に仕留めるぞ」

電気となつた肉体をそのままぶつければ、相手の体を電気が冒し、その行動を麻痺させることも叶わないではない。だからこそ、希繫は敢えて電気変換したまま攻め手を進めた。

しかし、予想外だったのは相手の動きが希繫の蹴りを上回つていたこと。行動速度そのものは光に達していかないだろうが、おそらく僅かな予備動作——もはや希繫自身も気付いていない癖のようなものを瞬時に察し、行動を予測されたのだろう。

あらゆる行動に対して瞬時に行われる分析と予測。そしてそこからの反射的行動が、希繫の「光速の蹴り」を回避させた。

「いやあ、だけどこれは困つたねえ。電気を殺す方法なんてそうそう思いつかない。つ

てことはつまり、ひとまず君は無視して誠実だけ構ってあげればいいのかな？」

「させませんわ！」

敬意の大剣が、誠実に迫るウィルフの投擲ナイフを捉えた。しかし、手元を離れた武器を蓬萊寺が信用するはずもない。

彼女がナイフを払った瞬間、その腹部へとウィルフの蹴りが深くめり込む。息を吸う瞬間を狙いすまして叩き込まれた一撃は、身体的なダメージよりも、彼女の呼吸を僅かに止め、思考をも停止させた。

この僅かな「停止した時」を見逃す蓬萊寺ではない。吹き飛ばされた彼女が地面をバウンドしながら着地したその時、ウィルフのナイフがうつぶせに倒れる彼女の首を一突き——。

『充填完了。スパークステインガー、いけます』

——する直前、ウィルフの脳天を貫かんと発射された一本のスパークステインガーが、それを阻んだ。

当然、ウィルフはそれを回避することには成功したが、そのために明らかな隙が生じた。馬乗りになっていた状態で、一気に体重が浮いた瞬間を、敬意が振り払い、そのまま大剣でウィルフの腰を打ち付けると、彼もたまらず表情を歪める。

ようやく一撃。相手は誠実狙い。それを阻むために叩き込んだ一撃が精いっぱい、

希繫の光速の一撃はかわされた。この攻防で、誠実はウィルフの力量を再認識した。彼は、今の自分たち三人の力を合わせても、対等とは言い難いほどの難敵だと。

「助かりました。感謝します、桐梨きりなしさん」

「どういたしまして。それよりどうする？　今みたいな不意打ちじゃなければ、まとも
に攻撃を当てることさえできないぞ」

「かといってリミットブレイクは出来ない。あれは装着者の持つ正の感情が最大限に昂ぶった時にだけできる限定的な力。蓬萊寺相手に、良い感情ばかりが昂ぶるとは思えない……」

そうでなくとも、リミットブレイクは装着者の感情を蝕む。正規の方法でリミットブレイクした場合にも、ギア解除後にはしばらく感情の希薄化が見られる。ましてあれは3分間というあまりに厳しい制限時間つき。この状況では頼れない。

しかし、だとすれば蓬萊寺を相手にどれほどの抵抗が可能か。——いや、抵抗であつてはならないのだ。これは、蓬萊寺を「討つ」ための戦い。抵抗などという受け身な姿勢では、こちらが仕留められるのを待つばかり。

幸いにして、希繫は光速の機動力と豊富な技によつて様々な状況に対応ができる。誠実も、相手の力量と自分の実力を計るためにやや遅めの始動ではあるものの、対応能力という点では希繫にも勝る。

ならば、動きを見極め、相手の苦手とするスタイルを見つけだしてから一気に攻め込むのが現時点での最善策。言葉にしないまま、三人は頷き合い、そして動いた。

「エクレール！」

『撃ちます』

放たれた電撃の槍はウィルフを貫くことなく虚空へと消え、そして今度はウィルフの投擲ナイフが希繫へと迫る。

電気の肉体である希繫は、それに向かい躊躇いなく駆け出そうとするが、直前ウィルフの口角が上がったことに気付き、跳び退いた。

咄嗟の行動であったためか、十分な回避行動がとれずナイフは右腕を掠めた。しかし、今の体は電気だ。痛みなどあるはずもない。しかし——。

「こんな攻撃、なんの意味が——ッ!？」

ナイフがその身を透過しアスファルトに突き刺さると、僅かに遅れて全身を襲う倦怠感。

力が——否、電気が全身から抜けていく感覚に、希繫は再びその場を離れた。

「おや、案外すぐバレたね。さすがに察しいい」

「伝導体の鋼糸付きナイフを……! 加えてその手のグローブは高電圧にも耐えうる特別製の絶縁体か……ッ!」

極めて細く、気を配らなければ気付くことさえできない鋼糸は、その異常なまでの細さとは裏腹に、希繫の放つ超高電圧の電流に耐えきり、それを地面と絶縁体のグローブへと逃がす。

咄嗟にその場を離れたからよかつたものの、そうでなければ今頃は肉体を再形成するだけの電気を失い、実質的な「死」が希繫を襲っていただろう。

まして、エクレールのギア特性によつて生み出された電気は、彼の肉体であると同時にエモーショナルエナジー……即ち「感情」でもあるのだ。これを過剰に失えば、間違はなく廃人は避けられない。

しかし、それに気付いて何が変わつたわけでもない。いや、むしろ既にわかつていたことに、なお強い確信を得ただけのこと。

蓬萊寺は「殺し」のエキスパートだ。それは人だけに非ず、電気となつた希繫も例外ではないということだ。

先ほどの攻防を顧みるに、相手は希繫の放つ光速の攻撃を見切っている。だとすると、希繫の十八番である「クリムゾンインパクト」は、攻撃の瞬間に肉体を実体化させるため、事実上の使用不可能ということになる。

それだけではない。電気体は、光の速度を得る代償として質量を失う。それはつまり、彼の得意とするキック主体の格闘技は全て、相手を麻痺させるための電撃でしかな

くなるという意味だ。

相手が蓬萊寺ならば、麻痺程度で止まってくれはるはずがない。ある程度は肉体的ダメージを与えなければならぬ。だからこそ、希繫は電気体を解除するタイミングを見計らっていた。

（誠実の「見極め」がそろそろ完了する……。敬意と俺がああ蓬萊寺を引き付けている間にそれが終われば、攻撃に転ずる方法があるかもしれない。頼むぞ誠実……！）

「僕を相手にふわつと考え事とは度し難いねえ」

攻撃が最大の防御と言わんばかりにウィルフへの猛攻を仕掛けていた希繫であったが、この状況を打開する方法を模索するため、僅かに思考がダイブした瞬間を気取られた。

鋼糸付きの投擲ナイフがまたも彼の左腕を捉えつつ地面へと突き刺さり、希繫の肉体を形成する電気を奪う。肉体を形成するだけの電気が幾分か消費されたことで、彼の身体が数センチほど縮む。

電気さえ確保できれば元に戻るとはいえ、ここは水田の畦道。あるとすれば害獣よけの電線くらいだが、それを用いて回復するだけの時間を与えてくれるとも思えない。

『撃ちます』

「おっと、さすがに世界最高峰の兵器だね、ユナイトギア。人工智能が自己判断で攻撃を

行い、装着者を守るとは。いいものを持つているじゃないか、羨まし——ッ!？」

身丈が縮んだことでバランス感覚が崩れた希繫が態勢を戻す間、エクレールがオートでスパークステインガーを12発射出し牽制を行うが、ウィルフはこれすらも難なくかわし、余裕の言葉を返す。

しかし、そんなウィルフを唐突に襲ったのは足首を掴まれ、地面へと引きずり込まれる感覚。いや、「感覚」ではなく、まさしく足首を掴まれ、そしてそのまま彼を掴んだ手と共に、彼の足首が地面へと埋まっているのだ。

「これは……ッ!？」

「エクレールッ!」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』チャイ

希繫は充填開始チャイと同時に8つのスフィアから残弾23発のスパークステインガーを全てウィルフに叩き込むと、それを追うように敬意が先行する。

「チャージ完了までに、できる限りダメージを叩き込みます！ 二刀一対大鋏『夢椿』ゆめつばき……分刀!」

敬意の持つギミックウエポン『夢椿』は、二つの鯨包丁を一つに束ねた絡繰鋏である。故に、二刀を繋ぐ金具を解くことで本来の姿へと戻り、鋏形態の時よりも一撃の重みは失うが、手数が増える。

分解したとはいえ、巨大な刀ともいえる鯨包丁を二本束ねて扱う敬意の怪力から繰り出される二刀の連撃は、ただの二刀流とは一撃の破壊力が段違いに異なる。

一撃でも届けば、さしもの蓬萊寺といえど元は人間、確実に仕留めることができる。しかし――。

「さすがにもう、手札を晒さないわけにはいかなよねえ。……ねえ、テストマン?」

『了解。ユナイトギア第一四四号・テストマン、ウィルフ・ミルワードに同調^{アクセス}接続します』
「拙い……ッ!」

咄嗟に電気体を解除して敬意を引つ張り戻すと、ウィルフを包んでいた暗い鼠色の光がその眩しさを収め、その中からギアを纏ったウィルフが姿を現した。

「骨の、尻尾……?」

「いけません! 桐梨さんッ!」

その異様な姿に呆然としていた希繫に、ウィルフの尾の先端から放たれた骨の矢が襲い掛かる。

咄嗟のことで反応ができず、回避行動をとろうにも自らの腕の中にはまだ敬意がいるため、放り出せば彼女にその矢が突き刺さる。電気化を解除している以上、これをおかす手段はなかった。

「よく敬意を守ってくれた。ありがとう、希繫」

「誠実……！」

「見極めが終わった。一気に畳みかけるぞ、敬意！ 希繫！」

未熟—ルーキー—

時を少し廻り、同日の朝。希繫不在の穴を埋めるべく、逢依は朝の4時からレイドリベンジャーズに出勤し、作業に追われていた。

昨日の一件から、白露は逢依に「反省するまで小転から離れること禁止」を言い渡され、隣の幸盛市に存在する希繫たちの育ての親が住む笹倉家に預けられていた。

本当なら彼女の年齢を考えて、この街の学校に通わせるべきなのだろうが、彼女が希繫たちの下へ来てからまだ11日。法的立場としては彼らの養子となる白露だが、養子縁組の書類を出したのが2日目。受理されるまでにはあと数日かかる。

これは優芽たちにも言えることだが、未来から訪れた人物たちには、この時代における戸籍が存在しない。保険証もなければ住民票もなく、公共サービスのほぼ全てが受けられない状態にあるのだ。

そのため、という理由だけではないが、現在の白露は笹倉家で暮らす数人の絆の家族と共に、希繫たちの母である笹倉婚代の世話になつているのだ。

レイダー襲撃による避難警報が発令されたのは、ちようど婚代と数人の兄妹たちが買い物に出ている時だった。

家に残された年少組を、その子らの相手をするために家に残された年長組が率いて、市内の各ポイントに設置されたシエルターへと避難する中、白露は自らの懐にしまったシンクロナイザーを握り締めて立ち止まる。

年長組が白露に避難を促すが、小転が彼女の説得を引き受け、他の兄妹たちを先に行かせた。

「……小転さま。わたしは悪い子です。お母さまに叱られたのに……お母さまに心の底から心配していただいたのに、わたしはその意に反して、戦渦の只中に赴こうとしていきます……」

「それがわかっっていて、どうして白露ちゃんは行こうとするのかな。未来がどんなに悲劇的でも、それを換えられることは優芽ちゃんが証明してくれている。君ががんばらなくても、希繫や逢依ちゃんが変わってくれるはずだよ」

「確かに、わたしの力など知れています。お父さまとお母さまならば、未来だって変えてくれると信じています。だけど——たとえわたしの力がどんなに小さくても、何もしなくていい理由にはなりません。わたしなりに、できることをしたいんです！」

『了解。ユナイトギア第四六六号・シンクロナイザー、桐梨白露に同調接続アッします』

白銀のマフラーを身に纏い、白露はもう一度、大好きな母に叱られる覚悟を決める。今度は、素直に自分の力を認めようと。自分の力の限界を見極めて、少しずつ、シンク

ロナイザーを知っていく。

昨日、逢依が教えてくれた『シンクロナイザーの真価』を、白露はまだ知らない。昨日の戦いで、シンクロナイザーは戦い慣れていない白露のために、自分の意思で戦闘をサポートしてくれた。しかし、装着者とギアの関係として、それは望ましくない。

ギアは、装着者によって「使われて」こそギアなのだ。ギアが装着者を思い、ある程度のコミュニケーションを省くことはあれど、ギアが装着者の意に反して行動することは、決して良い傾向ではない。

「お願いします、小転さま。わたし一人では、レイダーをまともに倒すことはできません。わたしの身勝手に、お付き合いください……」

「……あんまり、わたしを管めないでもらいたいなあ、白露ちゃん。君はわたしを、この桐梨小転をいったいどんな人間だと思っているのかな」

「落胆するようなため息と、いつもと変わらない感情の起伏をまったく感じさせない声のトーン。」

やはり、身勝手が過ぎたのだろうか。いくら姪とはいえ、この時代ではまだ希繫と逢依の子は産まれてはいない。小転にとって、白露は赤の他人だったということだろうか。

思わずこみ上げる感情を必死に抑えながら、白露は下げた頭を上げることができない

でいた。

「わたしは、世界でいちばん優しいお母さんに育てられた兄妹たちの……絆ファミリーの家族の長姉おねえちゃんだよ？ 弟や妹を守り、育て、時に叱って、時に慰めるのがお姉ちゃんの役目」

頭を垂れたまま震える白露にゆっくりと近付き、小転はその冷たい両手を彼女の背に回す。

「弟の娘が……めつたにワガママ言わない姪が、せっかくわたしに甘えてくれてるのに、応えないわけがないよね。大丈夫、逢依ちゃんに怒られたら、わたしも一緒にごめんなさいするから、まずは白露ちゃんのやりたいようにしなよ」

「……ありがとうございます」

無感動で無感情で無表情な小転の、無感動で無感情で無表情ではない温かさを受けて、白露は自分のやりたいことをやり抜かんと決意する。

昨日、逢依が白露を叱った理由が今ならわかる。白露はまだ幼い。希繫と逢依の娘である以前に、そもそも彼女はまだ10歳になったばかりの子供なのである。

レイドリベンジャーズは、人をレイダーから守るために生まれた組織だ。そんな彼らが、人類の未来を担う子供たちを死なせるような行いを許すわけにはいかない。

子供は大人に愛されながら守られ、大人は子供の期待を背に受け強くなる。それは誰に定められた摂理ではない。人が人として生きてきたこれまでの歴史が、自然と生み出

した暗黙のルール。

愛する子供を守れない大人にだけはなってはならない。そう思いながら育ててきた大人たちだからこそ、白露を戦渦に巻き込ませたくはなかった。だが——それが彼女自身願いと想いを否定する行為であるのなら。

逢依に叱られて、自分の行いが決して良いものではないと理解しながらも、それでも白露が戦うつもりなら、それを頭ごなしに否定することはできない。

できることがあるとすれば、彼女が戦いの中で決して斃れることがないように、彼女をいつでも守ってあげられるように共に在ること。

（逢依ちゃんの予想通り、この子はやっぱり希繫に似て無茶をする。だから、わたしを白露ちゃんの傍に置いたんだよね。この子がやりたいことをやる時に、この子を守ってあげられるように。それなら……あとはお姉ちゃんに任せなよ、逢依ちゃん）

白露と出逢い、彼女が未来から来た自分たちの娘だということを知ったあの日、逢依と小転は誰に言われるまでもなく、彼女がどんな人間なのかを悟っていた。

誰よりも優しく、誰かのために一生懸命になる希繫と、自分に厳しく、自分の背負うべき責任を果たそうとする逢依の間に生まれた白露が、その優しさと厳しさを受け継いでいないはずがない。

故に、未来を変えるために現代へと訪れた彼女が、その使命を誰かに預けるだけで終

えるとは思えなかった。そして、彼女がシンクロナイザーを持っていると知った時、その予感はず信となった。

白露はきつと無茶をする。希繁と逢依を救うために、二人の進む未来を変えるために、この時代で危険に飛び込もうとする。それをわかつていたからこそ、逢依は白露の傍に小転を置いた。

「シンクロナイザー、レイダーの位置と勢力を教えてくださいませんか？」

『了解。レイダー密集地は永岑市A-07ポイント。ここから北東に18.4kmです。しかし、そちらにはレイドリベンジャーズが対応に当たると思われます。となると、既に散開した勢力が存在するA-09ポイントを優先すべきでしょう』

「A-09ってことは、だいたい21kmってところだね。じゃあ、移動はわたしが背負って運んであげる。そのくらいの距離なら、3分くらいで着くから」

21kmを3分と聞いて、思わずシンクロナイザーは『は？』と訊き返した。白露はただ漠然と「じゃあすぐ着きますね」くらいに思っていたが、シンクロナイザーは自分の計算の早さを恨めしいとさえ思った。

とはいえ、小転がこの事態に冗談を言う人物とも思えなかったシンクロナイザーは、せめて白露を守らなければと思い、小転の背中に乗った彼女を守るように、自身をその体に幾重にも巻き付けた。

「さすがにこうも何重に巻き付かれると動きにくいんだけど……まあ、今回は仕方ないよね。じゃあ……行こうか」

直後、420km/hによる空中移動を味わった白露は、シンクロナイザーの気遣いに心底から感謝した。



永岑市A—09ポイントに白露と小転が到着すると、既にそこではレイダーの侵攻が開始されていた。

市民は既に避難を終えており、既に街はレイダーだけ。しかしその数は10を上回り、いかに小転といえど白露を守りながらでは対処に戸惑う数となっていた。

「とりあえず、白露ちゃんは防御に専念しつつ、シンクロナイザーの武器としての形状特性を理解することに努めて。白露ちゃんがちゃんと対応できるようにするまで、わたしが時間を稼ぐ。まずはシンクロナイザーを使いこなせるようになっていないと話にならない」

「了解しました！ お願います、シンクロナイザー！」

『お任せください。可能な限りサポートします』

白露が構えると同時に、レイダーも彼女らに気付き攻撃を開始した。

二頭の飛行型レイダーによる急降下攻撃と、一頭の四足歩行型レイダーによる突進。小転はこれを上半身の反りと両腕のしなりのみで受け流すと、その勢いを弱まらせつつ、敢えて白露へと向かわせた。

すると、白露は首元から二又に分かれて伸びるシンクロナイザーの一本を、自らに迫る四足歩行型レイダーへと伸ばし、もう一方を街路灯の柱に巻き付けながらぐるりと一回転し、その勢いのまま空中を飛び回る飛行型レイダーへとぶつけた。

「……なるほど。さすがに希繫と逢依ちゃんの子だね。戦闘のセンスは父親譲りで、戦術の組み方は母親譲りってところかな」

「飛行型レイダーへの攻撃は今みたいに投げるしか……いえ、シンクロナイザーの射程は通常のユナイトギアよりも遥かに長い。それに、この強度としなやかさを同時に用いれば……！」

白露はアームズ「御霊鎮之紅瑠璃」みたましずめのくろりを手にすると、シンクロナイザーを地面に叩きつけ、その反動を用いて空中へと飛び上がる。

確かにこの方法であれば空中へと飛び込むことが可能ではあるが、あくまでこれは「空中に浮いた」だけに過ぎない。これを好機と睨んだ飛行型レイダーは、すぐさま白露へと殺到する。

「空中での姿勢制御を考慮せず相手の得意な領域に飛び込むほど、わたしは無策ではありません！ シンクロナイザー、お願いします！」

『了解』

空中で姿勢を保てなくなった白露が編み出した戦術。それはシンクロナイザーを敵にぶつけ、その反動を用いて自らの姿勢を直すことで、攻撃と姿勢制御を同時に行う原始的かつ立体的なバトルスタイル。

シンクロナイザーによる攻撃で体制を崩した飛行型レイダーは、その機動力を一気に損ない、目標である白露を再び確認することなく、彼女の下した一閃によって両断される。

そのまま着地すると、彼女の背に向かう一頭の飛行型レイダー。白露はそれに気づきながらも、高所からの着地によって足が痺れ、回避がとれなくなっていた。

「シンクロナイザー！」

『了解。防御しつつ回避を試みます』

だが、自分自身が動けずとも、長い手足のように自在に動くシンクロナイザーならば、対応は可能だ。

マフラーの一方で飛行型レイダーを引っ叩きつつ、もう一方を電柱に巻き付けて白露を引っ張ると、飛行型レイダーは本来の軌道を僅かに逸れて地面へと着弾。

ようやく痺れがなくなり、再び立ち上がると、白露は御霊鎮之紅瑠璃をマフラーに巻き付け、地上に墜ちた飛行型レイダーにトドメを刺し、続いて迫る大型レイダー2頭に向かつて走る。

「うーん、さすがに大型2頭を任せるのは心配かな」

『……お任せください』

どこからか、掠れるような小さな声が聞こえると、小転は道路に設置されたガードパイプを片手で引きちぎり、それを大型レイダーに向けて投げつけた。

すると、そのガードパイプは白露へと振り下ろそうとしていた大型レイダーの左腕をビルへと打ち付け、それによって生み出された隙を、白露の放った必殺の一撃『大邪一断』^{たいじやいちだん}が討った。

「まずは4頭……!」

「気を抜かないで。まだ大型が1頭いる。……といっても、あれを一人で任せるのは不安だから、白露ちゃんは取り巻きをお願い。あれはわたしがなんとかするよ」

「……わかりました。お任せします!」

小転が大型レイダーに向かうと、突如として白露の背に衝撃が走る。勢いのまま5メートルほど吹き飛ばされながらも、シンクロナイザーによって空中で体制を整え、衝撃を受けた地点へと向き直るが、その原因と思われるレイダーは見当たらない。

シンクロナイザーが直前でガードをしてくれたから吹き飛ばされるのみで済んだものの、あれが直撃であれば無事では済まなかった。となると、あれがレイダーによる攻撃であったことは疑いようもない。

しかし、その攻撃がいったいどこから放たれたものであるのか、白露は身構えるものの、その集中力を削がんとばかりに、3頭の四足歩行型レイダーが白露へと迫る。

「シンクロナイザー！　ひとまずあの三頭をまとめて仕留めます！」

『了解。勢邪せいじや業落ごうらくを使用します。エモーショナルエナジー、充填チャージ開始』

チャージの開始と共に、白露は迫るレイダーの一頭に向かつて一気に駆け出した。

まだ身体的に未成熟な白露では、希繫のようなアクロバティックなアクションも、逢依のような機敏で精錬された身のこなしも出来はしない。

だからこそ、彼女は自分自身にできるアクションをこの戦いの中で探していた。そして、小柄で未成熟な身体だからこそできるスタイルを見つけ出した。その答えがこれだ。

「ここなら、わたしを挟み撃ちにするには好都合——ですよね？」

両サイドから襲い来る二頭のレイダー。すると白露はその場を動くことなく、両サイドではなく正面で白露の退路を断たんと待ち伏せているレイダーをシンクロナイザーで掴み、そしてそのまま自分の方へと引き寄せる。

しかし、いまさらその一頭を捕まえたところで、既に両サイドのレイダーはすぐそこまで来ていた。この距離では、まともに挟み撃ちをもらってしまう。

これに気付いた小転が、咄嗟に白露へのサポートへ向かおうとしたが、しかし直後、彼女はそれをやめた。

「……小柄でよかった、と思ったのは初めてです」

レイダーの挟み撃ちが白露を捉える直前、彼女は屈みながらくるん、と小さく前転。

それは決して機敏な動きではなかったが、今までマフラーによって実際の身体よりもシルエツトが大きく見えていたレイダーは、彼女を捉えられず、そのまま互いに衝突、その場にうずくまる。

『充填完了。勢邪業落、いけます』

チャージが完了すると、シンクロナイザーが捉えていたものと共に三頭のレイダーが束ねられ、それを勢いよく地面へと叩きつけた。

そして先程と同じように、今度はそれらのレイダーを束ねたまま空中へと飛び出すと、今度は空中で前転を始め、それに引かれてマフラーも回転。そして重力に従って落下していき――。

「とやあああああッ！」

地面に大きなクレーターを作りながら、三頭のレイダーは塵となって消失。

息を切らしつつも、どうにか三頭を片付けたと思うと、ついさつきまですぐ近くで聞こえていた轟音は消え、大量の塵が風に吹かれて散っていた。

「あーあ、だいぶ腕が落ちちやったなあ。まさか大型一頭のために5分もかかるなんて。これじゃ落第だよ」

「……正規ELBシステムなしに、レイダーを屠ったのですか……？ え……あ、えっ……？」

自らに失望するように、いつもの無感動で無感情で無表情な溜息を洩らす小転。

そんな彼女に、どうやって感情生命体であるレイダーに物理的なダメージを与えたのかと問いたい白露だったが、そんな余裕を与えてくれるレイダーではない。

ようやく8頭を片付けたとはいえ、まだ5頭ものレイダーが残されている。それに、先程の「見えない衝撃」の正体もわかっていない。

じりじりと迫るレイダーの残党を前に、白露は再び身構えた。

苦闘―ハードファイト―

「これだけやっても、まだ飛行型2頭と人型1頭、そして四足歩行型が1頭……。群れを離れたはぐれレイダーでもこれだけの数、本隊はいつたいどれだけ……」

「まあ、余裕で40や50は越えるだろうね。でも、今のわたしたちにそれを気にかける余裕はないよ」

はい、と短く答えて、白露は再びマフラーを地面へと叩きつけた。

マフラーのリーチと短時間の滞空戦闘によって、飛行型レイダーに対し有効的な攻撃が行えるのは、この場では間違いなく自分なのだ。白露は理解していたからだ。

小転も、そんな白露の判断を把握していたからか、道路に落ちた小石を飛行型レイダーに投げつけて体勢を一瞬ながら崩し、白露のサポートをしながら、自らも四足歩行型レイダーの突進をかわしながら人型レイダーへと向かった。

「飛行型レイダーは機動性に優れるといっても、お父さまの電撃体やお母さまの瞬間移動に比べれば――！」

小転の放った小石によって空中体勢を崩したレイダーにマフラーを巻き付けると、白露はそれらを捕えたまま着地し、その二頭を小転が対処する人型レイダーへと投げつけ

る。

唐突な横槍に対応できなかった人型レイダーはそのまま数メートル後方へと吹き飛ばされ、起き上がる間もなく小転の手刀が人型レイダーを一刀両断。そのまま飛行型レイダー二頭も平手に貫かれた。

これで残されたレイダーは四足歩行型ただ一頭。ともなれば、先程の「見えない衝撃」さえ除けば、このレイダーを斃すだけで事態は収束となるはずだ。あるいは、このレイダーがその原因とも考えられる。だが――。

『防御します』

「え――？」

再び、白露の背中を襲う衝撃。しかし目の前には未だジリジリと後退りながらもその場に在り続ける四足歩行型レイダー。間違いない、この衝撃の原因はおそらくあのレイダーではなく、他にも「何か」が存在するのだと。

マフラーの一方で防御を行ったシンクロゲイザーが、もう一方で衝撃の発生地点と思われるポイントへ攻撃を仕掛けると、僅かにだが何かにつぶかる感触と、虚空が歪むような景色を確かに観測した。

それを見た小転は、思わず舌打ちする。今ので、ようやくこの「見えない衝撃」の原因に気付いたからだ。そして、今回のレイダー連続襲撃事件について、この可能性を思

慮に入れなかったのは間違いなく自分のミスだと認めざるをえなかった。

「潜伏型レイダー……!」

「せん、ぷく……がた?」

潜伏型レイダー。その名の通り、自らの身を隠すことで一方的な攻撃を与えることを得意とするレイダーカテゴリである。

多くが攻撃力に優れ、半面で防御力・機動力を欠くとされるが、それらの弱点を不可視化によって補い、かつては最前線で格闘戦を行う多くのレイドリベンジャーズに壊滅的な被害をもたらしたとされる。

近年では不可視化の有効範囲がある程度判明し、遠距離攻撃を行う「狙撃隊」が必ず各部隊に一人以上設置され、彼らが潜伏型を攻撃することで一次的に不可視化を解き、援護を行うようになった。

しかし、未だ勢力レベル「徒」^{50頭以上}に紛れていると一部隊では対処しきれない難敵でもあり、これら潜伏型レイダーは最前線メンバーには対処不能の強敵でもあるのだ。

「簡単に言ってしまうえば「姿を消すことのできるレイダー」かな。優芽ちゃんがいれば対処も出来ただろうけど……ひとまず四足歩行型を片付けよう。接近戦型の戦士が潜伏型と戦うなら、横槍は絶対になくさないといけなからね」

「了解。では……参りますッ!」

先んじて動いたのは、やはり白露であった。小転はあまり自分から仕掛けないスタイルなのだということを先程の戦いで理解したがための、自発的な役割分担。

シンクロナイザーのマフラーを、今度は巻き付けるためだけでなく貫くためにレイダーへと差し向けるが、「貫く」ために必要なスピードを確保するために、軌道は直線しか描けない。

ともなれば、いかにレイダーであつても回避は容易い。しかし、白露としても、この攻撃がかわされることは計算の内。すぐさまもう一方のマフラーでレイダーを捕え、そのまま小転へ向けて投げつける。

小転はそんな白露のパスを確実に受け取り、飛び入るレイダーを平手で叩き落とすと、そのまま踏みつけ押し潰す。

小型のレイダーということもあり、さほど苦労もなく片付けることに成功するものの、問題はこの先。潜伏型レイダーの対処だ。

「さて……あとは潜伏型レイダーだけど、どうしようね」

「どこに……そして何頭いるのかも現時点では把握不能。ここまで他のレイダーを攻撃する際にほとんど妨害がなかったところを鑑みると、おそらく一頭か二頭でしようか」「だろうね。まあ、単純に機動性が致命的に低いってこともあり得ない話ではないんだけど、だとしても妨害が少なすぎるからね。そんなところじゃないかな」

互いに背後を守るため、背中合わせになりながら周囲を警戒するが、そうするとレイダーも下手に仕掛けてはこない。

白露はシンクロナイザーで正面をガードしながら御霊鎮之紅瑠璃を構え、小転は左手を正面に構えながら防御態勢に入っているものの、右の平手は腰に添えつつ攻撃を待っている。

露骨なカウンター態勢であるだけに、レイダーとしても下手に攻撃へと踏み切れないのだろう。しかも、レイダー反応はこの地帯から離れても追えるだけに、仮にここを離脱して他の場所で暴れ始めても追うことができる。

「小転さま、レイダーは人間の負の感情を食べているのだと、学校の授業では習いました。しかし、だとすれば潜伏型レイダーはわたしたちに追われることを覚悟の上で、この場所を離れようとするのでは？」

「いや、その可能性は低いんじゃないかな。確かにレイダーは負の感情が集まるポイントに向かう習性があるけど、別に彼らは負の感情だけを食べるわけじゃない。大きな感情ならなんでも食べるからね」

そう、レイダーは確かに負の感情を自らのエネルギーにすべく人々を襲い、その恐怖心を煽って喰おうとする。

しかし、彼らがすべて負の感情を抱いたまま喰われたかといえ、そういうわけでも

ない。最後まで一縷の希望を抱いたまま絶えた命もあれば、彼らに抗おうと闘志を抱きつつ朽ちていった命もある。

それはレイダーと戦って散っていったレイドリベンジャーズが証明している。故に、レイダーは負の感情と正の感情を区別していないことがわかる。

彼らはただ、目の前の大きな感情を喰らい、それが負の感情であったなら、それを自らのエネルギーに加える。そしてそうでない感情は、そのまま消化されていくのだから。

故に、シンクロナイザーというユナイトギアを纏う白露がいる限り、もつと噛み砕いて言えば、ユナイトギアを纏えるほど大きな感情を抱く人物が目の前にある限り、この絶好の餌を放って他の場所へ向かうとは考えられないのだ。

「シンクロナイザー、レイダーの詳細な位置は把握できますか？」

『不可能です。本来このレイダー探知機能は複数のレイダー勢力が出現した際に、その大まかな出現ポイントを割り出すためのものです。よって、基本的には地区単位での把握が限界です』

「だろっうねえ。白露ちゃん、さすがにこれは仕方ないよ。本来はいろんな役割を分担した部隊単位で戦う相手だからね。むしろシンクロナイザーはよく絞り込んでくれる方だからね」

『恐縮です』

シンクロナイザーの性能は、その形状および出力の両面において、数あるユナイトギアの中でもトップクラスだと言えるだろう。

しかし、本来ユナイトギアが「戦うための力」であるがために、後方支援系統の機能はあまり積まれていない。それは決して機能の不足ではなく、部隊というチームを組み、役割分担を前提とした設計だからである。

「となると……レイダーの不可視化ステルスをどうにかするしか方法はありませんね。どういうメカニズムで不可視化ステルスしているか知りませんが」

「周囲の景色がさほど一定じゃないから、保護色ではないだろうし、光の屈折によるミラー構造だったのも、説得力がないね。まあ、その程度ならレイドリベンジャーズのレイダー研究部と技術開発部がどうにかしているだろうしね」

『では、自らの姿を隠しているというよりも、なんらかの力によつてこちらの認識が歪められていると考えるべきでしょう。方法はまったくもって不明ですが』

シンクロナイザーの読み通り、実は見えない敵・潜伏型レイダーの不可視化ステルスは、自身の姿を周囲に同化させるものではなく、レイダー以外の存在に対し、自身への認識を歪める認識妨害能力だった。

二人は気付いていないが、潜伏型レイダーは既に彼女たちの直前で、今か今かと攻撃

のタイミングを計っていた。だが、それでも攻撃に踏み出せないのは、既にシンクロナイザーによって二度の攻撃を阻まれているためだ。

本来なら防御不能の見えない攻撃。それを防いだシンクロナイザーだからこそ、レイダーは足踏みを避けられない。

両者共に動けないこの状況。主勢力を相手取っている部隊が事態を片付け、こちらに応援に来てくれさえすれば瓦解可能な状況だけに、白露の気持ちは逸る。

「認識妨害……何かの拍子にレイダーを怯ませることができれば、或いは……！」
「できるだろうね。事実、狙撃隊の攻撃で不可視化が解けることは実証されているからね」

「広範囲への攻撃は街への被害が大きすぎますし、大音量の音による威嚇は……」
『推奨しかねます。聴覚が鋭敏な白露様へのダメージが大きすぎますので』

思いつく限りの策ではどうにもならない、と意気消沈する白露とシンクロナイザーに、小転は小さな溜息を洩らすと、「仕方ないなあ」と零した。

「今回のテストはここまで、かな？」

直後、小転が両の掌をぱん、と合わせると――、

『——！』
「なっ……レイダー!?!」

掌によって挟まれた大気が巨大な揺らぎを生み出し、衝撃となつて認識妨害を行つていたコントロール器官を僅かに狂わせた。

突如として目の前に現れたフクロウのような姿をしたレイダーに、白露は当然ながら困惑するものの、即座に「それ」が今まで自分たちの目を欺き攻撃していた潜伏型レイダーなのだと理解すると、すぐさま御霊鎮之紅瑠璃を構える。

「シンクロナイザー!」

『未登録のスキルです。スキル名を入力後、アクションを行つてください』

「え? あっ……じゃあ脆魔縛襲ぜいまばくしゅう、いきます!」

『了解。脆魔縛襲を登録します。エモーションナルエナジー、充填完了』

シンクロナイザーのマフラーが潜伏型レイダーを捕え、めいっばいの力でそれを引き寄せる。構えた太刀を真つ直ぐに、吸い寄せられるように前へと突き出し、そして——。
「とやあああッ!」

鋭く無情な一撃が、この戦いの幕を下ろす。

生還—アンラック—

「見極めが終わった。一気に畳みかけるぞ、敬意！・希繫きづな！」

希繫と敬意へ向けて放たれた骨の矢を、手にしたアームズ「ホオジロ」によつて全て捌き落とすと、誠実せいじはその青い瞳にウイルフを捉えた。

劣勢から逆転への狼煙を上げようとした直後、隠された手札「テストマン」を切ったウイルフ。しかし、それと同時に誠実による「見極め」も完了している。

真の意味で互いが万全となり、より戦いは熾烈を極めていくが、しかし両者の動きはあまりにも静かだった。

「ひとまず、動けるようにならないとね。頼むよテストマン」

『了解。装着者の骨の密度を操作します』

暗い鼠色をした骨の尾。おそらくは、和泉優芽の「イーリス」が作り出す水の大剣「ディアドロップ」のように、アームズでもギア本体でもなく、ギアの特性による武器の生成なのだろう。

その尾は先端の形状を複数の骨の矢が宿る「矢筒」の形から、三叉の槍のような「武装」の形へと変化させると、自らの足を埋める地面をその尾で砕き、拘束を脱した。

「自らの骨を自在に操るユナイトギアですか……。先程の骨の矢に加え、あの槍のような形状……。おそらく全身のあらゆる骨が自在でしょうから、少なくとも苦手とするレンジはなさそうですね」

「だろ。うな。各国政府がそれぞれで管理しているはずのユナイトギアが蓬萊寺の手に渡っていたのも想定外だが、今はその理由を追求するよりも現状の打破が最優先だ。希繫、まずはこの状況に楔を打ち、埒を明けろ」

「簡単に言ってくれませ……ッ！」

敬意を誠実に預け、即座に攻撃に移った希繫に対し、ウィルフは槍状の尾による最低限の動きだけで、彼のトップスピードによる蹴りを悉く受け流すばかりか、僅かな隙すらも縫ってカウンターの衝突を叩き込む。

だが、相手が蓬萊寺であるからこそ、希繫はその反撃を見越していた。回避ができないのなら、そのカウンターを自らの左腕を犠牲にしながらも敢えて受けることで、ウィルフの槍の尾を捉えてみせた。

「エクレーールッ！」

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

槍の尾を捉えている今の距離では、飛び蹴りのクリムゾンインパクトは威力を生まないということは、誰よりもそれを十八番とする希繫が最もよく理解している。だからこ

そ——、

「骨で防げてても、俺のトップスピードに対応できても、足場さえ無いなら回避はできねえだろおツ!!」

「しまっ——」

槍状の尾を掴まれている今、回避範囲の限られたウィルフに、彼の蹴り上げをかわす手はなかった。キツクの勢いのまま上空へと飛び上がった彼は、咄嗟に背骨と肋骨による防御壁を展開するものの、回避手段を完全に失う。

そんなウィルフを睨みつけながら、希繫は自らの肉体を電気に変換。同時に槍の尾によつてつけられた傷を塞ぎ、光の速度でウィルフへと接近。接触の瞬間に電氣化を解除して、必殺のキツクを放つ。

「直撃……!… だが、蓬萊寺がああの程度でくたばるとは思えない。希繫、下がれ!」

「あいよ。次は頼んだ、敬意!」

「お任せください!」

希繫の放ったクリムゾンパクトによつて骨の防御壁は砕かれた。しかし、その内側にて潜むウィルフへのダメージは、おそらく期待できていないだろう。

故に、希繫は再生しつつある防御壁を地上に向けて蹴り飛ばすと、次の一手を敬意に託し、自らも重力に身を任せて着地する。

落下するウィルフを待ち構えながら、敬意はギミックウエポン・夢椿の形状を『分刀』
から『投擲刀』へと変え、それを投げ放つ。

「得物を手放すとは……僕も軽んじられたものだねえ。誠実、部下の教育が行き届いていないんじゃないのかな？」

「なんだと……ッ！」

しかし敬意が放った夢椿は、ウィルフを捉えるよりも早く、その槍状の尾によつて絡め取られ、ウィルフに捉えられてしまった。

そのまま悠々と着地したウィルフに、今度は希繫と敬意が二人がかりで攻撃を仕掛けるが、希繫の俊足を持つてしても彼を捉えられず、敬意の怪力は彼に届くことなく空を切った。

だが——ここまでの連撃によつて二人の脅威性を知ったウィルフが、この攻撃をかわすために二人に意識を集中したこの一瞬こそ、希繫と敬意の狙った一瞬だった。

「この程度の攻撃を僕が回避できないとでも……ん？ 誠実はどこに——」

「希繫さん！」

「ああ、合わせろ敬意！」

『肉体を電気に変換します』

電気化による光速移動は、ウィルフの持つ伝導ワイヤーによつて阻まれれば、逆に自

身の身が危険であることは希繫とてわかっている。しかし、いや、だからこそ——蓬萊寺ウィルフは困惑した。

ここまでの経過から見て、桐梨希繫という人間が力押しではなく、圧倒的なスピードで相手を翻弄しながらも、攻め手にはある程度以上のバリエーションを持つタイプだと判断していたからだ。

そんな希繫が、伝導ワイヤーが封じられているわけでもないのに、愚直な電氣化によるトップスピードで攻めるような真似をするとは思えない。だとすれば罠をも疑うが、だとしたら露骨すぎてそれも怪しい。

まして、自らを挟み討ちにするためか、真逆のポジションで敬意が攻撃態勢に入っていることも、さらにウィルフの混乱を招いた。

ここまで希繫の放つ光速の蹴りすらもいなした自分に対して、敬意が不意を衝くでもなく、むしろ攻撃のモーションを見せている。露骨な罠だ。かわせば希繫と正面衝突して、同士討ちは免れない。

だったら、なぜこんなにもわかりやすい罠を張るのか。これではまるで、「避けさせるために攻撃している」ような——。

「……そういふことかッ！」

再び迫る希繫の飛び蹴り。ウィルフはこれを槍状の尾で受け止めると、背後から迫る

敬意の拳を横に跳び退いて回避する。しかし……。

「ようやく捕まえたぞ、ウィルフ・ミルワードツ！」

「やはり、『地中や無機物に潜り込む』ことがフアングバイトのギア特性か……ッ！」

「いいや……『それだけ』じゃないッ！」

地中から現れた誠実は、回避のためにジャンプしたウィルフの胴体をホオジロで貫くと、そのまま彼の肉体も連れて地中に再び潜り込む。

中途半端に体の一部分だけを地中に埋め込んだだけでは、ウィルフは抜け出してしまおうだろう。だからこそ、フアングバイトのギア特性である『ギア・装着者およびそれらが触れているものを地中に潜り込ませる』力で土葬してしまったのだ。

「はあつ、はあつ……！」

「誠実！」

「誠実様！ お怪我は……見受けられませんが、ご無事なのですか!？」

地中から浮上した誠実に、希繫と敬意がすぐさま駆け寄り、希繫は周囲を警戒するが、特に異変はない。

ウィルフを倒すことはできなかつたが、少なくとも封印さえできてしまえば、あとは地中で飲まず食わず。おそらく数日と保つまい。

「最後まで抵抗されたが、どうにか地中深くに封印できた……。少なくとも、自力での復

活は——」

直後——背後のアスファルトが砕け散り、血塗れの何かが現れる。

いや、もはや「何か」などと言葉を偽っている暇などない。そこに居るのは紛れもなく……！

「ウィルフ・ミルワード……ッ！ バカな、あの深さから復活しただと……ッ！」

「いやあ、さすがに自力じゃ無理だよ。だから感謝をしなくちゃね、僕をここまで運んでくれた君と、そのギアにね」

「……そうか、ワイヤーか……ッ！」

舌打ちしながらも、誰より早く真実へと辿り着いたのは希繫だった。

「聡いねえ。まあ、既にネタがバレているのなら隠す必要もないかな。僕を地中に引きずり込んだところで、フアングバイトのギア特性が君だけに及ぶものじゃないことには気付いていたからね、ホオジロを抜かれる前に一仕事させてもらったよ」

フアングバイトのギア特性は既に述べた通り「ギアと装着者およびそれらが触れているもの」が影響の範囲だ。そのため、アームズで貫いたウィルフを地中に引きずり込み、それを抜くことで地中に封印するつもりだった。

しかし、その影響範囲に気付いたウィルフは、地中で抵抗する演技をしながら伝導ワイヤーをフアングバイトに絡め、誠実が地中に戻って油断する頃合いを見計らって地上

へと復歸したのだ。

「ホオジロを抜いた瞬間に動きが硬直したのも演技だったのか……ッ！」

「なかなかの名演技だっただろう？」

くつくつ、と口元を隠しながら笑うその仕草に狂気など微塵もなく、ただ無邪気で、ただ純粹な、殺人鬼としての存在感だけが露呈していた。

「でもまあ……ここまでやられてしまつては、もはや僕の目指す殺人芸術ではない。それに……ある意味で『ノルマ』は達成した。誠実、やはり君は優秀だよ。殺人鬼としても……『餌』としてもね」

「餌、だと……!?!」

もはや堪えきれない、というように、ウィルフの笑い声は激しさを増す。

しかし、誠実はそんなウィルフの様子など構うことなく、まして自分が餌だと言われたことに腹を立てる暇などなく、追求の一手を投じようとした。

だがそれよりも早く、ウィルフは全てのネタを明かし始めた。

「そう、餌だよ。そもそも君の抹殺などという誰にでもできるような仕事を、この僕が引き受けると本気で思っていたのかい？　だとしたらおめでたいことだね。そして可哀想に。僕の本命は君じゃない。僕が受けた任務は……桐梨希繫、君の確保さ」

「——ッ！」

ウィルフの視線が希繫へ向けられると、誠実と敬意はすぐさまその視線を彼に送った。なぜ希繫なのか、という疑問。そして希繫を守らなければ、という警戒心。

しかし、そんな二人に反して、ウィルフの視線に貫かれる希繫は異様なほど冷静だった。いや——冷静なのではなく、まるで「この真実をはじめからわかっていた」かのような、そんな落ち着きにも感じられた。

「その様子だと、わかっていた、ということでもいいのかな？」

「もしかしたら、なんてことも考えてただけだ。別に今回に限ったことじゃない。蓬萊寺と戦う時は、どうしてもその可能性が脳裏を過ぎるからな」

「なんのこことだ……どういうことだ、説明しろ希繫！」

希繫は何も答えない。

返されるのは沈黙だけ。

「ふふっ……しかし、君がそこまで本気で隠したがるのなら、やはりヒールとしてバラしたくなるよねえ？」

「やめろ！　今、姉さんに応援要請を送った……。県外とはいえ姉さんなら10分もあれば到着できるはずだ。いくらお前でも、姉さんを相手にすれば無事じゃ済まないことはわかるだろう」

「姉……桐梨小転きりなしこころ、だっけ？　そうだね。さすがに彼女まで加わると、まともに戦えるの

は当主様だけだろうし……今日は退かせてもらおうよ。また近いうちに会おうね、『ブガイシヤ』君？」

懐から取り出したボールを槍状の尾で貫くと、ボールの爆発と共に大量の煙が放出され、それが晴れた時には既にウイルフの姿は消えていた。

残されたのは希繫と誠実と敬意。三人が五体満足で事を終えた、という意味では奇跡にも等しい確率の大金星とも言えたが、それでも三人の表情は晴れやかなものではなかった。

「……全て話してもらおうぞ」

「騙しきってやるよ。暴けるもんなら暴いてみる」

論争—トークバトル—

強敵・蓬莱寺ウィルフの撃退に成功した希繫たち。

しかしウィルフの残した爪痕は大きく、武城家に戻って傷の手当てをみると、彼はすぐさま誠実せいじによって質問攻めにあっていた。

「ウィルフ・ミルワードがお前を狙う理由はなんだ！ 蓬莱寺と戦う度に考えていた可能性とはなんのことだ！」

「落ち着いてください誠実様！ お怪我に障ります……」

誠実はかつて優秀な殺人鬼だった。人を殺すことに躊躇はなく、どんな危険な任務においても必ず生存し帰還する、まさしく『殺人鬼サバイバー』だった。

しかし、だからこそその優秀な頭脳はこの問いの答えを既に理解していた。だが、それでももしかすればその答えが自分の導き出した間違った答えなのではないかと、そう願いながら希繫に問い続けた。

「確かウィルフ・ミルワードは新しい当主が決まったと言っていたな。そう言われてみれば、確かに俺も以前の当主を直接この目で見たことはない。いつも当主の命令はメツセンジャーを経由していたからな」

「……何が言いたい」

「お前が先代の当主なのではないか、とまでは言わない。それにしても殺人鬼特有の気配がなさすぎる。だが……先代当主でなくとも先代当主か現当主の関係者だとすれば、少なくともお前が蓬萊寺に狙われる理由としては十分だ」

確かに、もしも希繫が蓬萊寺家の当主に関係する人物であるのなら、蓬萊寺の内情を知る者として命を狙うか、あるいは再び蓬萊寺に引き入れ洗脳を行うくらいことは考えられる。

事実、蓬萊寺家には洗脳やマインドコントロールに秀でたチームが編成されていることを誠実は知っているし、それを施している現場を見たこともある。

何より、希繫の戦闘スタイルの大部分はスピードに頼ったものだが、彼が蓬萊寺なら優秀な暗殺者として育っていただろう。

「冗談やめろよ。確かに俺は絆ファミリーの家族——ようは拾われた子供だから過去の経歴については真つ暗だが、俺が笹倉夫妻に拾われたのは7歳の頃の話だぞ？」

「7歳の子供が蓬萊寺からの刺客を振り切れるはずがない、というわけか。確かに普通ならそうだろうな。だから俺は言ったはずだ。蓬萊寺の子供ではなく……蓬萊寺家当主の関係者なのではないか、と」

「当主の血筋なら並の蓬萊寺くらい撒けるはずだつて？ いやいや、そりゃ無茶つても

んだろ。事実、今回は上級とはいえウィルフ一人に三人がかりでようやく撃退だ。そんな奴らをまだ7歳の子供がかわしきれると本気で思ってたのか？」

誠実の言う通り、確かに希繫が蓬萊寺であれば、過去の経歴や戦闘センスについて、説得力を持たせることは可能だ。

しかし、経歴はともかくその戦闘センスについては、それを活かしきれているのは彼がある程度の成長を経ているからこそだ。

まだ当時7歳だった彼が、そのセンスを活かしきれていたかといえ、それはおそらくありえないだろう。

「確かに、お前だけでは不可能だろう。だが——蓬萊寺家から逃げたのはお前だけか？」
「……姉さんまで疑ってたのか」

「当然だろう。お前たちは実の姉弟だ。お前が仮に蓬萊寺だとすれば、姉である小転も同じこと。そして——お前を溺愛する彼女が、蓬萊寺を去ろうとするお前をただ何もせず見ているはずがない」

桐梨小転きりなしこころ。かつてレイドリベンジャーズに在籍していた頃、世界最高のレイドリベンジャーズとして多くのレイダーを葬り、そして「後にも先にも彼女を越えるレイドリベンジャーズは現れない」と言われた天才。

卓越した格闘技術。冴えわたる戦略。多彩な戦術と、それを支える運動神経。対局を

見極める観察眼に、多くの仲間たちを導くカリスマ。それら全てを備えていた彼女なら。

当時まだ10歳とはいえ、蓬莱寺の血とセンスを存分に活かし、希繫を守りながら追っ手の蓬莱寺をやり過ごすこともできただろう。

「だったら……いや、だとしても説明できないことが3つある」

「何……?」

「なぜマイナス感情を抱かずユナイトギアを纏えるのか。なぜ蓬莱寺から逃げたのか。なぜ今になって当主が俺を求めたのか」

レイドリベンジャーズが「人類の味方」であるように、ユナイトギアは「正義の味方」だ。装着者が自らの信じる正義正の感情に背けば、その強大な力は装着者自身へと向けられ、レイダーと同じ存在——レイダーギアとなってしまう。

しかし、希繫は自らの信じる「希望」を貫き、負の感情を一切露呈させていない。それはエクレールが証明している。これほどの正の感情を、もしも希繫が蓬莱寺であったら持つことができただろうか。

確かに、蓬莱寺ウィルフも蓬莱寺でありながらユナイトギアを纏ってはいたが、あれはおそらく人を殺すことに一切の悪感情を持っていないからだろう。狂気が一周まわって正の感情となっているパターンだ。

だが希繫はそうではない。まだ善悪の判別もつかないような子供の頃ならばまだしも、今の希繫は平穩と生命を何よりも尊ぶ青年だ。そんな彼が、蓬萊寺だと自覚しながら正の感情を持ち続けられるとは思えない。

蓬萊寺から逃げたのは、単純に人殺しが嫌だから、というのも、普通なら十分に考えられるだろう。しかし、それはまともな人間がまともな倫理観を得てから蓬萊寺入りした場合に限る。

誠実の言う「希繫が蓬萊寺家当主の関係者」という理屈では、それはありえないのだ。生まれた時から殺人鬼となるべく教育され、そして人を殺すことに悦楽も嫌悪も抱かない。それが純血の蓬萊寺なのだ。

そして、そんな蓬萊寺であればこそ、特に嫌悪感のない「人殺し」さえ続けていれば恵まれた環境で生活できる。そんな環境で、まだ反抗期も迎えていないような子供が逃げ出すようなことがあるだろうか。

そして何よりわからないのは、当主が今になって彼を求める理由だ。

希繫が笹倉夫妻に拾われたのは彼が7歳の時。つまり、仮に蓬萊寺を抜けたのが笹倉夫妻に拾われる直前だとしても、14年も前のことだ。

ウィルフ曰く、一年前に先々代の当主の妾の子を見つけ、『教育』の末ようやく数か月前に当主となつたらしいが、少なくとも希繫とその当主に面識はないだろう。

確かに希繫を疑うだけの理由はあるだろう。しかし同時に、希繫が蓬萊寺でないといえる理由も確かにある。

誠実は聡明であり賢明だ。希繫の問いが、必ずしも彼が蓬萊寺ではないという証明でないことは理解していても、逆に彼のその問いに答えられる回答を持ち合わせていないことも自覚していた。

故に、今は引き下がることしかできないのだと、彼を普通の——ただの最弱のレイドリベンジャーズだと信じるしかないのだと、言葉を呑みこむ。

「……お前の口八丁には敵わないな」

「そりゃ、これで負けたら『最弱』なんて名乗ってられないさ」

呆れと苦笑いの混じり合った複雑な笑顔を浮かべて、二人は笑い合う。

誠実とて、希繫を蓬萊寺と決めつけて責め立てたいわけではない。むしろ、自分の疑惑を晴らしてほしいとさえ思っていた。疑惑は疑惑に過ぎない、ただの思い過ごしだと、そう言つてほしかった。

だから、誠実は彼とこうして笑い合ったのだ。希繫は「自分が蓬萊寺であるならば証拠が足りない」と言った。だからこそ——「疑惑が思い過ごしだ」とは一言も言わなかったことに、気付いていたから。

「ふふつ、なんとか丸く収まったようですね。安心しましたわ。そういえば桐梨さん、お姉さん

が未だにいらっしやいせんが……」

「え？ ああ、ウィルフに言ったあれはただのハツタリだから来ないよ」
「……よく騙せたな」

口八丁が取り柄だからな、と笑う希繫に、もう翳りはなかった。

平穩―ハピネス―

蓬萊寺ほうらいじとの戦いをどうにかやりすごし、しばらくは様子見ということでも永岑に戻った。希繫きづなは、逢依あゐに連絡をとりそのまま直帰することとなった。

本当ならばこの忙しい時期、私用が終わったならすぐにでもレイドリベンジャーズの職務に戻るべきなのだろうが、なんとといっても今回は蓬萊寺が相手だったこともあり、逢依は彼に休息を言い渡した。

事実、今の希繫はかなり疲弊していた。体力的にはさほどでもないが、蓬萊寺と対峙したことによる精神的摩耗が著しかったのだ。

「ただいま―」

「おかえりなさいませ、お父さま」

玄関のドアを開けると、目の前で迎えてくれたのは白露しろろだった。バイクの音が聞こえたからか、わざわざ玄関まで来て待っていてくれたようだ。

普段は残業がなくても業務が7時を回る。帰宅できるのは7時半を回るか回らないかという時間だ。小転こころも家にはいるが、やはり一番に求めるのは両親である希繫と逢依だ。

それだけに、今はまだ学校に行けていない白露には寂しい思いをさせてしまっていることは、希繫にも、もちろん逢依にも自覚はあった。そして、それに対する不満を言わない白露に心配もしていた。

「今日はお早いお帰りですね」

「ああ。昨日と今日はお休みしてるんだ。お友達がちょっと困っててな、お手伝いに行ってたんだ。さて、普段は土日しか構ってあげられないからな、今日はあと半日好きなだけ遊ぼうか」

「よろしいのですか？ お父さま、お疲れのようですし……あまり無理をなさらずお休みになられては？」

「もちろん疲れてはいるよ。でも白露と一緒に遊んだほうが、休むよりよっぽど疲れがとれるんだ。白露は嫌か？」

ぶんぶん、と首を横に振ると、希繫は「ならよかった」と白露の手を取ってリビングへと向かった。

リビングのソファでは小転がテレビを付けたまま逢依のクロスワードパズルを勝手に解いており、これはまた夜になったら叱られるんだろうな、と内心苦笑いした。

「ただいま、姉さん」

「おかえり。誠実せいじくんのお手伝いは終わったの？」

「んー、まあ一区切りはついたよ」

最低限の会話だが、事件の経緯を根掘り葉掘り聞かれるよりは楽だった。

そんな小転の前にあるガラステーブルには、白露が逢依に出された「勉強プリント」が大量の丸と大きな二重丸が書かれて積まれている。おそらく今日の分だろう。

学校に行けない白露のために、逢依が作っては毎日3枚必ずやらせているものだ。これがちゃんとできていないと、次の週の土曜日は一緒に遊んであげないことになっていく。

普段は土日しかめいっぱい遊ぶ時間がないだけに、白露だけでなく、白露を希繫以上に溺愛している逢依にとっても大きなペナルティだが、甘やかさないことこそが逢依なりの愛情なのだろう。

「さて、じゃあ何をして遊ぼうか」

「では、一緒に本を読みましょう。先日お母さまに昆虫の図鑑を買っていただきましたので」

子供が読むにはやや分厚い立派な図鑑を両手で大事そうに抱えながら微笑む白露のおかげで、蓬萊寺との戦いによって摩耗した希繫の精神も少しづつ癒されていく。

このチョウは羽根が綺麗だ、このバッタは身長は何倍も高く飛べるのだとはしゃぐ白露を見ると、普段の淑やかで大人びた様子を見せる彼女も、まだ齡10歳の少女なのだ

と実感する。

自分の子ながら、他人に迷惑をかけないことにばかり気が行くのはどうしたものかと苦笑いする希繫だが、それもきつと自分に似たせいだという自覚もある。

だが、自分がそうであるように、他人にまったく迷惑をかけず生きることなどできるはずもない。白露もきつと、それを自覚する日が来るだろう。

あるいは、彼女がシンクロナイザーを纏おうとするのなら、既に自覚しているのかもしれない。なんといつても、白露は希繫だけでなく、希繫と逢依の娘なのだ。そんな白露なら、きつと希繫よりも早く気付けるだろう。

そして、そんな時に真つ先に迷惑をかけて——頼ってくれろとすれば、それはきつと親である希繫や逢依ではないのだろうと、それだけが寂しいと感じながらも、希繫はそれを口にはしなかった。

彼女が大きく自立するのはもつともつと先のことだとしても、小さな自立というものは身近に迫っているのだから。

「お父さま、この文字はなんと読むのですか？」

「んー？ ああ、これは「はつき」って読むんだ。『カプトムシは、その大きなツノを使って、ものすごいパワーを発揮します』だな」

『発揮』って、こういう字なのですね。普段よく聞く言葉でも、文字となるとなかなか

……まだまだ勉強不足ですね」

「そりゃあ、白露は今まさに勉強を一番頑張らないといけない時期だからな。知らないことがいっぱいあつて、それをどんどん吸収するのが、お前みたいな年頃の子の本当の仕事なんだぞ」

そうだ。白露の本当の仕事は決して戦うことなどではない。親である希繫や逢依を救うために、時代を遡つてまで命を懸けた戦いに身を投じることなどでは断じてはない。

彼女は子供だ。親に甘え、友と笑い合い、たくさん遊んでたくさん学んで、たくさん食べて眠つて毎日を笑顔で過ごすのが白露の送るべき本来の日常であるはずだ。

なのに、今の彼女は全てを投じてこの時代で戦おうとしている。大好きな父と母の「実の子」としての証明も失い、戸籍上は二人の「養子」となつて、きつとたくさん居たはずの学友や知人友人を全て捨てて。

白露の笑顔を見る度に、胸の奥が締め付けられる感覚に襲われる。本当ならこの笑顔はもつとたくさんの人々が見るべきものだったはずなのだ。彼女を知る多くの人が見たいはずの笑顔なのだ。

なのに——今この争いに満たされた時代では、それを見られるのは一握りだ。それは彼女が笑顔を見せられるような環境にいないという意味でもあり、彼女が笑顔を見せら

れる相手が限られているという意味でもある。

人を疑うことなど到底できそうにない少女が、「信じていい人」と「信じちゃいけない人」を選ばなければならぬ時代。「笑顔でいい時」と「笑顔になっちゃいけない時」を見極めなければならぬ環境。

そんなところに、彼女を追いやってしまった未来の自分への怒りが、希繫の胸を握り潰すほどの力で締め付けるのだ。



「ただいま。……あれ？ いい匂いがしますね。お兄さん……が作ってたらこんなまともな匂いがするわけありませんし、お姉さんですかね。普段ほとんど家事しないのに。何かいいことあったのかな」

時計の長針と短針が真逆を指す頃、居候組の一人である優芽ゆめが帰宅する。未来事件の解決後、レイドリベンジャーズの情報統制部に入団した彼女は、この家のレイドリベンジャーズ組の中では一番帰りが早い。

もちろん情報統制部の仕事が少ないというわけではないし、むしろ忙しきで言えば前線部隊よりもよっぽどキツイと言われるほどの部署ではあるのだが、それだけに職員の

健康管理が徹底している部署でもあるからだ。

そのため、それまで家事の9割以上を担っていた逢依に代わり、最近では夕飯の準備や風呂の湯沸かしは優芽の仕事になりつつあったのだが、この日は珍しく夕飯を小転が作っていた。

「お姉さん、今戻り……って、なんですかこれッ!?」

「白露ちゃんがわたしのごはん食べたいって言うからにはりきつちやった」

「……一応、止めはしたぞ?」

——が、あまりに久しぶりだったために感覚が鈍ったか。それとも加減そのものを忘れていたか。優芽の視界に飛び込んできたのは8人分の椅子を並べられるほどの大きなテーブルを埋め尽くす品々。

悠生^{ゆうき}が大食漢でなければ明日の夕飯まで残りそうなほどの量に、優芽だけでなく事の発端となった白露までもが自らの発言に押し掛かる責任感で涙を浮かべ始めている。

「お兄さんと香坂先輩は小食だし、あたしと総交^{そうま}さんとお姉さんと白露ちゃんもせいぜい普通よりちよつと食べるくらい……覚悟^{さとり}さんと大郷先輩の二人にほとんど全部かかってますよねコレ……」

「ま、まあ食べきれなきや明日の昼の弁当とかに回せばいいだけだから……」

「そうは言いますけど、そうなると今夜だけじゃなく明日の夜まで香坂先輩の料理はお

あずけですよ？ 朝なんてパンとベーコンとサラダくらいなんですから」

「なんてことしてくれたんだ姉さん……」

希繫にとつて食事というものは非常に大きな意味を持つ。175cmという身長に對してたつたの45kgしかない貧相な彼の肉体は、逢依の料理によつて奇跡的なバランスで保たれているのだ。

もちろん、本当なら逢依としても彼にはもう少し体重をつけて健康的な身体になつてほしいと願うところではあるが、彼はスピードを持ち味とするレイドリベンジャーズ。そのスピードは今の肉体によつて保たれており、彼はレイドリベンジャーズとして、人類を守る戦士として、自らの持つ武器を最高の状態で維持し続けなければならないのだ。

あと純粹に逢依の料理が食べたいという欲望もあるが。

「……あと30分くらいしたら逢依と覚悟も帰つてくるし、ひとまず二人が戻つてくるまでに少しくらい洗い物をしておこう。俺と優芽も手伝うから」

「あつ、ではわたしもお手伝いさせていただきます！ お母さまのおかげで、お皿拭きくらいならできますので！」

「白露ちゃんはいいい子だね……。じゃあ任せようかな」

「いや「任せようかな」じゃなくて姉さんが率先してやるべきだろ」

休憩—プレパレーション—

蓬萊寺の撃退から三日後。レイドリベンジャーズはようやく襲撃の頻度が収まり始めたレイダーの連続襲撃に、小言も交えながら一息つくだけの余裕を見せるようになっていた。

前線に出ずっぱりであった各部隊の隊長陣も、ようやくまともにレイダー連続襲撃事件の原因究明に本腰を入れ始め、何より連戦のために傷ついたユナイトギアのメンテナンスのためにラボで缶詰になっていた技術開発部は、久方ぶりの太陽と対面して涙まで流していた。

そして、そのデスマーチを終えた技術開発部のメンバーの一人は今——。

「いやーんっ！ もーやだ悠生ゆうまきーっ！ いくらわたしちゃんが天つつつオメカニックだからって腕は二本しかないってのに現場を知らないメツセンジャーは新型ギアの開発期限を二週間しか伸ばしてくれないし、その上でこの連続メンテだよん!? いくら温厚レベル100のわたしちゃんでもキレることくらいあるんだからねーんっ！」

「メツセンジャーは上層部の決定を伝達してただけなんだから許してやれよ。あとお前が温厚レベル100なら希繫が計測不能になるからやめとけ。それといい加減に離れ

ろ自称天才メカニック」

この通り、ただでさえ部署が違うせいでなかなか会えない上に、ここ最近の忙しきのせいで休憩中の会話もままならなかった友人に思いつきり抱き着いて泣き言を言っていた。

悠生は「自称」と言うが、彼女——なかしまなきけ仲嶋菜咲は、54年前に試作機が開発されて以来、長らく「完成した技術」として改造不可能と言われていたユナイトギアを、最初にして唯一、改造に成功した紛うことなき天才である。

本人曰く「ユナイトギア未満の技術なら片手間で十分」とさえ豪語するほどであり、事実として彼女がレイドリベンジャーズに入団したからこそ、1430号以降のユナイトギアはそれ以前のものとは世代ひとつ分飛び出た性能を誇っているのだ。

「ほら、今日は夕飯くらい食いにいけるから仕事に戻れ自称天才」

「マジでーん!? よっしゃー、一か月半ぶりに夕飯デートだーんっ! さっすが、わたしちゃんのことよくわかってるじゃん悠生! ちゅーしてあげるよんっ!」

「焼き肉か牛丼な」

「わたしちゃんのことわかってるけど女心わかってないねーん!」

とは言えここは技術開発部の戦闘サポート用ギミックウエポン開発ラボラトリ。自分の持ち場を離れているのはむしろ悠生の方である。

「菜咲えええッ！」

「んー？ あれっ、希繫きづなじゃーんっ！ そんなに慌ててどつたのーん？」

悠生の腰かけるベンチの隣に座ってまったりしようとした直後、耳を劈く怒声が猛スピードで近づく。

誰、と姿を見やる必要もなく、悠生はそのまま手元の資料に視線を送ったまま菜咲を放置しつつ、菜咲本人もまた彼の怒りの原因を記憶の底から掘り起こし始めた。

「どうもこうもあるかッ！ お前だろエクレールに妙な機能つけたの！ なんだあのアキレス腱あたりについてたバカみたいな出力のブースター！ 思いつきりすっ転んだわ!!」

「あー、こないだ寝ぼけながら弄つてたのエクレールだったんだ。わたしちゃんもわけわかんないまま作ってたから直す間もなく返却しちゃったんだよねーんっ。ちなみにあれは高速移動用のブースターじゃなくてキックの威力を増強するためのものだから、使い方間違つたら当然そうなるよんっ！」

「どつちでもいいわ！ 今すぐ外せ！ つーか寝ぼけながら世界最高峰の技術結晶を弄り回すな！ 万が一があつたらどうする!?!」

以前、愛車のXD400Rを魔改造され重厚な外部装甲と明らかに常軌を逸した大型ブースターをつけられたトラウマが蘇りつつある中、その怒りを菜咲の肩を掴んで揺さ

ぶる程度に抑えている希繫を見て、悠生は「やつぱ計測不能は違うな」と独り言を零す。ちなみにXD400Rについては、大型ブースターは取り外してもらえたものの、外部装甲については一時的に外されているだけで、今も遠隔操作でいつでも装着可能な状態である。厄介なのは、実用性がしつかりあるという点に尽きるが。

「おやーん？ わたしちゃんの腕を疑うなんて希繫らしくないねん。寝ぼけた程度でミスるようなら平凡メカニック未満、下の下だよん。人類の希望たるレイドリベンジャーズが誇る天つつつオメカニックのわたしちゃんが万が一なんてありえないよんっ！」
「くっ、バカのくせに天才ってやつはこれだから……！ とにかく、俺はこれから逢依あいいの出席する会議についていかなないとだから夕方までに直しとけよ！ あわよくばエクレールの感情エネルギー受容量を増やしといてくれ」

「最後しれつと難題つけ足したよねんっ!」
そそくさと帰っていく希繫を見送り、押し付けられたエクレールを握り締めると、菜咲は無言のまま悠生へと向き直り、悠生もそれをちらりと一瞥して資料を持たない方の腕を広げると、彼女の体躯がその腕の中にすっぽりと収まった。

ユナイトギアのメンテナンスおよび改造というものは、ユナイトギアが世界最高峰の技術によって製造されている以上、どうしても相応の労力と時間を要求される。現在、午前10時半。夕方までに終わらせるのはいくら菜咲であつてもギリギリ。

しかし、菜咲がそれを断ることはできない。エクレールを必要とする希繫のためでもあり、天才メカニックとしてのプライドのためでもある。どちらにせよ、菜咲の休憩はここで終わるのだ。

「悠生。希繫に「エストレ屋の一番高いケーキ3つね」って伝えといてくれるかなん……？」

「あいよ。夕飯もマシンなどこ予約しといてやるからちやつちやと片付けてこい」

腕の中から離れて駆け足でラボラトリの中へと消えていく菜咲を見送ると、悠生もベンチから腰を上げて自分の持ち場へと戻っていった。



「で、今回の会議でも結論が出なかつたんですか？ レイダー連続襲撃事件の原因つてやつ」

希繫と逢依が会議を終えて第二前線部隊のオペレーションルームに戻ると、さつそくとばかりに望月が内容について問いかけた。

同部隊の諸星・天宮・空宮の三人は共に連れだって休憩に入っているらしく、今この場には希繫・逢依・望月の他にオペレーター2名だけが残されている。

「ええ。並外れたネガティブな感情が原因ではないか、とは言われているけれど、それがどうして今月いきなり増したのか、という点が不明なのよ」

「ネガティブな感情……先月の「未来事件」じゃないんですか？」

「それも考えられたが、あのレイダーは覚悟さとりが改造した装着者しか襲わないシロモノで、ほとんど市民に被害がなかったから可能性は低いんだそうだ」

レイダーが人間を襲う理由として挙げられる最も大きな要因は、人間が持つ「負の感情」が彼らのエネルギー源であるという点だろう。人間を襲うことで不安や恐怖心を煽り、喰らうことで自らの食糧とし、数を増やすのがレイダーだ。

故に膨大な感情エネルギーを秘める装着者は、レイダーの恰好の獲物であると同時に、ポジティブな感情をユナイトギアによって増幅し、ぶつけることで、彼らに有効的な打撃を与えることが可能になる。

しかし、ポジティブな感情が大きいということは、レイダーを前にしても不安や恐怖心を煽られにくい、という意味でもある。だからこそ、未来事件は今回のレイダー連続襲撃事件とは無関係だとされたのだ。

「今月に入っていきなり、つてとこが不思議ですよー。確か隊長のときの娘さんが未来から来た日あたりからでしたっけ、最初の襲撃」

「いいえ、白露ちゃんと私たちが会ったのは確かに連続襲撃事件の前日だけれど、彼女が

この時代に来たのはその約一週間前だもの」

「あー、じゃあその子が未来で見た恐ろしい事件がその子の大きなトラウマになって、つていう可能性はないんですね」

「まあ、そもそも人一人の生み出す感情エネルギーがここまで大規模な事件になるとは思えないから、当然といえば当然よね」

そうでなくとも、白露はシンクロナイザーに適合したユナイトギア装着者である。

今はまだほとんど使いこなせていないとはいえ、数あるユナイトギアの中でも特に扱いの難しいシンクロナイザーを起動させた彼女が、レイダーとの接触で過剰な不安や恐怖心に煽られる可能性は極めて低い。

もつと言えば、白露曰く彼女が本来いた時代ではレイダーは既に絶滅した存在であり、彼女が実際にレイダーを見たのはレイダー連続襲撃事件の初日、小転こじろとシヨツピングをしていたあの日が初めてだったという。

となると、あの時は不安や恐怖よりも漠然とした驚きだけがあったはずだ。故に、彼女が今回の事件と繋がる、という可能性もあまり現実的ではないだろう。

「白露ちゃんといえば、未来の『悲劇』では蓬萊寺の本格的な襲撃があったそうだけれど、あなたが一昨々さきおととこ日に対峙した蓬萊寺はどんな相手だったの?」

「ウィルフな。どんな、って言われてもな……。正直あの時は無我夢中で、敵をしつかり

観察できてたのは誠実せいじの方だったから」

「希繫さんがそこまで余裕のない戦いを強いられるってことは、やっぱり蓬萊寺ってヤバいんですねー。メアじゃ全然なんにもできずにやられちゃいそう」

「いや、お前が正規ELBシステム持つてりやだいぶ善戦しそうなんだが」

第二前線部隊において、実質のエースは正規ELBシステム——即ちユナイトギアを持つ希繫であるが、単純な戦力という意味においては、希繫以上の力を持つのがこの望月芽愛もちづきめあである。

簡易ELBシステムしか持たないにも関わらず、レイダー以外の敵に対しては希繫以上の戦闘力を誇り、広範囲・高威力の攻撃手段を持つパワーファイターでありながら、捌め手・駆け引き・小手先も使いこなすトリツキータイプでもある。

もしもレイドリベンジャーズの敵である「国際脅威的侵略性生命体」がレイダーではなく、テロリストや通常攻撃の有効な敵であったなら、間違いなく第二前線部隊のエースは彼女だっただろう。

「いいんですよ簡易型だけだつ！ いざつて時は希繫さんが助けにきてくれればいいだけなんですからつ！ まあ、蓬萊寺との戦いが本格的に激化するようなら、そうも言うてられなさそうですけど……」

「なあ逢依、こいつそろそろ上官命令で正規免許持たせないか？」

「さすがにそれは……と言いたいところだけれど、割と冗談抜きでその必要が出てきそうなのがなんとも言えないわね」

えー、と頬を膨らませる望月をひとまず宥めつつ、各々は自分の職務に戻っていった。

無邪気—ファイアーズ—

「こちら第二前線部隊・攻撃隊の桐梨きりなし！ 現在、永岑氏A—07ポイントからA—08ポイントに向かって南下中のレイダー群を追跡中！」

「同じく望月もちつきですっ！ 一部レイダーは対象の群を離れA—09ポイントへと向かったみたいですよっ！ 諸星もろぼしくんよろしくっ！」

『既に第一前線部隊と連携し、二体は処理した。一部じゃなく具体的な数を言え』

レイダー連続襲撃事件12日目。ピークをようやく脱したとはいえ、わらわらと湧いて出ずるレイダーたちに愚痴をこぼす暇もなく、レイドリベンジャーズは戦場に駆り出されていた。

通常のレイダー襲撃と違って、レイダー連続襲撃事件におけるレイダーの勢力レベルはいずれも『群』以上。

エース揃いの第一前線部隊でさえも手を焼く数というだけに、サポートと主力戦闘のどちらにも対応できる第二前線部隊に、休みなど与えられるはずがなく、第二前線部隊のメンバーたちは疲労と愚痴が露骨に増していた。

とはいえ、レイダーの殲滅はレイドリベンジャーズの本分。いくら疲弊しようとも、

レイダーとの戦いに不満をもらすことなどできはしない。

『こちら本部の香坂こうさか。レイダー群の逃走ルートはこちらでも確認中。既に幸盛支部のレイドリベンジャーズに応援要請を出したわ。向こうの第二前線部隊がA―08ポイントで待機中だから、うまく誘い込みなさい』

「了解。天宮あまみや・空宮そらみやはレイダー群の両サイドを囲え。奴らを左右に逃がすな。俺が追い込むから、望月は万が一こぼれたレイダーがいたら捕えろ。レイダー群はともかく、数体ならできるだろ？」

希繫の指示に返事すらなく、天宮と空宮は各々のポジションに移動、望月も彼に続き後方からレイダーたちを追いやる。

現在地点であるA―07ポイントは住宅の密集した大規模住宅エリア。ここで戦闘を激化させては被害は計り知れない。ならば少しでも被害を抑えつつ、海に面するA―08ポイントに誘導することこそ最善策。

既に数体のレイダーが移動ルートを逸れようとするも、チェーントタイプの簡易ELBシステムを持つ望月がそれを許さず、強引に縛り付けてスピードを緩めないまま引きずり回す。

「あーん！ レイダー重ーい！」

「文句言うな、お前しかレイダー引き摺れる奴いないんだから」

「この非力男子どもー！」

極端に脆弱な希繫だけでなく、しれつと自分たちまでひと括りにされたことについて文句のひとつふたつぶつけないと思つた天宮と空宮だが、ひとまず任務を終えてから存分に仕返しをしようと思つて心に決めて言葉を呑んだ。

しかしそうこう冗句をかわす内に、レイダーも追われるだけでは行く先が知れていると判断したのか、数体が殿として立ち止まる。これに対して即座に判断を下したのは希繫だった。

「望月、ここを任せる。第一と連携し、ここを収めろ」

「らじゃーっ！ んじゃ、引き摺りメンバーもまとめて片付けちゃおうかなー。隊長、第一の人を適当に見繕つてこつちください」

『了解。第一前線部隊に応援要請を出すわ。5分……いえ、10分くらい稼いでくれる？』

はいはい、と軽く返事を返す間にメインのレイダー群と希繫たちは姿を消し、この場には5体のレイダーと望月だけが残された。

いかに永岑支部の第二前線部隊において単体戦力最強を誇るとはいえ、望月が持つのは簡易型ELBシステム。レイダーに対して打撃を与えられるとはいえ、エモーショナルエナジーをチャージできない以上、彼らに対する致死性を持たない。

故に彼女が今ここで出来ることといえば、第一前線部隊からの応援が到着するまで時間を稼ぎ、これら5体のライダーたちをここに留めておくこと、それだけだ。しかし――

「さーて、じゃあみんな見てないし、久々に本気でやつちやつていいよね？　まあ、返事なんて聞かないけどさ」

『――！』
 雑音にも悲鳴にも似た、ノイズがかった叫びが、住宅地にほど近いこの公園に響き渡る。

住民は既に避難を追えているだろうが、生憎と望月は加減の下手なパワーファイター。公園という狭いリングで4体もの相手をするのは、自らの強さ故に骨が折れる。

それでも――自らの慕う上司がこの場を自分に任せ、それを彼女は承った。共にいた二人の同僚も、彼女を信じていたからこそ何も言わずに先へと進んだ。ならばこそ、ここでこのライダーたちに背を向けることはできない。

背を向けていいのは、自分が本気で守りたいものか、自分を本気で守ってくれる相手だけ。故に、望月芽愛もちづきめあは戒めの鎖を握り締める。

『――』
 「四足歩行型3体と二足歩行型2体……飛行型がゼロなんて、ちよろすぎて笑っちゃう

ね！」

正面から襲い掛かるのは一体の四足歩行型レイダー。そしてそれに追従する二足歩行型と、左右に展開する二体の四足歩行型。複数の戦力が単騎に対して打つ先手としては定石といえる。

定石は定石となるだけの結果を生み出すからこそ強力だ、ということを理解した上で、それでもなお敢えて言おう。定石に従うばかりの戦術が、レイドリベンジャーズにどれほど無力であるか、と。

「散開したところ悪いけど、もっぺん一纏めにしちやおうか！」

『——』

両手に握ったチェーンが意思を持った蛇のようにうねり、四体のレイダーを固く絡めとると、その怪力にものを言わせて地面へと叩きつける。

感情のない大地への叩きつけは、レイダーに対して有効なダメージとはならないものの、生み出される衝撃は絶大。その反動で3メートルほどの高さまでバウンドしたレイダーに対し、今度はチェーンを鞭としてダイレクトに攻撃を打ち付ける。

チェーンによる打撃は、先程の投げ技と違いELBシステム——即ち感情エネルギー——による攻撃である。故に、致命的なダメージを与えられないとはいえ、明確なダメージとしてレイダーに蓄積される。

「ちよつと飛ばしすぎたかな？　ま、この公園リッングから出さなきゃいいよね！」

伸ばしたチエーンをガントレットのごとく腕に巻きつけ、フラフラと立ち上がるレイダーへと駆け出すと、三体の四足歩行型を庇うように二体の二足歩行型が望月の前へと立ち塞がる。

しかし地を駆ける望月の足に迷いはなく、逆に好都合とばかりに二体の二足歩行型レイダーをその両の拳で貫く。いかに致命性がないとはいえ、体の1割以上の体積を抉り取られるように失ったレイダーは、彼女に慄く様子を隠さなかった。

『——ッ!?!』

「メアだけだからつてナメないでほしいですよねーっ。希繫さんたちがいないからつて、たった二頭でメアをどうにかできるつて本気で思つてたのかなー？」

二頭のレイダーを膝立ちで踏みつけながら穿ち貫く拳がレイダーに叩きつけられる度、まるで大木が倒れるかのような音と地鳴りが公園内に響き渡る。

既に抵抗するだけの力すら残っていない二足歩行型レイダーへ、執拗なほどに何度も打ち付けられる銀鎖の拳は、既にレイダーの青い血糊でべったりと濡れている。

その様子を見た残りの四足歩行型は恐怖心を煽られながらも、無防備な彼女の背中へと触手を伸ばす。望月の視線は足元のレイダーに向けられたまま、その背後に息を潜める三体のレイダーには注がれていない。

このままコンマ数秒を気付かれなければ、この細く強靱な触手が彼女の首にしゅるりと巻き付き、そしてキリキリと締め付けながらその息の根を止めるだろう。

——と、もしもレイダーにそれほどの知能があるのなら、間違ひなくそう思っていただろう。しかし……。

「視線さえ向いていなければ気付かれないとでも？ 甘いですなー。ここは敵前、眼前だけでなく認識できる敵性には常に意識を向けているに決まってるじゃないですかー」
しゅるりと触手を絡めとり、キリキリとそれを引き千切ろうとするのは、彼女の腕に巻き付いたチェーンよりも遥かに細い、ワイヤーチェーン。

「そりゃ簡易型だし正規型みたく一機だけで好き勝手はできないけどさ、逆に言えば同系統の武装ならいくつ使ってもいいのが簡易型のいいところだよな」

『————ッ！』

悲鳴を上げるレイダーに「何いつてるかわかんないや」と困った風に笑いながら、触手ごとワイヤーチェーンを引き抜くと、望月は静かに立ち上がり、そしてその腕に巻き付いたチェーンを再び解き——、

「じゃ、あと5分メアと遊ぼうね！」

反逆—リベンジ—

「A—07ポイントでのレイダー反応、消失しました。望月隊員もちづきおよび第一前線部隊からも処置完了の報告が届いています」

「ひとまず民家への被害はゼロね。公園には相応の被害が出ってしまったけれど、そこは上がどうにかするでしょう」

第一部隊の到着と同じくして、望月が抑えていたレイダーたちの反応が消失し、分断されていた孤立戦力暁の負担がひとまず解消されたことで、逢依あの心配もまた荷が下りた。

しかし、彼女が請け負っていたレイダーはあくまでメインターゲットではなく、そこから零れ落ちたものに過ぎない。

故に、第二前線連合部隊とレイダーの交戦状況の確認が急がれた。

「さて、メインターゲットはどうなっているの?」

「A—08ポイントにて幸盛支部の第二前線部隊と合流、戦闘を開始しています。……あれ? えっ、ちよっと待って! あ、新たな敵性反応あり! これは……ユナイトギア!」

「反応特定！ このパターンは……遺失ユナイトギア・カテゴリア！ 第一四四号E L B システム『テストマン』ですッ！ 登録者確認……完了！ 登録者は『ウイルフ・ミルワード』！」

「ウイルフ・ミルワード？ ウイルフ……？ ……ッ、『蓬莱寺ウイルフ』ッ!?」

第二前線連合部隊とレイダーの交戦ポイントに近づく新たな敵性反応。それは、希撃と誠実と敬意の三人が死に物狂いで撃退した厄災『蓬莱寺』のものであった。

即座に全前線部隊にこれを通達、第二前線連合部隊に撤退命令を下すが――。

『こちら第二前線部隊・攻撃隊の桐梨きりなし！ 何者かの攻撃によって応援部隊の二名が戦闘不能！ 撤退が間に合わない！』

「……私が前に出るわ。30秒でいい、全力で時間を稼ぎなさい」

「いけません隊長！ 他の部隊長が全員前線に出ている以上、隊長まで前に出れば本部の指揮能力の致命的な低下が発生します！」

「だとしても、今ここで出なければ第二部隊に限らず、前線部隊が全滅する可能性があるわ。それに……人を守るのがレイドリベンジャーズの使命だもの。だったら、レイドリベンジャーズ仲間も守らないとダメなのよ！」

ここは任せる、と一言告げると、逢依は戦場へと駆け出した。正義を守るのがユナイトギアの使命ならば、人を守るのがレイドリベンジャーズの使命である。それは、全て

のレイドリベンジャーズの胸にある根本思想だ。

しかし、否——だからこそ、人を守る者もまた人であることを忘れてはならない。自らの相棒たるクリュスタルスを身に纏い、逢依は駆ける足に力を込めながら、叫んだ。

「クリュスタルス！」

『了解。ワールドフリーズを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

一分一秒すら惜しいこの状況、いくら歴戦のレイドリベンジャーズが集まっても、手が蓬萊寺であるならば戦力の優劣は明らか。

だからこそ、逢依は口を含む昂揚剤の数を増やした。感情エネルギーの充填に時間を要するのなら、供給するエネルギー量を増せば時間の短縮は容易い。だが——。

「く、あ……ッ！」

『それ以上の服用は副作用時の精神影響が危険域に達します』

「構わないわ。それより、充填は？」

『あと僅かです』

クリュスタルスは現存するユニトギアの中でも最新にして最高の性能を持つが、そのピーキー極まるギア特性の影響で、スキル発動に必要なエモーショナルエナジー量が通常のギアよりも遥かに高い。

そのため、ただでさえ昂揚剤デトネイターによって騙し騙しギアを運用している逢依は、スキルを

ほとんど使用することなく戦うことを強いられる。スキル発動のために必要なチャージのせいで、戦闘に致命的な隙が発生するためだ。

だが、それでも、だとしても。彼女がレイドリベンジャーズであるために。彼女の愛する「彼」ならば、きつとこうするだろうという確信のために。彼女は時として誰よりも熱い感情を燃やす。

「クリュスタルス。仲間を守ろうとする気持ち、大切な人たちを守りたいと願うこの想い、あなたはこの気持ちをなんていうか知ってる？」

『——愛です！』

感情の昂ぶりに応じたように、世界の温度が消えた。

しかし文字通り世界を——「この銀河のあらゆる動き」を凍結させるこのスキルは装着者への負担も大きく、さらには装着者カウントで10分以上の使用には追加で負担が生じる。

目的地となるA—08ポイントまでの距離は28km。明らかに10分で到着できる距離ではない。故に、逢依が駆け抜けた先はレイドリベンジャーズ永岑支部の外ではなかった。

「クリュスタルス、ワールドフリーズを一時凍結解除」

『了解』

彼女が向かった先……それはレイドリベンジャーズの技術開発部。

そしてそこで働く「彼女」のところだった。

「あら？ 逢依さん、ギアを装着した上にそんなに息を切らしながら、いったい——」

「お願い覚悟ざと！ 今すぐヴォイドでA—08ポイントまで繋いで！」

唐突に目の前に現れ、前置きもなく何を言うかと思えば、と理由を尋ねようとする覚悟だったが、明らかに逢依の様子が普段の冷静な彼女らしくないと感じ取り、何も言わないままヴォイドを起動した。

「理由は後で聞きますからね？」

『空間と空間を連結します』

「……ありがとう」

人が通るには十分な大きさの「空間の穴」をヴォイドが生成すると、逢依は即座に再び世界を凍結する。

A—08ポイントの戦渦からある程度離れたそこから、目的地までは走って5分程度。凍結されたこの世界ならば、約束の30秒には十分に合う。

「お願い、無事でいて……！」



「30秒持ちこたえろって、まさか新手は……ッ！ 天宮と空宮は今すぐ負傷者を連れて下がれ！ 永岑支部のみんなは防御態勢！ 次の攻撃に備えてくれ！」

「いったい何がくるんです?！」

「レイドリベンジャーズがこれだけ警戒しなきゃいけない相手なんて知れてるだろッ！」

蓬萊寺だッ！」

天宮と空宮が負傷者二名を連れて前線から下がろうとするが、超長距離から鼠色の骨杭バイルが彼らに迫る。

即座に反応した希繫がそれを蹴り払うものの、すぐさま次の骨杭バイルが撃ち込まれ、希繫一人では処理しきれないほどの弾幕となる。

「このままじゃ……ッ！」

防ぎきれなくなる、と思いつながらもその場を下がれないのは、その背の向こうを守るべき仲間がいるから。

それに、ここで戦うのは希繫だけではない。

「下がれ、桐梨ッ！」

「——ッ!!」

突如として希繫の前に現れ、この弾幕を防いだのは、たった一枚の、群青マントの衣。

「悠生^{ユウマ}を置いてきて正解だったな……。防御は俺に任せて、お前と幸盛支部のレイドリベンジャーズは撤退しろ」

「総交……いや、有り難いがあの蓬萊寺の狙いはおそらく俺だ。だから、俺がここを離れても意味がない」

「お前が狙い、か……。ならば尚のこと、護り抜かなければならなくなった。到着に間に合っておきながらお前に何かあれば、優芽に顔向けできないからな」

二人は領き合うと、他の隊員たちを下がらせた。相手が蓬萊寺であるのなら、下手な追加戦力は足手まといでしかない。

今回は撤退戦だ。いつでも逃げ切ることのできる希撃と、どんな攻撃でも防ぎきれぬ総交さえいれば、ひとまずそれ以上の被害は防ぐことができるはず。

逢依が来るのなら、隊員たちの撤退もスムーズに済ませられるはず。あとは悠生さえ間に合えばまともな戦いになるかならないかというところ。少なくとも今のままでは防衛すらギリギリだろう。

「あの時はとことん『敵』だったお前と、こうして肩を並べて何かを守るってのは、感慨深いものがあるな」

「そう感慨に浸らせてくれない相手なのが残念だがな。足を引つ張るなよ？ 優芽のヒーロー」

「トーゼン。お前こそついて来いよ？ 優芽のパートナー」

視線を交わさないまま笑い合う二人の前に、ついに『災厄』が姿を表す。

鼠色の骨の尾と、鼠色の左腕を持つ男——ウィルフ・ミルワード。蓬萊寺ウィルフが。「左腕が鼠色に……。まさか、この短期間でエモーショナルエナジーの逆流を起こしたのか!？」

「リミットブレイクを幾度も繰り返さなければ逆流は起こらない……。つまり、それだけ無茶な運用をしたということだ。さすが蓬萊寺、頭のおかしさでは他の追隨を許さないな」

戦慄する二人も、ただ慄くばかりではない。

その圧倒的な存在を前にして、心の奥から湧き上がる恐怖心。そしてその恐怖心に抗い立ち向かおうとする気持ち。それこそが感情の昂ぶり。レイドリベンジャーズの強さなのだ。

「でも……。だからこそ戦うしかない！ 俺たちが退けば、それだけ守るべき市民の心に不安が生まれる！ 俺たちはレイドリベンジャーズ……。市民の不安に抗う反逆者だ！」

激烈——テリブル——

「エクレールッ！　まずは時間稼ぎだ！　全員の避難が終わるまでウィルフを足止めするッ！」

『了解。アクセルアクションを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

以前に戦った時と同じく、蓬萊寺戦では基本的に負の感情が募りやすいためリミットブレイクは使用不可。

電気による攻撃は伝導ワイヤーと絶縁グローブによって電気を地中に霧散されるため、電撃体のまま地中に電気を霧散された場合、数秒で収束不能になり、実質の死を迎える。

有効な手段としては電光による目晦みしたが、これは味方の総交にも影響が出るばかりか、それを防ぐために一時的に自分自身も視界を隠すため危険が伴う。

故に電撃体およびリミットブレイクを使用することなく、希繋の高速機動による猛攻で相手の手数を削りつつ、相手の攻撃を総交が防ぐのが現状での最良といえる。

「いやあ、前回はまんまとやってくれたよね。いかに桐梨小転の存在が強力な手札になり得るとはいえ、この僕にハツタリをかましてくれるなんてさ。おかげであの後しばらく

く彼女に怯えていた僕がバカみただったよ」

「まあ、俺にとつても最終手段だったんだけどな。姉さんの名前をあんな風に使うのは俺にとつても屈辱的だし、それでも言わなかったらアンタは退いてくれなかったろ」

「そうでもないかな。あの時点で既に僕の目指す『殺人芸術』とはかけ離れた状態だったし、機を改めるというつもりがないわけではなかった。もちろん決定打になったのは君のハツタリだけだね」

表情をまったく変えないまま、鼠色の左腕が著しい膨張を見せた。皮膚が裂け、肉を破り、巨大な骨だけがまるで装甲を纏う義腕のように姿を現す。

「腕一本まるごと骨に……。あれは後でちゃんと直せるのか？」

「い、いや……。確か逢依にもらったデータによるとテストマンは軽度の損傷は即座に修復できるらしいけど、さすがに腕一本となると……」

「槍状の骨の尾に加えて骨の巨腕。生半可な攻撃ではヒビひとつ入らないだろうが、機動力は多少なりとも犠牲になったか？」

「どうだろうな。あの尻尾自体がかなりの俊敏性を持つから、脚力に頼った機動力だけが攻撃速度や回避速度に直結しないってのがな……」

機動力を最大の武器とする希繫だからこそ、あらゆる動作に必要なとされるスピードの種類と、それに必要な部位の違いがより詳細かつ確実にわかってしまう。

ウィルフの巨大な左腕は、その重さと可動範囲の大きさから、脚力に由来する移動・攻撃・回避速度を著しく低下させたものの、彼の攻撃は全身の骨によるもの。それは何も至近距離でのものに限らず、遠距離への射出も含まれる。

回避と移動は基本的に脚力に頼るだろうが、防御手段という意味では、あの俊敏な槍状の尾がほとんどの攻撃を弾いてしまうだろう。故に、防御スピードも半端なものではないことがわかる。

『充填完了。アクセルアクション、いけます』

「まずは俺が仕掛ける！ 総交は防御に集中しつつ、反撃の策を練ってくれ！」

アスファルトを抉りとるほどに強く大地を蹴って駆け出すと、瞬く暇も与えず希繫のハイキックがウィルフの眼前を横切る。

並の相手なら首ごと吹き飛ばすほどの威力とスピードが込められた蹴りだが、さすがに蓬莱寺。涼しい表情を崩さないままかわしきる。

しかし一撃をかわされた程度ならまだ立て直しが利く。避けられた右脚を軸に、今度は左足で背面回し蹴りを叩き込もうとするが、これもかわされ骨の尾による刺突が希繫の脇腹を捉えた。

「ぐっ……！ エクレール！」

『了解。肉体を電気に変換します』

肉体を電気に変換し、電気を肉体に変換しなおせる希繫にとって、即座に致命傷となるような損傷でなければ回復は容易い。痛みこそあるが、痛覚を脳に伝える電気信号を一時的にカットすることで、それも遮断することができる。

痛みをカットし、即座に損傷を回復すると、希繫は再び攻撃へと移った。蓬萊寺を相手にする以上、攻撃こそが最大の防御。攻撃させる暇を与えてしまえば、それだけで全滅のリスクを格段に上げてしまう。

「至近距離なら……エクレールッ！」

『了解。スパークステインガーを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
「テストマン、檻を用意して」

『了解。骨檻ほねおりのZONEゾーンを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
息継ぐ間もなく猛攻を繰り返し続ける希繫と、それをものともせず巨大な左腕ひとつで防ぎ続けるウィルフ。

しかしそれは両者の力が拮抗している証ではない。この猛攻を防ぐ間にもウィルフの尾から放たれる骨の矢が後衛のレイドリベンジャーズたちに降り注いでおり、総交がプロテクトヴェールを最大限まで拡張しようやく防ぎきっている。

もしもウィルフが本気で希繫ひとりを意識を向けていたのなら、今頃もう彼は両脚を潰されてもおおかしくはないし、むしろ命を拾いきれるか否かも怪しいところだ。

『充填完了。スパークスティングー、いけます』
 『充填完了です』

希繫を中心に表れた12個の赤い球体。それらから一斉に放たれた全36発の電撃槍が、ウィルフの体を貫く。

スパークスティングーは一発の威力はさほど強くはないが、直線状に存在する敵を一斉に貫く貫通効果と、強力な感電・麻痺効果を持つている。

これで仕留めきれずとも、動きを止めるには十分。それも、全ての槍がまともに入つた今ならば――。

「希繫！ 飛び退けッ！」

「え――」



蓬莱寺ウィルフによる二度目の襲撃に希繫と総交が対応している頃。

永岑市A―09ポイントを担当していた悠生は、ようやく認識していたレイダーの全滅を確認し、先んじて第二前線部隊の危機に駆け付けた総交を追ってA―08ポイントへと向かおうとしていた。

「やっと片付いたか……。よし、ひとまずオレと総交以外のメンバーは他の第二部隊と一緒に撤退しろ！」

『いえ、私たちも隊長たちと共に——』

「通信の内容は聞いたろ。相手は蓬萊寺だ。防御に特化した総交はともかく、オマエらじゃ無駄死にまつたなしだ。それに蓬萊寺の別動隊がないとも限らねーし、どっちにして一旦戻って防衛線を張つとけ。救援が必要な時は頼らせてもらうからな」

第一前線部隊は、レイドリベンジャーズ各支部の精鋭が集まるエリート部隊。しかし相手が蓬萊寺ともなると、いかに彼らであつても生還は容易ではない。

強靱にして屈強な戦士が集うレイドリベンジャーズにおいて『最強』の名を欲しいままでにする悠生といえども、単騎では蓬萊寺と渡り合うことは難しい。故に、絶対的な防御力を持つ総交以外は、連れて行くわけにはいかなかった。

しかし、そんな死地に向かおうとする悠生の視界に、ありえない——あつてはならない二人の姿が入り込んだ。それは……。

「小転^{こころ}！」

「……ん？ ああ、悠生くん。こっちのレイダー全然見かけないけど、もう片付いたの？」

「ああ、ひとまずはな。それよりどうしてオマエがここにいんだよ。それもシロまで連

れて。子供連れて歩くようなとこじゃねーだろ、今のここは」

——白露しろろの手を引きながら悠然と歩く小転であった。

ここに来るまで既に幾らかの戦闘を経過しているようで、小転はともかく白露の服には端々に綻びが見られた。首に巻かれた白銀のマフラーは仄かにエモーショナルエナジーの発光が見られ、それがユニイトギアであることは一目瞭然である。

白露がどうしてユニイトギアを纏っているのか、という点は既に彼女が最初にギアを纏ったその日の晩に聞いていたが、さすがに戦場にまで出張しているとみると、何も問わずにはいられない。

「まあ、わたしもそう思わないわけじゃないんだけど……。でも、お姉ちゃんとしては、末っ子のやりたいことを、めいっぱいやらせてあげたいしね」

「……シロ。オマエ、自分でここに来たって言ったのか。ここがどんだけ危険で、どんだけこえー場所なのか、わからねーほどのバカじゃねーはずだろ。なのに、どうして来た」

威圧するように睨みつける悠生の瞳に、情けや容赦は欠片も感じられない。

それは決して彼が非情な人間だからというわけではなく、希繫や小転が身内に甘い分、厳しくすべき時には誰よりも厳しくするのが、幼い頃からの悠生の役割だからだ。

「戦わなければ……。今できることをやらなければ、後悔することを知っているからです。

運命を変える使命を、全うしたいからです。わたしの、一生を懸けてでも果たしたいワガママのために」

「オマエの熱意も使命も知ってる。だが今ここは戦場だ、ガキが来る場所じゃねーんだ。オマエの知ってる未来なんざオレらが変わえる。オマエの守るべき存在はオレらが守る。オマエが望んだ未来はオレらがくれてやる。だからガキは今すぐ帰れ」

「……帰れません。わたしの帰るべき場所は、きつとどんなわたしでも受け入れてくれるでしょう。でも……できることをやらないまま帰ろうとしたら、わたしの心が帰ることを許してはくれません。だから……まだ帰れません」

口の悪い悠生の言葉に不満を抱くこともなく、白露はただ自分の想いを素直に告げる。

だが、想いだけで戦いを許すほど、悠生は甘くない。心を重んじるのなら許すべきだろうが、命を重んじるのなら、想いだけで許すわけにはいかない。

自分の身を守るだけの力と手段を持たないまま戦えば、それは自らの命を望んで絶つことと何も変わらないからだ。

「帰れる帰れねーは関係ねーよ。オレが力づくで引つ張ってけばいいだけの話だ。それが嫌なら大人しく帰れつつつてんだよ。オレにボコられて帰るか、大人しく自分で帰るか、二択だ」

「……だとしたら、それは二択ではありません。三つ目の選択肢が入っていませんから」
「……言ってみろ」

威圧する視線をさらに鋭く尖らせる悠生に、白露は冷や汗を流しながらも言い放つ。
「悠生さまを制して先へ向かいます」

決断—ミーンズ—

おおきじゆうき
大郷悠生。絆フアミリイの家族の長兄にして、世界最強のレイドリベンジャーズであり、橙に燃え盛る右腕には砕けぬものなしとされた剛腕の豪傑。

その悠生を前に対峙するのは、絆フアミリイの家族の末子にして、世界最弱のレイドリベンジャーズの娘であり、未だ己のギアすらも扱いきれていない未熟者の少女。

互いの実力差は明らか。ありとあらゆる要素を鑑みても、白露しろろが悠生に勝る要素など
在り得るはずもない。

まして、これは白露の意地と力を示すための戦い。こればかりは小転こころも手出しできず、白露はただ一人、その幼い体躯と扱いきれないギアだけを以て『最強』と相對するのだ。

「二応、お前が自分で自分の身を守れるってことさえ証明できれば、オレは文句言わねーよ。さすがに弟妹きょうまいの子供を殴り潰すわけにやいかねーからな」

「……讓歩は有難いですが、私は悠生さまを倒すつもりで戦わせていただきます」
「つたりめーだろ、ナメんな。加減なんざしたらテメーが死ぬんだよ。殺す気でかつていい」

睨みつける視線がぶつかり合い、互いの闘志が最高潮へと高まった時、白露と悠生は同時に駆けだした。

「シンクロナイザー！ わたしにアームズを！」

『了解。アームズ・『御霊鎮之紅瑠璃』を展開します』

手にした大太刀を大きく振りかぶると、白露は容赦なく上段から一気に振り下ろす。

しかし悠生も歴戦の雄。勢いだけで推しきれぬほど甘くはなく、白露の大袈裟を右手ひとつで掴み取り、そのまま引き寄せつつ鉄山靠を打ち込む。

その一撃を防ぐどころか、吹き飛ばされたまま受け身もろくに取れず地面をバウンドした白露は、肺を強打され呼吸を整えることすらままならないまま、しかしそれでも立ち上がる。

「……綺麗に入ったはずだがな。その諦めの悪さはさすがに絆の家族ってことか。チツ、ガキを甚振る趣味はねーんだがよ」

「ごほっ、けほっ……！ シン……クロ、ナイザー！」

悠生の強みは単純な力だけではない。その圧倒的なパワーを支える土台は、強靱な耐久力と防御力を兼ね備えている。

そんな彼に対して正面から攻めても、おそらくまともなダメージは期待できないであろうことは明白。そう察した白露は、すぐさま戦術を切り替える。

『了解。勢邪豪落せいじゃごうらくを使用します。エモーショナルエネルギー、充填開始チャージ』
 希繁ほどのスピードはないが、小柄な体躯と父親譲りの俊敏性が幸いして、悠生の攻撃をかわすことは容易い。

しかし、それは悠生の目的が白露の闘志を折ることであつて殺すことではなく、「回避不能の大規模攻撃」をしてこないから、という理由が大きいことは、白露も理解している。

手加減をされている。あまりにもわかりきつたことだが、その事実が白露の戦意を意図せず削る。しかし、相手がどれだけハンデをくれようと、ここだけは譲れないという意志もある。

「てやあつー！」

「そのちつせー体でそんなバカでけえ刀なんざ振つても、十分には使えねーことなんざわかつてんだろツ！」

「かふツ………！」

勢いよく横一文字に薙ぐべく振るわれたその一刀は、鋼のように強靱な皮膚をもつ悠生の手によつて掴みとられ、引き寄せられる勢いと共に掌底を鳩尾へと叩き込まれる。

呼吸もままならないほどの一撃に咳き込む白露であつたが、腹に風穴が開いていないところを見るに、彼はまだ手加減をしてきているのだろう。

しかし、そうなるといよいよ逆転の方法がみつからない。悠生は決して攻撃を避けているのではなく、その強靱な肉体によって受け止め、そして掴み取ってカウンターを入れてくる。

それはつまり、白露の放つあらゆる攻撃が、悠生に対しては一切ダメージにならないということの意味しているのだ。

「けほっ、けほっ……！ 刃が通らないほどの強靱な皮膚と筋肉……！ 斬撃は無効だとすれば、打撃に……いえ、衝撃はあるかもしれませんがダメージは望めませんね……。いったいどうすれば……！」

「アームズによる斬撃も、シンクロナイザーによる投げ技も、まして自分自身の打撃も、オレに対しては効果がないってわかったか。だったら、おとなしく——」

「……諦めません」

白露の頑なな意志に、悠生は小さな溜息を洩らす。

どんな強敵すらも力づくで解決してきた悠生にとって、あらゆる困難を打ち砕くパワーこそが強者の証。そして強者として弱者を守り抜くことが正義であると、彼は信じていた。

自分より力のない存在はすべからず守るべき弱者であり、女や子供はその最たるものであった。故に彼は自分の力に絶対の自信と責任感を持ち、今に至るまで『最強』の座

を譲らなかつた。

そんな彼の前時代的で差別的ともとれる考え方には異を唱える者も少なくはなかつたが、では彼の考え方を曲げさせることのできる「力」の持ち主は、事実として今までいなかつた。故に、悠生は白露の「頑なさ」が理解できない。

「わたしの名は桐梨白露。桐梨希繫きりなしきづなと桐梨逢依きりなしあひの娘……世界を救つた英雄たちの娘です！ だから……この程度の困難、なんとすることはありませんッ！」

弱者の意地はどこまでいっても弱者のものだ。そこに強者に抗うだけの力は存在しない。そして力なき意地など強者に対しては無力で無価値なものでしかない。

なのに、目の前でポロ切れのようになりながらも、未だその赤い瞳に闘志を宿して立ち上がる少女には、弱者にはありえない「強い意志」が垣間見えた。

「……戦いを制するのは力だ。圧倒的かつ絶対的かつ無慈悲で無敵なパワーこそが、あらゆる暴力に勝利する。だが、お前のパワーはオレの足元にすら及ばない。だからオマエはオレには勝てない」

「だとしても……ッ！」

「だが、それは戦いを暴力で制するために必要な条件だ」

悠生の燃え盛るような橙色の瞳が、荒々しい炎から静かに燃え猛る炎へと変わった。「戦いを制するのに一番手っ取り早い方法は暴力だ。それはオレが一番よく知ってる。

だが暴力以外の方法で戦いを制する方法がないわけじゃねーことを、オマエは親から教えてもらわなかったのか？」

「……しかし、言葉でここを通す気はないと仰ったのは悠生さまです。わたしも、悠生さまならばそうだろうと納得して、こうして対峙しております」

「そりゃそーだ。パワーじゃオレに勝てない。言葉じゃオレを納得させられない。オレと希繫の方法じゃ、どっちにしるダメだ。だったら、もう残るは逢依の方法しかねーだろ」

戦いを「力で押し通す」悠生の戦い方。戦いを「言葉で解決する」希繫の戦い方。そのどちらもが、今の白露では悠生には通用しない。

しかし、今こうして戦っているのは白露ひとりではない。悠生と白露の戦力差は圧倒的だが、二人に共通することが一つだけある。それは、ユナイトギア装着者であること。悠生はスヴィルカーニイと、白露はシンクロナイザーと共に戦っている以上、ひとりではどうにもならないことが、もしかするとどうにかなるかもしれない。故に、悠生は言う。

「逢依の戦い方はオレ以上に無慈悲だが、希繫以上に安全で確実だ。戦っている相手を、ただ単純に無抵抗な状態にする。そうすればどんな相手でもそれ以上どうしようもないし、戦う気力すら失う。そしてその手段に「力」も「言葉」も必要ない」

必要なものはただひとつ。自分のギアを完全に把握し使いこなすだけの頭脳。

「シンクロナイザーの言葉に耳を傾ける。シンクロナイザーの気持ちに応える。シンクロナイザーの力を理解しろ。シンクロナイザーはオマエの従者だが、パシリじゃねーんだ、オマエがきちんと使いこなせ」

「シンクロナイザーの言葉……気持ち……そして力……？」

「そうだ、オマエはシンクロナイザーのことをまだ何も知らない。ギア特性だけじゃない。シンクロナイザーが何を考え、どう自分をサポートするのか、自分がどう動けば一番シンクロナイザーを有効的に扱ってやれるか。何ひとつわかってない」

悠生の言葉はどこまでも冷徹で、しかしどこまでも正鵠を得ていた。

以前にも言った通り、ユナイトギアは本来、装着者によって「使われる」ことでその力を十分以上に発揮する。

しかし、まだ幼く戦士としての心構えができていない白露は、シンクロナイザーをまだほとんど使いこなせていないばかりか、自分ではなくシンクロナイザーを主体として戦闘を行っている。

それは言い換えてしまえば、装着者がユナイトギアを使うのではなく、ユナイトギアが装着者を使っている状態だともいえる。となれば、当然ながらシンクロナイザーの負担が極端に大きいものになることは明白。

「シンクロナイザー……」

「逢依の戦い方を意識しろとは言わねーよ。オマエはアイツがシンクロナイザーを使つてた時を知らねーだろーし、何よりあんなにギアを使いこなせるヤツなんてレイドリベーンジャーズの中でも多くねーからな」

でも、と一息おいて。

「まだ自分を使いこなしてもくれねーマスターのために、本来やらなくてもいい負担まで背負つてオマエを導いてくれるシンクロナイザーは、本当にオマエをマスターとして認めてると言えるか？ お前はマスターとしてそれでいいのかよ？」

「……………」

「たぶんまだシンクロナイザーの中で、マスターは逢依なんじゃねーか。お前は逢依の娘だからシンクロナイザーはオマエを助けてくれる。だがそれは……本当にオマエが求めるシンクロナイザーとの関係なのか？」

『……………』

シンクロナイザーは何も言わない。自分を使いこなせない白露を責めることもなければ、悠生の言葉から白露を庇うこともしない。

それはきつと、悠生の言う言葉が――。

逆境—ターニングポイント—

悠生ゆうせいと白露しろろの戦闘は、両者の実力を把握しつつ客観的に状況を把握できている小転こころとつて、あまりにも単調で退屈なものだった。

悠生の圧倒的なパワーが白露を容赦なく襲い、白露はそれをかわしてカウンターを入れようとするものの、彼の強靱な肉体がそれをもとせず、カウンターの直撃を許しながらも強引な力技で押し返す。その繰り返し。

純粹な体躯と経験の差。そう断じるに十分な実力差。しかしそれ以上に、白露が自分とギアの力を把握しきれていないことが、何よりも状況を悪いものになっている原因であつた。

白露の幼く小さな体躯は、悠生のような鈍足パワーファイターにとつて、決して楽な相手ではない。的が小さいだけで面倒なのに、さらに素早さが加われれば、攻撃などほとんど当たらない。どんな強力な一撃も、当たらなければ無意味なのだ。

しかし白露は父親譲りの素早さに関する自覚はあれども、その小柄な体つきについては無自覚であつた。何度か悠生の攻撃を避けることができているのはその小ささのおかげだというのに、それを単なる偶然やすばしっこさによるものだと勘違いしている。

それだけではない。シンクロナイザーさえも認める鋭い聴覚や嗅覚についても、ほとんど宝の持ち腐れ状態になっている。音に気を配っていればかわせた攻撃も目で追おうとして防御せざるをえなくなっていたり、ともかくにも不注意が目立つ。

小柄であることのメリットがわかっていないのなら、デメリットについてはさらに無関心といえた。特に顕著なのが、体の小ささがリーチの差だけだと思っている節がみられることだった。

体が幼小小さいということは、それに比例して体重も軽いということになる。機動性という点ではメリットだろうが、積極的な攻撃を行うのであれば、この軽さは明かなデメリットだと言えよう。

それは単に打撃が軽く弱いという意味には留まらない。シンクロナイザーのアームズ『御靈鎮之紅瑠璃』みたましずめのくるりは、彼女の身丈を越える大太刀。当然ながら重量も相応である。

白露はそれを肩に担ぎながら体重の移動や遠心力を用いて振るうことで騙し騙し使っているが、自分の体重の7パーセントに相応する約3キロもの重量を常に支え続けるには、あまりにも体重が足りていない。

と、フィジカル面での課題点だけでもこれほどの粗が見当たるというのに、ギアへの理解力という点に関しては、これ以上に問題が多かった。

シンクロナイザーのギア特性を知らないという最大の問題に目を瞑っても、先に述べ

た通りアームズを使いこなせていない点や、そもそもギアの形状や性質について、その特徴や欠点についてまったく把握できていない。

マフラー型のシンクロナイザーは、柔軟かつ伸縮自在であることを最大の強みとし、周囲の環境を利用しながら立体的な動きを可能にする、まさしく「柔」にして「技」のユナイトギアだと言えるだろう。

しかし白露はその柔軟さを犠牲にし、エモーショナルエナジーを注ぐことで硬度を増して防御に利用したり、ようやく伸縮させても投げ技に利用したりと、ほとんど立体的な戦闘ができていない。できても場当たり的なもので、戦術的とはいえない。

「シンクロナイザーのサポートが追い付いてない……。やっぱり悠生くんの攻撃を防ぎきるにはシンクロナイザーだけじゃどうにもならないか。白露ちゃんも、それはわかっているみたいだけど……」

白露も、シンクロナイザーを理解しようとする気持ちがないわけではない。しかし、レイダーという脅威がない時代で生まれた彼女は、ユナイトギアが戦いで用いられた光景をほとんど見たことがない。

12年後の悲劇である『悪夢再び』によって、蓬萊寺と元レイドリベンジャーズたちの総力戦が起きた時には、既にユナイトギアをまじまじと見られる状況ではなくなっていた、ということもある。

故に彼女は、現代のあらゆる装着者の中でも「ユナイトギアへの理解力」という部分が最低だといえるだろう。

「オレたち装着者とユナイトギアは、感情の昂ぶりが一番強い絆になる！ 心のエンジンが上がるほど、ギアのパワーも燃え上がる！ 憎しみじゃなけりやどんな感情でもいい！ オマエの心にある一番熱い感情を燃やしてみろ！」

「わたしの感情……！ わたしが一番強く感じているもの、それは……！」

白露の脳裏に浮かぶ、在りし日の悲劇。その悲劇の中、死に物狂いで抵抗し、そして散っていく人々を見た時の恐怖心。目の前で母を喪った時の絶望感。そして母を喪いこの世に見切りをつけて自分の前から姿を消した父への失望。

そんな『悲劇』へのマイナス感情が白露のハートを刺激する。だがそれは決して憎悪の感情ではない。これは、この感情は——「二度とそんな悲劇を起こしてはならない」という、使命感だ。

「わたしは、お父さまとお母さまを救うためにこの時代へ来たんです……！ 未来を全部まるごと救うために、護るために！ そのために必要だというのなら……シンクロナイザー——！」

『了解。アームズを最適化します』

今の自分の未熟さを認める強さ。今の自分に出来ることを素直に見つめる勇氣。悠

生の言葉でそれらを学んだ白露が、自らの『使命感』を爆発させた時、シンクロナイザーがようやく白露を少しだけ「認める」ことになった。

五尺をゆうに超えるほどの大太刀であった御霊鎮之紅瑠璃は、彼女の手にしつくりと納まる二尺ほどの小太刀へと姿を変えた。それはまさしく、『今の桐梨白露』に相応しい力の表れとして、白銀に輝く刃であった。

それを認識した悠生は、ようやくか、と静かに洩らすと、不敵な笑みを浮かべながらその剛腕で大地を穿ち、巨大なクレーターを生み出した。

「シンクロナイザー！」

『了解。大邪一断たいじゃいちだんを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

挟める大地を強く蹴り、街灯、電柱、ビルと足場を変えながら高く高く飛び上がると、シンクロナイザーを悠生の胴へと伸ばし、縛り付ける。

相手の回避を防ぎつつ、伸ばしたシンクロナイザーを引いて急接近することで加速を威力へと変換させることのできるその戦術に、悠生の口元がさらに歪む。

『充填完了。大邪一断、いけます』

「とやあああああああッ！」



「希繫！ 飛び退けッ！」

「え——」

総交の声に気付いた時には既に遅い。直上から迫る無数の骨が、まるで獅子を囲う檻のように希繫へと降り注いだ。

電撃体であれば抜け出すことも容易であつただろうが、電撃体を封じる手段を持つウィルフの目前で、それは自殺行為に等しい。

地を抉った衝撃で発生した砂埃が少しずつ晴れていき、その檻の中へと閉じ込められた希繫の姿が——。

「……寸でのところで邪魔が入ったか」

「間に合った……!! 間に、合った……!! 助けられた……!!」

「悪いけれど、私の家族は誰にも渡さない。まして、蓬萊寺なんかには絶対にね」
そこにあつたのは3人分の影。

息を乱しながら膝をつく希繫と、そんな彼を目を潤ませながら抱きとめる少女。そして、そんな二人を庇うように立つ幼い体躯の少女。

「優芽……ッ！ 情報部のお前が、どうしてここに……!」

「覚悟さんから、香坂先輩の様子がおかしいって聞いて、勝手ですけどお兄さんのバイク

を借りて全速力で追いかけて、合流して一緒にここへ……。そしたら……！」

「……悪かった。心配かけたな。もう大丈夫……つて言いたいところだけど、さすがにアタッカーが俺だけじゃどうにもならない」

震える身体で希繫を抱きしめる優芽を優しく抱き返すと、ようやく彼女の顔から不安と恐慌が少しだけ和らいだ。

立ち上がり、希繫はいつもの笑顔で優芽へと手を差し伸べる。

「俺を助けてくれたお前が膝をついてどうする。ヒーローらしく助けたんならヒーローらしく立って胸を張れ。そんなもって……。手を貸してくれ。俺と一緒に、あいつを倒そう」

それは、かつて優芽が憧れたヒーローに、一番言つてほしかった言葉。

ヒーローに助けられるだけの人間でいたくない。ヒーローの隣に立ちたい。ヒーローと一緒に並んでいたい。そう願っていた彼女が、一番ほしかった言葉。

その言葉を、彼女は今ようやく——自分を救つてくれた、一番聞きたかった声で、受け取った。

「……はいッ！」

希繫の手を取る優芽の瞳に、もう不安はない。

(そう……そうよ希繫。それがあなたの強さ。スピードでもなく、ギアでもなく、まして

『適応』なんかでもない。救うべき相手の最もほしい言葉や行動を、なんの疑いも迷いもなく、当然のようにやってのける優しき。それがあなたの強さ)

昂揚剤を飲みこみ、イーリスを起動してデアドロップを構える優芽。

靴のズレを直すようにエクレールの爪先を地面に軽く打ち付けながらウィルフを睨む希繫。

両手のガントレットに弾帯を仕込み直しながら軽く背伸びをして身構える総交。

三人の『仲間』が、逢依の前へと歩み出る。

(そして、そうやって救ってきた人が、あなたのことを放つてはおけなくなる。どんなに弱くても人を惹きつけてやまないカリスマ性……。それがある限り、希繫の『敵』はただひとつ)

もはや疑う必要などない。かつての、自分と希繫だけのコンビであればどうにもならなかったかもしれないウィルフとの対峙。

しかし今は二人だけではない。

「敵は一人。四対一の今でも厳しい相手には違いないけれど……でも、やれるわよね？」

三人の返事はもはや聞くまでもない。

三人の信頼が逢依を支え、逢依の信頼が三人を導く。

「蓬莱寺を前にして……生きる……ことから目を背けられるかッ！」

槍と鎧—パニッシュメント—

殺人集団『蓬萊寺家』^{ほうらいじ}との戦闘で、最も危険視しなければならぬのが、彼らに対する恐怖・不安・憎悪などによるエモーショナルエナジーの反転化現象^{マインナス}である。

そもそもユナイトギアはレイダーに対する感情武装であり、人間との戦闘を考慮されていない。そのため、レイダー以上に恐怖や不安や憎悪を煽るような人類との戦闘では、敵対した際にメンタルの起伏が想定範囲を超えることが少なくない。

ましてや、かつて世界人口を大幅に減少させた『人類のトラウマ』ともいうべき蓬萊寺との戦闘では、感情の振れ幅が大きくなりがちなりミットブレイクは、エモーショナルエナジーの反転化現象^{マインナス}を引き起こしやすく、禁じ手とさえ言われている。

しかし、もしも反転化現象^{マインナス}を引き起こすほどの負の感情を抑え込めるほどの、強烈な正の感情を維持し続けられるとすれば、それは蓬萊寺の最大の優位性……リミットブレイクの確実な失敗を引き起こす恐慌化^{プレッシャー}を無視できるということになる。

そして——今まさにその恐慌化^{プレッシャー}を乗り越え、『絆』^{エクレール}と『憧れ』^{イリス}を携えて限界を越えようとする者たちがいた。

「もっと早く、もっと速く！ 駆けるぞ、エクレール！」

「もつと高く、もつと遠く！ 飛びますよ、イーリス！」

『了解。第四号ユナイトギア・エクレール、リミットブレイクします』

『了解。第七号ユナイトギア・イーリス、リミットブレイクします』

隣に立つ仲間との絆が、隣に立つ恩人への憧れが、もはや不安などではどうにもならないほどに熱く滾る。

希繫の中にあつた蓬萊寺への憎悪も、優芽の中にあつた蓬萊寺への恐怖も、雷のように鋭く水のように澄んだ感情が灼き尽くし洗い流してくれる。

今ここにあるものは共に戦う仲間への信頼と、後ろで震える市民を安心させるための自信。もう、負の感情など欠片もない。

『——リミットブレイク。ノーブル・エクレールの展開を完了しました』

『——リミットブレイク。イーリス・プテリユクスの展開を完了しました』

エクシードチャージ
過剰摘出されたエモーショナルエナジーが、両者の脚と翼から大量の火花と水滴となつて溢れ出す。

いくらウィルフが『逆流』を引き起こすほどリミットブレイクを繰り返していたとしても、感情の爆発がトリガーとなるそれを戦闘中に、ましてこの土壇場で行えるのは、感情の扱いに長けるレイドリベンジャーズでこそ。

戦うことがそのまま殺すことへと繋がる蓬萊寺では、戦いが激しくなるほどに感情が

クールダウンしていく。それがわかっているからこそウィルフは前もって『逆流』を引き起こして自己強化を図ったのだろう。

逆流するほどリミットブレイクを繰り返したウィルフが、なぜ今に至るまでそれをしないのか、戦うだけで手いっぱいだった希繫と総交にはわからなかったが、逢依がそれを教えてくれた。

ウィルフはリミットブレイクを敢えてしていいのではなく、戦いが激化するほどにリミットブレイクできなくなっているのだ、と。

「それが君たちの限界突破か……！」

今までの余裕に満ちた態度から一転、忌々しげに二人を睨むウィルフだが、焦りや動揺は見られない。しかし、希繫が電撃を飛ばすと、先程までかわせていたそれが彼の頬を掠めた。

リミットブレイクによる強化だけが原因ではない。自分が追い込まれるほどに冷血で冷酷なほどに冷徹で冷静になっていく殺人鬼としての本能が、感情の昂ぶりを原動力とするユナイトギアへの適性を著しく低下させているのだ。

出力の落ちたユナイトギアはもはや兵器ではなく、ただの足枷でしかない。そう判断したのか、ウィルフはギアを解除し、懐から一振りのナイフを取り出し、それを構える。「ありがとう、優芽。お前が来てくれたおかげで、俺はようやく気付けた。今の俺はレイ

ドリベンジャーズ……俺の使命は蓬萊寺を憎むことじゃない！ 市民を不安や恐怖から守り抜くことだ！」

「……はいっ！ あ、でも最近やたらあたしを避けてたことは後で問い詰めますからね。まあ、理由ははつきりしてますから……まずはそちを片付けちゃいませうか」

真つ赤な閃光と共に、希繋の最大速度がウィルフを襲う。リミットブレイクによつて生体パルスの伝達速度が光速化している今、彼の全力は先ほどまでの速さとは次元が異なる。

しかし、それでもウィルフもまた人類のトラウマ『蓬萊寺』の一人。そんな希繋のスピードに、やや反応が遅れつつも確実に防御し、カウンターの一撃を与えんと手にした刃を突き出す。

無論、希繋がこれをおぼすことも予測の範囲内だったのだろう。しかし、そんな彼の予想とは裏腹に、それを防いだのは水の鞭——『D Dーフレキシブルライン』ディアドロップだった。

唐突に腕を捕えられたウィルフは咄嗟にナイフを左手に持ち替え、フレキシブルラインごと優芽を引き寄せるが、彼女もまたそれを読んでいた。

「お兄さんッ！」

「おう！ エクレールッ！」

『エレクトロシヨック』

雷速の蹴りから叩き込まれた膨大な電流が、ウィルフの全身を駆け巡る。

今の希繫にできる全力の電撃だが、これも一時凌ぎにしかならないことは誰よりも希繫が一番よくわかっている。

故に、電撃によって動作が自由でない今を逢依は逃さなかった。

「クリュスタルスッ！ この一瞬を！」

『了解。運動を固定します』

クリュスタルスのギア特性『瞬間凍結』により、ウィルフの周囲の分子運動量をゼロで固定し、彼の肉体を冷凍させる。が、彼はこれすらも凍った衣服を即座に脱ぎ捨てることで窮地を脱する。

とはいえ、電撃も冷凍もまともに受けたことに違いはない。臓器のいくつかは急激な温度低下で機能不全に陥る寸前であることは明白であり、電撃によって全身が焼かれるような感覚は今も残っている。

だからこそ、希繫と逢依はここまで来てまだ気を抜けなかった。むしろ、ここでミスをおせばこれまでの連携が全て無駄になる。

故に、優芽と総交は同時に動いた。

「イーリスッ！ 一斉に行きますす！」

『セブン・フォー・ワン』

「時限式とはいえ、あたし七人分の全力……ッ！ これでえええええええッ！！」
『セブンス・レインボーストリーム』

優芽と6つの分身から放たれる、七色の全身全霊。七方向から撃ち込まれたそれを、ウィルフは無抵抗のままに受け止める。

だが、これはあくまで物理的にウィルフを一点に留めるための手段でしかない。まだ、最後の一撃が残っている。

「ディープブルー、決めるぞ」

『了解。アズールスマッシュを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

「エクレール、最後の大仕事だ。行くぞ」

『お任せ下さい』

両腕に装着されたガントレットの遊底スライドを引き、全身の力を抜きながらウィルフを睨みつける。

そしてそんな総交の隣で、希繫も同じように駆け出す準備をしながら総交へと笑みを向ける。これが最後の一撃になると信じて。

『充填完了しました。……いけます』

軽く助走をつけながら、一気に8メートル近くまで跳躍した総交が、空中で回転しながら左足を突き出す。

それと同時に、希繫の全身が電気へと変換され、夥しい量の電気が彼の全身から漏れ出す。

『アズールスマッシュ』

『クリムゾンインパクト』

降下しながら叩き込まれた群青の鎚と、大地を駆ける紅蓮の槍が、同時に殺人鬼の体を貫く。

同調—シンクロー—

希繫きづなと総交そうまが放った必殺の一撃。逢依あひと優芽ゆめとの連携があつてようやく打ち込んだそれは、強敵・蓬萊寺ほうらいじウィルフを確実に捉えた。

両者の攻撃はウィルフだけでなく地面そのものを大きく抉り、周囲の建物を巻き込みながらウィルフを地中へと葬ることに成功する。

いかに蓬萊寺といえど、全レイドリベンジャーズの中でも指折りの感情エネルギーを持つ装着者2名が同時に放ったスキルを受けてまともに立てるとは思えない。だがそれでも、四人は警戒を緩めなかった。

仕留めた時ではなく、仕留めた「と思った」時が最も危険なのだということは、レイドリベンジャーズとしての経験から痛感している。まして相手は蓬萊寺。どこまで人間をやめていてもおかしくはない。

「エクレール。いざって時に対処できるようにしとけ」

『スパークステインガー』

「それと、念のために避ける準備もだ」

『アクセルアクション』

希繫の周囲を囲うように現れる12の赤い球体。威力はないが、速度は希繫の使用するスキルの中でも飛びぬけているこれであれば、咄嗟の迎撃も可能だ。

アクセルアクションは、希繫にとつても負担の大きい選択だった。ただでさえ消耗の激しいリミットブレイクによって感情こころも体力も疲弊している今、過剰速度による身体的バツクファイアの大きいアクセルアクションは危険だろう。

しかし、この四人の中で最も蓬萊寺を恐れ、最も蓬萊寺を警戒し、それだけに最も蓬萊寺を評価しているのも希繫であった。だからこそ、仲間のためにもその警戒を解くわけにはいかなかった。

そして、その警戒心は見事に的中する。

「ツッ… みんな避けろツッ！」

無数の瓦礫が積み上げられた山の隙間から、鋭く僅かに光る何かを見た希繫は、即座にその一点へスパークステインガーを撃ち込みながら、その光の射線を回避した。

同じく逢依もギア特性によって時間を凍結しつつ回避に成功するものの、優芽と総交は回避が間に合わず、その僅かな光に捕えられてしまった。

「鋼糸……ツッ！」

「げほっ！ かふっ……！ ああ……本当に最低だ。僕としたことが、リミットブレイクを許すばかりかこれほどまでに好き放題されるなんて……。これじゃあ当主様から

お叱りを頂かないわけにはいかなくなってしまった……!」

瓦礫の中から現れたウィルフの姿は、見改めるまでもなく満身創痕。それでも五体満足でいられるのは、ギアを解除した今でも形状を保ち続けるその巨大な骨の左腕が、彼を瓦礫から防いだからだろう。

蓬萊寺は総じて「殺意」や「殺気」に敏感だ。特にそれが悪意や憎悪によるものであれば、彼らはそれを即座に嗅ぎ取り対処するだろう。しかし、ただ重力に従って落下する瓦礫にそれらは無い。

故に、彼も視界に入ってから咄嗟に反応せざるを得なかった。まして、その状態で撃ち込まれたスパークステインガーについても同じだ。赤い電光を放つ槍が、彼の右肩を捉えている。

しかし満身創痕なのはウィルフだけではない。希繫と優芽にもリミットブレイクの制限時間が既に1分を切っている。

「逢依! 優芽と総交を頼む!」

「ダメよ希繫! あなた一人ではッ!」

「今この状況を鑑みろッ! 俺しかないッ! 俺しか戦えないならやるしかないッ!」

ウィルフに先手を打たせるわけにはいかない、と希繫はすぐさま先制のスパークス

ティンガーを放ち、それを追うように距離を詰めた。

鋼系によって縛られているのは優芽と総交だけではない。それを右手のグローブから伸ばすウィルフ自身も、行動範囲が著しく狭められている。

左腕に防御されたとしても、既にギアは解除済み。ギア特性によって巨大化している左腕は、あくまで元々の骨を強化したがためのものであって、ギアの影響が今も続いているわけではない。

だとすれば、その左腕はただの骨。希繫の蹴りならば十分に穿ち貫くことのできる硬度だ。

「ぜあッー！」

「この程度の蹴りなど……ッー！」

「そうだ、左腕を犠牲にかわすしかないだろッー！」

5発のスパークステインガーごと希繫の跳び回し蹴りを受け止めたウィルフの左腕は容易に折られるが、直撃はかわされた。

さらに同じタイミングでリミットブレイクが解除され、エモーショナルエナジーの消耗からエクレールまでもが待機状態へと戻ってしまう。

「しまった、強制解除が……ッー！」

「ギアのない君など、もはや脅威ではない……！」

そうは言うものの、彼の右腕は優芽と総交を縛ることで縛られ、攻防に用いる左腕は砕いた。まして疲労とダメージは確実に蓄積されている。

事実、希繫のフェイント交じりの蹴りをすべて避けてはいるものの、反撃に出る余裕が見られない。

「チツ、フェイントにも目視の後から余裕で対応してくる……！　どんな反射神経してんだッ！」

「君こそ、僕が予測ではなく目視の後で対応していることによく気付いたね。それも、蓬萊寺に怯えているからこそその観察力と洞察力ということかな？」

ギアを解除したとはいえ、希繫の攻撃スピードは未だ凄まじい速度を保っている。

だからこそ、ウィルフも防御で手いっぱいとなっているわけだが、行動に余裕がなくとも態度に余裕があるのはさすがと言うしかない。無論、その余裕がウィルフのギアを解除に至らしめたのは皮肉と言うしかないが。

「逢依ッ！　早く二人の拘束をどうにかしろッ！」

「そうは言うけれど、これ蓬萊寺御謹製の鋼糸よ？　並の高熱じゃ溶けないし、切断なんでもっと無理よ。無理に引き千切ろうとすれば二人が……」

「あたしは一応、アクアコートで身を守っているのである程度は防いでいますよ？」

「俺も咄嗟にプロテクトヴェールで覆ったからな、鋼糸程度で死ぬことはないが、身動き

がとれない」

一万トンの鋼の塊を一瞬で溶かし尽くすだけの熱量がなければ、この鋼糸はどうすることもできない。

だが、そんなことが出来る者などそう多くはない。まして、蓬萊寺とまともに対峙できる戦力で、それほど的高温を放てる人間など——。

「……あつ。希繫！ 今すぐ退いて！」

「はあ!? ……えつ。げッ!?!」

突然に声を張り上げる逢依に、希繫はすぐさま彼女の視線を追った。

そしてその先を見た瞬間、彼はすぐさま彼女の言葉に従うが、その行動に戸惑ったのは他の誰でもないウイルフであった。

一気に攻勢へと転じられていた現状で、なぜわざわざ自ら機を逃すように引き下がったのか。しかし、直後その理由を理解した。

「劫火——!」

どこからか聞こえる低い獣のような声。

それがどこから聞こえるものか、誰から聞こえるものかは関係なかった。

聞こえる「言葉」が、どういう意味を持つのか。それを理解した時には、もう遅かったのだ。

「——拳乱ッ!!」
ケンラン

迫るは大地を焦土と変える灼熱の劫火。

鋼の塊どころか、この星そのものを炎の星へと変えることも容易な極獄の火。

「あつつ!? 熱……熱いッ! 熱いです大郷先輩!おおさと あたし死んじやいます! アクア
コート蒸発しかけてますから! 大郷先輩ってばッ!」

「おいやめっ……あつつ!? やめろバカ兄貴! 優芽が死ぬわ! バ火力もたいがいにしろ!」

炎に巻き込まれて焼かれそうになっている優芽と、それに気付いた希繫の焦りに満ちた怒声さげびを聞いて、ようやく悠生ゆうきはその炎を収めた。

当然、この炎に耐えられる金属などあるわけもなく、鋼糸は溶け落ち、優芽と総交の拘束も解けたが、二人は気付いていた。これが解ける直前、それまでピンと張りつめていた鋼糸が急に重力に従って弛んでいたことに。

「チッ、かわされたか……」

「かわされたか、じゃねえよ! まず先に優芽に謝……つてお前なんで白露しろろ連れてきてんだ!」

「きゆう……」

未だメラメラと燃え盛る右腕を軽く振って消火する悠生の足元で目を回す白露を見て、希繫の混乱と困惑が最高潮へと達する。

が、悠生はまるでなんでもないかのようにウィルフを見つめたまま、白露を脇に抱いて希繫へと投げつける。

「ひとまずテストはギリギリ及第点だ。役に立つかどうかは知らねーが、ひとまず邪魔にならない程度に「仕上げて」おいた。あとはお前がそいつを引っ張ってやれ」

「及第点……って、じゃあまさかッ！」

「おう。苦労したぜ、ガキを殺さないように加減しながら叩きのめすのは」

邪悪極まりない笑みを浮かべて立つ悠生に守られながら、ようやく白露が目を見ま
す。

「うう……あう……？ お、お父さま……？ それに、ここは……」

「目が覚めたか、白露。悪いが戦場の真っ只中でな、猫の手も娘の手も借りたくて仕方ない状況なんだ。悪いけど……俺たちを『助けて』くれないか？」

いつものように笑顔で。だけど白露が今まで見てきたどんな表情よりも真剣な瞳で、初めて求められた「助け」を求める言葉。

あの日あの時、母を助けられず父を失った白露が、何よりも欲しかった言葉。

そんな言葉を聞いて、白露が選ぶことのできる返事など決まっていた。

「——もちろんです。悠生さまが……シンクロナイザーが気付かせてくれたこの力！お父さまの力になるのなら喜んで！」

『ユナイトギア第四六六号・シンクロナイザー、桐梨白露に同調接続します』

「ありがとう、白露。……エクレール！もうひと踏ん張り、付き合えよ！」

『もちろんです。ユナイトギア第四号・エクレール、桐梨希繫に同調接続します』

希繫の最も大きな感情エモーションナルエナジーの力の根源は絆。周囲に居る誰かが希繫に与える影響が、そのまま希繫の感情となり力となる。

今ここにあるのは逢依の『愛情』、悠生の『勇気』、優芽の『憧れ』、総交の『信頼』、そして白露の『使命感』！

それら全ての感情が絆によって束ねられ、希繫の背を押し強く支えてくれる。だからこそ——そんな絆を束ねるエクレールに、シンクロナイザーが『同調』する。

「桐梨白露とシンクロナイザー！ いきますッ！」

「ああ……いつでも来い、受け止めてやるッ！」

親子の意志がひとつになったことで、シンクロナイザーが白銀の輝きを放つ。

白露にとっては初めてだが、希繫にとっては久方ぶりの光景だ。だからこそ——心強い。

『了解。桐梨白露およびシンクロロナイザー、桐梨希繫に装身そうしんします』
 『シンクロロナイザーからの同調アクセス接続を確認。授身じゅしんします』

白露の肉体が白銀に輝く光の粒子となつてシンクロロナイザーへと吸収されると、それはまるで導かれるように希繫の首へと巻かれ、彼のエモーショナルエナジーを劇的に回復させた。

「……合体、だど？」

「どつちかつつと、憑依だがな。白露の意識と肉体を感情エネルギーに変換して、俺に融合させた。云わば二人で一人の装着者だ」

悠生の隣に並び立ち、そんな希繫の横に逢依が並ぶ。

今まで何度も共に戦ってきた仲間として、今までずっと苦楽を共にしてきた家族として。

真相—コーズ—

「二人で一人の装着者、か……。なるほど、これが君の切り札というわけだね」

「さっきの一撃をかわしても、お前の体は既に満身創痍。抵抗するなら悠生がお前を押しさえるし、逃げようとすれば俺と逢逢がお前を逃がさない。おとなしく降伏しろ」

「降伏とはまた……。蓬萊寺ほうらいじに対して随分と強気だね。僕たち蓬萊寺家は誇り高き殺人集団……。仕留めるべき対象を前にして降伏あきらめるなど、絶対にありえない」

この逆境で呟いたウィルフの言葉は、希繫きづなだけでなく絆フアミリイの家族である三人の表情を露骨に歪ませた。

彼の言う、絶体絶命の状況でこそ決して諦めることのない精神は、善悪の方向性こそ真逆であるものの、絆フアミリイの家族のそれとまったく同じものであった。

誰かに「手を差し伸べる」ための家族と、誰かを「傷つける」ための集団。決してわかりえない二つの徒党だが、その両者が掲げる信念には通じるところがまったくないわけではなかった。

むしろ、理解できるからこそ……通じ合う部分があるからこそ、希繫たちはよりいっそう蓬萊寺を嫌悪していく。

「……けれど、さすがに僕も限界でね。悪いけれど今回はここでお暇させてもらうよ」
 「逃がすと思うか?」

「ふふ、増援に次ぐ増援……それは果たして君たちだけかな?」

「何——ツ!?!」

ウィルフの言葉の意味を理解するよりも早く、白露しろろと同調したことで得た彼女の鋭い聴覚が、迫りくる「何か」の存在を捉えた。

ひとつふたつどころではない……明らかに20以上は存在するその勢力は、彼のレイドリベンジャーズとしての本能に警鐘を鳴らした。

「まさかレイダー!?! このタイミングで、どうしてツ!?!」

「今回ばかりは君たちの勝ちだし、ご褒美にその質問くらい答えてあげようか。とはいえ、そう難しいことじゃないよ。感情の昂ぶりを求めているのはユニトギアだけじゃない。恐怖・不安……そして『憎悪』や『嫌悪』も感情のひとつさ」

背後から迫るレイダーの触手が希繫に伸びるが、優芽ゆめのデアドロップと総交そうまのプロテクトヴェールがそれを阻む。しかし、視線をそちらに外した一瞬の間に、ウィルフはナイフを振るう剣圧で瓦礫をばら撒き、その姿を消していた。

だが、おそらくウィルフはもう今回の件から手を引くだろう。すぐに状態を立て直すには痛手を負い過ぎていることは明白であるし、何よりシンクロナイザーのギア特性を

得たことで、希繫が全盛期の力を取り戻したことは彼も痛感したはずだ。

そうなる、ウィルフだけでは対応しきれない事態だということを、彼だけでなく蓬萊寺家そのものが理解したはず。彼らの現時点での目的が「桐梨希繫の確保・拉致」だとバレている以上、こちらの警戒を上回る準備が必要になることも要因のひとつだ。

「逃がしたか……ッ！」

「追つても仕方ねーよ。まずはレイダーを食い止めるぞー！」

「ああ。逢依、指揮を任せる！ 優芽、俺と一緒に悠生と総交の援護をしつつ前線の優勢を保てー！」

失踪したウィルフを追おうにも、どこに向かったかもわからなければどんな俊足も意味をなさない。

早々に切り替えて、目の前に押し寄せようとしているレイダーたちに視線を向けると、このメンバーの中で唯一、レイドリベンジャーズとして前線での作戦にほとんど参加したことの無い優芽に指示を出した。

悠生と総交については既に臨戦態勢。逢依は大局的な戦略的指揮に優れている分、前線での臨機応変な戦闘指揮は、普段からそれをこなしている希繫の役目だ。

「……こりゃあとで家族会議だな」

「会議後のご機嫌取りが大変ね」

「先ほどウィルフが去り際に言い放った言葉の意味を、既に希繫と逢依は理解していた。」

「しかし——否。だからこそ、その意味を「本人」に話すこと、そしてそれをレイドリベンジャーズへ通達することには頭を痛めた。」

「まあ、娘のためさ」

「そうね、娘のためなものね」



「さて、じゃあ改めて今回の『レイダー連続襲撃事件』について話し合いまししょうか」

自宅に帰ると、少し早めの食事を終えて早々に家族会議が行われた。テーブルには希繫と逢依が向かい合って座り、逢依の横に白露が座っている。

優芽と小軼こしよはそんな三人から少し離れたソファアに腰を据えながら様子を見ているようで、並びながら手に雑誌を持っている割にページはまったく進んでいない。

「そもそもこの始まりは白露ちゃんが12年後の未来から来たことに起因するわ」

現代における18日前。白露が12年後の未来から現代へ訪れたその日、既にレイダー連続襲撃事件の引き金は引かれていた。

両親を救わなければ、という使命感によって過去へと遡った白露だったが、蓬萊寺によつて父を失い母を喪つたばかりの彼女のメンタルは決して良いものではなかった。

両親のことを想う度に、彼女の脳裏には「蓬萊寺さえいなければ」という不安と恐怖、そしてそれを上回るほどの嫌悪と憎悪が渦巻いていたのだろう。

一人の生み出す感情エネルギーは決して侮れるものではない。感情生命体とも呼ばれるレイダーを撃退するのが感情武装であるユナイトギアであるように、人の感情には無尽蔵の力が秘められていることは事実だ。

しかし、ギアを運用せずその感情をエネルギー化することは難しい。できたとしても、それは決して大きな力にはなりえない。だからこそ、かつて白露がレイダー連続襲撃事件の原因ではないかという意見が出た際にも、逢依はそれを否定できた。

だが、それは当時の白露がまだ「不完全」だったからだ。どんなに感情を爆発させても、それを力に換えてくれる存在が、当時の彼女には力を貸さなかつただろうと思つていたからだ。

「おそらく、白露ちゃんはこの時代に来てから私たちに保護されるまでの間に、一度だけシンクロナイザーを起動した。それは必死の想いによるものだったかもしれないし、あるいは無意識によるものだったのかもしれない。だけど間違いなく、本人の記憶の外でシンクロナイザーは起動した」

「わたしが、シンクロナイザーを……?」

「そう。身に覚えはない? 起動した記憶はなくとも、起動に至るほどの強い想い……きっかけが何かあったはずよ」

逢依の問いかけに、白露はふとあることに気付いた。

「そういえば……この時代に来て数日経った頃、シンクロナイザーの入ったお守りに何かを願ったような……」

『そうだ、生きることから目を背けるなッ!』

「——っ! そうです! 朦朧とする意識の中で、お父さまの声を聞いた気がしました!」

「やはり、そうなのね。だとすれば、シンクロナイザーは間違いなくその瞬間、あなたの感情を知ったはずだわ。私たちを助けようという使命感、まだ助けられるかもしれないという希望。助けるために必要な力を欲する切望。そして——」

両親を喪失した悲しみ。愛してくれる人がいない世界への絶望。悲劇を止められない世界への失望。

母親を殺した蓬萊寺への憎しみ。母を喪った父親を支えてくれなかった人々への嫌

悪。そしてそんな感情が全て交じり混ざったことで生まれた明確な殺意。

それらが全てシンクロナイザーへと注がれた。だがシンクロナイザーは感情の反転マイナス化現象を避けるため、自己判断によるギア特性の行使を行った。

自らに注がれた負の感情を全て、周囲の生物へと伝播させ、白露をレイダーギア化させないことに尽力した。

「蓬莱寺によって煽られた感情をユナイトギアが増幅し、それをギア自身の自己判断によつて拡散してしまった。だけれどそれは同時に白露ちゃん自身が抱えていた無意識のネガティブな感情を発散することにもなった」

「さっきの戦いでウィルフを前にしても白露の感情が反転化マイナスしなかったのはそのおかげか」

拡散された感情は周囲の生物……動物や昆虫、あるいは植物や菌類にも影響を及ぼしたかもしれない。

とにかくそうして環境への影響が出たことでO R Bに発見され、そのまま希繫たちと出逢った。

国際環境修復支援団体

だが発見直後の彼女は数日もの間、飲まず食わずで動き続けていたことで衰弱しており、意識も朦朧としていた。そのため自分がギアを起動させたことを覚えていなかった。

あらゆる負の感情を放出した彼女の胸に最後に残っていたものは、何がなんでも両親を守らなければ、という「使命感」だけだった。

「白露ちゃんが解き放った負の感情によつて、レイダーは突如としてその勢力を増したわ。けれど膨大だった供給はその一度きり。だから最近になってその勢力が衰えを見せ始めた」

「もちろん、拡散後も負の感情による影響は続いただろう。動物や昆虫は群れの中で無益な闘争を始め、植物はストレスから成長が遅れただろう。だが、それは最初の供給とは比較にならないほど微小なものだったに違いない」

「ようは、先輩方がもうしばらくこのままのペースで対処し続ければ、レイダーの出現頻度は本来のものに戻るかも、つてことですよね」

優芽の言う通り、対処が後手に回っていることは隠しようのない事実であるが、しかし対処しきれぬ範囲に収まりつつあることもまた事実なのだ。

レイダー連続襲撃事件初日から現在まで既に12日が経過しているが、この12日の間にレイダー側の勢力は2割近く削られている。数か月もすれば、その勢力は十分に殲滅可能な範囲になるだろうと逢依は判断していた。

無論、レイダーの出現自体がなくなるわけではない。以前までと同じく、愛知県永岑市は世界有数のレイダー頻出地域である。それでも、ここ数日のような高頻度でなくな

るだけでも、市民の精神的負担は減るだろう。

「……ですが、だとすればそもそもわたしが現代に来たことが、現代に生きる永岑の人々を不安に陥れたことに……！ そればかりではありません！ 実際にレイダーの被害を受けた方も……っ！」

確かに、今回の事件の顛末には、根本的な部分でどうしても白露の「負の感情」という要素が大きく影響している。それは言い換えるなら、そもそも彼女がこの時代に居なければ起こらなかった事件だということにもなる。

だが、希繫と逢依は——いや、ここにいる誰もが、白露を責める気など毛頭なかった。「白露が悪いわけじゃないさ」

「ですが……ッ!!」

「そりゃ、原因が白露にまつたくないなんて言えない。白露の感情が今回の事件を引き起こしたという事実は曲げようもない」

「だけど、と希繫は言う。」

「もしも白露が現代に来てくれなければ、救われないはずの命がいくつもあつた。それは俺と逢依だけじゃない。蓬萊寺と実際に対峙してわかつただろ、あいつは俺と逢依と優芽と総交の4人がかりでも抑え込めないほどの相手だつた」

「……蓬萊寺……」

「あの時、悠生が白露を連れてきてくれなければ……白露が『同調』できなければ、正直言って相討ちがいいところだった。悠生だって、最強だけど無敵じゃない。あの時、満身創痍だったのは相手だけじゃなかったからな」

事実、あの時の希繫はシンクロナイザーによってエモーショナルエネルギーの供給を受けていたとはいえ、既に蓄積された疲労とダメージによって立っていることさえやつとの状態だった。

ここ数日続いていたレイダーとの連戦。誠実・敬意と共闘しながらウィルフと対峙し、たった四日しか開けず再びウィルフと戦闘。しかも最後に至ってはレイダーの殲滅、ウィルフ撃退、レイダー殲滅の三連戦だ。

最終的にレイダーとの戦闘後、その場で倒れて悠生に担がれながらレイドリベンジャーズの医務室に直行したのも、大部分は疲労によるものが原因だったという。

「過去はどうやったって取り戻せない。白露がどんなに悔やんでも、もうどうしようもないんだ。だけど未来だったら変えられる。白露がここで俯いていたら、変わる未来だって変わらない。……そうだろ？」

ちらり、と視線をソファーへと向けた。

するとその視線に気付いた彼女は、何も言わず微笑みながら頷く。

「白露ちゃんはお父さんとお母さんを助けたいんですね？ だったら俯いてる暇なん

てありませんよ。それとも……あたし一人に全部任せてくれるんですか？」

「それは……っ！ それは、できません……！ 優芽さまだけには……いえ、決して優芽さまを信頼しないわけではありませんが、それでも……わたしがやるべき……やりたいことなんです！ 優芽さまだけにお任せすることはできません！」

それは、白露が希繫たちの前で初めて見せた感情。

怒りではなく、しかし焦燥と独占欲の入り混じった……そう、まるで『嫉妬』のような感情。

「……えっと、あたし白露ちゃんに何かしましたっけ」

「あ……いえ、その……」

咄嗟のことに困惑したのは優芽だけではなかったのか、取り繕うこともできず継るよに希繫へ視線を向ける白露だが、さすがに白露がそういう感情を向ける理由がわからないのは白露以外の全員が同じだった。

ひとまず安心させようと、いつものように微笑みながら「平気だから、言ってみな」と宥めると、彼女は少しずつ口を開いた。

「その……お母さまを喪つて世界に失望したお父さまがわたしの前から去る寸前、わたしは優芽さまの元に預けられたのですが……」

それはおそらく、絆の家族の元に居ると蓬萊寺家に襲われるかもしれないという、彼

女の前から去った希繫にとって、父親としての最後の優しさだったのかもしれない。

しかし、父と母が心から愛し合っていたことを誇りに思っていた白露にとって、それは自分という「逢依の置き土産」を絆フアミライの家族という繋がりすらない女性に手渡すという行為であった。

もつと大胆に言えば、白露の視点からすると、希繫が逢依の次に信頼していたのが優芽だったのだ。故に、白露は優芽に対して感謝だけでなく嫉妬も抱いていたのだ。

「……これは希繫が悪いわね。後でじっくり話し合いましょう」

「あたしが言えたことじゃないですけど、さすがにこれはちよつと……」

「さつきまで普通に良い感じの流れだったのに、唐突に矛先がこつち向いてきたな」

その後、家族会議は第二ラウンドへと突入した。

宣誓——ラヴ——

思い返せば怒涛の二週間であつた。

未来から希望を繋ぐために訪れた愛娘と出逢い、レイダー連続襲撃事件の勃発、蓬萊寺ほうらいじとの対峙、そして一連の顛末が全て自分の娘に起因すると理解した時には、さすがの逢依あひも背筋を凍らせた。

だが、それでも——いや、だからこそ逢依は確信を持つて言えることがあつた。それは、白露しろろの言う「悪夢再び」が、おそらく今回の件では回避できていないという予知のような予想。

むしろ、今回の事件こそが「悪夢再び」の根幹的原因に関連するものなのではないか、という危機感には、きっと彼女の思い過ごしではあるまい。

未来で体験した蓬萊寺由来の恐怖心が現代で引き金を引き、そして今回の件で希繫きづなたちはウィルフを完全に仕留めることができなかつた。

おそらく、ウィルフは未だかつてない屈辱を味わつたことだろう。国際的犯罪者集団・国際脅威度第一位『蓬萊寺家』の幹部である彼が、レイドリベンジャーズ相手とはいえ一人を誘拐するだけの任務で手傷を負い、任務に失敗したのだから。

その屈辱は平静を装った仮面の裏で確かな怒りとなり、殺意の牙を研ぎ澄ましているに違いない。そして、その牙が12年後ついに希繫へ、ファミリーの家族とレイドリベンジャーズへ、そして世界へと向けられるのだ。

「……問題は山積み、ね。今回の事件はあくまで引き金に過ぎない。過去に行われた蓬莱寺との抗争や、それに伴う両者への敵意が積もり積もった結果とも言えるし。けれど、それらを起爆させた私たちもお咎めなしとはいかないわ」

「しばらくは謹慎もやむなしだろうな。まあ、本来なら国際的犯罪者集団との抗争を引き起こした時点で除名まったなしなんだが……。今度、霧島支那さんにちゃんとお礼を言に行かないとな」

「それならさつきあなたが医務室で寝てる間に行ってきたわ。いつも通りにこやかに流されたけれどね」

そう、本来なら国際的犯罪者集団……それも国際脅威度第一位の蓬莱寺家と対峙し、後に引き起こされるであろう抗争の原因となった希繫たちは、然るべき厳罰が待っている。

しかし今回の一件で明らかになった「蓬莱寺家に対する桐梨希繫と桐梨小転の重要性」は、レイドリベンジャーズにとって極めて大きな意味を持っていた。

つまるところ、蓬莱寺が今後起こすアクションに対し、希繫か小転を占有している状

況であれば、事前にある程度の対策がとれるという、言ってしまったえば「人質として所有する」という手段である。

となると、希繫を除名することはレイドリベンジャーズにとつても得策ではない。さらに言えば、彼が個人的に入れ込んでいる数名の団員に対しても、希繫が辞職する要因になるとすれば、それも望ましくはない。

そうした蓬萊寺への優位性という理由を上層部に示し、希繫たちを除名の危機から救ったのが、レイドリベンジャーズ永岑支部の支部長、霧島きりしま女史である。

永岑支部において逢依と並ぶ切れ者として知られており、特に大局的な先見の明と、適材適所を見抜く人事能力についてはレイドリベンジャーズ全体でも随一とされている。

もつとも、彼女が永岑支部で多くの部下から慕われる理由はそこに起因するものだけではない。

今回のことと言えば、彼女が上記の理由から希繫たちをレイドリベンジャーズに留めたのは、彼女がレイドリベンジャーズの利益だけを目的としているわけではないことを、永岑支部の誰もが知っているからだ。

「霧島さん、基本的に仏頂面だけれど割とハートは熱い人だものね」

「逢依に似てるよな。まあお前は霧島さん以上にクールだけど」

「あら？ 私の熱い愛を誰よりも受け取っているはずの人からそんな言葉が出るだなんて悲しいわ」

「いや、霧島さんに比べると熱い部分があんまり表面化しないよな、ってだけだから。白々しい演技するフリしてちよつと本気で拗ねるのやめろ」

逢依の少し捻くれた拗ね方を軽くあしらいながら席を立ち、いつもの柔らかい微笑みと共に逢依の頬へとキスを落とす。

彼女のクールな態度は今に始まったことではない。感情が表情に表れにくいことなど誰よりもよくわかっている。そして、彼女自身がそれを自覚しながらも気にしないよう努めていることも。

だから変に気を遣うよりも、軽くからかってしまった方が、彼女のそんなところも含めて愛していることをわかってもらえらるだろうと、希繫は微笑むのだ。

「……あなた、時々ちよつとだけ意地悪よね」

「二人つきりの時くらい、気張らないでいたいからな」

「そんな意地悪も嫌な気分じゃないのは、やっぱり惚れた弱みよね……」

「惚れた弱みなら俺の方がひどいぞ。おかげさまで周りからはほとんどロリコン扱いだからな」

理由は改めて言う必要もあるまい。実年齢こそ同じだが、容姿年齢が違い過ぎること

など誰に指摘されるまでもない。

それでも胸を張って彼女のことを「愛している」と言い切れるのは、希繫の言う通り「惚れた弱み」に他ならないのだから。

「……私がおもしろい幼い身体でなければ、あなたは私のことを今よりずっと好きでいてくれたのかしら」

「どうかな。きつと変わらないと思うぞ。お前がどんな姿であろうと、今と同じように出来る限りの愛を全てお前に注いでいたはずさ」

「でも、あなた基本的に胸の大きい女性が好きじゃない」

「それは……まあ、俺の好みってたいがい姉さんが基準だし……」

そう言われて思い返してみると、確かに小転こころの体つきは女性の逢依から見ても羨むほど魅力的なものだった。出るところはしっかり出ていて、引つ込むところは引つ込んでいて。本人が無自覚で無頓着であることが恨めしいほど。

逢依という例外を除いて、希繫が豊満な体形の女性を好む理由となるには十分すぎたが、逆に言えばそれだけ異性の好みに影響を受けながら、一線を越えようとしなかったことへの安堵が大きかった。

事実、希繫はともかくとして小転の方はそういう点を気に留めるタチではない。実弟であつても異性として意識すれば躊躇なく一線を越えようとするだろうし、逢依という

明確な好意を向ける相手がいなければ希繫の理性も危うかった、というのは希繫自身の談だ。

とはいえ、そういった性癖をこじらせる原因がすぐそばにありながら逢依を選んだことを、誰よりも喜んでくれたのもまた小転である。

普通とはちよつとズレた価値観を持つていえるとはいえ、彼女は自分が『希繫の実姉』であり『絆ファミリーの家族の長姉』であることに誇りを持つている。

故に、自分が最も愛する弟が、真つ当な愛情を向ける相手を見つけたことに、当時は今では考えられないほど大泣きしながら喜んだのだ。

「正直、今だからなんとも思わないけれど、昔は小転が最大のライバルだと思っていたわ」

「実際は俺と逢依の関係を一番応援してたけどな。いやまあ気持ちはわかるよ。ぶっちゃけ姉さんがレイドリベンジャーズだった時は姉さんのことばっか考えてた気がするし」

「まあ……あの頃は悠生ゆうきと小転に全部任せきりだったものね、お金のことは。危険な仕事というところもあるし、頭では理解していたわよ。気持ちはちよつと嫉妬気味だったけれど」

お互いに苦笑いしながら、だけれど楽しげにいられるのは、過去の全部が今の愛情を

育んでいるから。

この愛情がいつかきつと形となって、白露のような優しい子へと育つのだろう。そう思いながら未来を想えば、自然と言葉は漏れて出た。

ずっと前からわかつていた気持ち。いつかは伝えなくてはならない思い。そして今だから口にすべき言葉。それは――。

「もう少し先かなって思ってたけど、白露が言う通り俺たちの未来はちよつと普通とは違う。だから、今言うよ」

「……そうね。もう少し待っていようと思ったけれど、ちよつとくらい駆け足でもいいわよね。ええ、聞かせて頂戴。きつと、ずっと待っていたから」

微笑みながらお互いの視線を交わすと、たった一つの想いがあふれ出す。

「誰よりお前を愛してる。お前となら幸せも不幸せも喜びにできるから、だから……俺と一緒に生きてくれ」

「……うん。その言葉が欲しかった。私の愛を受け止めてくれて、本当にありがとう、希繫。これからもずっと愛してる」

きつと、今すぐに結ばれることは叶わない。

希繫にも逢依にも、今はまだやるべきことがたくさん残っているし、まずは白露を学校に入れたり、かかりつけの病院を探すことだっしてしなければならぬ。

けれど、口に出した言葉は二度と戻らない。今こうして誓いあった気持ちには、今までのように暗黙の下で通じ合う想いだけに留まらず、互いの心の中に確かに刻まれた。だからもう迷うことはない。互いの愛が確かだとわかった今ならば。

3rd season——人型ライダー事件編

半端者——ハーフ——

今でも夢に見る。

人々を脅かすライダーに立ち向かう「彼」の姿を。誰に何を言われても、ただ自分が自分であるために、人としてあるために戦うあいつの背中を。

だから助けたいと思ひ、だから共に並び立ちたいと思ひ、だから彼に看取られて逝きたいと願ったのだ。

たとえ彼が、そして彼から「力」を得た自分が——、

——ライダー化け物となつてしまつても。



「もう何度目だろうなあ、こういうの。さすがに慣れてきたぜ……不本意ながらな」
「仕方ないじゃないか。ぼくらの体質的に、これはもう避けられないよ」

世界有数のレイダー頻出地域である永岑市の隣町、政礼町の都市公園にて、二人の少年とそれを囲うように迫る幾つもの影があった。

影の正体をいまさら問うまでもなく、それらは灰銀の体軀を持ち、断末魔のような鳴き声で九月の夜を震わせた。そう、それらはレイダー。国際脅威的侵略性生命体——レイダーである。

そのレイダーを前にして、二人の少年は怯える様子もなく彼らを睥睨する。それはまるで虫を惑わし捉える魅惑の花のように、二人の口元が夜空の三日月の如く歪む。

「ともあれ掃除の時間だ。残さず余さず片付けるぞ、望夢！」

「はいはい。悪いけどレイダーくんたち……今日の叶枝かなえはちよつと乱暴だけど許してね？」

二人が手を繋ぐと同時に、望夢の右手首と叶枝の左手首に灰銀のバトルデバイスが装着され、その中央に配置された二つの歯車が回転を始める。

それはまるで二人の運命を動かす歯車のように、あるいは二人の想いを運ぶ滑車のように、それとも二人の感情を仰ぐ風車のように、強く激しく回転しながら火花を散らす。

そして、その回転が最高潮に達した時、二人の決意こころざしが形となる。

「変、貌ッ！」

「変貌……！」

繋いだ手から溶けるように、叶枝の身体が望夢の「内側」へと吸い込まれ、そして融合した肉体は灰銀の戦士の姿へと変貌する。

丸く表情のない頭部に二本の羽根飾り。しなやかな筋肉は美しい流線形のフォルムを描きながら、左肩には無数の羽根で作られた防具プロテクターが施されており、四肢の関節部から生えた突起は鳥の嘴にも似ている。

そして何よりも目を引くのは、流線形のシンプルなフォルムに似つかわしくない、腰から足を覆うように垂らした美しくも雄々しき翼。

「仮面マスクレイダー、タイプアルファ……変貌完了ー」

マスカレイダー……化け物と成り果てた少年たちは自らをそう名乗る。

人であれず、人にあらず、獣にならず、獣となれず、ただ「どちらでもなくどちらでもある」彼らは、己を人類でもなければレイダーでもない新たな種族となりて、そこに立つ。

「悪いが暴れるなら隣町でやつてくれねえかな。さすがにこの町でお前らの好き勝手させるわけにはいかねえんだ。それでも暴れる気なら……」

『』

マスカレイダーの言葉を遮るように、レイダーが雄叫びを伴いながら鋭い爪牙を突き立てる。

しかしマスカレイダーはそれを用意にも介さず、左腕でそれを受け止めながら静かにレイダーを見つめる。

「やっぱタイプアルファはレイダー戦だと無敵だな。望夢のは俺のと違って使い勝手がよくて助かるぜ」

「まあ、こんな身体になっちゃった上での副産物だから、褒められても全然嬉しくないんだけどね」

レイダーの攻撃を一切ダメージとして受け付けないその圧倒的な防御力の正体は、マスカレイダーの肉体側を務める東条望夢とうじょうのぞむの感情因子傾向インヒレントアベリテイである『悪感情拒絶』であった。

過去の経験によってネガティブな感情を極端に拒絶しようとする望夢の深層心理から生み出された感情がマスカレイダーとしての力に反映され、マスカレイダーへ向けられるあらゆるネガティブを弾く最強の盾となったのだ。

『
』
「これだけの数がいれば多少減っても文句はねえだろ。あの世で女神様がお前らをハグしてくれるってよ、有り難く逝け！」

数の利は明らかにレイダーたちにある。しかし負の感情を受け付けないという絶対的な相性の違いが、戦況を明らかにしていた。

故に武器など必要ではない。握った拳と大地を踏みしめる両脚があり、そして共に力

を合わせる相棒がいる。それだけで、マスカレイダーの力は際限なく増していく。

「オラ、オラ……オラアツ！」

『――！』
突き出した拳はまるで砲弾のように、頑強なレイダーの表皮を穿ち抉り抜くように突き刺さる。

真つ直ぐに打ち出した拳が一頭のレイダーを葬り、横薙ぎにふるった脚がレイダーの胴を切り裂き、振り下ろした両手が二頭のレイダーを押し潰し、突き出された脚がレイダーを貫く。

全ての一撃が必殺となり、レイダーをまるで粘土細工のように歪めながら圧倒するマスカレイダーの瞳には、意外なほど敵意も殺意も込められておらず、そしてそれ以上に慈悲も憐憫も抱いてはいない。

「つたく、やつぱレイダーとして生まれたレイダーはダメだな。自分がレイダーであるために必要なことを生まれつき知ってる。だからそれ以上に自分を知ろうとしない。まるでザコだ」

『――！』

「俺たちはそうじゃない。人として生まれてレイダーとなった。別に望んで得た力じゃないが、レイダーであるために必要なことを学び、自分の知識に換え、知恵を絞った。生

「まればつきレイダーだったお前らじゃわからないことまで、俺たちは研究した」

生まれながらに「襲う者」としての力と本能を持ち、ただ躊躇なく思考もせずそれを揮ってきたレイダーは、なぜその力があるのか。どう使えば効率的なのか、何が自分にとっての天敵なのかを知らない。

しかし彼らマスカレイダーはそうではない。今でこそ化け物だが、かつては彼らを恐れた人類だったのだ。だからこそレイダーの何が脅威なのか、何がレイダーに対して有効なのか、レイダーに対してどう対処すべきかを痛感してきた。

そして痛みを伴った経験から学び、それが知識となり、レイダーに対抗する手段を——知恵を身に着けた。望んだわけでもなくとも、叶えられた報復の力。故に彼らは反逆の牙を立てる。

「覚えておけレイダー。俺たちの名はマスカレイダー。人であれず人にあらず、獣にならず獣となれず、ただ人の理性と獣の本能を併せ持つ反逆者！ お前たちレイダーの新たな天敵だ！」

月下に立つのは、獣か人か。

噂話―ベイグ―

「マスカ仮面レイダー？」

「ええ。お隣の政礼町せいれいで噂になっている「何か」の通称よ」

「レイダーが仮面かぶって舞踏会でも開いてんのか？」

「まあ、名前だけ聞けばそういう反応になるわよね……」

レイドリベンジャーズ永岑支部。世界有数のレイダー頻出地域の永岑市を守ることで、一人の女性がそんな話を切り出した。

返事を返した男性は、真剣に受け取るべきか思案しているような素振りで、どうにも反応に困っていた。その女性は冗談を嗜むことはあれど、業務に関わる冗談を言うような人間ではない。

そうなると、返事をした男性だけでなく、その部屋にいる部下の面々は彼女の話を真面目に聞かざるをえなかった。

「あまり詳しい情報は私も知らないわ。政礼支部のレイドリベンジャーズから又聞きした話だし、何より私自身、この話を最初は本気にしていなかったもの」

「最初は」ってことは、今はその噂を信じざるを得ない何かがあるってことか。まあ、こ

れが本当にレイダー絡みの話なら政礼支部でどうかしろよってことになるんだが」

「もちろん政礼支部も何もしなかったわけではないけれど、どうにもならなかったみたいね。それに、そのレイダーの行動に不可解な部分もあったみたいだから」

「不可解な部分？」

不可解な、という言葉に男性は首を傾げた。もちろんレイダーという存在の成り立ちや、いつどこからどのように襲ってくるのか、という点は紛れもなく不可解ののだが、彼らの「行動」について不可解だということは、感じたことがない。

彼らは負の感情によって成り立つ感情生命体であり、人の負の感情を糧として生存し成長する。そのため、人を襲うことは一種の本能的行動であって、思考や嗜好の問題ではない。故に、彼らの行動原理は至ってシンプルだと言えるはずだ。

しかしそれが彼女の言う通り「不可解な」行動原理を持つとするのなら、そのレイダーには間違いなく「本能」以外の行動原理——即ち明確な「目的」が存在することになる。「ひとまずそのレイダーの特徴から説明しましょうか。マスカレイダーの外観的特徴は、今までのレイダーとは一線を画すらしいわ。分類としては二足歩行型で、極めて人間的なフォルムを持ち、非常に短時間ながら飛行能力も持つとのことよ」

「二足歩行の飛行型って時点で新型だが、その上さらに人間的なフォルム？ ようはあれか、神話とかに出てくるガルーダとかハーピイみたいな感じか」

「翼はスカートやコートのように腰から足を覆うようにしていたらしいから、パツと見ただけなら完全に人間の姿をしたレイダーと思っただけいいみたいよ。体つきからして、スリムな女性のような体型だったと報告されているわ」

「じゃあガルーダとかハーピイよりは天使とかそっち系だな。レイダーって時点で印象は最悪だが」

外観だけの話をすれば、衣服のように纏う翼を持つスリムな女性だが、その本質がレイダーだとわかっていけば、その美しい容姿も人間に油断させやすくするための擬態とも考えられる。

そうだとすれば、そのレイダーは人間の嗜好を理解し、どのような外見が有効であることを理解しているということになる。

となると、その学習能力もさることながら、それ以上に人間の美的感覚——もしくはそれ以上に多くの感覚を理解しているということが、何より恐ろしい。

「あと何よりも度肝を抜かれたのは、そのレイダーが人間の言葉を理解していた……かもしれない、ということね」

「はあ。」

ここまでで十分そのレイダーの特異性や脅威性について事態を重く見ていた男性だったが、続く女性の言葉にいよいよ頭が真っ白になった。

「えつ、ちよつと待つ……は？ いや、それはさすがに、ええ……う！」

「まあ、そう言いたくなる気持ちはわかるわ。実際それについては「かもしれない」域を超えないらしいし。けれど、マスカレイダーと対峙したレイドリベンジャーズの多くは、マスカレイダーに対して「意思疎通が出来た」と感じたらしいわ」

言葉——それは人類史上で類を見ない、まさしく人類最大の発明にして、人類最大の文明であり、人類最大の技術だ。

言葉を理解するということは人類を理解することと言っても過言ではない。それほどに人類は言葉というものに依存し、そして言葉によってあらゆる文明と技術を生み出してきた。

そんな「言葉」を理解できるレイダーが現れたとなれば、その脅威性はもはや先程言っていた「感覚」への理解などの比ではない。今こうしている間にも、そのレイダーは言葉を学び、人類を学んでいるはずだ。

人がどのような価値観をもち、倫理観を持ち、嗜好を持ち、欲求を持ち、感情を持ち、それらを律する理性を持っているのか。人類の防ぎようのない「内側」を全て知られることになりかねない。

「そんな厄介なレイダーがいるなら手を拱こまねいてる場合じゃないだろ！ 政礼支部だけで対策できないなら永岑支部も含めた近隣支部と共同戦線を張るべきだし、それでもダメ

なら東京の極東本部に協力要請すべき案件だろ！」

「そうね。私もここまでの話を聞いた時は同じことを政礼支部の部隊長に言ったわ。どう考えても政礼支部だけで解決できる相手ではないし、現時点では政礼町に留まっているとはいえ、いずれより多くを学んだマスカレイダーが行動範囲を広げた時の被害は計り知れない」

「だったら……！」

「けれど……どうもそのマスカレイダー、人間をまったく襲わないらしいのよ」

うん？　ともはや何度目か、男性は疑問符を浮かべた。

人間を襲わないレイダー。それはつまり、負の感情を得ようとしないうち、生存も成長も目的としない——生命の本能的にありえない「自滅的な行動」をとっているということになる。

本能だけで行動していないことは再三に渡って述べてきたことだが、それにしても根本的本質がレイダーである限り、本能の中でも最も根底にある「生存本能」に抗う個体となると、さすがに予想の範囲外であった。

「襲わないどころか、レイダーとの交戦中、不意をつかれたレイドリベンジャーズを庇うように現れ、そのまま加勢したという報告もあって、政礼支部は対応に困っているらしいわ」

「あー……レイダーって時点でその脅威性は明らかだけど、仮にそのレイダーが人類に協力的・好意的な存在だとしたら、そのレイダーを研究することでレイダーへの対抗手段を得られるかもしれないってことか」

「そういうこと。もつと端的に言えば、敵として駆除するかモルモットとして飼い慣らすかってことね。マスカレイダーからしたらどちらを選んでも不幸にしかならない気はするけれど」

人を襲わないばかりか、人を守ろうとするレイダー。人型というだけでなく言葉まで理解することまで入れて考えると、男性だけでなくその場の全員の脳裏に、現実的ではないが悪夢のような可能性が過ぎる。

「隊長、そのマスカレイダーって、もしかして……」

「十中八九、要注意組織のいずれかによってレイダーに「変異」させられた元人間……つてところでしようね。奴らは自らの欲求に対してどこまでも忠実だわ。奴らの行った人体実験の被害者は、私も何度か見てきたもの……」

「変異」……。いや、もしもマスカレイダーが人としての心を今も持っているのなら、変わったのは見た目だけだ。だから……そう、「変貌」だ。そいつはレイダーに変貌しながら、それでも人間であり続けてる……！」

だからこそ——と、女性は微笑む。

「だからこそ、あなたにこの話をしたのよ。世界最弱のレイドリベンジャーズにして、対人事件のスペシャリストであるあなたにね」

「……なるほど、そういうことか」

「そう。あなたにはこれからマスカレイダーに接触してもらおうわ。マスカレイダーが何を思い、なんのために人々の前に現れるのか、そしてマスカレイダーが本当に人類の脅威とならない存在なのか、それを見極めてちょうだい」

マスカレイダーを人間ととるか化け物ととるか。守るべき存在ととるか駆除すべき存在とするか。レイドリベンジャーズはその判断を「彼」に委ねたのだ。

人類に対して誰よりも甘く、化け物に対して誰よりも冷徹な「彼」だからこそ、マスカレイダーの表面的な利害だけでなく、本質を見抜くことができるはずだ、と。

「了解。でもさすがにレイドリベンジャーズとして接触するわけにはいかないしな。エクレール、久しぶりにあれをやろう」

『……あれを？ 了解。ご武運を祈ります』

「いやご武運じゃなくて平和的に解決したいんだよ」

少女—アンノウン—

政礼町に堂々と聳える私立彩桜学園。

国内有数の難関校として知られるこの学園では、各学年のクラス分けは成績順で決められる。となれば当然ながら最も優秀とされるAクラスには優等生ばかりが自然と集まることになるのだが——。

「西郷！ お前今月に入ってこれで何度目の居眠りだ！ 後で職員室に來い！」

「俺よりIQ低いクソ教師の話なんか聞いてても退屈なだけなんだよ！ このくらいの授業寝ても解けるわ！」

「じゃあこの式を10秒以内に解いてみる！」

「5. $972 \times 10 \div 24 \dots$ っていうかそれ地球の質量だろ！ このクラスのやつならそのくらい解くまでもなく暗記してるっつーの！」

「な？」 と周囲に同意を求めても、返ってくるのは若干名の頷きと過半数の沈黙。しかし式を解いたことに変わりはなく、教師もそこで言葉に詰まる。

とはいえ授業範囲が容易に解けるものであったとしても、悪びれもせず寝ているとなれば生活態度的に最低評価であることは彼もわかっている。わかっているのだが、それ

がどうしたという様子だ。

内申点が最悪でも成績という結果を残しているのであれば文句はないはずだ、というのが彼の主張だ。事実、彼の成績はクラスでトップ。クラスが成績順で分けられる以上、Aクラスのトップはそのまま学年トップということになる。

反比例するように授業態度の項目が最悪なことになっているのは言うまでもないが。

「俺に授業聞かせたけりや俺より頭よくなってからほざけや低能教師」

「ねえねえ、かなえ叶枝」

「あ？ なんだよ望夢のぞむ、今は——」

「円周率を小数点以下102桁まで言ってみて。ぼくは言えるよ？ 叶枝より頭よければ授業きいてくれるんだよね？」

しかしこの殺伐とした砂漠に咲いた一輪の花が、枯れ落ちようとしていた教師に救いの水を与えた。

東条望夢——この場を荒らした砂漠デザートの嵐とも言うべき西郷叶枝の親友にして、この学園で唯一、叶枝と同じIQ190を誇る天才児である。

「3. 141592653589793238462643383279502884
19716939937510582097494459230781640628
620899862803482534……ぐっ！」

「残念、一応全部合ってるけど92桁までだね。じゃあ今回はボクの勝ちってことで、大人しく授業聞いてね？」

「……チツ」

あからさまに不機嫌な様子を隠そうともせず、しかしそれ以上何も言い争うこともなく席につく叶枝を見て、教師は地獄に現れた仏を見るような目で望夢を見ていた。

ただ、叶枝の言い分もわからないわけではないという望夢の意見により、職員室への呼び出しもキャンセルとなった。尤も、最初から呼び出しをくらっただけで態度を改めるような人物でもないのです、単に両者の手間を減らしただけでも言える。

クラスメートたちは既に見慣れた流れという様子で、特に何も言わず再開された授業を大人しく聞いているが、数名は「今日は望夢の勝ちか」「っしや！ 昼メシもらった！」「くそつ、今回はオレが奢りか……！」などと呟いていた。

どうやら叶枝と望夢のやり取りに慣れたばかりか、そのやり取りを賭けに利用しているらしい。叶枝と望夢もこれを聞いているが特に何も言わないということは、暗黙化で認知されたギャンブルなのだろう。

「ちくしょう……おぼえてろよ……！」

「はいはい。静かに授業受けようね、相棒」



私立彩桜学園は全寮制では珍しく男女共学校であり、校舎を跨いでいるとはいえ、当然ながら男子寮も女子寮も学園の敷地内に存在する。

放課後も生徒間の交流をさほど厳しく制限しないものの、門限である7時以降はその限りではない。異性寮に入れないのは平時でも同じだが、門限を超えると男女関係なく自分の寮に入れなくなるばかりか、女子は出ることもできなくなる。

もちろん有事の際はその限りではないが、個人的な用事では間違いなく出してはくれない。故に——午後7時50分、寮どころか政礼町の街はずれで、彩桜学園の制服を着た女子生徒がいることなど、あるはずがないのだ。

幸いにも、つい数十分前にその付近で発生したレイダーは、政礼支部のレイドリベンジャーズによつて駆除されており、それに加勢していたマスカレイダーの二人も、まさにその帰路であつた。

女子生徒が単なる不良であつても面倒だが、このまま放つておくというのも寝覚めが悪い。人助けというのは性分ではないとわかつていながら、回り回つて自分のためと言ひ聞かせて、叶枝はその女子生徒に声をかけた。

するとその女子生徒は、濡れ羽色の長い髪を翻しながら向き直ると、どこか安堵した

様子を見せながら「なにか？」と叶枝に問いかけた。

「アンタ、彩桜の女子だろ？ 俺が言えたことじゃないが、もう門限を過ぎてんだから寮長に頭下げにいったらどうだ」

「ああ、タチの悪いお茶のお誘いかと思つたら、心配してくれたんだね。ありがとう、でも大丈夫。わたし、彩桜学園に通うのは明日からだから」

「転校生か」

「うん。今日はちよつとはしやいで制服を着て出掛けちゃつただけ。誤解させちゃつてごめんね。そつちはあなたのお友達？」

ふと少女の視線を辿ると、叶枝の少し後ろで二人の様子を見守る望夢がいた。

いつも通りの大人しい表情の中に、どことなく警戒した様子を見せていることには、付き合ひの長い叶枝だけが気付いているようで、少女はにこやかに微笑んでいる。

「わたしの名前は桐咲菊菜きりさききくな。その制服、君たちも彩桜学園の生徒でしょ？ 明日から同じ学校だし、よろしくね」

「俺は2—Aの西郷叶枝。んでこつちが……」

「同じく2—Aの東条望夢。よろしく、桐咲ちゃん」

望夢が手を差し出すと、菊菜は躊躇なくその手を握り、ぶんぶんと振りながら「よろしく！」と笑みを浮かべる。

そんな彼女の態度に毒気を抜かれたのか、ようやく望夢の表情から警戒心が抜け、いつもの人懐っこい笑みをこぼす。

続いて叶枝も握手をすると、菊菜は「そうだ!」と何かを思いついたようにポケットから何かを取り出し、それを二人に渡す。

「これは……」

「チョコチップクッキー?」

「今はこんなのしか持つてないけど……まずは「これからよろしく」の証! 学校でも仲良くしてね!」

赤い瞳を宿した目を細めて微笑む菊菜を見て、叶枝は内心「今時こんない子いるんだな……」と惚けていた。

マスカレイダーとして人の道を外れる前から、あまり素行がいいとは言えなかった叶枝には、当然ながらその周囲にいる者も同じような風貌の者たちだけであった。

女の気配があつたとすれば、中学時代に彼のクラスの委員長をしていた幼馴染くらいだろう。その幼馴染も、今はもう別々の学校に進学して疎遠となった。

「そっか。じゃ、これは寮に戻ってからもうよ。菊菜もこんなところろついてないでさっさと帰れよ」

「そうだよ。特にこの辺はついさつきまでレイダーが出現してたんだし。ていうか

緊急警報見なかったの？」

「え？　緊急警報なんて出てないよ。えつと……あつ、あつたあつた。ほらっ」

そう言つて見せられたのは、おそらく彼女のものだと思われる携帯電話。

思われる、というのは、それが今時の女子高生が持つものにしてはあまりにも武骨で、端的に言つてしまえば最新式の折り畳み型オールドスタイル携帯電話だからだ。

待ち受け画像は彼女と彼女の友人と思われる女子高生が映っているが、その様子があまりにも今時の女子高生らしいだけに、なおさらオールドスタイルなのが気になった。

「ほんとだ……緊急警報の通知が来てない。通信障害かな？　まあ、今回はほとんど被害も出てない……みたいだし、結果オーライだよね！」

「え？　……あ、ああ！　そうだな。さつきレイドリベンジャーズに聞かなかつたら俺たちも知らなかつたし」

「そうなんだ。じゃあ早めに帰らないと！　じゃ、二人ともまたね！　明日、学校で会えたらよろしくね！」

大げさに手を振りながら去っていく菊菜を見送ると、二人はお互いの顔を見合つて苦笑いする。

マスカレイダーとしての活動を秘密にする以上、レイダーの出現情報についても一般人と同レベルにしなければならぬことを失念していた。

実はマスカレイダーである二人には、レイダーが出現した際に、彼らの持つ悪感情を感知する能力があるのである。そのため、一般人どころかレイドリベンジャーズよりも早くレイダーの出現を感知できてしまうのだ。

「ちよつとヒヤつとしたね……」

「ちよつとだけな。でもあいつ結構のんびりしてそうだし、うっかり零しても案外バレなかつたんじゃね？」

「正直ぼくもそう思うけど、慢心は大敵だよ。いつどこで誰が何を聞いているかわからな
いんだから」

それもそうか、と肩を竦める叶枝にもう一度だけ釘を刺すと、望夢もその横に並んで
寮へと帰って行った。

寮長のお叱りメニユーの予想をしながら。

学園—スクール—

「叶枝くんっ！ 望夢くんっ！」

翌日。彩桜学園2年Aクラスの教室前で二人に声をかけてきたのは、昨晚出逢った少女、桐咲菊菜だった。

転校生の宿命とも言える質問ラッシュをどうにかかわしてきたのか、それともご丁寧にこなしきった後なのか、額には少し汗をかき、赤らんだ顔で二人に手を振りながらの登場となった。

よくも悪しくも——どちらかというと後者の意味で有名な二人に、転校してきたばかりの女子が声をかけるという状況に、周囲の生徒は聞き耳を立てずにはいられないようだ。

「え？ ああ、菊菜か。昨日ぶりだな」

「クラスは別だったみたいだね。どこのクラスだったの？」

「2—Bだったよ。クラスの子に訊いたら、二人ともAクラスだったみたいだから、会いにきちやっただ！」

会いにきた、とは言っても、叶枝と望夢のことを聞いたとすれば、彼らの悪評につい

ても聞かなかつたわけではないだろう。

叶枝は言うまでもなく授業態度最悪の問題児であるし、彼のストッパーを務める望夢も、どちらかというとな彼の態度を改めるよりも悪ノリして状況を愉しむタイプだということはほとんどの生徒が知っている。

しかし、そんな悪評を聞いてもなお態度を変えることなく彼らに接する菊菜を見て、二人の中に庇護欲的な何かが芽生え始めていた。

「望夢。俺、今生まれて初めて妹萌えって性癖が理解できそうなんだけど」

「奇遇だね叶枝。ぼくも似たような気持ちだよ。やっぱり持つべきものは相棒だね」

異性として意識するにはあまりに幼く無防備で、父性を抱くにはあまりにも歳が近すぎる。ならばこの感情は——この愛しさは、兄が妹へと抱く親愛に他ならない。

とはいえ、そのような妄言を口にすれば、いかに相手が菊菜といえども好ましい反応が返つてこないことは予想できる。二人は心に灯した親愛を胸の内に留めつつ、言葉を進める彼女の話を聞く態勢へ移行した。

「——ということ、今日のお昼も一緒できたらなーって！」

「ああ、はいはい。……って、ん？ えっ、昼も一緒に食うのか？」

「え？ うん、できたらいいなって……あつ、もしかしてお邪魔しちゃうかな？ なら遠慮して——」

「いやいや、ぼくら基本的に二人だけで食べてるからお邪魔も何もないよ」

そもそも一緒に食べるような友達自体いないし、と洩らしそうになりながら、寸でのところで言い留まった。

この心優しい少女がそんなことを聞いてしまえば、無暗な心配をかけてしまうことは目に見えている。それは二人にとっても望むところではない。

それに、彼らが二人だけで行動しているのも、ただ単にやたら群れることが嫌いだからというわけでもない。というか、それは叶枝だけの話で、望夢はどちらかというと群れたい方だった。

町内でレイダーが発生した場合、マスカレイダーとして活動していることもあって、他のクラスメートを巻き込まないための措置でもあるのだ。

「じゃあ決まりだねっ！ またお昼に教室まで行くから、ちゃんと待っててね！」

じゃあねー、と言って去っていく菊菜のおかげで腕時計を確認してみれば、いつの間にか一限目の予鈴が鳴るまで二分も残されていなかった。

幸いにも一限目は移動教室でもないので教室に戻るだけでいいのだが、既に周囲の視線は「あの転校生の子とどういう関係なんだ」という疑問と困惑が籠もったまま二人の背中を刺している。

無論、教室のドアの向こうにも話し声は聞こえていたはずだ。となれば、ここでコソ

コソと教室に逃げ込んでも、そこが逃げ場でないことは明白。互いに視線をかわすと、諦めたように肩を落として、教室のドアに手をかけた。



転入生でもないのに一限目の休み時間ラスト二分で行われた質問ラツシユをどうにか躲しきり、その後も休み時間の度に押し掛けるクラスメートたちから逃げ回りながらようやく訪れた昼休み。

朝の約束通り、教室の入り口まで来て大声で「叶枝くーん！ 望夢くーん！ 一緒にごはん食べよーっ！」と昼食を誘いにきた菊菜が、二人に替わってクラスメートの質問ラツシユに五分程度で答えきると、ようやく三人は落ち着いて食事となった。

先にも述べた通り、基本的に人気の多いところで食事をとることのない叶枝と望夢に連れられて訪れたのは、校舎の中庭の端に置かれたベンチ。冬や雨天ではさすがに来ないが、曇りくらいなら普段からここで食事をとっている。

「そういえば二人つて頭いいんだよね？ この学園、成績順でクラス決まるって聞いたから、Aクラスなんてすごいね！ わたし、前の学校じゃそれなりに成績よかったのに、それでもBクラスだもん。Aクラスなんて雲の上だよー」

「まあ、この学園それなりに偏差値やベーからな。入試の難しさだけなら国内でもトップクラスだし、普通の高校の成績トップでもこの学園じゃ下から数えた方が早いなんてこともザラだからな」

「実際、学年が違うとはいえ、IQ190のぼくらでも生徒会長さんには勝てないからね。あの人しれっとIQ200とか言ってるし。実際ぼくらより頭いいからホントだろうし。もう漫画のキャラか何かだよあの人」

IQ200の生徒会長が漫画のキャラならIQ190の二人もそれに類する何かなのでは、と思う菊菜であったが、あえてそれを口にすることはなかった。

彼らとはまだ昨日出逢ったばかりの仲ではあるが、それでも彼らが自分のスペックに対して自覚と自信を持ちながらも、妙なところで天然が入っていることは察していた。

だが、そういうところをスルーしながらも二人の話を楽しめる度量も、菊菜は持ち合わせていた。

「でも桐咲ちゃんだって十分すごいよね。Aクラスのぼくらが言っても嫌味っぽいけど、Bクラスだって普通なら絶対高い壁だしさ」

「あー、確かに一番下のFクラスでも他の学校じゃ間違いない成績トップだろうしな。次回の学力テストが楽しみだな」

「あはは……そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、実はわたし勉強より体を動かす方

が得意で、そこまで真面目ってわけでもないんだよね」

言われてみれば、真面目な生徒が転入前日とはいえ夜中に制服を着て出歩いたりはないだろう。

といつても、二人にとっては勉強が好きでないことよりも運動が得意だということの方が気になった。正直、今の和やかな雰囲気からしても、彼女が機敏に動けるところがまったく想像できないからだ。

勉強については、よっぽどでない限り外見からは判断できないので、得意でも不得意でも違和感がないのだが、運動はどうしても体つきからして先入観が生まれてしまう。

だが言われてみれば、スラリと伸びた手足や、余計な肉のないスリムな体型、首を隠すか隠さないか程度のセミショートなど、運動に向けた容姿であるように思える。

「え、えーつと……叶枝くん、そんなに見られるときさすがに恥ずかしいかなーって……」

「あ、悪い悪い。雰囲気的に運動できそうには見えなかったから。でも確かにスタイル的には運動向きだな」

「それはその、わたしのどこを見てそう言ってるのかな……？」

困惑した表情から一転、「運動向きなスタイル」と聞いた途端、菊菜の表情が険しくなる。

そういうことを気にするタイプにも見えなかったが、やはり女子としてそういうこと

には敏感なのか、それとも先程の視線のことも込みで堪忍袋オーバーしたのか、「わたし怒ってます」という雰囲気や露骨にしながら、菊菜はそつぽを向いた。

「叶枝、さすがにそれはデリカシーなさすぎるよ……」

「いや、そんなつもりはなかったんだよ。ただ雰囲気は可愛い系なのに体型はスラっとしたキレイ系だからギャップがすごいな、って言おうとしただけで……」

「ホントに!? わたしキレイ系かな! オトナっぽいかな! いやあ、誰もキレイとかカッコいいとかって言ってくれないから正直わたし残念ビジュアルなのかと思ってたけど安心し——あつ」

しかし性根が正直すぎる性格が災いしてか、つんとする間もそう長くは保たず、寸前まで怒っていたことすらさっぱり忘れて大喜びする菊菜。

ご機嫌な気分を隠す間もなく自分のバカ正直さに気付くと、頬を赤く染めながら再びそつぽを向く菊菜を見て、叶枝だけでなく望夢まで嘖き出してしまい、さらに彼女の機嫌を損ねた。

「悪い悪い、もうジロジロ見たり笑ったりしないから機嫌直してくれてば」

「そうそう、ぼくもちゃんと止め……ふふつ、あつごめ……ひやつ! 桐咲ちゃん脇腹つんつんしないで!」

「ちゃんと謝ってくれた叶枝くんは許すけど望夢くんはあと30秒つんつんの刑ね?」

30秒間の微笑ましい拷問の後、今度は体格の話が横道に逸れて行き、今度は望夢の機嫌を損ねる叶枝と菊菜であった。

不退—アンバック—

菊菜が彩桜学園に転校してきて最初の日曜日となる10月1日。叶枝はいつものように望夢と二人で——ではなく、望夢と菊菜との三人で街へ繰り出していった。

理由というほどの理由もない。ただ菊菜が洩らした「新生活最初のお出かけは新しい最初のお友達としたかったんだー」という言葉に、その最初の友達が領いただけだ。

県で見ればそれなりに栄える愛知県とはいえ、政礼町はその端にある田舎だ。町内唯一の政礼駅も、せいぜいあるものといえれば無駄に広い公園と小さな書店。そして古くて安くて美味しくない定食屋だけ。

なので集合地点は同じエリアの中でも駅前ではなく公園の入り口。周囲にいる学生やカップルも、同じように入り口か公園内で集まって足を進めている。それがこの辺りの若者たちの常識だからだ。

「そういうえば菊菜って前の学校どこだったんだ？」

「え？ 隣町の永岑高校だけど……なんで？」

「ああ、やっぱすぐ近くか。いや、集合場所を決める時、すぐここ選んでたから、このあたりのこと元から知ってたのかと思って」

「あー、そうだね。何度か遊びに来たこともあるし、政礼町こつちにも友達いるからね」

転校してそう日も経たないのに、菊菜の歩みには迷いが無い。買物の順序もよく、集合地点の公園から近くて軽いものから順に、少しずつ店への距離と荷物の重みが増していく。

とはいえ両手に余るほどの荷物というわけでもない。貧弱そうな菊菜の細腕でも十分に持ち運べる量の荷物だ。それほどこの町の地理と、店の種類や数を知っているということだろう。

楽しみに鼻唄を奏でながら歩く彼女の表情には、清々しいほどの明るさと喜びだけが浮かんでいる。

「で、次はどこ行くんだ？」

「うーん……ちよつと歩き疲れたし、お茶にしようか」

「なら向こうの喫茶店にしよう。あそこなら落ち着けるし何よりデザートがめっちゃくちゃ美味しいらしい。……なにその目。いやホントだよ。クラスの女子経由の情報だから信じてよ」

休憩を提案する菊菜に、望夢が具体的な場所を提示すると、叶枝が露骨に嫌そうな視線を向けた。菊菜も苦笑いして止めないその理由は、望夢のいう「美味しい」の基準がいまいち信用ならないからだった。

決して彼が料理をできないだとか味音痴だとか、そういうことではない。なんならこちらの女子よりは美味しい料理が作れるし、まっとうに美味しいものだけを採す食べ歩きをしたら、彼の舌ほど信用できるものもなかなかないというくらいには舌が肥えている。

しかしそこで終わらないからこそ叶枝も菊菜も苦笑いしているのだ。実は望夢、一期まっとうに美味しいものばかり食べ過ぎて「刺激的な」食べ物をやたら求めていた頃がある。その名残か、今の彼は真っ当に美味しいものはもちろんわかるが、頭のおかしい味に対しても強靱な耐性を持ってしまっていた。

ようは、うっかり「ヤバイ」類の料理を友人に勧めてしまうことがあるのだ。そしてこの数日間の間に、菊菜もその被害をばっちり受けている。

「まあ、情報の出処がお前じゃないなら信じるけど……これで本当にヤバイやつだったら殴るからな？」

「いくらなんでもぼくの信用なさすぎでしょ。ていうか、こないだのに限らずアレなやつ食べさせちゃったのは全部わざとじゃないからね？」

「わざとじゃないから、なおさら怖いんじゃないかなあ……？」

自業自得だとはわかっていても不満をこぼしてしまう望夢を宥めながら歩き続け、ようやく一休みできる店に到着——した瞬間のこと。

「——ッ！」

「……叶枝！」

二人の耳に届いたのは金切り声にも断末魔にも似た絶叫。そして全身の毛が逆立つこの感覚——これは。

「えっ？ どうしたの望夢くん？」

「ごめん桐咲ちゃん、ちよつとここで待ってて！」

「すぐ片付けてくる！」

「えっ？ えっ？」

そう言い残して、全ての荷物を菊菜に預けて二人は街へと駆け出した。

間違いない。あの叫び、あの感覚、あれはまさに——。

「……二人とも行ったかな」

残された菊菜は二人を見送ると、スカートのポケットから旧型の携帯電話を取り出すと、一人の人物へとコールする。

3コールと経たず返事を返した相手にクスクスとおかしそうに笑うと、彼女はただ一言。

「行つたよ。あとは任せるけど、無茶しないでね」

『本当はこういうの前線部隊の仕事だと思っただけ……任せてください。マスカレ

イダーが本当に敵視すべき存在かどうが見極めるのも、情報部の仕事ですから。……あとその声と喋り方ほんとに気持ち悪いんで業務報告の時くらいやめてください』

「違和感とか言わないでほしいなー。わたしだって別に好きでこんなことやってるわけじゃないんだから、ちよつとくらい見逃してよ。ねっ?」

『……切りますね』

返事すら返す間もなく本当に切られた。



叶枝と望夢の駆け抜けた先に広がっていた光景は「やはり」最低で劣悪な感情ばかりが渦巻く惨状だった。

我が物顔で街を暴れるレイダー。悲鳴を上げて逃げ惑う人々。良い感情など微塵も生まれるはずのない光景。湧き上がる激情と、それすらも急激に凍てつかせるほどの冷たい理性が、彼らの闘志を高ぶらせる。

「望夢……」

「うん、行くう」

叶枝の差し出した右手に望夢の左手が重なり、もう一方の手首に装着された灰銀のパ

トルデバイスが回転を始める。

回転と共に熱を発するバトルデバイスと、ちよつとずつ体温を失っていく望夢の手に感じながら、叶枝はただ静かに激情と理性を均等に保ち、逆にバトルデバイスの回転によつて巻き起こる旋風に涼しさを感じる望夢は、叶枝の手の温かさを感じながら激情と理性をより昂ぶらせた。

そしてそれらの激情と理性が最高潮に達した時、彼らの「覚悟」が言葉となつて現れる。

「変、貌ッー」

「変貌……いー」

言葉と共に泥のように溶けた望夢のカラダが叶枝の肉体へ吸い込まれ、そして相棒の力が溢れ出るかのように全身が灰銀へと変異し、孔雀の翼を纏う流線形の美しい姿へと変貌を遂げた。

ヒトとは到底呼べない体と力に涙しながらも、その涙を灰銀の仮面に隠して戦うレイダー……『マスカレイダー』としての二人の姿だ。

（直にレイドリベンジャーズも到着するだろうが……こいつらは俺たちの得物だ。背中から撃たれない程度に暴れさせてもらうぜ！）

目視できる範囲だけで四足歩行型4頭、球体型2頭、二足歩行型2頭、蛞蝓型3頭、飛

行型3頭の計14頭。球体型1頭を除きおおよそ小型・中型ばかりだが、球体型はその形状の性質上、格闘攻撃がほとんど意味をなさない。

ひとまず飛行型と球体型を後回しにしつつ、マスカレイダーは最も近い位置にいた四足歩行型2頭と蛞蝓型2頭に狙いを定めた。

『!』
 『!』
 (蛞蝓型は背部の突起から伸びる触手による中距離からの打撃および絞撃。データ通りだな)

『!』
 (つと、四足歩行型は頭部の突起による刺突だったな。蛞蝓型と比較すると僅かに機動性に優れる。注意力が落ちれば即座にグサリ、つてことか)

冷静にレイダーの性質と傾向から行動を予測し、回避と同時に拳を打ち込み、ひるんだところに踵落として仕留める。

左右から挟みこむ蛞蝓型2頭の触手攻撃も、逆にそれ自体を捉え、力任せに振り回した遠心力ごと両者をぶつけ合う。この隙に背後から忍び寄る四足歩行型の攻撃にも狼狽えず、振り向きながら投げつけた蛞蝓型によって防ぐ。

都合よく3頭のレイダーが一カ所にまとまったことで、脚を覆うように纏っていた翼が大きく展開し、強い羽撃きを伴ってマスカレイダーの体を宙へと持ち上げる。

「スイヤアアアッ！」

そして宙に浮いたまま足を突き出すと、再び羽撃いた翼がさらに強い衝撃波を生みながら落下速度を加速させ、一カ所にまとまっていた3頭のレイダーを一網打尽に葬った。

（まずは3頭……こんなのをあと10頭以上か。時には数十頭にも及ぶ大群を殲滅するレイドリベンジャーズは化け物の集団かよ……）

レイダーの脅威性は「感情を奪う」ことが最たるものとして挙げられるが、それ以外にも感情由来の攻撃でなければまともなダメージにならない防御性がそれと言えるだろう。

単純な物理攻撃では衝撃を生むだけで、身体的損傷にはならない。加えて、疲れや痛みを感じないレイダーは、多少のダメージでは怯むことすらしてはくれない。

そのために感情武装であるELBシステムが存在し、その中でもレイダーに対して致命傷を与えられるほどの威力を生み出す『ユナイトギア』だけが、人類最後にして最大の希望だとされているのだ。

（ユナイトギアがあれば……いや、ダメだな。この肉体はレイダーだ。ユナイトギアのポジティブ感情と反発し合うだけだ。ユナイトギア装着者と明確に敵対してないだけ儲けもんだと思う）

マスカレイダーの肉体は言うまでもなくレイダーのそれだ。それはつまり、ユナイトギアの特効対象であるということでもある。

ユナイトギア装着者同士の戦闘は、ユナイトギアという兵器を用いた超人同士の戦いと言い換えることもできるが、ユナイトギアとレイダーの戦闘は、装着者の慢心や未熟などが無い限り、基本的にユナイトギアのワンサイドゲームである。

もちろん、感情を常に燃やし続けるユナイトギアは、長時間に亘って使用し続ければ感情を焼き尽くすことにも繋がるが、それがほとんど例を見せないほどに、ユナイトギアのレイダーへの効果は絶大なのだ。

だからこそ、マスカレイダーとして活動するにあたって、叶枝と望夢は真つ先にレイドリベンジャーズの信用をとりに行った。出来る限り敵対の意思がないことを証明するように立ち回り、ユナイトギア装着者が自分たちを見て即座に攻撃する可能性を少しでも低くしようとした。

その結果こそ、まだ当の二人こそ知らないもののレイドリベンジャーズの内部でひとつの「疑問」を生み出すほどになったのだが、マスカレイダーとしては「ひとまず出会いたい頭に攻撃されなくなったただで上等」というものだった。

(……今の戦闘に気付いたレイダーが寄せられてきたか。1、2、3……6頭。四足歩行型2頭と二足歩行型2頭と蛞蝓型1頭と飛行型1頭か。飛行型は機動性が高いから後

回しにしたかったが、そうそう思い通りにはならないか)

正面から押し寄せる2頭の四足歩行型レイダーを手刀で地に叩き落とし、そのまま串刺しにするように拳を突き立てる。残り4頭。

蛞蝓型が伸ばした触手を掴み取り、そのまま引き寄せて蹴りで突き刺すと、灰となつて消える蛞蝓型レイダーに隠れて接近していた二足歩行型が鎌のような腕を横薙ぎに払うが、翼の羽撃きによつて生み出される衝撃波とその反動で距離を取り、街路灯を足場にして反転し蹴り飛ばす。

残るは二足歩行型と飛行型が1頭ずつ残るばかりと思つたが、視線を周囲に向ければ球体型2頭と飛行型2頭——即ち残党全てがこちらに向かつている。

(チツ……！ 二足歩行型はどうにでもなる、飛行型も2頭までならどうにかできる。だが球体型まで追加となると、さすがにタイプアルファじや厳しいな……ッ！)

タイプアルファはレイダー由来のダメージをほとんど無効にも等しいほどに減衰させてくれる反面、攻撃手段はその肉体を使う叶枝の格闘センスに依存する。

故に、その形状性質から格闘攻撃がほぼ意味を為さない球体型は、タイプアルファが最も苦手とする相手であるのだ。

(まずは片付けられるヤツからどうにかするしかない、か……ッ！)

左肩のプロテクターから羽根を2つ抜き、それを飛行型に投擲する。すると飛行型レ

ライダーはバランスを崩し、墜落こそ防いだものの落ちるような軌道でマスカレイダーに接近する。

そんな飛行型レイダーを両手で引っ拵むと、そのままタンバリンのように互いをぶつけて押し潰し、二足歩行型レイダーへと接近。二足歩行型の鎌のような腕が縦に一閃するが、マスカレイダーはこれを左手で払いのけ、開いた胴体に拳を打ち込む。

残るは飛行型1頭と球体型2頭。どちらも強力な個体というわけではないが、まともにより合うには面倒な相手だ。

(くっ……い……いくら苦手といっても、ようはレイダー……俺たちが倒すべき仇であり、俺たちが倒せる敵だ！ だったら、こんなところでへばつてられるかッ！)

弱音も愚痴も呑み込んで、震える脚に活を入れて対峙する。

ここを通せば政礼町が——醜い姿に怯えることなく「マスカレイダー」という誇らしい名前をくれたこの町が、レイダーなどという醜悪な脅威に脅かされてしまう。

そう思えば、マスカレイダーとしての魂が、何度でもこの体に鞭を打って立たせてくれるのだ。

(……いこう、望夢ッ！)

翼を広げ、飛行型レイダーに接近しようとしたその瞬間——。

『——ッ！』

残る3頭のレイダーの頭上に巨大な水のスフィアが現れ、彼らはそれに押し潰されていった。

「余計なお世話……でしたか？ マスカレイダー」

「……………」

虹色の髪に虹色の瞳、そして虹色に輝く翼と、蛇のように太く長い虹色の水で覆われた下半身。

見る者によつては「竜」とも表現できるその姿は、間違いなくヒトのものだ。そう、あれはヒトの生み出した叡智——邪なものを退けるヒトの力。

そしてそれを纏いて邪なものを討つ彼らの名は——。

（レイドリベンジャーズのユナイトギア装着者……！）

条件—リクエスト—

「余計なお世話……でしたか？ マスカレイダー」

不敵な笑みを浮かべながら振り向くのは、虹色の髪と瞳を持つ竜のような少女。その巨大な翼と蛇のような下半身は、間違いなく対レイダー兵器『ユナイトギア』によるものだ。

そしてユナイトギアを纏う戦士がこの場に居るということは、彼女がレイダーに対抗するための勢力『レイドリベンジャーズ』の一人であることを意味している。

「……………」

「沈黙、ですか。まあいいでしょう。レイドリベンジャーズであるあたしが、レイダーである貴方の前に現れたということは、本来なら剣を交えるべきなのですが……おおよその状況は聞いています。そちらに敵意がないのなら、ひとまずここは共闘といきませんか？」

「……………」

「迷いのない首肯は有難いです。では、一時的なものではありますがよろしくお願います。レイダーはこのA—06ポイントからA—08ポイントに向かって……と、エリ

アポイントはわかりませんよね。ここから南南西に向かつて一直線に進行中です。既に他のレイドリベンジャーズが迎撃準備を整えているので、我々は追い込みながら合流します」

声を出せば個人を特定される可能性がある。そう考える叶枝は、マスカレイダーの姿での会話を避けるためジェスチャーのみでコミュニケーションを計る。

幸いなことに、このレイドリベンジャーズはマスカレイダーに対して明らかな好意も悪意も抱いていない。「状況は聞いている」という発言からして、おそらくマスカレイダーとの交流を目的として派遣されたのだろうと叶枝はアタリをつけた。

事実、彼女はそうした目的のために遣わされた者であり、叶枝の判断は結果的に正しいものであった。しかし反面で自発的な発言ができないせいで、彼女がどんな人物であるのかもわからなかった。それは内面だけでなく、名前ひとつにしても同じことが言える。

（やっぱプロは手際がいいな。レイダーに対抗する手段を持っているという点では同じはずなのに、避難誘導を進めながら敵勢力の規模と行動ルートの把握、必要量の戦闘部隊の派遣まで行ってなおマスカレイダーにまで人員を割く余裕があるってのは、さすがに個人おれたちじゃ逆立ちしたってできそうにない）

個人と集団。数の差は「できること」の差だと誰かは言う。一人でできることを、二

人なら単純に二倍できる。それが「集団」や「団体」と呼べるだけの人数になれば、当然その数に比例して「できること」は増えていく。

まして「できること」に個体差があるものが集団となれば、それはもはや単純な足し算では数え切れない。1+1が10にも100にもなる。それが集団の最大の強みなのである。

そして、その集団を構築する個人個人が熟練されたプロフェッショナルたちであるのなら、もはや個人との差は比較にもならない。どう足掻いても「個人」の範囲を越えられないマスカレイダーは、それを痛感せざるをえなかった。

「あと五分程度で追跡中のレイダー群に追いつきます。ですが目的地となるポイントに追い込むまでこちらからは攻撃せず、誘導と監視に留めてください。無暗に相手を刺激することでレイダー群が散開し、被害の拡大が予想されます」

「……………」

無言のまま首肯で返し、緊張感の指向性を戦闘時のものから索敵時のものへと切り替える。するとマスカレイダーの表皮が敏感にレイダーが孕むネガティブな感情を察知し、おおよその位置と距離を掴む。

同行するレイドリベンジャーズの言う通り、移動速度はこちらが勝っており、このままの速度でいけば五分、遅くとも七分程度で追いつくことができるだろう。

しかし予想外なのは数であった。先ほどまで居たポイントでは14頭ものレイダーがいたことに對し、彼らが今追っているのは僅か6頭程度の少数勢力。先程の彼女の口ぶりから、これが「追撃戦」だとすると――。

（俺たちが對峙したのは間違いなく本隊ではなかつたはず。もしそうなら俺たちより先にレイドリベンジャーズが到着していたはずだし、援軍はもつと早く多かつたはずだ。ということとは、この短時間で最低でも20頭以上の敵部隊を片付け、残党となるこの勢力を追い込むところまで持つて行つたということか）

つまりは、現在追っているこのレイダー群はレイドリベンジャーズの「取りこぼし」であるか、あるいは本隊から逸らすことが目的なのだろう。

しかし、そうなると今度は「取りこぼし」というものに対して疑問が残る。これほどまで迅速かつ周到にレイダーを追い込み、そして仕留めることのできる組織が、なぜ「取りこぼし」などを出してしまつたのか。

本隊から逸らすことが目的であるとしても、これほど長距離に及ぶ必要はないはず。これでは引き剥がすというよりも隔離と称した方が――、

（――まさか）

脳裏に浮かぶのは幾つかの無関係なワード。「一時休戦と共闘」「同行するレイドリベンジャーズ」「少数のレイダー群」「取りこぼし」――そして「隔離」だ。

表面的に見れば「本隊との交戦中に取りこぼした少数のレイダー群を迎撃部隊が待ち構え、マスカレイダーと共に誘導・監視しつつ追い込むための共闘」となるだろう。しかし、そこに「隔離」の二文字が追加されるとすれば？

突如、共に追跡をしていたマスカレイダーの足が止まり、同行していたレイドリベンジャーズが訝しむように足を止めて彼に問いかける。

「どうかされましたか？」

『俺の確認した限りではレイダー群は6頭だが、レイドリベンジャーズにとって「6頭のレイダー」というものは「被害範囲の拡大を留めつつ対応できないほどの勢力」なのか？』

バトルデバイスから投影された小型モニターに表示された文章を見た瞬間、相手のレイドリベンジャーズは表情はそのままに、しかし言葉を詰まらせた。ポーカーフェイスこそ一級のものだが、肝心な言葉が出ていない。それだけで判断材料としては十分だった。

緊張感の指向性を再び「臨戦態勢」へと切り替えたマスカレイダーは、そのまま身構えながらレイドリベンジャーズを睨む。しかし相手は何も言わないまま無表情だった口角を上げ、満足気に微笑む。

『目論見が明らかとなったことで本性を現したか』

「ふふっ……いえ、そんなことはありませんよ。ただ「やっぱり」と思っただけです。相手がただの一般人ならともかく、あなたのような頭の回る相手では無意味な作戦だと思っていました。あー……いえ、もしかすると彼的にはそっちが本命なのかもしれませぬね。あなたに危機感を与えるには十分な効果ですから」

『……どういう意味だ』

「簡単なことです。半分ほどはあなたの言う通り。「これ」はレイダー追撃作戦ではなく、マスカレイダー捕獲作戦です。たった6頭程度のレイダーなら、レイドリベンジャーズ一人……新人でも二人いれば十分対処可能ですからね」

マスカレイダー捕獲作戦。

レイドリベンジャーズに対し、明確な敵意を見せていないマスカレイダーを、レイダーの追撃という名目を餌に誘き寄せ、徹底した戦力をもって攻撃・捕獲することを目的とした作戦。

しかしこの作戦において被害を被るのはマスカレイダーだけではない。レイダーを意図的に逃がすという作戦は、民間人に及ぶ危険性を見逃すということでもある。

『卑怯者め……』

「確かにあなたから見ればレイドリベンジャーズの評価は地に落ちたことでしよう。でも勘違いしないでください。この作戦が認可されたのは、他でもないあなたのためなの

だということを」

「こうした作戦をとることで俺に危機感を与えようということか。詭弁だな。作戦がバレた時の負け惜しみで恩を押し売りしているようにしか聞こえん」

「無論、そうした意図がないわけではありませんが、それだけではありません。この作戦を提案したのはレイドリベンジャーズの中でも特にレイダーに対し強い憎悪を持ち、あなたのような意思疎通が可能な相手に対してもその姿勢を崩さない、いわば「過激派」と呼ばれる者たちです」

過激派の活動はしばしば民間人への被害も顧みず徹底的にレイダーへの攻勢を崩さない姿勢や、人命救助を優先すべき状況でもレイダーとの戦闘に固執するスタンスを持ち、予てよりレイドリベンジャーズへの不信感を買っていた。

しかし基本的には個人個人のスタンスであるために、そうした過激派に対してまとめて処罰を与えることはできていなかった。そのため、今回の作戦でそうした過激派を炙り出し、その副次的な目的としてマスカレイダーへの警戒心を与えることを狙っていたのだ。

「今回の件で過激派の大部分がリストアップできました。もちろん個人のスタンスに組織として強く口出することはあまりできませんが、既にこれまでの経過からも許容できる範囲を大きく逸脱しています。嚴重注意くらいでは済まない程度には、ね。あなた

には不快な思いをさせましたが、これも巡り巡って民間人のためと思っただけならば幸いです」

『……お前たちの目的は理解した。納得できる理由だと言える。だが騙されて気分のいい奴なんていないってことくらい、そつちも理解できるだろう』

「もちろんです。非礼を詫びた上で、良識の範囲内でそちらの要求をひとつだけ聞きましよう。上層部からその程度の融通は認可されていますし、情報部としてマスカレイドーが現時点では安全な存在だと流布することも可能です」

『俺がどんな存在であるかはお前たちが決めることじゃない。それは俺を見た人々が各々の判断で決めるべきことだ。それよりも——』



「——で、本当によかったのかい？ あんな約束を取り付けたりして。あれじゃあ向こうにメリットがありすぎる。表面だけの話をして損得は明らかにこちらがマイナスだ」

「いいんだよ。こつちに敵意がないことを伝えることの方が最優先だ。そうすれば今回みたいに過激派が動いても俺たちが何をする必要もなくレイドリベンジャーズがどう

にかしてくれる。それにレイドリベンジャーズの内部と個人的なパイプを作れただけでも十分なメリツトだ。向こうは監視しやすくして万々歳、俺らは守ってもらえて万々歳。だろ？」

「それだけで済めばいいけど……そんな簡単に始末がつく問題じゃないと思うんだよなあ。うーん、後で『お母さん』に相談しようかなあ。あー、でもあんまり頼りすぎても『家族』の掟に反するし……相談するなら『兄弟きょうだい』にしようかな」

「毎回思うけどお前の『家族』ってなんなの？ ヤのつく組の義兄弟的なアレなの？」
レイドリベンジャーズの少女と別れ、菊菜の待つ喫茶店へと戻る途中、叶枝と望夢は先ほど提示した『要求』についての話をしていた。

内容としてはシンプルなもので、「マスカレイダーの活動を妨害するか否かはレイドリベンジャーズの判断でもらう。ただしマスカレイダーがそれに従うかは別であり、代わりにレイドリベンジャーズとの交流は可能な限り受け入れる」というものであった。

それはつまりレイドリベンジャーズ側からすれば「監視・干渉は好きにしている」というもので、逆にマスカレイダーからすれば「干渉に反発する権利だけは保ちつつ、レイドリベンジャーズをある程度まで受け入れる」ということ。どちらの方が明確な利を持つかなど、考えるまでもなく答えは出ていた。

レイドリベンジャーズという組織——つまり「集団」の力を得られるとはいえ、彼らの活動内容は基本的に民間に対してオープンだ。もちろん組織の中枢に関する情報までは出回らないが、主な活動内容や活動目的はつきりしている。主戦力であるユナイトギアの存在も公表されているため、組織として表に出る情報は全てマスカレイダーも知るところだ。

しかしマスカレイダーの情報となると、これはレイドリベンジャーズの大部分が知ることのないものだ。情報部ならば彼らの正体や、その個人情報まで押さえている可能性もゼロではないが、それでも大多数はマスカレイダーを「明確な敵対意思を見せないレイダー」程度にしか認知してはいないはずだ。

ともなれば、交流を深めることでより多くの情報アドバンテージを取られるのは間違いない情報はまだ出し切っていないマスカレイダーの方であり、レイドリベンジャーズは既に公表している情報にプラス末端団員の情報が流れる程度なのである。

「まあ家族の話はまた今度にして、それよりも今はマスカレイダーとしての活動について……って、ああ、この話もここまでにしよう。桐咲ちゃんがこっちに気付いたみたいだ」

互いに並んで向けあっていた視線を前に戻せば、先ほどの喫茶店のテラスで大きく手を振りながら笑顔を向ける菊菜の姿が見て取れた。

さすがに店の前で待ち続ける気はなかったのか、優雅にお茶とケーキを楽しみながら文庫本を片手に待っていたようだ。

「……ん？ あれ、あの一带は緊急警報アラートこなかったのか？」

「菊菜ちゃんだけなら前回もそうだったからわかんないけど、お店が普通に営業してる
ところから見てそうなんじゃない？ 店員さんどころかお客さんものんびりしてるし」

「レイダー出現地域、ここからそんなに離れてないはずなんだが……」

脳裏にちよつとばかりの引っかかりを感じながらも、二人は手招きをする菊菜の元へと駆け出した。

報告—スパイ—

「……あ、もしもし？ 望夢のぞむだよ。……うん、兄さんの声も久しぶりな気がする。……う

ん、うん……。あ、いや、そういうわけじゃなくて、ちよつと相談があつてね。実は—
—」

その日の夕方。菊菜きくなとのシヨツピングを終えて男子寮に戻ると、そのまま食堂に直行する叶枝かなえから離れ、自らの所属する『絆フアの家族ミリエ』の兄妹の中でも特に望夢が信頼する長兄へと連絡をとつていた。

直情的で大胆な行動の多い長兄は、思慮深く慎重で堅実な長姉や次女と比べられ、彼女らと比べると他の弟妹からは信頼が劣るものの、ストイックでカリスマやリーダーシップに溢れる姿勢には次男も強く憧れていると聞く。もちろん、望夢もだ。

そんな彼から、今回の様々な思惑や策略が交錯する事件の概要を一部誤魔化しながら説明したところで、具体的に何をどうしろという助言が得られないことはわかつていゝる。しかし、今欲しいのはそんな言葉ではない。もつと大きな視野から見た、ここからどのような心持ちで対応していくか。そんな自分自身の意志と意思の確認がしたかったのだ。

十分ほどのやり取りを終え、新型のポケットホンの画面を閉じると、彼はただ「まあ、そうだよな」と小さく零した。兄からの激励は、結局のところわかりきっていた答えだ。いつものように明るく力強い声で、ただ「自分で正しいと思ったことをやれ」と告げられた。

視野におけるマクロやミクロは関係ない。自分の行動に必要な意志や意思を決めるのは、他でもない自分自身だ。それを抱くまでの勇氣こそ与えられても、それそのものを誰かからもらうことはできない。故に兄の言葉は、「自分の信じる正しき」に自信を持たせるためのものだった。

今回の事件、自分たちがマスカレイダーと呼ばれる特殊なレイダーである以上、レイドリベンジャーズという存在が大衆的な「正義」であることは疑う余地もない。しかしだからといって、自分たちの正義まで否定される筋合いもない。

正義とは立場によって大きく形を変える。故に、叶枝と望夢が持つべき正義とは大衆から授かるものではなく、あくまで自分自身で見出した「自信」——自分を信じる心と、自分が信じた正しき。それこそが二人が絶対に揺らいではならない正義となるのだ。

「……マスカレイダー、か。思えば、こんな力さえなければ叶枝を巻き込むこともなかったのかな。……でも、この力がなければ自由に自由はなかった。だったら、悔いるなら叶枝を巻き込んだ自分の弱さ、かな……」

東条望夢の生い立ちは、平凡と呼ぶにはあまりにも波乱万丈なものであった。

要注意組織のひとつ、『I', s^{アイズ}』で行われた人体実験の被検体として生まれた試験管ベビーである彼は、「284の失敗の結晶」あるいは「285番目の奇跡」として様々な研究に用いられた。

その中のひとつである、レイダーの因子を持つ人類——即ち『レイダー人間』を作る実験で、彼は今の「マスカレイダー」としての力を得た。

しかし負の感情を糧とするレイダーの因子と、それまでの経歴からあまりにも多くの悪感情を孕んでいた彼の精神は過剰に適合し合い、一種の暴走を引き起こしてしまつた。

その暴走事件の果てに、彼が所属していた『I', s』の研究施設が崩壊。望夢は溢れ出る悪感情を強引に抑えながら表社会へと放り出された。

そして、数か月の旅の果てで、ついに力尽きようとしていた時、ひとりの女性が彼に救いの手を差し伸べた。だがその手を掴もうにも彼は既に満身創痍。諦めて目蓋を閉じようとした時、自分と女性の手を繋いでくれたのが、叶枝であった。

叶枝は二人の関係も状況もさっぱりわかっただけでいかなかったが、望夢が女性に引き取られていくまで繋いだ手を離さずにくれた。その時の繋いだ手の温かさを、柔らかさを、優しさを、望夢は未だに覚えている。

あの日あの時、叶枝が自分と母と繋いでくれないければ、今の自分はいなかったかもしれない。母は優しい人だが、差し伸べた手を掴もうとしない者を救うほど甘いわけではない。

だからこそ——そんな叶枝を巻き込んでしまった「あの夜」ビギンズナイトを、望夢は忘れることができない。

もつと自分を制御できていたら、もつと自分を律することができていれば……あの夜、叶枝をマスカレイダーにすることはなかったはずなのだから。

「ぼくはいつだって叶枝に甘えてばかりだ……」

「何一人でブツブツ言ってるんだお前。メシだぞメシ、さつさとしろ」

ぼつりと呟いた言葉に、背後から気楽な声がかけられた。振り向くまでもなく、先に食堂へ向かったはずの叶枝だとわかった。そう長くなる予定のなかった連絡に加え、少し考えこんでいる間に30分が経過していたことによく気付く。どうやら妙に到着の遅い彼を呼びにきたようだ。

先に食べてしまっただろうか、とも思ったが、「さつさとしろ」という言葉を聞く限り、そうではないようだった。さも当然のことのように、箸を手取ることなく望夢を連れに来たのだろう。叶枝にとって、それは決して特別なことではなかった。

いつも一緒に食事をとる相手が来ないから呼びにきた。一緒に食べるのなら食事に

先に手を付けることはしない。それが彼にとつての「当たり前」だということ、望夢も理解している。しかし——いや、だからこそ嬉しいのだ。

「ああ、ごめんごめん。今いくよ」

「つたく、独り言ならメシ食いながらでも言えるだろ。ほら、行こうぜ」

そう言つて差し出された手を、望夢は一瞬まじまじと見つめて、また叶枝に怪訝そうな視線を向けられた。だが『今度』はもうその手を握ることに迷いはなく、当たり前のようにその手を掴んで彼と共に駆けだした。



同時刻。桐咲菊菜は女子寮ではなく、多くの機械と巨大なモニターに囲まれた一室で、数人の大人たちと話していた。その中には、先程マススライダーと行動を共にしていた虹色の少女も見受けられた。

その場の誰もが緊迫した雰囲気を感じている中で、菊菜は動じるどころか緊張した様子もなく、いつもの砂糖菓子のような甘い笑顔のまま、虹色の少女から受け取ったコーヒ―を口に出している。

「……経過報告はひとまず目を通したわ。私としても、政礼支部の大部分のレイドリベ

ンジャーズとしても、現時点ではあなたの報告に納得もしている。けれど、問題はここからよ。彼らがどうしてマスカレイダーとなったのか、そしてどうして政礼町に留まっているのか。それを解明しなければ、政礼支部としては彼らを放つてはおけないもの」「だよねえ。けど現状じゃまだわたしは出会ったばかりのオトモダチだもん。そうそう簡単に根っこを掘らせてはもらえないのは仕方ないと思うんだけど……まあ上層部はせつちかだから、仕方ないかな。けど本当の身分を隠しながらの任務だから、手間が増えることも察してもらいたいよね」

真つ先に口を開いたのは、部屋が一番大きなデスクにお気に入りの紅茶を置いて革製のオフィスチェアに腰かける小学生ほどの背丈の少女。誰が見ても子供にしか見えないうその容姿とは裏腹に、その厳かな雰囲気や凛とした表情は、間違いなく一流のレディであることを感じさせている。

そんなレディを相手に、菊菜はマイペースなまま——しかし重みのある声で返事を返す。互いに見せる態度は慣れ親しんだ柔らかさを見せているのに、交わす言葉には業務的な堅苦しさが匂うその様相は、誰が見ても違和感にまみれた光景だろう。

「あなたが「普通の女子高生」である以上、共に戦うことはできないものね。戦おうとすれば「この秘密」を明かさなければいけないから本末転倒だし……かといって共に戦わない相手に「そういう」話をするほど彼らは迂闊ではないはずだわ。やはり、もう少し

気長にやるしかないみたいね」

「まっ、そうなるよね。ただでさえ望夢くんはわたしのことを警戒……ってほどじゃないけど、疑ってるみたいだから、下手したら全部が台無しだもん。それに、望夢くんが疑ってるから叶枝くんは警戒心を解いてるみたいだけど、二人のやり取りを見てる分だと、いざって時に警戒心が高くて頭が回るのはむしろ叶枝くんの方っぽいね」

「本当はあなたに行かせるよりも身丈の低い私の方が彼らの警戒心を解けるはずだけれど……まあ、私の名前と姿はなにかと知られているものね」

「……まあ、有名だもんね。パツと見だけじゃ子供みたいだし」

互いに苦笑いする彼女たちを、周囲はただ無言で見守る。おそらく菊菜からの報告を元に、この後で対策会議を行う面々だろう。菊菜自身も見慣れた顔ぶれがいくつか並んでいる。

そんな中で、数人の男性が二人に——いや、おそらく菊菜の報告を受けている小柄な女性に向けて手を挙げた。

「話の最中ですまないが、今回の報告の要点をまとめたので確認していただきたい」

「了解しました。こちらの端末に送ってもらえますか？」

「はい。……完了しました」

「ありがとうございます」

先ほどまでの柔らかい表情を潜め、真剣な目つきで仮報告書の内容に目を通すと、小柄な女性は「概ね了承」という意味の首肯を男性らに返す。

すると男性たちは素早く端末のキーボードを叩き、小柄な女性の端末に「報告許可申請」の文字が表示された。

「許可、と……。では、菊菜はもう下がっていいわ。あとは私たちで今後の対応を決めておくから。……ひさしぶりの学園生活、楽しんできなさい」

「了解ですっ！ じゃあ、次に会えるのは何もなければ今度の定期報告でかな。じゃ、またねっ！ みなさんもおつかれさまです、がんばってくださいねっ！」

そう言うと、菊菜は小柄な女性の頬にキスをしてその場を去っていった。

その光景は何も知らない者が見れば、親しい友人たちの明るいスキンシップなのだが――。

「……キッツい」

「あら？ あなた女性同士のああいうスキンシップは苦手だったかしら」

「いえ、別に同性愛なんて今どき珍しくもないんでそこは大丈夫なんですけど、桐……咲先輩のアレはちよつとこう、慣れが……」

「ああ、あなたあの子のアレまだそんなに見たことなかったのね。大丈夫よ、すぐ慣れるわ」

困ったような様子で苦笑いする虹色の少女に、小柄な女性は手元の端末に視線を向けたまま返事を返す。

彼女たちの言う「アレ」とは菊菜の態度や言葉遣いのことなのだが、虹色の少女はどうにもそれが受け入れられないらしく、頭を抱えているようだ。

「……さて、じゃあ早速だけでも会議を始めましょう。菊菜の大好きなハッピーエンドへ向けて、ね？」

不和—アンマッチ—

（共闘して初めてわかった。レイドリベンジャーズって化け物集団だわ。何あの動き。ユナイトギアがあるとはいえ当然のように弾丸と同じくらしいの速度で迫るレイダーの触手を回避するし、ましてそれを掴んで引き寄せて殴り飛ばした奴まで居ただけど頭おかしいだろ）

両者の合意の下、正式な合同作戦となった今回のレイダー討伐戦、マスカレイダーは改めてレイドリベンジャーズの戦力と、それらをまとめ上げる統制能力の高さに驚愕していた。

対レイダー戦とあって、攻撃に関してはやはりレイドリベンジャーズの足元にも及ばない。彼らはレイダーに対して特効性のあるユナイトギアを用いており、単純な打撃だけでもレイダーに甚大なダメージを与えられるからだ。

しかし反面で、防御に関してはマスカレイダーが優秀だといえる。マイナス感情を一切遮断するタイプアルファの感情因子傾向が一番の理由だが、それだけでなくレイダーの動きを本能的に知覚できるレイダーとしての第六感が、彼らの動きに先んじてレイドリベンジャーズのフォローにうまく働いていた。

『……………ッ！』

「フオロー助かる！ 悪いがそのまま捕まえてくれッ！」

押し寄せる数体のレイダーを両の腕で受け止め、その後方で戦っていた槍使いのレイドリベンジャーズを庇う。すぐさま目の前の敵を片付けた彼に驚きながらも、マスクレイダーは受け止めていたレイダーたちを空中へと放り投げ、それらを槍使いの男がまとめて屠る。

「ナイスフオロー。ここらはもういい、向こうで戦ってる部隊と合流し、そっちをフオローしてくれ。あそこはまだ新米のレイドリベンジャーズが数人いて危なっかしいからな」

「……………」

こくり、と頷き、槍使いの男に背を向けて走り出そうとすると、その男がふと思いついたように「それと！」と声をかけた。

注意事項でもあったか、と思つてマスクレイダーが振り向くと、彼は快活そうに笑う

と――

「ありがとな。頼んだぞ、戦友」

「……………ッ！」

そう言い残し、その場を去って行った。

マスカレイダーにとって、今回の合同作戦は両者の溝を埋めるための形式的な共闘でしかない。自分がレイダーである以上、レイドリベンジャーズには恩を売る必要があり、また信用を買う必要もある。そのための共闘であつて、善意や正義感などによるものではない。

互いの利害が一致しているがためのギブ&テイク。なのに、槍使いのレイドリベンジャーズはマスカレイダーに対して嫌味のない感謝を口にした。社交辞令的な挨拶のようなものかもしれないが、だとしても——マスカレイダーにとってその言葉はどうしようもなく嬉しかった。

次の合流地点へと駆け出す足に力が入り、その身は羽のように軽やかであるようにも感じた。これほど浮かれてしまえば、戦場で何を莫迦なことを、と言われても仕方がない。だがそれでも、彼は嬉しかったのだ。

(……なあ望夢。俺たちは今までレイダーに対する復讐心と、そしてこの街への恩を返すためだけにレイダーと戦ってきた。誰も巻き込まず、誰も傷つけないように、二人^{ひと}だけで。それに後悔はないし、それでよかつたと思つてる。だけど……仲間と共に戦うつてのも、存外悪くねえもんだな！)

肉体を叶枝に預け、意思という主導権を彼に預けている望夢が答えることはない。し

かし、それでも繋がっている叶枝にだけは、望夢の感情が伝わっていた。

『うあああああああつ！』

（チツ、休ませてくれねえなあ！）

耳を劈くように届いた悲鳴に、マスカレイダーは迷うことなく駆ける足を急がせた。到着まで一分とかわからず視界に飛び込んできたのは、一人の若いレイドリベンジャーズがレイダーに組み敷かれているところだった。

間に合うか、と半ば賭けにも等しい気持ちで繰り出した飛び蹴りは、鋭い鎌のような突起がレイドリベンジャーズに届く寸でのところでレイダーを突き飛ばし、若いレイドリベンジャーズはすぐさま立ち上がって鎖鎌のような形状を持つ簡易型ELBシステムを構えた。

間に挟まれるように立ったマスカレイダーが無言のままに目配せすると、若いレイドリベンジャーズはどこか苛立ちを見せるような表情で、しかし何も言うことなく頷いた。

『……………ッ！』

威嚇か牽制か、どちらにせよ対峙する二人に対してはなんの意味もなさない咆哮を上

げると、二足歩行型レイダーはマスカレイダーへと迫った。

しかし今回の共同戦線でレイドリベンジャーズの動きを観察していたマスカレイダーにとって、レイダーの動きはあまりにも鈍い。あちらが駆け出して五歩と進めぬうちに、マスカレイダーの拳はレイダーの胸を穿ち貫いていた。

マスカレイダーの繰り出した必殺の一撃「鉄拳星碎」てつけんせいさいは、今のような直線的な軌道しか描けず、かつある程度の助走をつけなければならぬため、飛行型のレイダーや高速機動が可能なレイダー、あるいは大量のレイダーを相手取る時にはまったく使えないが、今ばかりは最善の一手であつた。

「……………」

周囲に増援がないことを確認すると、マスカレイダーは左腕のバトルデバイスに短く「無事か?」とだけ入力し、それを若いレイドリベンジャーズに見せた。しかし彼は俯いたままバトルデバイスの文字にも気付かず、手にした鎖鎌をマスカレイダーへと投げつけた。

簡易型とはいえプラスの感情を増幅し威力と換えるELBシステム。すぐさまマスカレイダーはそれを弾き、後方へと跳び退いた。防御のために必要なアクションではあつたが、ただ触れたただけの手から焦げるような匂いと灰色の煙が洩れ、灼けるような熱さを感じられる。

これがELBシステムか、と戦慄する間にも、若いレイドリベンジャーズは憎しみのいや、怒りの込められた視線をマスカレイダーへと向けている。

今回の作戦には、前回のマスカレイダー捕獲作戦に同調しなかったメンバーだけが採用されているらしいが、それは決して今回の作戦に参加しているメンバー全員がマスカレイダーを受け入れているという意味ではない。

前回のあれはあくまで目の粗い篩をかけただけに過ぎない。レイドリベンジャーズはレイダーから市民を守るための組織だが、所属しているレイドリベンジャーズの中には単にレイダーへの憎悪や怒りから、その「手段」であるレイダー殲滅を「目的」としている者も少なくはない。

そして、マスカレイダーもまた人としての意識を持つていたとはいえ、肉体はレイダーそのもの。故にマスカレイダーをレイダーと同一視して憎む者がいても、それを否定することはできないのだ。おそらく、目の前の彼もそうなのだろう。

「マスカレイダー……!! レイダーの成り損ないが、僕を庇うだつッ! バカにするなッ! 簡易ELBシステムしか与えられずとも、僕はレイドリベンジャーズだッ! 無情のままに人類を殺めるお前たちレイダーを叩き潰し、殲滅するッ! レイダーに魂を売った人類の恥晒しに庇われるくらいなら、あのまま死んでいた方がマシだッ!」

「……………」

怒りの叫びのまま、若いレイドリベンジャーズは再び鎖鎌をマスカレイダーへと向けた。

さすがにELBシステムの脅威性を理解した以上、もう二度目を受けるわけにはいかない。マスカレイダーは左肩のプロテクターを構成する羽根をひとつ引き抜き、それを投擲することで攻撃の軌道を変えた。

ここで反撃に転じてしまえば、ただでさえ立場の危ういマスカレイダーの評価は地に墜ちる。故に、すぐにでもこの場を離れてこのレイドリベンジャーズが同行していた部隊に合流できれば、それが最善手だ。無論、そう簡単に逃がしてくれるかは怪しいところだが。

「……………」

「隊長からは合同作戦だから意気投合せずとも最低限の協力はしろと言われているが、今となってはそんなことどうだっていい！ 友をレイダーに奪われレイダーを殺すために得た力と技術だ！ ここでレイダーを仕留めずなんのための僕の人生かッ!!」

今度は鎌だけでなく鎖もろとも大きく振ると、先程とは比較にならないほどの広範囲へとプラス感情の矛が振るわれた。いくら防御性能に優れようと、いくら攻撃をいなす技術に秀でようと、これほどシンプルに範囲を広げられてしまえば防ぎようがない。

後退ではかわしきれない。屈めば続く反応に遅れが生じる。跳んでしまえばそれこ

そ逃げ場を失う。となればできることは前進。マスカレイダーは振り回す鎖鎌が彼の手を離れる前に、彼の体勢を崩さんと迫った。足さえ払えれば、相手の体勢が崩れてい
る間に逃げ切れる。

しかし、そんなことは戦いのプロフェッショナルであるレイドリベンジャーズが一番よくわかっていた。若いレイドリベンジャーズは、マスカレイダーが足元へスライディングしようとする姿勢を低く構えた瞬間を狙い、鎖鎌の軌道を縦へと変え、振り落とした。

頭上に落ちる天敵。^{ELBシステム}自ら最悪の体勢へと崩れたマスカレイダーに、これをおかわす術はない。

「消えろオオオオッ！」

「……………ッ!!」

理解—ストライフ—

「消えろオオオオツ！」

「……………ツ!!」

振り下ろされる天敵^{ELBシテム}に躲す術を失ったマスカレイダー。だがその凶刃が彼を切り裂くよりも早く、一筋の光がそれを阻んだ。

鎌の根元を繋ぐ鎖の輪を射抜くように地面へと突き刺さったのは、紫色の布装飾が施された一本の短剣^{ダガー}。それを見た若者のレイドリベンジャーズは、視線をマスカレイダーからビルの屋上へと逸らす。

マスカレイダーもまた警戒しながらレイドリベンジャーズの視線を追うように顔を上げると、そこには小学生程度の身丈をしたレイドリベンジャーズが二人を見下ろしていた。

「…………永岑市の第二部隊長か。レイダー駆除の邪魔とはなんのつもりだ！」

「なんのつもり、はこちらのセリフだと思うのだけれど。今回の作戦はマスカレイダーとの共同戦線。私情を挟むなどは言わないけれど、せめて作戦中は指示に従ってもらわないと困るわ」

「レイダーを殺すためにレイダーと共同戦線なんてありえない！ それに僕は政礼支部のレイドリベンジャーズだ！ あんたの指示に従う理由はない！」

「作戦の指示に従わないだけでなく作戦の概要をまるつきり聞いていなかったのね……。今回の作戦の指揮には政礼支部第一部隊長と永岑支部第二部隊長の私が請け負っているの。だからあなたは私の指示に従う義務がある」

溜息ながらに頭を押さえると、その少女のようなレイドリベンジャーズはビルから飛び降りて二人を遮るように立つ。

その視線は若者へと向けられたままだが、手にした短剣は両者のどちらにも向けられないように、常に威圧感と緊張感が漂っている。

「マスカレイダーは肉体こそレイダーのものだけけど、現時点では明確な自我を持ち、私たちに協力してくれている。ならばこちらも誠意ある態度で協力するのが筋というものではないの？」

「レイダーに筋を通す必要などないッ！」

「……これは対話でどうにかなる様子ではないみたいね。なら、少しお灸を据えてあげるとしましょう。マスカレイダー、あなたはこの先にいる彼の部隊と合流してサポートしてもらっていいかしら？」

少女は体を半身のまま顔をマスカレイダーへと振り向くと、その隙をついて放たれた

鎖鎌を振り向きもせず防ぎきり、余裕のある微笑みを向けた。

マスカレイダーは少し考えて、「任せてもいいのか？」とバトルデバイスに入力すると、彼女は軽く頷き、若者のレイドリベンジャーズへと向き直る。

「……………」

「逃がすかッ！」

「通さないし、あなたこそ逃がさないわよ」

駆け抜けるマスカレイダーを庇うように立つ少女に、若者は怒りを露わにする。

「今回の行動は立派な命令違反。再三に渡る説得および忠告にも耳を貸さなかったとなると、ちよつとやそつとのお叱りでは反省しないでしよう？」

「邪魔をするなッ！ 支部は違えど仮にも部隊長だろう！ ならなぜレイダーの味方をする！ 貴様それでもレイドリベンジャーズかッ！」

「ええ。私はレイダーを駆逐するためではなく、市民の平和を守るためにレイダーと戦うレイドリベンジャーズ。市民を守ってくれる存在であるのなら、たとえば彼がどんな姿であろうとレイドリベンジャーズの味方として受け入れるわ」

漆黒に妖しく光る短剣を手に、市民の味方はレイドリベンジャーズレイダーの天敵と対峙する。

どちらが正しくどちらが間違っているわけではない。どちらも正しいが故にどちらもが反発し合う。だからこそ衝突に言葉は意味を為さず、手にした力をぶつけ合うし

かない。

叶えられる「正しさ」はひとつだけ。そのひとつを掴むため、二人の望みが牙を剥く。



若者の相手を少女に任せて走り抜けた先でマスカレイダーが見たのは、12メートル近い巨体を持つ超大型レイダーを涼しい顔で討ち倒し、軽い休憩を挟んでいる数人のレイドリベンジャーズたちの姿だった。

ワイヤーで雁字搦めにされ、首と胸を切り離されて横たる巨人型レイダーは、他の部位にまったく損傷が見られないところを見ると、おそらくほとんど一瞬で仕留められたのだろう。

「おつ、お前さんが噂のマスカレイダーってやつか。悪いな、見ての通りお前さんの見せ場はもうなさそうなんだ。他の部隊……つってももうそろそろどこの部隊も同じような感じだろうな。コーヒーくらいなら出してやれるが、お前さん口ねえからダメだな。まあゆつくりしてけよ」

「てゆうかマスカレイダーさんの方に新入り行かなかったか？ あいつレイダー見ると見境ないツスけど、マスカレイダーさん大丈夫ツスか？」

「…………ああ、会話は筆談なんだ。えーっと…………「小学生くらいの少女が逃がしてくれた」って…………ああ、永岑支部の第二部隊長さんですね。ならまあ心配なさそうでひとまず安心安心」

無精髭を伸ばした男と、軽薄そうな少年、そして朗らかな少女が、遠慮なしにマスカレイダーへと詰め寄る。おそらくこの三人と先程の若者でひとつの部隊なのだろう。

マスカレイダーはやや困惑しながらも、いつものようにバトルデバイスを通して会話を進めた。するとやはり、先程の若者はレイダーを誘導・追跡中、本流から逸れた数体を追ってはぐれたのだという。

「悪いな、マスカレイダー。決してお前さんが悪いわけじゃないが、あいつもあいつで家族をレイダーに殺されてる。だがお前さんに非がなくとも、レイダーを恨む奴がお前さんを恨むことも、ひとつの当然ってやつなんだ。決してそれを「仕方ない」とは思わなくていいがな」

「わたしたちも昔はあんな感じだったしね。マスカレイダーさんには申し訳ないけど、あなたがもう少しレイドリベンジャーズ全体に認知されるまでは、我慢してあげてくれないかな。時期がきたらほっぺのひとつくらいひっぱたいてもいいからさ」

「……………」

彼らの言う通り、マスカレイダーとレイダーの本質は同じものだ。負の感情を糧とし

て肉体を成し、負の感情を力と振るう。決定的に異なるのは、心の有無だ。他者を尊び、他者を思いやり、他者を守ろうとする心があるか否か。

しかし感情は形のないものだ。誰にどう伝えても、伝える手段が言葉である以上、その言葉を疑われてしまえば感情は真の意味を伝えきれない。だからこそ、マスカレイダーがとるべき行動はひとつだ。

今の立場ではレイドリベンジャーズの多くはマスカレイダーを心底から信じきれない。だから言葉も気持ちも伝わりきらない。ならば、信用を得ればいいのだ。

マスカレイダーとしてレイダーと対峙しながら、レイドリベンジャーズの信用を得て自分の想いを伝え、次はレイドリベンジャーズだけでなく周囲に居る多くの人々に、マスカレイダーが味方なのだと知ってもらおう。

今のままではよくても「敵ではない」止まりだ。そこから「味方」だと知ってもらうために――マスカレイダーという存在を受け入れてもらうために、二人は自分^{かれ}の醜さと戦い続けるしかないのだ。

たとえその道の途中で、どれほど多くの人々の醜さを目の当たりにしようとも。

「すげー関係ないツスけど、マスカレイダーさんってオスなんスか？ それともメス？」
「ほんとに関係ない上に唐突だねー。というかオスメスって言わないであげてよ。ガワはこうでも中身は人間なんでしょ？」

「え？ 人間なのか？ 俺が聞いた限りだとレイダーの突然変異種って話だけだ」

「え？ 人間がレイダーと融合してるんじゃないの？ こう、近くにいたレイダーもぐもぐして」

おそらく場を和ませようとした少年のちよつとした質問が、不意に闇の深い沼のような意見へと混乱していく。

しかし実はこの問いに一番困ったのはマスカレイダーだった。真実としては、レイダーの遺伝子を投与された人間が一般人の意識と融合することでマスカレイダーとなつていくわけだが、そうなると彼らが「普段は人間」だということを証明してしまう。

だが安易に「レイダーの突然変異種」だと言つてしまえば、それはレイダー全体の評価を変え、レイドリベンジャーズの今後の動きを阻害してしまう要因になりかねない。

レイダーを討つというレイドリベンジャーズの使命を揺るがすことなく、自分が人間だということを隠すにはどうするか。マスカレイダーの出した答えはひとつだった。

「人工的に造られたレイダーだ」……つて、それ思いつきり違法研究じゃないツスか。あー、なんか聞いたことあるかもツス。要注意組織つてやつツスよね」

「とはいえ要注意組織といつても数があるからな……。どの組織なのかわかるか？」

「……………」

マスカレイダーは静かに首を横に振つた。

実際は『I, s』という要注意組織に属していたことを叶枝は知っているが、それを晒してしまえば望夢まで行き着くのに時間はかからない。故にこれは致し方のない沈黙だといえた。

おそらく無精髭の男はそれを察したのだろうが、沈黙の意味も同様に察してくれたように、それ以上の追及はなかった。

「……そうか。まあ出自がどうあれ今は心強い味方だ。ちよつと休んだら他の部隊とも合流する。それまで俺たちに同行するか？」

これにもマスカレイダーは少し悩んで、やや間をおきながらバトルデバイスに文字を入力していく。

「同行することに異議はないが、先程の彼との衝突は避けたい。お前たちの視野の外から追尾する形でよければ同行する」か……。それもそうツスね。永岑の第二部隊長さんも暇じゃないし、適当なところで切り上げて返してくれるはずツスから、それが平和的っちゃ平和的ツス」

「じゃあわたしたちは気付いてないフリしないですね。となるとけつこう離れてもらわないとですけど、マスカレイダーさん目なさそうですけどわたしたちのことちゃんど見えてます？」

「見えてなかったらそもそも左腕のアレをこつちに向けないだろ。まあ800メートル

くらい離れて気配消してりや大丈夫だ。そうだな……もう五分も休んだら出発だ、お前さんも準備しといてくれ」

頷いて無精髭の男と手をはたき合わせると、マスカレイダーはその場を離れた。

視界の端で先程の若者と少女による戦闘の様子も映ったが、もはや気にも留めず駆け抜けた。

握手—シエイキンハンズ—

マスカレイダーとレイドリベンジャーズの共同作戦は、その後も恙なく完了へと向かった。

無論、数人のレイドリベンジャーズからは敵意に等しい視線を向けられることもあったが、多くは作戦進行上だけの協力関係として割り切っており、その敵意が威力をもつて向けられることはほとんどなかった。

それはおそらく、彼ら一人一人の意識によるものというよりも、レイドリベンジャーズとしての指導に起因したものでろう、とマスカレイダーは判断した。

個人としての意識よりも、組織としての目的を優先すべき場合と、組織としての目的よりも個人の感情を優先すべき場合。どちらが正しいというのではなく、作戦を立案する時点で前者と後者をいつでも切り替えられるよう、作戦そのものがスイッチ式になっているのだ。

だからこそ、団員たちも不満を抱えていても納得して行動できる。理屈よりも感情を優先すべき時に、それを後押ししてくれる上官がいれば、下で支える者たちは自ずと自らを律することができるのだ。

故に、先程の若者のレイドリベンジャーズは例外的な存在だったのだろう。話を聞いた限りでは、彼を止めたのは今回の合同作戦の指揮官の一人だという。

それほどの立場にある者が前線に現れて制止の声をかけるといふことは、レイドリベンジャーズの規律としてか、それともマスカレイダーの協力体制について、いずれにしてもそれほどの重要性があつたのだ。

『こちら永岑第一部隊から本部へ。目標勢力の鎮圧を完了。指示を乞う』

『こちら本部。現在、そちらの部隊を除き、二カ所の鎮圧完了を確認済み。戦闘態勢を維持したまま、次の指示まで周囲の警戒をしつつ安全確認を徹底すること』

『こちら永岑第一部隊。目標内容を了解。二名までなら現状の安全を維持しつつ加勢に出せるが必要か?』

『こちら本部。現在のところ必要なし。心遣いに感謝します』

バトルデバイスを通じてマスカレイダーの耳に届くこの会話は、今回の作戦でのみ使用される特別な伝令回線。本来の回線と繋がず、特殊な回線をわざわざ作ったのは、仮にマスカレイダーが敵対した際に、レイドリベンジャーズ側の作戦要綱を漏洩させないためだろう。

マスカレイダーもそれを理解しているためか、一部の不自然なノイズが挟まる会話については「そういうもの」なのだろうと察している。今はまだ隔意の存在するやりとり

だが、これはまだ信用を得るためのスタートライン、あるいは第一歩だ。ことを急いで踏み外せば、信用という名のゴールには近づくことさえできなくなる。

この街を守り、レイダーへの逆襲を望むマスカレイダーにとつて、レイドリベンジャーズは敵対すれば恐ろしいが味方となればその心強さは計り知れない。ともなれば、この程度の息苦しさならば耐えることも容易い。

『こちら政礼第二部隊から本部へ。目標勢力の鎮圧を完了。指示を願いたい』

『こちら本部。鎮圧完了を了解。そちらの目標完了を以て大部分の鎮圧完了が確認されました。戦闘態勢を維持したまま、次の指示まで周囲の警戒をしつつ安全確認を徹底する』

『こちら政礼第一部隊から本部へ。周囲の安全確認を完了。異常ありません』

『こちら永岑第二部隊から本部へ。周囲の安全確認、完了。異常なし』

『こちら永岑第一部隊から本部へ。残党の小型レイダーを一頭確認。対処完了。――以上でおそらく異常なし』

『こちら本部。永岑第一部隊へ。事後報告は情報の遅延を招きます。対象を確認した時点で連絡をすること。対処完了までの迅速さについては評価できますので、今回に限り不問とします』

どうやら、今回出現したレイダー群はこれでほぼ殲滅を完了したようで、各部隊から

目標達成の連絡が入っている。

今、マスカレイダーが追跡している政礼第三部隊は、主に他の部隊のサポートをメインとしており、主戦力としては扱われていない。両支部の第一部隊と第二部隊を行ったり来たりするため、伝達はそれらの部隊が行うことになる。

現在、彼らが同行しているのは政礼第二部隊。今回の作戦では最も遅い目標達成となったが、世界有数のレイダー頻出地域である永岑の部隊は当然ながら精鋭揃いであり、政礼支部に限らずどこにおいても第二部隊よりも第一部隊が優先的に戦力強化を行われる以上、妥当な達成速度と言えよう。

むしろ、ユナイトギア装着者だけで組まれた第一部隊に対し、第二部隊は装着者と簡易ELBシステム使用者の混合部隊であり、そんな彼らがほとんど時差を開けず目標達成できたのは、彼らと彼らをサポートした第三部隊の優秀さを物語っている。

(どうやらこれで今回の作戦はほぼ完了みたいだな。本当ならこの後の安全確認パトロールにも参加すべきなんだろうが、これだけ大規模な戦闘は初めてだ。俺もだが、何より望夢がもうバテてきている。どうしたもんかな……)

『こちら本部から全部隊およびマスカレイダーへ。作戦目標「レイダー群の殲滅」の達成を確認。第一部隊・第二部隊・第三部隊は作戦本部で点呼の後、撤退してください。安全確認パトロールは警察と第四部隊で協力して行います。マスカレイダーは作戦本部を經由せ

ずそのまま政礼支部作戦会議室まで来てください」

(安全確認は免除か。助かったな。あとは話が早めに片付けば言うことなしなんだが……)

さすがにそういうわけにはいかないだろうな、と気を引き締め直し、マスカレイダーはレイドリベンジャーズ政礼支部へと向かった。



「お疲れ、マスカレイダー。私はこのレイドリベンジャーズ政礼支部の支部長を務めている三峰という者だ。ひとまず無事に合同作戦を終えられたことを労うと同時に、我が政礼支部のレイドリベンジャーズによる威力妨害についての謝罪をさせてもらおうよ。言い訳のしようもなく、あれは我々の監督不行き届きだ。本当に申し訳ない」

レイドリベンジャーズ政礼支部の作戦会議室に到着して一息つくくと、テーブルを立った一人の男性から告げられたのは、潔い謝罪の言葉であった。

彼の言葉によれば、政令支部に限らず、永岑市周辺のレイドリベンジャーズ支部では、レイダー頻出地域である永岑市にほとんどの戦力を集中させてしまっているため、慢性的な戦力不足に陥っているらしい。

そのため、ある程度の気性の荒さには目を瞑って戦力の高い者たちを採用した結果、今回のことに限らず問題行動を起こすレイドリベンジャーズは少なくないとのことだった。

「とはいえ、どんな理由があれ市民を守るべきレイドリベンジャーズが問題を起こすようなことがあれば、それは間違いなく我々の教導に不足があったということに他ならない。少なくとも、私個人としては君のこれまでの行動には感謝しているし、信用に足る存在だと認めているつもりだ。それだけに、今回のような恩を仇で返すようなことは、絶対にあつてはならないことだと思っている。重ねて言うが、本当に申し訳なかった」

何度も謝罪を繰り返す三峰だが、マスカレイダーとしては彼の意見よりも、あの場で自分に刃を向けた彼のほうが、人類として正しい行動であつたように思えた。

もちろん、規律を乱す行為が好ましいという意味ではない。だが、これまでの人類史上、レイダーという存在は長らく『敵』として認知されてきた。それはおそらく過去だけのものではなく、今後もそうあるべきなのだろう。

社会や組織に属する『人間』として、協力すべき対象にとるべき態度というものは確かにあるだろう。しかし、それ以前に人類という種族として、マスカレイダーはレイダーという『敵』であり、本能的に恐れるべき『悪』なのである。

そうした恐怖心や敵対心を抑えてこそ戦士だという者もいるが、戦士として対峙する

かヒトとして対峙するかは他者に強いられるべき選択ではない、とマスカレイダーは考えていた。それは、バケモノとしての道を自分で選んだマスカレイダーだからこそその信念ともいえる。

だからこそ、戦士としての姿勢を強要する彼の言い分には、僅かな不信感のようなものを抱いていた。統制や規律と言えば聞こえはいいが、それが過度に高まれば支配や洗脳となんら変わらない。

そう思うと、マスカレイダーから三峰へ返す言葉はひとつだった。

「……「気にしていない。気にするな」か。そう言ってくれると私としてもありがたい」
三峰は笑みを浮かべた無表情を崩さないまま、マスカレイダーへと近付き、その右手を差し出す。

「では今回の合同作戦はここまでとして、これからもよろしく、マスカレイダー。どうかこれからも君が市民の味方で在り続けてくれることを願っているよ」

「……………」

男性のものとは思えないほど細い指をうっかり折ってしまったように、それでも力強く握ったこの二つの手が、互いを傷つけ合わないことを祈りながら、マスカレイダーの初任務は終わった。

協調—セッション—

マスカレイダーとレイドリベンジャーズの合同作戦からちようど一週間が経過したその日、政礼町だけでなく愛知県周辺の各県では物々しい空気が漂っていた。

時を遡ること二日前、10月11日の夜の出来事であった。事の発端となったのは、日本三位の人口数を誇る愛知県の主要都市・いぎつ 粹津市で発生した大規模なレイダー発生事件。

レイダーの勢力レベルは100頭以上300頭未満を現す『団』レベルであり、近年では永岑市でさえ多くは見られない大規模勢力による侵攻であったが、レイドリベンジャーズ粹津支部および周辺支部の助力もあり、12時間に及ぶ長丁場の末、事態は鎮圧された。

しかし、数人のレイドリベンジャーズから送られた報告の中に記載された数行の記述が、政礼町を混乱に陥れた。その記述とは——、『作戦中、明確な自我を持つレイダー個体を確認した。人型のような姿をしたそれは、明らかに通常の二足歩行型レイダーとは風貌が異なり、こちらの言語を理解しているような素振りを見せていた』

『任務遂行の最中、蒼色の二足歩行型レイダーを確認した。通常のレイダーが灰銀色であることから、それは随伴していた各メンバーにも目立ったと思う。しかしそれよりも、作戦中に何度もちちらをじっと見つめるような行動を見せていたことが気味悪く気がかりだ』

『誰もが任務の成功に安堵しているであろうところに水を差すようだが、私は今回の任務が本当に成功したとは思えない。任務中に見たあの不自然なレイダーの討伐報告が、今のところどの班からもないからだ。あの蒼いレイダーは本当に倒せたのか？』

『作戦の途中でひとときわ異彩を放つ蒼いレイダーを確認しました。それは二足歩行型というよりも人型と呼ぶのが相応しく、孔雀のような翼を広げて飛行すらも可能にしました。あんなに目立つレイダーなのに、なぜまだ討伐報告がないのでしょうか。まさか……』

他にも同様あるいは類似の報告が数件挙がっている中で、彼らの言う「翼をもつ青い人型レイダー」は作戦を終えてから24時間が経過した現在でも、討伐成功の報告はない。

そればかりか、作戦終了後12時間が経過した昨夜9時、愛知県と隣接する長野県でも10頭程度のレイダーと、それらを率いるように行動する蒼い人型レイダーの出現報告が近隣のレイドリベンジャーズ支部全てに伝えられた。

これを聞き、真つ先に行動を起こしたのは言うまでもなくマスカレイダーと合同作戦をとつたことのある政礼町と永岑市であった。この二つの支部はすぐさまマスカレイダーを政令支部の作戦室へと呼び出し、全開の合同作戦後の行動を確認した。

しかし、状況を全く聞かされないまま事情聴取となつたマスカレイダーは、最初こそ職員の質問に対して素直に受け答えをしていたものの、時間の経過と共に困惑以上の憤りと不信感を感じたのか、その口調が荒くなつていく。

このままではいつ威力を行使するかわからない、となつたのが数分前の出来事。そんなマスカレイダーの前に現れたのは、他でもなく彼らが何よりも守ろうとしていた日常——その象徴となる少女だつた。

「きくな菊菜……!? なぜ菊菜がここに!?! お前ら、彼女に何をした!」

「ほう……:ようやくキーボード越しでなく君自身の声が聞けたね。それが君の声か、随分と人間らしい声をしているじゃないか、マスカレイダー」

「……ッ! チツ、だがそんなのはどうだつていい! それよりなんで菊菜がここにいら! そいつは——! ……いや、待て。まさか……:そういうことかッ! 菊菜ッ!」

舌打ちを伴いながら睨みつけた先に居たのは、彼が何よりも守りたかつたもの。日常の証。揺るがなはずだつた友情。壊れないはずだつた信頼。その名は——桐咲菊菜。

その視線に込められた意味を理解したのか、菊菜は観念したようにしばらく俯くと、

再び顔を上げて、ぼつりと言葉を零した。

「……うん、そうだよ。わたしは——ううん、違うね。「俺」の本当の名前は……」

瞬間、菊菜の全身を包み始めた赤色の閃光。バチバチと電光を洩らしながら現れたその姿に、マスカレイダーは驚愕を隠せないでいた。

「俺は桐梨希繫きりなしきづな。永岑支部第二前線部隊所属のレイドリベンジャーズにして、君の半身と同じ絆フアミリイの家族の次男坊だよ」

「初めて会ったあの夜も、俺たちの行動を知っていたからこそ出会えたのか。あれだけ近くでレイダーが出現してもアラートが届かなかったのも、お前がレイドリベンジャーズだったからか。お前の行動の何もかもが俺たちを監視するために……ッ！ そのために自分の弟まで騙していたのかッ！」

「それについては弁明のしようもない。俺はレイドリベンジャーズの任務として、君が人類にとって敵となるか味方となるかを見極める必要があった。そのために君を騙していたことは、本当に悪かったと思っっている。だが信じてくれ。君たちと過ごした日常は、本当に尊いものだと思っっていたんだ。その気持ちに、偽りは一切ないんだ……！」

深く頭を下げる希繫だが、菊菜という日常を誰よりも守ろうとしていたマスカレイダーは、その胸に灯った不信心という炎を掻き消せないでいた。

希繫もまた、それを察してかばつが悪そうに、しかし堂々とした態度を崩すことなく、

言葉を紡ぎ続けた。

「俺もこんな形で君に正体を明かすことになるとは思っていなかった。もつと時間をかけて、君に納得してもらえるようにしつかりと説明をするつもりだった。だが状況が変わってしまった。今回現れた謎の蒼いレイダーのせいで、周囲の各支部からはマスカレイダーへの不信感が集中している」

「蒼いレイダー? ……とりあえず恨み言は後にしてやるから状況を話せよ。こつちはもう何時間もよくわからない質問ばつかされてイライラしてるんだ。外で何が起きてるかくらい説明してもらわねえとこつちもお前たちに対する不信感しか感じられない。それはどつちにとつてもマイナスだろ」

マスカレイダーの言う通り、現状をどのように言い訳したところで、それはレイドリベンジャーズとしてもマスカレイダーとしてもプラスにはならない。

ならば一時凌ぎの手とはいえ、現時点でなぜマスカレイダーがこのような状況に置かれているのかを順序立てて説明して、彼の協力を取り付けることの方が合理的かつ理想的だというのは、誰からしても明らかであった。

希繫は隣に立つ小柄な少女に視線をやると、彼女の首肯を確認して口を開いた。

「わかった。順々に説明しよう。そもその発端は一昨日の夜に起きた稗津市でのレイダー襲撃事件だ。あの日——」

不満な様子は未だ納まらぬまま、しかしマスカレイダーは彼の言葉を一切遮ることなく、ただ静かに説明を聞き続けた。

10分ほどの時間をかけて、ようやく希繫が話を終えると、マスカレイダーは腕を組んで壁に背中を預けたまま少しだけ思考を逡巡させた。

「蒼い人型レイダー、か……。確かにそれなら俺を疑うのも理解できる。色はこの際おいておくとしても、人型レイダーという点だけで言えば俺たちが現時点では筆頭だからな。事実、マスカレイダーとしての力はこの姿以外にもある。だが……俺のことをずっと監視していたのなら、お前は俺たちの正体も知っているだろう。なあ、菊——希繫」

「ああ。君たちは全寮制の彩桜学園さいおうに通っている。だから事件が起きた時間帯には既に門限を過ぎていることも説明した。レイダーさえ出現していなければ、君たちは門限を必ず守るといふことも添えて。しかし——」

「レイダーの出現どうこうはともかく、門限を破って外に出たという事実がある以上、その証言には説得力がない。それに、俺たちなら寮に縛り付けられていても逃げ出そうと思えばそれができてしまう。だから弁護ができなかった、だろ？」

「ああ……。俺だけの証言ではどうにもできなかつた。こうなるくらいなら、君たちに疑われてでも人員を増やすべきだつた。こういった証言は数が揃えば多少なりとも説得力が生まれる。そうすれば君たちを守れたかもしれないのに……」

希繫の中にもやもやと膨れ上がる後悔と無力感。マスカレイダー——いや、叶枝と望夢は、自分を偽りながらとはいえ、ほんの短い期間のこととはいえ、それでも確かに友人であった。そんな友人たちを騙し、疑い、裏切り、そして今度は彼らを疑いから守ることもできずにいる。

しかし、マスカレイダーの……叶枝の聡明な頭脳は既に答えを出していた。彼らにとつても、希繫は——いや、桐咲菊菜は大切な友人であった。いや、今も友人であることに変わりはない。

たとえ自分たちを騙していたとしても、ずっと疑われていたとしても、そして何度裏切られても——あの日あの時、自分たちに向けられた笑顔とチョコチップクッキーの味は忘れられない。あの笑顔とチョコチップクッキーが、三人にとつてのキリのない絆なのだ信じて疑わない。

だからこそ、今こうして目の前で泣きそうな表情のまま俯いている青年の言葉を信じて、そしてこの言葉を告げられる。

「——任せろ」

「えっ……?」

ただ一言。

だがその一言こそ、希繫の中に募った感情を和らげる言葉だった。

「ようは俺たちがレイドリベンジャーズに協力し、その蒼い人型レイダーの対処に当たればいいだけの話だろう？　そうなれば俺と蒼いレイダーが同一の存在でない証明になるし、事態の収束にも一役買える。俺としても、こんなことで街の人々からもらった『マスカレイダー』の名を汚されるのは甚だ腹立たしいからな」

「……すまない。本当なら君のような若者にこんなことを頼むのは大人のやることではない。どれほど非難されても言い訳などできるはずもない。だが、君たちの疑いを晴らし、そしてこれから君たちがその力でこの街を守り続けたいと願うのなら……今回の事件、君たちの力を貸してほしい」

「今までは大人たちが子供を守ってくれてたんだろ。こんな時くらい、子供にもいいところを見せさせてくれ。ただ守られているばかりの時期は、ここまでだ」

西郷叶枝—グラント—

「……菊菜。お前ホントにそつちの姿でいいの？」

「うん……。今までは叶枝くんと望夢くんを騙すだけの姿だったけど……。もう、二人を裏切りたくない。わたしは……。」「わたし」として二人の友達でいたいから」

そうか、と静かに微笑む叶枝の隣で、ぶすつと頬を膨らませる望夢と、沈黙のまま目を伏せている小柄な少女——香坂逢依。

蒼いレイダーへと対処には、やはりマスカレイダーを含めたユナイトギア装着者による対応が求められた。理由は単純に、相手がマスカレイダーとは異なる存在だという証明のため、同じ場所にマスカレイダーと蒼いレイダーを配置する必要がある、かつその後には蒼いレイダーだけを倒すには、やはりユナイトギアが不可欠だという判断だ。

とはいえ、ならば『ユナイトギア装着者』の枠には「最強のレイドリベンジャーズ」「レイドリベンジャーズの英雄」と名高い、大郷悠生が相応しいという意見が多かった。過剰戦力とも思えたが、蒼いレイダーの戦力がわからない以上、出し惜しみをしてメリツトがあるとは思えないからだ。

しかし、それを否定したのは他でもない悠生自身であった。曰く——仮に対象の戦力

が並のレイダーより少し高い程度であれば、そのレイダーを倒すためにうっかり街一つ吹っ飛ばすようなリスクは背負わない方が無難だ、とのことだ。つまり、手加減できる自信がない、ということだろう。

事実、ここ最近で彼が対峙した相手というのは、あらゆる威力をゼロに変換するユナイトギア装着者であったり、最悪の殺人鬼集団『蓬萊寺家』の一員であったりと、間違いない『強者』と呼ぶに相応しい者ばかりであった。

しかし、今回の相手はどれだけ強かろうとその性質は『レイダー』である可能性が高い。となると、ユナイトギアは軽く打つ程度でもレイダーには致命傷になりうる。そんな相手に、過剰なパワーを叩き込めば、対象だけでなく余剰火力が周囲を灼き尽くしてしまいかねない。

そこで選ばされたのが、桐咲菊菜——いや、桐梨希繫である。「最弱のレイドリベンジャーズ」であり「慈愛のレイドリベンジャーズ」とも呼ばれる彼ならば、周囲を破壊することなく、もしも蒼いレイダーに意思があつた場合、戦力に頼ることなく事態を収められるかもしれない、という望みも兼ねての判断であつた。

今は桐梨希繫ではなく桐咲菊菜だが、外観と倫理観が女性に寄っているだけで、記憶や思考回路は本来の姿と同じだ。背丈とリーチは縮むが、それだけに回避に集中してしまえば、捉えられるのは逢依だけだろう。説得が目的ならば、その方が都合がいい。

とはいえ、如何に素早いとはいっても体重が減ってしまったえばそれだけ戦闘力も落ちる。ただでさえ病的なほどに軽い「彼」が「彼女」になったことで、それに拍車をかければ、スピードが上がっても威力が落ちる。できれば戦うことなく事態を収めたいというのが本音だ。

「今、永岑第一部隊から連絡が入ったわ。目標は現在、北東から真つ直ぐこの政礼町A—07ポイントへ進行中。間もなく肉眼で確認可能な地点まで到達するとのことよ」

「了解。じゃあ……いくぞ望夢！」

「うん。今回は最初つから全力だよ、叶枝！」

二人が手を繋ぐと同時に、叶枝の「右手首」と望夢の「左手首」に現れる灰銀のバトルデバイス。

凄まじい速度で回転する歯車は、火花だけでなく小さな竜巻をも巻き起こし、二人の力と覚悟を高まらせていく。

「変、貌ッ！」

「変貌……！」

二人の声に呼応するように、より激しさを増した火花と竜巻は、やがて二人を覆いつくし、その中から現れたのは――。

「純銀の、マスカレイダー……？」

純銀の鎧を纏う強靱な体軀。肩や肘などの関節部には丸い発光体が存在し、顔のなかつたかつての姿とは一変、大きな複眼と堅牢な牙が表れており、頭部には二本の長い触角が存在する。

その姿は、かつてのものが孔雀だとすれば、まるで蛩。夜の闇を照らし、自然の美を象徴する光の象徴——蛩であった。

「マスカレイダー、タイプオメガ……変貌完了ッ！」

マスカレイダー・タイプオメガ。対レイダー戦に特化したタイプアルファとは対を成す、対人戦特化型のマスカレイダー。

望夢の肉体に叶枝の意識をインストールしていたタイプアルファとは異なり、この姿は二人の肉体と意識が完全に融合した姿であり、望夢の持つ膨大なレイダー因子と、叶枝の持つ格闘能力を最大限に発揮することが可能となっている。

しかし、対人特化型の名に相応しく、その格闘スキルは「人の形をした相手」を想定したものばかりであり、また叶枝の感情因子傾向インヒレントアベリテイである『悪感情放出』により、単純な戦闘能力を爆発的に上げた代償として、望夢の『悪感情拒絶』を失っており、無敵の防御能力がなくなっている。

では、なぜ今回の相手が人型とはいえレイダーにも関わらずタイプアルファではなくタイプオメガを選んだのか。

「それが二人のどつておきき？」

「ああ。レイダーに対して無敵のタイプアルファとは違い、防御面は完全に俺の格闘スキルに依存するが、攻撃能力に関しては飛び抜けてる。今回の相手は人型レイダーだつてことだが／＼ぼくたちの勘が当たつていれば、それはおそらくぼくが決着をつけなきやならない相手だからね。叶枝にはちよつと無理してもらうことにしたんだ」

無理してもらう、というのはおそらく感情因子傾向のことを言っているのだろう。

もともと、悪感情ストレスとは縁のなきような性格をしている叶枝だが、それは悪感情を抱かないという意味ではない。抱いた悪感情を吐き出し、発散することが誰よりも上手い。それが彼の持つ傾向だ。

そのために、彼がマスカレイダーとなつて得た感情因子傾向は、自分の抱いている悪感情を純粋な破壊エネルギーに変換して放出する『悪感情放出』であつた。

「無理……はあんまりしてほしくないけど、まあ言つても無駄かな。二人ともやる気マンマンっぽいし。じゃ、わたしたちも一緒にいこつか、逢依っ！」

「そうね。あなたこそ、あんまり無理はしないようにね、菊菜」

朗らかな笑顔と、涼しげな微笑み。二人の温度差は歴然であつたが、しかし抱く思いはどちらも同じ。一緒に頑張つて、一緒に解決して、そしてみんなで最後には笑い合いたい。そのために、今ここで踏ん張るために笑うのだ。

「エクレーール！」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレーール、桐咲菊菜に同調接続アクセスします』

「クリユスタルス」

『了解。ユナイトギア第一四四〇号・クリユスタルス、香坂逢依に同調接続アクセスします』

赤い稲妻を迸らせる真つ赤なブーツと、微かな冷気を放つ紫色のヘッドギア。それらが菊菜と逢依に装着されると、いよいよ目標——蒼いレイダーを含むレイダー群が視界に入った。

逢依も、もはやクリユスタルスの広域知覚能力を使うまでもないと、ヘッドギアのバイザーを上げる。

「目標レイダー群、目視で確認。勢力レベルは依然として『集』」

「集？／＼……って、何？」

「レイダーの数が50頭以上100頭未満ってことだよ」

以前にも言ったが、レイダーの出現頻度というものは、およそ一週間に1度、数頭から多くとも数十頭程度のものが平均とされている。永岑市およびその周辺は、世界有数のレイダー頻出地域とされているが、それでも20頭を超えるレイダー群がこれほどの頻度で現れるというのは、明らかに異常事態とされている。

しかも、今回の出現地域は永岑市ではなく、その周辺地域でもない。長野県某所で出

現したレイダーを、一頭たりとも逃すことなく、この政礼町まで誘導してきている。それは、その場で駆除してしまえば、また蒼いレイダーに逃げられてしまうかもしれない、という危惧のためだ。

「……敵は多いね、叶枝／＼いや、たいしたことないさ」

いつものように軽口を叩くだけで、体が羽根のように軽くなる。

いつものように笑い合うだけで、背中を押される気分になる。

二人の「いつも」が、二人の全部を支える力になって行く。

故に——今の二人は「二人」なのだ。

「今は俺とお前で、仮面^{マスク}レイダーだからな」

東条望夢―プリーズ―

三人の前に現れた蒼いレイダー率いるレイダー群。数にして70頭弱というところか、狙撃隊によれば潜伏型は確認されおらず、勢力の大部分が蛞蝓型と二足歩行型で構成されているらしい。

しかしやはり一番異彩を放っているのは、リーダー格の蒼いレイダーだった。全身が鮮やかな蒼色であり、オレンジ色の複眼と灰銀色の触角、そして特に目を引くのがムカデのような尾と全身の突起物であった。

その独特の容貌を目にしたマスクレイダーは――望夢は、すぐさま蒼いレイダーの正体に気付いた。

「やつぱり、ぼくと同じ……ッ！／＼『プロジェクトR』の被検体か……！」

「プロジェクトR……？」

「レイダー因子を人体に移植して新しい生命体を生み出す実験だ／自我を持つ、という意味での成功例はぼくが最初で唯一。だけどそこまでに284人も犠牲を出してしまっただ。おそらく、彼もまたその一人だ」

蒼いレイダーの視線が、マスクレイダーを捉えた。すると途端に、蒼いレイダーが内

包していた悪感情が威圧感となって三人を襲った。

単なる威嚇ではないのだろう。プロジェクトRにおいて、285の被検体の内、自我を保つことができたのはたった一人、望夢だけ。その望夢でさえも、悪感情を抑え込むために叶枝を求めたほど、被検体たちが抱え込む悪感情は膨大。

それはどこにも向けることのできない悪感情だったはずだ。向けるとすればプロジェクトそのもの、あるいは研究者たち。しかし施設を失い、恨むべき研究員たちも望夢が脱走したあの日、塵となってしまう。だからこそ——蒼いレイダーの悪感情の矛先は、救われなかった284の悪感情を背負い、救われた一人に向けられたのだ。

「ナンバー285……！」

「ぼくを知ってるってことは、ナンバー260から284までの誰か、か。よりにもよって、キミたちか……！」

「ナゼ、オマエダケガ救ワレタ……！ オマエダケガ平和ヲ得タ！ オマエダケガ友ヲ得タ！ ナゼ私タチデハナク、オマエナノダ！ 私タチトオマエニ、ドレホドノ差ガアツタノダ！」

まるで悲鳴のような蒼いレイダーの言葉は、マスカレイダーではなく東条望夢へと突き刺さった。

できることなら助けたい。それは望夢だけでなく、この場にいる誰もが同じ気持ちで

あった。しかし——望夢はわかつていた。

(手遅れだ……。肉体がレイダー因子と完全に結合してしまっている。こうなったら、もう助ける方法はない……)

肉体と因子の結合が不完全な状態であれば、マスカレイダーが悪感情と共にレイダー因子を喰らうことで助けられただろう。しかし、既に結合が完了してしまつた今、同じ方法をとれば彼の存在そのものもマスカレイダーに喰われてしまう。

彼を「ヒト」として救うためにできること。それはもう——「殺す」以外にありえないのだ。

そして、意識が融合している叶枝にも、それは伝わっていた。

「ワタシハ……ワタシタチハ不幸セテ哀レナ日々ヲ送ツテイタ……。ダガ仲間ガ、友ガイタカラ耐エラレタ！ オマエモソノ一人ダツタ！ オマエガ成功例ニナリ、救ワレタ時、ワタシタチハ安堵シタ。ダガ……オマエハソナワタシタチノ氣持チヲ裏切り、施設ヲ破壊シ脱走シタ！ ナゼダ！ ナゼ裏切ツタ！」

「裏切つたんじゃない！ ぼくだつてキミたちと同じだつた！ キミたちと一緒にだつたからあの辛い日々を耐えられた！ だけどそんな想いさえ、この体は……この遺伝子は塗り潰した。キミたちごと……施設を瓦礫に変えてしまつた……。キミたちを、殺してしまつた……！」

レイダー因子に適合したあの日。確かに望夢には自我があった。しかしその自我を上書きするように、因子の持つ悪感情が暴走を始めた。最初こそ幾重にも張られた拘束具によって封じ込めができていたが、僅か数十分でそれは意味を為さなくなり、彼の力は施設を呑み込んだ。

瓦礫の山となった施設を見て、ようやく望夢は自分を取り戻した。だがその瓦礫の下に無数の亡骸が埋まっていることは、足元に落ちた被検体たちの四肢の破片によつてわかつてしまった。

自分が研究員だけでなく仲間たちをも殺してしまった。それに気づき、彼はその場から逃げ去った。現実から目を逸らすために、ひたすら走り続けた。そうして逃げて逃げて逃げ延びた先で叶枝と出逢い、婚代と出逢い、今に至るのだ。

「……モハヤ言葉ナド意味ヲ持タナイ。ワタシハコノ感情ニ決着ヲツケル。ナンバー2 85……オマエヲ殺スコトデ！」

先手は蒼いレイダーにとられた。すぐさま菊菜が間に入り、蒼いレイダーを蹴り上げるが、空中で体勢を整え、再びマスカレイダーへと迫る。

「あいつの狙いは俺たちだ！ 菊菜たちは他のレイダーをどうにかしてくれ！」

「……任せたからね！ いこう逢依！」

僅かな逡巡の果てに、菊菜と逢依は駆け出した。目の前に迫る蒼いレイダーの拳を左

手で払い、右の掌で胸元を捉えた。体が完全にレイダー化したとしても、元となったのは人間の素体だ。臓器に関しても、レイダー因子をコントロールする機関が追加されているものの、およそ人間と同じ。だからこそ、肺を強く打てば呼吸が止まる。

元からレイダーとして生まれていればありえない隙は、すなわち彼が人間であったことの証明。最初は人によって獣となり、いつしか人を守るために獣となり、今は人を殺めるために獣となっていることを痛感する。

「ガフツ……ハアツ、ハアツ！ ウウ、オオオオツ！」

「パワーもスピードもあるのに動きが単調なのは、やはりレイダーとなって知性が下がっているせいか／あるいは、そもそも学ぶ機会そのものが無かったから、かもね」

「殺ス……！ オマエダケハ、絶対ニ……ツ！」

「そうだね……。キミだけは、ぼくが殺さなきゃ……！ 君の犯した罪は……ぼくが償ってこなかった罪だッ！」

襲いくる蒼いレイダーの拳を外に受け流しながら、逆の肩で鳩尾を打つと、またも短く呼吸が止まる。肺と心臓が存在する以上、呼吸が止まれば意識的に酸素を取り入れようと動きが止まる。

背中を丸めて呼吸を整えようとする蒼いレイダーの腹を、爪先で蹴り上げる。衝撃のまま吹き飛ばされ、仰向けのまま苦しげに息をする相手の腹部を、無慈悲に踏みつける。

「ガハ……ッ！ グツ、ゴホツ……！ ウ、カフツ……！」

何度も、何度も、執拗に踏みつけるその顔に、表情はない。そこにあるのはただの仮面。その裏にある表情を隠すための、ただの仮面。

「動かないで。もうそのまま抵抗しないで。楽にしてあげるから……トドメだ。息を合わせろ」

動きが鈍くなった蒼いレイダーを見下ろしながら、右脚を高く掲げる。同時に踵に現れた刃を見て、蒼いレイダーの無表情に怖気が表れる。

『刺^し電』……／『一^{いっ}穿』！』

振り下ろされた一撃と同時に、その刃から放たれた膨大な悪感情が破壊エネルギーとなつて爆発を巻き起こす。これを受けてまともに立つていられる者などそう多くはない。蒼いレイダーは片付いたかと誰もが思う中、マスカレイダーだけがその場を動かなかつた。

当たれば必殺となるはずの一撃。それはマスカレイダーも同じように捉えているはずだ。しかし、それでもマスカレイダーが緊張を解かない。そう、あれは当たれば必殺なのだ。——当たれば。

踵を振り下ろした瞬間、その足が感じたのは蒼いレイダーを貫いた感覚ではなく、何かを掠めて刃が地に突き刺さる感覚。それを捉えた瞬間、即座に踵の刃をへし折り、爆

発と同時に防御態勢をとった。すると直後、爆風と共にマスカレイダーを襲ったのは無数の蒼い破片。

「……………オ、オオオオ……………ッ！」

「今のは……………脱皮？／＼ボサつとすんな望夢！ 来るぞー！」

叶枝の叱咤に体が反応するよりも早く、蒼いレイダーが残像を引きながらマスカレイダーに突進し、吹き飛ばされた先へと回り込んで突き蹴りを叩き込んだ。

先ほどまでとは段違いのスピードに、思わず思考を止めかけるが、それをすれば間違いなく死ぬという確信が頭の回転を促した。原因は間違いなくあの「脱皮」だろう。全身の突起物を喪っているものの、あれを武器として使っている様子がなかったため、マスカレイダーの知る限りではノーリスクで高速化しているようだ。

実際はあの突起には毒が仕込まれており、投擲武器としても機能したためまったくのノーリスクというわけではないが、蒼いレイダー自身がそういった小手先の技を使いこなすよりも身体スペックに任せてゴリ押しする戦法をとっているため、脱皮した方が相性もよかったのだろう。

「ぐっ……………！ 叶枝っ！／＼對抗策を見つけろっつてんだろ！ わかってる！ もう少し持ちこたえろ！」

「ハッ！ タツ、ダアツ、ヤツ、ハアツ！」

縦横無尽に駆け回りながら繰り出される攻撃を耐え続けるマスカレイダーだが、カウ
ンターを叩き込もうにも接触の寸前に回避されてしまう。

菊菜であれば同じスピードで、逢依であれば時間凍結で対抗できたかもしれないが、
マスカレイダーにはそうした特殊能力がなく、あるのは純粹な破壊力だけ。

その破壊力を活かすために、叶枝が観察・対策・判断し、望夢が適宜レイダー因子を
ブーストするのがマスカレイダーの基本戦術だが、蒼いレイダーのスピードは、その起
点となる「観察」を許さない。

「ダメだ！ 速すぎてどんな動きをしているのかさっぱりわからねえ！／＼これ以上の攻撃
を受け続けるのはさすがに拙いね……！」

「タツ、ヤアツ、ウオオオオツ……タアツ!!」

強烈な跳び蹴りを受けて攻撃が止むと同時に、今度はマスカレイダーの方から距離を
詰める。

蒼いレイダーの猛烈なスピードの前では、半端に距離をとったところで意味はない。
ならばいつそのこと、距離をわざと詰めて相手の判断を急かして冷静さを保たせないよ
うに動けば、まだ勝機があるだろう。

一番拙いのは、相手のペースに乗ってしまうこと。それだけは避けなければならな
い。故に、マスカレイダーはその攻撃がどれだけかわさされても絶え間なく攻め続けた。

攻め続ける中で、続く策を思考し続けたのだ。

（こいつ、こっちの攻撃を全部かわしてるのに、反撃してこねえ。まったくないわけじゃないが、動きがめちやくちやだ。かわせるってことは、こっちの動きは見切ってるはずなのに……なんでカウンターしてこないんだ？）

さつきマスカレイダーが一方的な攻撃の起点としたように、カウンターは相手の動きを見切り、タイミングを合わせて的確に急所をつくことで、自分が生み出す威力に相手の勢いを上乗せできる技術だ。

その上で最も重要なのは、やはり相手の動きを確実に見切る観察能力。蒼いレイダーは「脱皮」を経てマスカレイダーの動きを遥かに上回るスピードを得ているため、無論それも可能だろう。にも拘わらず、蒼いレイダーはそれをしない。

いや、反撃自体はしているのだ。しかし、まったくタイミングが合っておらず、急所からも外れている。だからこそ逆にマスカレイダーはその攻撃を予想できず受け続けているのだが、それが意図的なものとは思えない。

（もしかして……「いつ」「どこに」打ち込めばいいかわからないのか？ ただこっちの動きが見えている「だけ」で、ただ超スピードで動けるようになった「だけ」……ってことなのか？）

だとしたら、策はまだ尽きていない。

「ぐっ……叶枝！／＼ああ、ここからは任せろ！」

スピードじゃ敵わない。パワーでも、動体視力でも、おそらくは敵わないだろう。

だが——万策尽きてもまだ万とひとつの策がある。故にマスカレイダーの膝は、まだ土につきはしない。

遺恨——ラストウィル——

蒼いレイダーの脅威性は既に理解できた。マスカレイダーを上回るパワーに、圧倒的な俊敏性。そして高機動状態からでも攻撃に反応できる反射神経。レイダー因子を自在にコントロールする術こそ持たないものの、マスカレイダーを遥かに超えるレイダー因子の保有量。

どれもこれもがマスカレイダーを下すばかりで、スペックだけ見れば勝ち目などないようにさえ思える。しかし、そんな状況で諦めていないのが、他でもないマスカレイダー自身であった。

元より彼らの得意とするカウンタースタイルは、力のない者が力のある者を下すために生み出された技術だ。だからこそ、単純なスペックでの大差など、彼らにはなんの問題にもなり得なかった。

ただ一つ恐れるとするのなら、それは相手の技量が自分を上回ってしまうこと。しかし、先程の攻撃を凌ぎきって、マスカレイダーは確信した。蒼いレイダーはスペックこそ高いものの、知性や技量に関しては並の戦士未満——ただの獣だということを。

「望夢^{のぞむ}、相手の動きは見なくていい。相手の攻撃がどこに当たるかを覚えろ／覚えろっ

て……またあの猛攻を受けろってこと？ 無茶言つてくれるなあ／できなきや負けるだけだ」

「オオオオオオオッ！」

「おら、来たぞ！／わかつてるよ！」

蒼いレイダーの夥しいほどの連続攻撃をその身で受けながら、マスカレイダーはその全てを耐え続けた。

横軸に360°から叩き込まれる無数の攻撃を耐えながら、望夢はその全てを記憶していく。そして望夢が記憶した統計データを元に叶枝かなえが導き出した答えは——。

「望夢、左だッ！／希支きし、戒正かいせいッ！」

「グウツ!? ウウツ……い！」

蒼いレイダーの繰り出した一撃を迎え撃つように伸ばしたその拳骨は、相手の拳ではなくその小指のみを的確に強打し、砕く。

この僅かな時間で叶枝が見出したこと。それは攻撃がいくら速くとも、攻撃を当てて即座にその角度を変えられるほど慣性というものは生易しくはない。必ず、一撃を当てればそのまま直進して対角線上で止まるか、攻撃の角度そのものを変えて反動で自分の位置そのものを変えるしなくなる。

故にマスカレイダーの肉体の操作を望夢に任せ、自分は意識のみの存在として攻撃の

角度と回数をカウントし、そして最も隙の大きい一撃を予測していた。その結果は、見ての通りだ。

「今ノ攻撃ヲ、見切ツタ、ダト……ッ!？」

「見切ったわけじゃない、お前のスピードに目が追い付くもんかよ。ただ予測しただけだ、お前の攻撃がいつどこから来るかをな」

「予測ダト……タツタ数秒間ノ攻防デ、私ノ全力ヲ……!？」

「へえ、今のが全力だったんだ？ それはちよつと予想外だけど……ありがたいね／あ。今度こそ決めるぞ、望夢。さあ……俺たちの罪を振り切るぜ!」

右手首のバトルデバイスに表示される「Are you Ready?」の文字。二人は示し合わせることなくEnterキーを押し込むと、蒼いレイダーへと駆け出した。

そしてそれと同時に、蒼いレイダーもまた全身からレイダー因子を放出しながらマスカレイダーへと駆け出す。

両者が同時に大地を蹴ると、空中で突き出した互いの足が衝突し、その衝撃波が町中へと広がっていく。

「私ハ仲間タチノ無念ヲ背負ツテ戦ツタ! オマエヲ恨ミ、オマエヲ愛シタ者タチノ想イヲ抱イテ戦ツタ! オマエハ……何ヲ背負ツテイタトイウノダ!」

「……………」

「仲間たちダケデハナイ！ 私モ……オマエヲ許セナイ！ ダガソレ以上ニ……オマエヲ大切ニ思ツテイタ！ オマエヲ愛シテイタ！ オマエヲ……友ダト信ジテイタ！ オマエハ……オマエハソウデハナイノカ!!」

「……ないだろ……。そんなわけないだろ！ 君たちが好きだったさ！ 大好きで、大切に、愛してたさ！ だから……。こんなにも苦しいんじゃないか！ こんなにも、痛いんじゃないかツ!!」

全身に響く衝撃波を浴びながら、マスカレイダーは……。望夢は自分の想いを叫んだ。施設で過ごした日々など思い出したくもない思い出だ。だが、そんな思い出の中にも確かに輝くものがあつた。暖かくて優しいものがあつた。

そんな大切な存在を自分で消してしまった罪が、今こうして目の前にいる。だが、それは過去に殺してしまったことへの罪悪感だけではない。「今もまた彼らを殺さなければならぬ」という罪を背負うからこそ、その背に押し掛かる重圧が痛みとなつて心を蝕む。

「ダツタラ……許サレザル存在ナノハ私モオマエモ同ジダロウ！ 私ト共ニ……消エ口、ナンバー285オオオオツ!!」

蒼いレイダーから溢れ出るレイダー因子がその勢いを増していく。このままでは押

し負けることなど予測するまでもない。

だがマスカレイダーが「背にした罪がここで彼らと共に消えるのなら」と考えることはなかった。なぜなら――。

「ぼくはまだ消えない！ 君たちが犯した罪はぼくが償わなかった罪だ！ それを償いきるまでは、ぼくは消えない！ 君たちをここで再び殺し――その罪も一緒に背負う！ 君たちにまでこの罪は背負わせない！ だから――お願いっ！ ぼくの望みをッ！ 叶枝えええええッ!!」

右手首のバトルデバイスが輝くと、その腰から孔雀の翼が現れ、全身の発光体が眩く光る。タイプアルファでもなくタイプオメガだけでもない――二人の力と思いがひとつに重なったからこそその翼と輝き。

その翼が強く羽撃き、発光体の輝きが眩しさをいっそう増したことで、ついにその力の均衡が崩れた。

「ハアアア……ッ、スイヤアアアアアアアッ!!」

「グウ……ウアアアアアアアアアッ!!」

マスカレイダーの必殺の一撃、こくんふんとどう虚軍奮討が蒼いレイダーを捉えた。

タイプアルファの「悪感情拒絶」によって攻撃部位のレイダー因子を削り取り、タイプオメガの「悪感情放出」によって削ったレイダー因子を霧散させるこの一撃は、蒼い

レイダーにとって銀の弾丸となっただろう。

「削つて散らせたレイダー因子は、マスカレイダーの力で吸収できる。キミたちの力は……罪は、ぼくが喰らつて抱き続ける」

「ウ、ウウ……ナンバー285……！ 私ハ、オマエニ、コノ罪ヲ背負ワセタカツタワケデハ……」

「わかつてる。だから一緒に消えようとしたんでしょ。でも……誰かが償わなきやいけない罪だ。それを、君らにやらせるわけにはいかない。ぼくが……ぼくたちがやらなきやいけないんだ」

自分の罪はもう振り切つた。だからこそ、今度は彼らの罪を背負つて生きなければならぬ。それは他でもない、自分自身が目を背けた罪なのだから。

マスカレイダーはその手を伸ばし、蒼いレイダーの身体を抱きしめた。

「さようなら、ぼくの大切な仲間たち。いつか、この罪を償いきつたら、また会おうね」
「アア……マタ会オウ、ナンバー……イヤ、『望夢』……」

蒼いレイダーの身体が蒼色の粒子となってマスカレイダーの中に溶け込んでゆく。

そして、全ての光を取り込んだ時、叶枝と望夢の中で無数のイメージたちが広がっていった。

変貌を解き、並び立ちながら俯く望夢に叶枝が声をかける。

「今のは……?」

「そうか、君だったんだね、ナンバー284……。おねえちゃん……!」

二人の中に広がったイメージは、蒼いレイダーの正体である『ナンバー284』……望夢がかつて姉と慕い、そして望夢が最も心を許していた少女の記憶であった。

そして、その記憶の中には、彼女だけが抱いていた望夢への想いも宿っていた。

「……叶枝。ぼくは、後悔してるよ」

「だろうな。けど、それでいいと思うぜ」

後悔のない決断などそう多くはない。何かを選び、何かを成し遂げた者は、その裏で何かを選び損ね、成し遂げられずにいる。

望夢は自分の罪を振り切り、そしてナンバー284の罪を背負った。人々の命を脅かすレイダーから多くの市民を救い、そして大切な姉のような存在を殺した。

「ぼくの望みは、本当にこんなことだったのかな」

「さあな。俺はただ、叶えただけだからな」

約束—プロミス—

蒼いレイダーとの戦いから一週間が経過した。

蒼いレイダーが引き起こした事件をマスカレイダーが対応したことで、マスカレイダーにかけられていた容疑は晴れ、桐咲菊菜きりさきくまの観察報告も後押しして、監視も解かれることとなった。

それに伴い、任務を終えた菊菜もまた、彩桜学園さいおうを去ることになった。叶枝かなえは納得した様子で、望夢のぞむはやや不服そうに、けれど笑顔でそれを見送っていた。普段の様子とは逆に、こういう時に理知的なのは叶枝の方で、感情的なのは望夢だったようだ。

マスカレイダーとしての活動は、今後も政令支部せいれいのレイドリベンジャーズと協力して続けていくらしい。既に何人かのレイドリベンジャーズとは意気投合している様子だ。民間協力者という立ち位置らしいが、彼らがレイドリベンジャーズとなる日もあるのだろうか。

後の調査によって、望夢および蒼いレイダーの所属していた組織『I, s』の詳細も判明した。蒼いレイダーとの戦闘での会話の通り、既に組織は壊滅。彼らの研究成果ともいべき存在は、蒼いレイダーがいなくなった今、東条望夢ただ一人となった。

望夢の証言を元に研究所跡地と思われる場所へ赴いて調査したところによれば、研究内容については幾つか枝分かれしていたが、根底にあるものは『レイダーの因子』の研究と言つて差し支えないだろう。何を目的としてそれを研究していたかは、今となつては知る由もないが。

もしかすると、人類とレイダーのハーフという超人——あるいは新人類の創造主となることだったのかもしれないが、想像の域を出ることはあるまい。

「……つと、経過報告書はこんなものか。あとはこつちの資料とまとめ——」
「あら、仕事はひと段落したみたいね。相変わらず手早くて助かるわ」

不意の声に希繫きづなが振り替えると、両手にコーヒーの入ったマグカップを持つ逢依あいがそこにいた。彼女は右手のマグカップを彼に渡すと、隣の椅子に腰を据えた。

隊長という立場もあつて、この部隊では一番仕事が多いはずなのに、既に一息ついているということは、自ら「手早い」と称した彼以上に仕事が早いのだろう。

「今回の事件、やはり蟠りの残る結果となつてしまつたわね」

「レイダーについては未だその生態および構造のほとんどがわかつていない。レイダー因子……だったか？ それについても本部の研究部でさえ説明しきれていないつてのが現状だ。言い方はアレだが、仕方のないことだった、とも言える。けど……」

「それを仕方のないことだと思えるような人間が、このレイドリベンジャーズにどれだ

けているのかしらね。蒼いレイダー……彼女の引き起こした事件は間違いなく罪だけだけれど、それは彼女自身も望んでいたわけじゃないものね」

「裏切られた、と彼女は言っていたが、心のどこかでわかってたんじゃないかな。望夢が本心から自分たちを見捨てたわけじゃないって。だからあんなにも、暴力じゃなく言葉でマスカレイダーを追いつめた。他ならない自分自身を納得させるために」

今回の事件、最も進捗があつたのはレイドリベンジャーズの研究部であろう。人の心を持つレイダーの存在、レイダー因子の研究データ、レイダー因子を投与された人間の進化パターン。そのどれもが今までのレイドリベンジャーズにはなかった視点だ。

そしてそれに反するように、最も停滞したのは他ならないマスカレイダーであろう。自分の罪を振り切つたという彼らだったが、実際は新しい罪を背負つただけだ。たつた二人で、284人分の遺恨とナンバー284が犯した全ての罪を背負うことになった。

それ以上に、誰よりも自分を愛し、誰よりも自分を想っていた彼女を自らの手で殺めた感覚を——「罪」の一言で背負いきることなどできはしない。彼らの歩は、停滞——停止したのだ。

「しばらくはマスカレイダーの名前を聞くこともなくなってしまうのかしら」

「……いや、あいつらはこれからも戦い続けるさ。一生消えない罪と傷を背負いながら、誰にも赦されることのない償いをし続ける」

「まるで自分のことみたいに言うのね。……当然よね」
「嫌味かよ。でも……まあ、そうだな」

そう言つて、彼は逢依の瞳に映る自分の顔を覗き込んだ。黒い髪に黒い瞳。色白の肌
に細い輪郭。今どき珍しい「純日本人」らしい容姿は、間違いなくその身に流れる血の
影響だろう。

記憶に蘇るのは、母・婚代こんざいに拾われる前の忌まわしい景色。肉を引き裂く感覚。むせ
返る腐臭。鏑を舂めたような味。耳を劈く悲鳴。そして——追われ逃げ惑う自分と姉。

あの日、姉に手を引かれ逃げ出したことを、何度も何度も夢に見る。そしてそれがた
だの夢でないことを何度も何度も思い出す。

「逢依、俺はきつと、この先ずっと自分を赦せる時は来ないだろう。でも……そんな俺で
も、たとえ罪を重ねても守りたいものがある。それがきつと、お前と白露しろろだ。もしそ
れが——姉さんや悠生ゆうきを裏切ることになつても」

「……そんな日がこないことを、祈っているわ」



「おつす西郷！ 今日東条連れて同伴出勤かあ？」

「はよつす。あと何度でも言うけど俺ヘテロだからな」

「はいはい、もう何度も聞いたよ。でもホントに今どき珍しいね。ぼくは普通に相手が男の子でも女の子でも全然いいよ？」 叶枝のことも好きだし」

「お前が女子なら今頃ウザがられるほど告白ラツシユしてたわ。なあ、本気で性転換とか興味ない？」

「ないです、と悪戯つぽく笑う望夢の瞳の奥に、未だ消え切らない仄暗さがあることを、叶枝は見逃さなかつた。

先日の蒼いレイダーとの戦いを終えてからというもの、望夢はずつとこの調子だ。人前では明るく振舞うが、寮に帰り生徒たちが寝静まつた頃、二段ベッドの下段で静かに泣く声を何度も聞いた。

叶枝はそれを慰めることも、声をかけることすらしなかつた。あの時、望夢は「望んだ」のだ。彼女を……蒼いレイダーを討ち、その罪を自ら背負うことを。だから叶枝はそれを「叶えた」だけ。それが望夢と叶枝の関係なのだ。

初めて出会った日からそれは変わらない。望夢が望んでいることを叶枝が叶え、その代償として叶枝にレイダーを討つ力を与える。そんな利害関係。その利害を越えて互いに干渉することはしない。そういう約束だ。

しかし——。

「なあ望夢……放課後、暇か？」

「え？ うん、特にこれといって用事はないけど……何、告白？」

張つ倒すぞ、と真顔のまま返すと、叶枝は望夢の手を引いた。いつものように握った望夢の左手はどこか儂く、弱々しい。だからこそ叶枝の右手はいつもより強く力を込めて、教室へと向かう。

「歩きながらなら誰も全部は聞こえねえだろうから言わせてもらうがな、お前は気負いすぎなんだよ。あいつの罪を背負ったのはお前だけじゃない。俺も一緒だ。それにレイドリベンジャーズだって背負ってくれる。溜め込むくらいなら暴れてでも吐き出せ。そのくらい俺が受け止めてやる」

「叶枝……」

「つーかな、あの蒼いレイダーを殺したって点だけ言えばお前の罪なんざ知れてんだよ！ お前は「望んだ」だけだ！ それを「叶えた」のは他でもない俺自身だ！ 俺があいつを殺したんだ、お前の罪じゃない。お前は……俺の罪と一緒に背負ってくれてるだけなんだよ……！」

二人の意思と肉体が完全に融合するタイプオメガではあるが、レイダー因子のコントロールを望夢が行い、格闘能力が叶枝に依存している以上、その体を動かしていたのは他でもない叶枝だ。

望夢は各アクションに応じてレイダー因子の出力調整と操作をしながら、叶枝が逆転のタイミングを見出すまで格闘を代行していただけ。ほとんどの意味で、蒼いレイダーを死に追いやったのは叶枝だと言っても過言ではない。

「叶枝、だけどぼくは……ぼくが望んでしまったから、君に背負わなくてもいい罪を背負わせてしまった。ぼくの、せいで……」

「それは違うッ！」

「えっ……？」

教室の前で立ち止まった叶枝は、くるりと体を向き直ると、望夢の瞳の中に映る自分を覗き込みながら叫んだ。

「俺はお前の相棒で、お前は俺の相棒だろ。だったらお前が背負って俺が背負わなくてもいい罪なんてない。お前が背負うのなら俺も背負う。俺とお前は、そのためにこうして手を繋いでんだろ……」

そう言う叶枝の言葉に、望夢ははっと気付いたように自らの左手を見た。白くて細くて震え続ける自分の手を、叶枝の長くて骨ばった硬い手が強く握っていた。

きつと、これは「約束」を破る行為なのだろう。望むこともなく叶えられたこの気持ちは、互いを干渉しないと約束したかつての自分たちを逸脱している。

けれど——それでいいのかもしれない。もはや約束などどれほどの意味を持つのか。

今の自分たちは、かつての約束を越えて手を繋ぎ合っている。もう——我慢など意味がないのだ。

「泣けよ望夢。もう隠すな。お前がその泣き顔を見られたくないのなら、俺の懷で泣けばいい。誰にも見えないように、俺がお前の仮面になつてやる」

「叶枝……ふふつ、いつもはちゃらんぽらんなクセに、こういう時ばかりカツコいいんだから……。じゃあ、ごめんね。叶枝の胸……ちよつとだけ借りるよ」

「……おう」

その日、望夢は背負つた罪をちよつとだけ横に降ろした。

叶枝の胸を離れたらまた背負いなおさなければいけない罪だったが、それでも今まで降ろすことさえ許されなかつた罪だ。

いつかその命と共に地に降ろすまで、これからは二人で預け合いながら背負い続ける罪なのだ。

今は、そのためのちよつとばかりの休憩の時間。

嘘—トウル—

「お前を幸せにできるって確信はない。だけど幸せにしてみせるし、何より俺が幸せになれる自信がある。だから……俺と一緒になってくれ、逢依^あ」

「こんな晴れ舞台でさえ弱気なのが、いつそあなたらしいわね。あなたと一緒にいられるのなら、私はいつだって幸せだわ。だから……これからもよろしく、希繫^{きづな}」

大勢の仲間や友人に囲まれながら、純白の中で交わされた誓いを胸に二人は微笑み合う。

マスカレイダーと蒼いレイダーの交戦——『人型レイダー事件』から二か月が経過した12月17日。希繫と逢依の結婚式が永岑市の教会で行われた。

半年前のプロポーズから怒涛の運びとなったが、白露が市内の小学校に通い始めたことで、いよいよ時間をかけていられなくなつたという理由もあるが、それ以上にこれまで逢依から受け取つてきた想いに、誠意ある態度で返すには、これでも遅すぎたほどだ。

しかし、そんな中でも想い変わらず慕い続けてくれた彼女がいるからこそ、希繫もようやくこの日を迎えられた。互いの指に銀色の誓いを嵌め合い、静かに近づくと二人の影が約束を触れ合う。

「希繋ちやあん……！ 逢依ちやあん……！ 二人ともこんなに素敵なお大人になつて……！ お母さん嬉しいよおー！」

「婚代さん、涙拭いてくれ。アンタの自慢の子供たちの門出だろ、涙じゃなく笑顔で送つてやつてくれ。オレと小転こころみたいに」

「希繋あ……！ 逢依ちやあん……！」

「いや小転もかよ」

式には悠生ゆうきと小転はもちろん、彼らの育ての親とも言える絆フアマミライの家族の母、笹倉婚代ささくらこんぎくも出席していた。

絆フアマミライの家族は母である婚代を除く全員が「兄妹」という認識であるものの、希繋と小転のように実の兄弟以外はすべて戸籍上では他人。だからこそ迷いなく、この式に参加している者はみな希繋と逢依に祝いの言葉を交わしている。

その中には、絆フアマミライの家族の一人として参加した東条望夢とうじょうのぞむの姿もあった。

「望夢、来てくれたのか。今日はありがとう」

「家族でしょ、当然だよ。あの時はそつけない態度をとっちゃつてごめん、あの頃はいろいろ余裕がなくて、兄さんたちだつて仕事だつたのに」

「いいんだ。あの時はお前が正しかったよ。俺も騙しちやつてごめん。今日はゆっくりしていつてくれ。婚代さんとも久しぶりに話せるだろうしな」

久しぶりに顔を合わせた望夢の表情には、以前の翳りがまったく感じられなかった。背負っていたものを放り出した無責任な明るさとは違う、ひとつの壁を乗り越えた逞しい笑顔だった。

そんな彼に希繫はやや驚き、そしてどこか羨むような笑顔で返した。彼は軽く挨拶を交わすと、それ以上は声をかけず、希繫の勧めに従って婚代へと声をかけていた。

「……彼、随分といい表情をするようになったわね。背負ったものを重荷としないような逞しきを見せるようになった気がするわ」

「追い抜かれたかもな。何が理由かはわからないが、俺じや背負ったものを支えられるような力強い目はできない。何があいつをあんなに逞しくしたんだろうか。……相棒、か？」

「あら、それならあなたもこれからは彼のような力強さを持てるはずよ。今まで有耶無耶だったけれど、今日からは私があなたの人生の相棒だもの」

それもそうか、とまた微笑みを返すと、希繫は逢依の肩を抱き寄せた。



結婚式から一晩を経て、希繫たちの家では家族会議が行われた。曰く、夫婦の部屋を

従来通り分けるか、一階の和室に併合するか、という議題に加え、いつそのこと悠生と小転は家を出て、この家そのものを桐梨家にしてしまうか、というものである。

前者は「和室に併合」案で即決となったのだが、後者については徹底的な議論が行われた。というのも、この家を桐梨家とする場合、希繫の実姉である小転はともかく、悠生はいよいよ無関係となるため、家を出ても問題がないと他でもない悠生自身が強く主張したからだ。

とはいえ笹倉家の最初期の子供として、彼らはこの14年間ずっと生活を共にしてきた。婚代に実子が生まれ、彼女が自分の子供に全愛を注げるよう、笹倉家を出てからも、希繫・逢依・悠生・小転の四人はずっと離れることなく共にあったのだ。

そんな中で、結婚という大きな区切りがあるものの、悠生だけをこの家から追い出すような真似は、希繫たちにはできなかつた。

「別にお前らが負い目を感じるようなことじゃねーよ。この家を出るとしたら菜咲と同じ居しようと思ってるし、オレが一人になるわけじゃねーからな。つーか、いつまでも一緒にいられるわけじゃねーのはお前らもわかってんだろ。オレも出ていくし、いつかは小転だって相手を見つけて家を出る。オレがたまたま先だっただけだ」

「だけど別に今じゃなくなつて……そうだ、菜咲もウチに住めばいいだろ？ 優芽たちも出て行って部屋も空いてるし、俺と逢依が和室で暮らすなら、俺の部屋も姉さんがい

るから無理だけど、今までの逢依の部屋が空く！」

「そこは来年か再来年にでも白露の部屋として与えてやれ。つーか本当なら白露はもう10歳なんだから今すぐにでも部屋を与えてやるべきなんだからな。お前らの過保護のせいだぞ。料理に関しては逢依がいないと包丁すら握らせないってどういうことだ。お前らアホか」

悠生の呆れたような口ぶりから逃げるように視線を白露に向けると、その白露すらも少し苦い笑いを浮かべていた。どうやら過保護だということは彼女自身も感じていたらしい。

しかし本題は悠生である。希繫はどうか彼を説得できないかと材料を探すが、それを制するように手を重ねてきたのは逢依だった。その瞳には寂しさと切なさが込められていたものの、どこか納得したような力強い表情だ。

希繫が兄弟の絆を信じているように、逢依もまた兄弟への愛を惜しまない。そんな彼女が、敬愛する兄の別離に納得したというのなら、希繫もまたそれを受け入れざるを得なかった。

「……ひとつだけ聞かせてくれ、悠生」

「なんだ？」

「それは……俺たちが結婚したからなのか？ 俺たちのせいで、お前の居場所を——」

「んなわけねーだろ。アホかお前。なんで弟と妹の祝い事でそんな辛気くせーこと言わなきゃいけないーんだよ。そんなくらいなら黙って家出るわ」

間髪入れず、悠生は希繫の言葉を否定した。

「お前らが変わったからオレが出ていくんじゃねーよ。オレが変わるためにお前らに見送ってくれて言ってるだけだ。今回は単にきつかけが出来ただけだ。いつか言わなきゃいけない言葉だったのを今日言ったってだけだ。だからお前らは自分たちの幸せを噛み締めてりゃいいーんだよ」

「そう、か……」

希繫は俯きながら一息つくと、今までの弱々しかった瞳に力強い橙の炎を灯しながら顔を上げた。

今までは兄に任せつきりだった。家の長として守ってもらってばかりだった。だが、それももう終わりだ。これからは自分がこの家の長となるのだ。姉を支え、妻と娘を守る。その覚悟を、悠生はさせてくれたのだ。

だとすれば——悠生の想いを受け継ぎ、その炎を灯し続けなければならぬ。今までは兄が灯していた炎を——今度はこの家の大黒柱として。

「わかった。悠生——いや、兄貴。今まで本当にありがとう。これからは俺が頑張るよ。みんなを守りながら……みんなに支えてもらいながら！」

「……おう。それでいい。そうやって胸張ってシヤンとしてろ。背筋のいいヤツは周りから見ても強そうに見える。そうすりゃ、お前の家族を脅かそうとするヤツなんざいなくなる。最初は虚勢だろうがなんだっていい、とにかく胸を張って、虚勢だったものに自信を詰め込んで。大黒柱としての自信は、家族が自然と与えてくれる」
かつて自分がそうであつたように——とは言わず、悠生は腰を上げて向かいの席に座る希繁の頭を撫でる。

昔は何度もそうしてもらつた。最近ほとんどしてもらえなくなつた。そしてたぶん、これが最後だ。

「兄貴……あにき……っ！」

「つたく、泣き虫は治らねーな。でも……もう涙は流せねーんだ、気が済むまで泣いとけ。これからは、お前がみんなの涙を拭う番なんだからな」

「本当に……ほんとに、ありがとう……っ！　今まで、兄貴がいてくれたから、俺は……俺たちは……っ！」

「……おう」

今までは弱いままでいられた。弱いままで頑張れた。だけどこれからは弱いままではいられない。夫として、父として……家族を守るために強くならなければいけない。きつとすぐには兄のようにはなれないだろう。だがそれでもいい。自分は兄になる

のではなく、夫に、父になるのだ。そのための虚勢なら頑張れる。虚勢を張っているうちに、その虚勢が本物になる。家族がそれを本物にしてくれる。

「逢依」

「なに？」

そして今までは本物だったものも、これからは嘘にしなければいけない。

これから家族を守っていくために、この『本物』は邪魔だ。もう、こんな本物は背負えない。

「今まで、不安にさせてきてごめん。俺は今まで、いろんな無茶をして……それこそ死ぬかもしれない危険だって飛び込んできた。そのために命を落とすことも仕方ないと思ってた。だけど……もうそんなのはダメだ」

今までの『本物』は——もういらぬ。

「命がけでも生きて帰る。死んでも生きて帰ってくる。それは、絶対に絶対だ。お前と白露を、これからずっと守っていくために」

そして——『嘘』だったものが『本物』に変わる。

4th season——装着者暴走事件編

母子—ディアレスト—

年を明けて一週間が経った1月7日。三が日もとうに終えて年始の業務に汗を流しているはずの逢依は、白露を連れて隣町・幸盛市に構える実家——笹倉家に訪れていた。レイドリベンジャーズとしての仕事の一環というわけではなく、年始早々に有給を取つての実家帰りであつた。本当ならば希繫も連れてきたかつたが、職場どころか部隊まで同じ彼ままで休んでしまうと、さすがに業務に支障が出てしまう。

白露は少しだけ残念そうにしていたが、小学校に行き始めてからパタッと会えなくなつてしまつた祖母との一月ぶりの再会に頬を緩めており、門を叩くと早足気味に駆け寄つてきた婚代こんやくもまた、同じように喜んでいた。

「あら、逢依ちゃんに白露ちゃん！ あけましておめでどう。わざわざ会いにきてくれたの？ ありがとー！」

「明けましておめでどうございませう。三が日の間に来られなかつたので、遅れてしまいましたけれど白露ちゃんとご挨拶に来ました」

「おひさしぶりです、おばあさま！ あけましておめでどうございませう！ 先月から学

校に通い始めたので、ご報告に参りました！ 咲桜ちゃんはいらっしゃいますか？」

三人が和やかに挨拶を交わしながら門を抜け、玄関の戸を開けると、その奥からバタバタと賑やかな足音が近づき、その正体が白露へと飛び掛かった。

「しっ、ろっ、ろっ、ちゃーんっ!!」

「きゃふっ!? さ……咲桜ちゃん……、相変わらずお元気そうで、何よりです……」

母親譲りの紺色の瞳と桜の髪留めがチャームポイントの彼女の名は、笹倉咲桜。世界中に40人を超える兄妹を束ねる笹倉婚代の唯一無二の実子であり、絆フアミリアの家族ヒエラルキーの頂点に君臨する全力全開フルパワー無邪気っ子である。

なお、兄や姉からひたすらに可愛がられた結果、その愛情に応えるかのごとく常に全力で愛情表現するようになり、親しい相手になればなるほど秘められたポテンシャルを惜しみなく活用したハグをするようになった経緯があるが、当然ながら誰も止めない。

白露も最初こそ彼女のハグをまともに受けて意識を刈り取られもしたが、今では彼女から不意打ちハグをもらっても受け止められる程度にタフになり、元々希繫以上だった腕力と体力は、既に逢依(142cm・34kg)を抱き上げられるほどになっている。「白露ちゃん最近ぜんぜん来てくれなかったから寂しかったよー! 今日はいっぱい遊べるんだよねっ! 一緒に羽子板しよっ!」

「いいですよ。わたし、これでも羽子板ならけっこう自信があります!」

はしやいで玄関を出ていく二人を見送りながら、逢依は和室へと通された。



「それで、結婚からあと10日で一か月になるわけだけど、希繫きづなちゃんとはどうなの？」
 「良好ですよ。とはいえ劇的な変化もありませんけれど。前々から思つてはいましたが、希繫は夫としては理想的な男性像そのものですから。昔から他愛ない会話をする時は笑顔で返してくれるし、食事を出せば美味しいと言ってくれるし、特に何も言わなくても白露の世話をしてくれるし、料理以外なら家事も手伝ってくれますからね」

「まあ料理は仕方ないよね。希繫ちゃんに作らせたらお医者さんのお世話になっちゃうから。でも、それは逢依ちゃんがカバーできる範囲だし、それ以外のことを積極的にやりながら笑顔を見せてくれる旦那さんは素敵だよ。うんうん、幸せそうで何よりだね！」

座布団の上に腰を落とし、お茶を啜りながら訊ねられたのは、やはりというか希繫とその後であった。

絆ファミリーの家族の仲が皆、良好と言つて差し支えないのは事実だ。しかし、それはほとんどの場合において家族としての関係と言える。希繫と逢依のように、男女の仲となつ

て結婚にまで漕ぎ着けた例はない。

中には男女として互いを意識する者もないわけではないが、さすがにきょうだいとしての一線を超えることには足踏みせざるを得ないらしく、希繫と逢依の結婚はそうした絆フアミリの家族たちを後押しする、革命のごとき出来事であった。

「私が親の虐待に耐えかねて家を飛び出した先で出逢つて……今年で15年。希繫のことは良いところも悪いところもたくさん見てきましたし、小学校の間は一緒にお風呂まで入ってましたから、いまさら劇的な変化なんて望めませんよ」

「でも、悠生ゆうきちゃんが出ていってから身体を鍛え直してると聞いてたよ？ 今まではラニンングとかサンドバッグで脚力中心だったのに、今はちゃんと全身鍛えてると。体重も5kg増えたって言ってたし」

「まあいまさら5kg増えたところでたつたの50kgなのですけれど。食事も今までみたいに極端な制限がなくなった分、ある程度は楽になりましたけど、鍛錬に合わせたメニューを作り直す必要があったので、労力的には同じですよ」

悠生が家を出てから、希繫はレイドリベンジャーズとしてのファイティングスタイルを大きく変えた。

エクレールがブーツ型という理由があるとはいえ、今までは足だけで攻撃と防御と回避を全てこなしてきたが、今は両腕で防御することも多くなった。これによって、いま

では回避か防御のどちらかしかできなかつたが、回避しながら防御という手段が取れるようになった。

その俊足による回避能力はレイドリベンジャーズ全体でも指折りだった希繫が、これまで以上に防御面で遅くなったのである。

しかし、本人によるとこれはあくまで過程の段階であり、最終的な目標は拳による攻撃を可能にすることらしい。今の彼の拳は、長年の軽量化に伴い骨粗鬆症にも等しい脆さを孕んでしまっており、まずは骨を強化しないことには彼の攻撃スピードに拳が耐えられないとのことだ。

そのせいも、最近は隙あらば煮干しを齧り、朝食では必ず牛乳を飲み、三時の間食は70gのカップヨーグルトを1杯とっている。意識しているにしては最低限の変化に見えるが、今まで減量にばかり気を遣っていた彼にしては劇的な量変化と言える。

この変化について、逢依としては今までが細すぎたせいだろうか物理的にポツキリ折れるのではないかと心配していた身として大歓迎しており、食事も露骨に量が増えたわけではなくメニューが変わっただけなので食費的にも大した打撃ではないため安心してゐる。

「ふふ、相変わらず逢依ちゃんは希繫ちゃんにベタ惚れだねえ。希繫ちゃんの方は段々と……って感じだったけど、逢依ちゃんは割とちっちゃい頃からだもんね」

「ええ。希繫が自覚してくれたのが高校に入るくらいでしたから……だいたい8年くらいは片想いでしたね。まあ、それでもあんまり焦りとかはなかったですね。基本的に悠生のほうが同年代の女子に人気でしたから」

「あー……確かに悠生ちゃんもモテたよねえ。本人は女の子に構うより男の子たちと遊んでる方が好きな子だったから、そういう意味では希繫ちゃん以上に心配な子だったけど、今は彼女さんいるんだよね？」

「はい。菜咲^{なさけ}っていう、少し楽天的で思慮に欠けるところはありますが、友達想いで彼氏想いのいい子ですよ。レイドリベンジャーズとしては、かつての婚代さんに追いつくかというほどの天才ですし」

優秀な科学者が一生涯に3機も設計できれば紛れもなく「天才」と称される中、29歳という若さで退団するまでのおよそ8年間に28機の正規型^ユELB^イシステム^キを設計・開発したのが、他でもない逢依たちの母、笹倉婚代である。

ユナイトギアの開発には、「感情を理解し、自我を持ちながら人類に味方するAI」を、一機ごとに異なるパターンで製作しなければならない。なぜなら、同じパターンのAIばかりでは、ひとつのギアに適合できない装着者がいればどのギアに対しても適合できなくなってしまうからだ。

AIに個性を持たせることで、適合できるギアと適合できないギアを作り、より多く

の装着者を生み出すことができる。だが——そのために「AIの個性」を幾つも造ることのできる科学者は多くない。だからこそ、28機という驚異的な数のギアを造り上げた婚代は紛れもなく天才だったのだ。

希繫たちを始めとする、多くの「家族」たちを養うことができるだけの資産を持つのも、これが大きく影響している。本人によれば、向こう数代に亘って苦労しないだけの金額が既に貯金されているらしい。

そして、そんな婚代に追隨するほどの頭脳を持つとされるのが、悠生の恋人である仲嶋菜咲である。

5年前、既存のELBシステムに共通する基礎フレームの強化理論を提唱し、レイドリベンジャーズに入団。入団後も数々の既存ギアを改良し、今に至るまで12機の新造ユナイトギアを開発している。

また、その中でも最高傑作とされるのが、逢依の持つ第一四四〇号ユナイトギア・クリュスタルスなのだ。

「へー、すごい子なんだねえ。でもでも、お母さんは別にそこまですごいこととか、してないはずなんだけどなあー?」

「婚代さんが凄くなかったら菜咲はおろか並の研究員はサルか何かになりますから、さすがにそろそろ自分の偉業に自覚をもってほしいのですけれど」

「いやいやそんなー、と言う母に溜息を洩らしながらお茶請けのあさり煎餅を齧ると、ふと思いついたように逢依は問いかけた。

「そういえば、絆フアミリイの家族は今は何人くらいいるんですか？」

「今？ 今は確かー……46人かな。咲桜ちゃんと白露ちゃんをカウントしなければ」

絆フアミリイの家族の厳密な定義は、「笹倉婚代に育てられた血の繋がらないきょうだい」である。そのため、婚代の実子である咲桜と、きょうだいの間に生まれた白露はその中に含まれない。

もちろん、婚代もきょうだいも二人のことは家族同然に扱っているが、「何番目の家族か」と問われると、番外的な存在であると言わざるを得ないのだ。

また、多くのきょうだいを抱える絆フアミリイの家族においても、希繫・逢依・悠生・小転の四人は特別な存在である。婚代によって拾われた初期の四人だけが年齢順に序列を汲まれており、他のきょうだいたちは「絆フアミリイの家族入りした順に兄・姉・弟・妹が決められる。

そのため、年上の弟や妹もいれば、年下の兄や姉も存在する。婚代によれば、東条望夢とうじょうのぞむは38番目の弟らしいので、かなり下の方の弟ということになる。

「増えましたね……」

「まあ、賑やかなのはいいことだよ。本当ならみんな一緒に暮らしたいけれど……みんな

なの気遣いも嬉しいからね、無理強いはできないよね」

気遣い、というのは、この家にはない世界中に散ったきょうだいたちのことだろう。かつてこの家で育てられていた18番目までのきょうだいたちは、ある時期を境に全員が一斉にこの家を出た。

それには婚代の娘である咲桜が大きく関わっているのだが、婚代も咲桜もそのことについては寂しげな笑顔を浮かべるばかりで、あまり語ろうとはしない。

ただ、逢依だけでなく、その時に家を出た全てのきょうだいは皆、婚代と咲桜のことを今でもとても愛しているし、19番目以降のきょうだい以上に誇りに思っている。それだけは、婚代にさえも否定させないほどに。

「私たちはただ、婚代さんと咲桜ちゃんに幸せになつてもらいたいだけです。今までも、これからもずっと……」

「ありがとう、逢依ちゃん。……本当に、ありがとう」

要請——トウギヤザー——

「……捜索任務の協力要請？」

逢依が笹倉家に帰省している頃、希繫はある人物から連絡を受けていた。その人物とは、先の蓬萊寺迎撃戦において希繫に協力を依頼してきた彼の親友、武城誠実である。今回は、親友としての立場と、彼の所属する組織『国際環境修復支援団体・ORB』としての立場の両方から連絡をしてきているようだ。

同僚の望月たちに断つてオペレーションルームを出ると、どうやら今回は蓬萊寺絡みの要件ではないようで、ひとまず安堵する。前回の蓬萊寺迎撃戦での消耗は未だ記憶に新しい。事件収束後もしばらく逢依と白露から絶対安静命令が下ったほどにグロッキーだったのを思い出せるほど。

しかし、楽な用事ということもあるまい。それならそれでORB内部でも片付けられる案件なはずだ。それなのに外部、しかも時には敵対することもあるレイドリベンジャーズに所属する希繫に連絡を寄越すということなら、明らかに厄ネタである。

『ああ。実は先日、ORBで同僚に対する暴行・恫喝を伴う事件があつてな。加害者たちは既に警察に通報し、つい先ほど正式に逮捕されたんだが、被害者とその人物に親しい

同僚が揃って行方を眩ませてしまったんだ」

「それでどうして俺に？ 捜索は警察の仕事か、ORBでやるべきことだろ。そうじゃなくてもレイドリベンジャーズに協力要請をするなら正式な手順で申請をしてもらわないと。誠実には悪いけど、俺だってそうそう好き放題できるわけじゃないんだぞ」

『俺としても本来ならそうするつもりだったが、事態は一刻を争う。なぜならその二人はお前と同じ「光と同等の超高速移動」が可能な装着者であり、元々の人間不信が今回の件で拍車をかけ、国内の至るところで彼らによるものと思われる暴行事件が相次いでいる。どうか、彼らの暴走を止めてほしい』

光と同等の超高速移動——それは即ち、質量を失う術を持つ者を意味する。とはいえ、希繫の持つエクレールのギア特性は「電気変換」であって「光変換」ではなく、電子には質量が存在するため本来であればあくまで亜光速移動に留まる。

しかしそれは電気そのものの到達速度にすぎない。光もまた然り。希繫はその体を電気と変えるが、彼は電気であると同時に「脚」を持つ人間でもあるのだ。たとえ電子に質量があり、光に劣る速度だとしても、電気変換された彼が「走る」ことによつてその速度は幾乗にも変化する。

その結果、彼の俊足は亜光速どころか光速さえも超えた超光速を誇り、最弱のレイドリベンジャーズであると同時に、レイドリベンジャーズの中でもトップクラス——具体

的に言えばナンバー2の速度を誇る高速機動型レイドリベンジャーズとなったのだ。

「……わかったよ。だけどちゃんと正式に協力要請だけはしてもらおう。事後承諾になるがそこはしつかりしてもらわないとな」

『わかっている。あと、今回ばかりはお前ひとりというわけにはいかないんだ。俺は二人がORBから抜けた穴を埋めなきゃならないし、何よりあの二人が揃って暴走しているとなると、お前ひとりでは捕まえることができない。だから悠生ゆうきにも協力をお願いしたい』

「悠生か……。最強と準最速を一気に引つpegがすとなると、お前の苦勞も計り知れないことになると思うが……。そうするだけの価値がその二人にあるんだろう？　なら、応えてやるのが友達だろ」

そもそも、いくら世界有数のレイダー頻出地域であり、日本において最前線ともいえる永岑市ながみねとはいえ、最強の悠生と準最速の希繫をこんな地方支部に置いておくということと自体を疑問視するレイドリベンジャーズも存在するのだ。

事実、彼ら二人に指導をつけた恩師は、その実力を評価されて地方支部から日本本部へ招集されたというし、永岑支部長である霧島によれば、毎月ご丁寧に興動奨励書が届いているらしく、本人たちの意思を尊重して握りつぶしてくれているとのことだった。

そんな中、この二人を同時に外部の組織が動かすとなれば、さすがに一筋縄というわ

けにはいくまい。当然ながらレイドリベンジャーズ本部からは拒否されるだろうし、妙な勘繰りを入れられ両者の印象がよくない方向へ傾くことも考えられる。

しかしそれをわかつていながら誠実を使って協力要請するということは、よほどその二人組がORBにとって脅威的な存在なのか、それとも単純に個人の持つ戦力が高いのか。

希繫はおそらく後者だろうとあたりをつけていた。前者であれば役職持ちとはいえない一般的な団員である誠実を上司につけて通常任務を与えろということはないだろうし、ORBはそもそも環境修復団体であり、ユナイトギアは森林火災や汚染された海などの環境を正すために用いられるため、個人の戦力がどれだけ高くとも評価に影響しないからだ。

だが戦力の優劣が評価に影響しないということは、いかにORBにとっては末端団員であったとしても、その実力が未知数であることを意味する。そして今回、仮にもユナイトギアの所持を認可された数少ない組織であるORBが、たった二人の末端団員を捉えるために外部組織に協力を要請するということは、それだけその二人組の実力が高いことを如実に示している。

『すまないな、希繫。蓬萊寺の時といい、俺はいつもお前に頼つてばかりだ……』

「適材適所さ。お前にはORBとしての仕事があるし、俺はその二人の確保ができる。

なら多少の愚痴は言わせてもらおうが、仕事と思えば割り切れる。それに……言っただろ？ 応えてやるのが友達なんだよ、この程度の無茶振りならな」



「——というわけで、明日から俺と悠生はしばらくORBとの合同捜索任務だ。第二前線部隊のことはお前がいれば大丈夫だとは思いますが、念のため非常時にはマスカレイダーに助力を要請しておいた」

一日の業務を終えて帰宅すると、希繫は今日の出来事を事細かに逢依に伝えていた。それは夫婦としての会話でもあり、同じ部隊に所属する上司と部下としての連絡でもあった。なお、リビングからは白露が学校のテストで100点をとったのだと小転こころに自慢する声が聞こえている。

「悠生もということとは、第一部隊は隊長が抜けることになるのだけれど……でも普段からデスクワークは海風くん任せにしているみたいだし、大して変わらない気がするわね。悠生つたら、できないわけではないはずなのだけれど、面倒なことは極力したがるものね」

「総交曰く、押し付けられるだけで悠生のストレスを軽減できるんなら安いくらいだっ

てさ。まああんまり追い込んでキレられたら手え付けられないからな」

「あなたも海風くんも悠生をなんだと思ってるのよ……」

悠生はその豪胆な性格ゆえに勘違いされがちであるが、頭の出来は決して悪くはない。確かにシンプルな手段を優先するところはあれども、状況を冷静に分析して部隊を運用できるだけのカリスマと指揮力も持ち合わせている。

しかし、だからといって気が長い方かといえば、それには首を傾げざるをえない。仲間や家族を傷付けられた時などの義憤はもちろんだが、彼は自分自身にも誇りや自信を持って行動している。それだけに、煽りや挑発には極端に弱いし、ストレスに対する耐性は皆無と言っても差し支えがない。

また、そうしたストレスを発散する方法もまた暴力的かつ暴虐的ともいえるほどの破壊一辺倒であるため、彼に過剰なストレスを与えることは、彼が与する組織としても友人としても受け入れられない。そのため、総交は彼の奔放さについてはある程度の諦め——もとい、理解を示していた。

「お父さま！ 昨日の算数のテストで100点をとりました！」

「おおつ、すごいな白露！ ちゃんと毎日がんばって勉強した甲斐があつたな。じゃあ逢依に頼んで明日の晩ごはんは白露の好きなメニューにしてもらおうか」

「ハンバーグがいいですっ！」

小転から褒められたのか、今度は希繫と逢依の番、とばかりに100点の答案用紙を持って駆け寄ってきた。

とはいえ白露が100点を取ること自体は大して珍しいことでない。むしろ、白露は学校に行きだしてから、今までほとんどのテストで100点、落としても90点代ばかりである。

だとしても、桐梨家は基本的に「褒めて伸ばす」方針である。いい点が取れたらそれをきちんと褒め、ミスがあればどう改善するかときちんと教えていく。言葉の厳しさに多少の差はあれど、その点は希繫も逢依も同じスタンスだ。

そのおかげか、白露は勉強に対して非常に意欲的で、あまりストレスには感じていない。むしろ、こなせばこなすほどに褒めてもらえるものだと言ったからか、勉強そのものに楽しさを見出しつつある。

「承りましょう。じゃあ白露ちゃん、明日は学校が終わったら小転と一緒に御遣いに行ってもらえるかしら？ 200円までなら好きなものを買ってもいいわよ」

「ありがとうございますっ！ 次も頑張りますねっ！」

たつ、と元気に二階へ駆けあがっていく白露。悠生がこの家を出る時に言っていた通り、かつて逢依の部屋だった場所は現在、白露の個室となっている。たまに両親の布団に潜り込んでくることはあるが、基本的にベッドも完備しているのでそこで寝てい

る。

家で留守番していることの多い小転によると、学校から帰ると一時間程度は部屋で勉強をしているらしく、たまに小転に勉強を教わりに来るとのこと。わからないことはギリギリまで考えて最終的にどうしても無理になった時は躊躇なく人を頼るあたり、希繫の子供らしいといえる。

髪の色や甘え上手な性格など、どちらかという逢依よりも希繫の影響が強いことにちよつとだけ悔しいと思つたことがある逢依だったが、白露の利き手が彼女と同じ左利き寄りの両利きだと知つた時は小転が呆れるほど喜んだという。

「白露ちゃん、学校に行き始めてから明るくなつたね」

不意に、リビングでテレビを見ていたはずの小転が声をかけてきた。彼女の言葉通り、白露は学校に行きだしてから、それまでと比べて明らかに口数が多くなり、口調も明るくなつていた。

白露が経験した未来——そこでは逢依だけでなく、同じ学校に通つていた友人たちも蓬萊寺によつて喪つたはずだ。そんな悲しみを抱えながら過去に遡り、両親との再会や新たな友人たちとの出逢いを経て、ようやく彼女本来の明るさが表に出始めた。

年相応とは言いづらいほどに大人びた態度や言葉遣いから忘れがちだが、彼女はまだ11歳の少女なのだ。それを親として知っているからこそ、希繫も逢依も彼女の明るさ

を絶やさないためならどんな苦勞だつて惜しくはない。

「そうだな。明るく——ちよつとだがはしやぐようになつたな。本当はもつと自己主張というか、ワガママを言つてほしいもんだが……まあそのうち言つてくれるようになると思うし、急かさず白露のペースに付き合つていこうと思う」

「白露ちゃん、未来で辛い経験をしすぎたせいで、日常の生活だけで満足してる節があるのよね。本当はもつといろんな楽しいことや幸せなことがあるはずなのに」

とはいえ、それを強く指摘できないのは、やはり希繫と逢依もまたレイドリベンジャーズとしての戦いを続ける中で、日常の重みや大切さを知っているからか。

三人揃つて苦笑いをして、夕食の支度を始めた。

陰陽—サン・アンド・ムーン—

「はあつ……はあつ……！　くそつ！　どうしてこうなつちやうんだよツ！　僕が何を
したつていうんだツ!!」

「^{よしかげ}義陰……。ごめん、アタシのせいだ……。アタシがもつと周りに気を遣わなかつたから、
義陰に^{はるの}変なやつかみを持った奴らが——」

「は、陽乃のせいじゃないよつ！　僕が弱いから……。陽乃にまでこんなことをさせ
ちやつたんだ……。！」

国内某所の古びた日本家屋。俗に「マヨイガ」と呼ばれるその場所で、一組の男女が
膝を折り蹲っていた。男の名を月村義陰、女の名は日向陽乃。二人は数日前に職場で起
きた事件をきっかけに所属していた組織を飛び出し、このマヨイガへと辿り着いた。

組織を飛び出す直前、自分を虐げた上司と同僚を反射的に叩き伏せてしまったのはや
はり悪手であつたか、と悔いる義陰だったが、それでもそうしなければ今頃は自分の内
に溜まったフラストレーションが一番傷つけないはずの陽乃を傷付けていたかと
思うと、仕方ないと納得もできた。

「陽乃はいつだつて僕を助けてくれる。陽乃がいてくれるから、僕は何から逃げたと

しても生きることからは逃げないでいられる……目を背けないでいられるんだ」

「……そっか。ありがとう、義陰。でも、だったらもつと甘えてよ。義陰はいろんなものを溜め込み過ぎだ。もつとちゃんと吐き出してよ。アタシはもう……苦しむ義陰を見たくなんかないよ」

義陰の苦しみ。二人の脳裏に甦るのは15年前の悲劇。義陰の兄——月村義正が彼の目の前で事故に遭い、その命を落とした日のこと。誰よりも信頼していた兄を喪った義陰の心には影が差し、その影は彼だけでなく月村家全体を包んでいった。

義正の逝去から半年と経たず家庭は崩壊。母親に引き取られた義陰は、それまでずっと一緒にあった陽乃とも別れを告げることになり、孤独な日々へと身を投じていった。

義正を喪つて失意の中にいたのは母も同じだった。すべてに無気力になった彼女は、義陰に当たることはなかったものの、彼への興味さえ失っていた。食事も、掃除も、洗濯も、インターネットと数多くの失敗を繰り返しながら、母と同居していながらも義陰は「孤独」な生活を続けていた。

だが彼の心を蝕んだのは孤独だけではない。片親のいない子供は、子供のネットワーケの中では異質なものだった。元々の大人しい性格も災いし、彼は新しい環境の中で孤立し——そして虐げられた。言葉や態度だけでなく、時には暴力にも発展したが、唯一の味方となるべき母はそれでも彼に興味を示さなかった。

やがて他人を信じられなくなった彼は、小学校・中学校といじめの対象になり続けながら、誰にもその苦痛を吐き出さなくなった。いや、吐き出せなくなった、というべきか。吐き出せば新しい暴力の種にしかならないということ、彼は経験から学んでいた。本来なら学ばなくていいはずのことを、学んでしまっていた。

中学から高校に上がる頃には、母親は家から姿を消していた。幸いなのは、もはや彼が母を必要としていなかったことと、高校に入るだけの金が残っており、親戚から支援を受けながら高校に通えたこと。そして、新しい高校は地元から遠く離れていたことだった。

高校に入ってから数か月は平和だった。気の知れる仲間もでき、ようやく心が少しずつ彼本来の朗らかさを取り戻しかけていた時のことだった。彼の友人が万引きをし、その罪を義陰になすりつけた。後にわかったことだが、その友人は中学時代に彼を虐げていた先輩の弟だった。

兄から義陰のことを知った友人は、出会って早々に彼がその対象だったことに気付いており、兄以上に彼を貶め、心をへし折ることで、兄に勝り、その優越感に浸ろうとしていたのだ。

万引き犯に仕立て上げられ、親戚からの援助もなくなり、高校を中退した彼は人を信じることができなくなっていた。そして自暴自棄になっていたところを、なんの偶然か

陽乃に見つかり「人と接することが嫌なら自然と接していけばいい」とORBに誘われた。

そして誠実せいじという理解ある上司と、幼い頃からずっと自分のことを裏切らなかつた陽乃だけを信じて仕事をこなしてきた。——のだが、今回の事件が起きてしまった。

きつかけらしいきつかけなどなかつた。仕事でよく同行するチームとの共同作業中、義陰は基本的に陽乃と常に共に行動していた。それは仕事を効率化するためでもあり、彼の精神状態を一定に保つための誠実の気遣いでもあつた。

しかし、二人が幼馴染であることを知らない同行チームからは、気立ても器量もいい陽乃を義陰が独占しているように見えたのだろう。たつた一度の共同任務ならよかつたが、ORBの任務は基本的に自然災害や環境汚染との戦いであるため、どうしても長期間かつ断続的に行われる。

そうして溜まっていったフラストレーションが、とうとう同行チームの導火線に火をつけてしまった。誠実と陽乃の目を盗んで、義陰に対する暴行と恐喝が行われてしまったのである。

「……ごめん。それと、ありがとう。陽乃がそう言うのなら……陽乃にだけはちゃんと甘えることにする。いつも心配させちゃう僕だけど、そんな僕でもいい？」

「当たり前でしょ。心配したくなるくらい優しく頑張り屋な義陰だから、アタシは甘

えてほしいんだよ……！」

二人は抱き合いながら、互いの苦しみと寂しさを別け合う。義陰は太陽に縋る月のように。陽乃は月を導く太陽のように。二人は照らし照らされる互いの立場を自覚しながら、その関係を良しとする。

彼と彼女に共通する感情——それは「憐み」あるいは「慰め」だろう。義陰の苦しみを憐み慰めようとする陽乃と、陽乃の優しさを憐み慰められようとする義陰。典型的な共存の形を持つその関係は、自愛心が低いほど強くなっていく。

それは歪な親愛の形だ。しかし、それが親愛であれ友愛であれ情愛であれ、二人の間に芽生えた繋がりがほどこけないのなら、義陰も陽乃もそれを歪だとは受け止めない。他人とは形の違う絆なのだとしじじ続けていく。

「——さあ、ずっとこうしていたい気持ちはあるけどさ、まずはご飯にしよう。この屋敷がどんなところか未だにわからないけど、いつでも逃げられるようにお腹だけは膨らましておかないと」

「うん……。あつ、僕も手伝うよ。陽乃だけにしてもらってばかりじゃ悪いし」



『搜索対象の名前は月村義陰と日向陽乃。どちらもORB所属のユナイトギア装着者です。ユナイトギアの詳細については機密のため公開できません』

「つて言ってるけど、どうする悠生？」

「知らん。どうせどんなギアを持っていようがオレは正面からぶつ壊すだけだから関係ねーしな。とつとと見つけて拳骨ぶちかまして連れてけばいいだけだろ」

あつそう、と軽く流して、希繫はORBから与えられた搜索対象の資料に目を通す。年齢や容姿・体格、経歴からORBでの役職まで記載されたその資料には、なぜかユナイトギアのデータだけが省かれていた。

おそらくは、形に残るものにORB所有のユナイトギアのデータを残さないためだろう。実際に対峙してみればわかるデータだとはいえ、本来の詳細データと感覚で得るデータには「誤差」の範囲に留まらない明確な違いがある。

人類を守るレイドリベンジャーズと地球を守るORBの間には、とても近いようで限りなく遠い意識の差が存在する。何かを守りたいという気持ちは一緒だとしても、最終目的が違えば自然と手段も変わる。そのために、これまで幾度となく衝突を繰り返してきた。

だからこそ、希繫もORBの渡してきた資料に苦言を呈すことはしなかった。確かに情報に不足があることは間違いないが、実際に対峙すれば補える範囲であるのなら、無

暗に事態を大きくする必要はない。

しかし問題なのは、対象二名がどちらも光速移動のできる装着者であることだ。地球を半周……つまり地球の反対側まで0・06秒で到達できる速度があるということは、実質この地球上のどこにでも一秒未満で逃げられるということでもある。

目の前で逃げ出したのなら希繋のスピードで十分追えるが、最初から居場所がわかってない現時点では、地球上のありとあらゆる場所を風潰しに探すことになる。しかし、逃げ隠れるのに対して探して追うという立場で言えば、速いことが必ずしも利点とはならない。

なぜなら、どんなところにも一秒未満で行けるということは、言い換えればあらゆる景色が一秒未満で過ぎ去ってしまうということでもある。いくら光速で過ぎ去る情報を知覚できるとしても、それは反射神経的な知覚能力であって、たった二人の人間を見つげ出す判別能力とは意味が異なる。

「光速移動ができる奴は海とか普通に越えていくから国内にいる保証もないし、どうしたもんな。せめて国内か海外かわかるだけでもいいんだけど」

「ORBはレイドリベンジャーズと違って一か国につき支部が一つだから統率がとりやすい反面、こういう時に広範囲の情報を得られないのが痛い。全国のレイドリベンジャーズに登録外のユナイトギアが見つかってないか聞いてみるか？」

『今回の任務はORBとあなたがた個人との共同任務です。ここで見聞きした情報を他の組織に通達することは認められません』

「どンドン自分の首を絞めていくなORB……」

呆れとも諦めともとれる溜息をこぼすと、希繫は悠生に視線をやった。普段は荒つばい彼だが、仮にも永岑支部第一部隊の隊長を務める一級のレイドリベンジャーズだ。何かアイデアがないかと尋ねようとするも、それは思い直した。

悠生は確かに聡明かつ賢明な部隊長であり、その立場から口を噤まなければならぬことも多いが、今回の任務はORBと個人の協力任務。彼が口を閉ざす理由がないのに何も案を出さないとすることは、彼にこの情報を打破する手段はない、あるいは既にその手段を講じた後だということになる。

そして、今回この任務に協力するにあたり、希繫と個人的に協力しているのは何も悠生だけではない。

『すまない希繫。今しがたようやくレイドリベンジャーズとの正式要請が通った。ここからは我々「ORB日本支部・第二九番実働部隊」がオペレーションを引き継ごう』
「やつと来たか誠実。もう待ち草臥れてたところだ。で、レイドリベンジャーズとの正式な協力要請が通ったってことは、捜索対象の広域調査をしてもいいのかわ？」

『それは既にこちらから要請済だ。現時点で姿を確認できたのは10カ所。都道府県は

バラバラだが何れも日本国内のスーパーマーケットや日用雑貨店だ。このことからおそらく現在も海外には出ていないものと思われる』

「さすが誠実、仕事が早いッ！」

国内に絞るだけでも、その範囲は格段に狭まる。特にこの日本においては、その面積は世界全体から見ても大きい方ではない。

特に装着者ならば、待機状態のギアを必ず持ち歩いているはずだし、それが二人組となればさらに目に留まる。ギアを特定することはできずとも、レイドリベンジャーズは大型作戦がなければ基本的に地域に密着しているため、地域で見慣れない装着者など目立つに違いない。

しかし、そうなると問題は「時間」だろう。今は食糧や日用品が足りず渋々表に出ているため姿が確認できているが、ある程度余裕ができてしまうと拠点となる場所に籠城することになるだろう。

実際、ORB脱走からまだ数日と経っていないのに10回もその姿を確認されているという事は、かなりの量の物資を確保しているということになる。となれば、潜伏先の特定を急がなければならない。

「ひとまず狭いところからいつてみよう。ちよつと沖繩まで行つてくるから、悠生は誠実と一緒に理詰め範囲を狭めてくれ」

「……いーけどお前それ「ちょっと行ってくる」の範囲おかしいって自覚しとけよ？」

「……? おう?」

懸念—アニージネス—

「……あつ、誠実^{せいじ}? 沖繩^{こっち}はひとまず大体の探索を完了。さすがに一般市民が匿つてた
らわからないけど、空き家とか廃屋みたいな人気を避けて隠れられそうなどは全部
見て回ったけど、残念ながら収穫はゼロだったぞ」

『こちらでもエクレー^レルを通して映像を確認済みだ。どうやらそのようだな。わかっ
たことだが闇雲^{くも}に探しても意味がない。きちんと的を絞るためにも、希繫^{きづな}はひとまず
こちらに戻つてきてくれ。悠生^{ゆうき}には一度帰宅してもらうが、お前にはその脚があるから
な、もう少し働いてもらうぞ』

うへえ、と嫌そうに項垂れる希繫に、誠実は常の堂々とした態度を崩さず通信を切断
した。だが誠実の言う通り闇雲^{くも}に探して見つかる範囲ではない。相手は1秒間も必要
とせずこの地球上のどこにでも存在できる存在。あまり派手に動けば、今は国内に留
まつている相手を海外に逃がしてしまうかもしれない。

真つ先に沖繩に来たのは、そもそも「どこにでもいられる」はずの相手がわざわざこ
んな熱帯地域に留まつているとは思えないからこそ、その裏付けのためであつた。同じ
理由で北海道もないだろう。夏ならいざ知らず、今は1月だ。故に沖繩以上にありえな

いと判断して、希繫は北海道を候補から除外した。

となれば、残るは四国・九州・本州だが、四国と九州はこれからORB日本支部に向かう途中で通りがかるので、ついでに軽く探すつもりだが、直感的にハズレの予感を感じていた。今まで何度も希繫を救ってきた直感が、相手が本州に——もつと言えば永岑市からそう極端に離れていない場所にいるのだと告げているからだ。

(さて、そろそろ真剣に考えるか。そもそも地球上のどこにでもいられるはずの存在が国内に留まるとしたら、よっぽど見つからない自信があるか、国内に思い入れがあるかだ。人間不信でいい思い出がなく、唯一の心残りになり得る存在が逃避行に同行しているのなら、後者はないだろうから、答えは前者だろうな)

見つからない自信がある、というのは、大きくわけて二つのパターンがある。ひとつは、単純に見つけにくい場所に隠れている、という意味。もうひとつは、見つきりそうになった時、それを誤魔化してくれる協力者がいる、という意味だ。

しかし人間不信で、同行している日向陽ひゅうがはるの乃と、元上司で今は搜索側についている誠実の他に友人と呼べるような存在がない月村義陰つきたらよしかげが、後者のような協力者を得られるとは考えがたい。だからこそ、前者の「単純に見つけにくい場所」というのが濃厚だろう。

だがそうなる都市部での潜伏は考えにくくなる。都市部に限らず、世界各地にはレイドリベンジャーズ支部がひとつの市町村に必ず一つ存在している。そしてそれらの

支部は警察と協力し、地域に密着しながら、その地域のありとあらゆる場所——それこそ地下街にまで、徹底したパトロールを行っている。

そんな中で、民家や施設のような優先的に防衛すべきものが多い都市部では、レイドリベンジャーズも警察もネズミ一匹見逃さないよう目を光らせているはずだ。そんな中、いくら「見えない速度」を得ていても、生活をするのなら見つからないはずがない。電気や火を用いれば目立つだろうし、拠点内で常に無言というわけにもいかないのだからなおさらだ。

（レイドリベンジャーズ支部や交番だけじゃなく民家も近くにない場所……。単に廃墟ってわけでもなさそうだな。突拍子もない場所に一軒家があるってことか？ 衛星写真で該当する民家でも探してみるか。人の住んでないはずのところとかもあるだろうし）

指標のひとつにはなるだろう、と考えをまとめると、希繫はエクレールを起動した。今日中に見つけることはできずとも、ひとまず夕飯までにはひと段落させなければならぬのだ。今日の夕飯は白露のテスト100点のお祝いでもあるのだから。



「義陰、起きな。そろそろ日も落ちるよ。アタシも夕飯の支度をしなきゃならないから……」

「ん……ああ、陽乃。そういえば膝枕してもらってたんだけ。ごめん、今どくよ」
空を照らす日の光が橙色に染まる頃、自分の膝枕で昼寝をしていた義陰を、陽乃は惜しむような声色で起こす。

ORB所属のユナイトギア装着者となつて以来、地球のためにその力を幾度となく揮つてきた義陰は、自らの所持する『ルーナ』のギア特性の影響で夜型の生活に慣れてしまった。それは有事のために所持し続けている今も変わらず、このギアを持ち続ける以上、義陰はその影響を大きく受け続けることになる。

しかし、それでも夕飯を放っておけば義陰の腹が危機に陥ることは避けられないと、陽乃は心を鬼にせざるをえなかった。その分、めいっぱい美味しいご飯を作つて、眠り損ねた分をお腹で満たしてもらうために。

「夕飯、僕も手伝うよ」

「義陰はもう朝と昼をやつただろ。アタシだつて料理くらいできるし、夕飯くらい大人しく待つてなよ」

「大人しくつて言つても、ここじゃテレビもなければケータイの電波も届かないし、それにどうせなら二人で一緒に作つた方が美味しくなる気がしない？」

「……義春のそういうトコ、あんまり得意じゃないよ」

少しだけ不機嫌そうに口を尖らせながら、それでも少し朱い頬のまま繋いだ手を引いて台所へと向かう陽乃の姿に、義陰は微笑みを洩らさずにいられた。なかった。

再会を果たしてから、陽乃はとにかく義陰に過保護だ。それは彼自身が背負ってきた過去のためでもあり、陽乃や誠実以外の人間を信じられない今のせいでもある。自分のせいで陽乃の人生を縛り付けているのではないかと不安になるのも、一度や二度ではない。

それでも彼女の不自由を良しとしているのは、やはりこの笑顔を見近で見られる贅沢のためか。この笑顔を見たいがために陽乃を拘束しているのはきつと誰からも許されないだろう。それでも——彼女の優しさに甘えていいと言った彼女を信じるからこそ、今も義陰は陽乃（たひよう）に照らされる。

「……あつ、ごめん義陰。ポテトサラダに使うマヨネーズを買い忘れたみたいだ」

「じゃあ僕が行つてくるよ」

「義陰だけじゃギアを纏えないでしょ。アタシもついていくよ」

「わかった。お願いするね」

マヨイガには鍵がなく縁側には雨戸だけしか設けられていないため、玄関と裏口の戸もほとんど雨風を凌ぐだけの役割しか果たさないが、念のために隙間なくしっかり締め

ると、二人はどちらからともなく手を繋ぎ合った。

心に「不信」や「不安」というマイナス感情を持つ義陰と陽乃は、その感情をギア起動のために必要な水準まで高めるために、デトネイターではなく互いを触れ合うことで補っている。そのため、ギアを纏うためには二人が揃っていないなければならないのだ。

「いくよ、ルーナ」

「起きな、ソール」

『了解。ユナイトギア第八二二号・ルーナ、月村義陰に同調接続します』

『了解。ユナイトギア第八一九号・ソール、日向陽乃に同調接続します』

黒い靄と白い輝きを伴って姿を現したのは、繋ぎ合う二人の手首に装着されたプレスレットと、両手を覆うガントレット。

二人はギアの起動を確かめ合うと、その姿を靄と輝きに変えて姿を消した。

組織内のトラブルから発展した今回の事件。本人の苦痛やストレスはともかく、事件の規模そのものは大したものではなかった。それでも、希繋と悠生にとつて、今回の事件は今まで経験してきたものの中でも特に記憶に残るものとなるだろう。

人を信じて許そうとする希繋と、人を信じられず許せない義陰。大切なものを導き悪を裁こうとする悠生と、大切なものを導き悪から逃がそうとする陽乃。真逆なようでそっくりな希繋と義陰。似ているようでとても遠い悠生と陽乃。

彼らの衝突によって生まれるのは果たして——赦しか、裁きか。



「こちらORB日本支部・第二九番実働部隊の武城誠実だ！ たった今、ユナイトギアのものと思われる感情エネルギーを2つ検知した！ おそらくは義陰と陽乃のものと思われる！」

『こちら桐梨！ 発生地点を教えてください！』

「相手が光速移動した可能性があるため発生地点かは断言できないが、発生後5秒程度で反応がロスト。最後に確認されたのは愛知県粹津市^{いぎつ}」

『粹津市か……範囲は広くないが人口密集地だから人混みに紛れてやり過ぎつもりか。……了解。ヘリで悠生をこっちに送ってくれ。俺は先に行ってる！』

通信を切ると同時に、希繋のエクレールによるものと思われる感情エネルギーが検知され、同じく愛知県粹津市で反応が途絶えた。

やはりというか、彼らの持つギア特性の最大の強みは超スピードから繰り出される攻撃力ではなく、とにかく「認識ができない」という一点に尽きる。これは言い換えれば「一方的な認識だけを可能にする」と言ってもいい。

彼らは敵を認識できるが、敵は彼らを認識できない。認識できないということは、防衛できないという意味にも通じる。どこから何をしてくるかわからなければ防ぎようがない。

だからこそ、希繫が戦う際には相手を必要以上に傷付けないために、敢えて声を上げながら攻撃することで相手に防衛させるか、あるいは既に防衛態勢をとっている相手に対して防衛しているポイントだけを狙って攻撃しているのだ。

「だが悠生が到着するまで75分。希繫だけであの二人を抑えられるかどうか……頼むぞ希繫」

フアーストコンタクトまで、あとわずかか。

領域—フィールド—

「さすがにギアは目立つから、早めに解除して正解だったね」

「まあね。レイドリベンジャーズならギアの起動だけで場所を特定されるみただけ
ど、ORBがあそこを頼るとは思えないから、杞憂じゃないの？」

ルーナとソールを解除して、街の中を堂々と歩く義陰と陽乃。

追われる立場ゆえに、その身なりにはある程度の注意を払ってはいるものの、そもそ
も自然災害や環境汚染が相手のORBは、レイダーと戦うレイドリベンジャーズとは
違つて感情エネルギーを広域・詳細に探知する手段はない。

ましてやこの両者は基本的に不仲であるため、協力体制を取ることは考えにくく、ギ
アさえ解除してしまえば見つかることなどそうそうあるわけがない。そう義陰は高を
括つていた。

しかし——。

「その発言がフラグにならなきゃ大丈夫だとは思うけどね。あ、スーパーあつたよ。買
うもの買って早く帰ろう」

「悪いが、そういうわけにもいかない」

不意をつくその声に、二人の身体が強張る。軋む身体をどうにか動かし、振り向いた先にいたのは――。

「最弱の……ッ!」

「レイドリベンジャーズ……ッ!?」

最弱のレイドリベンジャーズ。それは即ち――『英雄の弟』『準最速』『お人好し』の意味を含むたった一人の男を指す。

その男の名を桐梨希繫。この世で最も弱く、最も優しく、そして「逃げようとする者」にとつては最も出遭いたくない人物。それが目の前に立つ彼なのだ。

「親友の頼みでな。君たちにはORBに帰ってきてもらいたい」

「親友……? いったい誰の頼みか知らないけど、僕たちには関係の無――」

「誠実さ。君たちの上司のね。表情が硬いからわかりにくいが、あれでかなり無理というか……心配してたぞ」

武城誠実。二人の上司であり、義陰にとつては幼馴染であり依存相手である陽乃を覗けば唯一ともいえる「信頼できる人物」だ。だからこそ義陰は閉口を免れなかった。他でもない誠実が、ORBを飛び出した自分たちをまだ必要としてくれているということ、喜ばずにはいられなかったのだから。

しかし、同時にそれに従えないということもわかっていた。おそらく、誠実が帰還を

促すということは、自分を虐げた局員たちは既に処罰を受けたのだろう。ならば、躊躇う理由などないようにも思える。だが、そうではない。そうではないのだ。

もはや「逃げ出した理由」はどうでもいいのだ。義陰にとって重要なのは、もはや信じられる人間というものが極めて少ないという事実。月村義陰という視点から見た世界の残酷さが、彼にとって耐えがたいものであるという真実はもう捻じ曲がらない。

「誠実さんには悪いと思うよ……。けど、僕はもうORBには戻らない。僕は僕らのやりたいように生きていく」

「ギアはさすがにORBに返すべきだが、俺個人としてはそれもいいと思うよ。だけどこつちも仕事だ。何よりお前たちがORBとも関係のない一般市民を攻撃している以上は見逃せない。それに関しては弁明はあるか？」

「あれは向こうからアタシたちに……！」

「ないよ。けどこつちだつて形振り構つてられない。使えるものはギアだつて使う。弱い僕が生きるために……この力は不可欠なんだ！」

どちらからともなく、義陰と陽乃の手が繋がれる。

「ルーナ！」

「ソール！」

『了解。ユナイトギア第八二二号・ルーナ、月村義陰に同調接続します』

『了解。ユナイトギア第八一九号・ソール、日向陽乃に同調^ア接続^クします』

夜を染める月影『ルーナ』の黒い靄と、昼を照らす太陽『ソール』の白い輝きが、二人の腕にガントレットとなって形を成す。

ギアの装着は、言葉に変えるのなら「戦意」——戦う意志だ。その意志を折るまで、二人のギアは解除されない。もはや戦うことは避けられないのだ。

「……本気なのか」

「僕らを止めようとするのなら、本気さ……！」

「止まらないんじゃない。アタシたちはもう、止まれないんだ……ッー！」

突如、二人の姿が黒と白の閃きと共に消える。希繫も即座にその肉体を電気に換え、二人を追う。僅か一秒にも満たない瞬間の出来事だったが、希繫の目は確実に二人を捉えていた。

当然ながら、二人はこれに驚いた。レイドリベンジャーズ準最速とは知られていたが、希繫の持つエクレールが持つギア特性は『電気変換』であって『光変換』ではない。故に、二人の持つギア『ルーナ』と『ソール』の光速移動にはついてこれられないはずだと踏んでいた。

だが彼はそれに追隨するどころか、二人の速度を追い越し、その進路を阻んだ。それは間違いなく、ギア特性だけではなく彼自身の身体能力がそうさせたのだと直感的に理

解させた。

「僕の「影」と陽乃の「光」に追いついた……!?!」

「これが本職の戦士、レイドリベンジャーズの準最速つてわけか……!?!」

「逃げてても無駄だ。お前たちのギア……ルーナとソールは俺のエクレールと同じ変換系特性だろ。特性としての速度だけなら俺の上位互換になっただろうけど、お前たちの力が俺を下回っている以上、俺からは逃げられない」

エクレールから赤い電光を散らしながら、希繫は二人の挙動を注意深く観察し続けた。一瞬でも気を抜けば逃げられる。だからこそ、威嚇することで相手の初動をわかりやすくするためににじり寄る。

しかし、二人はそんな希繫に対して、今までの不安げな雰囲気振り払うように、不敵な笑みを浮かべた。

「逃げられない? そうかもしれない。けど……逃げる必要がないなら、どうする?」
「何……?」

「十分だよ、ここまで来られれば……ここはアタシたちのフィールドだ!」

「——ツ!!」

フィールド、と言われて、希繫はようやくやくその地形を把握した。

光も影もバランスのとれた夕暮れの草原。光速移動はたったの数秒間の出来事だつ

たが、市街地から離れるには一秒もあれば事足りる。なのに彼らはどうしてあれほどの時間を移動に費やしたのか。

全てはこの障害物が一切ない草原と、生い茂る木々によって無数の影が存在する雑木林が隣接するこのフィールドに希繫を誘い込むため。光と影のバランスが最も高い状態でキープできるこのフィールドこそ、彼と彼女の領域なのだ。

「エクレール」

『了解。スパークステインガーを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

「ソール！」

『ラジャー。ライトイジエクシオンを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』
ギアに指示を出すと同時に、陽乃の手刀が希繫の喉元を掠めた。咄嗟に反るような体勢でそれをかわすと、左足を軸にカウンターのミドルキックを叩き込むが、彼女は身体を光に変換することでそれを透過させる。

予想していたことだが、並の攻撃速度では体を無質量化することで攻撃を無効化されてしまう。義陰の「影」に関しては電光がダメージ源になるとして、陽乃の「光」に関しては有効な攻撃手段がない。光をも焼き尽くす「熱」ならば、可能性はあるだろうが、頼みの綱である悠生はあと一時間は来られない。

続いて義陰の飛び蹴りが希繫へと迫った。だが蹴り技に関しては希繫より優れる者

などそう多くはない。ダッキングでそれをかわし、通り過ぎる瞬間に体を起こすことで、義陰の腰にシオルダータックルを打ち込む。

小さな悲鳴を上げて着地する義陰に追撃を行おうとするも、陽乃の乱打がそれを阻んだ。

『充填完了。スパークステインガー、いけます』

『充填完了。ライトイジエクシオン、いつでもできます』

希繫の周囲に12個のスフィアが浮かび、同時に陽乃のブレスレットが純白の光を照らし始める。

（質量を持たない光は威力を持たない。つまりこれはフィールド形成系のスキルか……！）

視界を覆うほどの光について目を庇うが、その隙を逃してくれるほど甘くはない。視界を奪われた希繫の胸を、陽乃の手刀と義陰の拳が痛烈に捉える。

以前よりも肉付きがよくなったとはいえ、胸体は未だ希繫のウィークポイントだ。特に骨に守られていない腹部に関してはほとんど防御力が皆無と言ってもいい。思わず蹲ってしまいそうな苦痛を耐えながら、スパークステインガーを全てのスフィアから一発ずつバラ撒く。

この眩いフィールドにおいて、目から得られる情報など無いに等しい。希繫を中心に

12方に向けて放たれたその攻撃は、当たらずともかわすために地を蹴る「音」を見つけて出してくれる。二つ分の足音を確かに捉えようと、希繫はそこに向けて残る24のスパークステインガーを全て叩き込んだ。

「くつ、ライトイジエクシヨンの影響下でもこれだけ戦えるなんて……ッ！」

「やっぱり本職だね。義陰、ここは二人で一氣に畳みかけよう」

「うん。先行は任せたよ、陽乃！」

「任されるよ」

ライトイジエクシヨンの影響下では、周囲の全てが純白に染まる。希繫もようやくその目を開くが、光が眩しすぎて二人の姿はおろか、雑木林も自分の影も、そればかりか自分の視界に映る自らの身体すら白く染まっていて、ギリギリ輪郭だけを捉えている状態だ。

それでもどうか二人の攻撃を凌げているのは、やはり彼の生まれによるものか。視覚だけでなく聴覚や触覚による状況の把握は、希繫がレイドリベンジャーズになる以前から得意としていた。その理由について話そうとはしないが、今は関係ないだろう。

ともあれ、そうした察知能力の高さに助けられ、この視界絶無のフィールドでも希繫は二人の装着者を相手に互角の戦いを維持し続けた。

「エクレーール！」

『了解。フラッシュユパルスを使用します。エモーションナルエナジー、^{チャイ}充填開始』

「ルーナ！」

『ラジャ。ダークイラプションを使用します。エモーションナルエナジー、^{チャイ}充填開始』

目蓋を閉じていても目が焼けそうなほどの光を耐えながら、義陰の突きをかわし、その腕を掴んで肘鉄を彼の胸に打ち込む。ライトイジエクシジョンの影響なのか、動きが活発になった陽乃に反比例するように、義陰の動きが鈍くなっているのを希繫は見逃さなかった。

おそらくは、ルーナとソールのギア特性によるものなのだろう。彼らの力は、肉体をエネルギーに変換して放出するエクレールとは異なり、肉体をエネルギー変換しつつ、そのエネルギーを溜め込み、溜め込んだエネルギー量に比例して身体能力を向上させる類のものなのだ。

だからこそ二人は光と影のバランスがとれた夕暮れの草原をベースに、光のフィールドを生み出した。おそらくは、ギアから聞こえた「ダークイラプション」というスキルも、その名前からして影のフィールドを作り出すスキルなのだろう。そうして切り替えながら戦うつもりに違いない。

「くっ………本当はもう少し粘りたかったが仕方ない。エクレール、やるぞッ！」

『了解。第四号ユナイトギア・エクレール、リミットブレイクします』

逆転—ストレンジ—

『—リミットブレイク。ノーブル・エクレールの展開を完了しました』

エクレールの限界突破形態、ノーブル・エクレールを展開したことにより、形勢は大きく動いた。

希^{きづな}繋の全身を覆う大量の赤い電光は、その肉体に収まりきらないエモーションナルエナジーの奔流。あらゆるスキルがチャージなしで発動できる他、その体内に流れる生体^パ電流^ルまでもが通常の数千倍の速度で伝達されている。

認識速度・移動速度・攻撃速度の全てがこれまでとは比較にならないスピードへと昇華されており、そこから副次的に生まれる精神的な余裕が、その心をさらにヒートに、その頭脳をさらにクールにさせていた。

「リミットブレイク……！ 幾多の修羅場を乗り越えた装着者だけが至れる境地のその先！ 普段はギアを戦闘に用いない僕らじゃそこには至れない……!!」

「加えて俺に目晦ましは効かない！ 匂い、音、肌を感じる風の感覚、お前たちから向けられる敵意、そして何よりも直感！ 全てが俺に視覚以上の感覚を与えてくれる！ リミットブレイクによって全身を走る生体^パ電氣^ルが鋭敏化している以上、その感度は普段の

比にならないからな！」

「そのまま感度が上がり続けてショック死してくれればいいのに……い！」

舌打ちをしながら悪態を吐く陽乃はるのに動じることなく、希繫はその姿を消した。光のフィールドを形成していることによつて有利になったのは陽乃だけではない。その眩さゆえに通常よりも相手に捉えられにくくなっているのは希繫も同じこと。

義陰よしかげと陽乃は咄嗟にその体を光と影に変換することで打撃の無効化を図るが、それと僅かな秒差もなく吹き飛ばされたのは義陰の体だった。

「義陰っ!？」

「ごほっ、ごほっ……! さすがに、相手が稲光じゃあ無効化できないか……い！」

「そういうことだ。同じ光で、なおかつ純粋な光度を好き勝手に高められる陽乃には効かないが、真逆の性質を持つ影になら、電光でも十分に効くだろう?」

「くっ……よくも義陰をつ!!」

まあ、恨まれるよなあ、と言いつつも、その表情は未だ動かない。確かに二人の持つギアの力は間違いなく希繫の上位互換とも呼べるものだ。しかし、それはあくまでギアのスペックだけの話。

身体スペックに関しては、タフさとパワーという点で負けているものの、純粋なスピードとスタミナは圧倒的に彼の方が上だと言えるだろう。そして、彼らのギア特性は

装着者のスピードが大きく影響する。スピードの地力の差が開くほどに、ギアと装着者の総合能力の差も開いていく。

なおかつ、スピードという概念が戦闘に与える最も大きな影響力は、攻撃速度や回避速度という「当たる」「当たらない」の部分が大きい。スピードが高まるほどに攻撃が一方的に当たり、防御を必要としなくなっていく。

本来ならば光と影を「パワー」にすることもできる義陰と陽乃が、ここまで徹底的にスピードにばかり換えているのは、それが大部分の理由であった。

「どうした、それがお前の最高速度か。その程度なら目を閉じていても十分に捉えられるぜッ！」

「けど、義陰と違ってアタシには攻撃が届かないだろ！」

「そうさ。けど、それはつまりお前じや義陰を庇えないって意味でもある。そうだろ？」

そう言うって、希繫は陽乃の猛攻を軽々と潜り抜けて義陰へと迫った。先ほどのダメージが未だに抜けていない義陰では、この攻撃はかわせない。

「……やっぱ、この戦い方は胸糞悪いな」

「う……あ、あつ……」

「陽乃ッ!!」

動けない義陰を庇ったのは、光変換を解いて実体を取り戻した陽乃だった。光云々の

話をしていたせいで忘れがちだが、希繫の体は電気である。肉体に打撃的ダメージを与えることはできないが、電撃として相手にショックを与えることは十分に可能だ。

まして今はリミットブレイク中であり、そこから放たれたのは先ほどエモーショナルエナジーをチャージしていたフラッシュパルス。攻撃と同時に、相手の生体電流を急激に加速させることで、与えたダメージを鋭敏化させるスキル。肉体にダメージはないが、脳と心臓に後遺症ギリギリレベルのショックを与える技だ。

希繫自身が殺傷を好まない性格であるがゆえに後遺症を一切残さず行動不能に陥らせるが、これが通用したのはあくまで陽乃にとって義陰が自分を犠牲にしても庇いたい存在であったからこそ。二人の絆を盾にとつて与えた一撃でもあった。

倒れ込む陽乃を、義陰が咄嗟に抱きとめる。仕留めようと思えば十分すぎる隙ではあるが、希繫はなぜか何もしなかった。ただ、二人の会話を沈んだ目で見つめている。

「陽乃ッ！ 陽乃おッ!!」

「よし、かげ……にげ……て……」

「ダメだよっ！ できるわけない！ 陽乃を見捨てるなんて、僕にできるわけないだろっ!!」

「けど……この、ままじゃ……」

陽乃の瞳に、無表情のまま佇む希繫が映る。それを見て、義陰の中で何かが切れた。

今まで、彼女の瞳には義陰だけが映っていた。どんな時、どんな場所でも、彼女は義陰だけを見ていた。それが義陰にとつて唯一の誇りであり、そしてまた唯一の安らぎでもあった。

だが今は違う。彼女は自分を案じるがために……いや、この際どのような理由であっても関係はないのだろう。とにかく、彼女の瞳には義陰ではなく「別の男」が映っていた。

憎しみではない。悲しみでもない。ふつつつとこみあげてくるこの感情の正体は——
怒り。

全身を滾るその「怒り」が、彼とルーナを昂ぶらせた。

「ルーナッ！」

『ラジャ。第八二二号ユナイトギア・ルーナ、リミットブレイクします』

ルーナから流れたアナウンスは、希繫と陽乃だけでなく、義陰までもを驚愕させた。しかし、この「イレギュラー」は「アクシデント」ではない。利用できるものならばむしろ好都合とばかりに、義陰はさらに怒りのボルテージを高めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

雄叫びと共に彼の全身を黒い靄が覆い、その形が少しずつ露わになる。

背中から伸びる巨大なマシンアームと、両脚を覆う巨大なレッグアーマー。そしてそ

の右手首には漆黒のブレスレットが装着されており、マシンアーム各関節部からは黒い靄が洩れ出ている。

『リミットブレイク。ルーナ・ルクスの展開を完了しました』

「……まあ、あれだけ煽つたらもしかすると出来るかもなあとは思つたよ」

ユナイトギアは感情兵器である。兵器である以上、もちろん装着者自身の経験や修練によつてリミットブレイクの成功率は高まるが、それ以上に大切なのは感情の昂ぶりだ。

ユナイトギアはエモーショナルエナジーという、いわゆる感情のエネルギーを元にしていて、以上、感情が滾るほどにリミットブレイクの成功率と安定性が高まる。しかし、感情にも質というものがある。

その中でも怒りという感情はとにかく爆発力が高く、一時的に燃え上がる感情としてはトップクラスのエネルギーを誇るが、しかし同時にその燃焼を維持することが難しい「瞬間的なエネルギー」だともいえる。

先にリミットブレイクした以上、本来ならば残り時間が短いのはノーブル・エクレールドだ。しかし、怒りという燃費の悪いエモーショナルエナジーを使った初めてのリミットブレイク。どう考えてもルーナ・ルクスは本来のリミットブレイクの力を出し切れていない。

だからこそ、希繫の表情は変わらず、パワーアップしたはずの義陰には焦りが見えていた。

「ルーナッ！」

『ダークイラプション』

ルーナのスキルアナウンスと同時に、光に満ちていた世界が影に塗られた。

ようやく目を焼く光がなくなったことで希繫は目蓋を開けたが、相変わらず周囲には何も見えない。あるのは自分を含め三つ分の気配と匂い、そして風の音だけ。先ほどまでは刺すようだった敵意は、相手が弱っているからか今はあまり強く感じられない。

不意に聞こえたのは、地を蹴ったような擦れた音。だが気配がこちらに近付く様子はなく、むしろもうひとつの気配——陽乃へと近づいていく。

「逃がすかッ！」

おそらくは、戦闘を放棄して陽乃を回収しつつ逃走を図ろうとしたのだろう。赤い稲光となって二人の気配へと接近する希繫だが、義陰も彼がこれに気付かないなどとは思っていない。

むしろ視界が急激に変化したことで警戒心が増し、それによって副次的に判断能力が上がっていることまでは予想していた。だからこそ、義陰は陽乃に近付くと、あえて彼女の前で動きを止めた。

『エナジースパーク』

視界の全てが影で染まっている今ならば、エナジースパークが放つ電光は凄まじいほどの眩さになるはずだ。そして、体を影に変換しているならば、その電光は彼に大ダメージとなるはず。

そう判断し、おそらくはこれが決め手となるだろうと思った希繫は、次の瞬間に自らのミスを悟った。

『シャドウアブソープ』

それまで視界を覆っていた影が一瞬にして晴れ、空に浮かぶ月と星の光に照らされ現れたのは、もはや拳というよりも巨大な壁と化したルーナ・ルクスのマシンアームを振りかぶる義陰の姿。

そう、彼が陽乃のライトイジエクシオンをダークイラプションで上書きしたのは、急激な光彩変化による動揺を誘うためではなく、作り出した影を全て吸収して攻撃力に転換するため。

この一撃が、義陰にとって唯一にして最大の逆転劇。

「おおおおおおおおおおおつ!!」

『シャドウヴァニッツシャー』

「エクレールッ!」

逆流—リバー—

「……やられた」

義陰よしかげの渾身の一撃であるシャドウヴァニツシャーを、リアクターシールドで受け止めつつ、それを足場として衝撃に身を任せながら跳び退いたことで、ひとまず無傷を保った希繫きづな。

しかし、彼が足の痺れに耐えながら元の場所に戻ると、そこには既に義陰と陽乃はるのの姿はなかった。おそらく、義陰もあの一撃で希繫を仕留めきれるとは思っていなかったのだろう。だからこそ、逃げの一手としてあの視界を覆うほどの大技を選んだに違いない。

「さすがに悪者の気分で戦うとギアの出力も下がるな、エクレール」

『私たちユナイトギアは装着者の感情に応じて出力を向上させます。ご自分の行いに不満を持つて扱うのであれば、リミットブレイクできたことさえ奇跡ともいえます』

「いや、リミットブレイクは俺とお前ならできると信じてたよ。けど、その後が問題だったな。出力は著しく下がるわ、制限時間がみるみる減っていくわで焦りに焦った」

ギアを解除しながら、エクレールと今回の反省点を振り返る。無論、任務失敗の報告

もしながらだが、おそらく誠実せいじはエクレールを通じて状況をリアルタイムで中継していったはずなので、既に悠生ゆうきにも連絡は行っているだろう。

エクレールの言う通り、今回の戦闘では希繫には幾つかの「無茶」が入っていた。というのも、希繫は今回の事件において、義陰と陽乃を捉える理由が「誠実との友情と義理」しかないのである。

レイドリベンジャーズとしてレイダーを討つことや、ユナイトギア悪用犯罪者を捉えるといった、世界の命運を肩に乗せた「使命感」による戦いではなく、あくまで友人の頼みを聞いているだけに過ぎない。

もちろん、義陰と陽乃にどんな理由があれ、彼らが数名の民間人にギアを用いて暴力を働いたことに目を瞑ることはできない。しかし、一方で彼らはORBにおける一連のいざこざの被害者であり、組織から逃げたくなる理由も納得できてしまう。

彼ら自身の危険性は決して低くはない。しかし彼らの性格や経歴から、その危険性が表立つことはあまりにも考えにくい。戦闘直前の会話で、陽乃が自身の働いた暴力行為に対して物申すような態度を見せていたことも気がかりだ。

いずれにせよ、彼ら側の視点に立って調査をし直す必要があることは疑うべくもない。果たして本当に彼らは「追われる」べき対象なのか。そこを見極め、誠実とも話し合う必要がある。

『ですが、その無理筋なりリミットブレイクのせいで、随分と素敵になりましたよ』
「はっ？」

『携帯端末のカメラ機能でご自分の姿をご確認なさってはいかがでしょう』

なんのこともかと思いつながらも、ひとまず逢依に帰宅が遅れる連絡を入れてから、そのままカメラ機能をオンにして、自分の姿を映した。すると――。

「……前に白露しろろが言っていたのはこういうことか」

そこに映っていたのは、鮮やかな赤色の瞳と、艶のある自慢の黒髪の毛先を彩るかのような深紅のグラデーション。

何故、と問うまでもなく原因は明らかで、これまで何十回と繰り返したりリミットブレイクが、今回の無理筋な運用によってとうとう一線を越え、エモーションナルエナジーの逆流が起きてしまったのだろう。

「逆流の影響か、ギアを纏ってないのにやたら体が軽いな。生身にアクセルアクションを使ってるような気分だ」

『生身でもマツハーでしたよね？』

「実際に測ってみないとわからないけど、感覚的には今ならマツハー、2くらいいいけそうだな」

そうですか、と半ば呆れと驚嘆が混じり合ったような様子で会話を受け流すエクレー

ルに、希繫は苦笑いを浮かべた。

さすがに逆流の影響となれば、もはや今後死ぬまでずっとこの色とは付き合い続けなければならぬ。となると、逢依あいつに隠し通すことはできないだろう。だがそうすると今回の無茶は知られることになるだろう。

ネガティブとはいかないまでも、感情の勢いが下向きのみまみりミットブレイクを運用し、それを維持した状態で上位互換のギアを所有する相手2人を相手どつて戦闘となり、しかも取り逃がすという有り様。

取り逃がしたことに関しては立場的な叱責に留まるとしても、それ以外に関しては小転こころも交えてお説教となりかねない。いや、なりかねないというよりも、なるに違いない。

「……でもたぶん白露が一番怒るだろうなあ」

実のところ、桐梨家において逢依と小転の説教というものは、相手のミスを論理的に指摘して、問題を明らかにして反省を促したり、改善案を提示したりするだけの、いわばミーティングのようなものであつて、感情的に言葉をぶつけるようなことはほとんどない。

それは、逢依と小転の両名があまり感情的にならないタイプだということもあるが、それ以上に感情的に言葉をぶつけて心にもない批難をしたりすることで決定的な溝を

作ることを避けているから、ということが大きく、意識的・意図的にそうしているのだらう。

だが白露はまだそういった論理的な思考ができる年齢ではない。普段が大人しく温和であるためそうは思えないが、彼女は割と感情に身を任せてしまうことが多々ある。だからこそ、時として母親や伯母よりも厳しい言葉を投げつけることがあるのだ。

『グッドラック、ディアマスター』

「お前こういう時ホント他人事みたいに言うよな」

『他人事なので』



「——で？ 結局どうだったんだ、昨夜は^{ゆうべ}」

「案の定というか、やっぱり白露にめっちゃ怒られた」

翌日。さすがにORBとの協力任務があるとはいえ、希繫と悠生にも通常業務がある。ORBは引き続き義陰と陽乃の行方を追いながら、希繫と悠生はレイドリベンジャーズとしての仕事に追われていた。

前日に積もらせたまま放置した仕事を午前中に大方片付け、食堂で夕飯がてら雑談に

興じていると、その話題は当然ながら希繫の『逆流』の方へと寄っていく。

「とはいえ「気付いたら逆流してた」は一番いいパターンだろ。普通なら逆流は膨大なエモーショナルエナジーが全身を駆け巡ってドギツイ苦痛を伴うからな」

「まあ本来のとは違った形で無理矢理にリミットブレイクしたおかげか、今朝起きた時めっちゃ全身痛かったけどな。エクレールに電気マッサージしてもらいながら2時間くらいで治ったけど」

「逆流前後のスペックの差を把握しきるまでは無暗に力を入れるなよ。軽く握ったつもりで物壊したり、軽くジャンプするつもりで屋根登ったりするらしいからな」

「朝、靴履いた時に踵を直そうとして爪先トントンしたら玄関のタイルに罅入れたからそれは痛感してる」

逆流は、それに至るまでの過程に苦痛を伴うとはいえ、なってしまうえばデメリットなしで身体能力の向上が見込める現象であり、ユナイトギア装着者たちにとっては「意図的にしようとは思わないけどなったらラッキー」が共通認識だ。

しかし、身体能力がある機会を境に急激に変化するというのは、実際に逆流した者からするといいことばかりではない。意図せず周囲を傷付けたり、無意識に物を壊すことも少なくないと報告されており、それもまたユナイトギア開発部が『逆流』を正規の運用現象として認めていない理由のひとつだ。

力に善悪はない。力はあくまで力なのだ。それを制御するか、暴走させるか。それが力を持つ者を善悪に分けるのだ。人を——人類を守護する組織が持つ力が「制御できない力」であってはならない。それが開発部の理念なのである。

「腕力とか握力はそこまで変化はなかったかな。今までは逢依を抱えるのがやつとだったのが、今は白露を抱き上げられるようになった程度か」

少し前に白露に抱っこをせがまれて泣く泣く断つたことを思い出すと、感慨深くすらあるのか、希繫の目尻にうつすらと一滴の涙が浮かぶ。

「誤差だろ。ていうか逢依って白露より軽いのか？」

「逢依が34キロで白露が38キロだな」

「白露はともかくなんで逢依の体重まで把握してんだオマエ」

「体重管理の話をしてた時にポロっと」

悠生が家を出て、体の鍛え方を今までとは違う方向へと切り替えたことで、体重管理は希繫にとつて非常に大きな課題だ。骨と肉は増やさなければならぬが、脂肪は今ままで以上に絞らなければならぬし、かといって体重はある程度増やしつづ、今のスピードを維持しなければならぬ。

そのため、希繫の体重管理は彼だけではなく、彼の食事を一身に担っている逢依にとつても無視できない問題だった。食事はもちろんだが、職場のトレーニングルームで

行う運動だけではなく、家でもできるストレッツや、睡眠時間の確保も無視できない。

となると、逢依もある程度はそうしたトレーニングに付き合わなければならぬ。そこで洩れたのが、彼女の体おとめのヒミツ重であった。

「……逢依で感覚おかしくなりがちだが、白露もたいがい軽いな」

「適正体重より8キロ少ないからな。俺と逢依もさすがに心配になって食事を増やそうとはしてるんだが、本人が小食だからな」

「量はそのままにして高カロリーなもの食わせるとかしてやれよ」

「俺の食事が低カロリー高タンパクだからな、白露用の献立も別けて作ると逢依の負担が倍になる」

食費に関しては心配ないけど、という言葉は心に留めた。というのも、桐梨家に限らず、レイドリベンジャーズは国家機関であるため、どの部署であつても基本的に高給である。その中でも特に危険な任務を担う前線部隊は年収およそ2500万弱。

希繁一人でも家族四人を養うには十分だが、逢依も同じ部署で働いているため、桐梨家の貯金はとんでもないことになっている。おかげで所得税もとんでもないことになっているが。しかも桐梨家が暮らす家は、彼らの母親である笹倉婚代が新居を一括で購入したため、住宅費すらないという有り様である。

ではそんなものをポンと与える婚代こんざいはというと、貯蓄が国家予算みたいなことになつ

ているのだが、それはおいておこう。

「オマエ、料理だけは手伝えねーからな」

「手伝わたら邪魔どころか無意味に屍ができるだけだからな。俺も好き好んで被害者を出したくはない」

二人揃って表情を暗くすると、食堂に休憩時間の終了を告げるアナウンスが流れた。

このくらいにしておこう、とはどちらが言うこともなく、揃って席を立ち、各々の職場へと戻っていく。

「希繫」

「ん？」

「仕事が片付いたら、帰る前にトレーニング付き合っただけでやるよ。最近オマエとはやっとなかったからな」

「おっ、サンキュー悠生。じゃあまた後でな」

磁力—マグネット—

「なんだコレ？」

溜めていた業務の半分をようやく片付け終えた頃、不意に逢依あいつから手渡されたのは、いくつかの弾丸にも似た形状のカプセルと、おそらくはそれを使うためのプレスレットだった。

カプセルには複数のバリエーションがあり、全部で7種類。形状はどれも同じだが、カプセルの表面をコーティングしているフィルターのカラーリングが異なっている。

「技術開発部から支給された新兵器よ。確か名前は……ユニティバレット、だったかしら。逆流現象が起きた装着者にのみ使用可能で、逆流して漏れ出ているエモーショナルエナジーを掬いとしてスキルに転用してくれるらしいわ」

「ようは余剰エネルギーのリサイクルか。でもなんでこんなに種類があるんだ？」

「基本的には一人につきひとつなのだけれど、あなたの場合は特にエモーショナルエナジーが多くて、逆流現象で洩れている量もそれに比例して多いでしょう？ だから再利用するエネルギーにも複数のバリエーションを持たせて、戦略性を高めるのが目的らしいわ。ほら、あなた高機動力で突進する以外の決め手がないでしょう？」

確かに、希繫きづなの基本戦略は相手をスピードで翻弄し、複数の牽制技や補助技を巧みに使いこなすテクニカルなタイプだが、決め手となる技は超スピードで突進して跳び蹴りを叩き込む「クリムゾンインパクト」くらいしかなく、戦略的に直線的だと言わざるをえない。その戦略のシンプルさを補うための、今回の追加兵器。

しかし、これを希繫に渡すことができたのは、ほとんど偶然といってもいい。なぜなら、希繫は感情豊かである以上に、感情を抑え込むことを得意としているからだ。

これまで、彼の膨大なエモーショナルエナジーと度重なるリミットブレイクによって、逆流現象はいつ起きてもおかしくはない状態だった。しかしそうならなかったのは、彼がそれらを上回る「自分を律する力」を持っていたからに他ならない。

今回のような、精神衛生的に不調な状態での無理くりなりミットブレイクを敢行していなければ、彼はおそらく永遠に逆流現象を引き起こすことはなかっただろう。

「事実とはいえボロクソ言ってくれるな……」

「ちなみに、あなたのユニティバレットを製作するにあたって、複数のシミュレーションモデルを準備してくれたのは優芽ゆめちゃんらしいわよ」

「優芽が？」

「ええ、後でお礼を言っておきなさいね」

和泉優芽。希繫のことを尊敬している、という点においては並ぶものがなく、その敬

愛ゆえにかつて希繫と敵対したことがある装着者。

希繫や悠生ゆうきのように「極端に秀でたスペック」で戦うのではなく、スペックの低さを変幻自在の技と戦略で補うタイプの知能派であり、常に複数の戦略パターンを用意することで相手の土俵に絶対に乗らないスタイルを用いる。

希繫のスペックや思考パターンの知識という意味で逢依に匹敵するだけでなく、彼と「敵対したことがある」という点において、逢依でさえ知ることもない希繫の強み・弱みを熟知している、いわゆる「希繫対策」のプロフェッショナルである。

しかし、希繫の対策を熟知しているということは、逆にそれが味方となった場合、この上ない情報アドバンテージとなりうる。「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」という言葉の通り、優芽の助言はこの言葉の少なくとも半分を完全なものにしているのだ。「そうか、優芽が……。あいつ、情報部に入ってから録に連絡もできないくらい忙しくなっただけで言っただけに……」

「ユニティバレットが七色なのも、もしかしたら彼女なりのエールなのかもしれないわね」

「……赤あか・橙やまぎ・紫あい・白銀しろろ・群青せいじ・黄かなえ、そして『虹あいに』か……。そうだな、最ツ高に心強いよ。今度、優芽にメシでも奢ってやらなきゃな」

そう言い、ユニティバレットを腰のホルスターバッグに仕舞うと、突如としてオペ

レーションルームだけでなく、レイドリベンジャーズ永岑支部全体に、けたたましいアラートが響き渡った。

レイダー出現による警報とは異なる、この支部全体への警報。逢依はすぐさま非常回線で既に帰宅した隊員たちを呼び出し、希繫を連れて緊急指令室へと急行した。

「緊急アラートなんて何年ぶりだよ！ 逢依！ みんなに連絡はとれたのか!？」

「諸星ちゃんと空宮ちゃんと天宮くんは既にこつちに向かつてるわ！ けど望月ちゃんが連絡とれなくて……!？」

「……な時に……!？」

普段は何かと明るく楽観的な望月だが、彼女は仮にもレイドリベンジャーズの花形、第二前線部隊の一因である。ユナイトギアを持つ希繫と逢依には及ばないものの、ギアさえあれば希繫を軽く超える戦闘センスの持ち主であり、簡易型ELBシステムしかない今でも、その実力は非常に高い。

だからこそ、この非常時に不在というのはかなり痛手なのだが、希繫と逢依はひとまず通信機を仕舞い、走る足に力を入れ続け——ようとしたりした時、不意に希繫がその足を止めた。

「希繫……?？」

「先に行つてろ、逢依。俺はちよつと野暮用ができた」

「何を言つて——つて、あれは……?」

逢依に背を向け、来た道を通つ直ぐ見つめる希繫の視線を追うと、そこに居たのは一人の黒衣の青年。

両腕にはガントレットが嵌められており、右手にはおそらく本体であろう黒いブレスレットが装着されている。その風貌からして、ユナイトギア装着者なのだろう。

しかし、その雰囲気は明らかにレイドリベンジャーズのそれではない。

「義陰……! どうしてお前がここに……ッ!」

「僕はもう、我慢しないつて決めたんだ。今まで何度も我慢して……その度に理不尽を背負つてきた! もうそんなのは嫌だ! 何より……僕が我慢したせいで陽乃にまでその理不尽を背負わせるくらいなら……今度は僕が理不尽そのものになってやるッ!!」

「やめろ義陰! レイドリベンジャーズに手を出せば、指名手配じゃ済まないぞッ! 今ならまだ——」

「もう間に合わない! もう戻らない! 僕の決意はもう覆せないッ! 陽乃を傷付けた君に報復して……僕は僕たちを傷付けたこの社会そのものに復讐するッ! 僕こそが新たな強襲する復讐者だッ!」

義陰の手から放たれた黒いエネルギー球をかわすと、希繫は舌打ちをしながらも仕方

がないと腹を決め、エクレールを起動した。

「……任せていいのね？」

「ああ。後で行く」

「そう。……負けないで」

「おう」

視線を交わさないまま短く会話を終えると、希繫は目の前の義陰と睨み合う。

「ルーナッ！」

「エクレールッ！」

『ラジャ。ブラックバレットを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』^{チャージ}

『了解。スパークステインガーを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』^{チャージ}

同時にエモーショナルエナジーをチャージすると、二人は同時に姿を消した。希繫の跳び回し蹴りが義陰の頭を薙ぎ払うように迫るが、義陰はそれを屈んでかわしつつ、もう片方の足を掴んで廊下の壁へと投げつける。

だが希繫はその壁を足場として体勢を整え直すと、その脚をバネにして床・壁・天井を縦横無尽に駆け回りながら義陰に連続キックを叩き込む。

これまでORBとしてギアをほとんど戦闘に用いてこなかった義陰は、ギアの特異な性質を理解していても、それを戦闘で利用する際の利点や欠点を深く追及してはこな

かった。それが今、希繫という「アームズを使わない装着者」を相手にしたことで決定的な仇となった。

アームズを持たない装着者は、それを持つ者に比べて決定打やスキルのバリエーションが狭くなりがちだが、こうした狭い空間での戦闘ではかなり自由度が高く、また得物を失うことがないため安定性が極めて高い。

まして希繫はスピード型の装着者である。直線的に長く横幅の狭い通路は、相手の行動範囲を狭めつつ足場となる場所が多く、突進技の助走に必要な距離が稼げる絶好のフィールドと言える。

「ふっ、はっ、たっ、やつ、だあッ！」

（ぐっ……！　電光を纏っているせいで体を影にしてもダメージが入るばかりか、純粋な速度で負けているせいで目で追えても体が回避に間に合わない……ッ！）

「もうよせ義陰！　こんな閉所で俺に勝てるわけがないだろう！」

「やめられるかッ！　たとえ満身創痍だろうと、君だけは絶対に倒すッ！　陽乃を痛めつけた君だけはアッ!!」

だがどれほど不利な状況であっても——いや、不利な状況だからこそ脅威と化するのが「意地」である。まして彼らは感情を力と変えるユナイトギア装着者。意地になればなるほど力を増すとわかっていて高を括るほど、希繫は甘くない。

「なら……ここで止めさせてもらおうッ！」

『充填完了。スパークステインガー、いけます』

「やってみればいい……ッ!!」

『充填完了。ブラックバレット、いつでも』

放たれるのは電撃の槍と漆黒の弾丸。だがそのどれもが相手を掠めることなく空中でぶつかり合い霧散する。そうして互いの撃ち合いを引き分けると、今度は義陰から攻め込んだ。

電光によつて影に打撃を与えられる以上、電光に打撃を与えるのもまた影だ。超光速を可能にする希繫に速度で劣るとはいえ、影の速度もまた光速に等しい。撃ち合いが終わる直前の不意を衝いて放った拳は、希繫を確かに捉えた。

「速度を優先するあまり防御能力に劣るってうのは本当らしいね……!」

「がふっ……! ぐうっ……!」

「たった一撃入れただけでそのダメージ。僕だけの不利つてわけじゃないみたいで安心したよ! たあっ!」

入ったのはたった一撃。しかしその一撃のダメージは大きく、そしてそのダメージを堪えきれず生まれた隙もまたあまりに大きい。

一瞬——ほんの僅かな瞬間に生まれた隙は、一撃、また一撃と続けざまに繰り出され

る攻撃によって開いていき、さつきまで防戦一方だった義陰が、今度は一方的に攻め続けている。

悠生に家を託され、体を鍛え直している今だからこそ耐え続けてはいるが、もしも以前の希繫であれば、既にその猛攻を防いでいる両腕はへし折られ、勝負は彼の敗北が決していたに違いない。

「くっ……うっ……！」

『ディアマスター、新兵器の使用を推奨します』

「そうは言うけど、今は防ぐので手いっぱいなんだよッ！」

『では、私にお任せください』

そう言うと、エクレールは磁気を操り希繫のホルスターバッグから引っ張り出し、左腕のブレスレットに装填する。

『あとはブレスレットのスライドを引くだけです』

「……電力は当然として、磁力まで扱えるって今初めて知ったんだが」
『些細なことです』

乱戦—ツーマンセル—

「アクセスロード拡張接続！ ユニティバレットツツ！」

『了解。ユニティバレットにアクセスロード拡張接続します』

ユニティバレットを装填したプレスレットのスライドを引き、エクレールに接続すると、プレスレットから赤い光が迸り、エクレールの足首両側面にブースターが展開された。

「この武装……あの時菜アイツ咲がつけた追加機能の実戦型か！ なら……使い方はわかってるツ！」

よしかげ義陰の攻撃そのものは「見えて」いる。受けたダメージに怯む瞬間を継ぎ足すように打ち込まれるせいで回避ができなかったが、ユニティバレットをアクセスロードした際に発した光に阻まれ、この一瞬に限ってはその限りではない。

故に希きづな繫はすぐさま攻撃に転じた。既に義陰の拳は追撃を撃ち込もうと振り被っている。しかし、その拳を弾くように振り上げたのは、希繫の右脚。先ほどまでの攻撃速度とは比べ物にならない鋭さで、その一撃を打ち破った。

「なっ……！」

「エクレールツ！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

振り上げた踵を義陰の右肩に落とし、膝をついた彼の身体を大地に打ち付けるように踏み潰すと、右脚で肩を、左足で手を踏みつけて、チャージ完了までの行動を封じる。

「もう勝負は見えただろ！ 大人しく投降しろ……！ これ以上戦って、傷ついて、陽乃が悲しむだけだってわからないお前じゃないだろ！」

「わかっているのは君だ！ たとえどんなにボロボロになっても復讐さえできればそれでいい！ 復讐が叶っても叶わなくても陽乃を傷付けられた事実が**はるの**変わらないのなら……だったら復讐して少しでもこの怒りを晴らした方がいいッ！ それに……これで勝ったつもりなら大間違いさッ！ そうだろう、ルーナあッ！」

『ラジャ。肉体を影に変換します』

電光によって触れることが可能になっていたはずの義陰の肉体。だが彼はまるで地面に吸い込まれるように消えた。

「消えた……？ いや、影……影かッ！」

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

希繫はすぐさま肉体を電気に変換し、周囲を赤い電光で照らそうとするが、それを阻むように希繫の影からリミットブレイク状態の義陰が現れ、彼の頭上からその巨大なマ

シンアームを振り下ろす。

躲しきれないと判断した希繫は即座に防御態勢に入るが、その頑強なマシンアームと脆弱な希繫の腕では強度の差は歴然。骨の軋む音を伴いながら勢いよく吹き飛ばされた。

『肉体を電磁力に変換します』

肉体を電磁力に変換し、電磁体を再び肉体に戻すことで怪我そのものは即座に修復されるが、その間に生まれた痛みと隙は埋められない。

体勢を整えて義陰の追撃に備えるが、視界には既に義陰の姿はなく、おそらく陰に紛れて攻撃を仕掛けてくるつもりだろうと警戒した希繫だったが、いつまで経っても襲ってくる様子がない。

これも油断を誘うためか、と思いつつも、ならば敢えて警戒を解いたフリをして迎撃しようと思えば構えを解くと、通路の奥——緊急指令室の方角から巨大な爆発音が響いた。

「まさか……ッ!!」

再び電磁体となると、希繫はすぐさまその場を後にした。

義陰の言う「復讐」が希繫を倒すことではなく「希繫を傷付ける」ことだとしたら、希繫が最も傷つくものは——希繫が最も傷ついてほしくないものは、たった一人の少女でしかありえない。

どうか杞憂であつてほしいと願ひながら、永遠にも等しい一瞬の果てに緊急指令室の扉を開けた。

「逢依ッ!!」

「希繫……っ!」

爆発の影響か、壁も床もいたるところが焼け焦げ、数え切れないほどの資料が燃え盛る中、そこに立っていたのはたった一人の巨体の男と、その男と対峙する一組の男女。逢依と、その場に居た多くの隊員たちは、大男の後ろに隠れるように座り込んでいた。その男の名は――。

「悠生!」

「遅かつたじゃねーか、希繫。あんまり待たせるもんだからうっかり二人まとめてぶつ潰しちまうとこだったぜ」

大郷悠生。最強のレイドリベンジャーズにして絆ファミリイの家族の長兄。胸に滾らせた「勇氣」の炎は後に続く者を導き、全人類の頭上に輝き続ける「太陽」にも等しい。

そんな太陽に灼かれるように膝をついているのが、月影よしかげと陽光はるのの二人だった。誠実から受け取った資料によれば、二人揃っていないければギアを纏えないところからして、義陰とは別の場所で行動を起こしているのだろうとは察していたが、ここで合流する手筈になつていたようだ。

しかし、ここでこうしているということは、その手筈において悠生との正面衝突は想定外だったか。あるいは彼の存在こそ知っていても、担当地区がここであることは知らなかったか。思い返してみれば、希繫と悠生が二人で義陰と陽乃を追っている時も、実際に会ったのは希繫だけであった。

「最強と準最速……！　まさか二人揃ってこんな地方支部にいるなんて……！　でも、それでも僕らなら、僕たち二人ならッ！　いくよ陽乃！」

「うん……！　やってやろう、アタシたちの反逆は、こんなところで終わったりしないって証明してやるんだ！」

それでも、二人の瞳に宿る怒りと報復心は消えていない。

もはやただ説得を続けても言葉が届くとは思えない。二人の闘志を折り、会話が可能な状態まで持つていかなければ、彼らの怒りが留まることはないだろう。

ならば——やることはひとつ。

「希繫、悠生。あなたたちが追っていた相手が彼らなら、あなたたちが始末をつけなさい」

「トーゼンだろ！　久しぶりに活きの良さそうな得物が網に掛かったんだ、止めても止まらねーゼッ！」

「……逢依は他の隊長陣と共に被害を確認し、対応に当たってくれ。これだけの被害が

出たんだ、みんなの不安を嗅ぎつけてレイダーが出現してもおかしくない」

「任せなさい。それと、任せたわよ。必ず彼らを……救つてあげなさい」

逢依たちが緊急指令室を出ていくと、四人がそれぞれのギアを手にその名を呼ぶ。

「エクレールッ！」

「スヴィルカーニイ！」

「ルーナ！」

「ソールっ！」

『了解。ユナイトギア第四号・エクレール、桐梨希繫に同著接続します』

『了解。ユナイトギア第九一三号・スヴィルカーニイ、大郷悠生に同調接続します』

『ラジャ。ユナイトギア第八二二号・ルーナ、月村義陰に同調接続します』

『ラジャー。ユナイトギア第八一九号・ソール、日向陽乃に同調接続します』

それぞれのギアを展開したと同時に動いたのは、希繫と義陰。まるで互いの動きを知っているかのように、互いの猛攻が火花を散らし合う。

そんな二人に出遅れて、悠生を狙う陽乃。しかし光速で繰り出す牽制技の悉くが悠生の眉一つ動かすことすらできていないことに気付き、その手段を変えた。

「小手先の技が効かないのなら、デカいのを一発ブチ込んでやればいいだけ！ ソールっ！」

「ラジャー。グリッターストームを使用します。エモーショナルエネルギー、充填開始」
「やっとか。イイぜ、そーいうのを待ってたんだけ。やっぱ男ならドデカいのの応酬！
これが一番燃えんだよな！」

「アタシ、女なんだけど？」

知ったことか、と笑い飛ばすと、悠生もいよいよ攻勢に出た。その巨腕から繰り出される一撃必殺の拳は、周囲の光を吸収して強靱・剛腕となった陽乃の手ですらも防ぎきれず、緊急指令室の壁に大穴を開けて外へと吹き飛ばした。

そんな彼女の元へ駆け寄ろうとする義陰だが、希繋の繰り出す超光速のラツシユをいなすだけで手いっぱいなのか、どうにか戦場を室外に移すことには成功するも、陽乃とは離されてしまう。

とはいえ、希繋もまた余裕とはいかなかった。義陰と陽乃のコンビネーションは痛感している希繋にとって、二人が連携を取りやすい状況に持つていかれることこそ防げるも、障害物や足場の多い室内という圧倒的アドバンテージを失った今、状況は僅かにだが義陰に傾きつつあったからだ。

「スヴィルカーニイ！ 火イくべてやれ！」

『了解。温度あるものの熱量を操作します』

「熱っ!!? 服が燃えて……っ！ ソール！」

『ラジャー。肉体を光に変換します』

スヴィルカーニイのギア特性『熱量調整』によって服を燃やされ、慌てて服飾ごと肉体を光に変換して延焼を免れるが、その隙について悠生の放った特大の火球が陽乃に直撃する。

いかに肉体が光であつても、その光すらも焼き尽くす熱には敵わない。そして悠生の炎は「勇氣」の炎でもある。敵が強ければ強いほどに燃え盛り、背後に自分よりも弱いものがあるほど熱く熱く滾ってゆく。

光と熱。どちらも「炎」を構築する二大要素であり、それを操る以上は悠生にとつて「同格の力を持つ者」であることに違いなく、まして彼の背後にはレイドリベンジャーズ永岑支部があるのだ。だからこそ、彼の「勇氣」が熱く燃え滾っていく。

「スヴィルカーニイ！ 徹底的に焼き尽くすぞッ！」

『了解。劫火拳乱ゴウカケンランを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

「その技は……っ!!」

スヴィルカーニイのアナウンスを聞いて、陽乃の焦りが最高潮に達した。劫火拳乱といえど、「最強」の名を持つ悠生が誇る特大火力。太陽すらも消し炭にすると名高い暴虐の劫火。

そんなものを受けてしまえば良くて重体、悪くて即死、そればかりか骨粉すら残らな

いだろう。だからこそ、それを使わせるわけにはいかない。

「ソール、まだなのっ!？」

『充填完了。グリッターストーム、いつでもいけます』

「だったら……っ、ぶつとばせええええええええっ!!」

右手から放たれた極大にして絶大の光の嵐流。

並の相手なら一撃で消し飛ばす圧倒的なエネルギーの奔流。しかし——、

「……そんなんっ!？」

「今のはなかなか悪くなかったな。けど、オレを倒すにはまるで全然、足りてねーんだよ
!」

炎の猛虎、倒れず——!

吐露―スピークアウト―

「くっ……なんて硬さしてんのコイツ!」

「こつちも、わかっではいたが速すぎる!」

希繫きづなのスピードと悠生ゆうきのタフネスに気圧よしかげされ続ける義陰はるのと陽乃。希繫が守りに回れ
ば一切の攻撃が掠りもせず、悠生が守りに徹すればあらゆるダメージを受け付けない。
だがそれは防御だけの話ではない。

攻撃に転ずれば希繫の速さはあらゆるものを貫く槍となり、悠生の力は万物を砕く鎚
となる。攻防一体のインファイターが二人。それもギアによる特殊能力ではなく、彼ら
自身を持つ格闘センスと身体能力によるもの。

ギアやアームズに頼った強さならば、それを除けば勝機はあるかもしれないが、彼ら
にはそれがない。武器がないことが、一転して強みへと昇華しているのだ。

「ルーナー!」

『ラジャ。肉体を影に変換します』

「ソール!」

『ラジャー。肉体を光に変換します』

肉体変換によって物理攻撃の無効化を計るものの、義陰の影は電光によって、陽乃の光は熱によってダメージが通ってしまふ。しかしそれでも、生身よりは動きもパワーも格段に上がるため、純粋な強化として運用しているのだろう。

悠生のアイコンタクトに合わせて、希繫が先んじて義陰へと攻め込む。しかしその動きを逸早く捉えた陽乃によって、牽制でありながら必殺の一撃は狙いを外し、その脚を掴まれ地面に叩きつけられるが、悠生の放った苛烈拳衝（かれつけんしゅう）の衝撃によって、希繫もろともであるが二人の体勢は大きく崩れた。

吹き飛ばされながらも空中でどうにかバランスを整えた希繫は、着地と同時に未だ地に膝をつく陽乃へと攻め込むが、今度はそれを義陰のラリアットが阻む。義陰の振り被った左腕を足場に跳び退くことでどうにか躲すと、今度は灼熱の炎が義陰に襲い掛かる。

「ぐっ……うわあああああつ!!」

「悠生! やりすぎるな! 任務はあくまで確保だ!」

「やりすぎずにどうにか出来る相手ならそうするがなツ!!」

「義陰ツ! くっ……このおとおおツ!!」

炎を放つ悠生の右手を、陽乃の純白に輝く拳が殴りつけた。

完全に不意を衝かれたとはいえ、僅か一瞬ではあるものの、頑強にして不壊に等しい

悠生の体を弾くほどの威力を見せつけた陽乃に、悠生の中の闘志が燃え上がる。

背後にあるものを守るといふ「勇氣」だけでなく、強者を前にしたことでも燃え上がる「勇氣」までもが、彼の力を——スヴィルカーニイを熱く激しく滾らせたのだ。

「希繫、オマエはもうそっちの野郎に「適応」しただろ。ならこっちの女はオレがもらおう。コイツはオマエじゃどうにもできねーからな」

「そう簡単にタイマンさせてくれりゃいいが、どうやら向こうはタッグマッチをご所望らしい」

「……義陰、大丈夫?」

「肉体変換してなかったら死んでたよ。ありがとう陽乃」

互いに仕切り直すように向き合い、感情を昂ぶらせていく。

単純なギアのスペックなら義陰と陽乃に分がある。しかし、そのスペックを埋めるほどの身体能力と戦闘経験を持つのが希繫と悠生だ。まともに正面からやり合えば、万が一にも義陰と陽乃の二人に勝機はない。

だからこそ彼らは希繫と悠生に真正面から攻めることはしなかった。ギアスペックのアドバンテージを活かして、自分のペースに巻き込むのではなく、相手のペースを作らせないことに全力を注いだ。

だがそれでも、よくて優勢。どうしても勝利にはつながらない。だからこそ、義陰は

希繫を集中的に狙った。自分の胸に灯り続ける「怒り」のボルテージだけは絶対に下げないように。

(リミットブレイクしたいところだけど、あれの発動時間は24時間につきたったの3分間。ついさつき発動してしまった僕にはもう、これ以上のリミットブレイクはできない)

(義陰は既にリミットブレイクを発動した。現状を打破しかねない要素としては、未だ使用していないアームズだが……それをこうも使おうとしないのは、おそらく使わないのではなく「使えない」からか。ユナイトギアを環境修復に使用していたORBでは、戦闘なんてほとんどないもんな)

リミットブレイクを既に発動してしまった義陰とは異なり、陽乃に至ってはまだ発動に至るほどの感情の爆発がない。ギアを運用する上でどのような感情を際立たせているのかはともかく、その感情はリミットブレイクに到達するほどの激しさはないということか。

しかし、義陰を追い込み過ぎればその限りではないことは明らかだ。人は誰でも、自分の大切なものを守る時にこそ最も顕著に感情を昂らせる。だからこそ、希繫も悠生もできる限り攻撃を片方には集中させなかった。

「エクレールッ！」

『了解。リアクターシールドを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
「ソール！」

『ラジャー。サンライトシューターを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』
真つ先に飛び出したのは希繫と陽乃。突進のスピードを活かした希繫の跳び蹴りを、純白に輝く拳が打ち返すが、力の拮抗の瞬間に打ち負けると素早く判断した希繫は、陽乃の拳と接触していない左足の踵で相手の手の甲を打ち付け、力のベクトルを逸らす。

だが陽乃も冷静に逆の拳で追撃を行うと、希繫の頭上に影が差す。見上げれば、エモーショナルエナジーをチャージし終えた義陰が、見下ろすようにブラックバレットを構えていた。

おそらく、陽乃の攻撃を左右かバックに避ける瞬間を見極めて発射するつもりなのだろう。通常の弾丸とは違い、ブラックバレットは「影」の弾丸。その速度は光速に等しい。さすがの希繫でも、発射の瞬間を見てからでは躲せない。

「苛烈——！」

「また、仲間もろともに……ッ！」

だが、それを遮るように聞こえてきたのは悠生の広域粉碎衝撃波、苛烈拳衝を放たんとする声。

先ほどの炎と同様に、希繫を巻き添えにしてもダメージを与える気かと、義陰と陽

乃は身構える。

「それはどうかな！」

『充填完了。リアクターシールド、いけます』

「——拳衝オツ！」

だが、希繫の発動したリアクターシールドによつて、希繫とその正面にいた陽乃は衝撃波から守られ、義陰だけが吹き飛ばされた。

それだけでなく、衝撃波に備えて攻撃を中断したことで、陽乃は防御態勢とはいえ目の前の希繫に対してあまりにも無防備な状態を晒していた。

当然、これを見逃す希繫ではない。電光よりも純度の高い「光」そのものである陽乃に対して、電磁体での攻撃はほとんどダメージにならないが、それでもノックバックは発生する。

このノックバックを活かして、彼女と義陰の間に自分が入り込むことで、両者の連携を大きく阻むことに成功するだけでなく、陽乃は希繫を攻撃する前に悠生をどうにかする必要がある。できた。

『充填開始』

「——！」

スヴィルカーニイから聞こえたアナウンスを聞き、希繫は即座に叫んだ。

「義陰！」

「……ッ！」

「もういいだろ！　今、悠生の特大火力である劫火拳乱ゴウカケンランのチャージが完了した。陽乃はもう悠生の射程範囲内だ！　これ以上戦えば、お前たちは——いや、少なくとも陽乃は無事じゃ済まない！」

「陽乃を人質にするつもりか……！」

希繫の背中を襲おうとしていた陽乃の動きが止まる。振り向けば、まるで大地全てを焦土にせんとするかのような灼熱の拳ほのおを滾らせる悠生が、拳を構えていた。

少しでも動けば、彼の超灼熱の拳は陽乃と義陰を焼き尽くすだろう。同じ軌道上に希繫がいるとはいえ、ここまで幾度となく希繫を巻き添えにした攻撃を続けてきた彼ならば、味方一人を犠牲にすることに躊躇するとは思えなかった。

実際のところ、悠生が希繫を犠牲にすることはないのであるが、彼らの関係性を知らず、ここまでの連携だけで性格を判断している義陰と陽乃には、その判断はつかないだろう。

「あの時、誠実からの依頼だったとはいえ部外者である俺がお前たちと戦い、その結果として陽乃を痛めつけてしまったことは謝罪する。本当にすまなかつた。けど……これ以上戦ったところで、傷つくのはお前と陽乃だ！」

「うるさいっ！ そんなこと……そんなの君に言われなくてもわかつてるよ！ 僕たちがどんなに頑張ったって、歴戦の勇である君たち侵略者へ反旗を翻す者には敵わないことぐらい！ でも、だったら僕らのこの痛みは、虐げられ続けた苦しみは、どこにぶつければいいんだッ！」

そう、最初からわかつていた。

今まで「戦うため」にギアを使つてこなかった義陰と陽乃では、どんなに才能やスペックの高いギアがあつたところで、「人類の盾」となるため日々戦い続けているレイドリベインジャーズには敵わない。

だが、それでも訴え続けなければならぬ理由があつた。この痛みを、苦しみを、心の奥底に蓋をしてしまひ続けることなどできるはずがなかつた。

今までは耐えられた。だがもう耐えられない。いや、むしろ今まで耐えてきたからこそ、この痛みと苦しみが大きくなつてきたのだと思えば、なおのことそれを抑え込むことが愚かなことだと思ふようになった。

「僕は今まで、ずっと耐えてきた……！ 僕を蔑ろにする母にも、僕を虐げる同級生や同僚にも、何よりずっと僕を苦しめ続けてきた孤独感にも！ だけど陽乃のおかげで、孤独感から解放された僕は学んだ……！ 『耐える』ことは悪だつてことを！ 本当に辛いことには、反逆すべきだつてことを！」

「確かに、お前の言う通り苦痛に耐え続けて、そのせいで自分を崩壊させるくらいなら、いつそその怒りを解放してしまうのは悪いことじゃない。それは人として、心を保つ上で必要なことだ。だけど、そのために他者を傷付けていいわけがない！」

「だったら答えてくれ！ 僕たちはどこにこの苦痛をぶつければいいんだ！ 他人にぶつけれないのなら、僕が耐えてきた痛みはなんのためのものだったんだ！ 僕が受け続けた苦しみは、僕の何がいけなかったからなんだ!!」

「義陰!!」

「――!」

狂乱する義陰を落ち着けるように、希繫は一喝する。

「お前は何も悪くない。お前を傷付け続けた奴らは、お前に非があつてそうしたわけじゃない。ただそいつらの見えてる世界が狭くて、相手を思いやる気持ちを見失つていただけだ」

「だったら、やっぱり僕は間違つてなんかいない……!」

「そうだ、お前は間違つてない。自分が傷ついたから、その苦痛をみんなに知ってもらおうって気持ちは正しくて、清らかなものだ。だが、そのために暴力を使つちやいけない。他者を思いやらず、自分の意見だけを通すために暴力をふるつてしまえば、お前はお前を傷付けたやつらと同じだ」

「——ッ!!」

義陰は賢い。今この結論を叩きつけずとも、いつかは同じ答えに辿り着いたであろう。だが、今ここで止めておかなければ、彼の未来により深い陰が差してしまう。

今ならまだ間に合う。今ここで手を止めれば、レイドリベンジャーズ襲撃についても、一般人への傷害行為についても、情状酌量の余地がある。そのための弁護を惜しむつもりはないし、レイドリベンジャーズとしての立場を使えば、優秀な弁護士にもパイプがある。

それでも、義陰の胸に灯った怒りの炎は消え切らない。自分が間違っていることは痛感している。曲がり間違っても自分が正しいとは言えなくなつた。しかし、だとしても、陽乃を傷付けられたという事実が、彼の中で希繫への怒りを滾らせる。

「……一週間待ってくれ」

「一週間?」

「それまでに、僕らの間で折り合いをつける。どんな結論に至っても自首はする。だからその代わり、僕らに冷静になるための時間がほしい」

この時、義陰は初めて希繫の瞳を真正面から真っ直ぐ見つめた。それは誠意の表れか、それとも敵意か。

もしも彼の言葉が嘘にせよ本当にせよ、レイドリベンジャーズ側がそれに従うメリッ

トは一切ない。嘘であれば逃げる時間を与えるだけとなるし、本当だとしても今ここで捕えてしまえばもつと早く事が片付くからだ。

だが、希繫は悠生へと向き直りアイコンタクトを送ると、彼も溜息交じりにそれに頷いた。

「わかった。ただし、居場所を把握できるように追跡用のチップを体内に埋め込ませてもらう。それが最大限の譲歩だ」

「ああ、従おう」

互いに合意すると、二人は悠生によつて後ろ手に腕を掴まれながら、レイドリベンジャーズの医療室へと連行され、チップを埋め込んだ後に解放された。

無敵—インビンシブル—

「もうやだ。二度とあいつらと戦いたくない」

疲労困憊、という様子を露わにしつつ、テーブルに突っ伏して呻き声をあげるのは、あの激戦で実質的な勝利を収めたはずの希繫きづなであった。そんな彼を見て、心配半分、憐み半分といった様子で向かいのテーブルに座るのは、娘の白露しろろだ。

コンプライアンスの関係上、同僚でもある逢依以外には業務内容を愚痴ることはできないものの、レイドリベンジャーズという職業の業務については、アバウトに「戦うこと」「守ること」と思っている白露は、彼が今回請け負っている任務の相手がよほどの強敵だったのだろうと簡単に予測を立てていた。

しかし、強敵といっても種類は様々だ。純粹にスペックの高い悠生ゆうきのようなタイプもいれば、希繫と極端に相性が悪い優芽ゆめのようなタイプもいる。だが、彼が今戦っている義陰よしかげと陽乃はるのはそのどちらでもない。むしろ、総合的な戦闘能力だけならば希繫が勝っているだろう。

それでも、彼がこうも「戦いたくない」という理由は、彼らが「自分よりも弱い」相手だからこそだ。

希繫は「最弱のレイドリベンジャーズ」の名に相応しく、今までほとんど「格上の相手」としか戦ってこなかった。それは「自分がどれだけ実力を発揮しても、相手の実力が高ければ相手を傷付けることもないから」という、優しく甘い彼らしい理由によるものだ。

だが、義陰と陽乃はギアのスベックこそ希繫を上回るものの、経験やセンスがとにかく少ない。そのせいで、希繫はどこかで実力をセーブしながら戦わなければならなかった。事実、既にリミットブレイクを使用してしまった義陰に対して、リミットブレイクを発動しなかったのも、それが大きい。

また、スピードで翻弄する動きはとつても、希繫はそれをほとんど攻撃に使わなかった。使ったのは、屋内での縦横無尽キックのみ。スキルでもなんでもない、ただの連続キックだ。弱いからこそ全力でいられた。手加減などいらなかった。なのに、今はその逆だ。

「まさか自分の方が相手の実力を上回っちゃうなんて思ったこともなかったな……」

「確かに、お父さまが自分の実力以下の相手と戦うとすれば、それこそレイダーくらいですからね。レイダーなら遠慮も手加減もいりませんし」

「白露にまで「最弱」の名にお墨付きをもらっちゃったかあ……」

「えっ？ あっ！ いえ、そういうつもりではっ!!」

慌てて訂正しようとする白露に、冗談だよ、と笑いかける。元々、希繫は「最弱のレイドリベンジャーズ」という呼び名に対して悪い印象はない。むしろ、誰よりも弱いからこそ必要以上に誰かを傷付けないのが「最弱」なのだ、誇りにすら思っている。

それでも、もしも彼らの実力が希繫よりも高ければ。苦戦はしただろうが、少なくとも今よりは随分と戦いやすかっただろう。全力で、躊躇も遠慮もなく戦えたことには違いない。故に、希繫は義陰が提示した「一週間」の意味を熟考する。

「……ま、あんまり考えすぎてもアレだな。何よりせつかく返ってきたのにいつまでも仕事のことばかり考えてても面白くもなんともない。白露、一緒に遊ぼうか」

「よいのですかっ！ はいっ、持つてまいりますっ！」

たたつ、と部屋を出ていくと、ダイニングに残ったのは希繫だけ。キッチンでは逢依が夕飯の用意をしているが、料理が致命的にできない希繫では手伝いようもない。

大人しく白露がおもちやか何かを持つてくるのをお茶を飲みながら待っていると、一分としないうちに戻ってきた。手に持っているのは、おもちやかゲームかと思いきや、小さなホワイトボードと専用の水性ペンだ。

「では、お絵かきしりとりをしましょう」

「おー、懐かしいな。昔よく逢依とやったよ」

「はいっ、お母さまから教えていただきましたから！」

かつてを懐かしみながら、逢依の作る食事を待ちながら白露と遊ぶ今の日常を守り抜かなければと、希繫の決意は固まっていく。



「ごちそうさま」

「どういたしまして。洗い物お願いしてもいいかしら」

「はいよ。ゆっくりしてな」

他の三人よりも少し早く食事を終わると、自分の食器と空になった皿を持ってキッチンへと運び、片付けを始める。桐梨家では、基本的に食事の片づけはどちらの役割というわけではなく、希繫と逢依のその日の気分による。今日はたまたま希繫が早く食べ終わったので、そのまま片付けをすることになった。

それは食事の片付けに限らず、料理以外のことはほとんどそうだ。掃除にせよ、買い物にせよ、洗濯にせよ、基本的には明確にどちらの役目ということはない。手が空いている方、あるいは気が向いた方がその時の予定に応じてやっている。

小転はその時々で二人に言われたことをこなしており、白露は自分から積極的に手伝ってくれるが、体格や体力の問題でこなせないことも少なくないため、しばしば小転

と一緒にやっている。日中に手が空いている小転は、多くの場合で買い物が主な仕事だ。

「白露ちゃん、お顔にご飯がついてるわよ。小転、とってあげて」

「……ん。白露ちゃん、動かないでね」

「んぐんぐ……ごくつ。ありがとうございます、小転さま」

テーブルを挿んで対面に座る白露にはどう足掻いても手が届かない自分の小さな身体を少しだけ恨みながらも、それを表情に出すことはなく黙々と食事を続ける逢依。

悠生が家を出てから、ダイニングだけでなくこの家の共有スペースは随分と広く感じるようになった。それは彼が巨体だからという理由だけでなく、彼という存在そのものが希繫たちにとってあまりにも大きかったからだろう。

大食漢がいなくなったことで、この大きなテーブルに置かれる食器の数も減った。だから今は、この広いテーブルによって自分の手足の小ささが際立つのだと、逢依は誰に對してでもなく心の中に呟く。

「白露ちゃん、お肉とお魚だったらどっちが好き？」

「どちらも好きですが、どちらかと言われるとお肉ですね」

「じゃあ明日は青椒肉絲にしてもらおつか。わたしピーマン食べたいし」

「お魚だったら何にするつもりだったんです……？」

小転と白露の会話を聞きながら、食後の予定を立てる。明日の朝食の準備は既に済ませておいて、食器洗いは希繫がやっており、風呂とトイレの掃除は日中に小転がやってくれているので、ダイニングとリビングと廊下に軽く掃除機だけかけてしまえば家事はひと段落。

白露の勉強を見てあげてもいいが、出来れば自分一人で出来るところまでやらせたいのが逢依の教育方針だ。希繫がたまに教えてしまっているが、白露は本当にわからない時は自分から質問してくるので、それまでは甘やかさないつもりだ。

幸いなのは、希繫も教え方を心得ていることだろう。わからない部分の答えではなく、解き方のコツだけを教えて自分で考えさせる。勉強させる側としては最も基本的なことだが、だからこそ意味は大きい。

「白露ちゃん、今日の宿題はもう終わった？」

「はい。それと、来週の火曜日は半日登校なのでお弁当をお願いします」

「えらいわね。お弁当も任されたわ。じゃあ今夜の内にカレンダーに「半日」って書いておいてね」

はいっ、と元気よく頷く白露は、ここのところ少しだけ帰りが遅い。とはいっても、 негаティブな理由ではない。心配した小転がいつも白露が戻る時間に通学路を辿ってみると、数人の友人たちと公園で楽し気に談笑していたからだ。

学校に通い始めて、一日中その様子を見てあげることができなくなつた分、心配することも多くはなつたが、両親おとなに頼らずとも白露こどもは白露こどもなりに自分たちだけのネットワークを構築する。

そのネットワークは決して大きなものではないものの、家の中に籠もつてばかりでは出来ないことをたくさんさせてくれる。時にはぶつかり合うこともあるだろうし、落ち込むこともあるだろうが、それもまた幼さの特権だといえるだろう。

それに、白露はワガママこそほとんど言つてはくれないが、甘えることや頼ることは上手な子だ。自分のしてほしいことや、困つたことは、すぐに頼れる大人に相談する。だからこそ希繫も逢依も、白露の学校での生活を案じることはあまりしない。まったく、というわけでもないが。

「じゃあ白露ちゃん、火曜日はお昼からわたしと映画を観にいこうか」

「映画、ですか？」

「うん。何を観るかは白露ちゃんが選んでいいよ。それで、夕方までデパートで買い物とかしながら時間を潰して、希繫と逢依ちゃんの仕事終わりに合流してお夕飯も食べようか」

「それは……。そうできれば、嬉しいですが……」

ちら、と逢依を一瞥すると、白露は不安そうに俯く。

希繫と逢依の多忙さは、他でもない白露自身が一番よくわかっている。業務内容こそ詳しくは教えてくれないが、それが危険であることと、時には緊急で長期的な仕事もあるということも知っている。

小学校に途中入学してすぐ、初めての授業参観の日に、緊急の呼び出しを受けて休暇を返上して仕事に出てしまった二人のことを、白露が恨んだことはない。残念だと思つたし、寂しいとも思つたが、それでも二人の仕事は誰かを守ること。

まるで「ヒーロー」のような二人を誇りにすらしている白露が、そんな二人を止めることなどできるはずがなかった。

もつとも、希繫と逢依にとつては、むしろ白露にワガママを言つてほしかった。行かないでほしい、一緒にいてほしいと言つてほしかった。それが、彼女の子供としての当然の権利だからだ。

だがそれでも、白露はそう言わなかった。——いや、言えなかった。未来で逢依を喪い、希繫も自らの前から去つてしまった彼女にとつて、両親を失うことはトラウマにも等しい。ワガママを言うことで、困らせることで、また二人を失つてしまうかもしれないという不安が、彼女のワガママに歯止めをかける。

だから今も、彼女は口を噤んでしまった。自分がそうしたいと言えば、希繫と逢依は普段以上に必死に仕事をこなして夕飯の外食までに間に合わせてくれるだろう。だが、

その無理のせいで二人に負担をかけてしまったら、その負担に疲れて自分に愛想を尽かしてしまつたら。

自分の両親がそんな薄情な人間でないことは重々わかつている。それでも、不安は掻き消えてはくれないのだ。

「いいわよ。いきましようか、お夕飯。たまにはみんなで外の料理も食べてみたいものね」

「よいの、ですか……?」

「ええ。白露ちゃんが出来てから、みんなで外食なんてほとんど行つてないでしょう? 悠生もいた時に、一度か二度くらいよね。だったら、たまの贅沢くらい構わないわ」

来週の火曜日。それは奇しくも希繫が義陰と約束した「一週間後」となるが、それも逢依は賛成した。三人の会話を口を挿まないように聞いていた希繫自身も、それを止めることはしない。

子供との約束。それは親にとって、何よりも優先すべき誓い。それがあつたのなら、むしろ一週間後の義陰との対話はうまくいくような気すらした。子供と約束をした親は、無敵なのだ。

業務—ワーキング—

「陽乃、ごめん。僕の勝手に巻き込んだのに、また僕の勝手に諦めることになるなんて

……」

「義陰が謝ることなんてないよ。悔しいけど、あの戦いでアタシたちが負けたのは、アタシたちのどつちが悪かったわけじゃない。ただ単純にあの二人がアタシたちよりも強かっただけだ」

その日の夜、義陰は陽乃と布団を並べて横になりながら、今日の戦いに敗けたことを悔いるように声を震わせていた。彼の後悔は——弱さへの後悔か。それとも、諦念への後悔か。どちらにしても、陽乃は落涙する義陰に、口から出るのはただの事実。慰める言葉さえ満足にかけてはやれなかった。

だが、それでも義陰の瞳に、怒りの炎がまだ残っていることは感じられた。おそらく、義陰は今回の戦いで二人との力量差を痛感したはずだ。だから、無策に再戦を仕掛けることはないだろう。それが彼なりの「諦め」の一つであることは間違いない。

しかし、希繫と悠生への報復心が消えたわけではない。何かしらの方法で、彼らを下すことは「諦めて」いないはずだ。そして、その上で最も彼がとりそうな手段とは——。

「陽乃、君は——」

「アタシは、どこにもいかないよ。アタシの居場所は、いつだって義陰の隣だから。義陰の手を取って、義陰に手を握られて、それでやっと「アタシらしいアタシ」でいられるんだ。そんなアタシを、捨てる気はないよ」

「……………」

義陰はおそらく、陽乃をレイドリベンジャーズに引き渡して、一人きりで戦うつもりだったのだろう。だが、それはあまりにも無謀だ。

義陰と陽乃は、一人ではユナイトギアを起動するために必要なエモーショナルエナジーを確保できない。だから、ギアを纏う時は常に手を繋いでいるのだから。それに、影を力とするルーナは明るい場所ではその出力が半分しか保つことができない。どう足掻いても、レイドリベンジャーズに敵う戦力ではない。

まして、義陰の戦闘スタイルは陽乃とのコンビネーションを前提とした連携技がほとんどだ。希繫に対して、単独で使用したスキルがほとんど意味を為さなかったのも、それらが「本来のスタイル」からかけ離れていたことが一因となっている。

「理不尽になら耐えられる。今までもそうだったから」

「……………うん」

「けど、陽乃が傷つくのは耐えられない。今までの理不尽から僕を守ってくれた君を、今

度は僕が守りたいんだ！　もう、君に守られ続けるだけの僕でいたくない！」

目尻から伝う一筋の光を、陽乃は見ないフリをした。彼の目から零れたのは、彼の弱さだ。理不尽に立ち向かうために、己の弱さを直視できない弱さが一滴の光となつて零れたのだ。

だが、その弱さの裏には、何がなんでも陽乃を、大切なたつた一人を守り抜こうとする強さがある。その想いだけは、あの桐梨希繫にも、大郷悠生にも負けてはいないだろう。

「……義陰」

「陽乃……？」

名前を呼ぶと、義陰は無垢な瞳で陽乃の目を見つめ返す。怒りの炎が彼自身を焼き尽くしてしまわないようにと、陽乃はその手を義陰の手へと重ねた。冬の寒さに冷えた陽乃の手を温めるように、義陰の手が握り返す。

「アタシは、義陰が本当にアイツらと決着をつけたいのなら、一緒に戦うよ。けど……もしもそのせいで義陰が傷ついて、アタシの目の前からいなくなっちゃうくらいなら、アタシは義陰に嫌われてでも、それを止める。それが、『不離の仲』としての、アタシの務めだと思うから」

「僕はいなくなったりしないよ！　だから——いや、うん……。そうだね、だとしたら、

止めてほしいな。どうせ道を間違えるのなら、二人離ればなれになるよりも、二人一緒に道を間違えて、それで——」

最期まで告げることなく、義陰の意識が夢の中へと溶けていった。



「希繫ーっ！ ユニティバレットの使い心地を聞きに——きたんだけど、どしたのん、その仕事の量……」

「菜咲か。悪いけど今ちよつと手が離せない……どころか口でも話せないくらいに忙しくてな。悪いけどしばらく技術開発部そつちには構えないぞ」

翌日、一週間の猶予が与えられたのは、義陰と陽乃だけではなく、希繫も同じであった。もっとも、彼の場合は「猶予」というよりも、「多忙期」が訪れているようだが、それもそのはず。

昨日・一昨日と、ほとんど彼らにかかりきりだった希繫は、本来の業務から随分と離れていた。たった二日分といえど、悔つていい量はとうに超えている。一部は望月をはじめとした同僚たちが引き継いでくれたが、第二前線部隊において、実質的な隊長補佐を行っているのは希繫だ。

同部隊の隊長である逢依^{あい}ほど仕事量が多いわけではないが、彼女の場合はほとんど前線に出ることなくデスクワークと指揮に集中しているため、希繫ほど肉体的に多忙ではない。

望月たちでは対応できない仕事もあり、「最弱」にして「準最速」である希繫だけに任された仕事も少なくはない。故に、彼の多忙は今まさに極まっているのだ。

「あららん、そりゃ残念。でも希繫まだメデイカルチエック受けてないでしょん？ 逆流して洩れ出たエモーションナルエナジーを利用して関係上、ユニティバレットの使用するにはメデイカルチエックを義務づけてるから、お昼ごはん返上してでも来てくれないと困るんだよねーんっ！」

「あー……それはまあ、確かに。わかった、昼休みに必ず行くよ」

「おけおけーん！ んじゃつ、また後でねーんっ！」

大げさに手を振りながら指令室を出ていく菜咲を横目に、デスクワークに意識を向け直すと、作業用のノートパソコンの横にココアがなみなみと注がれたマグカップが置かれた。

「逢依か。ありがとう」

「あんまり根を詰めても、作業の効率が落ちるわよ」

「そうですよー！ ちょっとくらいならメアとか諸星くんが手伝いますからっ！ ねっ

「？」

「いや、手伝わんが」

いつものテンションで話を振ると、普段通りの態度を崩すことなく顔を背けて自分の業務を続けていく諸星に「薄情者ーっ」と騒ぐ望月。そんな様子を見て苦笑いしている、天宮と空宮が無言のまま希繫のデスクから数件分の作業を持って自分のデスクへと戻っていく。

希繫ほどの作業があるわけではないとはいえ、彼らも暇なわけではない。彼らにも彼らの業務があり、彼らにしかない仕事も割り振られている。それでも、多少の無理を通して手伝ってくれる仲間たちに、希繫は静かにたった一言を零すことしかできなかつた。

「ありがとう、みんな」

微笑みと共に洩れた言葉は、なんてことのない「たった一言」だ。だがそれは同時に、彼らが一番聞きたかった一言でもある。

いつか逢依が言った通り、希繫がその貧弱な印象に反して誰からも慕われるのは、「何を意識するわけでもなく相手が一番ほしい言葉をくれる」こと。それは何も特別ではないただの言葉だが、だからこそ胸に響く。

「いえいえ！ 仲間なんだから助け合ってナンボじゃないですかっ！」

「チツ、後で何か奢らせるからな」

「……………どういたしまして……………」

「……………いつもお世話になってるので……………」

望月が満面の笑みで、諸星は仏頂面で希繫の仕事を持っていく、最後に逢依が一本のUSBメモリを置いてデスクへと戻って行く。何かと思つてファイルを開いてみると、希繫の抱えていた仕事の約二割を片付けるほどのデータだった。

ちら、と視線だけそちらに向けると、彼女は悪戯が成功した子供のようには微笑みながらウインクをして、自分の仕事へと意識を戻した。さすがにデスクワークでは敵わないか、と苦笑する。

（これなら明日……………は無理かもしれないけど、明後日までには片付きそうだな。じゃあ、今日の食器洗いも俺がやるか）

感謝のしるしに何かプレゼントでもと思つたが、逢依はあまりそういうものは喜ばないだろう。プレゼントしようとする気持ちは受け取るだろうが、彼女は物よりも気持ちや言葉で喜ぶタイプだ。

だったら、家に帰ってからうんと優しくした方が、彼女にとつても、彼女の笑顔を観たい希繫にとつても最善であることは間違いない。

（本当に家に持ち帰ったら明日の午前までには終わりそうなんだけど、家に仕事を持ち

込むのはなあ。気持ち的な問題もあるけど、そもそも白露にこういうの見せられないし、何より姉さんに怒られそうだからなあ)

小転こころはどちらかといえ、仕事とプライベートはキツチリ分別するタイプだ。それは彼女だけではなく、彼女によって養われていた時期のある希繫たち全員が同じ考え方をしている。

故に希繫だけでなく逢依も、そして悠生も仕事を家に持ち込むことはない。今日できないことは明日やるべきことなのだ。

(んじゃ……無理しない程度にもうちよつとだけ頑張りますか！)

師匠——トラウマ——

「お疲れさま、二人とも」

「おう、結構仕上がってきたぜ、お前の旦那」

「こひゅー……こひゅー……」

「そうね。私の旦那様は今にも死にそうだけれど」

義陰・陽乃よしかげ はるのとの対話がどういう結末に至るか。場合によっては再戦という可能性も考慮して、希繫きづなは悠生ゆうきと戦闘訓練を行っていた。——が、戦闘訓練とは言うものの、実際のところは悠生の一方的な蹂躪をどう逃げ回るか、という鬼ごっこ状態であり、一時間に渡る苦行を終えた果てに彼は燃え尽きていた。

希繫の所有する『エクレール』が最初期に製造された低スペックなユナイトギアであることを差し引いても、彼と悠生の間にある力量の差は明らかだ。パワーとスピード、目指すところがまったく違うとはいえ、そこに向けて費やした努力は同じように比べられる。

悠生が生まれ持って恵まれた体格をしていたとはいえ、彼がその肉体を維持し、そしてそれ以上に研磨するために費やした時間と労力は、希繫がしてきた体重管理・脚力と

スタミナの強化・全体バランスの維持などの努力の何十倍にも及ぶ。

他のあらゆる努力と違って、こと筋肉においては努力の数と時間がそのまま結果へと直結する。多くのことは費やした努力が必ずしも報われるわけではないが、筋肉は必ず報われるし、努力しなければ一切の報いがない。故に、彼の鋼鉄の肉体は『最強』の証なのだ。

「し……死ぬかと思った……げほつ……。あとコンマ一秒でも反応が遅れてたら、はあ……オーヴァーデストラクトが、ぜえ……直撃してた……」

「でも避けただろ」

「結果論で語るのやめた方がいいわよ」

オーヴァーデストラクト。時として『超破壊の拳』とも称される、悠生の十八番。ありとあらゆるものを打ち砕くそれは、この地球上に存在するいかなる破壊エネルギーをも凌駕する絶対的な破壊の象徴だ。

一度でも当たればそのまま粉碎へと直結するそのスキルは、彼の愛機である『スヴィルカーニイ』の筋力補正を差し引いても地球上最強の称号をを欲しいままにする。故に、何があろうと絶対に受けるわけにはいかない。

これを防ぐことができるのは、受け止めたエネルギーを強制的にゼロへと変換できる総交の『デイープブルー』くらいである。防御の上から相手を粉碎する、という意味で

は、防御不能とも言い換えられるだろう。

故に、基本的にオーヴァーデストラクトの対処法は回避のみだ。スピード型の希繫であればまさに得意分野ではあるのだが、悠生もバカではない。思いつく限りの回避ルートを炎で塞ぎ、希繫に強行突破ともいべき迎撃を強いていた。

それでも、こと逃げる・避けることに関しては希繫の方が一枚上手だったということか、彼はそれらの炎を掻い潜りながら回避ルートを見出し、間一髪のところまでオーヴァーデストラクトから逃げ延びた。

「避けるだけ、って見てるだけのヤツは言うがな、オレはあの一撃をぶち込むために思いつく限りの退路を断つたし、そのために無数の炎を仕掛けた。逃がすつもりなんて一切なかったつもりだ。それでも、コイツは迎撃以外の方法で退路を見つけて生き残る術を掴み取った。偶然とかラッキーじゃない、間違いなくコイツ自身の実力だ」

「そうね。逃げる、ということとは時に蔑視の対象にもなるけれど、生き残るということにおいて最も効果的かつ合理的な手段のひとつだわ。特に希繫みたいに脆くてあまり防御に意味のないタイプにおいては、基本であり神髄でもあるからこそ、絶対に軽視はできない。そういう意味で、さつき希繫が咄嗟に見つけた逃げの一手は神懸かり的ともいえるわね」

「持ち上げてくれるのは、ぜえ……嬉しいん、はあ……だけだな……。こっちは……今す

ぐにでも、こひゅー……ぶつ倒れそうで、はあ……それどころじゃないんだ……」

息も絶え絶えという様子の希繫を気遣うようにその背中を撫でながら、逢依あゆいがぬるめのお茶が入った紙コップを手渡すと、彼はそれを一気に呷あって肩にかけたタオルで乱雑に汗を拭ぬった。

溢れる汗と荒ぶる心臓の鼓動は、間違はなくひとつの死線を潜り抜けた証だ。訓練とはいえ、悠生は今の攻防で一切の気の緩みを許してはくれなかった。ひとつ間違えばそのまま死に直結するような攻撃が雪崩のように押し寄せ、希繫はそれを掻い潜りながら、死に物狂いでようやく一、二発程度の反撃ができただけ。

それでも——いや、だからこそ、その死と隣り合わせの状況で得た経験は、彼が必死になるほどに……「必」ず「死」ぬとも思えるような経験をすることで意味を生む。

「はああ……。やつと息が整ってきた。ていいうかなんで悠生はそんなにピンシヤンしてんだよ……」

「オマエとは鍛え方がちげーんだよ。オマエもスタミナは鍛えてるだろうけど、それは「走り続けるため」のスタミナだろ。オレみたいに「戦い続けるため」にスタミナを鍛えてるヤツが相手じゃ、そりゃこうもなるわな」

とはいえ、息こそ上がっていないが、発汗量は両者ともに大差ない。それはやはり、相手が希繫だったから、と言わざるをえないだろう。

最弱のレイドリベンジャーズとは言われるが、同時に準最速でもある希繫は、自分の弱さと速さを正しく把握している。できることとできないことの区別がハッキリわかっている、とも言い換えられるだろう。時として端からは無茶無謀にも見えるような行動を起こすのは、彼の中での「可能」な範囲が、周囲の常識を超えているためだ。

そんな彼だからこそ、悠生のような圧倒的強者との戦い方も心得ている。もちろん、逃げの一手が最優先となる分、周りからは随分と情けない戦い方に見えることもあるだろうが、彼は逃げながら常に「逆転」の一手を捜し続けている。その証拠として、この模擬戦でも僅か数発ではあるが悠生に攻撃を打ち込んでいる。

無論、悠生のスタミナと耐久性の前にほとんど意味を為してはいなかったが、それでも、希繫でなければ反撃すらままならないほどの苛烈にして激烈な猛攻であったことは間違いない。

「ま、あれだけ敷き詰められた炎と爆発のトラップを掻い潜りながらオレの攻撃すらも避け続けて、あまつさえ反撃にも出られるヤツなんて、オマエを除いたらそれこそ「最速」のアイツしかいねーだろ。そこは誇っていいと思うぜ」

「最速……かあ。お前はあの人から「最強」を奪えたけど、俺は結局「最速」を奪えなかったんだよなあ。……いや、逆流した今ならもしかしたらいけるか……？」

「やめておきなさい。また防御不能・回避不能のスピードでセクハラされるだけよ」

最速のあの人、というのは、希繫と悠生にレイドリベンジャーズとしての戦い方を教えた師である。

かつては「最速・最強」とまで言われた、まさにレイドリベンジャーズを率いるほどの戦力を有していた、まさしくワンマンアーミーであったが、悠生が「パワー」を、希繫が「スピード」を活かす術を学んだことで、その人物の「最強」と「最速」は一気に脅かされることとなった。

そして、その師が二人に課した卒業試験が、まさしく「最強」と「最速」を奪うことであった。それこそ天地がひっくり返るような攻防の末に、悠生は「最強」の名を戴くこととなったが、希繫はあと一歩及ばず、「準最速」と呼ばれるようになったという経緯がある。

今はそうした教導の腕を買われて、前線部隊から退き戦技教導官となつていられるらしいが、地方支部から日本本部へと転勤になったため、ほとんど会うことはない。

「ま、逢依の心配も尤もだがな。オレはいいと思うぜ。アイツのセクハラ狂いはこの際おいておくとして、戦いの術を学ぶって意味じゃ、腕に間違いはねーからな。コイツの言う通り、逆流現象の影響を計る意味でも無駄にはならねーだろうし、教導申請を出して日本本部に行ってくるのもひとつの手だと思っぜ」

「確かに、あの人あれでも人にものを教えることは一流だし、何より本人の強さは他の誰

もが認めるところだからな。それもいいかもしれない。まあ、勝ち負けとか考えだしたら俺と悠生の二人がかりで勝率一割あるかないかだからな。そういうのは考えないよ
うにしよう」

時に勘違いされることもあるが、悠生が持つ「最強」の称号は、「誰よりも実力が高い」ことを意味するわけではない。あくまで「誰よりも強い」というだけなのだ。

この「強い」という言葉が、一般的に「実力が高い」ことだと思われがちだからこそ、そういう勘違いが起きるわけだが、ここでいうところの「強さ」とは、ただ単に「パワーがある」というだけの意味だ。

故に、悠生の「最強」の本来の意味は、「全レイドリベンジャーズの中で最もパワーがある」という意味なのだが、その上で、彼自身のバトルセンスや戦闘経験が圧倒的な実力に拍車をかけているせいで、「実力が高い」という「最強」にも近い意味で捕えられてしまっている。

しかし、彼らの師匠は現在のところ「準最強」であり「最速」でもあるのだ。希繫よりも速いスピードで攻撃され、その一撃に込められた威力は悠生のそれにも迫るほどであり、当然ながらほとんどの攻撃が「一撃必殺」の意味を込めているといってもいい。

「でも……あの人に教導を頼むのかあ。俺、生きて帰ってこられるかな……？」

「まあ、灰は拾ってやるよ」

「骨ですらないの?」

嫌だなあ、と愚痴を零す希繫を横目に、逢依も気が進まない様子ではあるものの、電子投影パネルを操作して日本本部に「真透まとうリデア戦技教導官への教導申請」を送るのだった。

「じゃあ、申請は出しておいたから金曜日から土日返上で三日間、日本本部へ出向してね」

「しれつと土日返上するのやめろ! ……えっ、嘘。マジで言ってる? 嘘だ! 白露しろろや姉さんに癒される時間もないまま師匠になんか会いたくない!! 悠生! 助けてくれ!!」

「ワリイけどオレもアイツには会いたくねーから助けらんねーわ。諦めて尻を撫でられてこい、グツドラック!」

「嫌だああああああああ!!」

疾駆—ストームホツパー—

「ああ……どうとう来ちまつたかあ……」

翌日。希繫きづなは東京都・レイドリベンジャーズ日本本部へと足を運んでいた。理由はもちろん、逢依あいから告げられた死刑宣告——もとい、教導訓練を受けるためだ。

本部に訪れるのは、レイドリベンジャーズに入団した時を含めても両手で数えるほどしかない。ましてや、師匠である「彼女」に会うことなど研修生時代を除いてしまえば片手ほどもない。

玄関を抜けて、指定された訓練室へと直接歩んでいく。その一步一步が「彼女」に近付くと自覚するたびに、背筋を伝う嫌な汗の感覚が否応なしに感じられてしまう。

「すうーっ……は——」

「よおう、久しぶりだねえ希繫あ！」

「ひえあつ?! げほっごほっ、うわあああああ!! 出たあああ!!」

不意に感じる、尻を撫でまわされる感覚。いや、撫でるといふよりも、揉みしだくといった触り方に、思わず悲鳴めいた声が出てしまう。

振り向けば、両目を包帯で隠し、大きな赤い円盤型の髪飾りをつけた長髪の女性が、に

やにやと口元を歪めて希繫の方を見ていた。

視覚は包帯で完全に遮断されているはずなのに、希繫の位置だけでなく表情や、体の部位がどこにあるかまで把握しているのは、彼女の持つユニイトギアのギア特性『感覚探知』の無駄遣いによるものか。

「出た、とは失礼だなあ。仮にもお前さんを鍛えてやったお師匠様だぜ、あたしサマは。それとも何かい、もつと構ってほしくて、わざと冷たい態度で誘ってんのかあ？」

「いや、俺もう結婚してるんでそういうのはマジでやめてもらえると……」

「へー、結婚したのか。相手はどんな子だい？ 可愛い子ならちよつと触らせてもらったりすると——」

「怒りますよ」

言葉よりも先に、希繫の体から微量の電光が飛び散った。逆流現象の影響で、ギアがなくともある程度までギア特性を操れるようになったのだが、感情が昂りすぎるとそれが洩れ出てしまうことがあるのは、逆流した装着者の共通の悩みだ。

だがその電光を「感知」したはずのリデアに、それを驚く様子はない。いやらしい笑みを浮かべたまま、「悪い悪い」と軽薄そうな態度で謝っているだけだ。

リデアにとって、逆流した装着者と接する機会は少なくない。それは彼女が戦技教導官という立場にいるからでもあるし、最速にして準最強のレイドリベンジャーズとし

て、多くの仲間たちを導く存在であるからでもある。

故に、希繫のように逆流現象の影響を完全に把握しきれず上手く扱いきれていない者にも、幾度となく出会ってきた。だからこそ、この程度のことでも驚く必要もないのだから。

「へえ、今の相棒は電気が使えるのか。昔はもつと使い勝手が難しいやつだったよな。名前は確か——」

「昔の話はいいでしょう。他の訓練生たちもいますし、早く入って始めましょうよ」
「……へいへい」



「基本的に逆流現象というものは「抑えきれない感情の昂ぶり」がひとつの鍵となる。リミットブレイクを何度も繰り返したことで逆流現象が起きるのは、リミットブレイクという行為自体がそれにあたるからだ。まあ一部には例外もあるが、そうした理由から逆流した装着者は「感情の昂ぶり」というものに日頃から注意を払わなきゃならない」

教導が始まって最初に行われる口頭での説明は、彼女——真透まとうリデアにしては意外なほど真つ当な態度で行われた。

以前、希繫と悠生^{ゆうき}が研修生だった頃に行われた座学や口頭説明では、数列に並んだ研修生たちの間を、きちんと話を聞いているか確認するフリをして尻や股間を触って回っていたはずだが、そうした態度は改めたのだろうか。

とはいえ、あのリデアが自らそんな殊勝な心構えに直していくとは思えないので、おそらくは上司——それも本部長クラスの人間から嚴重注意でもされたのだろう。だとしても、本当にやめているのは奇跡にも等しいが。

「もつとも、それは感情を抑え込めて意味じゃない。むしろ逆だ、感情にコントロールされるんじゃない、感情をコントロールすることこそが、逆流現象による影響を制御する上で最も重要なことだ。お前から中学時代はサルみたいに下半身いじってたけど大人になったら落ち着いたら、あんな感じだ」

「いや絶対もつと適切な表現あったろ……」

「そこー！ 何か言ったか！ 何か言いたいなら言っていぞお、あたしサマに頭のテツペンからつま先までまきぐられる覚悟があるんならな!!」

「すみませんなんでもないです!!」

常人なら聞き流してしまうような音量だったはずだが、仮にも超感覚を強みとしているだけあって、蚊の鳴くような声でも聞き流してはくれないらしい。

だが、彼女の言い方はともかくとして、説明の内容としてはまさしくその通りだ。感

情のコントロールは、ここでの教導訓練だけで身につくようなものではない。あくまでここで学べるのは心構えと扱い方、そして制御しきれない時の対処法だけ。感覚に關しては慣れるしかないのだ。

しかし、だからこそ彼女はその「感覚」の部分を最も強調している。教導訓練で身につくようなことなら、わざわざ説明せずとも実戦と注意でどうにかなる。だからこそ、それだけではどうにもならない部分を、しつこいほど言い聞かせなければならぬ。それが彼女の教導官としてのポリシーであった。

「話を戻すぞ。逆流現象を制御する術はこの三日間の教導で教えられるが、制御する感覚は自分自身で見つけるしかない。あたしサマができることは、その感覚を掴む機会を与えることだけだ。その機会を掴むための努力を怠る奴は、今後も逆流現象に翻弄され続けるしかない。怠けるなよ、全力で食いついてこい。口頭説明は以上だ。五分以内に実践訓練の準備をしてこい！ 解散！」

解散の合図に伴い、訓練生たちが揃って更衣室へと入っていく。既に訓練用の服装には着替えているので、ユニトギアの装着と、いくつかの計測器を身に着けるだけだ。

ロシアムのような大きさを誇る訓練室を一望するモニタールームでは、訓練生たちの所有するユニトギアのスペックや感情エネルギーの計測を行うスタッフが数名おり、リデアも教導官としてスタッフたちと連携しながら訓練内容の最終確認を行っている

る。

リデアの言う通りに五分が経過する頃には、全員が訓練室の中央にいるリデアの前に集まってきた。二名ほど計測器のスイッチを切ったままだったため、リデアから注意——とは名ばかりのセクハラを受けていたが、彼女の容姿のよさからか、片方は喜んでるようにすら見えたが、希繫は敢えてスルーした。

「さて、いよいよみんなお楽しみの実戦訓練だ。まずは全員リミットブレイクした状態であたしサマと鬼ごっこといこうか。もちろんこっちも全力で逃げるからギア特性でもスキルでも使えるものはなんでも使っていていい。もちろん他の訓練生と協力するのもオツケー。むしろこっちから推奨したいくらいだ」

「いや、いくら最速のリデア戦技教導官でもリミットブレイクした装着者を、それも逆流しているヤツら二十人を相手に鬼ごっこって、さすがに勝負になりませんよ」

「そうですよ。ましてやりデア教導官は逆流現象にすら至ったことがないって聞いてますし、それじゃいくらなんでも——」

「おう、さっそく活きのいいヤツが出たな。いいぞお、自分のハードルをぐんぐん上げるヤツはお姉さん大好きだからな！ まあ実際どれだけ無謀なのは、やってみりゃわかるだろ。おら、さっさと準備しな！」

「どれだけ無謀なのか——その言葉の指すところが、「お前たちにとって」という意味だ

と理解している数名の訓練生たちは、よくも無駄にあのリデアを張りきらせてくれたな、と彼女に苦言を呈した訓練生を睨んだ。

無論、研修生時代、訳あつて悠生と一緒に通常の研修とは別の地獄のような特訓を受けた希繁も、睨む側の一人だ。逆流現象に至ったことがないから自分たちに劣る、と彼らは言ったが、彼女の恐ろしさの一端はまさにそれだ。

最速・準最強といわれる彼女だが、彼女はその称号を得るためにほとんど他の影響を受けていない。ユナイトギアによる身体能力の底上げを受けてはいるだろうが、ほとんど彼女の基礎身体能力に頼っており、ギア特性は身体強化系ではない。ましてや、逆流現象の影響などさらにはありえない。

故に彼女のおそろしさの一端とは、「まだ成長の余地がある」ということ。現状が理論上の最高スペックでないことこそが、彼女の強みのひとつなのだ。

「モニタールーム、カウントダウン頼む」

『了解。カウントダウンを開始します』

リデア除いた全員が、各々のギアをリミットブレイクさせ、余剰分のエモーショナルエナジーが溢れていく。

『5……………4……………3……………2……………1……………訓練開始』

号令と同時に、全体の半数近くがリデアへと一直線に駆け寄せた。しかし、彼らが一

歩進む前には既に彼女の姿はそこになく、全員の背後へと移動していた。

しかしその動きについていけるだけの動体視力を持つ者も、最初の一手で様子を見ていた希繫を含め数名いた。だが動体視力で追いついていても、体が追い付いてはくれなかった。希繫と、もう一人のスピード型と思われる訓練生だけが、その動きについていき、一気に駆け出した。

その動きを見ていて、追いつくことができないと咄嗟に判断を下した者が大多数。その中でも、他の訓練生と連携してリデアを追っている二人のサポートに回ろうとする者が半数ほど。残りの半数は、ただ見ているだけでその場を動くことすらできていなかった。

「こう広いと逃げ道が多すぎる！　せめてどつちに逃げるか選択を強くないと先日手だ！」

「あなたのトップスピードはどのくらいですか!?　僕はこれで精一杯ですが、まだ出せそうなら追跡はあなたに任せてスキルで退路の妨害にシフトします!」

「じゃあ任せました!　こつちもスピードで負けっぱなしは癪なんぞな!　全速力でやらせてもらう!」

リデアの動きを追っているスピード特化型のレイドリベンジャーズとはいえ、最速のリアアと準最速の希繫のスピードに追いつくにはまだまだ遠かった。

片方が脱落したことで、相手はどうとう自らの全速力に追隨する希繫だけとなり、リデアも速度を限界まで引き上げた。こうなってしまうと、目で追うことすらほとんどの訓練生では不可能になってしまう。

だが、そんな二人の動きを遮るように、地面が大きく揺れ動いた。

「うおつとお!!」

(地震……? いや、誰かがスキルで妨害してくれているのか! なら……ツ!)

そう、その地震は初動でサポートに回ろうとしていた訓練生の一人による行動妨害。咄嗟に二人は空中へと飛び上がり、その不安定な足場から逃げるが、空中ゆえに退路がなくなった。

その隙を見逃すまいと、もう一人の訓練生が棍棒型のアームズを槍投げの要領で投擲するが、それを見越していたかのように、強烈な突風が希繫とリデアを吹き飛ばした。

「今の風は……『ストーム』のギア特性か!」

ストーム。リデアの所有する第一号ユナイトギアであり、正式採用型ユナイトギアにおいて、そのナンバリングの示す通り「最初のユナイトギア」でもある。

「ギア特性……? でも、リデア戦技教導官のギアの特性は『感覚探知』じゃ……?」

「知らないのか。ユナイトギアに個人専用機なんてものはない。相性のいいギアなら使いまわしもできる。ただ一人につき一つしかギアが与えられないのは、単純に数が限ら

れているのと、「相性のいいギア」がそういくつも見つからないだけだ」

「じゃあ、リデア戦技教導官のユナイトギアは……!」

「ああ。五感と第六感を極限まで鋭敏化させる第二号ユナイトギア『ホッパー』と、そよ風から台風まで天災のごとく吹き荒れる風を操る第一号ユナイトギア『ストーム』の二機だ」

希繫のエクレールと同じメタリックブーツ型のストームから吹き荒れる風は、彼女自身の身体スペックと併せてまさしく「嵐」の如き暴力となり、頭部についた複眼のような髪飾りは、まさしく昆虫の目や触覚のようにあらゆるものを「感知」し「観測」する超感覚の眼となるのだ。

「ストームの噴く風のおかげで空中での姿勢制御はお手の物だ。どうした訓練生諸君、あたしサマを捕まえるくらい、逆流したお前さんたちなら楽勝だったんじゃないのかあ？」

「エクレール!」

『アクセルアクション』

体を電磁体へと変換し、空中のリデアへと接近する希繫。電磁体となったことで、重力による影響をほとんど受けなくなった今なら、空中に逃げられても大した問題ではない。

むしろ、ほとんどの質量を失い、アクセルアクションによつて情報処理速度が向上したことで、その動きはさらに鋭くなつており、リミットブレイクと逆流の影響で、現時点で希繫が誇る理論上最大速度が今なら出せる。

「おおつと、さすがに今のは危なかつたねえ。ホッパーの超感覚とストームの急旋回を借りてもギリギリ——」

「ギリギリ、アウトですよ」

『バブルプラスト』

「なっ——」

直後、背後にゆっくりと迫っていたシャボン玉が爆発し、爆煙がその場に充満した。

あれだけ派手に動き回つたのは、この一手を確実なものにするため。あの時、希繫に追尾を任せてサポートに回つた彼が放つたのは、追尾性能はあるものの追尾速度がまさしくシャボン玉級に遅い一撃。

しかしシャボン玉故に透明で見づらく、音もなく接近するそれに望みを賭けた希繫たちは、敢えて大掛かりなスキルやギア特性を連発してシャボン玉から注意を逸らし、彼女をその軌道上へと導いた。だからこそ——この一撃がかわされるはずがない。

「いやあ、焦つた焦つた」

その油断が、希繫から注意力を奪っていた。

「え——うわああああっ!?!」

「ダウンバーストにご注意くださいませ……ってな!」

いつの間にか自らの頭上へと逃げ延びていたリデアが放った強烈な下降気流に押し流され、希繫は地面へと墜落していった。

教導——インストラクション——

「——さて、桐梨隊員も医務室にブチ込んだことだし、さっきの鬼ごっこの反省会といこうか！」

最速のリデアに唯一追従することができであろう準最速の希繫きづなが撃墜され、リデアを追跡できる者がいなくなったことで、先程の訓練は実質的な強制終了となった。

多くのメンバーがまだ体力的に余裕があるように見えるのは、実際のところ彼女を追うことができたのが希繫ともう一人の訓練生だけだったことも一因だろう。

「今回の鬼ごっこの主旨は、高速機動型——俗にスピードタイプって言われるヤツが相手だった時の対処法。そしてエモーショナルエナジーのチャージを必要としないリミットブレイクの有効活用がどれだけできるか、だ」

「対処法と言われても、最速であるリデア教導官を追跡できるヤツなんて、それこそ同じスピードタイプでも一握りじゃ……」

「バカ言え、誰が正攻法で追っかけるなんて言っただよ。あたしサマはあくまで「対処法」を言えつつつてんだ。正攻法がダメなら他に方法がいくらでもあんだろ」

「なっ？」
と言われ視線を向けられたのは、先程のシャボン爆弾によるトラップを作り

出した訓練生だった。

数名の訓練生たちが「やっぱりスピードタイプじゃないか」と言う中、ほとんどの訓練生たちは得心のいったような様子で頷いている。

「こいつの仕掛けたシャボンブラストと呼ばれるスキルは、追尾速度にこそ難があるものの、音もなく姿も見づらい爆弾だ。感覚強化に特化したあたしサマのホッパーでさえ、爆発直前まで気付くことができなかったくらいだからな」

「ですが、あの爆発の直前に教官は振り向いて反応しておりましたが、あれはどのように……」

リデアの両目は包帯によって覆われており、爆弾に気付こうにも、音もなく匂いもしない、まさに爆発に触れる瞬間まで気づくことは不可能だったはずの一撃だった。しかし、彼女はその存在と位置を見抜き、希繫の頭上へと逃げ延びていた。

逃げ延びるだけなら、彼女のスピードなら難しいことではないだろう。しかし、存在と位置の把握はそういうわけにはいかないはずだ。視覚以外では絶対にわからないはずの爆弾。それを、彼女は視覚を封じた上で捕捉した。その理由とは――。

「ああ、あれはホッパーのおかげさ」

「ホッパー、ですか？　しかしホッパーのギア特性はあくまで感覚の強化、見えないものを見るものでは――」

「そう、感覚の強化さ。それ以上もそれ以下もない、ただの感覚強化だ。けど、感覚と
いつても五感だけじゃない。いわゆる「第六感」……直感ともいえる、まさしく「情報
源なく情報を得る感覚」も、ホッパーは強化してくれる」

ふとした時に、根拠もなく「嫌な予感がする」だとか「違和感がある」と思うことが
あるように、五感では把握できない情報を得る感覚、それが第六感である。

ホッパーの強化する範囲は「五感」ではなく「感覚」であり、そうした本能的に危機
を感じ取る感覚も、その範囲内なのだ。

「今まさにお前らの位置を把握できるのもそのおかげさ。お前ら全員がだいたいどのへ
んにいるのかは、集合する際の足音や汗とかの匂いで把握できるけど、個人の位置まで
はどうにもならない。だから直感的に「たぶんこいつはこの辺にいるだろう」と思った
ところに話しかけてる。もちろん結果はドンピシャだ」

さすがに個人の汗の匂いまでは知らないからな、と笑うリデアだが、大多数の隊員た
ちは「ホントか……？」と疑っている。

「とはいえ、ホッパーとストームをフル活用してようやく避けられたのも事実。ご褒美
に背中でも流してやろうか？」

「結構です」

「そいつは残念。ま、そんな感じでスピードタイプの相手を追い詰める方法は必ずしも

スピードだけじゃない。さっきみたいに罠を張って誘い込むもよし、わかりやすく逃げ場のない場所へ追い込むもよし。どちらにせよ、もうちよつと頭を使って戦わないとバカを晒すことになるって覚えときな」

今回、追跡を希繫に任せて即座に援護とトラップ配置にシフトした彼がMVPであることは、もはや誰に問うまでもないだろう。

しかし、それは彼が「ハイスピードでリデアを追えるから」ではなく、「スピードタイプの苦手分野を知っているから」というのが大きな理由だ。

スピードタイプが最も苦手なジャンルは「設置型トラップ」「低温戦闘の継続」「足場の悪い地形」「空中戦」だ。最後のひとつに関しては、リデアのように空戦適性のあるユナイトギアを持つていた場合は例外となるが、基本的には地に足がついて初めて機動力が生まれるため、空中では無抵抗で薄い防御を晒すことになる。

薄い防御が原因、という意味では、低温戦闘の継続も同様だ。スピードタイプの装着者は、その身軽さを保つため装甲を厚くすることは少ない。そのため、常に薄着での戦闘を強いられる。暑さには強いが寒さには人一倍弱いのが、彼らの総合的な弱点のひとつと言えるだろう。

設置型トラップに弱いのも、前者二つほどでないにせよ、そうした軽装がある程度は影響している。高速で動くというのは、何も彼ら自身の体の動作だけではない。彼らが

見ている景色もまた、高速で変化しているのだ。ともなれば、じっくり見渡せば見つけられるトラップでも見落としてしまうし、普通なら軽傷で済むようなダメージも、その身軽な装甲では防ぎきれないこともある。

足場の悪い地形に関しては、もはや説明の必要はあるまい。単純に転びやすい、ただそれだけのことだ。だがただ転ぶだけといっても、それは他のタイプとは意味合いがかなり異なる。高速で動いていた状態で足をつまずかせ、顔から地面にこすりつけければ顔面が紅葉おろしになることも容易く、大した怪我でなかったとしても、それまでの攻防のテンポが大きく崩れる。

他にも「絨毯爆撃」「四肢のいずれかの拘束」「部位損傷（脚部欠損）」など、挙げればいくらでも苦手なものは出てくるだろうが、当然ながらスピードタイプは全員その苦手分野を知った上でそのスタイルを貫いており、各々の手段でこれを突破する方法を編み出している。

それはベテランのレイドリベンジャーズであれば、スピードタイプだけでなく、あらゆるタイプの隊員たちが自分の苦手分野を探し、分析し、理解し、対策している。ここに集められた訓練生の中には、そうした「隊員」もそこそこいる。

おそらく、シャボン爆弾の訓練生も、その中の一人なのだろう。だからこそ、あの場で素早く判断を下せし、希繫もまたそれを理解し、敢えてリデアの高速戦に乗っかつ

てシャボン爆弾から意識を外させ、ある者は地面を揺らし二人をシャボン爆弾のある空中へと誘った。あれはまさしく、「スピードタイプの弱点をわかっている者たち」の反撃であつた。

「まあスピードに関してはこんなもんでいいだろ。次はリミットブレイクの有効活用ができていたか、だ。これについてはあたしサマと希繫を浮かすために地面揺らしたヤツが完璧だつた。前に出な」

「はっ！ 恐縮です！」

「おお、地面を揺らしたのはギア特性かと思つてたが、このガツシリした体つきならスキルか？」

「はっ！ ギア特性『波状伝播』とアームズ『グレートハンマー』を利用したスキルになります！」

地面を揺らした訓練生は、169センチあるリデアの頭頂部をちようど顎のあたりに捉える巨漢であり、その立派な体格と豪快なアームズから繰り出される巨大な衝撃を、ギア特性によつて遠くまで伝播させるのが先程のスキルなのだろう。

彼が地面を打ち付けた影響で、訓練室の地面は枯れた大地のように罅割れてしまつており、そのことについて既に謝罪しているものの、リデアどころか本部の戦技教導部からすればいつものことである。むしろ教導部からすれば、このくらい暴れてくれなければ

ば訓練にすらならない。

「あの時、こいつは希繫があたしサマをあゝの地点に誘い込むまでアームズすら展開して
いなかった。それはあたしサマもホッパで感知してたし、モニタールームの記録係も
そう言ってたから間違いはない。だがその一瞬のためにこいつは一カ所に固まってたお
前たちから離れ、最も効果的なタイミングでアームズを展開、そのままスキルに移行し
た。お前、そこまでの経緯の理由付けをしてみろ」

「はっ、まず他の訓練生たちから離れたのは、自分のスキルの範囲から味方を外せなかつ
たためです。元々、威力云々よりも足元を荒らして攻め手を遅らせるスキルなので、グ
レートハンマーさえ当たらない位置に行けば問題はないと判断しました。また、アーム
ズを前以て展開した場合、リデア戦技教導官に警戒される可能性がありましたため、直
前まで待機しました。最終的に、最も効果的と判断したタイミングで、アームズの展開
とスキルの発動を行い、リデア戦技教導官と桐梨隊員を空中へと移動させました。以上
です！」

完全に不意を打たれたのはリデアだけでなく、シャボンブラストに気付かず二人の拘
束戦闘を見守っていた者たちも足をすくわれることとなったが、全体の動きを把握でき
ていた何人かが、咄嗟にアームズを地面に突き刺し支えとしたり、あるいは敢えてしゃ
がんでやり過ごしていた。

「今日こうして共同訓練を受けに来たのが、医務室のアイツを含めて30名だ。そんなで、初動のあたしサマの動きを見極めようとしたヤツが23名。あたしサマの最初のスピードについてこられたのが2人しかいないのは別にいい。それは適性の問題だからね、今回の訓練とは関係ない」

だが、トリデアは頭を搔いて溜息をつく。

「最初に後先を考えず突っ込んできた8名の中で、その後まったく動けず、仲間の動きにも気付かずスつ転んだヤツが4名もいる。そこで並んでるお前とお前、そしてそこで俯いてるお前と、後ろの方で他の奴に隠れようとしてるお前だ」

わかりにくいから前に出な、と言われ、その四名が前に出る。

「どいつもこいつも匂いが若いな。資料にあった最年少組の4人だな？ 全員の年齢を言ってもらおうか」

「15です」

「同じく15」

「17歳です」

「18」

レイドリベンジャーズでは、筆記・実技試験さえ合格できるのであれば、12歳から入団可能である。ただし、前線での活動は危険が伴うため、最低でも中学卒業後、前線

部隊へ参加するための研修を実技・座学の両方で行う。

彼らの内、前二人は間違ひなく「研修」修了直後、前線部隊の上司から特に期待を受け、教導訓練^レに来ているのだろう。おそらく、後の二人もそう事情は変わるまい。15歳から前線に参加できるといつても、15歳以上が全員即座に前線に就くわけではない。彼らもごく最近、そうした部隊に配属され、ここにいるに違ひない。

とはいえ、リディアの表情は柔らかくない。

「やっぱ若いな。……ああ、勘違いすんなよ。別に若いからってバカにするつもりはない。若くてすげーヤツだっていくらでもいるし、頭でつかちで仕事のできねえ老いぼれだっている。だから年齢なんてものは実力を計る指標にはまったくならない」

「だったらなんで訊いたんだよ」

悪態づくように、18歳と名乗った青年が呟いた。

「実力を計る指標にはならないが、経験を計る指標にはなるからさ。お前さんたちはあの時、真っ先にあたしサマを攻撃した。それは他のやつと比べて短慮だったかもしれないが、誰かが動かなきゃ得られない情報だったであつた。だろ、シャボン玉ボーイ？」

「はい。あの時、彼らが率先して動いてくれたおかげで、僕たちは彼女のあの時点でのトップスピードが計れました。そこで、そのスピードについていけると判断したのが、僕と桐梨隊員です。おそらく他にもスピードタイプの方はいらっしやっただと思えます

が、あのトップスピードにはついていけないと判断したものと 생각합니다」

彼の言葉に、数人の隊員が頷いた。

「そういうことだ。だから最初の一手そのものは悪くない。本当はあれが「そういう意味で」「そのつもりで」やったことなら言うことはないが、今回は単純な「向こう見ず」が結果オーライ的にそうなたただけだったので残念だ。そこだけは覚えておけ」

「……はい」

「肝に銘じます」

最年少組の二人が、静かに返事を返すと、リデアはその四人を元の列へと戻した。

「だが一番問題だったのはその後だ。ここからはこいつらだけの問題じゃないぞ。あたしサマが集団の中を飛び出してから、サポートもせず戦況すら正しく読めてないやつが全体含めて14人いた。つまり未成年組の他に10人もいたわけだ。これは今回の訓練生全体の半数近くにも及ぶ。これじゃあさすがにお叱りなしとはいかないよなあ？」

「しかし、あの状況で我々全員にできることなど……」

「おっと、そう言うお前は地震スキルで派手にスつ転んでたメガネだろ。じゃあそうだな、この中にあの状況で戦況を把握しつつ、自分の判断で援護できていた者は手を挙げろ」

シャボン爆弾の青年、地震スキルの大男を含め、6名ほどの訓練生が挙手をした。

「その二人にはもう説明してもらったからな……お前、あの時の状況をどう把握し、どんな援護をしたか説明してみろ」

「はい！ リデア教官を隊員二名が追跡している間、私はまず三名がだいたいの程度の速度で動いているかを目測で計測しました。リデア教官と希繫隊員のみとなるまで、およそ時速250キロほどだったと判断します。お二人だけとなってからは、目では追えませんでした」

「まあ、まずはスピードの計測だな。相手がスピードタイプなら、対策を取るためにもまずはだいたいのアタリをつけるもんだ。そんで？」

「隊員二名の機動性は間違いなく賞賛に値するものでしたが、スピード勝負では、おそろく我々に勝利はないと判断しました。それはおそらく、リデア教官を追跡していたお二人が一番よくわかっているはずだと思いますので、途中から速度を上げた希繫隊員に「おや？」と思いました」

そう。スピードタイプの間が最も知っておかなければならないのが、自分自身が出せるトップスピード。希繫の場合は、逆流現象によって強化された影響で、ギア特性なしで約410メートル毎秒、電磁体でおよそ31万キロ毎秒。並み居るスピードタイプの中でもトップクラスの速度となる。

しかし、リデアの持つストームのギア特性は「風を起こし、風に乗る」ことを可能と

する、まさしく風神の如き能力。自分よりも高速で動くものが引き起こした「風」に「乗って」動くことで、常に相手のトップスピードを上回ることができる。

だからこそ、リデアの持つ「ストーム」の力は、全てのスピードタイプの頂点に立つ、「最速」をもたらすギアと呼ばれているのだ。

「スピードタイプのお二人が、特にリデア教官の愛弟子と称される希繫隊員が、リデア教官の「スピード殺し」の性質に気付いていないはずがない。だからこそ、私はすぐさまスピード戦を抜けたもう一人の隊員に視線を移しました。するとやはり、彼はスキルかギア特性によって、複数のシャボン玉を生成していました」

「なるほど、あの直後にはもう作り始めてたのか。何人か投擲武器や射撃武器で援護してたヤツがいて、その中に紛れてるもんだと思ってたから、これはちよいと驚いたな」
「続けます。シャボン玉がどのような性質を持つかは、私には判断できかねました。しかし、生成の際に一切の音を発することなく、ゆっくりとですがリデア教官を追尾しているのを見て、私はそのシャボン玉が音もなく姿も見えない「魚雷」のような役割を持つものだと判断し、それを隠すようにだけ大きい音の出るスキルを連発し、探知の妨害を行いました。以上です」

そう述べる、訓練生たちからまばらな拍手が送られた。

「説明ご苦労。こいつのやったこと、それは決してあたしサマを一切傷付けないもの

だった。ただ単にうるさいだけ。狭い視野で言えばそう言い切ってもいい。だが広い視野で見れば、あたしサマはこいつが状況を的確に分析し、音という方法で感知を妨害したことで、よりいっそうシャボンブラストに気付くのが遅れた。他のやつは射撃や投擲もよかつた。あんだけやられたら、まさかシャボン玉なんて割れやすいものが近づいてるなんて思わないからな」

援護できていた者たちがリデアに強いたことは、シャボン玉なんてあるわけがないと「間違つた情報を押し付ける」ことと、シャボン玉が近づいているという「正しい情報を遠ざける」ことのたつた二つ。

しかし、そのたつた二つが、リデアをあのギリギリまで追い込んだ。だからこそ、「ただ見ている状況も把握できていない者」は間違いなく愚かでしかない。

「まあ教導訓練はまだ初日だ。この三日で出来る限りの戦い方を叩き込んでやる。だからみんなしつかり学んで、それを絶対に忘れるな。あたしサマは同じ説明をそう何度もしてやるほどサービスのいい女じゃないんだ。お前らも男なら女をヒイヒイ言わせるくらいは気概でやりな！」

その後、午前の教導訓練が終わり、リデアから赤点をもらった14名の訓練生たちは罅だらけの訓練室100周を言い渡された。

恩讐—ヘイト—

「さーて、楽しい楽しい座学の時間だ！ 腹も膨れて眠気もあるだろうが、あたしサマの教導中に寝るヤツはそのままベッドに連れ込まれるのも覚悟しな！」

昼休みを挿んで、座学による教導が始まった。昼休み中に目を覚ました希繫きづなも、午後からの座学には復帰した。というよりも、目を覚まさなければリアデアに襲われる寸前だった。

独特の注意喚起を前置いて行われた講義は、意外なほど順調に行われた。随所にリアデアらしい下品な例えを含んではいるものの、講義を受ける者を誰一人として置き去りにしない語りは、さすがに教官官といったところか。

途中、何度か説明を遮るように問いかけられた質問にも、簡潔で具体的な回答で軽くかわす様子は、まるであのセクハラ教官官と同一人物には思えなかった。

「リミットブレイクの最たる特徴のひとつは、エモーショナルエナジーの過剰抽出によつてチャージなしでスキルを発動できる速攻性・奇襲性の高さだ。さっきの訓練でも、地震スキルを使つてたヤツがそれを上手く活かしてたな」

リミットブレイク。装着者の感情エネルギーを必要以上に引き出し、ギアのスペック

を限界以上に引き上げる「ユナイトギアの切り札」とも言うべき力。しかし、装着者への負担の大きさや、ギア自体の耐久限界から、最長で3分間のみ。使用後は24時間の冷却時間を必要とする。

総じて「一時的にスペックを向上させる技術」というのがリミットブレイクの性質となるが、単純なスペック向上だけでなく、エモーションナルエナジーを過剰摘出した影響で、ユナイトギアとして幾つかの例外現象を引き起こす。チャージを必要としないスキル発動も、そのひとつと言えよう。

「他にも、リミットブレイク特有の現象として、これを繰り返すことで俗に言う『逆流現象』を引き起こすことがあるつても忘れちゃいけない。逆流現象を経験した装着者は、ギアを解除してもエモーションナルエナジーによる強化現象が続いているかのように身体能力が向上し、ギアを再装着することでそれまで以上のスペックを得ることができ
る」

とはいえ、と一拍おいて、

「それが良いことかと言うと、そう断言もできない。それまでの感覚に従って物を握ったり掴んだり、あるいは走ろうとしたりすれば、強化された体と感覚のギャップに苦むことになる。今ここにも、逆流現象の影響によって変化した身体能力の制御方法を学ぶために共同訓練に参加しているヤツらが数人いる。そうした負の面も制御して、よう

やく力は意味を持つのか」

制御できない力は、ただの暴力にしかならない。希繫の「罪を憎んで人を憎まず」思想の根底にある「暴力」に対する捉え方は、他でもないリデアから学んだものだ。

暴力を是として圧倒的な破壊力で罪も人も罰する悠生とは違い、希繫は制御された力によつて罪を暴き人を赦そうとする。その両者の思想は、どちらが間違つていてどちらが正しいというものではない。ある意味ではどちらも正しく、ある意味ではどちらも間違っている。

しかしだからこそ希繫と悠生は共に手を取り合うことで、罪を背負った人間を正しく裁くことに成功しているのだ。

「逆流現象による影響は日常生活において絶大だ。良くも悪くもな。たとえばコーヒを飲もうとマグカップを手を取ったとして、普段の感覚で取っ手に力を入れたらポツキリ折れてしまった、なんてことも少なくない。誰かは履いた靴の位置を直そうと爪先をトントンしたら玄関の床を砕いた、なんてこともあったらしい」

（あの後、砕いた床を直してもらうのにだいぶ使ったんだよなあ……。俺の不注意のせいとはいへ、予想外の出費だった……）

「レイドリベンジャーズとしての業務にはまったく関係ないが、日常生活でこうしたミスや失敗を繰り返していれば、当然ながら精神的な不満やストレスになる。そしてそん

な精神状態で任務に挑めば、自分だけじゃなく周りを危険に晒すことも少なくない。そういうのを回避するためにも、逆流現象の影響の制御は大事なことだつてのがわかるだろう？」

逆流現象そのものは、数こそ少ないが決して珍しい現象ではない。リミットブレイクを繰り返せば、いずれ誰もが到達しうるものだ。

しかし、だからこそそこに到達した者の苦労は知らなければならぬ。本人の注意を促すためにも、周囲への理解を促すためにも。

「だが逆流現象の影響の制御つてのは、言葉にするよりも遥かに難しい。訓練を始める時にも言ったが、あたしサマから教えられるのは制御する術だけだ。感覚だけは自分で掴んでもらうしかない。少しでも怠ければ制御できない力に溺れることになるつて覚えとけ！」

リデアは、自身の持つユナイトギアの影響か、「感覚」というものを特に重要視している。感覚とは、言葉ではなく経験や直感によつて得られる「フィット感」のことだろう。自分に最も適した方法・手段を見つけ出すこと。それが彼女の言う「感覚を掴む」ということなのだ。

しかし、希繫を始めとした多くの訓練生たちは、その「感覚」というものを上手く理解できないでいた。おそらく「フィット感」という意味までは理解できているのだろう

が、それが具体的にどのような感覚なのかは、まだわかっていないのだろう。

「まあ、今すぐにわかるものでもなし。そういうのは体で実感するもんだ、今は座学だから、まずは頭に教え込んでやるよ。じゃあ先にリミットブレイク発動時のエモーショナルエナジーについてだが——」

（逆流したエモーショナルエナジーの制御は、リミットブレイク時のギアを制御するのと似てる、つてのは聞いたことがある。元より、どちらも過剰なエモーショナルエナジーを制御するものだから、似てて当然と言えばそこまでだが、あれはもう感覚というよりも慣れだ。無意識で制御しているせいで、意識的にやろうとすると難しい）

慣れることと感覚を掴むことは似ているようでまったく違う。慣れることとは、無意識に理解することであり、感覚を掴むこととは、意識的かつ直感的に理解することだ。

歩く、という行為はただ左右の足を交互に前に出すだけではない。重心移動や歩幅の調整。非常に細かい制御の上で誰もが無意識にやっていることだ。だがこれを感じてはなく頭で意識してやろうとすると、容易に出来る者は決して多くない。

だからこそ、無意識による理解というものは、時としてとても役に立たないものになり得るのだ。

「——というワケだ。まあユナイトギアつてのは感情が昂るほどに力を増す。逆流現象と同じさ、抑え込まずにコントロールするのが大事なんだ。リミットブレイクと逆流現象

象の制御が似てゐるって言われてゐるのもそこさ。無理に覆い隠そうとすると溢れちまう。むしろもつと爆發させて、その勢いに指向性を持たせるんだ。みんなやつてるだろ？」

指向性、という言葉を聞いて、希繫は自分の中にあつた「無意識」の形をようやく理解した。そう、あの感覚はまさしく「指向性」だつたのだ。感情を抑え込まず、その向きを変える。それが希繫が——そして多くの装着者がしていた無意識の制御方法の正体。

だが頭ではわかつてても、それを実行に移せるかは別問題だ。まだ試していないのでわからないが、そう容易くいくことはあるまい。リミットブレイクの制御でさえ、本来ならば長い訓練の末によくやく可能となるのだ。

義陰よしかげがリミットブレイクを行使したために容易く思われがちだが、彼も「制御」という意味ではリミットブレイクに失敗している。あれはただ感情を爆發させてリミットブレイクの「発動」に成功しただけだ。その証拠として、彼はリミットブレイク中、常にスキルを最大威力でしか使用できていない。

「何人かは得心がいったようでは何より。ま、あとは感覚を掴むまで実践あるのみ。座学を終えたらまた実践訓練だから、その時にもつと具体的な説明をしてやるよ。じゃあ次、リミットブレイクの発動タイミングについては——」

「さて、今日の訓練はここまでにしよう。各自で軽く体操して今日は解散！ おつかれー」

「ご指導ありがとうございます！」

その日の訓練を終え、リデアが訓練室を去ると、全員がその場に倒れ込んだ。

「さすが噂に違わぬスパルタの鬼だった……！」

「これがあと二日も続くのか……」

「お前ら教官に何回尻揉まれた？ 俺は3回」

「僕6回」

「なんであの戦渦の中で尻触る余裕があるんだ……」

倒れ込む訓練生の中には、リデアのセクハラに対する不満を告げる者も多い。さもあらなん、と希繫は苦笑いするが、彼も4回ほど尻を揉まれている。

むしろ一回も触られなかった者はいるのか、と拳手を促す者もいたが、誰一人として手を挙げなかった。

「あの教官マジで一回ボコりたいよな」

「わかる。明日の訓練で一発ギャフンと言わせたい」

「動機はともあれ、自分もリデア教官に一矢報いたい気持ちはある」

ふと、一人の訓練生が希繫の方を向いて、「お前あの教官の愛弟子だろ、何か弱点とか知らないのかよ」と問うが、

「そんなの知ってたら真つ先に実行してるよ」

と遠い目をしながら語る彼を見て、誰もが慰めの視線を送ったという。

「まず師匠のスペックの話からしようか。みんなも知ってる通り師匠は『最速』『準最強』のレイドリベンジャーズだ。俺より速く、悠生の次に強い。だから単純な殴り合いではまず勝てない」

「具体的に、桐梨隊員よりも速いというのは時速何キロぐらいを指すんだ？」

「俺の限界が秒速31万キロだから、それよりは速いことになるな」

周囲から「なんだそれ」「化け物かよ」「常識を軽々と飛び越えるな」という声が挙がるが、希繫はそれらを全てスルーした。

「そして悠生の次の強いって点では、少なくとも直径10キロメートルの隕石を粉々に砕くくらいはできるって本人は言ってた。悠生も「それくらいならまあ」って言ってた」

周りからは「まあじゃないが」「類友を呼ぶな」「人間の範疇を逸脱するな」という意見も聞こえるが、希繫はまたも全てスルーした。

「それに加えてあの超感覚。目隠しで使い物にならない視力も含めて全ての五感が鋭敏

化しているだけでなく、五感で捉えられない情報は全て直感で察知する。的中率100パーセントの直感ほもはや未来予知にも等しい。何より幾つもの戦場を潜り抜けてきた経験が、戦略的にも戦術的にもバトルセンスを格段に向上させてる」

「なんだその戦うために生まれてきた戦闘民族みたいなスペック。ホントに人間か？ 漫画の世界から飛び出してきた「ぼくのかんがえたさいきょうのバツタおんな」じゃないのか？」

「そう思いたい気持ちはわかるが残念ながら生物学上あれでも人間なんだ」

その場の誰もが絶望する中、不思議とその胸には共通の思いが宿っていた。

「……今すぐにはいかないだろうが、いつか全員であの教官をボコろうぜ」

「ノった」

「異議なし」

「あいつ殴れるならレイドリベンジャーズ辞めてもいい」

全員でリアを殴る。そんな思いを胸に、全員が一致団結した。

なお、この会話はもちろんホッパの超聴覚によって聞かれており、訓練室を出た直後みんな揃ってセクハラされた。

雑談―チャット―

「よっ。隣いいか？」

「お疲れ様です。どうぞで」

その日の夕方、希繫きづなが食事をとっていると、背後から声をかけてきたのはリデアであった。周りにいた数名の訓練生たちが、慌てて料理を口にかっ込み、ごちそうさまでした、の一言を告げて去っていくのを、希繫は苦笑いしながら見送る。

これが今日の訓練の成果ですよ、と皮肉たつぷりに言うと、リデアはさして気にした様子もなく、「だろうな」と笑った。彼女曰く、訓練中は訓練生に嫌われるのが教官の勤めなのだそうだ。

既にリデアのやり方を知っている今の希繫はそれに異を唱えることはないが、かつての彼はその言葉に反することなく、リデアを嫌っていたし、今でも隙あらば一発叩き込みたいと思う程度には「弟子」らしいところが残っている。

「そういうえば、今日はまったくレイダー出現のアラートが鳴ってませんでしたけど、やっぱり東京は平和なんですか？」

「まあ、レイダーに関してでは、国内で永岑市より忙しいところなんてないだろうな。前回

のレイダー出現も二か月くらい前だ」

二か月。週の半分以上をレイダーの対処に追われる永岑市とは、比較するべくもなく少ないと言いつける間隔期間だ。

しかし、トリデアは続ける。

「レイダーの方は平和だが、ユナイトギア悪用犯罪者はそっちの比じゃないだろうな」
「今、ちょうど俺と悠生がそっち関連の事件にあたってますけど、他の部署ではレイダーの対処に当たっているのです、ここ数か月で一件ですね。こちらは？」

「ちよつと前には輸送中のギアを国際的犯罪者集団のひとつと思しき組織に奪われたほか、現在対処にあたっているヤマだけで三件だ。災害はないが事件はある、というのが都会的というのなら、東京は大都会さ」

皮肉たっぷりに言うリデアの表情は、いつものように飄々としていて、それでも確かに、レイドリベンジャーズとしての怒気も抱えていた。

それはリデアに限った話ではない。レイドリベンジャーズとは、人類を理不尽から守るために発足した組織である。故に、多くのレイドリベンジャーズたちは厳しい現実を直視しながらも、誰もが傷つかない理想の未来に向けて努力している。

しばしば悠生を「勇者」だとか「英雄」だとか囃し立てる者もいるが、彼はその度にその言葉を否定する。レイドリベンジャーズという組織において、英雄とは誰かを指す

言葉ではなく、誰もがそうなるべきだと信じているからだ。

故に、普段はセクハラ魔のようなリデアでさえ、レイドリベンジャーズとしての矜持は持ち合わせている。

「国際的犯罪者集団となると……国内では「蓬萊寺家」ほうらいじを筆頭にいくつか候補がありますね。もう目星はついてるんですか？」

「さすがに蓬萊寺家が相手なら、被害はトラックと運転手だけじゃ済まなかっただろうさ。同じ理由で、金峰院家きんほういんもないだろうね。となると、有力なのは蔵王庵家ざおうあんか。あそこは強盗・窃盗が専門だしな」

「蔵王庵……。確かにあそこなら人的被害が少ないのも納得ですけど、そうとなると奪還は難しいでしょうね。あそこに奪われて返ってきたものなんて数えるほどもありませんし」

だからといって泣き寝入りするつもりもないが、それだけ厄介な相手だということ、希繫もリデアも理解していた。

とはいえ、希繫はこの件についてはあくまで部外者だ。本部から直接要請がない限り、永岑支部所属の希繫がこの事件に関わることはない。

「そういえば、話は変わるがお前ずいぶんと速くなつたな。昔は電撃体を使っても秒速26万キロが限界だったろ。これはいいよ『最速』をくれてやるのも時間の問題だな」

「そうは言いますけど、『ストーム』は相手のスピードが生み出した風に乗ってより速くなるじゃないですか。こっちがどんなに速くなっても、師匠には敵いませんよ」

「ん？ あー、別にそんなことないぞ。ストームはあくまで相手の生み出した風に乗るだけで、相手より速く動けるギアじゃない。相手に風を作ってもらわないといけない以上、先手はどうしても譲つちまうからな。相手が動き始めてから風に乗るまでの間に勝負がつけば、あたしサマはどうしようもない」

ましてや、リデアは両目を包帯で隠しているため、視覚的に相手の位置を追うことができない。匂いも風に乗ってくる以上、それよりも速く動く相手に対して有効なのは聴覚と触覚だけである。

しかし、希繫のトップスピードは光すらも超越する。故に、光よりも遅い音の情報はほとんど役に立たないと言ってもいいし、触覚で感じられるのはあくまで風の動きで相手の大まかな速度を測定するのみだ。

となると、リデアが希繫の速度を捉えられる唯一の感覚は、「第六感」だけと言える。その第六感が、まるで未来予知にも等しい的中率を誇るからこそ苦戦しているわけだ
が。

「あと、今日の訓練はあくまで鬼ごっこであって模擬戦じゃなかったから使わせなかったけど、逆流した装着者にはユニティバレットが支給されてるだろ。アームズがないな

ら、ああいうのをもつと活かしな。使えるものはなんでも使わなきや、勝てる勝負も勝てないぜ」

「仰る通りです。でもまあユニティバレットはまだ効果を全て把握していません……」

「全ても何も、ユニティバレット一回使えばどれも効果同じだろ」

「あ、いや俺のは7種類あるんですよ」

「宝の持ち腐れしないでさっさと全部使って効果把握しろ」

リデアから真つ当な指摘をされたことに一抹の悔しさを感じつつも、反論の余地もぐうの音もなく希繫は沈黙した。

彼女の言う通り、未知の兵器を未知のままにして携行することは、戦いに身を置く者として許されざる行いだ。土壇場になってどんな効果を發揮するかもわからない戦力では、味方への影響も計り知れない。そういう意味では、未知の効果を持つ戦力など最初から無いものと思っただ方がいい。

現状、希繫が把握しているのは赤色のユニティバレットの効果のみ。攻撃速度を向上させるブースターを脚部に展開する効果を持っている。おそらく他の六趣も、体の各所に武装を展開するものだろうと思っっているが、現時点では具体的にどのような武装なのかさっぱりわかっていない。

「後で訓練室に來い。ユニティバレットの効果の把握に付き合ってやる。ついでに個人

指導もだ。美人の師匠と二人きりで指導してもらえるなんて幸せ者だなあ？」

「俺が未婚で師匠がセクハラ魔じゃなかったら幸せだったでしょうね。まさかとは思いますが自分の息子さんにまでセクハラしてませんよね？」

「は？　してるが？」

「児童相談所に通報していいですか？」

合意の上だから、と笑うリデアだが、実のところまったく合意ではない。むしろ反面教師的にとてもガードの固い息子である。

「児童相談所で思い出したけど、お前んところは子供どうすんだ？　相手知らんけどたぶんあのちっこい幼馴染の嬢ちゃんだろ？」

「そうですね、なんで児童相談所で思い出したんですかね。あなたと違って通報される覚えはないんですけどね」

「いやまあ子供云々よ。ほら、下世話な話だとは思うけどあの嬢ちゃんの体じゃ子供なんて作れないだろ。体格差がありすぎる」

彼女の言う通り下世話ではあるが、希繫と逢依^あにとつては現実的かつ切実な問題のひとつである。希繫の身長は175センチ、逢依は142センチ。その差は33センチにも及ぶ。単純な体格差もそうだが、逢依の未発達な身体で、子供を作ることができるかどうかというのは、未だに怪しい。

未来から実子・白露が来ている以上、逢依は出産に成功しているのだが、帝王切開によるものという可能性もあり、逢依の体にかかる負担のことを考えると、今の時代で子供を設けることについては、あまり楽観的に考えることもできない。

「二応、あたしサマの知り合いに145センチで二児の母ってヤツもいるから、極端に悲観する必要もないと思うけど、子供を作るつてのは精神的にも肉体的にも母親に負担が大きいからな。ちゃんと考えて、支えてやれよ」

「もちろんです。あいつ自分の体じゃ子供は作れないだろうなって思ってるっぽいんで、無理強いをする気はないですけど……。でも、できるなら産ませてやりたいんですよ。あいつが一番、自分の子供を抱くことを夢見てるはずなんで」

白露が未来から来て、一番喜んだのは逢依だ。

自分の未発達な身体では子供を産むことは叶わないだろうと思っていたからこそ、未来から実子を名乗る少女がきて、自分の体に希望を持たた。

もちろん、白露のことも愛しているし、そこに優先順位などない。だが、できればこの時代で、今の自分の体で、子供を産みたいと願っていることを、希繫は知っていた。

「じゃ、そんな奥さんを守り抜くためにも、この後の指導は力を入れなれなっ！」

「やっぱりそこに帰結するんですか……」

連携—サポート—

教導訓練二日目。食後の個人指導も含めて、満身創痍で床に就いた希繫きづなは、早朝から始まる訓練についていくのに必死で、彼にしているは珍しく座学が待ち遠しかった。

しかし、そんなにも都合よく休みを与えないのがリデアであった。前日の疲労によって全員がくたびれ果てているのを見た彼女は、午後の座学を実践訓練に急遽変更した。何人かは悲鳴にも似た批難を浴びせたものの、当人は素知らぬフリを通していった。

「さて、急遽こうして実践訓練と相成ったわけだが、別にあたしサマも悪魔じゃない。嫌がらせやパワハラのもりはないんだ。最近そういうの厳しいしな」

訓練に先んじて、全員にその意図を説明し始めるリデア。というのも、こうした疲弊状態を鑑みて予定を変更することは少なくないが、それにあたって説明不足によるパワハラ扱いが、過去何件か問題になったのだ。

教導官は、疲弊状態で敢えて過酷な訓練を与える場合もあるので、特にこうした誤解を受けやすく、説明の有無はそのまま失職の是非にも影響するのだ。

「あたしサマの見通しに反して、意外とお前らの疲労が溜まつてるっぽいからな。こうした疲弊状態での訓練は、いわゆる肉体的な限界状態を意味する。この状態では普段よ

りも大幅に集中力や忍耐力が低下しているから、不注意で短気になりがちだ。それを頭に入れた上で、連携をしつかりとって訓練をしていくぞ」

三人一組のチームが10組。それぞれタイプ異なる者を集めたバランスのいいチームだが、足並みの揃っているチームとなると、そう多くはない。

性格が合わないチーム、武器の相性がよくないチーム、お互いのタイプを正しく理解できていないチーム。それぞれに問題を抱えたチームがある中、希繫のところはというと、少なくとも性格・態度による衝突はなかった。

希繫の持つエクレールがアームズを持たない第四号ということもあって、ある程度はクセの強いギアでも合わせられるということも、いい方向に働いた。

「じゃあ基本は俺が先んじて前に出つつ、お前がその動きを見ながら前・中衛で援護攻撃、君はアームズで後衛から狙い落とす感じでいく。あとは臨機応変に対応していい」

「異議なし。本当なら銃使いの私が後衛を務めるべきなのではようが、生憎とスナイプの苦手な接近ガンファイターブレードボウでしてね。申し訳ない」

「問題ないよ。オレのは斬撃弓ブレードボウやから接近も遠距離もこなせるけど、オレ自身の運動能力が低いから射撃特化みたいなところあるしな」

全チームの話が粗方まとまったのを確認すると、リデアの号令に合わせて全員がチー

ムごとに整列する。

「じゃあまずはチーム戦を5回行って、自分のチームの特徴と連携を理解しろ。その後、組み合わせを変えてチーム戦を何度か繰り返し、最終的にリミットブレイクした状態でチーム戦を行うぞ」

真つ先に名前を呼ばれたのは、希繫のチームと、全体のバランスはよさそうだが、あまり雰囲気よくないチーム。

とはいえ、いくらお互いに好印象でないにしても、それが戦闘に影響を及ぼすような幼稚なレイドリベンジャーズはいないと信じて、希繫たちは身構える。

「では両チーム、構えて——始めッ！」

真つ先に動いたのは、言うまでもなく希繫だ。リデアという例外を除いて、この場で一番速く動けるのは彼だ。だからこそ、相手チームも先手を譲ることになるだろうということは想定していたようだった。

希繫の飛び蹴りが、ひよろ長の青年の胸を捉えた。その速度ゆえに、跳び蹴りには「貫通」の性質を持たせてしまいがちな希繫だが、さすがに殺すわけにはいかず、接触の瞬間に足を畳み、再び伸ばすことで打撃を生まれず吹き飛ばすことに成功する。

だが相手もまたレイドリベンジャーズ。ただで転ぶわけもなく、青年を蹴り飛ばした希繫が着地する瞬間を狙って、その腕にスライムのようなロープが巻きつけられた。

「そっちのチームで、強い弱いを抜きにして一番厄介なのはアンタだからな！ 対策は打たせてもらったぜ！」

「足を掴まれるくらいなら振り払えるが、腕となると楽には抜け出せないな……！」

ロープや枷による『拘束』は、高速機動型スピードタイプが苦手とするもののひとつだ。ましてや希繫は脚力に極めて特化したタイプであり、腕力についてはここ最近の鍛錬の成果を含めでも、一般的なレベルを大きく下回る。

巻き付いたロープごと駆けまわって振り切るのも考えたが、そうなるとロープよりも腕がもげる方が早い。仮に腕がもげたところで電磁体となって肉体に再変換すればまた腕は生えてくるが、痛いものは痛いのだ。

しかし、巻き付いたのが枷でなくロープなら、やりようはいくらでもある。

「ちようど一カ所に二人まとまってるな！」

ロープを伸ばしている者と、その後ろから銃で狙っている者。その二人の周りを取り囲むように、グルグルと何周も走り続けると、その二人の体がスライム上のロープに縛られる。

さすがにこの状況はまずいと判断したのか、即座にロープをドロドロのスライムに戻し、ゼロ距離の状態から希繫を離すべくスライム使いの装着者が蹴り飛ばした。

「あつぶな……！ まさかウチのスライムロープをこう使ってくるなんて……！ けど

……既に十分こっちの役目は終わった！」

「うわあああああつ!!」

役目? と思考を巡らせかけたその時、背後から聞こえた悲鳴に、希繫は舌打ちを禁じえなかった。

「後衛が狙いか……っ!」

希繫が目の前フルアーマーの二人に気を取られている間に、後衛二人に接近していたのは2メートルにも及ぶ巨体を持つ全身鎧のレイドリベンジャーズ。

ガンファイターの銃撃と襲撃、そして弓使いの矢は全てその堅牢な鎧によって弾かれ、有効打が何一つないまま鎧の質量に任せただ打撃を受けてしまったのだろう。

「一度退け! 有効打を見つけるまで無暗に近づくな!」

「させるか! パラッパラッパアの音波を防がなければ、お前たちに逃げ場はないぞ!」

「トランペット型のアームズ……!?!」

トランペット型のアームズ、パラッパラッパアの音波攻撃によって、演奏する本人と鎧の男以外の全員が、両耳を塞ぐために両手の動きを封じられた。

唯一、攻撃に手を必要としない希繫が、鎧男に攻撃を仕掛け、二人から引き離すことに成功するが、今度は3人が一カ所に固まったことで、全員がスライムロープに捕われってしまった。

幸い、耳に手を当てているおかげで、スライムロープは胴体を縛りつつも両手の動きまで縛ることはなかったが、音波攻撃によってそれも実質的に封じられてしまっている。

「こればかりは詰みか、と二人が諦めかけた瞬間、希繫が叫んだ。

「拡張接続！ ユニティバレット！」

『了解。ユニティバレットに拡張接続します』

エクレールの磁力によって白銀色のユニティバレットを装填したプレスレットを、腕で耳を隠したまま頭上でスライドさせると、プレスレットから白銀の光が迸り、希繫の腰から長い尾が展開された。尾の先端にはブレードがついており、無数の関節を持った連結尾であることがわかる。

希繫はすぐさまその尾のブレードでスライムロープを切断し、トランペッターの装着者へと攻撃を仕掛けた。先ほどまでの高速キックの応酬に加え、無数のフェイントと、尾による刺突・打ち付けによる攻撃が追加されたことで、両手をトランペッターに塞がれたトランペッターの装着者は防御と回避が困難になった。

本当ならスライム使いの装着者に防いでもらいたいが、彼もまた音波攻撃によって両手を塞がれている。ここで音波攻撃を解けば、防御と回避の手段は増えるかもしれないが、相手の動きも一気に勢いを増す。どちらにしても撃墜は免れない。そう判断したト

ランペッターの装着者が選んだ選択肢は——。

「音が……」

「——替わった！ エクレールッ！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、チャージ充填開始』

先ほどまでの喧しい「音」から一転、まるでファンファーレのような、激しさと規則性を持った「曲」へと変化した途端、その音楽を聴いた全員のエモーショナルエナジーが上昇した。

「これが私のギア特性……心象音楽！ 音楽によつて受ける印象・影響を、表面化するほど強化する！ あとは頼みましたよ……！」

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

「ぜあああああああつ！」

電磁体となった希繫の体が、瞬く間もなくランペッターの装着者の体を通り抜ける。

打撃力は皆無だが、電磁体となった希繫はそれそのものが強烈な電撃であるため、致死性はないものの、全身の痺れはしばらく抜けることがない。

実質的なリタイアである。

「これで三体——」

「——いいや、二対二だ！」

しかしファンファーレによる「昂揚感」によってエモーショナルエネルギーが格段に強化されたのは、クリムゾンインパクトのチャージ時間が短縮化された希繫だけではない。先ほどまでは一本だけだったはずのスライムロープが、ファンファーレの影響で40本を超える数へと増殖した装着者によって、希繫は逃げ場もなく捉えられ、壁へと叩きつけられた。

「ぐ……………」

「これは……………いよいよギブアップか？ 準最速の人がおらんくなつた今、仮にスライムの人を倒せても、オレらだけやと鎧の人に対して決定打があらへんもんな」

「ですね。リデア教官、ギブアップします」

「んー、もうちよつと踏ん張ってもらいたかったが、まあ後もあるしな。判断力も悪くない。そこまで！ 各チームは戦闘不能になった隊員を伴って地上モニタールームへ！」

無自覚—ギルティ—

「やれやれ……お前さんの打たれ弱さもここまで来たら特技の域だな」

「我ながら、気絶しなかつただけ上等と褒めてもらいたいくらいですよ。あいててて……」

「エモーショナルエナジーの保有量だけならレイドリベンジャーズでも指折りのはずのお前がそこまでダメージを受けるなら、やっぱり問題は使っているユナイトギアの出力の方だろうか」

エモーショナルエナジー。簡易的に説明してしまえば「感情のエネルギー」とも称されるのだが、その効果・影響力を全て把握できているレイドリベンジャーズはそう多くない。

多くの装着者が最も実感しているのは、これが多いほどに強力なスキルを行使でき、そしてギアを纏うことによって底上げされる身体スペックの強化幅が向上すること、そして受けたダメージを軽減してくれるということ。この三つくらいだろう。

このエモーショナルエナジーを行使するにあたり、重要なのは「装着者の供給する量」と「ユナイトギアが放出できる量」に関して、明確に限界が定められているのが後者だ

ということだ。

感情を吐き出すことそのものは、人間に設けられた最も原始的な力の行使であり、基本的に上限がない。しかし、それを受け止めて「スキルの強化値」「身体スペックの強化値」「ダメージの軽減値」といった『出力』に変換するユナイトギアには、感情というデータに対する処理能力に限界がある。

ましてや、希繫きづなやリデアの使用する「エクレール」「ストーム」「ホッパー」は、現時点で1440機存在する中の初期型。基礎スペックと容量の低さが故にアームズを持たない、零一〇号機まで11機ある内の三つである。故に一部の者からはこれら初期型を「低出力の骨董品」とさえ称する。

とはいえ、一〇号機以降はオミットされた機能を持つ試作機としての面も有しており、特に一号機・ホッパーに関しては、今や再現不可能とさえ言われる「第六感による感知・探知」を可能としており、二号機・ストームも空気という意味の「風」だけでなく、雰囲気や状況を意味する「風」さえ生み出す、技術者たちが首を傾げる生きた遺産である。

「お前の膨大な感情のエネルギーを、エクレールがエモーションナルエナジーとして活用できる限界があまりにも低い。逆流した今だからこそ尚更わかるだろ？ ギアを換えればお前は今よりももっと、格段に強くなれる。それだけの感情エネルギーを保有して

るんだ」

『……申し訳ありません、ディアマスター。私の力不足が、ディアマスターに負担を強いているようであれば、より適切なユナイトギアに変更いただくことを推奨します』

リアアの説得に便乗するような形で、エクレール自身も自らの弱さを詫び、そして彼に新しいギアを持つことを薦めるが、希繫の意思はそんな両者の思いとは異なっていた。

「ありがとう、エクレール。それに師匠も。けど……俺はこいつとだから今をうまくやれている気がするんです。出力が低くても、形状やギア特性は俺のスタイルにすぐマッチしてるし、俺が使いたいスキルを確認するまでもなく瞬時に察して実行してくれる。何より、こいつとのコンビネーションが一番しつくり来てるんです。だから、こいつとのコンビ解消は、きつと逢依と別れるくらいありえないんです」

『ディアマスター……』

「……そうかい。じゃあせめて、相変わらず日本本部にまったく顔を出さないあの自称・天つつオメカニツクの嬢ちゃんにエクレールを診てもらいな。あの嬢ちゃんならもしかすれば、エクレールをあんたに合わせてくれるかもしれない」

エクレールを希繫に合わせる。それはつまり、彼の膨大にして絶大のエモーションナルエナジーを全て受け止め、出力変換できるようにするということ。

今のままでは明らかに容量が足りていないため、そのためにはエクレールのAIによるサポートも含めた大規模な改修が必要となり、さらにはそれを可能にするだけの技術者がいなければ話にならない。

現実的にそれを可能とするだけの腕と知識を持つ技術者となると、リデアの言う通り、たった一人だけ思い当たる節があった。

「菜咲なさけに頼むんですか？ 確かに頼んだらやってくれそうな気はしますけど……。でも、そんなことしたら実質エクレールは俺の専用機になっちゃいますよ」

「あたしサマのホッパードって実質あたしサマの専用機さ。なあに、上にはちよつとくらい口利きしてやるから、心置きなくやってもらえ」

言い終える頃に、今まさに模擬選をしていたチームの勝敗が付き、リデアの号令が入る。

ユナイトギアの変更は、単純な手段のひとつとして、希繫も気が付いていなかったわけではない。しかしエクレールとのコンビを解消してまでそれを得るかどうかを天秤にかけ、エクレール以上に重く傾いたことは、今の今をもってしても未だない。

それは単なる情ではなく、エクレールの形状性質・武装範囲・基礎スペック・登録スキル・ギア特性などの全てを加味した上での判断だ。もちろん、エクレールへの愛着がないという意味ではないが。

(けど……それでも実際にこうして師匠からも追及された。それは俺の思い込みや勘違いとかじゃなく、エクレールに明確な課題があるっていう証明だ。俺自身が成長しなきゃいけないのはもちろん、エクレールにも無茶してもらわないといけない時がいつかきつとくる。その時のために、この課題は無視できない)

最弱のレイドリベンジャーズ。希繫を表すそれは、一方で「他者を傷付けない」レイドリベンジャーズをも意味しており、多くの場合で蔑称とされる中、本人にとっては「誇り」となった称号のひとつだ。

しかし長らくの時を経てなお、彼が最弱であることに「何故」というメスを入れる者はいなかった。その最初の一言を発したのが、どのレイドリベンジャーズでもなく彼の娘である桐梨白露きりなししろろであることから、その称号の揺らぎのなさが窺える。

そして、そんな娘からの追及に対して、希繫自身は「自身の未熟が原因」だと答えた。しかし、後になって思考と試行を繰り返すほどに、その「何故」が深く突き刺さる。

そんな中で今回、こうして師であるリデアによって追及されたのが愛機・エクレールの力不足。無論、希繫自身の極端すぎる身体スペックも一因であることは否定しない。しかし、それでもこうして明確に示された「課題」は、希繫とエクレールの両者に深く刻まれた。

「一緒に頑張ろうな、エクレール」

『はい。どこまでも一緒にします、ディアマスター』



訓練を終えてビジネスホテルに戻るなり、希繫が早々に連絡を入れたのは、他でもなく我が家で待つ妻あいしづろと娘だった。逢依は生憎と入浴中で受け取れなかったが、先にながたらしくまだ少し髪の毛濡れたままの白露が、嬉しそうな表情で通話に出た。

『お疲れさまです、お父さま。明日、お帰りになられるんですね？』

「ああ。夕方には帰れると思うから、逢依には夕飯を少し遅らせてほしいって言っておいてくれ。みんなと一緒に食べような。昨日は寝てて連絡できなかったけど、白露は学校どうだった？」

『はいっ！ 学校の方も楽しかったですよ。それに、一番のお友達もできたんです！ 学年は一つ下なんですけど、ちょっと大人しくて、でもとっても優しい子で——』

無邪気に学校での出来事を語る白露の声を聞いて、希繫はようやく一息つきながらミナラルウォーターを口に含んだ。まだ一日あるとはいえ、この二日の共同訓練で摩耗したのは体力だけではなかったらしい。

希繫自身が想像していた以上に、娘の——家族の声支えになる。心の隙間が埋まる

感覚だけではない。もつと直接的な、フィジカル面での疲れがとれていく感覚。張っていた緊張がほぐれて背負っていた重さが下りていくようで、落ち着いたように溜息を吐く。

「いい友達ができたんだな。女の子か？」

『はいっ、とつてもいい子です！ あ、女の子じゃありませんよ、男の子ですっ！』

「——っ」

ぴしっ、と身が凍りつく音がした。男の子の友達。それはいわゆる、ボーイフレンドというものか。いやいやさすがにまだ小学生、単なるお友達だろうと、一瞬の内に思考をまとめながら、努めて冷静に白露に問いかけていく。

「その子とは、どんな……話とかをするんだ？」

『お話ですか？ えーつと、昨日は好きな本のお話をしましたよ。その子は漫画とか絵本みたいな、物語が好きみたいです。わたしが図鑑が好きだと話したら、じゃあ今度その図鑑と一緒に読もうね、ということになりました』

（これは……どっちだ？ 一見するとセーフに見えるが、白露の好きなものに合わせてきてるところを見るとギルティか？ いや、純粋に興味があっただけかもしれないし……！）

『あと、その子が図書室で借りた本を一緒に見ていたら狐のお嫁さんが出てきて、こんな

風にずっと仲良くいようね、つて言いました！』
(むしろ白露うしろのこが無自覚ギルティだった！)

疾風迅雷—キック—

「さて……今日で短期教導訓練も終わりだ。お前さんたちはあるべき戦場へと戻り、あるべき日常を守るために戦うことになる。今日はこの三日で学んだ技術を全て出し切り、あたしサマとタイマンしてもらおうぞ。あんまり出来が悪いヤツには追試とあたしサマの愛の手がいくことになるから氣イ張ってこい！」

教導訓練最終日。リデアから課されたのは一対一タイマン。リデアが最も得意とする土俵であり、リデアが最も警戒する土俵である。

地上モニタールームで他の訓練生たちがリデアと戦う様子を見守りながら、両者の動きの良いところと悪いところを見比べる。すると、希きづな繋はあることに気付いた。

(師匠の動き……最速と準最強をほとんど使ってない。速くもなく強くもなく……ただ、ほとんど「悪い動き」がないだけだ)

そう、リデアが今している動きには、彼女が「最速」「準最強」と呼ばれるためのスピードとパワーを一切発揮していない。誰にでもできる動き、誰にでもできる技だけで、対戦相手の動きを完封している。

おそらく、戦っている相手もそれに気付いているだろう。あるいは、彼女がそうする

意図さえも。しかしそれでも、誰にでもできる動きだからこそ、それが突破できないことに苛立ち、自分の動きがより悪い方向へと循環していく。

常に全力でないことが、時として相手に焦燥感を与えることは、知識としては知っている。しかし「最弱」であるが故に、いつだって全力で戦わざるをえない希繫からすれば、とても真似できる戦い方ではない。しかし――。

（そうか、優芽と初めて戦った時に感じた焦りや困惑は、こういうことだったのか）

もはや半年以上前のことだが、つい先日のことのように思い出すのは、優芽と初めて戦った時の感覚。

あの時、優芽の戦術のバリエーションに希繫は常に驚かされ続けた。電気も速さも封じられ、まるで自分を殺すためだけにあるような戦術の数々に、焦りと驚きが隠し切れなかった。あの時の感覚が、今リデアと戦っている相手を感じているものと同じなら、優芽の凄さがより深く理解できる。

優芽には飛び抜けたステータスというものがない。希繫のようなスピードも、悠生ゆうせいのようなパワーとタフネスも。それでも、そんな圧倒的なステータスを押し潰すようなものがあるとするば、多彩な武器と戦術を使いこなし、相手を翻弄する頭脳。

彼女がそれを知っていてやっていたかどうかは今を以て不明だが、その頭脳と技量に圧倒されたからこそ、希繫は彼女に終始押され続けていたのだろう。

「次、桐梨隊員、出ろ！」

「はいッ！」

先ほどの戦いが終了し、待ち構えているのは既に14人抜きを果たしながらも息一つ乱さないリデア。仁王立ちで待つ彼女に、準最速が挑む。

「おつ、最初からユニティバレット使う気マンマンか。いいね、昨日・一昨日のひどい有り様よりは成長がみられる」

「師匠相手に、手の内を隠してなんかいられませんから」

模擬戦闘訓練のルールは単純にして明快。開始から10秒間はリデアからの攻撃はなし。またリデアはリミットブレイク禁止。訓練生からの棄権は緊急時を除き不可。危険行為を行った際は中断。訓練生が戦闘続行不可と判断されたら試合終了。

訓練生側にリタイアの権利がないのは、教導官の判断で「安全な範囲で限界以上を引き出す」ためだというが、リデアに限って言えば、単に訓練生をヒイヒイ言わせたいがためだろうと、希繫は心の中で苦笑いする。

しかし今は笑っている暇などない。リデアと睨み合い、カウントダウンを待つ。

『5……………4……………3……………2……………1……………訓練開始』

先に駆けだしたのはリデアだった。だがそのスピードは希繫からしてみても目で追えるほど遅く、とても「最速」のそれとは思えない。が、だからこそ希繫は努めて冷静

に対処しなければならない。

リディアのスピードをギリギリ上回る程度の速度でクロスレンジに入り込むと、彼女の拳撃を手で受け流し、フェイントを入れつつミドルキックを打ち込んでいく。

キックを基本的な攻撃手段として使う二人だが、全体のバランスがとれたリディアに対して、希繫は拳による攻撃ができない。それはユナイトギアを纏っていないから、という意味ではなく、パンチの打ち方を知らない、というのが大きい。

そのせいか、リディアのキックにはパンチを組み込んでいるため奇襲性があるのに対して、希繫は「キックだけに注目していても対処ができる」という状態なのだ。

「食生活や鍛錬法を変えたことで上半身にもある程度の肉と骨の太さが出てきた希繫だが、今のところそれを活かすことができているのは防御面での話だ。

手と腕でガードし、全身でかわし、足で逃げる。デیفエンスにおいてはバリエーションもできてきたが、これが攻撃となると、やはりキック一辺倒だと言わざるを得ない。

だからか、リディアからの攻撃は全て防ぎきれているのに、攻撃がまったく当たらない。当たっても全てダメージにならないよう防がれてしまっている。この状態ではとてもではないがリディア相手に勝利がもぎ取れない。

「いいぞ、フェイントが上手くなってるじゃないか！　だがやっぱり全体のバランスが

悪いな！ こっちのキックは全部防げてゐるのに、パンチはちよくちよくガードを抜かれる。ただ腕を構えるだけじゃダメだ！ もっとお前の動体視力と反射神経を活かせ！ 相手の足元にばかり注目せず全身の動きを見るんだ！」

スピードタイプの相手に対して、足元の動き——特に爪先の向きに注目するのは基本中の基本だ。それを正しく把握できれば、スピードに追い付けなくても「どこへ」向かつて「どこから」攻撃が来るかを予想できるからだ。

しかし、リデアはその予想さえもフェイントに変えてくる。足の動きに注意していることと、希繫も足の動きが機敏であることも相俟って、キックは全て防げているが、やはり上半身の動きに対して不注意になってしまう。

「拡張接続！・ ユニティバレット！」
アクセスロード

『了解。ユニティバレットに拡張接続します』
アクセスロード

開始前からずっと握っていたユニティバレットを左腕のプレスレットに装填してスライドさせると、橙色の光を伴って彼の右腕全体を覆う籠手が展開された。

その形状からして、明らかにパンチ力を増強するためのユニティバレットであることは明らかだが、この防戦一方の状況でなぜそれを選んだのか、リデアは一瞬だけ判断が遅れた。

「拡張接続！」
アクセスロード

『了解。ユニティバレットに二重拡張接続ダブルアクセスロードします』

「二重展開……ッ!？」

再びユニティバレットを装填し、エクレールの側面に赤色のブースターが展開されると、リデアに明確な動揺が生じた。この瞬間を狙っていたのだ、と言わんばかりに、希繫の拳がリデアの胸を捉えた。

「やつと師匠に一撃かれてやれた……!？」

「痛ててて……これはさすがにビックリしたねえ。さすがあたしサマの愛弟子だ、予想外のことをしてくれる」

「このユニティバレットはどうやら俺の大切な仲間が俺のために用意してくれた特別製みたいで。だからきつと、同時にひとつしか使えないなんて、本末転倒なものじゃないって信じてましたよ! ——エクレールッ!」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

その勢いのまま、ミドルキック、ハイキックと続けざまに叩き込むが、さらにフェイントを挿んで回し蹴りを入れようとしたところで、リデアの反撃が希繫を後退させた。

「ストーム、一発デカいのくれてやろう」

『イエス。リデアキックを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

できるだけリデアに考える時間を与えないよう、希繫は即座に次の攻撃へと移った。

ハイキックを左腕で防がれることをわかった上で、右脚を地につける動作のまま左脚で足元を払う。

リデアはこれすらも後退してかわすが、バックによつて重心が僅かに後ろに傾く瞬間と、ミドルレンジ分の距離——これを希繫は待っていたのだ。

『充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

『充填完了。レッツゴー、リデアキック』

二人は同時に駆け出し、そして同時に地を蹴った。

「ぜああああああッ！」

「だああああああッ！」

二人の必殺キックが、ぶつかり合つて——。



「ただいまー……」

「おかえりなさい……おっ、お父さまっ!?! どうなさいたんですか、その傷はっ!?!」

希繫が永岑市の自宅に帰ると、それを迎えてくれたのは白露しろろだった。希繫の傷を見るなり、慌てた様子で彼の手を引き、夕食の準備を終えてリビングで雑誌を読んでいた

逢依あいつの元へと連れて行つた。

逢依は彼の様子を見て、「また派手にやられたわね」と呆れたような表情で迎えながら、白露が運んできた救急箱を開けて手当てを始めた。

「で、この傷が教導の成果？」

「まあ、師匠と最後に全力の蹴りの打ち合いして……」

「蹴り？ 蹴りでこんな火傷みたいになるの？」

「いや、打ち合いの結果、エクレールが爆発した」

リデアのストームも小破したが、打ち合いの結果はもちろん希繫の負け。ギアの破損で戦闘続行不可となったせいだ。エクレールはA1とスキルやギア特性を登録している記憶領域の部分が無事だったため、家に戻る前に永岑支部の技術開発部へと修復——と「改造」を頼んできた。

明後日には義陰よしかげと陽乃はるのの「答え」を聞かなければならないため、それまでには全て間に合わせてくれと言うと、菜咲なさけは悲鳴を上げながら許しを乞っていたが、普段から愛車のXD400Rを勝手に弄り回されている報復も込めて、「じゃあよろしく」と言い渡した。

「間に合うの？」

「間に合わせるだろ。あれでも天才メカニックだからな」

「菜咲ちゃん、今夜は徹夜ね……」

実を言うと、逢依と菜咲は部署こそ違うが親友と呼んで差し支えない仲である。同性の友人という意味では、小転こころの次に親しい相手だと言ってもいい。しばしば希繫と菜咲がXD400Rをめぐってひと悶着を起こしているのも、逢依と悠生の共通の友人だという点からできた縁だ。

そして、彼と彼女がこうしてひと悶着を起こす度に、菜咲の泣き言を聞くのが逢依の役回りでもある。今日明日はまだいい。技術開発部のラボに籠もりきりになっていて手が離せないだろうから。

だが問題は彼女がそれを終え、希繫にブツを渡し、がつつり睡眠をとって体力を回復した後——。怒涛の泣き言ラッシュが通信機、あるいは私用の携帯に届くことは既に目に見えている。

(これは……最終的に悠生に泣きつくところまであるかもしれないわね)

菜咲は泣き言が始まると、基本的には逢依に言うだけ言って満足する。しかし本当にどうしようもなく追い込まれた時は、恋人である悠生にまで飛び火する。

そうなると面倒なのは、悠生は逢依と違って対応が雑なのである。話そのものは聞いてくれるし、ごくまれに本当に菜咲だけではどうにもならないような問題が起きていると助けることもある。が、しかし。基本的に悠生は放任主義なのだ。分かりやすく言う

と「自分でどうにかしろ」というタイプである。

そう言われてしまうと、もはや菜咲は感情のぶつけどころがなくなってしまい、最終的に泣き出す。これをあやすのが、再び逢依の出番となるか、場合によっては希繫もそこに加わることになるのだ。ただ、今回は原因が希繫なのでより面倒になる。

「まあギャン泣きする前に謝ろうとは思ってるよ」

「そうね、それがいいと思うわ」

希繫も察しているのか、謝罪の用意はしているようだ。

喧嘩—レコンシリエーション—

『お前は何も悪くない。お前を傷付け続けた奴らは、お前に非があつてそうしたわけじゃない。ただそいつらの見えてる世界が狭くて、相手を思いやる気持ちを失つていただけだ』

『お前は間違つてない。自分が傷ついたから、その苦痛をみんなに知ってもらおうって気持ちには正しくて、清らかなものだ。だが、そのために暴力を使っちゃいけない。他者を思いやらず、自分の意見だけを通すために暴力をふるつてしまえば、お前はお前を傷付けたやつらと同じだ』

この一週間、ずっと脳裏にこびりついて離れないのは、自分たちにとって障害でしかないはずの、敵でしかないはずのたった一人の言葉。

自分たちを捕えるために、戦意を削ぐためにかけられた見せかけだけの情けだと断じることが、何度も繰り返し返してきたはずなのに、なぜかそのたった一人の言葉が頭から消えることはなかった。

なぜなら、それはずっと求めていた言葉だったから。ORBを飛び出し、我慢をやめて社会に叛逆すると決めたあの時から、自分の行いが社会にとってよくないものだとい

うことは、他でもない自分自身が一番よくわかっていた。

だがそんな行いが、他の誰でもなく自分自身にとつては慰めになつてゐることに、嫌気さえさしていた。だが、それでも心のどこかで、自分は間違つていないということ、自分をここまで追い込んだ悪がいたことを、不離バの仲テイの陽乃以外の——味方でもなく敵でもない「社会の一人」にわかつてほしかった。

だから、そんな時に自分の主張を受け入れて、その上で何が間違つていたのかを指摘する彼の言葉は、義陰よしかげの胸に深く沁み込んだ。

「……陽乃はるの」

「なに、義陰」

「僕のしようとしたことは、間違いだつたのかな」

陽乃は、反射的に「そんなことないよ」と言おうとした。しかし、それを嚙んだのは、隣に座りながら身を震わせる彼の嗚咽が、まるで今にも消えてしまふようなほど静かだつたから。

きつと彼は、慰めの言葉が欲しいわけではない。もしもここで、ただ慰めのためだけに彼の非を否定すれば、彼との絆はここで絶たれてしまうのだろうと、本能的に察した。だから、今だけは——。

「……アタシは義陰みたいに頭いいわけじゃないから、何が正解だつたのかなんて、ちゃ

んとはわからないよ」

「……………」

正直に言うことだけが、今の彼に対する誠意なのだろう。

彼がしてきた罪も、あるいは徳も、全てをひつくるめた想いを伝えなければ、届くことはないだろう。

「でも、アイツも言つてただろ。義陰を傷付けた奴らが悪くて、義陰は手段こそ間違えたけど、その主張は正しかったんだって。だから、義陰はきつと正しかったんだよ。ただ、頭がいいから考えすぎたんだ。義陰だけにやらせて、本当にゴメン」

「陽乃が謝ることなんてないよ。僕が勝手に暴走したんだ。僕が勝手に全部決めて、それに陽乃を付き合わせてしまったんだ。僕の弱さと拙さのせいで、陽乃を傷付けたんだ……………」

「それは違うッ！」

それは、不離バの仲テイとして最大の、『否定』であった。

今ここでそれを否定しなければ、この先ずっと、彼のことを不離バの仲テイとは呼べなくなる。と確信しながら、彼女は叫ぶ言葉に力を込めた。

「そうじゃないよ、義陰！ 義陰だけが悪いんじゃない！ アンタをそんな風に独りにさせたアタシも悪いんだ！ だってアタシたちは不離バの仲テイだろ！ 二人揃つてようや

く一人前なんだ！」

「けど……」

「アタシはさ、義陰の優しさに甘えてたんだよ……。義陰は頭がいいから、考えることを何もかも義陰に任せてばかりだった。面倒を全部押し付けてたんだ。でも……そうじゃないだろ！ アタシたちって、そんな寂しい関係じゃないだろ！」

肩を寄せ合うように座っていた陽乃が立ち上がり、義陰をその胸に抱きよせる。

義陰は一瞬だけ僅かに抵抗するが、すぐに彼女に体重を任せた。

「アタシも一緒に考えればよかったんだ……。二人で一緒に頑張ればよかったんだ……。アタシは義陰みたいに頭がよくないけど、それでも一緒に悩んであげることくらいできたんだ。それをサボって、義陰にばっかり辛い思いをさせて……。ゴメン、義陰。本当に……。本当に、ゴメン……。！」

「陽乃……。ううん、僕こそちゃんと陽乃に頼ればよかったんだね……。陽乃は僕なんかよりよっぽど強くて、いつも僕を助けてくれて……。もつともつと、陽乃の強さを信じればよかったんだ。僕こそ、陽乃を信じられなくてごめん……。これからは、もつとちゃんと頼るから……。！」

不離バの仲テイ。それは決して離れ離れになることのない絶対の絆。緩むことはある。絡まることもある。だが決して千切れない不壊の糸。



「さて……」「答え」とやらを聞かせてもらおうか」

「わかつてる。約束は約束だ、ちゃんと自首するよ。それに、答えも見つけてきた。だから……勝負だ、希繫きづな！」

「勝負？ 自首するんなら戦う意味なんてないはずだ。お互い無事に済ませたいだろ？」

それに、コトと次第によってはお前の立場が悪くなるだけだぞ」

「いいや、意味ならあるよ。アタシたちが悪いのはわかりきってるんだけどさ、それでもアンタに足蹴あしづめにされて指一本動かせない体にされたこと、忘れたわけじゃないしね」

ようは、自首はするが今までの鬱憤ふんくらいは晴らさせる、ということだ。希繫として、これに付き合うメリツトもないし、何より今ここにはエクレールがない。リアアとの戦闘で大破し、修理に出したものがまだ戻ってきてないからだ。

だが、ここで悔恨を残せば、せっかく自首すると言っている二人に再犯の可能性を与えたままとすることにもなりうる。ならばいつそこで後腐れなく仕合い、更生を道へ辿ってほしいというのがレイドリベンジャーズとしての彼の正直な気持ちだ。

「それは俺一人じゃないとダメか？」

「できればその方がいいけど、無理ならこの間の大男以外なら誰を呼んでもらっても構わない」

「……命のやり取りはなしだぞ」

「もちろん。アタシたちだつてそんなにバカじゃない。そんなことしたらいいよレイドリベンジャーズ全員、特にこないだのデカイやつを敵に回すことくらいわかつてるよ」

二人の返事を聞くと、希繫は通信機でどこかへ連絡し、その場で十五分ほど待機すると、一人の少女がその場に呼び出された。

虹色のストレートロングと、虹色の瞳。一度見たら忘れることのできないその容姿の彼女は、こと「レイドリベンジャーズとしての桐梨希繫」については最大の理解者とも言える少女。

「お兄さん、あたしこれでも女子高生とレイドリベンジャーズの二足の草鞋でだいぶ忙しいんですけど……」

「悪いな優芽。逢依はこういう自業自得には付き合ってくれないからさ」

「その後で香坂先輩にチクリますからね……」

四人が向き合い、各々のギアを構えると、優芽がふと気付いたように声をかける。

「あれ？ お兄さん、エクレールはどうしたんです？」

「壊れて修理中だ」

「は？ ……はあつ!? あたしがお兄さんを救おうとあれだけ必死に壊そうとしたのを拒んでおきながら壊したんですか!? なんですかそれ、ぶっ飛ばしますよ!」

「やめろやめろ! 一対三にする気か!」

事情は後で話すから、と言つて宥めると、ひとまず悶着は後回しにして、優芽は希繋のやや前に出た。いくら希繋がレイドリベンジャーズだとしても、さすがに生身で装者と戦うには分が悪い。そう思つて、庇うように前に立つたのだろう。だがそんな彼女の肩に手を添えると、希繋はいつものように微笑み、寄り添うように立つた。

それは、^{キズナ}対等の証だ。悠生が「前」に出ることで勇氣を示すように、逢依が「隣」に立つことで愛を示すように、希繋は周囲にいる人に対して「寄り添う」ことで絆を——互いの対等性を示す。どちらが上でどちらが下でなく、どちらが前でどちらが後ろでなく、対等であるからこそ絆は強くなる。

そしてそれは対峙する二人も同じ。義陰と陽乃もまた、互いを対等な相棒とするからこそ、その強さを発揮する。それは今までのような「怒り」に囚われた力ではなく、より純粋で高度な感情の結晶——ユナイトギアの本領。

「じゃあ……行くぞッ!」

「来るよ、義陰!」

「わかってる！」

これが最後の、後腐れなし真正面からの、喧嘩たかひだ。

稲光—エクレール・ルミエール—

「ギアがないからって容赦しないぞ！ ルーナ！」

『ラジャ。ブラックバレットを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

交戦開始から早々にスキルの発動を試みたのは、この四人の中で最も地力が低い義陰だった。素の身体能力の低さを、影を操作するギア特性と、それを利用したスキルで翻弄するのが彼の戦い方なのだろう。しかしスキルのチャージから完了までの早さにおいて、彼女を上回る者はいない。

「お兄さんはやらせませんよ。イーリス、お願いします」

『了解。フアントムミストを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始……
充填完了』

「なっ……!?! なんなのそのチャージの早さ!?!」

昂揚剤によってどうにかこうにかギアに適合している状態とはいえ、そもそも彼女とイーリスの相性そのものは決して低くなく、むしろその逆。チャージの遅さは装着者とギアの相性に比例する、とまではいえないが、少なくとも相性の悪い両者と良い両者では、その違いは明らかだ。

陽乃の驚く声を聞く間に展開される、無数の幻影たち。希繫も優芽も含め、ざつと30を超える幻影体だが、かつて彼女が希繫との闘いで使用したセブン・フォー・ワンとは異なり、水ではなく霧による幻影であるため、攻撃能力も防御能力も持たない。

しかし、視覚情報を妨害することの有用性は、光と影をフィールドとして展開することもある二人だからこそ誰よりもわかっている。しかも、光と影で塗り潰す二人の戦術とは異なり、この幻影で埋め尽くす戦術であれば、相手側は義陰と陽乃のことを視覚的に捉えられる。言うまでもなく、拙い状況だ。

『充填完了。ブラックバレット、いつでも』

義陰の前に、真つ黒なバレーボール大のスフィアが展開された。すぐにでも発射したが、このスフィアから放たれる影の弾丸に偏向能力はない。故に、周囲を取り囲む幻影を消しながら本体に攻撃するためには、弾丸をばら撒くしかないが、そうなると陽乃まで被弾してしまう。

まして、真に狙いをつけるべき相手はあの「準最速」と呼ばれる希繫だ。ギアがないとはいえ、ブラックバレットは相手にダメージを与えられるよう、質量を持たせて発射するため、その速度は秒速360メートル程度。希繫の生身のトップスピードが秒速351メートル。僅かに弾丸が勝るが、ばら撒くとすれば弾丸が自分に向く前に逃げるだろう。

ではどうしたら、と迷いかけた時、ふと以前の希繫との闘いを思い出し、彼はすぐさま声を上げた。

「陽乃、伏せて！」

「！」

直後、自らを起点に360°回転しながら、周囲の幻影を消していくと、ある一力所で手ごたえがあった。それは——。

「大丈夫か、優芽」

「おかげさまで。さすがに防御が間に合いませんでしたから、助かりました」

そう、狙いをつけるべきは、希繫ではなく優芽であった。この幻影の発動源であると同時に、希繫が咄嗟に庇おうとするのなら、それは実質的に彼への攻撃でもある。さすがに全ての弾丸を蹴りで弾かれることまでは想像できなかったが、おかげで彼の足が止まった。

この機を逃すまいと、伏せていた陽乃が勢いよく駆け出し、希繫に攻撃を仕掛けた。ギアがないということは、同時に彼が電磁体になれないということでもある。攻撃の瞬間にだけ生身に戻れば、それ以外は体を光に変換することで物理攻撃に対し無敵となる。だが、その「生身に戻る一瞬」を見逃さないのが彼だ。

細心の注意を払いながら、握り締めた拳を希繫へと突き出す。

「お前ら、本当はまだ納得なんてできてないんだろう。約束の今日までに見つけようとした答えはまだ見だせてない、違うか？」

「それを聞いてどうするっ！ どうせこの痼癩が終われば御用なんだ！ 何も変わらな
い！」

「かもしれない。だけど納得しないまま捕まると、納得して捕まるとじゃ、心持ちが違うだろう。だったら言ってみろ。何が喉に詰まつてる？」

フエイントを混ぜながら左右回し蹴りを入れるが、そのキックはどれも陽乃に届かない。しかし、光の速度で繰り出されるはずの陽乃の攻撃もまた、希繫には届いていなかった。

それは、以前の戦いよりも明らかに遅く、彼女が「何か」に迷いがあることは明白であった。だからこそ、希繫は問う。その迷いはなんなのか。

「アタシたちは……アタシは、ずっと義陰に甘えてきた！ 難しいことを考えるのはいつも義陰で、アタシはそれに頷くだけ。義陰が是と言えば是だったし、そうじゃないなら否だった！ でも……そのせいで義陰は傷ついて、苦しんでた！ だからこれからは二人で一緒に考えようって決めたんだ！」

それは、前日に決めた誓い。もう一人で背負い込まない。二人で一緒に悩んで背負う。それが二人の新しい約束だった。

しかし、自分で言い出したことだからこそ、陽乃はその約束が自らを縛り付けた。決して、二人で悩むことが面倒だとか、嫌だとか、そういう意味ではない。

義陰が今まで背負っていた苦しみが、今だからこそわかってしまう。故に、その重さをわかる今だからこそ、今までそれを彼だけに背負わせていたことへの罪悪感が重く押し掛かる。

「二人で一緒に考えた！ その結果として罪を償つてもう一度ちゃんと二人でやり直すうって決めた！ それは簡単なようで……辛かった！ 義陰を追い詰めたのはこの社会だ！ あのクズ共だ！ アタシたちは火の粉を振り払っただけだ！ なのに……アタシたちが罪を償つて、あいつらはのうのうと今も明るい社会にいる！」

ユナイトギアを悪用する犯罪行為は重罪だ。まして、火の粉を払うためとはいえその矛先を人に向けたのは、間違いなく義陰と陽乃に非があることは疑うべくもない。

しかし同時に、彼らがそうせざるをえない状況を作り出したのは、決して彼らが望んだからではない。学生時代の同級生や、ORBでの上司・同僚。あるいは逃げた先で出会った悪漢。どれも先に手を出したのは相手側であつて、過剰であつたとはいえ二人の行いは防衛行為であつた。

希繫や悠生との戦闘は、どちらもユナイトギアを用いていたためノーカウントであり、むしろ彼らがギアを使っていなければ希繫の方が責められるべき状況であつた。

「納得なんてできるわけないだろ！ アタシたちだって被害者なんだ！ なんてこんな理不尽なんだよ！ アタシたちは——アタシはただ、義陰と一緒に平穩に暮らしたいだけなんだよ！」

「陽乃……」

吐き出すような怒りと共に繰り出された拳が、希繫の胸を強烈に打ち付けた。まさか直撃するとは思わなかったのか、当の陽乃まで驚いたような顔で、彼を睨むように見つめた。

「それがお前の吐き出しきれなかった気持ちか」

「……ああ。アタシたちにも非はあった。そこは認める。だから償うのをやめるつもりはない。けど……まだ償ってない奴もいる。そいつらが社会にのさばったままつてのが勘弁ならないんだ！」

希繫は陽乃の怒りを聞き、そして義陰へと視線を移す。

「義陰。お前はどうかんだ」

「僕は……確かに、償ってほしい人がいるのは認めるよ。謝ってほしいし、なんなら一発くらいぶん殴りたい気持ちだつてある。けど……それよりも今は一日でも早く背負った罪を下ろして、陽乃と一緒に平穩な日を過ごしたい。だから……正直、もう他の人のことなんてどうだっていいんだ。」

「義陰……でも、アタシは——」

「——でも、そのせいで陽乃の気持ちが取まらないなら、その人たちにはちゃんと言つてほしい。僕だって怒つてないわけじゃないんだ。それに、二人で一緒に背負おうつて決めたばっかりだしね」

義陰の気持ちも、陽乃の気持ちも、どちらも向いているのは自分ではなく相手への思い。かつての、自分への理不尽に怒りを宿していた頃とは違う。今のルーナとソールを動かしているのは、互いを思い合う「共感」の感情。

そしてその「共感」は、同質の力を持つ姉妹機である二機にとつて最もその力を発揮する感情。故に今のルーナとソールは、そのスペックを最高潮まで高めている。

「わかった。お前たちの全力を見せてみる。お前たちの思い次第では、そいつらに償わせる手伝いをしてやる。もちろん、合法的な手段でな」

「……その言葉、二言があつたら許さないよ！——行こう、義陰！」

「わかった。一緒にやろう、陽乃！」

陽乃が希繫の前から離れ、義陰の横に並び立つ。

そして互いに手を取り合うと、その感情を高めていく。

「——希繫！」

不意に聞こえたのは、悠生の駆る大型バイク『GRS1100R』のエンジン音と、その後部座席に座る菜咲の声。

その手にあるのは、赤色から真紅へと色を変えた「あのギア」が握られている。

「後で絶対になんか奢らせるからね！ ほらっ、受け取って!!」

宙を舞う待機ギア。もはや受け取るまでもないと、希繫はその名を呼ぶ。

「来い、『エクレール・ルミエール』ッ!!」

『了解。第四号ユナイトギア・エクレール・ルミエール、桐梨希繫に同調^ア接続^{セス}します』

真紅に輝く光を受け、希繫の脚部に金色のラインが入った真紅のメタリックブーツ、エクレール・ルミエールが展開される。

そして希繫の瞳と毛先の赤い光もまた真紅に発光し、彼の全身に電光が纏う。

「さて……これでようやく対等だ。優芽、一緒に戦ってくれるか？」

「いまさらじゃないですか。当然です、お兄さんが本当にやりたいことなら……一緒に行きましょう、お兄さん！」

四人の視線が交差した瞬間、彼らの「限界」が「突破」する。

「エクレール・ルミエール！」

「イーリス！」

「ルーナ！」

「ソール！」

『リミットブレイクッ！』

全力―フルフォーサー―

『了解。第四号ユナイトギア・エクレール・ルミエール、リミットブレイクします』

『了解。第七号ユナイトギア・イーリス、リミットブレイクします』

『ラジャ。第八二二号ユナイトギア・ルーナ、リミットブレイクします』

『ラジャー。第八一九号ユナイトギア・ソール、リミットブレイクします』

四人の感情の爆発に、四機のユナイトギアたちが呼応する。希望を繋ぐ絆。優しく芽吹く夢。陰を掃う思い遣り。陽の差す思い遣り。そのどれもがどれもに劣らぬ輝きを放ちながら、真紅の雷光が飛び散り、虹色の水飛沫が弾け、影と光が混ざり合う。

『リミットブレイク。グロワール・エクレール・ルミエールの展開を完了しました』

雷光の中から現れたのは、より鋭角的なフォルムになったエクレール・ルミエール本体と、電光を迸らせながら首から腰までを覆うように展開されたブースターアーマーを纏う希繫。

『リミットブレイク。イーリス・プテリユクスの展開を完了しました』

水飛沫からは、七色のミストを撒きながらより大きくなった虹色の翼を背に持った優芽が出現。

『リミットブレイク。ルーナ・ルクスの展開を完了しました』

『リミットブレイク。ソール・ルクスの展開を完了しました』

混ざり合う影と光を切り裂いて、背部から伸びた巨大なマシンアームとレッグアーマーを装着した義陰よしかげと、腰から伸びたマシンアームとガントレットを装備した陽乃はるのが姿を現す。

「ひとまず逃げ場は奪わせてもらおう！ ルーナ！」

『ダークイラプション／シャドウアブソープ』

「アタシたちも続くよ！ ソール！」

『ライトイジエクシジョン／シャインアブソープ』

瞬く間に周囲が闇に包まれ、それが晴れたと思うと今度は光で覆われ、また晴れる。光と闇を増幅して吸収したことで、義陰と陽乃のマシンアームが巨大化し、その威力を幾倍にも増していく。

突然の暗さと眩さによって一瞬視界を奪われた希繫と優芽は、咄嗟にリアクターシールドとアクアコートを展開して防御態勢を取ると、次の瞬間には二つのマシンアームが二人に襲い掛かってきた。優芽は衝撃を吸収するアクアコートを纏いながらガードし、即座にカウンターを叩き込むが、陽乃はこれをもう片方のマシンアームで防ぐ。

希繫は攻撃を受け止めたシールドを足場に後方へと跳び退き、着地と同時に最接近

し、跳び蹴りを放つが、義陰がマシンアームで地面を叩きつけ、アスファルトを畳返し
 することで防ぐと、今度はそのアスファルトを足場に後退する。

「イーリス！ あたしに剣を！」

『ディアドロップ』

「エクレール！ アームズを！」

『了解。雷切ライキリを展開します』

此度の修復・改造にあたり、エクレール・ルミエールに新たに追加されたのが、第〇
 号く第一〇号までの旧型として初のアームズ展開機能である。そして、スピードタイプ
 かつキック主体の希繋の動きを阻害せず、なおかつ希繋が扱いきれぬアームズでなけれ
 ばならないため、その形状は自然と一つに定まっていた。

それが——エクレール・ルミエール専用・短刀型アームズ『雷切』である。雷切に付
 加された特異機能は不壊。どんなに強靱な装備とぶつかっても折れることも刃毀れす
 ることもなく、常に最高のコンディションを維持できるため、鏢迫り合いや打ち合いに
 強く、常に切れ味が最高潮であるため、斬れないものなどあまりない。

義陰のマシンアームが雷切を構えた希繋ごと叩き潰そうと振り下ろされるが、希繋は
 それを回し蹴りで弾き、バランスを崩した義陰に接近し、弾いた方のマシンアームの関
 節部に雷切を滑り込ませる。たとえどんなに強靱な鎧でも、継ぎ目となる関節部の装甲

はどうしても薄くなる。その継ぎ目を一瞬で確実に衝くことができるのが、希繫の強みだ。

「マシンアームを切断した……ッ!?」

「義陰、下がって!」

片方のマシンアームを失ったことで重心のバランスが崩れた義陰を庇うように、優芽と交戦していた陽乃が割り込み、そのマシンアームで高速ラッシュを叩き込んでくる。しかし希繫はこれを後退して回避、開いた間合いに優芽が割り込み、その連撃を全て水のバリアで防ぎきると、義陰が優芽を跳び越して希繫へと飛び蹴りを打ち込む。

どう考えても反撃の間に合う距離ではない。しかし、希繫はすぐさま回し蹴りで義陰の足を弾き、空中で体勢を崩した義陰はマシンアームをつけて着地し、背を向けている優芽に挟撃する。優芽は陽乃との攻防で手いっぱい。義陰の攻撃に反応できる余裕はない。しかし、迫りくる気配には気づきながらも、優芽に焦りはなかった。

振り向くまでもなく、彼女と義陰の間に割り込んだのは、義陰を挿んで対角線上にいたはずの希繫だ。アクセルアクションを発動し、ただでさえ目で追いきれない速さをさらに鋭くさせ、攻撃に先回りしてマシンアームを蹴り上げる。

「ルーナッ! 僕に武器をッ!」

『ラジャ。ブラックアバターを展開します』

「ソール！ アタシにも頂戴！」

『ラジャー。ホワイトドツペルを展開します』

二人が展開したアームズは、それぞれ白と黒のファイア。ただのボールのようにも見えるが、その玉はすぐさま形を変え、黒い雷切と白いデアドロップとなった。おそらく、認識した対象が持っている武器に形状を変化させるのが、ブラックアバターとホワイトドツペルの共通能力なのだろう。

そして、それはつまり希繫の持つ雷切と、デアドロップを使う優芽にとって、極めて相性の悪いアームズだと言える。

なぜなら、「不壊」のエンチャントを持つ雷切は常に最高のコンディションのまま形を変えない。故に、ブラックアバターも常に同じ形状を保つ。そしてデアドロップは相手の苦手とする間合いや戦術によって形状を変えるが、ホワイトドツペルもデアドロップの形状を真似て同じ間合いで勝負せざるを得なくなってしまう。

形を維持すること、形を変えること。真逆の性質を持つはずの二つのアームズに対して、共通の性質を持つ二つのアームズがそれぞれに対応できるというのは、希繫たちにとってまさに相性が悪かったとしか言いようがない。

希繫と陽乃は互いに自らの相棒に視線を配せると、合図もなく前へと駆け出した。陽乃のマシンアームによる連撃を全て避けきりながら、希繫の鋭い一閃がマシンアームの

片腕を切断することに成功するも、すかさず繰り出された拳が彼の手から雷切を弾き飛ばした。

互いに体勢を崩したタイミングで、義陰のブラックバレットが希撃へと殺到する。しかし、優芽の放ったD D ロックオンスナイパーの矢がそれを阻む。弾速では義陰に利があるが、精密性ならば優芽の方が一枚上手だ。

生半可な威力では相殺されるとわかってか、陽乃に目配せをすると、二人は互いに並び立ち、義陰の左手と陽乃の右手を繋ぎ合うと、それらの腕に装着されたブレスレットが眩く輝くと、突き出したマシンアームに黒白のエネルギーが収束する。

「ルーナッ！」

『アビスストーム』

「ソール！」

『グリッターストーム』

そしてそれらのマシンアームを繋ぎ合い、二つのエネルギーを一つに重ねることで、その光と闇の奔流は激しさを増した。

「エクリプスッ！」

「デュアルハートストリーム！」

『『エクリプス・デュアルハートストリーム』』

黒と白が溶けあうことなく混じり合いながら迸る感情の奔流。同じ感情によってギアを動かしている義陰と陽乃だからこそ成し得た合体攻撃。希繫と優芽は即座に雷と水のシールドを重ね張りして防ごうとするが、僅かに拮抗する間もなく、その奔流に呑み込まれる。

「うわあああああああつ!!」

「きやああああああつ!!」

今の義陰と陽乃にできる最大にして全力の一撃。

単純にこれ以上の火力がないという意味に加え、この技のためにエモーショナルエナジーのほぼ全てを使い切った。事実、リミットブレイクが解除され通常モードのギアに変化している。これを凌がれれば、もはや二人に勝ち目は無い、まさしく背水の陣で放った最大火力。

しかしだからこそ、いかに人類守護の使命を背負うレイドリベンジャーズでさえも、この一撃ならば確実に沈めてみせたという自信が二人にはあった。

だが――。

「つぐ、がふつ……! だい、じょうぶか……? ゆめ……」

「ひ……人の心配してる場合ですかッ! あたしより脆いくせに、なんで庇うような真似を……ッ!」

倒れていたのは希繫だけ。ところどころ損傷してはいるものの、優芽にはほとんどダメージらしいダメージが入っていない。

エクリップス・デュアルハートストリームが直撃する直前、シールドが破られることを悟った希繫は、咄嗟にシールドを支える手を離し、優芽を庇うように抱き締めながらその奔流に身を焼いたのだ。

「せつきょうは、あとで大きくから……いまは、たのむ……！」

「……ッ！ ビンタ一発じゃ済みませんからね！」

気を失った希繫を横たわらせ、優芽はその背に輝くイーリス・プテリユクスを広げ、虹色の巨大な球体を生み出す。

「この一撃……レインボーストリームは、直撃さえすれば大郷先輩さえも無傷じゃ済まないあたしの最大にして最強の一撃ですッ！ 無事で済みたいのなら——」

「降参するよ。さすがに今のを防ぎきられて、そっちにまだリミットブレイクがあるなら、僕たちに勝ち目はない」

優芽が言い終えるよりも早く、その両手を上げたのは義陰だった。装着していたルーナを解除し、待機形態のそれを差し出す。

その行動は、優芽にとっても予想外のものだったが、それ以上に困惑したのは、他でもない陽乃であった。

「だ……だけど義陰！ それじゃあいつとの約束が……っ！」

「桐梨希繫との約束は「僕たちが全力を見せたら」だ。「僕たちが勝ったら」じゃない。僕らは僕らにできる全力を出し切った。これで約束を果たさなかつたら、今度こそ本気でこの世界の全てに叛逆すればいい。そうなつても、陽乃はついてきてくれるでしょ？」

「あ、当たり前だろっ！ たとえどんなことがあつても、アタシは義陰と一緒に歩んでいくよ！ だってそれが不離^バの仲^デだろっ！」

なら平気だよ、と笑うと、義陰はその手のルーナを優芽に預けた。

同じように、陽乃もソールを解除し、それを渡す。

「今までありがとう、ルーナ。次のマスターとも、仲良くしてあげてね」

『こちらこそ。あなたの行いは人として正しくありませんでしたが、私にとつては最高のマスターでした。これからのあなたの人生に、幸多きことを願っています』

「ばいばい、ソール。いろいろあつたけど、アンタのこと嫌いじゃなかつたよ」

『私もあなたには言いたいことが山ほどありましたが……ですが、手のかかる装着者ほど可愛いものです。あなたのことは、いつまでも忘れません』

互いに最後の言葉を交わすと、二人の手に手枷が嵌められた。

同時に目を覚ました希繫もゆつくりと起き上がり、通常モードのエクレール・ルミエールのアシストを受けながら三人の元へと歩いてきた。

「どうだ、気は済んだか？」

「ああ、君のそのボロボロの格好が見られただけでも、戦った意味はあったよ。それに……約束は守ってくれるんだろう？」

「勿論。お前たちを虐げた奴ら……さすがに学生時代の同級生までは無理だし、お前たちがORBを離脱した原因となる一件は既に裁判になっているから手は出せないが、それ以前に起きていたORB内での恐喝と暴行や、脱走中に義陰に暴行を振るつた者たちについては、必ず裁判まで持っていく」

「後者はお二人もユナイトギアを使用してしまっているの、弁護士側は過剰防衛を主張してくるでしょうが、先に手を出したのがあちらだと証明できれば、こちらが10割悪いとはならないでしょう。月村さんの怪我を治療した病院もわかっていますし、証拠はある程度残っています」

二人の話の聞いて安堵したか、義陰と陽乃は互いに笑顔を交わした。

「さて……お兄さんは指令室に戻ってください。さすがにその怪我です、香坂先輩の手当てとお説教をありがたく受けてください」

「うへえ……」

「後日、あたしもお説教に出向きますので、そのつもりで」

「ちきしょう、踏んだり蹴つたりだ！」

赤色―ブルーフー―

義陰よしかげと陽乃はるのの引き渡しを優芽ゆめに任せて、希繫きづなはそそくさと第二前線部隊の指令室へと戻ると、その様子を見るなり呆れた様子の逢依あひからお小言せうごんをもらいながら手当てを受けた。

追跡と捕縛の任は終わったものの、やることは山積みだ。ORBの誠実せいじとも連携をとりながら、二人との約束を果たすべく彼らへの暴行と恐喝を行った者たちの調査・追跡が始まった。

もちろん、今日一日で終わられる作業ではないので、あくまで今日できることは限られていたが、希繫はここ数日分の仕事を片付けながらも、並行してそちらの調査にも協力していくことになる。

「一難去つてまた一難、といったところかしら」

「ああ。でもやらないわけにはいかない。それがあいつらと交わした約束だからな」

「敵との約束を律儀に守るなんて……。あなたのそういうところ、本当に愚直というか……バカみたいだけれど、好きよ」

はい、と言って渡されたココアを一口含んで、キーボードパネルを叩く手を早めた。

義陰と陽乃の裁判が始まるよりも早い段階で全ての調査を完了させられるか否かによつては、二人の刑期にも影響する。

ORBでの一件は既に警察にも資料が行っているだろうが、逃亡中に振るわれた暴力についてはその限りではないだろう。それに、ORBで立件できたのはあくまで彼らが逃亡する直前のもので、二人の言葉が真実であるのなら、それ以外にも義陰を追い詰めた職員がいたはずだ。そちらの方は誠実が追っている。

誠実曰く、「あの二人の上司としてしてやれる最後の仕事」とのことで、随分と張り切っていた。希繫と違い、誠実はどちらかというと頭脳労働の方が得意なので、犯人にはそう遠くない内に彼の怒りの鉄槌が下りるだろう。もちろん、合法的な方法で。

「でも希繫、仕事をひと段落できるところまで進めるつもりなら急ぎなさい。今日は早めに切り上げて家族みんなで夕食の予定だつてこと、忘れたわけじゃないでしょう?」
「もちろん。白露と姉さんが待つてるからな、ちゃんとキリのいいところまでささつと片付けるよ」

「希繫さあああん! 助けてくださいいいい!」

「望月……お前まさかまたバックアップとらずに……」

泣き言を言いながら助けを乞う望月のヘルプをしながら、その横で仮眠をとっている諸星の時計にアラームを設定し、ようやく自分のデスクに戻ると、いくつかの資料が隊

長用のデスクの上に移動している。

天宮と空宮は揃って戦闘訓練室に行ってしまったので、今この指令室でまともに動いている部隊メンバーは希繫と逢依と望月の三人だけである。普段は最低でも二人以上いるオペレーターも、今は片方が給湯室、片方がモニター前で退屈そうに一人チエスをしている。

「……よしつ、じゃあ後は警察に連絡して担当の刑事さんに軽い説明と資料の送付……
ついでに二人の状態も聞いてみるか」

独り言のように呟いて指令室を出ていく希繫を見送ると、逢依は手元の資料を見ながら彼が片付けるはずだった仕事をこなしていく。希繫だけを特別扱いしているようにも見えるが、実際のところ、意図してそうしているわけではない。

本来、部長でもない平隊員のはずの希繫が、同じ立場であるはずの望月や諸星に比べて明らかに多い仕事をこなすということはありえない。部隊という単位で仕事を割り振られる以上、担当する事件とその仕事量は部隊単位で同じになるはずだからだ。

しかし、希繫は「最弱」にして「準最速」であり、何よりも「慈愛」のレイドリベンジャーズである。レイダーの絡まない事件において、相手を傷付けず追跡・拘束したい場合は、レイドリベンジャーズ内外から彼に協力を求められることが多い。

レイドリベンジャーズとしても、他の団体を協力体制をとることで立場を維持したい

考えもあり、何より彼自身が「誰かを助けること」に躊躇がないため、多くの場合は今回のように共同任務という形で協力することになり、結果的に彼だけが異常な量の仕事を負うことになってしまう。

とはいえ、彼も人の子である。仕事が早いとは言っても、こなせる量には限界があるし、何より彼にも自由な時間が必要だ。そのために手伝えることを手伝えるのは、上司として当たり前に行いだと逢依は考えているし、仮にそれが希繫でなく望月や諸星であっても、同じようにしただろう。

「たいちよー、休憩してきちゃダメですかあー?」

「ほんの20分前に行ったばかりだからダメよ。今やっている分を一区切りさせたらココア淹れてあげるから、もうちよつとだけ頑張りなさい」

「むえー……。でもまあ、隊長のココアが待つてると思えばもうちよつとくらい頑張りますかー!」

気合を入れるも、元々デスクワークの苦手な望月は既に精神的にへろへろの状態であり、引き出しの中から大量の甘味をつまみながら作業を続けた。

そして五分もすると指令室のドアが開き、連絡をとり終えた希繫がデスクに戻ってくる。

「あー、ビックリした」

「どうかしたの?」

言葉を交わしつつも、視線はディスプレイに向け、手は動かしたままだ。

「担当の刑事さんが霧島^支霧島^部さんの弟^長さんだったんだよ。おかげで驚くほどスムーズに協力が得られた」

「そういえば、霧島さんも言ってたわね。お巡りさんの弟がいるって」

「おかげで逃走中の二人……というか義陰に暴力を振るった奴らに関しては、あいつらから話を聞いて監視カメラとかをチェックしながら犯人を追ってくれることになった。ORBの方の洗い出しは誠実がやってるから、俺の仕事は一連の顛末をまとめることくらいになりそうだな」

数日後、ORBから新たに3名が義陰へのパワハラと恐喝に関与したとして逮捕。逃走中に起きた諍いの相手も、警察の調査によつて2名が補導、後に傷害罪で逮捕された。義陰と陽乃の刑期については、情状酌量の余地ありとして執行猶予付きの有罪判決が下された。とはいっても、さすがにルーナ・ソールとは二度と会うことは叶わないだろう。むしろ、会わないことで互いの未来を願っているのかもしれない。

とはいえ、二人にはもうORBに戻る気はないようで、今度はそれぞれ別の職場で働き始めた。もちろん、仕事から帰つてすぐに連絡を取り合っているということは、言うまでもないだろう。

時折、この事件を担当した霧島刑事が様子見に訪れては、その様子を希繫に報告している。そして希繫も同様に、誠実へと。

これからの二人の未来には、今までよりも多くの苦難があるだろう。互いを守つてくれる相棒は、常に共にはいてくれない。しかし、それでも胸の中に宿る信頼と思ひ遣りが在り続ける限り、義陰と陽乃の関係は変わらない。

そして何よりも、これからは彼らを助けてくれる人間が今までよりもずっと多いことを、彼ら自身が理解している。霧島刑事も、希繫も、誠実も、頼れば助けてくれる人間がいることを、彼らは知っている。

だからこそ、これからの苦難ある未来にも、不安はないのだ。



「ハッピーバースデー、姉さん」

「誕生日おめでとう、小転こころ」

「お誕生日おめでとうございます、小転さま！」

その日、仕事を終えた希繫と逢依は、前々から約束していた通り、帰り際に白露しろろ・小転と合流して夕食となった。

ちょうど今日——1月16日は小転の誕生日ということもあって、希繫と逢依は合流前に購入したケープと手袋を、白露はシヨッピング中にこっそり買っていた入浴剤セツトを彼女にプレゼントした。

「わあ……！　ありがとう、みんな……。まあこの日に外食しようって言いだしたのはわたしだから、希繫と逢依ちゃんからはもらええると思ってたけど、白露ちゃんもわたしの誕生日を知ってくれたんだね……」

「未来でも、毎年のように誕生日祝いをしていましたから。それに、小転さまはいつもわたしのことを大事にしてくださいますから、忘れるわけがありません！」

「……希繫。お姉ちゃん、白露ちゃんをお嫁さんにもらうね」

「ダメだからな」

どこまで本気でどこから冗談かはわからないが、小転はこういう冗談を本気っぽく言う天才であり、そして冗談っぽく本気で言う天才でもあるのだ。

ともあれ、三人からのプレゼントを嬉しそうに仕舞うと、小転はその赤い瞳でじつと希繫の目を見つめてきた。

「……えっ、何？」

「なんだか、逆流が起きてから、こうしてじっくり希繫の瞳を見るのは初めてだね……。わたしね、ちょっと嬉しいんだ。この胸に宿る「ハート」のおかげで、わたしの髪も瞳

も……希繫のそれとはかけ離れちゃったから。初めて観る人からは、あんまり姉弟だつて思われなくなつちやつたもんね……」

「確かに。俺、初めて姉さんが白髪赤目になって帰ってきた時、シヨツクでこつそり泣いたしな。それまでは、まるで双子みたいにそっくりだつてよく言われてた分、なおさら寂しかったよ」

赤い目という意味では、むしろ小転と白露の方が親子のようだった。白露からは「将来的に逆流して赤くなりますよ」とだけ言われていたが、それがいつになるのかはわからなかったし、希繫には大したことではなかった。

だが、彼の瞳が赤く染まるのを待ち望んでいたのが、小転だった。かつての黒い瞳と黒髪はもうなくなつてしまつたが、また同じ瞳の色になることができる。それも、カラーコンタクトのような作り物ではなく、隠し切れない真実の赤色となつて。

「嫌いだつたはずの赤色が、今はこんなにも嬉しいんだ……」

「あら、それは赤目じゃない私への当てつけ？」

「そんなつもりはないけど、これは実の姉弟の証だからね。ごめんね、逢依ちゃん」

「ふふつ、冗談よ。姉弟には姉弟の、夫婦には夫婦の、親子には親子の絆があるもの」

ね？　と言つて視線を向けると、白露はにっこりと笑いながら頷いた。

4. 5th season — 装着者たちの日常編

無垢—ピュア—

戸が鳴るほど零れる雨のように憂いに満ちている、なんて、ひどい名前を付けられたものだ、その幼い少年は思っていた。両親になぜそんな名前をつけたのかと問えば、父も母も決まって「大切な誰かと一緒にいればわかるよ」としか言ってくれない。

少年——戸鳴雨零となりうれいは、市立永岑第一小学校に通う四年生だ。好きなものは読書で、嫌いなものはいじめっこ。彼自身がいじめられっこなのも原因のひとつだが、それ以上に、自分以外のいじめられっこを見ると、どうしても放っておけないくらいには、「わるいこと」が嫌いだ。

特にそれが「暴力」となれば、もう見ていられない。ただ暴力からいじめられっこを庇いながら、それでもやり返そうとは思えないくらいに、彼は暴力というものが大嫌いだった。だから「あの時」も——友達の少女に助けられたあの日も、雨零はいじめっこから下級生をかばいながら、ただ耐え続けることしかできないでいた。

『大丈夫でしたか?』

『大丈夫……じゃないけど、助けてくれてありがとう。すごいね、女の子なのに六年生を

やつつけちやうなんて。ぼくなんて、男なのにこんな有り様で……情けないね』

『いえ……情けなくなんてありません。むしろ、本当にすごいのはあなたの方です。上級生から下級生をかばいながら、それでも暴力でやり返そうとしなかった。それは並大抵の「勇氣」と「優しさ」ではありません』

『そんなことないよ……。ぼくはただ、中途半端だけなんだ……。自分が傷つくのが嫌で、でも誰かが傷つくのがもつと嫌で、いじめられてる子を助けなくちやいけないのに、いじめつことも傷つけられない……。ぼくは、ただの弱虫だ……』

そう言つて意識を失つて、目を覚ました時には家のベッドの上だった。次の日、学校に行つてびつくりしたのは、下級生をいじめていた上級生が謝つてきたことと、クラスの全員がその時のことを知つていたこと。そして、みんなが「よくがんばつたね」「すごいね、かつこいいよ!」と言つてくれたこと。

きつとあの女の子の仕業だろうと思つて、同級生や教師に話を聞いて、上級生のクラスに行くのと、その少女はいた。六年生の男子をやつつけたとは思えないほど穏やかで優しい笑顔で、同じクラスの子たちと喋つていた。男子も女子も関係なく、その少女を中心に集まつているのを見て、雨零はより強くその少女に憧れを抱いた。

『あ……あの、すみません。今、いいですか?』

『はい? あつ、あなたは昨日の……。もうお体の方は……』

『おかげさまで、もう大丈夫。本当にありがとう。クラスのみんなに、ぼくのことを話してくれたのもきみでしょ？ おかげで、みんながぼくのことを褒めてくれて——』

『いいえ、わたしはただ、昨日のことをありのままに伝えただけです。あなたがみなさんから褒めてもらえたのは、あなたが褒められるべき行いをしたから……そうでしょう？』

そうなのかな、と自身なさげに俯くと、少女の同級生が「この子は？」と尋ねてきた。それに少女が「さつき話していた子です」と言うと、数人の上級生たちが集まり、「この子が六年生から二年生の子を守ったって子？」「こんなに大人しそうなのにすごいね！」と言って押し寄せてくる。

男子からも女子からも頭を撫でられてもみくちやにされていると、少女はおかしそうにくすくすと笑うと、同級生たちから雨零を助け出し、その赤い瞳でまっすぐに雨零の目を見つめた。

『ほら、同級生だけじゃなく上級生でもあなたのすごさを知っています。あなたはもう「ただの弱虫」なんかじゃありません。上級生のいじめっこから下級生を守ったヒーローなんです。あなたは、自分の行いにもっと自信を持っていいですよ』

『ぼくは……ヒーローなんかじゃないよ。けど……みんながぼくのことを褒めてくれたのは、嘘じゃないってこともわかってる。ぼくは……「みんなが信じてくれるぼく」で

いられば、それでいいんだ』

憂いはもうない。隣にいる誰かを守れるような自分であるのなら、『憂』しづんの隣に『人』だれかがいてくれるのなら、『優』しい自分でいられると信じられる。だから今は——今だからこそ、雨零は「隣にいてくれる人」の最初の一人は、どうしてもその人になってほしかった。

『ぼくの名前は戸鳴雨零。白露ちゃん、いろいろありがとう』

『こちらこそ。こうしてまた一緒にお話しができて、とつてもうれしいです』

『ぼくも。もし、白露ちゃんがよかつたら、ぼくの友達になってくれないかな。これから一緒に、いっぱい話そうよ』

『——はいっ！』



「おはようございます、雨零くん！」

「あ……おはよう、白露ちゃん」

4月の末——雨零は四年生、白露は五年生になってようやく新しいクラスにも慣れ始めた頃。家があまり近くなく、むしろ学校を挟んで対角線上にあるため、平日に会うこ

とができるのはもっぱら学校の中でだけ。

クラスはおろか学年も違うので、しゃべることが出来るのも朝と昼休みと放課後くらいで、授業の合間の休み時間はクラスの子と話している。しかし、それでも二人の交流は続いていた。それはやはり、雨零にとって白露という女の子が特別な友達だからだろう。

白露に友達が多いことは知っている。彼女にとつて、自分が「たくさんの友達の中の一人」だろうということも、なんとなく予想できている。だとしても、自分にとって白露は「特別」で「一番」の友達だと言って憚らない。

「今日は四時間目に体育でしたね。がんばってくださいね。教室から応援してますから！」

「うん。といつても、あんまり運動は得意じゃないんだけど……白露ちゃんも応援してくれるなら、がんばるよ」

じゃあ、と言って別れて教室に入ると、何人かのクラスメートたちが雨零に声をかけてくる。少し前までは考えられなかった光景だが、自分に寄せられた信頼や厚意が偽りだとは思わない。

それは白露にそう云われたからではない。自分の信じるみんなが「嘘」をついたりはしないと信じているから。そして何より、みんなの信じる自分は、クラスメートたちの

想いを無下に受け流すような人間じゃないはずだから。

「おはよう、雨零！」

「お、おはよう……」

「はよーつす、戸鳴！」

「うん、おはよう……」

だが、いくらなんでも、さすがに、声をかけられすぎではないだろうか、と雨零は頭を悩ませていた。例の出来事があったのが1月の中旬。学年が上がって別々のクラスになった友人も多い。なんなら三年生の時から一緒の友人はこのクラスの五分の一くらいだ。

だというのに。だというのに、だ。なぜかこのクラスの全員が雨零の（本人曰く「とても恥ずかしい類の」）武勇伝を聞き及んでいるというのはどういうことか。これに至っては白露さえ身に覚えがないと言うのだからなおのこと理解不能極まりない。

聞けば、又聞きに又聞きを繰り返して噂が独り歩きしている状態らしいが、余計な尾ひれが付いていないことは幸いだった。これでもし「雨零が上級生をやった」とかになつていたら、今頃その噂を聞きつけた当時の少年が何をしでかすかわからなかった。もつとも、彼は既に中学生なので知る術などそう多くないが。

（今日は一時間目が国語かあ。……あつ、そういえば今年も漢字検定やらなきや。お母

さんからも受けていいって言われてるし。後で先生に申し込みお願ひしないと。去年は6月に検定があつたから、申し込みはちようど今くらいだよね)

ランドセルから出した教科書とノートを引き出しの中に入れて、筆箱だけ机の上に置くと、あとは朝の会を待ちながら席の近い友達との談笑に花を咲かせる。

もはや「噂」のあれやこれやは忘れたことにして、新しくできた友達と純粹にわいわいしゃべることは素直に楽しい。このまま楽しく一日を過ごせたら、それ以上を望むことはない。

——そう思っていた矢先に、よくないことは起きてしまうものだ。

「誰か！ 誰でもいいから来て！ 山田くんがうちの委員長いじめてるの！」

「——っ！」

気付いた時には、もう体が動いていた。隣の四年二組から声が聞こえたということ、「山田くん」というのは四年生の中でも大柄で腕っぷしが強くて暴れん坊の、悪意のある言い方をすれば「ガキ大将」の山田少年だろう。

彼の悪名は四年生の間では有名だったし、まして家が空手の道場をしていて、もちろん彼自身も空手を習っているせいで、同学年では彼に喧嘩で勝てる子供はいなかった。まして、去年までいた「例の上級生」がいなくなつたことで、今の上級生にさえ彼より強い者はそう多くない。

それでも、それがわかつていても、雨零はクラスを飛び出して、山田少年から委員長
の少女をかばってしまった。腕つぶしで勝てるわけがない。いやそもそも、腕つぶし以
前にやり返すことすらできない。だとしても、彼は「みんなが信じてくれる自分」を裏
切れなかった。

「な、なんだよお前！ お前このクラスの奴じゃないだろ！ 関係ない奴は引つ込んで
ろよ！」

「関係ないよ……関係ないけど、放っておいたら君はこの子に暴力を振るうじゃないか。
だったらそんなの、放っておけるわけないよ……！」

「戸鳴くん……」

委員長からターゲットが移ったのか、執拗に雨零を殴りつける山田少年と、それでも
絶対にやり返そうとせず委員長を守るように立ち上がり続ける雨零。

さすがにやりすぎかと山田少年が思った時には、既に雨零はフラフラで、横に倒れて
机に頭を強打してしまった。悲鳴のあがる教室で、しかしまだ意識を保っていた雨零は
また立ち上がろうとして——その体を何者かに受け止められた。

それはこのクラスの生徒が呼んできた教師ではなく、騒ぎを聞きつけた白露でもなく
——必死で委員長を守り続けた雨零を見て、その姿に勇気をもたらった彼のクラスメート
たちだった。

「な……なんだよお前ら！ なんなんだよその目は！ こいつがやられてる間ずっと何もしなかったくせに！ お前らだつてこいつを見捨ててたくせに！ 俺だけが悪いみたいな目で見やがつて！ なんなんだよ!!」

「そうだよ。おれたちはお前がこわかった。お前がこわくて雨零を見捨てようとした。こいつがどんだけ優しく、お前みたいなのやつにもやり返せないようなお人よしだつてわかつてたのに、何もできなかった。……けど！ それでもこいつは逃げなかつた！ お前みたいなのやつに負けなかつた!!」

「ただ暴力をふるつて、自分より力のない子を傷付けるだけのあんたなんかより、雨零くんのほうがずっと強くてかっこいいよ！ 雨零くんだつて、暴力で返そうとすればできるはずなのに、あんたみたいなやつでも傷つけたくなかつたんだ！ あんたみたいなものにも優しくしてたんだ！ だからこそ許せない！」

雨零のクラスメートと、このクラスにいた生徒たちが全員、雨零を守るように立ち上がり対峙する。

いくらガキ大将とはいっても、たった一人の子供だ。さすがに2クラス分の同級生全員を敵に回して喧嘩をすれば、無事ではいられない。

「もしお前がこれ以上誰かに暴力を振るつて、それをかばおうとした雨零を傷付いたら、おれたち全員が相手になるからな！」

「う……………ぐつ……………」

教室の外から、このクラスの担任を連れてきた誰かの足音を聞いて、山田少年は項垂れた。もはや逃げ場などどこにもない。ましてここにいる全員に喧嘩を売って逃げ延びることなど叶うはずもない。

担任の教師から叱られて、雨零の怪我を見る限り、もしかしくなくても家にも連絡がいくだろう。ビンタ一発で済めばいい方だと思いつながら、山田少年は後悔の涙を流した。



「……………？ ううつ、夕日が眩しい……………。……………。……………。……………ん？ ……夕日？ ……。……………」

「……………ツ!?」

「きゃっ—」

いったいどれだけ寝ていたのか。痛む頭を押さえながらベッドから飛び起きると、その横から小さな可愛らしい悲鳴が聞こえた。

誰かの声かと思つて視線を窓の外から逆方向に向け直すと、そこには驚いた表情で呆けている白露が、赤と黒のランドセルを横に据えながら雨零の様子を見ていた。

「し、白露ちゃん！ 今何時?! つていうか何時間目?!」

「え、えーと……たぶんお察しとは思いますが、既に放課後です。時間は4時半くらいで、わたしたち以外の生徒はほとんど帰ってしまいましたよ」

「ああっ……！ やっぱりまたやつちやつた……！ ここ最近はずっと安んじきつてた……！」

また、というのは、怪我をして保健室で一日を過ごしてしまったことだろう。周囲の環境が変わっても、彼自身の性格は以前とほとんど変わっていないからこそ、こういうことは以前から度々あったのだらうと予想がつく。

そうでないとしても、実際に彼が保健室の常連であることは、今ここにいない養護教諭から聞き及んでいる。とはいっても、彼の言う通り「ここ最近はずっと安んじきつてた」というのは事実なようで、一月のあの日以降、彼がここに来る頻度は目に見えて減ったらしいが。

「白露ちゃん、ぼくのために待っていてくれたの？」

「もちろんです。お友達が誰かのために頑張って怪我をしたと聞いてしまったのは、放っておいたらわたしがお父さまとお母さまに叱られてしまいます。それに……わたしも雨零ちゃんと、ちよつとだけお話がしたかったのよ」

「お話……って、やっぱり無茶したお説教？」

「もちろん、それも言おうかと思いましたが、ご本人がちゃんとわかっているようなの

で、それについては何も言いません。でも、できれば今度からはわたしを呼んでください。こう見えても荒事にはちよつとだけ慣れていきますので。……あまり自慢できることではありませんが」

ふふつ、と小さく微笑むと、雨零の体をベッドへと倒して、彼に布団をかけ直す。

「今、先生がうちに連絡をしてくださっているのです、もう少しくらい寝ていても大丈夫ですよ。わたしも、おばさまに迎えにきてもらいますので」

「うん……じゃあそうさせてもらおうかな。白露ちゃんもそつちのベッドで寝たら？ 寒くない？」

「そうですね……ちよつと冷えるかもしれませんが、ですがもうすぐ迎えもきますし、短い待ち時間のためにせっかく綺麗なベッドにシワを作るわけにも……。……あつ、もし雨零くんがよければ、一緒のベッドに入ってもいいですか？」

「え？ まあぼくはいいけど……白露ちゃんは男の子と一緒に寝るの嫌じゃない？」

雨零がベッドの右半分に体を寄せると、白露は残りの左半分に体を詰めて、お互い向き合うような体勢で横になる。

「男女七歳にして席を同じにせず、と言いますけど、雨零くんはわたしに悪いいたずらしたりしないって信じていますから、大丈夫ですよ」

「そりやそうだけど……。まあ、白露ちゃんがいいならいいよね。じゃ、ちよつとだけお

やすみ」

「はい。おやすみなさい、雨零くん」

その後、雨零の母親と小転が保健室につくと、そこには互いの手を握りながら天使のような寝顔で眠る二人の姿があつた。

拠所—バックホーム—

「よつ、今日は世話になるぜ」

「鍋の具材、追加でいくつか買ってきたわよ」

「いらしゃーん。逢依あいいと希繫きづなが揃そろってうちに来るの初めてだっけ。白露しろろちゃんものんびりしてってーん！」

「はい、お邪魔します」

その日——五月五日は菜咲なさけの誕生日ということで、悠生ゆうきの誘いで彼と菜咲が同居しているマンションに呼ばれた希繫きづなたちは、白露と小転こころに留守を任せて彼の家で一泊することになっていた。ただ、前日になって小転こころが婚代こんやくの家に行ってしまったため、白露も連れて来るようになった。

最初は白露も連れて行かせるための気遣いかと思つたが、それなら彼女は「白露ちゃんも連れていきなよ」と言うだろうし、そもそもこんな回りくどい方法はとらないはずなので、おそらく本当に婚代こんやくに会いたかつただけだろうというのが救いといえれば救いか。

悠生が家を出てから早五か月が経ち、なんとか彼の不在にも慣れてきたが、ふとした

時に悠生がいけないことを感じるようになってきた。仕事では毎日顔を合わせているが、プライベートでは久しぶりの家族の再会である。

「そういうえば悠生は？」

「今サラダ用のドレッツシングを買いに行ってるよん。すぐ近くのスーパーだから、もうちよつとで帰ってくるから安心してーん」

「じゃあ私と白露ちゃんは菜咲のお手伝いね」

「お任せくださいー！」

いくらそれなりに大きいマンションとはいえっても、三人も入ればそれなりに狭い……と思いきや、逢依と白露が子供サイズなので、その心配はまったくないまま作業が進んだ。

希繫は配膳を手伝ったものの、そこまで時間もかからず悠生が帰ってきたこともあり、先に彼と飲み始めた。もつとも、希繫は酒がまったく飲めないものでウーロン茶での乾杯となったが。

「希繫に酒を注いでもらうのも久しぶりだな」

「前は夕飯の度にほとんど毎日注いでたからな。今はちゃんと休肝日設けてるのか？」

「……………」

「逢依ー！ こいつ毎日飲んでるぞー！」

キッチンから「ちやんと注意はしてるんだけどねーん」という菜咲の声が聞こえたり、休肝日という概念そのものは忘れていないが毎日欠かさず飲んでるようで、希繫と逢依の責めるような視線が突き刺さる。唯一のオアシスは白露かと思つて目を向ければ、困つたような表情をされるだけであつた。

といつても、希繫たちが特別そういつた酒事情に厳しいというわけでもない。飲むのをやめると言つたことは一度もない。むしろ飲んでストレスを解消できるのならその方がいいというスタンスである。

が、それにしても限度というものがある。毎日欠かさず酒を飲んでいけばいつか体を壊すのは目に見えている。だから休肝日を設けて、酒は楽しむ程度に抑えろと言つているだけなのだ。それに反するように家を出てから毎日ガバ飲みしているのなら、それはもう責められても何も言えない。

「逢依ごめんねーん。惚れた弱みであんまり強く言えないんだよねん」

「菜咲は何も悪くないわよ。うちでは飲み過ぎないように酌してた希繫がセーブしてたのを、家を出たせいでタガが外れただけだから。あれで体を壊したら指差して笑つてあげればいいわ」

「おっけー、もしそうなつたらそうするねん」

既にビールを二缶開けている悠生から目を背けて、女二人の愚痴が募る。逢依として

も、もし悠生が単なる菜咲の旦那というだけなら口出しはしなかっただろうが、仮にも彼は兄なのだ。何も言わないというわけにはいかない。

悠生はるかに生きるはると書いて悠生なのだから、そうそう早死になどしないというのが本人の持論らしいが、レイドリベンジャーズという職業柄、他の職と比べて明らかに早死にしやすいということ忘れているのではないだろうか。

「……ん、まあこんなものね。白露ちゃんお疲れさま。先に希繫たちのところに行つて座つて待つてなさい」

「わかりました」

キッチンを出ていく白露の後ろ姿を見て、菜咲がぼろつと言葉を洩らす。

「……白露ちゃん可愛いよね。わたしちゃんも子供ほしいなーん」

「まああなたも悠生とそれなりに長いし、結婚が先か子供が先かって感じよね。そういう話もしてるんでしょう?」

「うん。二人暮らしを始めてから、そろそろいいかもねって話もしてるんだよね。実家にも何度か来てるし、お母さん公認だしねん」

母子家庭で育つた菜咲にとって、母の言葉は絶対である。といつても厳しい母というわけでもなく、むしろ彼女の行いには基本的には肯定的だ。

あまりにも度を越えた行いには注意を促し、菜咲もそれに反するようなことはしな

い。実力行使で叱られたことがないくらいには菜咲は聞き分けのいい子供であったし、母もそれをわかつていたから暴力を振るわなかった。それだけに、菜咲はたいそう可愛がられている。

悠生が初めて挨拶に向かった時は、それなりに難色を示されたらしい。なにせ2メートル越えて筋骨隆々の厳つい男が愛娘と付き合っていると聞けば、まっとうな感性を持つ親なら心配くらいするだろう。

しかし、絆フナムシの家族として育った悠生は、家族というものに対して敏感であったし、母子家庭の大変さも婚代を見ていた分よく知っていた。そのため菜咲が実家の花屋の手伝いをしに戻る時は彼もそれに参加したし、積極的に菜咲の母を助けていた。

そうして数年かけて得た信頼もあって、今ではすっかり「いつでも娘をもらってあげて」と言われるようになったし、なんならたまに菜咲の代わりに悠生だけ彼女の実家に手伝いに行っている。

「むしろ最近はいつ結婚するの？」って聞かれるようになったからね。悠生も乗り気だし、今やってるギアの開発が全部終わって、適合する装着者を見つけて、その人たちに調整して……まあ来年くらいにはしたいよねん」

「まあそうなるわよね。レイドリベンジャーズってそれなりにお金はもらえるけど、代わりに暇があんまりないのよね。まあちゃんと定時が機能してる分、そこらの企業や組

織よりずっとホワイトだけれど」

そう言う逢依と、彼女の持つ第二前線部隊も、向こうしばらく勤務時間のほとんどをデスクワークで過ごすことになりそうなほど仕事が溜まっている。まして、同部隊の天宮と空宮の二人は正規ELBシステムの適合テストを受けるための訓練も同時進行しているため、彼らのサポートにも回らなければならない。

今でこそそのサポートは単なる負担だが、もしも二人が適合テストに合格し、ユナイトギアを手にする事になれば、現時点で装着者が二人しかいない第二前線部隊の戦力的負担は大きく軽減される。その見返りのための報酬を前渡ししていると思えば、自然と口から洩れる不満も数が減る。

メインの鍋を菜咲に任せて、副菜のサラダとインスタントのお吸い物を持って、希繫たちの待つテーブルに持っていく。

「もう五月だし、鍋もそろそろ終いだな」

「気温も20℃を上回る日が増えてきましたしね」

「わたしちゃんと悠生は冬でもアツアツだよん！」

「ここぞとばかりに惚気てきたな」

「放っておきなさい。真面目に受け取ると火傷するわよ」

白露の分をよそって、下戸^{希繫}と子供^{白露}以外には酒も行き渡った。音頭は家主の悠生に任せ

て、全員がコップを掲げる。

「じゃあ菜咲の誕生日を祝って！」

乾杯！ という声が響き、明るく楽しい雰囲気な部屋を覆う。

この楽しい日々がいつまでも続くようにと願いながら、今日という日の特別な日常をめいっぱい満喫して、未だ激務の残る明日を今だけ忘れ去る。やることが多いことはいいことだと言うが、レイドリベンジャーズに限ってはその例から洩れるだろう。

人類の自由と平和を守り、それを脅かす国際脅威を退ける。それは高尚で誇り高い理念だ。しかし、そのために散り逝く命も少なくはない。根拠もなく大丈夫だと慢心した者が死に、明日は我が身と恐怖した者も死ぬ。生き残るのは自信と怯えを持ち合わせながら恐怖に打ち勝つものだけ。

だから希繫も逢依も、そして悠生も、今ある生活に必ず戻るために日々の特別な日常を噛み締めて仕事に向かうのだ。自分のあるべき場所、帰るべき場所を忘れないように。

「悠生、肉取りすぎ。白露が食えないだろ」

「いやむしろお前は肉を食わな過ぎだろ。おら、オレの分けてやるから食え」

「白露ちゃん、お鍋どうかしら？ 熱くない？」

「美味しいです！」

ここが、悠生の帰るべき場所。

素直—ノーティネス—

「いらつしやい、雨零くん」

「こんにちは、白露ちゃん。お邪魔するね」

5月二週目の日曜日。勉強会と遊びを兼ねて訪れた雨零を、桐梨家は温かく迎え入れた。この時代に来てから、白露が初めて家に招いた友達とあって、むしろ彼女よりも両親のほうが舞い上がっていた。といっても、希繫も逢依も今日はどうしても抜け出せない会議があったため、今この場にはいない。

普段ならリビングで雑誌を読みながらのんびりしている小転でさえ、今日ばかりは少しだけそわそわしながら飲み物やおやつを用意していた。

「さっきの人、前に白露ちゃんを学校まで迎えにきてた人だよ。あの人が白露ちゃんのお母さん？」

「いえ、わたしのお父さんのお姉さんなので、わたしの伯母さまです」

「えっ、正直お姉さんかと思うくらい若かったけど」

「わたしはこの家の養子ですからね。お父さまもお母さまもまだ22歳です」

白露はもちろん希繫と逢依の実子ではあるが、未来から訪れた彼女には現代の両親と

の戸籍上の関係がなかった。

それは彼女自身の年齢と両親の年齢が親子とするには近すぎることもあったし、そうでなくとも戸籍を捏造する上でできる限り無理のある設定を減らすためでもあった。そのため白露は公の場において桐梨家の養子ということになっている。

しかし、もちろん本人たち同士の間では仲睦まじい実の親子として接しているし、時折そうした設定を忘れかける時すらある。なので、白露はそれらの「設定」について憂いはない。

「そうなんだ。でも、白露ちゃんお父さんとかお母さんの話をする時すつごく笑顔になるから、きつと本当の親子みたいに仲がいいんだね」

「はい、両親はわたしの自慢です！　そう言う雨零くんは、お父さまやお母さまの話をあまりされませんか？」

「うーん、別に仲が悪いとかじゃないよ。でもお父さんは海外に派遣されてほとんど戻ってこないし、お母さんも高校の先生だから忙しいみたいで、だれかに話せるほど親とあんまり接してないんだよね」

昔は寂しかったけど、今はそうでもないしね、と苦笑する雨零の表情に、白露は胸に小さな痛みを感じた。

現代において書類上は養子ということになっているものの、両親のことを深く尊敬

し、二人の寵愛を一身に受けて育った白露にとって、家族の絆というものは自己を形成する上で力強い支柱となっていた。

両親の所属する『絆フアミリーの家族』というグループが「血で繋がる家族」よりも「絆で繋がる家族」を重んじていることもあって、家族として正しい関係を紡いでいる親と子の間には「血」以外の何かによって繋がっているものだと思ってきた。

決して、雨零と両親の間に絆がないというわけではないだろう。憂いが両親のことを疎まず、むしろやや距離はあるが尊敬しているような雰囲気でも語る以上、白露の知らない形の絆がそこにあるのは確かだろうし、その寂しさを覆い隠すほどの温かさがあるのかもしれない。

しかし、それでも。子の寂しさを察してやれない親に「親としての資格」はあるのだろうか。あるいは、察していてもおもそれを解消してやれないのであれば、それはもはや親として以前に人として「なっていない」のではないだろうか。

友人の親を悪く言いたくはない。しかし友人が「今はそうでもない」と言った時の瞳の中の憂いは、間違いなく寂しさを孕んでいた。他人の家の事情にまで口出しできるほど偉い人間などそういない。まして白露はまだ小学生。子供にはわからない大人の事情があるのかもしれない。

だが大人にはわからない子供の事情だつてあるのだ。子供だから理解できることも

あるし、大人だからこそ見えないものやわからない感情があったりする。それを少しくらい理解してもらいたいと思うのは、間違ったことではないだろう。

「雨零くん、寂しい時はちゃんと、寂しいって言った方がいいですよ」

「え？ いや、ぼくはホントに……」

「寂しいことを言い損ねて後回しにすると、いつか絶対に後悔する時がきます。もつと素直に甘えていればよかつたって、思ってしまう時がくるんです。それは……わたしにも覚えがあります。あんな思いを、雨零くんにしてほしくありません」

脳裏によぎるのは、未来で今生の別れとなつてしまった両親のこと。英雄と謳われた両親の重圧に負け、拗ねて意地を張っていたあの頃。もつと素直になれていたら、二人に「行かないで」「いっしょに居て」と言えていたら、もしかすると二人は白露の目の前からいなくならなかつたのかもしれない。

だがそれはもう過ぎてしまった未来のことだ。いまさらあの未来には戻れないし、今になってできることといえば後悔だけ。だから現代に来る直前に白露はひとつの決意をしたのだ。両親に迷惑はかけない。そして迷惑にならない範囲で素直になろうと。

そのおかげか、それとも過去の両親の性格ゆえか、どちらにせよ白露にとつて最も幸せな時間が今なのだ。だからこそ、素直に甘えることの大切さを、彼女は誰よりも知っている。

「わたしは失敗しました。でも、素直になることで取り戻せたものもあります。だから、雨零くんも素直にわがままを言ってみましょう。雨零くんのお父さまやお母さまが立派な大人なら、きつとそれを叶えてくれるはずですから」

「……わがままを言つて、嫌われたりしたら？」

「その時はわたしが雨零くんを存分に甘やかして可愛がつてあげます！」

雨零は「それは今とあまり変わらない気がする」と喉まで出かかった言葉を呑み込んで、目の前の教科書に視線を向け直す。ちら、と白露の手元を見ると、彼女は喋りながらでも作業ができるタイプなのか、鉛筆が止まることなく動き続けていた。

白露にとつて、雨零という友人は特別な存在だ。それは彼が同年代の友人であるはずなのに、時折なぜか父親と似たような雰囲気を感じることがあるからだ。決して、非力だとか貧弱だとか、そういったマイナスな共通点によるものではなく、むしろもつとポジティブな感覚で。

最初は、自らを省みない自己犠牲精神によるものだと思っていた。しかし彼との付き合いを経ていく中で、彼の「自己犠牲」と父の「自己犠牲」はまったく違うものであることがわかった。

確かに、他社のために自らの危険をを省みず身を投じるという点で、二人の性質はよく似ている。だが父の場合、その危険を払いのける手段を——最低限、自分の命を守れ

る程度の力を持っている。仮にそうでなくとも、自力で逃げ延びることはできる。

しかし雨零はそうではない。自分の身を守ることも、逃げることもできない。どれだけ傷つき、体中が痣だらけになっても、彼にはただ耐え続けることしかできない。それを白露は「勇敢」だと言うが、実際のところは「無謀な勇氣」だ。しかし、それは決して悪い意味だけではない。

彼の勇氣は確かに無謀だが、その無謀さに救われる者がいるのも事実だ。そして何より、彼自身が自分の行いの無謀さを誰よりも理解している。誰よりも泣き虫で、臆病で、弱いとわかっていて、それでも誰かを守ろうとする意志は、間違いなく「勇氣ある行い」だ。

合理性とはかけ離れているが、時としてその非合理的な勇氣が思いもしない大逆転のための切り札になることもある。先日、学校で彼の知らないうちにクラスメートたちが一丸となって彼の意志を尊重し、彼を守ろうとしたように、勇氣は伝染する。彼はそうした勇氣のインフルエンサーとなりうるのだ。

「……こつちもうそろそろ終わりそうだけど、白露ちゃんは？」

「わたしも、あと3問だけですよ」

「じゃあ、一緒に終わりそうだね。よかった」

そうして話しているうちに、雨零が鉛筆をテーブルに置いた。そしてプリントを二回

ほど見直して、それをカバンに片づける。少し遅れて、白露もシャープペンシルを筆箱に戻し、学習ドリルの答え合わせをして、それを母親の作業机の上に置く。

勉強会と称して桐梨家に来たものの、白露も雨零も元が真面目な性格のおかげもあって、ほとんど詰まることもなく作業が進み、まだ午後二時半。予定よりもはるかに早く片付いたため、二人は少し困ったように笑い合うと、白露は大好きな動物図鑑を持ち出し、それをテーブルに置いた。

「これ、白露ちゃんが一昨日言ってた陸上生物図鑑?」

「そうです! すごくいいですよ、この図鑑! 動物の特徴や生態はもちろん、骨格や足跡のような細かいデータも書かれていて、さらには動物のイラストにタッチするとその動物の鳴き声が再生できる視聴覚的最新版図鑑なんです!」

「それは確かに……すごくそうかも。でも、これどう考えても子供向けの図鑑じゃないし、すつごく高そうなんだけど……」

「……値段の話はやめましょう。買ったときは気分が高揚して見ていませんでしたが、後でたまたまお母さまがレシートの整理をしているのを見たらとんでもない額でした。少なくともわたしのお小遣いで計算したら半年分くらいはありました!」

ひえっ、という小さな悲鳴がどちらの口から出たものだったかを確認することなく、白露は雨零の隣に移動して図鑑を広げた。

「うわっ、本当にすごいねこの凶鑑。ふつうは横からの写真とかイラストしかないのに、これはいろんなアングルから動物の体が見える。うわっ、このライオンの口の中の写真とかどうやってこんな至近距離で撮ったんだろ……」

「そう！ そうなんです！ 雨零くんさすがですね、そうなんですよ。この凶鑑に載ってる写真は普通の凶鑑では見られない角度・距離から撮られていて、それでいて全部ちゃんとわかりやすいんです！ 再生される鳴き声もそれぞれの写真の場面にあつたものなのでバリエーションが豊富で……これを作った方は間違いなく生粋の動物好きに違いありません！」

（白露ちゃんつてホントに凶鑑が好きなんだなあ……。こんなに生き活きと喋る白露ちゃん見たの初めてかも……）

白露の意外な一面を見て驚く雨零だったが、かといって彼女のそうした「普通とはちよつと違った一面」に引いたり軽蔑したりはしなかった。

クラスの男子の中には「日曜日のヒーロー番組をもう見なくなつた」子もいれば、「今でも大好き」だという子もいるし、なんなら「その後の女の子向け番組も見る」という子もいる。趣味は人それぞれで、必ずしも誰かに理解されなければならぬものではない。

むしろ「好き」を極めていけばいくほどに、普通の人の感覚から離れていく。雨零も、

趣味が「綺麗な字を書くこと」だとクラスメートに言ったら変な目で見られたこともある。しかし、何人かのクラスメートは「確かに雨零くんの字って綺麗だもんね」と褒めてくれた。

だからこそ、白露に「ちよつと普通とは違うけど大好きな趣味」があつたとして、それが人に迷惑をかけるものでないのなら、雨零からそれに苦言を呈することはないし、その必要もなかつた。

「この凶鑑シリーズ、本当は海・深海・空の動物の他に昆虫の凶鑑もあるんですけど、これ一つであの値段でしたので……とてもではありませんが自分では買えませんし、ましてやお母さまにおねだりなんて絶対にできません……」

「いや、言うだけ言ってみたら？ ダメだったら元からそのつもりだったんだし、買ってもらえたら嬉しいでしょ。さつき白露ちゃんと言ったことでしょ、「素直にわがままを言いますよ」って。買ってもらう代わりに何かできることをしてあげれば、少しは気も軽いと思うし」

「それは……確かにそうですね。でもこれは同じ「わがまま」でもお金が掛かりますし……」

「お金が理由でダメだって言われたらそれは「仕方ない」って思うしかないよ。元々そのつもりだと思ってお願ひしたものだから諦めもつくでしょ？ でももし買ってもらえ

たらラツキーじゃない？」

うーん、と唸って、

「じゃあ……今夜お願いしてみます」

「うん。ぼくも今夜お母さんに「寂しい」って言ってみるよ」

後日、白露は空を飛ぶ動物図鑑を買ってもらったし、雨零は母親と一緒に出かけした。

静寂—コンフォート—

「逢依あいつとこうして二人きりで出掛けるのは久しぶりだな」

「そうね。仕事ならよくあるけれど、あれはそういうのじゃないものね」

その日、希繫きづなと逢依は仕事が早くに片付き、家に帰る前に少し街をブラついていくことにした。

白露しろろはもう学校から戻っているだろうが、夕食の準備にはまだ少し早いし、家には小転こころもいるので、たまにはちよつとくらい羽根を伸ばしてもバチは当たるまい、というのが希繫の談だ。

「休日の買い出しとかは白露もいるからな。こうして逢依を独り占めできるのは、なんだか贅沢ぜいたくをしてる気分だ」

「そうね。これからは、あまり二人きりという機会はないかもしれないわね。白露ちゃんもいるし、それに……二人目もほしいもの」

二人目。それがどういう意味かわからないほど、希繫も純粹ではない。二人にとって、白露は間違いないく実の子供で、やや我慢強すぎるところが心配ではあるが、自慢の娘だと胸を張っている。しかし、今この時代における逢依にとって、腹を痛めて産んだ

子ではない。

未来の自分自身が産んだ子だということとはわかつている。だが既に白露の登場によつて、現代という名の「過去」は変化を始めている。もし現代で二人の間に子供ができて、その子の名は「白露」にはなり得ないし、性格も見た目も、もしかしたら性別まで、まったく違う子が産まれるだろう。

もはや「桐梨白露」という存在は、この時代において独立した存在だ。それは白露を「特別」な存在にしたし、「孤独」な存在にもした。

未来から過去へと遡った者は、二度とその「未来」には戻れない。なぜなら未来と過去を繋ぐ「ヴォイド」というギアは、その時間から見た一本の道筋の時間しか行き来できないからだ。

未来から見た見た過去は、そこまでの歴史という意味で「一本の道筋」の上に存在する。しかし過去から見た未来というものは、無数に枝分かれしていて、その中で現在が辿るであろう「最も太い道筋」の未来にしか、ヴォイドは干渉しない。

そして「ヴォイド」によつて時間を遡る理由は、「過去を変える」こと以外にありえない。なぜなら過去に干渉した時点で、「最も太い道筋」がその者のいたはずの「未来」から変わってしまうからだ。それを知った上で過去に遡るだけの覚悟を持たなければ、ヴォイドはそれに協力しないだろう。

だからこそ、白露も、そして優芽^{ゆめ}たちも、もう未来には戻れない。この時代における「時代的孤独」を永劫に味わいながら、それでも「変えたい未来」のために過去を変え続けるしかないのだ。

「二人目、か……。白露は出会ったときには精神的にだいぶ成熟してたから楽だったけど、今度はそういうわけにもいかないよな。俺たちと違って、健康的な体に育ってくれたら嬉しいな」

「白露ちゃんが健康的な体つきをしているから、そこは心配ないのかもしれないわね。私たちも、食生活がまともだったら、こうはならなかったでしょうし」

希繫の痩せ細った身体と、逢依の幼い体軀は、主に食生活による影響だ。希繫に関しては元から肉がつきにくい体だったこともあるが、笹倉家で暮らしていた頃、他の兄弟たちに自分の食事の大半を分け与えていたこと、レイドリベンジャーズ入団後は戦闘スタイルの維持のために体重を落としたことが原因だろう。

逢依はというと、親からの虐待から逃げ延びた果てに笹倉家に拾われたこともあり、拾われてしばらくは大人を信じておらず、婚代の用意した食事に手をつけなかったこと、その時の影響で婚代を信用した後も小食が治らなかつたこと、そして希繫と同じように食べ盛りの子に食事を分けていたことが、栄養失調となって小柄な体のまま成長しなくなってしまうた。

逆に言えば、正しい食生活をしていけば、希繫の体格も逢依の身長も平均的なそれになる可能性はあったはずなので、白露や将来的にできるであろう二人目の子供も、身体的にネガティブな要素を持つ可能性はそう高くない。もちろんゼロなどということはあり得ないが。

「白露は出会った当初こそ小柄だったが、今は割と年相応だよな」

「けっこう一気に伸びたわよね。まあ女の子は伸びるのも早いけれど止まるのも早いから、そのうち止まるとは思うけれど」

「どうだろうな。最近の子は発育もいいし、けっこう伸びるかもしれないぞ。俺の血筋はけっこう長身が多いし」

「あなたの血筋って……小転以外の肉親なんてもうほとんど覚えてないでしょうに」

希繫の血筋——それは笹倉家ではなく、同じ血を通わせる肉親の記憶。常に温厚で穏やかな彼にとって、この世で最も忌むべき存在であると同時に、彼が唯一「憎しみ」と「使命感」の感情のみで殺意を抱く相手でもある。

彼は逢依と悠生^{ゆうせい}、そして婚代以外の相手にはその血筋——本当の名前を明かそうとはしないが、もしかすると白露や優芽あたりは未来で知ったかもしれないが、少なくとも希繫自身の口からはそれを教えてはいない。

あるいは、希繫の友人である誠実は、以前の戦いで近いところまで気付いているかも

しれないが、今のところ彼の方からそれについての言及はない。

「でも……そうね、忘れがちだけれど、私とあなたの子供である以上、白露ちゃんも「そう」なのよね……」

「そうだな。でも白露を「あんな風」にはさせないよ。俺たちにできる目一杯で愛してやれば、きっとそんなことにはならない」

「なら、目一杯で愛するためにも、まずはお腹いっぱいにしてあげないとね。白露ちゃんはお肉が好きだから、今日のメインは肉料理にしましょう」

「肉かあ……じゃあササミのピカタがいいな。あれなら低カロリーー高たんぱくで味も濃くて食べやすい」

「はいはい、とやや適当に返事をすると、メモ帳に「帰りにササミを買う」と記して、二人は手を取り合い歩いていった。



「こんばんは、雨うれい零くくん」

『こんばんは、白露ちゃん。こんな時間に電話なんて珍しいけど、どうかしたの?』

「どう、というわけではありませんよ。今日は学校であまりお話ができませんでしたか

ら、こうして連絡させていただけただけです。ご迷惑でしたか？」

『そんなことないよ。ぼくも今ちようど宿題に一区切りつけて暇だったんだ。白露ちゃんから声をかけてもらえてよかったよ』

同じ頃、家では白露が逢依の個人用パソコンを借りて雨零とビデオ通話をしていた。もちろん、逢依のアカウントにはレイドリベンジャーズ関係のグループもできているので、白露用のアカウントだ。

雨零の他にも、クラスの友人や、学校こそ違おうが絆フアミリーの家族繋がりがで親しい笹倉咲桜ささくらさくらともフレンド登録しており、それなりに数も多いので、こうして逢依の不在時にパソコンを借りることは少なくない。

逢依からは「宿題を終わらせてからか、お友達と喋りながらも私たちが帰るまでに宿題を終わらせるのならいつ使ってもいい」と言われているので、今日は雨零と喋りながら宿題をこなすつもりのようなのだ。

「私は今から取り掛かるのですが、雨零くんはもう一区切りしたんですか？」

『うん。ぼくのクラスは国語のドリルとプリント、あとは算数と理科のプリントだったから、国語以外はもう終わらせたよ』

「そういえば雨零くんの得意科目は国語でしたね。なら、わたしが宿題をしている間、お付き合ひしていただけますか？」

『もちろん。もし家が近ければ、平日でも一緒に勉強できるけど、毎日お互いの家に通うにはさすがにちよつと遠いのが残念だね』

白露と雨零の奇妙な友人関係は、小学校でもちよつとした話題になっている。

三年生の末までパツとしなかつたいじめられっ子が、ある日を境にたくさんの友人を得て、四年生となった今ではクラスの中心にいる。そして四年生の冬に編入してきた女子生徒が、その容姿と性格から一気に人気者となつて五年生の中心になっている。

どちらも、「唐突に人気者となつた生徒」という共通点はあるものの、他の生徒から見ればどこにも接点はないはずの二人。しかし、白露なくして今の雨零はなく、雨零がいるからこそ白露の穏やかな今が輝いている。

「……雨零くん」

『なに?』

「「じんこうえいせい」の「せい」って……」

『「星」だね。宇宙に打ち上げる人工的な星だから「星」で、もう一つの方の「衛生」は健康と清潔を保つて生活するから「生」の方だつて覚えたらいいよ』

五年生なのに……と少し項垂れるような声を漏らしながら、それでも動く手はまったく止まることなくプリントに文字を埋めていく。そして国語のノートを取り出すと、雨零のアドバイスを書き写して、再びプリントに意識を戻す。

とはいえ、白露がそうなるのも仕方がない。雨零は四年生にして、既に小学六年生までの常用漢字を修了している「漢字検定五級」を持っていて、漢字だけでなく四字熟語・ことわざ・文章の読み取りから文法まで、国語だけなら六年生級なのである。

もちろん白露もそれ自体は知っているが、子供ながらもやはり上級生としての威厳は保ちたいのだろう。

「雨零くんは教えるのが上手ですね。年下の子に教わるのは上級生として複雑ですが、今の説明はともわかりやすかったですよ」

『そ、そうかな……？ ぼくとしては、実際にその言葉を使う時のイメージを言っただけのつもりなんです……』

「説明というものはそういうものだと思いますよ。教科書通りの言葉ではなく、自分の中でその意味を理解して噛み砕いて言葉にする……。それだけのことですが、それが上手な人もいれば、どうしても言葉にできない人もいます。雨零くんは、それが上手な人なんだと思います」

『そうだと、うれしいな』

照れたような様子の子の雨零を微笑ましげに見ると、白露はふんす、と気合いを入れ直し、宿題に目を向ける。

雨零もそんな彼女を邪魔しないように、白露から借りていた文庫サイズの昆虫図鑑を

読み始め、二人の間に居心地のいい沈黙が流れる。

(雨零くんは不思議な子です。お互いに何も言わないのに、ぜんぜん嫌な雰囲気にならない。むしろこの静けさが心地いい……。こんな子と友達でいられて、わたしはやっばり幸せ者です)

疲弊—イグザースト—

和泉優芽いずみゆめの多忙ぶりは、彼女と同年代の女学生たちと比較すれば火を見るよりも明らかだ。

永岑市立永岑中部高校2年生。生徒会と吹奏楽部を兼任し、同級生からは学級委員でもないのに「いんちよ」という渾名を付けられて慕われているばかりか、レイドリベンジャーズの一員として情報統制部に所属し、方々に忙しく動き回り、時には前線メンバーに連れられて戦場にも赴いている。

水を操るギアを持ち、多彩な戦術と技でどんな敵にも柔軟にやり過ごすスタイルは彼女の性分によるものか、学校でもレイドリベンジャーズでも、はたまたプライベートでもあつても、適応と対処の早さは頭一つ抜きん出ている。

しかし、そんな彼女であつても、まだ17歳の少女。体力も無限にあるわけではないし、趣味や娯楽に使えるはずの時間を全て削って学生とレイドリベンジャーズの二足の草鞋を履いているのは、偏に敬愛する自分のヒーローのため。

彼を絶望的な未来から救うためにできることをレイドリベンジャーズとしてこなし、彼のようにあろうとして振る舞った結果が今の学校での自分を作り上げた。そこで出

来た友も、仲間も、全ては自分に「そうあるべき」だと教えてくれたヒーローのおかげだと想いながら。

だが、彼女が「ヒーロー」だと呼ぶ彼も、そして彼女の周りの誰もが、それを否定した。彼女をとりまく人々との縁も、絆も、そして今の彼女を形作っているもの全て、誰のおかげでもなく彼女自身の力で得たものだ。

それは同時に、今の彼女が疲労困憊となっているのも彼女自身の選択によるものだということでもあり——。

「覚悟きどさん……あたしもう無理です。今日の任務だけでもあつちに行ったりこつちに行ったり、学校もあるのに今週ずっとそんな任務ばかりでフラフラのヘトヘトです。癒しをください……」

その日の優芽は疲労困憊、もはや普段の凜とした表情など面影も残らないほどにだらけきっていた。

というのも、彼女の所属する情報統制部は、レイドリベンジャーズの中でも特に本部との連携が密で、機密情報の取り扱いや斥候部隊や諜報部隊から入った情報の管理・通達など、組織内のあらゆる情報を一手に引き受ける部署というだけあって、とにかく多忙なのである。

モニタ越しに得られる情報だけでなく、時には斥候・諜報の専門部隊に同行して活動

をサポートしつつ新しい情報を入手しなければならない場合もあつたり、最前線メンバーが肌で感じた情報の裏付けなどもするため、とにかく他の部隊・部署への出張が多く、なおかつそれを出来る限り短期間で終えなければならぬのだ。

「今日は一段と疲れているみたいですね。構いませんわよ、優芽。普段からあなたがどれだけ頑張っているか、わからないわたくしではありませんから。わたくしの抱擁であなたの疲れが癒されるなら、いつまでも抱きしめて差し上げるのが恋人というものでしょう?」

さあどうぞ、と両手を広げながら立ち尽くす恋人を迎える体勢になる覚悟に、優芽は胸の奥のときめきを隠し切れず感情を昂らせる。

「覚悟さん……っ! ……抱擁は嬉しいんですけど、あたしのこと墮落させてダメ人間にしようとするのやめてくれますか」

「あ、あれっ……? ……ここは普通「わーい」って言いながら笑顔で抱き着いてきてくれるところではないのですか?」

「あたしが学校に通い始めて以来ずっと「学校が忙しいならお仕事はやめても構いませんよ」とか「学生の自分は勉強なのでからレイドリベンジャーズは退団しても問題ないと思いますよ」とか隙あらば辞めさせようとしてくるじゃないですか! さすがに察しもつきますよ!」

「今回は純粹に疲れを癒そうとしただけですのに今までの行いが不審を誘って……っ
!？」

しかし覚悟の差し伸べた腕に放り込まれたのは愛する恋人の疲れ切った身体ではなく、真顔で繰り出される真面目で辛辣な言葉だった。

学生と仕事の二足の草鞋をやめさせたい、という覚悟の意見は、子供の歩むべき道筋を示す大人として、当然のことではある。学生には学業だけやらせればいいという意味ではなく、年齢相応の役割——それこそ学業であつたり、アルバイトであつたり、学生に背負える程度の責任を持つてほしいからだ。

アルバイトではなく仕事……それも人の命を背負うこともあるレイドリベンジャーズという職業は、17歳になつたばかりの女学生が背負える「責任」を明らかに超えている。それをこなせるかこなせないかではなく、それを背負わせること自体が、大人としてあつてはならないことだ。

だからこそ、覚悟の行き過ぎたい行いも、まったく理解できない行為ではない。

だが、優芽もまたそれをわからないまま今の仕事をしているわけではない。自分には荷が勝ちすぎる仕事だということは理解している。それでもなお、それを背負うことを選んだのだ。決して英雄願望だとか、自惚れなどというものではなく、それが今の自分にもできるという自信があるからこそその、この道なのだ。

確かに学生とレイドリベンジャーズの兼業には苦しいことも多い。急な任務があれば授業を抜けて出勤しなければならぬし、足りない単位を補習で補わなければならぬ。常に職場にいられないことで同僚に迷惑をかけている自覚もあるし、年齢や免許の問題でバイクしか運転できないため行動範囲も限られる。

それでも、学生として学校には通いたい。そして同時にユナイトギアに適合できる者として、その才能を出来る限り腐らせたくはない。何より、大好きなヒーローに憧れてなった職業を諦めたくはない。そうした様々な想いが絡み合い、今の自分があるのだとすれば、優芽は現状を無理に変えたいとは思えなかった。

「確かにあたしはまだ学生こどもですけど、これでもちやんと正規入団試験をクリアしてレイドリベンジャーズになったんですから、たまにフラフラのヘトヘトになった時にぎゅつとしてくれれば十分なんですよ」

こうやって、と覚悟の胸に体を預け、その手で彼女の体を強く引き寄せる優芽。

ダメ人間にされるのは御免被るとしても、愛する人に抱きしめられることを望まない者などいない。優芽の背に腕を回し、その頭を撫でながらしばらくの時を待つ。二人がその体を離れたのは、たつぷり五分は経つてからか。少し照れ臭そうに笑いあうと、優芽は学生靴を持って自室へと戻っていった。

(でも……:どれだけ優芽が自分で選んだ道だとしても、大人として本当はそんな道に進

んでほしくはありませんでした。もつと普通の高校生らしく、平和で穏やかで……部活や勉強に必死になるくらいの子供でいてほしかった……。そうさせてあげられなかったのは、わたくしを含む周囲の大人たちの不徳に違いありません……)

もしも過去に戻れたら、彼女をレイドリベンジャーズにさせないことができたでしょうか。そう考える覚悟だったが、すぐにその可能性は消えた。

優芽がレイドリベンジャーズになった最初の理由は、レイダーに襲われた事件から大好きな彼ヒローに救われたこと。彼に出会わなければレイドリベンジャーズにならなかつたかもしれないが、そうなっていたら彼女はレイダーに襲われて死んでいた。

だからこそ——優芽がレイドリベンジャーズになることは避けられなかつた。レイダーに襲われ、ヒーローに救われ、憧れて、レイドリベンジャーズに入団して彼の後輩となり、そして「あの惨劇」を経て過去へと遡り、今に至る。全てが「なるべくしてなつた」出来事ばかりだ。

ならば、もはや彼女がレイドリベンジャーズにならなければ、などと考えている暇などない。もはやなつてしまったことは変えられないし、彼女がどんなに満身創痍でも今の環境に満足しているのなら、これ以上とやかく言うだけの権利が覚悟にはない。

「覚悟さーん！ あたしの筆筈に覚悟さんの下着があるんですけどー！」

「ええっ!? ちよつ、ちよつと待つてくださいい優芽！」

「うわっ、なんですかこれ、布面積どうなって——」

「優芽えーっ!？」



「——というわけでお兄さん、久しぶりにツーリング行きませんか？」

「いやまあ行くのはいいけど、煩惱を散らす手段として俺をツーリングに誘うな」

自室で覚悟のきわどい下着を見つけて数日後、優芽は久々の休日恋人ではなく希繫きづなをツーリングに誘っていた。希繫が理由を問うと、「覚悟さんがあたしのために風を洗勝負下着を用意してたなんて知ってから悶々として仕事にならないので風に煩惱を洗い流してもらおうんです」とのことだった。

確かにその理由なら恋人ではない相手とツーリングをするのも納得ではあるのだが、今はもう踏ん切りもついて別の交際相手がいるとはいっても、仮にも初恋の相手をこういう機会に誘うのを覚悟がなんとも思わなかったわけではなく、むしろ覚悟が今まさに家で悶々としているということに優芽は気づいていない。

「しかし何度見てもお前のバイクかっこいいな。それも未来から持ってきたのか？」

「いえ、これは現代の市販のバイクですよ。ただ、未来で乗ってたバイクと同じ見た目に

なるように、仲嶋先輩に頼んで外観だけまるっと変えてもらいました」

「……お前よくあいつに改造されたバイクに乗れるな」

ふと思いついて優芽のマシン——SDV400のナビゲーションモニタをチエックすると、一見なんともないように見える表示画面の中に、明らかに「これは危険です」と声高々に意志表明する黄色と黒の斜線模様に囲われたアイコンがあった。

さすがに追及しないわけにもいかず「これは？」と優芽に問うと、当然ながら最初からあつたアイコンではなく菜咲に改造してもらった直後に「最初からいましたよ」と言わんばかりに堂々と表示されていたらしく、優芽は「触らなければ大丈夫だろう」と敢えて何も言わずマシンを受け取ったらしい。

さすがに不安要素が大きすぎるため、菜咲に連絡をとつてみると——。

『ああ、優芽ちゃんのマシンに入れたアレねん！ 全然危なくないから押しでいいよん！』

——と、能天気極まる声で堂々とゴーサインを出されたので、戦々恐々としながらも希繫がアイコンにタッチすると、SDV400はその形状を人型の武装ロボットへとトランスフォーメーション変換させ、希繫と優芽を呆然とさせた。

『ね？ 別に危なく——』

「危ねーよ！ むしろフル武装のコレが危なくないってどういう判断だ！ ていうかなんで変形ロボットにした！ 人型にする意味は!? ていうかこいつどうやって自律機

動してんだ!？」

『おおう、さすが希繫! ツツコミが冴えわたってるねえ!』

「ケンカ売ってるのか!」

未だに放心状態の優芽が地面に膝をつく、ひとまずマシンを元に戻す方法を菜咲なさけから聞いてバイクモードへと変化させると、通信を切つて後日どう説教するかを割と真面目に考え始めた。

しかし一分ほど経つと、ようやく立ち上がった優芽がやたら爽やかな表情でマシンに跨り直したので、希繫もガレージからXD400Rを出してヘルメット内の通信モードをオンにし、優芽に声をかける。

「大丈夫か優芽?」

「ああ、はい。もうなんか一周回つてマンガとかアニメみたいなロマンの塊だと思えば気が楽になりました」

「その感覚に慣れすぎると菜咲みたいな妄想を現実にしようとするバカになるから気をつけろよ」

「まああたし空想の産物みたいなヒーローに憧れてレイドリベンジャーズになつたんで、相性いいかもしれませんね」

しれっと希繫のことを空想の産物扱いしたことには互いに気づかず、二人そろって胸

に燻ぶった菜咲への怒りが後日どのような形で爆発するかは、その場に居合わせた当事人たちと菜咲の同僚の覚悟だけが知るといふ。

急務——アージェント——

「新型ユナイトギアの予算会議？ そんなもん年度ごとに割り当てられてるだろ。もうすぐ6月にもなるのに今更なんでそんな……。つていうかそういうのは俺じゃなくてもつと上の奴に言え」

五月も四週目となった火曜の朝、職場に出勤すると早々に連絡が来たのは、ORBに所属する友人の武城誠実たけしろせいじからだった。

彼の話によると、今年度のELBシステム開発予算が例年よりも少ないことに対して、ユナイトギアの使用認可を持つ各組織が懸念しているらしく、ギア開発の設備・権限を持つレイドリベンジャーズに対して予算の見直しを要求しているらしい。

というのも、2183年現在、世界では毎年25—28機のギアが開発されており、うち4機以上がこの日本で製造されている。だが昨年、この日本で製造できた正規ELBシステムは3機。そしてその開発者の中に、日本の誇る天才メカニックである『仲嶋菜咲』の名はなかった。

実は一昨年に制作された一四四〇号ELBシステム『クリュスタルス』を製作後、それを「最高傑作」と称した菜咲は燃え尽き症候群に陥り、モチベーションを大きく落と

していた。おかげで昨年の新型ギア製作の成果はゼロ。周囲からも厳しい意見を多く寄せられた。

しかし、今年の四月末。つまり新年度予算が出た直後、彼女は同僚たちに「面白いものを見た」と離すと、新型ギアの設計・開発に意欲的に取り組み、ついに一昨日、第一四六七号ELBシステムの開発に成功したのだ。

『一昨日の発表を見ただろう。昨年スランプに陥っていた仲嶋博士が新年度早々に新型ギアを作ったおかげで、予算の見通しが大幅にズレた。そこらの科学者ならいざ知れず、彼女は日本が世界に誇る天才メカニックだ。その影響力は計り知れない』

「もしこの勢いが続けば、例年以上の成果を出すかもしれないからこそ、予算を多く見積もってほしい、ってことか。まあ確かに開発の設備・権限こそレイドリベンジャーズにあるものの、ユナイトギアを使用する組織はうちだけじゃないからなあ。でもやっぱりそれ俺に言うことじゃないだろ」

『もちろん、ユナイトギアの開発は国からの資金だけじゃなくユナイトギアを利用する各組織がスポンサーとなつて出している。だからこそ、スポンサーとレイドリベンジャーズ開発部および経理部には話を通した。あとは上層部に話を通してもらいたいだけだ。しかし、ORBは……』

「あー……金は出すけど頭は下げたくない、ってやつな。レイドリベンジャーズと

ORB、仲悪いもんなあ」

レイドリベンジャーズとORBの不仲ぶりについては過去にも話した通りだが、改めて簡潔に言えば「人類を守る」か「地球を守る」かで意見が噛み合わない、という仲であり、任務によつては物理的にも衝突を繰り返している。

とはいえ、それは組織としてのスタンスによるものであり、各々の団員同士が不仲かというところでなく、希繫と誠実のよう^{きづな}に友人として連絡をとりつつ、会議などで両者が顔を合わせる時の仲裁役となる者もいる。

そして、希繫と誠実はお互いの組織の中でも特に温厚で口が上手いことも合わさつて、こういった会議や会談といった、重要な話し合いには必ず巻き込まれるため、この二人の連絡は実質的に互いの組織の意見を半ば代弁した会話にもなり得るのだ。

「まあこつちの上層部には俺から掛け合つてみるよ。ユナイトギアの開発に関する問題はレイドリベンジャーズも放っておけないだろうしな」

『具体的な追加額は……ギア2つ分ほどか。そこは実際に仲嶋博士に聞いてみないことにはどうにもならない』

「菜咲のモチベーションが絶好調なのはいいが、既存のギアにわけのわからん改造を施して現場を混乱させるのだけはやめてほしい」

『ああ……俺のフアングバイトも一度やられたな。アームズ^{ホオゾロ}を出そうとしたら何故か物

干し竿が出てきて本気で焦った』

ただ、そういうふざけた改造をしている時に限って、性能が無駄に高いのが怒りにくいとこらだ。ホオジロが物干し竿にされた時も、通常時鎌刀形態よりもエモーシヨナルエナジーの伝達力が高く、レイダーに対してより高い威力を發揮した。

また、人やレイダーよりも災害や環境と戦うことの多いORBとして、先端に刃がないことで取り回しが楽ですらあったという。一例として、土砂崩れで落ちてきた巨大な岩を、てこの原理で持ち上げる際になどに大いに役立ったらしい。

もちろん任務後すぐに菜咲に連絡し、元に戻してもらったが、人によつては「このままの方がいいか」と戻そうとしない装着者もいるという。

「ついでこの間なんか優芽ゆめのバイクが人型ロボットに変形した」

『何をどうしたらそんなことになるんだ』

今となつては優芽自身も普通に受け入れて乗っているし、時々使い走りにさえしているところを見ると、彼女の強かさを垣間見ているような気分になる、とは希繫の談だ。

ともあれ、予算の見直しについては双方共に会議に持つていく方向でまとまったので、これ以上の長話をする^{と業務に差し支えるだろうと、}通信を切った。

「あー、また面倒な仕事が増えた……」

「今の通信、武城さんからですか？」

痛む頭を抱えてぼやいていると、向かいのデスクに座る望月がお菓子を頬張ったまま声をかけてきた。「口の中のを片付けてから喋れ」と注意すると、しばらく無言で咀嚼し、飲み込んでからもう一度同じように話しかけた。

「ああ。昨年あんまり菜咲の調子がよくなかったから予算を下げてただけど、今年度早々に絶好調になったから、もしかすると予算足りないかもしれないから予算を見直す会議をしようってさ」

「あー……：こう言っちゃなんですけど、日本のギア開発って仲嶋博士に頼りつきりですもんね。しかも一昨日発表された第一四六七号ギア、特性は不明ですけど基礎スペックはこれまでのギアの中でもピカイチっぽいこと言っていましたもんね」

「らしいな。俺その発表見てないから知らんけど。まあ基礎スペックが高いとはいっても、ギアは形状や機能によって伸ばすところと削るところが違うから、一概にどれが一番強いとは言えないけど」

「うーん、でも前に聞いたことありますよ。あまりにも強力すぎて開発早々に使用禁止された『最凶最悪のユニイトギア』とか。まあ都市伝説か何かだと思いますけど」

最凶最悪のユニイトギア、という言葉を聞いて眉を顰める希繫であったが、それも致し方ないことと言えよう。ユニイトギア——正規ELBシステムとは、人間の正の感情を抽出し、増幅させ、その力が決して悪しきことに使われることのないよう制御された

「正義の兵器」なのである。

レイドリベンジャーズが「人類」を守り、ユナイトギアが「正義」を守ることで、これまで多くの「選択」を正しいものにしてきた。逆に言えば、どちらかの意思に齟齬があれば、それは「人類」か「正義」のどちらか、あるいは両方に仇為す行いであることの証明でもあるのだ。

しかし、だからこそ、ユナイトギアに『最凶最悪』の文字がつくことはあり得ない。仮に「悪用されやすいギア特性」を持つていたとしても、悪意を持つてそれを行使しようとするギアがそれを拒否するだろうし、ギアがそれを拒否しないということは「人道に悖る行い」ではないはずなのだから。

無論、それは望月であつても理解しているのだろう。故に彼女はその話を「都市伝説」とまとめたのだ。

「おつはよーん！ 希繋いるーん？」

「噂をすれば影が差したな」

「仲嶋博士！ おはようございまーっす！」

「おはおはー。芽愛ちゃんは元気そうで何よりん！」

そんな話をしてしていると、渦中の人である菜咲がやたらハイテンションで、あまり接点がないはずの第二前線部隊のオペレーションルームに現れた。

どうやら先に予算会議の話聞いていたようで、具体的な予算の要望と用途がまとめられた書類を、これから上に連絡しに行くであろう希繫に渡しに来たとのことだった。

「とりあえずそこに書いてある分の予算は絶対に使う最低限の額だから、ちよつとイロつけて貰ってきてねーん！」

「はいはい。とりあえず必要最低限くらいは……つてなんだこの額!! おいちよつと待て菜咲! お前今年度だけでいくつギア作るつもり——つて、もう居ねえ……」

もしかしてこういう時の逃げ足だけは自分よりも早いのでは、とやや自信を失う希繫だったが、ひとまず受け取った資料をこのままにしておくわけにもいかず、望月に留守を任せてオペレーションルームを後にした。

「……希繫さん忙しそうだなあ。手伝ってあげたいけど、メアつてあんまり気が長い方じゃないから仲裁とか全然手伝ってあげられないしなー。今度なにか……そーだつ、お菓子わけたげよーつと」

一人オペレーションルームに残された望月は、独り言のようにそう呟くと、再びお菓子を頬張りながらデスクワークに戻っていった。

錬成—ビルド—

「エクレーール!」

『クリムゾンインパクト』

その身を雷光に換えて放った必殺のキックが、無数のレイダーたちに余すことなく叩き込まれ、彼らを塵と散らす。周囲を見まわし、レイダーの残党がないことを確認すると、ようやく希^{きづ}繁と、彼のサポートに入っていた望月・天宮・空宮の三人が一息つく。ここ数日落ち着きを見せていたレイダーの活動が再び活発化の兆しを見せ始め、第二前線部隊の出番も比例して増えようとしていた。そして、問題はレイダーの数や頻度だけではなく――。

「今日のレイダー……なんか、いつもよりちよつとだけ、強かったですね……」

「ああ。確かに数も多かったが、並のレイダーなら通常のクリムゾンインパクトで十分なはずなのに、リミットブレイクまで使うハメになった。使わなければやられるってほどでもなかったが……」

「これは……レイダーが何らかの要因で強化されている、と考えるべきなんでしょうか……?」

「強化ととるべきか、進化ととるべきか、そのあたりが判断に困るよねー。第一部隊にも連絡したけど、向こうでも同様のレイダーと交戦したみたいだし」

レイダーという存在がこの世界に確認されて120年以上が経過した今になって、おそらく初めての現象と思われるレイダーの変化。

望月の言う通り、もしもこれが自然発生した「進化」であるのなら、人類にこれを止める手立てはない。しかし、もしもこれが何者かの意思がもたらした外的要因による「強化」であるのなら、それを阻まなければ今後のレイダー災害の影響力が大きく変わる。

また、これが全てのレイダーに関するものなのかもはっきりしていない。そもそも、今回のこれはレイダーを頻繁に相手取る永岑市ながみねだからこそ観測できている事態であり、他の地域でも同様の現象が起きているかはまだわかっていない。

既に本部には永岑市およびその周辺支部から報告が行っているはずだが、本部は本部で近頃大捕り物があつたらしく、まだあちらでも情報を整理しきれていないとのことだった。

「ともあれ、任務完了だ。周辺の事後調査は情報統制部と調査隊に任せて、俺たちは帰投するぞ」

「了解！ あつ、帰りにコンビニ寄っていいですかー？」

「お前ほんと……そういうところだからな？」



オペレーションルームに戻ると、そこには逢^あ依^いだけでなく、悠^{ゆう}生^きまでもが簡易なパイプ椅子に腰かけて希繫たちの帰りを待っていた。しかし、その雰囲気はどうにも穏やかなものではない。

望月と諸星はそそくさに自分のデスクに戻って資料の作成を始めてしまい、天宮と空宮は蜘蛛の子を散らしたように部屋を出て行ってしまった。悠生の視線からしても、用があるのは希繫で間違いなさらしい。

既に嫌な予感がしている希繫は、諦めたように溜息を吐くと、二人の元へと近づいていく。

「ひとまず、戦果報告からな。討伐したレイダーは計14頭。戦った感じでは、全てではないがほとんどの個体が通常のレイダーよりも手強かった印象だな。警察の避難誘導のおかげで人的被害なし。途中、民家の扉と停車中の車が破損。一応、車の中に人は乗っていないかったことは確認済み。以上」

「了解。ならとりあえず後で報告書にまとめて情報統制部に回してもらおうとして……」

ちよつと、聞いてもらいたい話があるのだけれど、いいかしら？」

「嫌です」

「ダメ」

「じゃあ訊くなよ、とぼやいて項垂れると、頬をパシパシ、と叩いて気合いを入れなす。」

逢依だけでなく、第一前線部隊の隊長を務めている悠生が、いつもの雑談という雰囲気でもなく任務直後のここに居るとすれば、やはり要件はあのレイダーのことだろう。

もちろん早々に対処しなければならぬ案件ではあるものの、日本本部からの通達はまだ帰ってきていない以上、下手に動くことはできない。それに対するもどかしさを訴えに来たのかとも思ったが、彼——悠生の表情はどうやらそういうわけでもないようだ。

「実は例のレイダー……情報統制部曰く「変異型レイダー」が現れたことで、近々愛知県
の全支部に前線メンバーを増やすことになったのだけれど……」

「新メンバーってことは……：やっぱり簡易型じゃなくユナイトギアを扱える人員を、つてことだろ？ まあ会ってみないことにはわからないが、いいんじゃないか？ 戦力が
増えて困ることはないだろうし」

「まあ、それはちげーねーんだが、問題はその新メンバーというより、そいつの持つてる

ギアの方でな。正直、これを作った菜咲は改めてバカなのか天才なのかマジでわからなくなつた」

「……？ 既存のギアに、そんな飛びぬけて頭のおかしいやつなんてあつたか？」

さすがに1467機全てのギアを把握しているわけではないが、菜咲が開発したギアは先日発表されたものを含めて13機。うち一つは逢依の持つクリユスタルスであるため、他の12機がその「問題のギア」なのだろうが、希繫が把握している限りでは、よほど突飛なギアはなかつたように思える。

しかし、逢依と悠生の表情を見るに、そのギアはよほどのじゃじゃ馬であるようで、希繫はおそろおそろといった様子で、そのギアの名前を訊ねた。

「えっと……そのギアの名前は？」

「第一四六七号ELBシステム、個体名称『ワイズマン』と呼ばれるテクニカルエイド型ユナイトギアだ」

テクニカルエイド型——つまり義手や義足、あるいは覚悟のヴォイドのような義眼など、失つた体の部位の代わりに常に起動状態で装着し続けるタイプのユナイトギア。

戦闘のない日常時でも常に装着状態を維持し続けることで、他のギアよりもはるかに一体感のあるギア運用が可能であるほか、ギアのAIとの意思疎通も長く深く行わなくてはならないため、通常のギア以上に装着者とギアとの相性が重要となる。

また、義肢としての役割を持つ以上、ギアがなんらかの理由で待機状態に追い込まれたり、破壊されたりすると、装着者の生命活動に支障をきたす要因にもなるため、ある意味では非常にリスクなギアともいえる。

「テクニカルエイド型……。まあ、珍しいタイプだし、最新型つてこともあつて特別感はあるけど……。それがどうしてそんなに問題なんだ？」

「このギアの特性は「土を純金に換える」とかいう、金の価値を大暴落させかねないものなんだが、それよりヤバイのは「このギア特性で何を作るか」だ」

「何をつて……。まあ武器でも防具でもすぐに作れるのは便利だろうけど……」

「あのね希繫、このギアは菜咲の作り出した「最高傑作クリュスタルスを超える最高傑作」なのよ？ その程度なわけがないでしょう？」

そう、ワイズマンはそれまで菜咲が作った12機のユナイトギアの最高傑作である「クリュスタルス」の完成によつて燃え尽きた彼女の情熱を再び燃え上がらせ、そしてそれを超えるだけの意欲作として開発された新型ギア。

その性能はクリュスタルスにも匹敵し、そしてそこに費やした技術力は既存のあらゆるギアの常識を根底から覆すほどだと豪語する。だからこそ、逢依も悠生もこうして身を震わせるほどに警戒しているのだ。

「オレの知る限り、これまでのギア特性で作れるのは「形」だけだ。優芽のがわかりやす

いだろ、アイツの持つイーリスは水分さえあれば気体・固体・液体のどの状態にも変化し、その形を任意に決められる。だがそこにあるのは「形」だけだ。たとえば龍を模そう
が蛇を模そうが、それを動かすのは優芽の意思だ」

「けれど、ワイズマンの作り出す純金はそうじゃないわ。AIには命こそないけれど、自我という名の意思……「魂」がある。それと同じように、ワイズマンの作る純金にもまたその「形」が意味する「魂」が宿るのよ」

『魂を創る』ユニイトギア……!?!』

魂を創る。それは「命を創る」ことと同義でないにしても近似する意味を持つ。故にそのギアを纏う者には健全な倫理観と道徳観を備えてもらわなければならぬ。

たとえ生み出した魂の運用が兵器としてのそれであろうとも、魂をみだりに錬成し、雑に扱っていいわけではない。故に——逢依と悠生はその新人の教育係として「慈愛のレイドリベンジャーズ」である希繫を選ぼうとしていたのだ。

「第一部隊でももう一人拾う予定だったんだが、こっちは戦力的にももう間に合ってるから、ワイズマンの装着者の他にもう一人、第二部隊に入れてやってほしい」

「二気に二人も戦力が入るのは確かに嬉しいが……本当に教育係が俺一人でいいのか？

自分で言うのもなんだが、こんな貧弱な奴よりもっと頼もしい奴がいるんじゃないか……」

「私は隊長という立場上、どうしても個人よりも部隊全体としての見方になってしまう

し、他の隊員たちはそもそも簡易型しか持っていないわ。単純な戦闘能力だけなら望月ちゃんが一番だけれど、残念ながら彼女の性格上、人にものを教えるということには向いていないことは明らかだもの」

「はい、無理です」

あつけらかんと笑いながらひらひらと手を振る望月に軽い苛立ちを覚えるものの、逢依の言う通り彼女の性格は「教育」というものに対してあまりにも向いていない。

思いのほか気が短いことも一因ではあるが、それ以上に物事を主観で捉えすぎる悪癖がどうにもよろしくない。また、簡易型を使うがゆえにその場凌ぎ的な戦い方をしている点も、あまり教育側として好ましくはない。

そういった自分の欠点を理解していて、なおかつそれを埋めてあまりある戦闘能力を持つところは間違いなく優秀なのだが。

「戦闘技術に関してはそんなに心配ないと思うわ。一応ギアの利用ライセンスは持っているわけだし、本部で共同訓練も受けているわけだから。ただ、新人だけあって戦い以外の業務は初めてでしょうし、メンタル管理も私だけでは手が回らないところもあるはずだから、それをより近くで接するあなたにお願いしたいの」

「……了解。んで？ その新人二人の名前は？」

「ああ、それなら——」

5th season——蓬萊迷子事件編
生命—ライフ—

七月に入つて最初の日曜となるその日、緊急の仕事が入っているはずの第二前線部隊のオペレーションルームに、桐梨逢依きりなしあいの姿はなかった。

朝から不調を訴えていて、朝食の準備も小転こころに任せて、その日は仕事を休んでいたからだ。少し休んでから、小転に付き添われて病院に行くとは言っていたが、普段は気丈に振る舞う逢依だからこそ、その弱々しさに希繫きづなの心は揺さぶられた。

本当なら、希繫がその付き添いに付いていきたかつたが、緊急任務だけでなく、再来週から第二前線部隊に入る新メンバーのための資料作りもあり、この日は希繫だけでなく逢依以外の全ての第二部隊員が出勤していた。

「希繫さん、お茶いれたんでどうぞー」

「ん、ありがとう望月。悪いな、お前の仕事も少ないわけじゃないのに、俺の分まで手伝わせちまって」

「その希繫さんは隊長の分までやってるじゃないですかー。前にも言ったでしょ、こういう時は助け合つてナンボだって。それに、普段はむしろメアが助けてもらつてんです

からお相子ですって！ それに、手伝うって言っても変異型レイダーの資料にミスがないかチェックしてるだけですし」

「その「だけ」が大助かりだよ」

手元のスピードを落とさないまま喋っていると、オペレーションルームに聞き慣れないメロデイが流れた。他の隊員たちが頭に疑問符を浮かべていると、希繫が慌てて携帯の着信に出たので、逢依専用の着信メロデイなのだろうと、他の隊員たちはその意識を自分の仕事に戻した。

「逢依、病院には行ったのか？ 大丈夫なのか？ ……そうか、ならひとまずは安心だな。でも、朝から調子が悪そうだったし、朝食もとらずに吐いたって姉さんから連絡きたけど……本当に病気とかじゃないんだな？」

いつもなら業務を中断できる状態なら廊下に出て通信に応じる希繫が、そんな配慮も巡らせられないほど狼狽している様が面白いからか、あるいは彼の心配や不安が理解できるからか、敢えて何も言わずその会話を聞き流していた。

ただ、それでも聞こえてくる内容を掻い摘んでみれば、少なくとも逢依が悪い病に侵されたわけではないようだった。ただ、不調は治ったわけではないようで、希繫の心配するような言葉が何度もかけられていた。

「それで、結局のところ何が原因だったんだ？ 病気じゃないなら、何か悪いものを……」

食べてたら俺や白露が無事なはずないか。……うん、うん……うん？ ……えっ？」

ふと、そこで希繫の言葉が途切れた。何かあったのかと思ひ、諸星以外の隊員たちの視線が希繫に注がれる。

「……悪阻？ 五週間目？ えっ、じゃあ朝から調子悪かったのって……うん、うん……。じゃあ、本当に……白露じゃなくて、この時代の俺たちの——子供？」

瞬間、オペレーションルームの時間が止まった。それは隊員たちだけでなく、情報部との連絡を行っていた通信オペレーターたちも例外なく、その場の全員がクリュスタルスのギア特性を受けたように凍結した。

だがそれも致し方ないことではあったのだろう。希繫と逢依の仲は、結婚以前からいつかは「そうなる」だろうと思われていたほどに睦まじいものであり、去年ようやくゴールインしたとはいえ、二人はレイドリベンジャーズの花形である第二前線部隊の隊長とエースである。

戦場に身を置く職業である以上、身重になることはあまり好まれることではないし、特に規律に厳しい逢依は、そうした規則・規律というものに人一倍気を遣っていた。だからこそ、変異型レイダーが出始めたこの時期に妊娠というのは、あまりイメージにそぐわなかつたのだろう。

とはいえ、希繫と逢依も新婚である。まだ二十代前半の若々しい夫婦でもあるし、頭

ごなしに怒鳴りつけることはできなかった。何より、この二人は「子供」というものにかく強い憧^{コンプレックス}れを抱いていたことも、仲間内ではよく語られていた。故に、隊員たちの口から出る言葉はひとつであった。

「わかった、俺も早めに切り上げて帰るよ。連絡は……ひとまず婚代^{こんだい}さんと悠生^{ゆうせい}にだけしておくから、逢依は姉さんと一緒に家でゆっくりしていてくれ。……うん、うん。わかった。じゃあ、また後——」

「希繫さんっ！ おめでとうございますっ!! 隊長もっ！ 本当に……本っ当におめでとうございますっ!!」

「——うわっ！ も、望月……?」

真っ先に声を上げたのは、やはり望月であった。この第二前線部隊において、二人と最も付き合いが長いのは彼女だ。むしろ、この部隊だけでの交流という意味では、希繫よりも逢依との付き合いが長い。だからこそ、今この瞬間に何も言わないままではいられなかった。

「隊長は……逢依ちゃんは昔っから自分の体のせいで好きな人との子供ができなかったらどうしようって言ってる……ずっと不安そうだったんです。白露^{しろろ}ちゃんが来てから、そういうのはあんまり言わなくなっただけ、でもやっぱり不安がゼロになっただけじゃないだろうし……。でもっ、できたんですよねっ！ 本当に、希繫さんとの赤ちゃん、で

きたんですよねっ！」

「望月……。……逢依、悪いけど望月に代わるよ。ちよつとだけ話してあげてくれ」

目から涙をぼろぼろと零しながら喜ぶ望月に、希繫は携帯端末を渡した。

『望月ちゃん？』

「隊長お……！」

逢依の声を聞くなり、あまりにも情けない声が出て、電話越しに苦笑いをしたような声がかかる。

だがそれでもやはり、普段よりも幾分か力のない様子の逢依の声に、望月は口をへる字に結んで涙を拭った。

『昔みたいに「逢依」でいいわよ。お祝いありがとう、ちゃんと聞こえてたわよ。希繫にも、私からはあんまり言えないこと言ってくれて、ありがとうね』

「いえっ、むしろ逢依ちゃんが言わなかったこと、勝手にしゃべっちゃつてごめんなさい。でも……。本当によかったですっ！ お仕事の方は大丈夫です、メアもみんなも頑張りますから、赤ちゃんのためにもちゃんと休んでください！ 文句言う人がいたら上司だろうが総理大臣だろうがぶっ飛ばしてやりますっ！」

『心強いわね。じゃあお言葉に甘えて、今日明日休んで、明後日からは産休の相談と、部隊長代理への引継ぎの準備をしようと思うの。大変だと思うのだけど、望月ちゃんにも

手伝ってもらえるかしら？」

「もちろんです！　じゃあ……あんまり長話もよくないと思いますから、そろそろ切りますね。あつ、希繫さんに代わった方がいいですか？」

『いいえ。希繫も仕事があるでしょうし、望月ちゃんの言う通りあんまり私も余裕がないから、切るわね。ありがとう、望月ちゃん。また明後日、お話ししましょうね』

そう言うのと、逢依との通信が切れ、望月はその場にへたり込んだ。そしてその場でまた泣くかと思うと、再びぐい、と涙を拭いて、希繫へと詰め寄った。

「希繫さんー！」

「はっ、はいっー！」

「まずはおめでとうございます。メアが言うのもなんかおかしいですけど……隊長のこ
と、これからは今まで以上にちゃんと接してあげてくださいね。お酒の席とかに絶対に
近づかせないでください！　風邪とかの罹りやすい病気も気を付けて！　昂揚剤デトネイター
なんて絶対ダメ！　もし隊長が無理しそうだったら恥も外聞もなく泣き喚いてでも止め
てくださいー！」

「そ、そりやもちろん……」

「メアにできることがあるならなんでも言ってください。もし希繫さんじゃどうにもでき
ないことがあっても、女の子同士なら相談できることもあるはずです。家事とかも今

まで以上に積極的に手伝ってあげてください。仕事のせいでそれができないならメアがもつと頑張つて手伝います！　だから……だから……！　隊長を……逢依ちゃんをお願いします……！」

逢依と望月は、この第二前線部隊の同期である。二人は入団早々に前線部隊に配属され、互いに慣れない業務に必死でしがみつき、時には相談をし合い、時には価値観の相違で言い争いになることもあったが、見知った相手もいないこの部隊で気丈でいられたのは、戦友とも言えるお互いが居たからに他ならない。

そして希繫が別部隊から異動してきて、逢依が隊長となり、何度かの隊員の入隊・脱退を繰り返して、諸星や天宮・空宮と出会い……今の部隊に落ち着いて、もうすぐ新しい隊員も入る。第二部隊の隊員同士という関係においては、希繫にだって負けないことが望月のちよつとした自慢ですらあるのだ。

だからこそ、彼女の想いは純粹で、そして重くて、何より素直なのだ。

「うん。逢依と子供は必ず守る。俺だけじゃどうにもならないことだつてあるかもしれないけど……その時は望月や、みんなの力も貸してもらおう。ただでさえ忙しい時期なのに、さらに忙しくさせちゃって悪いけど……よければ、一緒に頑張つてほしい」

「はいっ！……じゃあそうと決まったからには、次の試験で正規ELBシステムの免許とります！　新しい子の教育とかも、手伝えそうなことを手伝います！　なんでも

じゃんじゃん頼ってください！」

「隊長の不在分、お前が二倍働くんなら、少しは手伝ってやる」

「希繫さん。僕と空宮も……できる範囲でお手伝いします……。あんまり、役に立たないかもしれないけど……」

「桐梨さんと隊長には……いつも……助けてもらってるし、こういう時に頑張らないと……仲間として、胸が張れないので……」

情けは人のためならず。「人助け」の精神は突き詰めてしまえば「助け合い」の精神となるように、誰かのために行動する時、その行いに込められた思いが一方通行となることはない。

今までもそうだったし、これからもそうだ。希繫も逢依も、隊員たちを何度も助けてきたし、隊員たちも同じように希繫と逢依を助けてくれた。それは今までどちらかが多かったから、これからそのお釣りを返すという意味ではない。

今までもらった分も返した分も互いに同じ。だからこそ、これから助ける分が多い少ないは関係ない。今こうして隊員たちが希繫と逢依を助けることに、恩の数だとか大きさといったものは無関係なのだから。

殺意—キラー—

『——以上二名の搜索・捕獲を任命する。粉骨碎身の心構えにて、これをこなしてみせよ』

主に命じられるまま、どこでどんな姿をしているかもわからない人物を探し始めて2年。同僚からそれらしき人物の情報を得てこの街に訪れて丸1年。彼女——
しじょうきょうき 四条杏樹の腹は空腹に負けて唸り声をあげていた。

この街に来た時も、今日のように空腹に負けて行き倒れていた。食事をろくにとつていないというわけでもないが、生憎と彼女の体は燃費が悪く、早食いはしないが大食いで、手元にある金の使い道の九割以上が食費だった。

『ねえ、あなた大丈夫？　ちよつとくくちゃん！　こつち来て！　誰か倒れてる！』

『倒れてる？　だったら俺を呼ぶよりも警察とか呼んだ方がいいんじゃないや……つて、なんだ今の音？　こいつの腹の虫か？』

『お腹すいてるのかな……。くくちゃん、ウチのカバンにタマゴサンドがあつたはずだからもつてきて！』

『なんだ、行き倒れかよ……。わかつた、ついでに飲み物も買ってくるから、早智さちはそい

つをちゃんと見張つてろよ」

空腹にやられて朦朧とする意識の中で、二人の男女が話す声が聞こえていた。腹の虫を聞かれたことはそれなりに恥じらいましたが、その時はそれどころではなかったし、おかげで警察を呼ばれなかったことを考えれば、腹の虫様々と言えた。

そうしてその男女に施しをもらい、ようやく話をする気力が湧いてくると、なぜあそこで行き倒れていたかだとか、職は何をしているかとか、いろいろ話している内に泊まる宿がないことがバレてしまい、以来この二人が同居するマンションに間借りすることになった。

どうしてそんなことになったかは、当事者である彼女自身も今なおよくわかっていなかった。ただ話を主導していた女性が重度の世話焼きだということは確かだし、男性も何度か「それはどうか」と制止しようとしながらも、彼自身お人好しな性格が見え隠れしていたので、割とトントン拍子で話が進んだ。

「アンジュ！ こっちの服も着てみてよ！ これ絶対アンジュに似合うから！」

「早智、それでもう10着目だぞ。キョウだつて疲れてきてるだろうし、少しくらい休ませてやれ」

「……………ボク……………おなかすいた……………」

そして今、杏樹はこうして二人のお節介に絡まれて辟易しながらも、割と幸せに暮ら

している。まるで狂気の使命など忘れたかのように、まるで限られた幸を悔いなく謳歌するように。

だがしかし、そんな甘い日々はそう長くは続かないということを、他の誰よりも杏樹自身が一番よくわかっていた。だからこそ——こうして目の前には、自らの使命を突き付けるように「それ」が立ちはだかるのだ。

「杏樹」

「——っ！ どう、して……キミが……ここに……う？」

人気の多い街中で、まるで「それ」がここに在ることを強引に否定するように、普段のうとうとした眠たげな目を大きく開き、杏樹はその人物の声に返事を返した。

同行していた早智と丸衣くもまた、そんな杏樹と相手を交互に見ながら、しかしどこか怯えた様子の彼女を庇うように前へと出た。普段からやる気もなければ怯えるものもない、マイペースな彼女がこうも明確に不安を露わにしている以上、二人がそうすることとは当然のようにも思えた。

「……ふうん、なるほどね？ 当主様の忠犬とまで言われた君がいったいどうして一年前から音信不通だったのか不思議だったけど……実際に見てみればなんてこともない。お人形を抱えてお友達ごっこに興じていただけか。随分とそのお人形がお気に入りみたいだね。だったら……その人形を壊せば自分の使命を思い出せるかな？」

『ユナイトギア第一四四号・テストマン、ウィルフ・ミルワードに同調接続します』

金髪の男を灰色の光が包み込むと、細かい骨粉を撒き散らしながら暗い鼠色の尾が展開された。一年前、この永岑市で確認された国際脅威的犯罪者集団「蓬萊寺家」の一人、蓬萊寺ウィルフとテストマンである。

しかしウィルフを見たことがない早智と九衣は、少なくとも杏樹にとつてあまり良い人物ではないとだけ判断して、彼女を庇うようにギアを取り出した。

「こいつ……！ ユナイトギア悪用犯罪者か！ 下がっているキョウー！」

「アンジユの知り合いかもしれないけど……あんまり仲がいいわけじゃなさそうだから手加減しないよ！」

『ユナイトギア第六二号・イーター、久繰九衣くくりくいに同調接続します』

『ユナイトギア第七一〇号・マエストロス、古谷早智ふるやさちに同調接続します』

早智を包み込む黄色の光と、九衣を取り巻く栗色の砂塵。そして光と砂塵が晴れると、その中から現れたのは全身を覆うほどの巨大な黄色の翼と、万物を噛み千切らんとする巨大で鋭利な左腕。

早智の翼から数本の羽根が矢のように降り注ぐと、それは鳥籠のようにウィルフの周囲を囲み、彼の身動きを封じた。この羽根は翼を離れると一気に硬質化し、周囲の音を集めて振動し熱を発する。無暗に触れればその熱に焼かれることになるが――。

「ダメ……………！ 二人とも逃げて……………！」

「え？ —うわあっ!？」

「こいつ、尻尾の先端をナイフや矢のように使つて……………ッ！」

ウィルフの尾はそんな鳥籠をまるでバターのように滑らかに切り裂くと、今度はその先端部を細い針のようにして発射した。咄嗟に翼と左腕でガードするが、それらを視界から退かした時には既にウィルフの姿はなく、早智と九衣は慌てて後ろの杏樹に視線を向ける。

だが視線の先が変わらず居た杏樹に安堵した瞬間、二人の腹部を背後から何か貫いた。力なく崩れ落ちる二人に杏樹が駆け寄ると、二人は息も絶え絶えに何かを呟く。

「早智っ！ 九衣……………っ！」

「逃げ、ろ……………キョウ……………！ あいつは……………危険だ……………！」

「嫌だ……………っ！ 逃げるなら……………二人も、一緒に……………！」

「そうしたい、けど……………ごめん、体が……………思うように動かない……………」

おそらく二人の腹部を貫いた骨の矢に麻痺毒が仕込まれていたのだろう。身動きを封じて出来る限り傷を作らず毒や暗器で殺害し、その死体をアートと称して飾り付けるのがウィルフの殺人鬼としてのポリシーだ。

だからこそ、ここで二人を置いていくという選択肢は杏樹にはなかった。たった一

年。今まで生きてきた17年間にとって17分の1程度の期間ではあるが、二人は間違
いなく杏樹にとつて友人であり恩人だ。そんな彼らを見捨てて逃げてしまえば、もはや
人として——鬼として誇れるものは何もない。

「ごめん二人とも……これ、レイドリベンジャーズには黙っておいて……！」

「何を、する気だ……！」

「ダメだよアンジュ……逃げて……！」

長袖で隠れていた右手首から、じやら、と音を立てて現れたのはバイオレットカラー
のギア。

「お願い……ティラン！」

『了解。ユナイトギア第八八号・ティラン、四条杏樹に同調接続します』

董色の暴風が吹き荒れると、その暴風を割って表れたのは上半身に厳つい鎧を装着し
た杏樹だった。その手には巨大な戦斧型のアームズを携えており、戦意とも殺意ともと
れるような鬼気迫る視線をウィルフに向けている。

沈黙を破るように、ウィルフの尾から無数の骨の矢が発射されるが、杏樹がその手の
戦斧を地面に叩きつけると、猛烈な突風がその矢を吹き飛ばした。

「おお、怖い怖い。さすがに犬、当主様のお気に入りだ。これじゃ射出系のスキルは君に
対して何一つ意味を為さない」

「ウィルフ……キミがここに居る、ということ……当主様も……ボクの動向を、把握している……ということなんだね……？」

「当然じゃないか。当主様にとつてこの星は狭い庭。犬が庭の中をどれだけ走り回つても大差はない。ただ……さすがに手元にいないというのは不服なようだね。手早く連れ戻せと仰せつかつているのさ」

へらへらと軽薄に笑いながらもその目には僅かばかりの笑みもなく、ただ能面のように取り繕つた表情だけが薄気味悪く映るだけ。

背後では未だに出血が止まらず意識もはつきりしなくなつてきた早智と九衣が這い蹲つており、これ以上この戦いを長引かせるわけにはいかなかった。

「君が大人しく屋敷に戻つてくれるなら、そこに居る二人には何もしないよ」

「嘘だね。いくら、当主様の……任務とはいえ……キミが、獲物を前に……何もしない、なんてことは……ありえない。二人を、守るためにも……ボクがここを……退くわけには、いかない……」

「ふむ……。さすがに犬は鼻がいいね。まだ見えていない物事にさえ当然のように気がつく」

「ボクの仕事を、横取りしてまで……「アート」の、制作に……精力的な君が……自分が言い出した……交換条件を、律義に守るなんて、思えない……」

だから、ここからは――。

「お互い、怪我じゃ……済まないよ……。それでも、やるの……？」

「どうしようかな。あまり泥臭い戦いは趣味じゃないんだけどね。かといって、当主様の命令に背くわけにもいかない。……そうだね、じゃあ今日はここで開きとしようか。こつちも準備を整えてから、改めて仕切り直しとさせてもらうよ。それまでに、この人形をどう片付けるか、考えておきなよ」

「……二度とこないで……！」

ウィルフは不敵に笑うと、煙幕を撒いてその場から姿を消した。

杏樹はしばらく残心しつつ、安全を確保するとすぐさま早智と九衣を担ぎ上げ、二人を病院へと運んだ。

蓬萊寺—デイスペア—

古谷早智と久繰九衣の出会いふるやさちくくりくいは、趣味で参加しているボランティア活動が始まりであつた。最初はあくまで「同じ活動の参加者」というだけで、互いのことを深く知る気はまったくなかつた、と両者は言う。しかしそれが三度、四度と繰り返したことで、どちらからともなく声をかけたという。

最初に交わした話の内容は「なぜボランティア活動をしているのか」だつた。早智はいつものようにあつげらんかんとした笑顔で「人助けが趣味だから」と言つた。しかし九衣は少し困つたような様子で「人は好きじゃないけど、地球は好きだから」と言つたという。

そして何度か交流を繰り返し、互いに将来の夢ややりたいことを語り合い、早智は「人助け」のためにレイドリベンジャーズへ、九衣は「地球のため」にORBへと就職した。そして互いの就職が決まつたと喜び合つた日の帰り道で四條杏樹しじょうきょうきと出会い、訳ありな様子の彼女を匿うため、三人での同居生活を始めた。

早智はレイドリベンジャーズに入団してから半年間は、日本本部の教導部隊で訓練をつけられることになつていたため、同居生活を始めて早々に九衣と杏樹は二人きりと

なった。

九衣はというと、あくまでORBにおけるユナイトギアの運用は「災害地域の修復」や「野生動物の保全」などであるため、戦うための訓練などはなく、就職後すぐに希望の班に割り当てられたこともあって、割と早い段階で生活が安定した。

そうした事情もあって、杏樹は二人に対して従順ではあるものの、特に九衣の言うことには大人しく従う傾向にあった。もちろん全てに頷くわけではなく、ある程度の自己主張もするが、九衣の言葉選びが巧みであることも相まって、杏樹が彼の言うことに反抗することはあまり多くはなかった。

そんな彼女が、年齢こそ二つ違いであるとはいえ、実質的な保護者となっている二人の言葉を無視して、ウィルフと名乗る男に対峙した時は、早智と九衣の背筋が大いに冷えた。

ユナイトギアを隠し持っていたことは後々問い詰めればいい。しかし、なぜ持っているのか、相手の男とどういう関係なのか、そしてあの凶悪的なまでに恐ろしく悍ましい力を持った相手に、手負いの人間を二人も庇いながら戦って敵うのか。訊きたいことがありすぎて、逆に声すら出なくなった。

そうして今、二人が横たわるベッドの間に椅子を置いて、一言も発さず俯く彼女の姿が、目を覚まして最初に目に入った。

「……キョウ……」

「九衣……？ 九衣……ッ！ よかった……目を、覚まして……くれたんだね……！」

「ここは……病院か。なら、あいつを退けてここまで……。心配をかけたな。ありがとう、キョウ」

「九衣が……二人が無事でいてくれるなら……それだけで、十分だ……！」

杏樹の頬に一粒の涙が伝つていくのを、九衣はただ見ていることしかできなかった。本当ならその手を伸ばして慰めてやりたい。もう大丈夫だと声をかけたい。だが今は傷の痛みと、朦朧とする意識のせいで、ほとんどそれは叶わなかった。

ウイルフの放つた骨の矢は、二人の腹を貫通しながらも、幸い内臓をほとんど傷付けることなく通過したらしく、医師からも「奇跡的なまでに損傷が少ない」と言われた。しかし杏樹によればそれは偶然というよりもウイルフが死体を「アート」にするため、体の内外にできるだけ傷をつけないようにしたせいだろうということだった。

ただ実際のダメージに反して出血が多かったせいか、今は貧血でまともに歩けるような状態ではなく、早智に至っては未だ目を覚ましてすらいらない。だがむしろ、だからこそ今が好機とばかりに、九衣は杏樹に問いかけた。

「キョウ……。あの男は、お前の知り合いのようだったが、いったいどんな関係なんだ？」

「……………それは……………」

「キヨウの過去がどんなものかは知らないが、お前と出会ったあの時から、お前にはきつと人には言えないような事情を抱えているんだろうと思っていた。だから、いつかは聞くべき話だと思っていたし、実際にそれがこうして危機という形で迫ってしまった以上、もう見過ごしてはおけないんだ」

痛みを訴え気怠さの残る身体を起こし、九衣は杏樹の目をまっすぐと見つめた。

「……………ボクを、軽蔑しない……………？」

「どうか。聞いてみないことには確約はできない。けど……………俺はキヨウのことを信じてる。だから、聞かせてくれ」

「……………わかった……………」

そうして、杏樹はぼつぼつと話し始めた。

「元々……………ボクは卵子と、人工精子を組み合わせて造られた……………人工ベビーなんだ……………」

人工ベビー。体外で培養した受精卵を胎内に戻して出産する試験管ベビーと異なり、受精・培養から新生児レベルまで培養ポッドの中で行われた子供のことだ。

2098年に精子と血液、あるいは卵子と血液で受精卵を作り出す技術が発見されたことが後押しとなり、2122年にこの人工ベビーが認可・施工されるようになった影響で、当時まで同性婚を否定する最大の要因であった「出生問題」をクリアし、時期に

差はあれど各国で同性婚が認められるようになったという。

だが今でこそ同性愛など当然のように受け入れられているが、当時はこれに反対する意見も多く、中にはそうした団体から資金的支援を受け、この技術を悪用しクローン技術を発展させた組織もあるという。

「けど……両親、という人はいない。ボクは……人口ベビー技術を、クローン技術に転用している……要注意組織の、モルモット……だったんだ……。身体が……10歳くらいに、なった頃から……投葉実験に……使われていた……。『RE:ARISE』っていう……とこだけど、知ってるかな……」

「いや、聞いたことはないな」

「まあ……仮にも、裏組織だったからね……。とにかく、ボクはそこで……5年間、何度も何度も……数えきれないほど繰り返し、投葉実験を行われたんだ……。その薬に、どんな効果があったのかは……わからないけど、ボクが情緒が、不安定な原因のひとつは……それだろうって、後からわかったよ……」

組織が何を目的として運営されていたのかはわからなかったが、彼女の説明が確かであるのなら、感情起伏成分含有薬品——有名どころで言えば『昂揚剤』デトネイターのようなものを作る研究施設だったのかもしれない、と九衣は推測した。

実際、その推測はそう大きく外れてはいなかった。要注意組織『RE:ARISE』は、

元々「感情結晶体イダを理解し、その侵略から再起する」ことを掲げた真つ当な組織だったが、それに対抗しうる感情兵器ユナイトギアの登場から徐々にその立場を落としていき、その矛先をレイダーではなくユナイトギアへと向け始めたという。

そしてユナイトギアに勝る兵器の開発のため、非合法的な実験を繰り返し、最終的には薬物投与による「人類の強制進化」を目標として、その知識と技術を注ぎ込むようになっていった。——しかし、そんな彼らに意外なところから鉄槌を振り下ろされた。

「ある日……研究所に、緊急警報が鳴り響いた……。あちこちから、悲鳴や破壊音、爆発音なんか聞いて……ボクはてつきり、かつこいいヒーローが……悪い研究員たちを、やつつけに来たんだと、思ってた……」

「思ってた、ってことは……レイドリベンジャーズじゃなかったのか？」

「うん……むしろ、真逆と言ってもいいんじゃないかな。研究所を襲って、ボクたち被検体を……助けて、くれたのは……『蓬萊寺ほうらいじ』だったんだ……。もつとも、当時のボクは……蓬萊寺つてのが、どんな人たちかなんて、知るわけもなかったんだけど……」

蓬萊寺。要注意組織の一つであり、国際的犯罪者集団の頂点に君臨する殺人鬼の巣窟。国際的犯罪者集団の中では規模こそ大それてはいないが、げに恐ろしきはその被害規模。

かつて「最悪の蓬萊寺」と呼ばれた蓬萊寺家当主がたった一人で出した被害は、当時

の世界人口の数十パーセントを狩り尽くしたという。もちろんそれは極端な例ではあるが、その時の被害はもはや世界大戦の比ではなく、今や蓬萊寺家は「人類のトラウマ」とも言い換えられている。

だからこそ、まるで「研究所を潰す」ことよりも「被検体の確保」を優先していたかのような彼女の口ぶりに、九衣は違和感を覚えた。

「蓬萊寺は、それを「依頼だから」と言っていて……ボクらを助け、殺人鬼の卵として、育てた……。投薬実験の影響で、薬や毒に……耐性を持つ子が、多かつたのも……気に入られる要因になった……」

「殺人鬼の卵……。じゃあキョウ、お前も——」

「うん。ボクは「蓬萊寺」……蓬萊寺杏樹。それも、当主様の懐刀……。他の蓬萊寺からは……「忠犬」とも、あるいは「狂犬」とも、言われているよ……」

蓬萊寺が彼女を助けた理由が「依頼だから」というのは、おそらく事実なのだろう。むしろ、依頼でもないのに「獲物」になるはずの命を奪わない理由がない。

それが一人や二人なら、その蓬萊寺の気まぐれや、あるいは「抜け鬼」になる日が目前となった蓬萊寺の判断によるものだろうが、彼女曰くその研究所を襲ったのはある程度の人数を含んだ部隊であったという。

だからこそ、九衣の疑問はさらに深まった。「あの」蓬萊寺家が、依頼されて保護した

とはいえ、その被検体たちを依頼人や「そういつた業者」に売りつけることもせず、わざわざ殺人技術を教える手間をかけてまで殺人鬼へと育て上げた理由がわからない。

「ボクの、飼い主……当主様は、聡明なお方なんだ……。ボクが、今こうして、ここに居ることも……わかつていて、これまでは見逃してくれていた……。それはきつと、ボクを泳がせてた方が……当主様の目的を果たすには、都合が良かったからだ……」

「当主の目的？」

「うん……。当主様は、ご兄弟が、いらつしやるんだ……。腹違いの……姉と、兄が……。だけど、そのお二人は随分前から、行方不明で……。そのお二人を見つけるのが、ボクに与えられた……。使命だった……」

「じゃあ、その二人を探すためにお前を泳がせていたのに、それを連れ戻すということは……」

うん、と一息おいて、

「きつと……見つかつたんだと、思う……。当主様の、ご兄弟……姉の美珠様と、兄の夜縄様のお二人が……」

正体—アナザーワン—

翌日の七月七日、第二前線部隊では望月の発案・指揮の下、山のようなデスクワークの内、早急に終わらせなければならぬものだけはどうにか午前中に片付けて、希繫きづなの誕生日&第二子妊娠のお祝いをすることになった。

第二子と言つても、白露しろろは未来——というよりも、もはや並行世界の存在となった逢依の子供であり、第一子でありながら逢依あが腹を痛めて産んだ子供ではない。実際には、彼女のお腹にいる子が「第一子」と呼んで差し支えないため、今後それをどう説明していくかが、希繫と逢依の課題のひとつとなっている。

だが当の白露はというと、両親が思っていたよりもあっけらかんとした様子で、「弟か妹が生まれても、わたしがお父さまとお母さまの子であることさえ変わらないのなら最初とか二番目とかはどちらでも構いませんよ」と言っていたので、子供の肝の据わり方というものは侮れない。

「白露が今1歳で、お腹の子が産まれる頃には12歳になっていて、白露の言っていた『悪夢再び』が起きたのが1年後つてことは……やつぱり、逢依のお腹にいるのは「白露になるはずだった子」つてことか」

「希繫さんって、そういう厄ネタっぽい話をこういうお祝いの雰囲気の中でよくも臆面なく言えますよね。バカなんじゃないですか？」

「辛辣う……」

目がまったく笑っていない笑顔を向けながら抑揚のない声で喋る望月に、思わず喉の奥が「ひゅっ」と鳴った。

確かに祝いの場で言うようなことではないが、それ以上に「逢依のお祝い」の意味が大きいこの場で、逢依に対して隠れモンスターペアレンツ化している望月の前で言うのは不注意だったと言わざるを得ない。

本当ならここに逢依も呼びたいところだと望月は言うが、残念ながら本人は午前中で勤務を終えると、そのまま小転こころの運転する車に乗せられて笹倉家へと報告に行ってしまった。

おかげで望月の機嫌があまりよろしくなく、やや八つ当たりに近いことをされていることに希繫は気づいていない。

「しかし……不思議なものだな」

「どうした諸星、信じられないようなものを見る目でこつち見て……」

「お前、その無欲そうな顔でちゃんとやることやってたんだな」

直後、極太の鎖が諸星を巻き付けて入り口のドアごと吹っ飛ばしていった。

「ぶっ飛ばしますよ諸星くん」

「いや既にぶっ飛ばしてるし本人もう意識ないし……」

「隊長の前で言つてたら体じゃなくて首をぶっ飛ばしてましたよ」

「怖あ……」

ドアを下敷きにしながら横たわる諸星を医務室に連れていくことなく放置しているのは、それだけ彼女の中で今の話題がアウトだったのだろう。

単に他人の——それも逢依の「そういう事情」に触れたくないというのもあるだろうし、逢依が「子供を作る」ということに人一倍気を遣っていたのを知っているからこそ、というのもある。

どちらにしても、諸星の発言は無神経といえれば無神経であったし、何より逢依関連の下ネタという、誰から見ても明らかかな地雷の上で跳ね回るような行為だったというのは、さすがに苦笑いせざるをえなかった。

「おつ、やってんな。昼間っから仕事サボって祝ってもらうんざ、良いご身分だなあ希繫ア！」

「悠生ゆうき！ いやそれ言つたらお前なんて普段からこっちのオペレーションルームに顔出して——ぐええええ！ 首キマってるキマってる!! タップタップタップ！」

「大郷先輩ストゥップストゥップ！ 大郷先輩の力でチョークスリーパーしたらお兄さん死

んじやいますから！ お祝いの席で死人出さないでください！」

逢依の不在と諸星の沈黙を埋めるように、第二前線部隊のオペレーションルームに入ってきたのは、悠生・優芽・覚悟・総交の四人だった。

彼らは彼らの仕事があるので、おそらく昼休みの時間を利用して来たのだろうが、悠生に限って言えば職務時間中でもちよくちよく顔を出しているので、今回に限ったことではない。

じゃれ合いか、それとも指摘された事実を誤魔化すためか、希繫の首を裸締めにする悠生を、優芽が必死に剥がそうとするも、彼の大木のような剛腕はビクともしないまま希繫を締め上げていき、気絶直前で解放した。

「覚悟、笑つてないで助けてやらなくてよかったのか？」

「総交さんこそ。わたくしはむしろ煽つてさしあげますよ。希繫さんはたまにわたくしが嫉妬するくらい優芽に愛されていますから。あ、もちろん敬愛ですけどね？」

「えっ！ 覚悟さん嫉妬してたんですか!?! そんな……言つてくれれば不安なんて吹っ飛ぶくらい愛してみせますよ。お兄さんに嫉妬してる暇なんてないくらいに、ねっ！」

元「仲間たち」の三人は、今でこそそれぞれ異なる部署で働いていて、総交に至っては同居すら二人と離れているもの、こうして時間が合えば雑談に花を咲かせるくらいには、互いを特別視している。

それは同じ未来から来た「三人ぼっち」の孤独を埋めるためだと総交は皮肉を込めて言うが、優芽と覚悟はそうではないと断言する。

仲間たちとしての三人の絆は、決して生ぬるい慰めや傷の舐め合いなどではない。共に苦しみ、共に歩みながら、「希繫を救う」という目的の為に手を取り合った最高の仲間。それが「仲間たち」なのだ。

賑やかになってきたな、と苦笑いしながらも、その笑みに陰りなどあるはずもなく、祝福と一緒に受け取った期待と希望に責任を持つと、希繫の背に心地のいい重さが宿る。

それは決して、今日初めて背負ったばかりのものではない。白露と出会ったあの日、親として必ず子供を守らなければならぬと自覚した時も、悠生が家を出て家の大黒柱になることを理解した時も、同じようにこの「重さ」は希繫の背に押し掛かった。

最初こそその重さに戸惑いもしたが、今ならその重さとの付き合い方も少しはわかってきた。これからは——子供を守り、家と家族を守り、そして新しい命と愛する女性を守るという「重さ」を背負って、その重さを「強さ」に変えていかなければならない。

だから「Do my best」の精神で、今を——これからの、めいっばい生きていく。

「お兄さん、電話が鳴ってますよ」

「え？ あ、ほんとだ。ありがとう優芽。はい、こちら桐梨希づ——」
『見つけましたよ、お兄様……』

「——えっ？」

咄嗟に通信をオペレーションモニターに接続し、逆探知を開始した希繫の判断は、ほとんど本能に従ったものだった。

根拠などなかったが、声だけでその「異質さ」を感じ取ったのか、そんな彼の表情に、その場にいた全員の表情が引き締まった。

『お兄様が出奔されて早十五年。わたくしが主の座に就いてからは七年が経ちました。お兄様、そしてお姉様とお会いする日を夢見て今日まで過こんじちごして参りました』

「兄だと……？ 俺には妹なんていない。俺の肉親は姉さんだけだ！ 君は……お前は誰だ！」

『これは失礼。申し遅れました、わたくしは蓬萊寺家二十七代目当主にして、二十六代目・浦実うらみとその妾の娘、蓬萊寺撫月ほうらいじなつきと申します。お兄様とお姉様にとつては、腹違いの妹となります。お見知りおきいただきませう、お願い申し上げます』

蓬萊寺家当主。そして希繫の腹違いの妹。そう語る彼女の言葉に、希繫と悠生を除いた全員の表情が凍り付く。

蓬萊寺家当主の血筋。それはあの殺人集団においても特別な存在であり、700年以

上前から連綿と受け継がれてきた殺人鬼のDNAを引き継ぎ、その血を保ち続けるため近親者の間で生まれ続けた「純血の蓬萊寺」の血筋を意味する。

そしてその血を宿す殺人鬼の頂点に座す撫月の兄。それが桐梨希繫だと、彼女は言う。

『混ざりものの血であるわたくしと違い、お兄様とお姉様は父と叔母の間に生まれた正式な蓬萊寺の跡取り。十五年前ともなると、当時のお兄様はまだ七歳だというのに、並み居る蓬萊寺の追走を振り切って逃げ延びたと聞き、さすがお兄様とお姉様だと感心しておりました』

十五年前——希繫が七歳の時と聞き、優芽の脳裏にいつか聞いた彼の生い立ちがよぎる。

それは希繫が七歳の時、小転に手を引かれ「家」を飛び出し、行き倒れた先で婚代に拾われたという話。過去をあまり好んで話さない希繫が、珍しくぼろつと零したそれを、彼女は「劣悪な家庭環境から逃げ出した姉弟」の話だと思っていた。

しかし、オペレーションルーム内に響く彼女の話が本当なら、希繫が「家を飛び出した時期」と、彼女の言う「蓬萊寺の家を出奔した時期」はまったく同じということになる。

それだけではない。撫月と名乗る少女は、自身を「混ざりもの」と称しながら、希繫

と小転を「正式な跡取り」だと言う。

それはつまり、希繫と小転こそが本来の蓬萊寺家当主だと言っているようで、優芽は軋む体を必死に動かして、彼の表情を伺うように視線を向けた。すると――、

「……………」

まるで鮮血のように鮮やかな真紅の瞳が、射殺するような視線で「SOUND ONL Y」を表示するモニターを睨みつけていた。

『——つきましては、お兄様とお姉様には蓬萊寺の家にお戻りいただき、正式に当主の座に就いていただきますよう……』

「ふざけるな」

握り締めた拳から血を滲ませながら、まるで淀んだ井戸の底から響くような声で、撫月の声を遮った。

「人殺しを人殺しと教えてくれない家に、罪を罪と教えてくれない親に、悪を悪と教えてくれない環境に、俺と姉さんがどれほど心を痛めたか……！ 償いきれないほどの数と重さの咎を背負い、それでも必死に償い続けてようやく掴んだ今を手放して、いまさら蓬萊寺になど戻れるものか！」

『もう人を殺めるつもりはないと？ 今までだって、何人もの罪のない人を殺してきたのに？ たとえ何年経っても、いまさら事実を変えられません。ならばいつそ、罪人は

罪人らしく振舞おうとは思わないのですか？」

「思わないな。むしろ消えない罪だからこそ、俺も姉さんも償い続けなきゃいけないんだ。殺した数よりもはるかに多くの人を救うことでしか、その罪は償えない。そのためにレイドリベンジャーズに入ったんだ。お前たちのような……人殺しを人殺しと思わず、罪を罪と思わず、悪を悪と思わないような鬼と戦うために」

『……どうやら平行線のようなですね。残念です。ですが……お兄様が首を縦に振っていただけないのなら、お兄様の子供なら……たとえば「混ざりもの」でも使えないことはありません。悪しからず……』

そう告げると、通信は一方的に切られた。逆探知は成功、その場所は京都府奉皇市の山奥——「蓬萊寺」本家を示していた。

直後、希繫の姿は真紅の稲光となって消えた。

激怒——デイスチャージ——

「雨零くん！ 雨零くん!!」

「げほっ、ごほっ………！ 白露ちゃんを、離してください………」

希繫たちの元に蓬萊寺撫月ほうらいじなつきからの連絡が入るとほぼ同時刻、永岑第一小学校のグラウンドでは、数人の生徒たちが「その人物」に視線を集めていた。

「なんだい？ 君みたいな子供が、この僕に物申すだなんて、随分と勇敢な子じゃないか」

「ここは小学校です。先生もすぐ来ます。人ひとり抱えて逃げ回って、捕まらないはずがない。あなたにとつても、そんなことはやめた方がいいに決まってる」

「いけません雨零くん！ 彼に……この人に常識は通用しません！ 逃げてください！」

かつてよりも長く伸びた金髪と、暗く淀んだ灰色の左腕。白露にとつても無関係ではないその人物は、彼女の知る中で最も危険な集団の一人——蓬萊寺ウィルフ。

蓬萊寺の危険性はもはや語るまでもないが、白露にとつては「既に経験した未来」において、目の前で逢依ははわやを殺し、それを知った父が自分を優芽に預け、世界を見捨ててし

まった「絶望の元凶」だ。

そんな蓬萊寺を前にして、何も知らない雨零ともしぢが、自分のために蓬萊寺に齒向かつている。その行為がどれだけ危険なことなのかもわからないままに。

「教師が来るならむしろ望むところだよ。こんな小娘をたつた一人攫うだけなんて、あまりにもつまらなすぎる。どうせなら美しいアートコレクションをひとつくらい持ち帰りましたか」ところさ」

「先生だけじゃなく、警察だって——」

「警察だろうがレイドリベンジャーズだろうが来るといいよ。僕を止められるなら好きにするといい。ただ、そこらの有象無象が100や200挙って集まったとしても、僕の足元にさえ及ばないけどね」

自意識過剰などではない。狂人的とも思えるほどの、しかし実力を伴った圧倒的な自信。基本的に自分に自信を持ってない雨零だからこそ、ウィルフの自信が虚勢ではないことを逸早く見抜くことができた。できてしまった。

だが、それがわかったところで——この狂人の自信に相応しい実力ぼろりよくがその身に備わっているとして、それがどうして友達を諦めることに繋がろうというのか。

目の前で泣いている友達がいる。狂人の腕に抱えられながら、必死にこちらに手を伸ばしている友達がいる。だったらそんな彼女の思いに応えるのが、友達というものは

ずだ。

「だったら……強引にでも白露ちゃんを返してもらいますっ！」

「ふふん、そうだよ……そういう返事を待っていたんだ」

「ダメ……！ それだけはダメですっ！ お願いだから止まって！ 雨零くんっ!!」

ウィルフは懐から出したワイヤー付きダガーナイフで白露を地面に縛り付けると、雨零はすぐさまウィルフの脇を抜けて白露に駆け寄ろうと走り出した。しかし、当然それはウィルフの膝蹴りが雨零の鳩尾に突き刺さることによって阻まれた。

一瞬、呼吸の止まる感覚に苦しみながら咽ていると、ウィルフの手が彼の足を掴み、力任せに放り投げた。軽く見積もって10メートルは飛ばされただろう。他の生徒たちに呼ばれて駆け付けた数人の教師が雨零を庇い、ウィルフに迫るが、誰の目にも止まらない内に投げられたナイフが、彼に詰め寄ろうとしていた教師の足に突き刺さった。

痛みに躓き呻く教師と、流血に悲鳴を上げる周囲の児童たち。一目散に逃げ出す児童、あるいは倒れ込んだ教師に駆け寄る児童、この混沌とした状況の中、ウィルフはただ不満げに、機械的に手中のナイフを弄んでいた。

「あなたは……っ！ こんな、人を傷付けて……子供たちを怯えさせて、あまつさえ白露ちゃんみたいな子を攫おうとして！ それでも本当に人の心を持った人間なんですか!？」

「人の心？ もちろん持ち合わせているよ。人を傷付けたい、恐怖させたい、絶望させた
い……そういう「悪意」だって、人間の心が生み出すものだろう？ だったら、僕ほど
「出来た人間」もそうそう居ないんじゃないかな？」

「……最低だ」

「お褒めに与り光荣だよ」

教師たちの拘束から抜け出し、ウィルフの向こうの白露へと駆け出していく雨零。同
時に投げつけられたナイフを腕で受け止めて、痛みを耐えながら走る足を動かし続け
る。

これを見て驚いたのはウィルフだった。戦う力を一切持たないただの子供だと思っ
ていた雨零が、本気でないとはいえ常人では見切れないスピードで放ったナイフを受け
止め、ましてその痛みに耐え続けてなお走り続けている。

そのおかげで、反応が僅かに遅れた。雨零は自分の腕に刺さったナイフを抜き、それ
を乱暴にウィルフの足元へと投げつけた。それはナイフの扱いに長けているウィルフ
とは比べるまでもない、ただ「物を投げる」だけのフォームだったが、それだけに「足
を狙われている」ということがウィルフにはすぐにわかった。

故に、片足を上げてかわすことを強要され、バランスが悪くなったところを、その脇
を通り抜けざまに蹴り飛ばされたことで、ウィルフはその場に倒れ込んだ。

「白露ちゃんっ！」

「雨零くん！ こんな無茶を……！ わたしのことは構いませんから早く逃げてくださーい！」

「逃げられるわけないだろ！ 白露ちゃんを……一番の友達を置いて逃げ出したりしたら、僕はもう一生自分を信じられなくなる！ どんなに危険な時だって、君だけは……君だけを守りたい!!」

背後で立ち上がるとうするウィルフの物音を聞きながら、雨零はワイヤー付きナイフを地面から抜き、白露を拘束から解放する。

そして、その場から逃げようと駆け出した、その瞬間――。

「僕の悪い癖だ。格下を格下だと嘲って足を掬われる。女も子供も老人も、雑魚もゴミクズも区別なく、みんな平等に殺さないといけないよね」

逃げる雨零の背中を、ウィルフの左腕から伸びた骨剣が切り裂いた。

「――にげ、て……しろう、ちゃん……」

「雨零くんっ！」

倒れ伏し目を閉ざした雨零に、白露は必死に声をかけ続けるが、彼の言葉が返つてくることはない。

集まった教師たちが全員でウィルフに向かっていくが、彼はそれらを全て腕の骨剣の

みで軽々と受け流し、両手の指先から爪の弾丸を発射して全員を行動不能に陥らせ、そんな中から一人、容姿に優れた教師を見つけると、その教師を担ぎ上げ、白露の前へと再び現れた。

「アートの素材も蒐集できた。あとは君さえ連れ帰れば僕の仕事は終わり。この女をアートに仕上げるためにも、君には無抵抗のまま来てほしいな」

「わたしの……わたしのせいで、雨零くんが……！ 雨零くん……雨零くんっ！」

「はあ……。こんな容姿も力も平凡な子供の何がいいのかわからないけど、この子供はまだ生きていますよ。すぐに病院に行けば、運がよければ助かるかもしれないね。けれど、君が僕に従わないというのなら、ここでこの少年を殺しても構わないんだけど？」

白露は、すぐにでも言い返したかった。雨零は確かに見た目も平凡で、力に関しては平凡どころか非力だが、少なくともウィルフのような人でなしと比べれば、何倍も何百倍も魅力的な男の子だ。

それでも、彼女はそれを口にすることはできなかった。ウィルフの機嫌を損ねて雨零を殺されるわけにはいかないし、できればすぐにでもこの場を離れて雨零の安全を確保したかった。

大切な親友を貶されたことへの怒りを必死に堪えながら、白露はウィルフに従い、彼の手を取——、

『クリムゾンインパクト』

天に響く無機質な声が耳に届くと、真紅の閃光がウィルフの体を貫いた。

「……すまない白露。お前の友達を守れなかった」

「いえ……いいえ！ お父さまが来てくださったなら、自衛しながら雨零くんを助けられます！ シンクロナイザー！」

『了解。ユナイトギア第四六六号・シンクロナイザー、桐梨白露に同調接続します』

白露の懐に仕舞われたギアが白銀の輝きを放つと、その光は彼女の全身を覆い、白銀のマフラーを纏った彼女が光の中から姿を現した。

そして装着と同時に、シンクロナイザーの特性である『精神同調』により、その肉体を感情エネルギーに変換し、エクレールへと装身することで希繫^{きづな}へシンクロナイザーを装着させることに成功する。

「げほっげほっ、ふう……。やれやれ、前回とは打って変わって強烈な挨拶じゃないか」
「お前の相手をしている暇はない。暴力でしか物事を解決できないサルはさっさとサル山に帰って寝てろ」

「ふうん、そのサルに六人がかりで仕掛けておいて仕留めきれなかったサル未満はそっ

ちだろう?」

希繫の感情と直結しているエクレールに接続している白露には、この時の希繫の異常がすぐに感じ取れた。レイドリベンジャーズとしての希繫の強みのひとつは、その膨大な感情エネルギーの量。自分の気持ちを抑え込まない希繫だからこそ、彼と同化している白露とシンクロナイザーは、その溢れかえるほどの感情を制御していた。

しかし、今の希繫にはその膨大な感情が一切感じ取れない。——いや、より正確に表現するならば、普段は荒れる海のように感情の波が暴れ続けている希繫の心が、今は感情という海こそ膨大であるものの、波が一切ない、完全に凪いだ状態になってしまっている。

「エクレール。ヴォイドに連絡して怪我人を回収しろ」

『了解』

「……前と違って殺気がただ漏れだね。最初こそ完全に不意を衝かれたけれど、さすがにこうして対峙した以上、それだけ殺意を剥き出しにしていたら僕に攻撃は通らないよ」

「だったら防いでみる。その防御の上からブチ貫いてやる」

その冷淡にして冷徹な言葉の裏に隠された、冷酷で冷血ともいえるほどに冷静な態度が、自分の知る父のそれとはとても思えず、白露は僅かながら自らの親へ初めて「恐怖」

した。

「エクレール」

『了解。肉体を雷に変換します』

「以前とユナイトギアの形状が違うみたいだけど……それにいったいどれだけの意味がある——」

全てを言い終えるよりも早く、希繫の体はウィルフを透過してその背後へと移動していた。そして振り向きざまに放ったハイキックが彼の顔面を捉え、そのまま地面へと強烈に叩きつけた。

状況を把握するよりも先に訪れた衝撃。そして把握すると同時に感じ取る痛み。だ
が立ち上がろうにも脳震盪を起こしていて、視点がまったく定まらない。希繫はそんな
ウィルフのふらつく足にローキックを打ち込むと、彼の左足の骨を押し折り、そのま
ま体勢を崩した顔面に膝を入れる。

そしてその動きの全てに無駄な動作がなく、いつもなら相手に致命傷を与えないた
め攻撃に合わせて叫ぶ彼が、今は恐ろしいほど無言と無表情を保ったまま、作業的にそ
の一連の動作をこなしていた。

「……怪我人は全員回収したか」

『はい。ヴォイドから学校敷地内の児童と教師を全員避難させたと連絡が届きました』

「さすが覚悟さとだ。仕事が早くて助かる」

「この僕を足蹴にした挙句、他所事に気を取られるなんて……随分と馬鹿にされたものだね！」

這い蹲った状態から体を起こすと同時に、ゼロ距離から希繫の心臓部に爪の弾丸を放つウィルフ。しかしそれが発射されると同時に希繫の体が真紅に光ると、爪の弾丸はそのまま希繫の体を通り抜けて、校門の柵へ当たって地に落ちた。

『未登録のスキルです。スキル名を入力後、アクションを行ってください』

「レイジングディスチャージ」

『了解。レイジングディスチャージを登録します。エモーショナルエネルギー、充填チャージ開始』
バカな、と口にした時には既に遅く、希繫の体の輝きが紅さを増していき、6つの分身と共にその両手をウィルフへと襲った。

『充填コンプリート完了。レイジングディスチャージ、いけます』

「……その殺意に満ちた脳みそを焼き切つてやる」

直後、7人の希繫の両手から放たれた高電圧・高電流の雷撃がウィルフの頭部を中心に浴びせられ、ものの数秒の放電で、彼の頭部は真っ黒に焼け爛れ、原型を留めることはおろか思い出すこともできない無残な姿となってその場に崩れ落ちた。

しかし白露にとって、ウィルフの死に様よりも恐ろしかったのは、これほど残忍な殺

し方をしながらも、その心の中はいつそ寒々しいまでに穏やかで透き通っている希繫の方であった。

普段は虫も殺せないような父が、たとえ最悪の殺人集団と呼ばれる蓬萊寺とはいえ、人を殺すということに一切の躊躇がなかった。むしろ、普段よりも格段に手際よく相手を倒し——否、殺したことに、白露の胸がざわつく。

「エクレール。スヴィルカーニイに連絡して死体の回収と事後処理を行うように手配してくれ」

『既に行いました。ディアフレンドがじきに到着しますが、ひとまず自宅に帰るまではシンクロナイザーとの接続を維持します』

「そうだな。下手に解除して援軍が来られても困る。シンクロナイザーも異論ないな？」

『もちろんです。白露様の安全が第一ですから』

普段ならなんということのないこの会話ですら、どこか温度のない機械的な会話に聞こえるのは、白露の気のせいなのだろうか。

疑心暗鬼—パンドラー—

ウィルフの討伐を終え、白露しろろの安全を確保するため装身したままの状態産婦人科に向かった希繫きづなは、逢依あいと小転こころに事情を説明し、逢依を姉弟二人がかりで護衛することに決めた。

白露は今すぐにもレイドリベンジャーズの救護室に向かい、雨零うれいの直接顔を合わせ、安否を確かめたいところだったが、現状で最も蓬萊寺に狙われやすいのが白露と逢依である以上、それを叶えてやることはできない。

しかし、顔を合わせられないとしても、安否の確認だけなら通信でもできる。エクレールがヴォイドと通信を繋ぎ、雨零の様子を聞くと、「まだ意識は戻っていないが、処置が間に合ったおかげで命に別状はない」とのことらしい。

それを聞くと、ようやく安心したのか、希繫の「中」にいる白露の意識が、そこで途絶えた。

雨零の安否を確認すると、すぐに雨零の家に赴き、頭を下げにいくと、父親は不在だったようで、母親に事情の説明と謝罪をした。

桐梨家と蓬萊寺の確執はさすがに明かせなかったが、「白露を誘拐しようとした犯人

を雨零が転ばせて白露を助けたが、その直後に逆上した犯人に切り付けられた」と話せる限りの真実を彼の母親に告げた。

すると母親は驚いたような表情をすると、僅かな間を置いて「あの臆病な雨零が危険を冒してでも守りたいくらい大事な友達ができたんだ。助けてあげられてよかった」と堂々とした笑顔で答えた。

本当なら白露の姿も見てみたかっつたと言っていたが、今は彼女もショックで寝込んでるので、また今度改めて挨拶に伺うという約束を取り付けると、満足そうにしながら家の奥に戻っていった。



家に戻ると、三人はリビングに集まり、今後の身の振る舞いについて話し合うことになった。さすがに、全てがこれまで通りというわけにはいかない。

希繫と小転が蓬萊寺家の本来の当主「蓬萊寺夜縋」と「蓬萊寺美珠」であることは、既にレイドリベンジャーズ永岑支部の全員に伝わってしまっただろう。蓬萊寺はレイドリベンジャーズに限らず、人類共通の敵である以上、今まで味方だった者も対応を変えてくる。

いつそ国外逃亡でもしてしまおうかとも考えたが、レイドリベンジャーズの情報網は世界中に繋がっている。この地球上に、希繫と小転の逃げ延びる先など存在しないに等しいのだ。

だとすれば、選べる道は二つ。蓬萊寺家に戻り、蓬萊寺に守られるか。それとも抜け鬼として『裏切り者』に保護されるか。

前者なら、逢依は希繫の側室として、小転は当主兼希繫の妻として、手厚く迎え入れられるだろうが、殺人鬼としての役目からは逃げられない。後者なら殺人鬼となる必要もなく希繫と逢依は夫婦でいられるが、本来の当主である以上、他の抜け鬼からの視線は厳しいものになるだろう。

うんうんと頭を悩ませながら、ひとまず三人で決めたことといえば、「極力離れて行動しない」の一点に尽きた。

食事はいつも通り全員で。風呂は女性陣全員で入り、就寝は和室で雑魚寝。トイレはさすがにどうしようもないが、誰かが入っている時は希繫と小転が家に近づく気配に注意しておく。

いつレイドリベンジャーズが敵に回るかわからない今、いつでもこの家を抜け出せる準備は整えながらも、子供と妊婦の精神衛生上、環境の変化は最小限に抑えたい。だからこそ、彼らはこの家に来る限り居続ける決意を決めたのだった。

「これからしばらく風呂とトイレ以外は装身しっぱなしの生活か……」

「食事もね。装身しながら食事をとれば二人同時に満腹感と栄養がとれるといっても、やっぱり食事は自分で食べてこそ健全だわ。それに、食事ならお風呂やトイレと違ってみんなでとっているでしょうから、すぐに装身できるでしょう？」

「まあ、それもそうか。確かに効率を重視しすぎてたかもしれない。……ダメだな、蓬莱寺が絡むとどうしても考え方が昔に寄っちゃう……」

昔に、というのは、やはり彼が蓬莱寺であった時のことだろうか。小転もまた、いつもの無表情を歪め、気まずそうに俯いている。

逢依と悠生^{ゆうき}は、この姉弟が本来なら蓬莱寺家当主となる殺人鬼であったことを幼い頃から聞かされていて、今になってそれを驚くことはないが、やはり実際に蓬莱寺と相対すると、彼らが蓬莱寺なのだということを痛感する。

前回のウィルフとの戦いでも、希繫は「仲間を増やして数で攻め込む」という戦略上の最善策をとっていたし、今回のような味方を得られそうにない状況では、最速で相手を殺すことに集中するため、レイジングデイスチャー以外の技を相手の目の前で一切使わなかった。

それはユニイトギアの性質上、攻撃の直前でスキル名を復唱してしまうことと、エモーショナルエナジーの充填に時間が掛かってしまうからだ。

「……よく、ウィルフを一人で倒せたわね」

「エクレールの改造によつて俺の脚力強化の幅が増えたことと、あいつ自身が子供に一本とられて冷静さを欠いてたおかげだろうな」

「雨零くん、だったわよね。相手がどんな人間かわからなかったとはいえ、白露ちゃんのために一生懸命になってくれた子の行動を無謀だなんて言えないわ。白露ちゃんは間違ひなく、雨零くんの愛に助けられたんだもの」

友達を助けたいとする思い。見返りを求めることなく差し伸べられる手。それは間違ひなく、かつて希繫たちが婚代こんざいから与えられた「博愛」の精神。

愛されたいという見返りを求める「恋」ではなく、愛する相手の幸せを願うことこそが「愛」だとする逢依の価値観に基づけば、雨零の行動は一切の曇りのない「真まことの愛」によつて為されたものだ。

そして守りたいと思うもののために奮い立つことが「勇氣」だと、彼らの兄である悠生は過去に零していた。勇氣と無謀は紙一重だとわかっているのなら、それを分けるものはただひとつだと。それは——「自らを守るつもりがあるか否か」である。

力のある者が力のない者を守るために矢面に立つことは「力ある者の義務」であつて「勇氣」ではない。だが力なき者のために自らを傷付け、そして力なき者に罪悪感や責任感を押し付ける行為は「勇氣」ではなく「無謀」なのだ。

その言葉に則るのなら、今回の雨零の行いは「無謀」に近いものだった。だが同時に、そんな無謀な行いを実行しようとする「愛」は間違ひなく彼の精神に宿っていた。

「雨零くんが目覚めたら、白露ちゃんを連れてお見舞いに行きましょう。レイドリベンジャーズも、処置が終われば雨零くんを一般の病院に移すでしょう。それなら、レイドリベンジャーズと鉢合わせする確率はそんなに高くないわ」

「そうだな……。けど、さすがにそうゆつくりもしてはられないさそうだ」

希繫が鋭い目付きで玄関の方を一瞥すると同時に、桐梨家の呼び鈴が家の中に響き渡った。

おそらくはレイドリベンジャーズの誰か、あるいは彼らの通報を受けた警察だろうと思ひ、居留守を使うことも考えたが、この家にはほとんど四六時中、小転が在宅している。この付近の交番の警察官なら、居留守だとすぐにわかつてしまうだろう。

だからこそ逢依を小転に任せて、ギアを解除できない希繫が玄関のカギを開け、そのドアを開いた。

「お兄さんっ!」

「……優芽?」

「心配しましたよ! あの撫月とかいう当主との通信を終えるなり姿を消すし! 直後には蓬萊寺が表れたって通報も来るし! ヴォイドには何百人分の子供と教師のため

に空間を繋げて通信が入るし！ しかも事情聴取しようと思つたら蓬萊寺は死んでる上に現場にお兄さんいないし！ もうどうなつてるんですか！」

虹色の瞳が宿るその目尻から零れる光に、希繫は戸惑いを隠せなかった。

自分が蓬萊寺であることがバレてしまった以上、彼のことを今まで通り真つ当な人間として見てくれる者などいるはずがない。突発的な犯行で裁かれる殺人鬼とは訳が違う。人を殺すために生まれ、人を殺す術を学び、人を殺すことを生業として、人に殺されて生涯を閉じる。それが蓬萊寺当主の血統——『純血の蓬萊寺』なのだ。

彼が蓬萊寺を抜け出したのは七歳の頃。人を殺す術を学び始め、その音も置き去りにする健脚と、蓬萊寺に代々伝わる暗殺術は特に相性がよく、五歳頃から既に実践訓練と称して人を殺していた。周りには殺人鬼しかおらず、希繫——否、蓬萊寺夜縫もまた、それに疑問を抱かなかつた。

だからこそ——夜縫の業を背負う希繫は、今まで殺してきた人よりも多くの人を救うことで、その罪を償い続けてきた。しかしどれだけ償おうと、奪つた命が戻ることはない。故に彼は、自分の正体を家族以外には決して明かそうとしなかつた。

自分の行いが非道なものだとわかつているからこそ、家族以外の人間がそれを許すことはない、許されてはならない。そう思えば思うほどに、彼は蓬萊寺に関することだけは、家族以外の人間を微塵も信用していなかつたのだ。

「お兄さんが蓬萊寺だったこと、びっくりしました。子供の頃に「家」から抜け出したってことしか、聞いたことありませんでしたから。でも……だからといって、あたしの気持ちには、この想いは！ 絶対ゼツタイ変わりません！ あたしにとつて、お兄さんはいつまでもあたしの理想のヒーローです！ ……それだけは、信じてください」

「……けど……」

「「けど」も「だって」もありません！ あたしはお兄さんを……「桐梨希繫」^ヒを信じてます！ お兄さんが「蓬萊寺夜縫」^{わらいひと}になろうとしないなら、あたしはいつだってお兄さんの味方です。だからお願いです、あたしの信じるお兄さんを、信じさせてください」

「優芽の信じる、俺……。——ごめん。それと、ありがとう。今まで黙ってたのは、俺が優芽のことを信じてなかったからだ。優芽はこんなにも俺のことを信じてくれたのに、それをわかってなかった。本当にごめん。でも……本気でそう思ってたからこそ、優芽が直接それを言いに来てくれて助かったし、嬉しかった。本当にありがとう」

まだ、全ての人を信じられるわけではない。今まで信じてた人が、立場が変わり敵になるといふ最悪の想定は、家族を守るために常に考え続けなければならぬ。

だが今までと違うのは、自分たちの正体を知つてなお、信じてくれる仲間がいるとわかつたこと。もしかしたら優芽だけかもしれない。だがそれでも十分だった。家族でもなければ蓬萊寺との関わりも一切ない優芽が信じてくれるなら、いつか味方になって

くれる人がいるかもしれないという希望になる。

その希望を手放さないために——縫い留めるために、絆という糸でそれを繋がなければならぬ。だからこそ、それがわかったからには、希繫がすべきことは「信じる」と。たとえ信じてもらえなくても、いつか信じてもらえるかもしれないという希望を捨てずに信じ続けること。

もちろん「信じる」という行為に力などない。どんなに信じていても力及ばない時だつてある。相手が蓬萊寺ならなおのこと。それでも——誰かが信じてくれるなら「諦めない原動力」にはなるだろう。そして「諦めない」ことに関してだけ言えば、『絆フエミツリの家族』の右に出る者などそうそういない。

「第二前線部隊のみなさんは、お二人のことを本当に心配してる様子だったので、声をかけておいた方がいいと思います。他の部署については……まだ判断できません。ただ、支部長さんの耳には間違いなく入っているでしょうが、静観されていますので、おそろく敵にはならないスタンスだと思えます」

「みんなも……それに支部長まで……。わかった、ひとまず明日、俺だけでレイドリベンジャーズに顔を出すよ。さすがに逢依を連れてはいけなから、姉さんと一緒に留守番をしてもらうけど」

希繫は装身を解かない事情と、蓬萊寺への今後の対応を優芽に伝えると、彼女は「レ

イドリベンジャーズに戻り、希繫の味方になってくれるかもしれない人間に声をかけて
回る」と言つて去つていった。

彼女の信頼に応えるため、そして何よりも自分を信じてくれる人を希繫自身が信じる
ため、今は明日に向けて精神を整えようと、家の奥へと戻つていった。

二刀一スラッシュー

翌日。逢依あひを小転こころに任せ、希繫きづなはレイドリベンジャーズ永岑ながみね支部へと出勤した。誰にも見つからないよう、その体を雷に変えてオペレーションルームの前まで来ると、前日に望月もちづきが破壊したドアは修理済みで、中の様子は伺えなかった。

中に入れば、そこにいるのは昨日までは間違いない仲間だった者たちだ。優芽ゆめも、彼らが今もなお自分の仲間だと言っていた。しかし、それがもしも嘘だったら。蓬萊寺ほうらいじである自分を罫に嵌めるための言葉であったなら。そんな疑念が心を惑わす。

(……けど、優芽は俺を信じると言った。桐梨希繫を……俺らしい俺を信じると言ってくれた。彼女のあの言葉が嘘だなんて俺には思えない。俺自身を信じる必要なんてない……。俺を信じてくれる、優芽を信じるんだ！)

真紅に染まった瞳と毛先が、揺らぎながらも昂る感情を表すかのように発光する。不安、疑念、恐怖……負の感情が押し寄せてくるのがわかる。だがそれ以上に、それを払いのけようとする「信頼」が、彼の感情を眩しいほどに輝かせていく。

深呼吸をして、後退りしてしまいそうな足を一步前に出すと、オペレーションルームのドアが開いた。

「あつ、おはようございませう！」

「おはよう」

「……おはよう、ございませう」

「……おはよう……」

中に入ると、彼らはいつも通りの様子で希繫を迎えた。望月も、諸星も、天宮も空宮も、誰一人として演技ではなく、虚勢でもなく、それが当たり前であるかのように。

ただ、普段と違つたのは、いつものメンバーに加えて2人、見覚えのないメンバーが第二前線部隊のオペレーションルームに居たことだ。

「お、おはよう……。えつと、そつちの二人は？」

「あつ、申し遅れました！ ウチは古谷早智ふるやさち！ 今日付けでレイドリベンジャーズ永岑支部・第二前線部隊に配属されました！ 以後よろしくお願いします！」

「同じく土中美蓮つちなかみれん。名前と顔のせいで女だと間違われるが、こんなナリでも男だ。間違えないでくれ」

希繫の前に整列する二人の男女。黄色の髪を一つ結びにした女性と、藤色の義手を左腕につけた中性的な顔つきの男性。それぞれ自らの名前を名乗り、希繫へと敬礼を向けた。

そして本来なら逢依が着くデスクには、本来の量よりも遥かに少ない書類が置かれて

いて、その分を押し付けたかのように、希繫のデスクにはプリントが山積みになっている。おそらくは、昨日の分も含めて。

「古谷と土中だな。俺は桐梨希繫。他の奴らとは挨拶を済ませたみたいだな。隊長の香坂逢依は現在、産休で不在だが……代理の隊長に関しては、近々通達が来るだろう。それまでは、わからないことがあれば教育係を任されている俺に聞いてくれ」

「あつ！ じゃあさつそく聞きたいことがあるんですけど、いいですか!？」

「なんだ?」

「こちらに着任してから、色んな人が桐梨さんのことを蓬莱寺だつて言つてたんですけど、本当なんですか?」

早智の問いに、その場の空気が凍り付いた。普段は空気を読まないことに定評のある望月でさえ、この時ばかりはお菓子に伸ばした手が止まった。

しかし、希繫は少し戸惑うようにしながらも、ひと呼吸おいてそれに答えた。

「本当だ。本来なら、蓬莱寺家の当主となるはずだった」

「あつ、ホントなんですか? ただの噂とか出まかせとかじゃなく? へえ……。でもあんまり怖そうな感じしませんね。よかったあー」

「ふん、そんな間抜け面の蓬莱寺が居てたまるか。当主なんて言つても、きつと落ちこぼれだったんだろ。……人を殺せるような面構えじゃない」

事実を認める希繫の言葉に対して、二人は驚く様子もなくそれを受け入れた。罵倒もなければ軽蔑もなく、ただ「そう」なのだということだけを認めて、デスクへと戻った。

ふわふわと掴みどころのない早智だけでなく、粗暴な言葉遣いで荒んだ雰囲気の中
でさえ、彼に対して厳しい言葉を突き付けることはしなかった。それはつまり——彼が
「蓬莱寺」だと知ってなお、彼自身を見てくれる人間がいることの証明でもあった。

潤む瞳を隠して、希繫は「じゃあ仕事の詳細はやりながら覚えようか」と言つて、二
人をデスクへと戻した。

「ちよつとヒヤつとしましたけど、でも……これでわかつてくれましたよね?」

「望月か。ああ、つくづく俺は蓬莱寺だったんだなって思い知らされたよ。こんなにも
俺のことを信じてくれる人がいたのに、俺はそんな奴らを疑つてたなんて……。自分
呆れてものも言えない」

「じゃあ、そんな希繫さんの中の蓬莱寺とオサラバするためにも、もつともつとメアたち
に頼つてください!」　メアも、次の試験で正規ELBシステムの免許を取りますから
!」

望月の励ましを受けて、デスクへと着いた——そんな時だった。

「永岑市内において、レイダー由来のものと思わしき複数の感情エネルギー反応を確認
!」

「昨日の事件の影響で小学校の児童たちに不安が募ったせいか……！ ポイントを割り出せ！」

「永岑市A—02ポイント！ 永岑第一小学校からおよそ1キロメートル！ 数……おおよそ20！」

「近すぎて出動が間に合わない……。仕方ない、俺が先行する！ 望月は古谷・土中と共に出勤し、俺に合流しろ！ 諸星は超長距離から支援射撃！ 潜伏型に備えろ！ 天宮・空宮は古谷と土中のサポートだ！ 市民および児童には指一本触れさせるな！」

了解、という返事を聞くと同時に、希繫の体が真紅の雷光となつて姿を消した。

目標地点であるA—02ポイントは永岑支部のあるA—01ポイントに隣接している地区。おそらく姿を消すとほぼ同時に希繫はあちらに到着しているだろう。

「桐梨希繫およびエクレールルミエールとシンクロナイザー現着！」

「来て早々に悪いけど、さっそくひと働きしてもらおうよ二人とも！ ガレージに向かつて全速力でダッシュ！ 息切れくらいで子供たちを守るなら安いもんでしょ！」

「はい！ ……つて、美蓮くん大丈夫？ めっちゃ息切らしてるけど……」

「こ、こっちは……はあ、現代人らしく運動不足で……ぜえ、体力がねえんだよ……！」

ガレージへ直通するエレベーターに入るなりゼエゼエと息を切らす土中の様子を氣遣う早智だが、オペレーションルームからこのエレベーターまでの距離は40メートル

と少し。成人男性が全力ダッシュすれば5秒〜6秒走れば到着できる距離だ。

本人によれば左腕を失くしてしばらく病院暮らしだったせいだと言うが、実際のところ左腕の怪我で入院した期間はそう長くはない。単純に彼自身の体力不足による問題だ。

「着いた！ 二人とも自分のマシンは既に試運転済みだよな？」

「はい！ ちゃんと訓練も受けました！」

「同じく。教習所で乗ったマシンとは全然パワーが違ったがな」

「なら大丈夫だね！ じゃあオペレーターの方のナビゲートに従って希繫さんのところまで行くよ！ レイダー戦ならそこらの人より強いけど、一人で出来ることには限界があるもん！ そのせいで街の人たちや小学校の子たちに被害が出たら悔やみきれないし！」

望月の言葉に従い、諸星が先んじて別ルートで移動を開始。直後に望月たち全員も最短ルートで希繫の元へと向かった。



「白露！ 装身状態でのギア運用は俺たち二人の息が合っていないと出力が一気に低減する！ 気を抜かず、俺の動きに合わせて感情エネルギーの制御をしてくれ！」

『お任せください！ 学校のお友達を……わたしと雨零くんの帰る場所を、レイダーなどに壊させはしません！』

レイダーの総数は肉眼で確認できる限りで22頭。エクレールを通して映像をオペレーションルームに中継しながら具体的な戦力を割り出させた結果、四足歩行型8頭、二足歩行型5頭、球体型2頭、飛行型5頭、蛞蝓型2頭。いずれも中型・小型のもののだけで大型がないことは幸いと言えよう。

希繫は爪先で地面を叩くと、雷光を放ちながら敵中央へと突貫。四足歩行型1頭を飛び蹴りのみで撃破。とはいっても、ただの飛び蹴りというわけでもなく、エクレールに注がれたエモーションナルエンジンを存分に叩き込んだ一撃だが。

「エクレール！」

『了解。ライキリ 雷切を展開します』

「シンクロナイザー！ アームズを！」

『了解。みたましずめのくるり 御霊鎮之紅瑠璃を展開します』

希繫の両手に現れる二振りの短刀、雷切と御霊鎮之紅瑠璃を構え、迫る飛行型2頭の翼部を斬り裂き、その落下速度を電撃をブースターにして加速させつつ蛞蝓型に踵を叩きつける。

ぐにやり、と潰れた蛞蝓型だが、さすがに軟体ということもあり打撃によるダメージ

は軽減されてしまい、スキルを使用していないこともあつて一撃で沈めるには至らなかった。

希繫は咄嗟に二刀を逆手に持ち替え、レイダーに乗ったままその背中にそれらを滅多刺しにし、ようやく撃破。背後から迫る飛行型を即座にかわしつつ、再び順手へと持ち替えると、雷切を飛行型へ投げつけてこれを撃破し、その衝撃で吹き飛ばされた雷切をキャッチする。

「これで4頭……まだあと18頭か。エクレーール！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

「シンクロナイザー！ サンダーブレイドEXスタイル！」

『了解。サンダーブレイド・エクスターミネーションスタイルを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

希繫の持ち得るスキルの中で最大の威力を誇る直線攻撃と、逢依がシンクロナイザーを使用していた時代に使っていた広域殲滅用スキルの同時発動。エクレーールのスパークステインガーだけでは速射性はともかくとして攻撃範囲と連射力に関しては満足とは言えない。

その点、同じく電撃の短剣を弾数に制限なく斉射できるサンダーブレイド・EXスタイルなら、こういうごちゃごちゃした戦線においては役に立つ。

「人型はやつぱり全体の動きが機敏だな……！　けど、俺の蹴りを避けられるほどじゃないッ！」

二足歩行型の頭部を狙った右のハイキック。しかしそれをレイダーは屈んで躲した——かのように思えた直後、今度はその右足を軸に左の回し蹴りがレイダーに直撃。そして吹き飛ばされた先でもう1頭の二足歩行型が巻き込まれながら倒れ込み、その2頭をまとめて踵落としで仕留めた。

『だから、ヒールのブレードをそう簡単にペキペキ折らないでくださいといつも言っているのではないですか』

「文句なら後でいくらでも聞いてやる！　今はチャージに集中してくれ！」

エクレールの不満な意見を聞き流しつつ、戦線を逸れて小学校への進攻を優先しようとした飛行型レイダーを、雷撃体化することで追いつき、その背中に二刀を突き刺して地面へと撃墜する。

最初の4頭と先程の人型も合わせ、ようやく6頭を撃破。だがいくら撃破に成功しても、単騎で戦っている以上はやはりジリジリと戦線が後退しつつある。多勢に無勢、というほどの戦力差でないことだけが救いか。

それでも、このまま戦線が下がり続けていけば、相手戦力を殲滅する前に全てとはい

かないまでもいくらかのレイダーはこのラインを突破して小学校へと襲い掛かるだろう。児童たちの「不安」を食らい尽くすために。

「エクレーール！ シンクロナイザー！ 急いでくれ！」

『お待たせしました。充填完了。クリムゾンインパクト、いけます』

『同じく充填完了。サンダーブレイド・エクスターミネイションスタイル、いけます』

「サンダーブレイド斉射！ エクレーール！ 一気にレイダーをブチ貫くぞ！」

上空に現れた無数の電撃の刃が豪雨のように降り注ぎ、その場に居たレイダー群全体に一斉攻撃。そして撃ち洩らしたいくつかのレイダーを、まるで雨粒の隙間を縫うような正確さで貫いていく一筋の真紅い閃光。

サンダーブレイドの広域攻撃が止むと同時に、戦場を曇らせていた土埃が一陣の風によつて吹き飛び、雷光を纏った希繫の姿が現れる。

「……撃破数は？」

『確認した限りでは21……飛行型1頭が残っています』

「——いや、終わりだ」

小学校へと接近しようとする飛行型レイダーを紐状の何か貫き、そのまま地面へと叩きつけた。レイダーを貫いた「何か」の根本を辿れば、やはりそれは望月のチェーン型簡易ELBシステムであった。

ノロジ―で作ってんのかさっぱりわかんねえ……」

役割—ロール—

「こつちのスペックの詳細？」

「ああ。今のところ、ほとんどそういう資料をもらってないからな。今後、作戦上の連携を取るにあたって、装着者とギアの力量およびスペックは把握しておきたい。さつき古谷にも頼んだところだ」

「あー……わかった。午後までにまとめしておく。ギアのスペックについては基本的な操作性と特性の性質について書けば十分か？」

「そうだな……できればお前の運動神経の悪さを具体的に書いておいてくれ。どのくらいで息切れするのかとか、体はどのくらい固いかとか。そこらも鑑みて基本戦術を立てよう」

レイダーの討伐後、情報統制部と総務部のメンバーに後処理を任せて、希繫きづなたちは永岑支部に戻りデスクワークへと移行した。

第二前線部隊に新メンバーが追加されたことと、逢依が抜けていることも含めて、これまでとは異なる連携を考えなければならず、その作業は正規ELBシステム装着者として最も前線で活躍した希繫と、現時点で最も古参となる望月が中心となって行われ

た。

こうした作戦や連携の立案に秀でていたのは他ならない逢依あいつだったのだが、こうしてその作業を任されたことで、希繫と望月は彼女の有難みを痛感せざるをえないでいた。連携は、第二前線部隊としてのものだけではない。状況次第ではチームを分断されることもあるし、そもそも希繫の場合は現場へ即到着できる関係上、単独行動せざるをえない場合が多い。

そのスピードに唯一ついていたのが時間を凍結させられる逢依だったのだが、彼女はほとんどバックヤードからの作戦指揮をメインにしていたため、ほとんど非常時でなければ希繫は一人で戦うことを強いられた。

しかし、希繫と逢依の他にも正規ELBシステム装着車が加入となったのは大きい。また、次の試験で望月が合格し、適合できるギアが見つければ、彼女の単体戦力は希繫を軽々と上回ることだろう。

だからこそ、部隊単位での連携や戦術だけでなく、個人個人での繋がりも考えておかななくてはならない。

狙撃隊の諸星はひとまず例外として、天宮と空宮は簡易ELBシステムを持つ以上、正規ELBシステムを持つ者が行動を共にした方がいいだろう。まだどんなユニایتギアが支給されるかわからないが、これまでの慣れを考えても、このポジションは望月

が適任と言えよう。

新人の二人は、このままペアを組ませて連携の練習をさせるのが適任か。早智^{さち}は近・中距離での戦闘を得意としており、土中は遠距離からの支援攻撃を得意としているため、ペアを組ませてもいいが、まずは希繫がサポートしながら連携をとらせるべきだろう。

「しばらくは古谷とのコミュニケーションを密にしてくれ。二人で相談してもできないことやわからないことは俺が相談に乗ろう」

「わかった。……ならさっそくだが、こつちからひとつ質問をいいか？」

「ああ。答えられる範囲でな」

そう言われて、土中は僅かに逡巡した後、希繫の目を真つ直ぐに見て問いかけた。

「ここの体調は産休で不在だと聞いたが、隊長の代理はお前が行うのか？」

「いや、今のところそういう通知は来てないな。というか、先週の内に来るはずだったんだが、来る直前に前の職場での問題が発覚してクビになったんで、今頃は支部長が新しい隊長代理を探してくれているはずだ」

「そうか。……そうなった場合、こつちの教育係はお前ではなくなるのか？」

「それはないな。隊長代理が入ったとして、その人が教育係を務めることはまずないし、この部隊に一番長く所属してる望月は人にものを教えるのが得意じゃないから、俺しか

教えられる奴がない」

天宮・空宮の両名は戦闘経験が豊富でサポート向きのスタイルではあるが、口下手で意思表示が得意ではないので新人教育には向かず、諸星に至っては口が悪く他人を威圧する悪癖があるので、とてもではないが新人の相手をさせるわけにはいかない。

レイドリベンジャーズに入ってからこの第二前線部隊に配属されるまでの間に、日本本部で基本的な研修は済ませているだろうが、部隊によつて戦闘に限らず任務に当たるスタンスは異なるものだ。

そのため、基本的に部隊の実質的な権限は年功序列。現在で言えば、望月が最もその権限を持つのだが、彼女は基本的にマイペースで、そうした責任感のある役割を嫌う傾向にあり、必然的に次点の希繫がその役割を担っている形だ。

「そうか。ならこつちからの質問はそれだけだ。資料は今日中に用意しておく」「わかった。……つて、おい望月！ お菓子の袋をデスクの上に放置するな！」

土中への説明を終え、ちらりと視線を移してみれば、少し目を離れた隙にデスクをお菓子の食べこぼしと包装で散らかしている望月を見つけて、希繫はその場を後にした。

それと同時に、休憩室の自販機から飲み物を買って戻ってきた早智が土中の隣のデスクに座り、2つ持った缶コーヒ^{みれん}ーの片方を土中に渡した。

「お疲れさま。美蓮くんも桐梨さんから資料作成のお話された？」

「今しがたされたところ。テンプレートみたいなのが楽なんだが……まあそこまで甘えてられないか」

「そうだねえ。でもウチらに合わせて連携を組み直してくれるんだから、いい職場だね。普通は部隊の連携に合わせるものだって聞くし」

チームの連携というものは、それが「チームに合わせたもの」であれ「個人に合わせたもの」であれ、それなりの時間と労力を要する。

しかし、時間と労力の度合いと、その見返りに対するコストパフォーマンスで言えば、基本的に前者の方が優秀だろう。逆に時間と労力をある程度まで受け入れた場合、見返りが大きいのはやはり後者だ。

個人の得意・不得意だけでなく、各々のクセやスタイルに合わせて補い合える連携は、チームのために無理をして合わせにいった連携よりも遥かに自然体なままで動くことができるだけではなく、無理をせず自分の役割を果たせるため安定性と安全性に優れる。

まして、この第二前線部隊ではそのチーム単位を「部隊全体」「三人組」「二人組」に分けて、最も相性のいい組み合わせを希繫と望月が考えており、それは単純なスペックだけに頼ったものでなく、お互いの性格や言動にも合わせられている。

「桐梨さんと望月さんが新人のウチらのために頭捻ってくれてるんだから、ウチらだつ

て頑張らないと、だよっ！」

「わかつてる。こつちも中途半端な仕事をする気はない。この左腕の恩もあるしな」

そう言われて早智が彼の左腕に視線を落とすと、そこにあるのは温度のないテクニカルエイド型ユニイトギア「ワイズマン」が放つ藤色の輝きだった。

このユニイトギアを作ったのは、日本が誇る天才技術者——「自称」とは言われるが、それを誰一人として否定できない「天つつつオメカニック」の仲嶋菜咲その人である。

「この腕を作ってくれた仲嶋博士は桐梨夫婦とプライベートでも親密な仲だと聞いてるし、何よりここを紹介してくれたのも仲嶋博士だ。恩人と親しい相手に誠意を欠くほどこつちも頭が悪いワケじゃねえ」

「へー……。ん？　でもワイズマンが発表されたの2か月前だよ？　えっ、まさかこの2か月弱でレイドリベンジャーズの試験受けて研修受けて前線部隊に配属されたの!?」

「そうだが……お前もそうじゃないのか？」

「そんなわけないでしょ！　レイドリベンジャーズの試験つてめっちゃくちゃ難しいんだよ!!　普通の知識問題だけならいいけど矛盾問題とかで両方「正解」すると他の問題が全部よくて即落とされるし、何よりその体力でよく実技試験は……そっか実技はテクニカルエイド型のみユニイトギアありだから黄金鍊成でクリアしたんだ……!!」

矛盾問題というのは、レイドリベンジャーズの筆記試験でしばしば使用される問題のひとつであり、「本来の正解」の後、それと同様の条件でありながら前の問いに矛盾する問題に対しても「正解」をすると、将来的に不正を行う可能性があるとして強制失格となる。

これは入団試験だけでなく、レイドリベンジャーズでは定期研修でも行われており、毎年一定数のレイドリベンジャーズがこの矛盾問題に引っかかって退団となっているという。

「ウチだつて入団できてる以上はそれなりに頭の方も自信あるけどさ、それでもやつぱり筆記試験は一回落ちたよ。そりゃ全然いらないわけじゃないけど、だとしても一発合格なんて一部では都市伝説扱いされてるくらいなんだよ!？」

「そうなのか……。でもまあ、こっちはワイズマンをもらうまで義手なしの生活だったしな。運動もできないきや娯楽も限られてたし、勉強も嫌いつてワケじゃねえからレイドリベンジャーズに入るつて決めてからは風呂とトイレとメシと就寝時間の他は勉強だけに費やしてたからな」

「うわつ、見た目と言動に180。反してめっちゃ勉強家じゃん……。えらいね……。」「偉いね」つて言いながらドン引きするのやめろ」

闇討—ナイトレイド—

レイドリベンジャーズでの初出勤を終えた早智が帰宅すると、珍しく杏樹が駆け足で二階から降りて彼女を出迎えた。

先日のウィルフ襲撃以降、早智と九衣くいに対してやや過剰なほど心配性になっている杏樹を抱き留めながら、早智は彼女の手を引いて二階へと上がる。

「大丈夫だって！ レイドリベンジャーズの先輩が、昨日あの蓬萊寺をやっつけたらしらー！」

「やっつけた……って、ウィルフを……？ 嘘だよ……そんなの、できっこない……！」

いくらレイドリベンジャーズが……ユナイトギアを、持っているとはいえ……蓬萊寺に……それも、あのウィルフに敵う人なんて……。……いや、まさか……！」

「……あれ？ もしかしてウチ、コンプライアンス的に一番言ったらマズい相手に一番言ったらマズいこと言ったのでは……？」

「……美珠様と、夜縄様よすがが……レイドリベンジャーズに……？ いや、でもウィルフの口ぶりからして……それは既に、当主様に伝わってるはず……。なら……ボクがすべき行動は……ボクの、使命は……」

杏樹の使命は、美珠と夜縫——すなわち小転こころと希繫きづなを見つけ出すこと。そして、その二人を蓬莱寺に連れ戻すこと。

しかし、その二人が——あるいは片方がレイドリベンジャーズで働いているとしたら、そして早智の言葉からして、それなりに彼女に近い存在であるとしたら。

今の自分——「四条杏樹」としては、早智を悲しませるようなことはしたくない。だが「蓬莱寺杏樹」としては、その使命を全うしなければならぬ。

「待ってアンジュ。もしもアンジュが先輩を蓬莱寺に連れていく気なら、ウチはアンジュと戦わなきゃいけない。でも、ウチはそんなことしたくない。大好きなアンジュと敵対なんてしたくない。お願いアンジュ。ウチと……ウチたちと一緒に居てよ。蓬莱寺なんかには、戻らないですよ……！」

「早智……ボクのこと、どうして……！」

「ごめん……実はアンジュがくくちやんと話してる時、ウチも本当は起きてたんだ。でも、話に混ざれる雰囲気じゃなくて、寝たフリして……。それで、アンジュのことも、全部知っちゃった……」

「そんな……。早智にだけは……知られなくなかった……。早智は、ボクに優しいから……きつとボクのことを嫌えない。早智自身の気持ち……二の次にしてでも……ボクを庇おうと、守ろうとする……。でも、早智の気持ちは……早智のものだ……。ボク

の存在が、早智の気持ちを踏みにじるのだけは……嫌だったのに……！」

事実として、早智は「蓬萊寺は敵だ」という認識をかなぐり捨てて、杏樹を受け入れようとしている。それは彼女の優しきであり、杏樹への友情の証明でもあるのだが、そのために自分の中の常識や感情を二の次にしているとも言える。

蓬萊寺が憎いという感情は、今や人類全体の共通認識だ。日本に限らず、世界中を震撼させた120年前の惨劇。たった一人の蓬萊寺によつて、世界人口が劇的に減少したあの事件を境に、蓬萊寺はその知名度と脅威性を全人類に轟かせた。

だからこそ、杏樹の知る人物の中で「最もまともな倫理観」を持つ早智が、蓬萊寺家への憎悪や恐怖を持っていないはずがない。そして、その憎悪と恐怖を、「友達だから」という理由で自分が塗り替えてしまうことを、杏樹は何よりも恐れていた。

杏樹が早智にとつて脅威でないのは、極めて特異な状況だ。自分が大丈夫だったからと、「蓬萊寺の中にも話せば友達になれる相手がいる」と早智が勘違いしないように、蓬萊寺は「間違いなく殺人集団であり人類の敵」であることを否定させないように、杏樹は自らの正体を隠してきたのに——その嘘が、瓦解する。

「早智……ボクのことを、軽蔑してくれてもいい……。だけど……ううん、だから忘れないで……蓬萊寺は、殺人集団なんだ……。ボクは、たまたま命令がなければ……動く気がない、殺人鬼だっただけで……。他の蓬萊寺は、本当にただ気まぐれに、思いついたよ

うに人を殺す……。話が通じる相手じゃない……。憎むべき、相手なんだ……。！」

「……アンジユは何か勘違いしてるよ。ウチは別に、アンジユが一般人だろうと蓬萊寺だろうと変わらないよ。蓬萊寺が殺人集団だってことも、恐ろしい相手だってことも忘れたわけじゃない。最初は本当にたまたま偶然の出会いだったけど、ウチは——ウチらは、一般人だからでも、蓬萊寺だからでもなく、アンジユがアンジユだから友達になつたんだよ。他の蓬萊寺がどんなに温和そうな顔をしていても、ウチは油断も容赦もしない。アンジユを守るために必死になつて、決死になつて、守り抜くつて決めてるんだ」

「……早智……！」

もしもこれが九衣であつたなら、彼女がこんなにも取り乱すことはなかつただろう。杏樹にとつて、九衣も早智も共に大切な友人だが、それぞれに抱く信頼の種類は僅かに異なるからだ。

早智は、杏樹の全てを受け入れてくれる。正しいことをすれば褒めてくれるし、間違つたことをすれば一緒に謝つてくれるし、どう正せばいいかを教えてくれる。そんな包容力のある親愛に甘える子供のようにな、彼女に接している。

しかし九衣は正しいことをしても褒めてはくれない。だが何が正しいことで何が間違つていいのかを必ず教えてくれる。もしも間違えれば声を荒げながら叱ることもある。けれどちゃんと謝れば許してくれるし、自分が何を間違えがちなのかを理解して事

前に防いでくれる。そんな厳しさに甘えている。

杏樹にとつて、自分が「間違っていることをしている」とわかっている時ほど九衣に甘えがちで、自分が「正しいことをしている」とわかっている時ほど早智に甘えがちだ。自分の正しさを褒めて間違いを防いでくれるから。

「ほら、もうすぐくくちゃんも帰ってくるから、一緒に晩御飯の準備をしよう」

「……わかった。ボクたちで、九衣が……びつくりするくらい、美味しいごはん……作るう……！」

「うん。お手伝いお願いね、アンジュー！」



「だいぶ遅くなったな。今日は早智が早く帰れるって言ってたから大丈夫だとは思いますが、最近キヨウの情緒があまり良い雰囲気ではないからな。早めに帰ってやりたかったが——ッ！」

不意に、背筋に薄ら寒いものを感じて、九衣はその場を飛び退いた。直後、二振りのステイレットが直前まで彼が立っていたアスファルトに突き刺さる。

咄嗟に剣が放たれた軌道を遡ると、電柱の上からこちらを見下ろす人物が一人。4

0、あるいは50代ほどに見えるその男の影は、九衣がイーターを展開したのを見ると、その姿を消した。

「……消えた？——ッ！こつちか！」

「……ほう、これを止めるか」

背中を刺すような冷たさを感じて振り向き、その巨大な左手^タを振りぬくと、それを一振りのファルシオンが阻んだ。

「お前……蓬萊寺か！」

「うむ。うちのご当主様の飼い犬が世話になつてると聞いたがゆえ、挨拶に参つた。しかし、こうしてみれば中々に楽しめそうな獲物ではないか。ウィルフめ、すぐに獲物を過小評価する悪癖は死ぬまで治らなんだか。まあよい、そのお陰でワガハイの剣が楽しめるのなら、アヤツの愚かさ^カに礼さえ言おうというものよ」

「……さつきのステイレットといい、このファルシオンといい、剣マニアなら一人でやつてろ。それに、キヨウはもうお前らんとこの犬じゃない！俺の——俺たちの友人で、仲間で、家族なんだ！キヨウを連れていくつもりなら、俺たちがそれを許さない！」

「見事。美しき友情、美しき家族愛。しかし護るものが増えるほどにその両の手では足るまい！げに美しき人の愚かさよ！しかし……故にその美しさ、愚かさ^カをこの剣にて斬つてみたい。ワガハイの剣とオヌシの仁義、どちらが徹すに相応しいか、真つ向か

ら試させていただくこう！」

九衣がイーターで強引にファルシオンを振り払うと、その蓬萊寺は着物特有の長い袖から左手にトレンチナイフ、右手にグラディウスを持ち、九衣へと向き直る。

「名乗ろう。ワガハイは蓬萊寺征十郎。齡九十二の若輩ゆえ、多少の未熟には目を瞑つてもらおう！」

「……どこが若輩だ」

先んじて動いたのは征十郎。縦一閃に振り下ろされたグラディウスをイーターで受け止め、逆手に持ったまま首を刈り取らんとするトレンチナイフを持つ征十郎の右手を掴むと、互いに左脚を上げ、相手の胴体を蹴り飛ばす。

後退しつつも体勢を崩さない征十郎に対し、九衣は転ぶことになかったが片膝を地面につけてしまった。起き上がるまでのこの一瞬を逃すほど、征十郎の剣は甘くはない。

「好機！」

「ナメるな！」

投げられたトレンチナイフを躲しつつ、迫る征十郎の上段一閃を横に転んで避け、前屈みになった胴体に蹴りを入れ、その反動で起き上がり、イーターを振りかぶる。

だが征十郎はそれを避けることなく、むしろ迎え討たんとばかりに接近し、そのグラ

デイウスをイーターに突き付け——グラディウスが砕け散り、その破片が飛び散り、九衣は咄嗟に後退する。

「今ので目を閉じることなく後退できるとは、察しのいい男よ。ますます興味が沸いたぞー！」

「……ダガーか。グラディウスの破片を目潰しにして勝負を決める腹積もりだったらしいな」

「うむ！ しかしオヌシの知人に同じ手を使う者が居るのか、あるいは本能が危機を察したか、どちらにせよ攻めの勢いがあつたあの状況で瞬時に後退を判断できる者はそう多くあるまい！ 誇るがよい。そして、その誇りを抱いてワガハイの剣に錆をつけよ！」

「剣マニアに加えてバトルマニアか。つたく、こういうのはレイドリベンジャーズの仕事じゃないのか？」

なあ？ と虚空に語り掛ける九衣を不審に思ったか、彼を警戒したまま周囲を見渡す征十郎。しかし敵と思わしき気配などどこにもない。——「気配」など、ない。

「——ッ！」

「……………」

「随分と「遅い」到着だったな。「準最速」のレイドリベンジャーズ」

「……通報に感謝する」

征十郎の全身を襲う、身の毛が弥立つほどの殺意と殺気。なのに「気配」はまったく感じない。まるで人間ではないかのように——まるで自然現象が襲ってきたかのように。

「……………」

「そのお顔……………！ よもやこんなところで再会いたすとは。しかしかつての貴方様は幼子であったゆえ、おそらくは覚えておりますまい。……ワレワレの元へとお戻りになる決意はできましたかな？」

「……………そう思うか？」

「否、と申すのなら致し方なし。ワガハイも蓬萊寺の端くれ、貴方様がそう申すのであれば剣士の誇りを捨て人斬りの鬼と成り果ててもお役目を果たさずにはおれませぬ。未熟の剣で失礼を承知の上——そのお命を頂戴いたす！ お覚悟！」

迷走—コンフュージョン—

準最速のレイドリベンジャーズ。その名の本当の意味を知る者はそう多くない。なぜなら、誰もが「準最速」の三文字に視線が向きがちだからだ。彼を表すこの称号において問題なのは、準最速の「レイドリベンジャーズ」だということだ。

桐梨^{きりなしきづな}希繁には、人類を守護する「レイドリベンジャーズ」としての側面と、そうでないもうひとつの側面があることは既に明白だ。そして——問題なのはそのもうひとつの側面、即ち「蓬萊寺^{ほうらいじ}」として戦う場合、彼はもはや「準最速」の枠になど収まらない。「さすがに純血、ワガハイのような成り上がりでは見切ることすらようやくといったところ……！」 天晴でございます！」

「……………」

希繁の全身を迸る感情の昂りが真紅の残光となつて見えているせいで、征十郎^{せいじゅうろう}はようやくその軌道を予測することに成功しているが、それでもその動きは防戦一方。

さつきまで九衣^{くい}が必死になつて抵抗していた相手が、今では抵抗すらままならず防ぎきれなかった攻撃に身を刻まれているところを見るに、やはり「準最速」の名は伊達ではなかつたのかと納得する。

が——彼は知らない。希繫が今出しているスピードは、突風すら遙か後ろへと置き去りにする性質上、彼の師であるリデアですら追いつけない「最速」となっていることを。「だが……ワガハイも蓬萊寺の端くれ！　ただ速いだけであるならば……ッ！」

『第四号ユナイトギア・エクレール・ルミエール、リミットブレイクします。同時に、ユニティバレットに拡張接続します』

リミットブレイクしてより鋭角的なフォルムとなつたグロワール・エクレール・ルミエールに加えて、希繫の頭部に展開される二本の紫色のツノ。

このツノは大気の微細な振動や温度の変化を感じ取り、相手のあらゆる動作を感知・処理・予測することができるセンサーのようなものだが、希繫の生体パルスがそれを素早く伝達するため、彼自身ととても相性がいい。

征十郎の振り抜いたカッタラスの軌道を、まるで舐めてなぞるような視線で追うと、それを後方転回で躲すと同時に征十郎の顎を蹴り上げる。

「ぐうっ……！」

『……デアアマスター』

「……どうした？」

『彼を殺しますか？』

「ああ。悪いが付き合ってくれ」

『どい！どい！』

これまで何度も言ってきた通り、レイドリベンジャーズは人類の味方だが、ユナイトギアは正義の味方だ。

装着者が自分の掲げた「義」に「正しく」在り続けなければ——自分の行いを正しいを信じられなくなれば、ユナイトギアはその力を発揮できなくなる。

そしてだからこそ、今こうして征十郎を討とうとする彼の殺意の中に、紛れもない「桐梨希繫の正義」があるのだと、他でもないユナイトギアが……『エクレール』が証明するのだ。

「……ッ！……また姿を闇に消して……！……ですがその紅に染まる残り火がワガハイの双眸に刻まれる限り、貴方様の尊きお姿が消えることはありません！……故に！……そのお姿を斬り捨てる名誉にこの胸のじゃじゃ馬が躍り昂りまする！……いざ、ご無礼！」

『クリムゾンインパクト』

希繫の攻撃の軌道を見定めた征十郎が最後に振り抜いたのは、蓬萊寺謹製の一振り『せいとう・ひらめきにのたちらず征刀・閃一文字』が誇る一閃。

蓬萊寺謹製の武具は蓬萊寺謹製でしか破壊できずとまで言われる一家相伝の技術であり、いかにユナイトギアといえども蹴りのひとつでは打ち勝つことなど夢のまた夢、エクレールもろとも希繫の足が二枚に下ろされても一切の不思議がない。

しかし——しかしそれでも希繫の蹴りに迷いはなかった。

「エクレール」

『了解。肉体を雷に変換します』

その身を雷いかづちと換えて征十郎の一閃を透り抜けると、彼の体を透過して背後へと回り、その手に展開した雷切を彼の背に突き刺した。

「お見事……！」

『レイジングデイスチャージ』

征十郎の最期の言葉が届くか否かというほどに迷いなく、雷切から高圧電流を流し込んで彼の全身を焼き尽くし、その亡骸を堀へと蹴り飛ばす。

すると、希繫はエクレールを解除し、その首に巻いたシンクロナイザーで口元を隠しながら、九衣へと手を差し伸べた。

「無事だったか？ 怪我は……パツと見た限りなさそうだけど、病院で診てもらわなくて大丈夫か？」

「あ、いや……大丈夫だ。怪我……は、さすがに無傷ってわけでもないが、手当てすればどうにかなる。それと、さっきは厭味を言つて悪かった」

「厭味……？ ……ああ、さっきの「遅かった」ってヤツか。いや、事実だからな。諸事情で出勤が遅れた。本当にすまない」

「……出勤が遅れてこのスピードなのか？」

希繫は苦笑いで頷くと、現在地——いっきつ粹津市のレイドリベンジャーズ支部に状況を連絡、征十郎の死体の処理と、九衣に対する事情聴取、蓬萊寺の姿を見た一般人がいれば、その人物が抱いた恐怖心や不安からレイダーが出現する可能性があるため、それらの確認を申請する。

本来なら永岑市ながみね所属の希繫が粹津市で活動すればそれなりに苦言を呈されるところだが、この愛知県において希繫より素早く現場に出られるレイドリベンジャーズはいない。それは、県内で最も大規模な支部である粹津市においても例外ではなかった。

粹津支部のレイドリベンジャーズが到着するまで希繫が九衣を護衛していると、五分ほどで九衣からの最初の通報で出勤していた粹津支部のレイドリベンジャーズたちが到着し、希繫は現場の情報を引き継ぎ、その場を彼らに任せると、「じゃあな！」と言ってその姿を消した。

「……なあレイドリベンジャーズ、あいつ準最速だよな？」

「ん？ ああ、そうだぞ。少なくとも県内で知らない奴はいないだろうな」

「準最速で、英雄の弟で……「慈愛の」だよな？」

「そうだな。……ああ、なるほど。蓬萊寺と戦ってる時は印象が違ったか？」

「ああ……。まるで、鬼のようだった」

◆ 永岑支部に戻ると、門前で希繫を待つていたのは、意外にも弟妹に対しては放任主義を掲げているはずの悠生^{ゆうき}であった。希繫が視線を合わせると、悠生も彼に並んで歩きながら、まるで何かを確かめるかのように言葉を投げかけた。

「希繫。通報にあつた蓬莱寺はどうした？」

「……悠生か。訊くまでもないだろ」

ややぶつきらぼうな言い方になる希繫に対して、悠生は特に気にするでもなく話を進めた。蓬莱寺が絡んで希繫の機嫌が良かったことなど、これまで一度として無かつたらだ。

ただ、やや不審そうに見つめていたのは、やはり希繫の首に巻かれたシンクロナイザーがあるからか。それが巻かれているということは、彼の感覚や思考は、ほとんどタイムリーに彼の「内側」に宿る白露^{しろろ}にも伝わってしまったている。

彼の蓬莱寺に対する怒り、殺意。それらが「憎悪」とならない限り、エクレールとシンクロナイザーがレイダーギアと化すことはないが、今の彼のメンタルは、その「憎悪」にいつアクセスしてもおかしくない状況だ。

「ま、それもそうか。……こここのところ蓬莱寺の動きが活発化してるな。やっぱ、オマエ

の所在が割れたのが一因か？」

「二因？　むしろそれが全てだろ。俺のせいだ俺の周りの人間……いや、愛知県内の市民すべてが俺を炙り出すための餌として狙われてる」

「違う。が、ヤツらの狙いはそうやってお前の焦燥感を誘うことだろ。このまま被害が広がればお前は元を絶とうと蓬萊寺本家に殴り込みに行こうとする。そこを捕えるのがアイツらの目的だ」

「でも専守防衛のままじゃ被害は広がるばかりだ。どこかで蓬萊寺に決定的な一撃を叩き込まなきゃいけない」

「だとしてもそれは今じゃない、と諫める悠生の言葉は果たして希繫に届いたか。紅く染まった毛先からバチバチと散る電光を見つめて、悠生はこれ以上の言葉は彼の感情を不用意に煽るだけだろうと口を噤んだ。」

「だが同時に、希繫自身も自分の焦りには気づいていた。悠生によって明確に言葉にされたことで、それは確信となった。だが、焦りは自覚するだけでは止められない。今の彼に見えている結論は、その焦りによって生まれた結論しかないからだ。」

「何か他に解決策があるのなら、それを受け入れる準備はできている。だが、その「別の解決策」というものが今のところほとんど浮かんでこない。」

「希繫」

「なんだ？」

「二人で抱え込むな。周りを頼れ。逢依あいつに心配かけたくないならオレでも小転こころでもいい。絆フアミリイの家族に頼るのが嫌なら部隊のヤツらでも、あるいは優芽ゆめでもいい。とにかく一人だけで結論を出すな。一人で出す結論は、一人で出来ることしか見つからない」

「周囲を巻き込めっていうのか」

「そうだ。周囲を巻き込め。自分に関係するヤツらを徹底的に巻き込め。オマエに関わったヤツはオマエがどんな選択をしたところで、ぜってーにどつかで巻き込まれる。そこにオマエの意思なんて関係ない。だから最初から巻き込んでいけ。知らねーとこで巻き込まれるより、最初っから目の届くところにいれば、守れるかもしれねーだろ」

蓬萊寺との問題は、希繫と小転の問題だ。蓬萊寺姉弟として、桐梨姉弟として、他の誰でもない自分たちだけで解決すべき問題だ。そう、心の奥底で覚悟を決めていた。

だが、自分たちが勝手に決めた覚悟のせいで、自分たちに関わる人が自分たちの知らないところで巻き込まれて傷つくのなら――。

「……姉さんに相談してみるよ。俺だけじゃ決められない。それに、たとえ俺と姉さんが力尽きるがあつても、逢依と白露にだけは生きてほしい。だから悠生……もしもの時は、あいつらを守って――」

「ぎげんな。オレはそんなに暇じゃねーんだ。自分の女とガキぐらい自分でどうにかし

ろ。オマエの死ぬ時がアイツらの死ぬ時だと思えば、死んでる暇なんてねーだろ。何なんでも生きて帰ってアイツらを守り抜けば万々歳なんだ、気張れよ」

「頼り甲斐のない兄貴だな。……でも、そう言われたんじや死んでなんかいられないか。家族も守る、自分も死なない。両方やらなくちゃいけないのが大黒柱の辛いところだな」

「父親はみんなやってることだ」

そう、希繫はレイドリベンジャーズである前に、蓬萊寺である以上に、今や所帯を持つ夫であり父なのだ。

だからこそ、家族を守るために手段など選んではいられない。自分が死ねば家族を守ってくれる者など誰もいない。故に——使えるものは全て使わなければならない。

巻き込めるものは全て巻き込んで。巻き込んだ者たちを決して死なせることなく。理想論と言われてもいい、理想的な結末まで持つていくための努力を一つとして怠らずに、最善にして最高の「結論」を見つけるために。

「……まずは、あいつに相談してみるよ。逢依を除けば、たぶん誰よりも俺のことをわかっててくれるはずだから」

蓬萊寺夜縋——アンチノミー——

レイドリベンジャーズおよび警察の事情聴取を終えて、九衣が自宅に戻ったのは深夜、時計の短針が1と2の間を指す頃であった。

自宅の鍵を開けて玄関の扉を開くと、ダイニングの方から震えるような声で九衣の名前を呼んで彼を抱き締めた早智と杏樹を受け止めきれず、そのまま玄関の扉に背中を打ち付けられると、九衣は苦笑いしながら二人を抱き返した。

「悪い、心配させたな」

「ほんとだよ！ 警察からくちちゃんほららいじが蓬萊寺に襲われたって聞いて、ウチら居ても立ってもいられなくて……でも蓬萊寺がうるついでるならアンジユを外に出すわけにも一人にするわけにもいなくて……！」

「よかった……！ 九衣が生きて……ほんとに、本当によかった……！」

早智にとって、九衣は無二の親友だと断言できる。ボランティアという、人の善い心を露わにする活動を通して出会い、彼の善性を無垢に信じて接する内に、ややぶつきらぼうで人嫌いでありつつも他人を気遣える彼に惹かれた。

杏樹にとっても、九衣は大切な友人だと言えるだろう。早智と一緒に自分を拾い、事

情も聞かないまま言葉も少ない自分の世話をし、自らの正体を知ってなお同じように——むしろ、蓬萊寺の危機から匿ってくれる。そんな彼を友として好きにならないはずがなかった。

だからこそ、警察から電話が来た時、二人の心は一瞬にして凍り付いた。杏樹の所在を知る者として蓬萊寺に狙われながら、彼は杏樹を守るために口を割らず応戦したという。それを聞いて、二人は不安と心配で包まれながら、必死に互いの手を握りながら彼の無事を祈り続け、そしてようやく彼がここに帰ってきた。

そうして不安と心配をぶつけると、二人の心に残ったのは、親友と友人に対する友情と同時に、それを超えた感情——同じ家で過ごし、同じ食事を口にし、同じ時間を共にする「家族」への想いだった。それを九衣自身に打ち明けると、彼は「今更だろう」と笑いながら答える。

「もう一年も一緒に暮らしてるんだ。わざわざ確認なんてしなくても、俺たちはもう家族だろう。他の誰がそんな家族の形を否定しようと、俺に悔いなんてない。そうだろう？」

「うん……うんっ！ ウチら三人、世界でいっちなばん幸せな家族になれるよねっ！」
「まったく……ほんとに、狂ってるよ……。ボクみたいな……疫病神を、こんなにあつたかく……受け入れちゃうんだから……。でも……そんな二人だから、蓬萊寺じゃなく

なつてもいいつて……思えちゃうんだ……!」

親しさを超え、友の情を超え、いつの間にか辿り着いていた家族としての繋がり。

クローンベビーである杏樹と、電車事故で兄と両親を喪っている九衣を除くと、三人の中で「家族」というものに真つ当な感情を抱いているのは早智だけだ。しかし逆に、だからこそ「家族」というのに憧れているのは九衣と杏樹の方だったのかもしれない。

幸せな家族を知る早智と、家族という関係そのものに憧れている九衣と杏樹が合わさつて、ようやく彼ら彼女らは「三人組^{フレンズ}」という名の家族となつたのだろう。

「……さてー。じゃあしんみりするのはこのくらいにして、ごはんにしようか!　くくちゃんを待つてたらこんな時間になつちやったし!」

「なんだ、先に食つてもよかつたのに……。じゃあ俺は先に着替えてくるから、ダイニングでもう少しだけ待つててくれるか?」

「もちろん……。さつきまでハラハラしてて……。それどころじゃなかつたし……。ごはんで、おなかいっぱいになって……。安心したい……」

腹が膨れれば安心感も膨れる。レイドリベンジャーズとして、ORBとして、蓬萊寺として。それぞれに過酷な環境と向き合つてきた三人だからこそ痛感する、食事の大切さ。

メンタルが落ち込むほどに疎かになりがちだが、むしろメンタルが落ち込んだ時ほ

ど、美味しい食事がそれを支えてくれるということを知っているからこそ、早智と杏樹は敢えて先に食事をとろうとはしなかった。

食事が最も美味しくなるのは、大切な誰かと一緒に食べた時。だから——二人は九衣が帰ってくると思っていて、今の今まで食事に手を付けず、彼の無事を祈りながら待っていたのだろう。



「——つてことがあつただけど、どう思う?」

『は? この期に及んで、まだ周りを巻き込まないと思つてたんですか? バカなんですか?』

「開口一番ドストレートに辛辣う……」

レイドリベンジャーズとしての業務を終え、駐輪場のXD400Rに跨りながら希繫きづなが連絡を取った相手は、「逢依あゐの次に自分を理解してくれている相手」こといずみゆめ和泉優芽であつた。

悠生ゆうきの助言に対する意見も兼ねて、蓬萊寺という巨悪にどう立ち向かうべきか、自分でもわからない自分のことを問うには、彼女以上の適任者はいないと希繫は思つてい

る。

『大郷先輩の意見は確かに極端な言い方かもしれないかもしれませんが、実際のところ事実です。自分のせいで周囲を巻き込んでいると自覚しているのなら、周囲のことは常に把握しなければなりません。ですが、巻き込まれている自覚のない人間の行動は、こちらでは把握しきれません。だから、大郷先輩の言う通り、周りの人間を巻き込む覚悟は必要です』
「……………」

『確かにお兄さんの脚は、世界のどこにでも0.06秒未満で駆け付けられます。でも、それは自分が自由に動けて、他人がどこで何をしているか把握していればの話です。知らない場所で知らない相手が傷ついていても、お兄さんにはどうすることもできません。そんなこと、フィクションの中のヒーローだって不可能です』

「でも、俺は蓬萊寺としての贖罪を——」

『蓬萊寺として、じゃありません！ お兄さんがすべきことは「蓬萊寺として」の役目とか使命なんかじゃないって言ったじゃないですか！ お兄さんが本当にしなくちゃいけないのは、レイドリベンジャーズとして……「桐梨希繫として」の使命です！ 償うために人を守るんじゃない、夢見る未来に希望を繋ぐために人を守るんです！』

昨日、優芽に励まされたばかりなのに、どうしても言葉にしてもらわないと忘れてしまいそうになる。

世界が希繫のことをどう見ていたとしても、希繫を知る者のほとんどは、彼のことを「蓬萊寺夜縫^{よすが}」などとは思わないはずだと、優芽は言う。

それは決して、彼がそのことをひた隠しにしてきたからではなく——今までの彼の行いのひとつひとつが、彼を「蓬萊寺夜縫」から「桐梨希繫」へと変えていったことを、周りはわかってくれているからだ。

『あたしは！ あたしは……お兄さんのそういう自分を蔑ろにするとところが嫌いです。大嫌いです。もつと周りのみんなを見てください。お兄さんのことを信じて、お兄さんのことを頼ってるみんなを見て、そんな人たちのために「明日」に夢をもってください。今日が嫌な日でも、明日はいい日かもつて。今日がいい日だから明日はもつといい日だつて、そう願ってください』

「……ごめん。一人で突っ走つて、迷走しながら独走してた」

『まったくです。……蓬萊寺の動きは、情報統制部でも本部と連携して調べてはいます。お兄さんの本来の経歴や遺伝子情報・身体構造についても、改めて調べ直しました』

実のところ、希繫の身体能力については、これまでも何度か医者に不思議がられていたことがある。「純血の蓬萊寺」に共通することではあるが、普通の人間と比べて明らかに筋線維の本数が多く、また毒や薬に対する耐性があまりにも高すぎたからだ。

それなのに、彼はそういった潜在的なスペックに反して、レイドリベンジャーズでの

模擬戦闘や、実戦での対人戦闘において、ほとんど結果を出せていない。これまでは、それが彼の優しすぎる性格のせいで全力を出し切れないからだと思われていたが、今回の件で「蓬莱寺」として見直すことで、その理由がわかった。

簡潔に言ってしまうえば、彼は「蓬莱寺としての身体能力」と「レイドリベンジャーズとしての身体能力」を使い分けているのだ。一般人がどれだけ修行や研鑽を重ねたとしても、一定のラインで頭打ちするであろうというギリギリのところ得意図的に「全力」を頭打ちさせていた。

しかし、ウィルフや征十郎を一方的に打ち負かしたことからわかる通り、相手が蓬莱寺であり、「レイドリベンジャーズとしての自分」よりも力の弱い者を守ろうとした時に限り、蓬莱寺としての身体能力をフル活用して戦闘を行う。

それが彼の中での最低限の制約なのだろう。自分が蓬莱寺でなければならぬ時と、自分がレイドリベンジャーズとして最大限やればどうにかなる時を見極めて、その上で「できることならレイドリベンジャーズとして行きたい」と願っていた。

「体のこともバレたんなら、もう言い訳はできないな」

『あの時……』

「……？　なんだ？　どうした、優芽」

『あたしが辿った未来で……レイダーを根絶し、英雄となったお兄さんが人質となって

沢山の仲間たちが殺されたあの日。もしかして、お兄さんはそれでも「蓬莱寺としての力」を使おうとしなかったから、あんな未来になってしまったんでしょか……」

優芽の知る未来では、蓬莱寺に関する事件というのは、今ほど表面化していない道筋を辿り、最終的にはレイドリベンジャーズを討つたのが蓬莱寺でもレイダーでもなく警察や軍隊——そして民意であった。

しかし、レイドリベンジャーズたちが目の前で次々と斃れゆく光景を見てもなお、希繫は蓬莱寺としての力を使おうとはしなかった。むしろ、自分の命を犠牲にすることで他のレイドリベンジャーズたちを守ろうとしていた。

まるで、レイドリベンジャーズとして死ぬことを望んでいたかのように。

「……どうかな。でも、もうバレたんだから、これ以上はわざわざ隠す必要もない。もしそんな未来がきても、その時は蓬莱寺としての力を使ってでもみんなを守り抜く」

『ホント、言葉だけは達者なんですから。でも……だつたらあたしたちも過去に来た甲斐があります。そして、白露しろつゆちゃんの未来ももしかしたらそんな風に変わるかもしれない。そのためにも、白露ちゃんのトラウマ——蓬莱寺だけは絶対に倒しましょう!』

「ああ。ここからはもう使い分ける必要なんてない。レイドリベンジャーズとして蓬莱寺の力を使えばいい。そして……そんな俺を受け入れてくれるみんなを守るためにも、みんなに俺のことを知ってもらおう」

そのせいで離れていく人がいるのなら、その人はきつと希繫に近いところにはいなくなるだろう。それならそれで、蓬萊寺の狙いからも遠ざかる。

だからこそ——希繫は自らの正体を、もつと多くの仲間たちに知ってもらわなければならなくなつた。知つて、巻き込んで、そして——守るために。

「ありがとう、優芽。やっぱりお前は、俺の理解者だ」

『当たり前じゃないですか。何年ヒューロあなたに憧れ続けてると思つてるんですか』

友愛—ユー・アンド・アイ—

所は京都府奉皇市。^{ほうおう}120年前の惨劇を引き起こした歴代最悪の殺人鬼と名高い『蓬塵鬼』^{ほうちんき}が眠るとされる鬼封じの山——靈峰『世扼山』^{よもぎやま}の奥地に、国際的犯罪者集団・第一位『蓬萊寺』^{ほうらいじ}本家は存在する。

そんな蓬萊寺家の広大な敷地にぼつりと存在する離れには、純血の蓬萊寺と直近の家臣だけが入ることを許されており、それ以外の蓬萊寺は入るどころか近付くことさえも許されてはいない。

そして、その離れで何をするでもなく静かに座して目を閉じている少女が一人。その少女の名を——蓬萊寺撫月^{なつき}という。

「お小夜^{さよ}」

「(イ)ちいらん」

撫月^{なつき}が呟くように洩らした声に応じて現れたのは、忍装束に身を包んだ女性。声色からして撫月よりも明らかに年上で、身の丈は男性の平均的なそれに近い。忍装束というのは体だけでなく、顔の大部分や髪までもを隠していて、露出しているのは目の周り足の指先だけだ。

「杏樹きょうきの様子さまようきは？」

「ORBの男とレイドリベンジャーズの女に保護され、かなり絆きずされている様子です。しかし、こちらを裏切ったわけではないようです。ウィルフを迎撃した際も、その男女を守る意図が大きかったように思えます」

「そう。ならばばらくは放つておいてもかまいません。ただし、こちらを裏切るような動きがあれば即座に片付けなさい。今は犬に構かまっているような暇はないですしね。だって——」

「ばあつ、と表情を輝かせて——、」

「母の命を蓬萊寺に握られ、当主としての技術や作法を得るために苦しく辛い修行をす
る日々の中、腹違いといえど同じ修行を経て独り立ちなされたお姉様とお兄様の存在だ
けが私の心の依り代でした！ そのお二人と会えるかもしれないんですもの！ あ
あつ、早く会えないかしら！」

「二人前の鬼であらせられるお二人ゆえ、お嬢様と会えない日々を心苦しくお思いで
しょう」

「そうかしら！ そうかしら！ そうだと嬉しいですよ！ 一つお帰りになられてもいい
ように、厨の者にはしばらく食事しょくじを豪勢ごうせいにするように伝えておいてもらえますか！」

「仰せの通りに。成り上がりの鬼どもにも、祝いの席の準備を手伝わしております」

さすがお小夜ね、と叫ぶかのように称賛する撫月の様子を見ながら、小夜は目元の表情を和らげた。

元々、撫月はこの家で生まれた子ではない。前当主であった父・蓬萊寺浦実うらみとその妾であった母・生月きづきの間に生まれながら、母と共に殺人鬼とは縁もゆかりもない場所で平穩に過ごしていた。

しかし、姉と兄が蓬萊寺家を抜けたことによつて状況は一変した。蓬萊寺には血縁同士の間にも生まれた「純血」と、腕の立つ殺人鬼がスカウトされる「成り上がり」が存在し、蓬萊寺の家督は「純血」のみが継いできたからだ。

純血の蓬萊寺がいなくなれば、蓬萊寺家も崩壊してしまう。だからこそ、蓬萊寺でない母との間に生まれた「混血」とはいえ、半分は間違ひなく「純血」の血が流れているからと、母を質にとられた撫月は当主にならざるをえなくなつたのである。

しかし、その原因となつた姉と兄に対して、撫月が抱いた感情は怒りや憎しみではなく憧憬であつた。

最初こそ恨みもしたが、一人っ子であつた撫月は純粋に「きようだい」というものに憧れてもいたし、何より姉と兄は幼い頃に「蓬萊寺家当主としての修行」と称して毒を盛つた食事をさせられたり、人を殺す技術を学んだりと、自分と同じ苦しみを味わつていたこともあつて、まだ見ぬ姉と兄にシンパシーを感じていた。

そして蓬萊寺としての作法や技術を学び終える頃、彼女の中での姉や兄に対する思慕は行き過ぎたものになり果てていた。言い換えるなら、蓬萊寺としての考え方に染まったと言つてもいい。

姉と兄に会いたい。それだけならシンプルで可愛らしい想いだつたはず。だがいつしかその想いを遂げるための手段は、蓬萊寺に相応しいものになつていた。兄と姉に会いたい。共に言葉を交わし合い、同じ食事をとりたい。そのためにこの家に連れ戻したい。だから——姉と兄が領かざるをえない状況を作ろう。

そうして思い至つた手段が、成り上がりの鬼を用いての逢依・白露の拉致である。姉は兄の傍を離れようとはしないだろうし、兄には守るべき妻と娘がいるらしい。だつたら、その母子ともども蓬萊寺に迎え入れてしまえば、兄が戻つて来てくれる。そうなれば姉もきつと一緒に来るだろう。

それが撫月の「姉兄お迎え計画」の本来の全容であつた。——ここまでは。しかし悲しいかなここは蓬萊寺の本家。周りにいるのは血の気の多い鬼ばかり。当然ながら彼女の命令である「連れてこい」は末端からすれば「亡骸を」連れてこい」となつてしまつていた。

彼女の真意を知るのは彼女自身と、その懐刀である小夜のみであり、悲しくもこの二人は揃つて思い込みが激しい上に口下手であつたのだ。だからこそ誰も訂正ができな

かった。

ゆえに現在進行形で撫月と小夜は姉兄きょうだいを「(無事に)連れてくるだろう」と思っているし、末端の者たちは「(標的を仕留めて)連れてくればいいだろう」と思っているのである。

「お姉様とお兄様をお迎えするためと思えば一刻を過ぎゆく風すらも愛おしい……!」



日を跨ぎ、ウィルフによる小学校襲撃から二日。小学校に蓬萊寺が現れたという報せは、瞬く間に保護者・関係者に伝わった。

蓬萊寺が白露を狙った目的については緘口令が布かれたが、そもそも蓬萊寺家と桐梨家の関連性はレイドリベンジャーズの中でも特に厳しく口外を禁じられた。

「……すう……すう……すう……」

「……雨うれい零れいくん……」

レイドリベンジャーズが所有する病院——雨零に割り当てられた個室の椅子に腰かけると、白露しろろは点滴に繋がれた彼の手を握りながら、静かにその名前を呼んだ。

白露を助けようとして負った雨零の背中への傷は既に塞がれ、輸血も間に合い、後は目を覚ますのを待つばかりと言われたが、未だにその様子は見られないと彼の母親は言う。

医師によれば、傷跡は残るだろうが処置は万全であり、後遺症もないはずだという。だからこそ、彼が目覚めないのは彼自身が蓬萊寺という「恐怖」を目の前にして心の殻に閉じこもっているからだろう、とのことだった。

「お願い……目を覚まして、雨零くん……！ わたしはまだ、雨零くんに「ごめんなさい」も「ありがとう」も言えていません……！ どうか、わたしの口から言わせてください……雨零くんの耳で聞いてください……！」

管の通る雨零の左手に額をつけながら、白露は懺悔するかのように布団の上に顔を伏せた。今ここで彼にこの目から零れているものを見せてしまったら、きつと優しい彼は自分の傷など二の次にして優しい言葉をかけてしまうだろうから。

今したいことは、「ごめんなさい」と「ありがとう」の二つだけ。彼から受け取れるものがあるとすれば、怒りや恨みであつて、決して心配などではないはずなのだ。けれど、きつと彼はその怒りと憎しみを白露には向けない。そもそも、そんな感情すら抱いていないかもしれない。

だからこそ、「心配」だけは受け取れなかった。これ以上、彼から優しさを受け取り続

けてしまったら、自分はもう彼の優しさに甘えずにはいられなくなってしまふ。彼なしでは生きられなくなってしまふ。だからこそ、それだけは受け取れない。

「……しろ、ろ……ちや……」

消え入るような声で聞こえたのは、家族やクラスメートではなく、他でもない自分の名前を呼ぶ雨零の声。

悲鳴にもならないほどに驚きながら、白露は即座にナースコールのボタンを押すと、病室のドアの向こうで警戒・待機していた父きつなを呼び、彼はその場ですぐさま雨零の母に連絡を入れていた。

未だにぼんやりとした目付きで、だけれど彼の視線は間違いなく白露の赤い瞳を見つめていた。

「ぶじ、で……よ、かった……」

「そんな……っ！ わたしのせいで雨零くんはこんな傷を負ったんです！ もつと怒っていいんです！ わたしを嫌いになってもいいんです！ こんな時まで、わたしの心配なんてしないでください……！」

「ぼく、は……おとこのこ、だから……。おんなのこを、ま……。もら、なきや……。だよ……。こわ、かった……。けど……。きみ、が……。きずつ、くほうが……。もつと、こわ、かったんだ……」

「——っ！　ほんとは、今日は「ありがとう」と「ごめんなさい」と……それと「さよなら」を言うつもりだったんです。これ以上わたしと一緒にいたら、また雨零くんが傷つくんじゃないかって。でも、もう無理です。わたしには雨零くんが必要で、もう他の人になんて任せたくありません！　雨零くんが無茶をするのなら、今度はわたしが雨零くんを守ります！　だから……：「傷つけてごめんなさい」！　それと、「守ってくれてありがとう」！　そして「これからもずっと、よろしくね」！」

先導—エデュケーション—

雨零うらいが目を覚まし、いくらか話をするしろろと、白露はそう時間もかからず病室を後にした。雨零の体力がまだあまり戻っていないこともあつて、長話はできないだろうという意味でもあり、できればその体力を母親に使つてやつてほしいという意味でもあつた。

彼に対する引け目は、やはりまだ残つてゐる。彼が何を言つてくれたとしても、白露からすれば彼は自分の命の恩人であると同時に、自分のせいで一生消えない傷を負つた犠牲者でもあるからだ。

しかしだからこそ、白露の決意も定まつた。元々は自分の両親を救えればそれでよかつた戦いだったが、自分が弱ければその弱さゆえに雨零が狙われてしまうかもしれない。だからこそ、蓬萊寺との徹底抗戦には自分も逃げるわけにはいかなかった。

(もう守つてもらはうばかりのわたしではありません……。わたしが、雨零くんを守るんです！)

守る、とはいつても、自分と雨零の立場は対等だ。守り守られだからこそ、雨零がその善悪の判断をしてくれる。彼は人の善性を信じ続けているが、同時に人の悪く醜い部分と向き合い続けてきた子でもある。

だからこそ、その悪意から雨零やみんなを守るのが白露だとするならば、白露がその力の振るいどころを間違えないように人の善悪を見抜いてくれる。だからこそ成立する「対等」な関係が、二人の間にはあった。

「お父さま。わたし、もつと強くなりたいです。誰も彼もみんなを守るほどの力はないとも……たつた一人の大切な人を守るくらいのが、今はすごく欲しい……！」

「……そうだな。それはきつと、大切な人が身近にいる人なら誰もが求めるものだろう。……けだな白露、強さと力を履き違えるのはやめておけ。人を守るためにはもちろん力も必要だが、何より心の強さが必要だ。心の宿らない力に、人を守る強さはない」

「強さと、力……。わたしの未熟でしょうか。まだ、よく違いがわかりません。でもぼんやりと、お父さまの言いたいことはわかる気がします。以前お手合わせをさせていただいた悠生ゆうきさまのパワーは、厳しい力ではありますが……それでも冷酷な力ではない、温かさをどこかに感じました」

力を求める道は曲がりくねっているほど良い道だと、希きづな繫はかつて師であるリデアから教わった。迷い、惑い、道を踏み外しかけるほどに、正しい道を探そうとする心は育つていくのだと。そうして見つけ出した道こそが、自分の力を振るうべき「強い道」となっていくのだと。

迷いなき力に重さは宿らない。そして重さの宿らぬ力に、誰かを救う強さは決して宿

らない。何度も迷い続けることで見つかった荒野の中の一本道を進んだ先に、誰かを守り救うことのできる「強さ」があることを、希繫は白露に知ってほしかった。

だがいくら大人びていても、白露はまだ子供だ。子供にはそんな荒れ地のような道を進んでほしくないと思うのが親心というものでもある。

(でも、俺を育ててくれた姉さんや婚代さんも、俺たちには優しくしてくれただけ、甘いだけの道を進ませてはくれなかった。俺たちが本当に間違ったことをしそうな時にだけ、そつと道を正してくれた。自由の裏側にある責任を、言われることなく気付けるように……。俺も、そんな風にこの子を導いていけるだろうか……)

自分の手を繋いで歩く幼い娘は、この歳ですでに自分にとつて本当に大切なものを見定め、それを守るための強さを求めようとしている。無論、早ければいいというわけではないが、遅すぎればなお良くない。だからこそ、まずは強さを手に入れる術よりも、強さを受け入れるための心構えを教えておくのが、親心の残る「大人」としての役目だろう。

大人は子供を導くものだと、親は子を愛し守り抜くものだと、他でもない希繫にとつて最も身近な「大人」の「親」が教えてくれた。そのせいで彼女の本当の子に注ぐ愛情を横取りするわけにはいかないと、自分たちは彼女を「お母さん」と呼ぶことはできなくなったが、それでも今なお彼女は間違いなく自分たちの「母」だ。

そんな母の教えを、今度は自分が娘のために実践しなければならない。だが親になる心構えなど、普通の親子であっても出来るものではない。子を腹に宿している母でさえ、「子の母」になるのは子が産まれたその時なのだ。誰も前準備などなく、ある日になつて突然に「親」になるのだ。

「いいか白露。お前は頭がいいけれど、俺も悠生もそれなりに頭は悪くない。けどな、そんな俺たちでも間違ふことはゼロじゃなかった。人は必ずどこかで過ちを犯す。でも大事なのはそのまま突つ走らないことだ。そこで一度立ち止まり、過去を振り返り、何がダメだったのか反省して、正しい道を見つけてからもう一度歩き出すことなんだ」

「正しい、道……」

「俺たちには師匠リテアという先生みたいな人がいたけど、道を正してはくれなかった。でもそれは当然なんだ、誰もが「他人が間違つた道を行つていたから」といつて助けてはくれない。自分でどうにかするしかないんだ。だから迷え、白露。その迷いと戸惑いがお前を成長させてくれる。人生の絶体絶命は自分を変えるチャンスなんだよ」

最初から正しいだけの道など存在しない。歩む者が正しいと思う道だけが存在するのだ。だからこそその道を常に信じ、そして常に疑ふことでしか、自分の正しさと過ちに気づくことはできない。

それを説くには、いくら聡明な白露であつてもまだまだ幼い。人の「正しさ」は経験

によって形を変える。故にいますぐにその「道」を定めることは危ういのだと、希繫は言葉にしなかった。おそらく、道を定める早計さは、誰よりも白露自身が理解しているはず。

本人が危うさを理解しているのなら、それを敢えて指摘しないのも教育……導く術のひとつだと母から学んだ。

「……できることなら、お前が選んだ道をずっと見ていたいよ」

「はい。お父さまに見ていただいて恥ずかしくない道を、選んでいきます」



雨零の見舞いを終え、再び白露を授身して第二前線部隊のオペレーションルームへと向かうと、逸早く迎えてくれたのは意外にも配属されて間のない土中であった。どうやら先日の資料を今しがた作り終えたところのようで、先に終えていたらしい早智さちの分と合わせて提出してきた。

他の面々はどうと、諸星は早智の訓練を見ると言って天宮・空宮を引きずって訓練室へ向かったとのこと。望月はどうと、今日は正規ELBシステム運用免許の本試験で午前休をとっており、午後1時からの出勤ということと不在である。

「……ん。特にこれといっておかしいところはないかな。じゃあこの資料を基に連携を考えていく。土本には今後もいくつか質問するかもしれない。何せお前のギアは特殊だからな」

「こつちもそれはわかっている。ただ、自分で言うのもなんだがこつちは本当に運動能力が低いんだ。もちろん訓練をサボる気はないが……そういうところはどうするんだ？」

「そこらへんは体力づくりからだな。戦闘用の訓練とは別に、衛生部隊とかに相談しつつお前に合う運動・食事メニューを考えていく。第一部隊の隊長に大郷っていう筋肉ムキムキの大男がいるだろ。あれとかはインストラクターの資格も持っているから時間がある時に筋トレに付き合ってもらおうといい。向こうにはこつちから話を通しておく」

「……あいつレイドリベンジャーズだと英雄とか言われてるやつだろ。気軽に声かけていいのか？」

「あいつ英雄じゃなかったらただの筋肉の塊みたいな奴だぞ。英雄呼ばわりされてようやく人間になってるような奴だ、気にせず行け」

とはいえ、実は悠生の座学の成績は希繫より上である他、咄嗟の機転も利く「インテリ筋肉」である。もちろんそれを希繫が知らないはずもなく、ようは方便なのだが、なぜかこの方便は割とどいたいの相手に通じる。

それだけ悠生の筋肉が立派だから、と好意的に受け取ることもできるが、希繫だけで

なく希繫にそういう方便をつかれていると知っている悠生もまた真実に気付いている。希繫の言う通り「悠生は英雄じゃなかったらただの筋肉の塊」説を信じている者が多いことを。

「さて……まだデスクワークは残ってるか？」

「まだ少し……。一応区切りはついたところだが」

「ならちようどいい、お前も訓練室いつてこい。諸星は超長距離から援護射撃するだけあつて人の動きをよく見てるからな。お前の気付いてない長所・短所とかにも気付いて教えてくれるはずだ。俺はその間に大まかな連携案を作っておく」

「わかった。……隊長代理、まだ決まらないのか」

実のところ、支部長いわく隊長代理の候補は既に何人か決まっていると希繫は聞いている。しかし、それは指揮能力や部隊運用能力に長けているという意味であつて、必ずしも希繫たちの部隊に「合う」ものだとは限らない。

部隊にはそれぞれに性格があり、永岑支部の第一部隊のように「仕事さえやれば基本的に放任」タイプもいれば、希繫たち第二部隊のように「日頃からコミュニケーションを密にして連携の質を高める」タイプもある。後者の場合は、そのコミュニケーションを乱すような人物を隊長代理に置くわけにはいかない。

そして、そういう「内部の和を貴ぶタイプ」に対して、霧島支部長は理解がある人物

であった。だからこそ、希繫たちの部隊にしつかりと「合う」人物以外を採用するわけにはいかず、配属が遅れているのだろう。

「まあそつちは霧島さんが頑張ってくれてるらしいから、あんまり心配しなくていい。あと、お前の戦闘適性を見てみた感じ、知識と経験を蓄えれば指揮官としての能力もつくかもしれない。そういう意味でも期待してるけど、そのためにもまずはたくさん経験を積もう」

「……お前の期待に応えられるかはわからないが、一応努力はする」

そう言って訓練室に向かった土中を見送ると、希繫の中で様子を見ていた白露はぼそりと呟いた。

『土中さま、もしかして口が悪いだけでとても気遣いのできる方なのでは……?』
「ツンデレだとしたらツン2割だな」

支配—ドミネーション—

「う・か・り・ま・しつ、たあああああああああつ!!」

その日の午後——食事を含めた昼休憩をそろそろ終えるという頃になってオペレーションルームに飛び込んできたのは、この部隊の最古参である望月芽愛もちづきめあであった。

右手に掲げたカードには、「正規ELBシステム運用免許証」と書かれていて、ベルトからぶら下げたチェーンには紫紺色のクリスタルコアが煌くように光っている。

「おー、おめでとう芽愛。というか、ここに来る前にもうギア貰ってきたのか。まあ……前々から適性あつたのに試験を受けなかっただけで、お前のギア自体は菜咲なさけが用意してたらしいしなあ」

「はいっ！ 試験の結果をお伝えしたら仲嶋博士が直々に届けてくださって！ 今度また改めてお礼に伺わないとですねっ！」

「……そのギアは前々からあるやつだよな？ また新造で謎テクノロジーの結晶みたいな貰ってないよな？」

「あ、はい。ナンバリングは確か……第一〇一号だっと思えます」

一〇一号。今現在、最新とされている土中の「ワイズマン」が一四六七号であるため、

おそらく菜咲はおろか、彼女が来るまで並ぶ者なしといわれた天才技術者「笹倉婚代」が手掛けたものでもないだろう。

しかし、ナンバリング一桁のエクレールであっても現役であるように、古いからといって性能が低いということはない。むしろ、初期は装着者がある程度まで限定して選んでいた影響でピーキーなものが多く、時代と共に汎用性と適性範囲を広げる経緯の中でオミットされた機能などが残っていることも少なくはない。

実際、エクレールはその最たる例として「電気変換」というギア特性を持つが、これは近代型のギアではほとんど再現できない。なぜなら電気変換によつて高速移動をしている際に、そのスピードに適應できる情報処理速度を持つ装着者がほとんどいないからである。

希繫きづなの場合は今まで「なんとなく出来た」と言つて誤魔化していたものの、実際のところは純血の蓬萊寺としての情報処理能力と動体視力があつたからこそ適應できたものであつて、そうでない者はエクレールのスキル「アクセルアクション」によつて生体パルスを加速させてそのスピードについていくしかない。

だが「アクセルアクション」は本来なら処理できない情報を無理やりに高速化させることで肉体をついていかせようとするものであつて、使用中・使用後には猛烈な吐き気と頭痛に見舞われる羽目になるので、ほとんどの場合は使用不可能か、使用できたとし

でも短時間のみとなる。

そして、そういったピーキーだが性能はピカイチ、というものが古いギアには多く、希繫は彼女のベルトからぶらりと下がった紫紺のギアを一瞥すると、再び望月に視線を戻した。

「ならまずは慣らしだな。ちょうど今しがたできたばかりの連携パターンがあることだし、この連携に必要な望月・古谷・土中の三名は訓練室でこれを試してこい。実際にやってみて意見や改善案があればレポートとして提出。他の業務は居残り組が出来る限りフォローしておく。行ってこい」

「了解！　じゃあ二人とも、悪いけどメアの試運転に付き合ってね！」

「お任せください——」

早智^{ささち}の言葉を遮るように、第二前線部隊のオペレーションルームだけでなく施設内全体に鳴り響くレッドアラート。

希繫はすぐさまオペレーターに状況の確認を促し、望月と諸星は他四名にヘルメットとグローブを装着するよう促しながら通信機を音声入力モードに切り替えて待機。

「永岑市A—10ポイントに大量のレイダーおよび一機のユナイトギアを確認！　レイダーの勢力レベルは「集」！」

「集」……100頭以上300頭未満、でしたよね。かなり多い……！」

「A—110ポイント……!? それって……!!」

「ユナイトギアの装着者および出現ポイントの衛星画像、モニターに出来ます!」

そこに映っていたものは――。

「姉さん!」

「逢依ちゃん!?!」

紅蓮の髪と金色の瞳を持つ青年と、その青年の後ろに虚ろな瞳のまま従い歩く逢依と小転こころの姿だった。

「装着者およびギアの特定を急げ! 天宮と空宮はここで待機してこちらの指示を待て

! 俺は先に現着するから望月・土中もすぐに追いついてこい! 古谷は諸星の護衛だ

!」

全員が「了解」と声を揃えると、希繫は真紅の雷光となってその姿を消した。



「……………」

「……………」

紅蓮の髪を首元まで伸ばしたその青年の後ろ姿を見つめながら、逢依と小転は言葉も

出ず行動も起こせないままではあるが、意識ははつきりとしていた。

(どうして……！ 私たちは何をされたの？ 彼がああギアを……あの「仮面」を出した途端に、まるで体と精神を別たれたかのように言葉も行動も封じられた……！)

(あのギア……もしかして……。ううん、あれはもうずっと昔に封印されたはず……。でも、あれが「そう」じゃないのだとしたら、この能力はいつたい……?)

冷静に状況を把握しようとする逢依と小転だが、彼の顔を覆っている二本ツノが生えた金の仮面は、その能力の脅威性だけでなく、形状と被覆範囲の関係上、相手の人相はおろか凡その年齢さえも把握できない。肩幅や背丈、あるいは尻周りの骨格や腰のラインから男性であることは間違いないが、それ以上の情報がまったく得られなかった。

しかし、逆にこれだけ徹底して何もわからないとなると、これが突発的な犯行でないことがわかる。そして、これだけの短期間で事態^{コト}を済ませ、そして何より大量のレイダーを「従えて」いることからして、その正体にだいたいの予想はつく。

(蓬萊寺……！)

(蓬萊寺、なんだろうけど……。わたしがこれだけ一方的にしてやられるなんて、それこそ純血の蓬萊寺くらいだと思ってたんだけどなあ……)

あの仮面には、視界を確保するための覗き穴らしいものがなく、顔の表面に触れると同時に展開範囲を広げて後頭部以外のほとんどを覆い尽くしていたのを確認できた。

今はその仮面を外し、右手でつまむようにして持ちながら無警戒な背後を見せているが、それが「小転さえ抵抗すらできず服従状態にした」蓬萊寺の背中だと思えば、隙があるようには見えない。

だがそう考えている二人の耳に、バチン、という聞き慣れた乾いた音が響く。

「——ッ！」

「き……なッ！」

突如として、二人と青年の間に真紅の光が閃き、その輝きが収まっていくにつれて、その中から真紅のブーツと白銀のマフラーを纏った「彼」の姿が現れる。

（希繫……これで少しは動……けないッ!? それどころか、声すら……!）

光が収まり、二人の目に飛び込んできたのは、愛刀・雷切ライキリをその首筋に突き立てようとする希繫の一突きを振り向きもしないまま小脇差の刀身で受け止める青年の姿であった。

「今の一撃を防いだ……ッ! 幹部級……いや、俺も姉さんも知らない純血かッ！」

「……速いな。そうか……お前が今代の「当主」の器か……。なら、お前も連れていく必要がありそうだな……」

振り向きながら繰り返し出した蹴りは、希繫の動体視力とスピードであれば容易に躲しきれるものであった、はずが——。

「がふっ……!?!」

『お父さま?!』

まるで両足が地面に張り付いたように、希繫はその場を一步も動けずその蹴りの直撃を受けた。

即座に受け身をとって立ち上がるが、足はもちろん、全身のどこも異常は見られない。雷切を握る手もしっかりとしていて、明らかに「あの一瞬だけ」足を動かさなかったのだとわかる。

『どうして躲さなかったのですか?!』

「躲さなかった? いや、俺は間違いなく……」

『いえ、お父さまと一体化しているわたしにはわかります! お父さまは今、「受けきろう」としておられました!』

「受けきる……!?! バカ言え、俺がそんなことしたら蓬莱寺どころか並みの相手にだって勝てない! 俺は間違いなく躲そうと……!」

視線を「仮面の男」に向けたまま、希繫は白露が指摘する「選択ミス」の理由を必死に考えていた。

希繫自身は間違いなく「躲す」つもりだったはずだ。だが白露の指摘によれば希繫は自分の意思で仮面の男の蹴りを受け止めたらしく、事実として希繫はその蹴りを躲せず

直撃している。だとすれば、その原因はおそらく――。

「催眠……あるいは洗脳か？　なんにせよ、お前のそれは相手の思考を支配するギアか……！」

「なるほど、頭も悪くはないか。確かに……「支配」という意味では間違いではない。だがこれは催眠や洗脳のような回りくどいものではない。もつとシンプルで、もつと冷酷なものだ。このギア……『ドミネイト』の力は、あらゆる選択をこの俺が決定する、それだけといえればそれだけだが……故に絶対の力だ」

「なっ……!!?　あらゆる選択の『決定権』を握るギア特性だと……ッー」

そのギア特性。そして「支配」を意味するそのユナイトギアの名を、希繫は――そしてこの場に居る逢依と小転も、あるいはこの状況をモニターを通して見ているレイドリベンジャーズ全員が知っていた。

それは「第一一号ELBシステム・ドミネイト」……意思を持つ者、理性を持つ者、本能を持つ者、ありとあらゆる「生命」を支配する絶対にして究極のユナイトギアであり、世界がなんらかの巨悪に沈みそうになった時、その抑止力として生み出されたデウス・エクス・マキナ。

そしてだからこそ――そんな絶対的窮地でなければ触れることも、ましてその存在を知ろうとすることすらも禁じられた禁断のユナイトギア。それが『ドミネイト』なので

ある。

「それは開発初期段階で封印が決定され、世界が巨悪によって滅亡の危機に瀕した時のみ封を破ることを許可される禁じられたユナイトギア！ それをなぜお前が！」

「知らん。それはこれを俺に寄越した奴に訊け」

ドミネイト最大の特徴として、封印を前提として造られた影響で、このギアにはA I が搭載されていない。

そもそも封を破る時というのが世界滅亡の直前ということ想定しているため、適合できる者がいなければ起動すらできない状態では意味がないため、敢えてA Iを搭載しなかったのだ。

しかし、それがよりにもよってこれほど最悪な状況を作り出すとは、さすがに予想が
できなかったようだが。

「俺はただ依頼をこなしているだけだ。お前と、お前の姉と、お前の子と、お前の子を胎
に宿した女を連れてこい、とな」

「依頼……？ 蓬萊寺の当主すら軽くあしらえるだけの力を持つような奴が、誰の依頼
で動いてる！」

「……どうせ連れて行けばすぐにわかるか……。お前の腹違いの妹だ。蓬萊寺家の現当
主にして仮の当主である、蓬萊寺撫月の依頼だ」

質問には答えず、と吐き捨てると、仮面の男はその姿を消した。

直後、金属同士がぶつかり合うような音が、希繫の背後で聞こえた。

『お父さま！ どうして抵抗なさらないのですか！』

希繫が振り向けば、仮面の男が峰を向けながら振り下ろそうとしている脇差を、御霊鎮之紅瑠璃みたましずめのくろりを巻き付けたシンクロナイザーが受け止めていた。

「抵抗も何も……俺の動体視力ですら追いつけないくらいのスPEEDで……」

『追いつけないわけがありません！ だってあの方は、「あんなにゆつくりと近付いてきた」じゃないですか！』

「……ッ！ 俺に「認識」の選択をさせないように「決定」したのか……！」

「……どうやらお前の「中」に、お前以外の何者かが存在するようだな。……そうか、そいつが「お前の子」だな。探す手間が省けた。お前と後ろの二人さえ連れて行けば、俺の依頼は完遂するというわけだ」

無表情に、無感情に、無感動にただただ淡々と呟く仮面の男の言葉遣いは、希繫にとってあまりにも身近な人から聞いていたそれに似すぎていて――。

「ムカつくな、その口の利き方……！ 姉さんが言えばあんなに可愛いのによ……姉さんじゃない奴が姉さんみたいなの喋り方すんのは、腹立つなアッ！」

騎士—ナイトメア—

希繫きづなと仮面の男の戦闘は、意外なほど淡々としたものであった。

仮面の男による『支配』の力は、希繫とは異なる「選択」を取ることでできる白露しろろがその影響を受けないせいか、希繫が明らかにおかしい選択をした際、強制的に希繫の体のコントロールを白露しろろが握ることで対応できるようになった。

しかし、だからこそ問題になったのは『支配』の力とは無関係な、シンプルな身体能力と戦闘技能であった。さすがに人を殺すことを生業とする鬼とだけあって、仮面の男の持つ驚異的な戦闘能力は、希繫の蓬萊寺ほうらいじとしてのそれを大きく上回っていた。

（蓬萊寺を長く離れていたとはいえ、仮にも純血の蓬萊寺として殺人技能を一から十まで叩き込まれた俺が、こうも苦戦する相手なんてそう多くはないはず！ こいつ……本当に蓬萊寺ほうらいじ撫月なつきに従えられるような存在なのか……？）

ユナイトギアに用いられる特殊合金『ユニティオン合金』は、同じユニティオン合金でしか傷付けられない。つまり、ユナイトギアを破壊できるとすれば、それはユナイトギアだけだ。

だからこそ、希繫は防御の大半をエクレールに頼りつつ、回避できる攻撃はそのほぼ

全てを躲しきっていた。しかし、それでも戦闘が長引くにつれて、躲しきれない攻撃が増えてきた。理由は明確で、仮面の男が「回避しようとする一瞬」に「防御の選択」を取らせてきたからだ。

さすがに、そんな極々一瞬の判断に対しては、白露であっても対処ができない。だからこそ、希繫はギリギリでの回避ができず、仮面の男の一挙一動に注視しながらタイミングに余裕をもって回避せざるをえず、そうなると相手もギリギリまで詰めようとしてくるため、互いに攻めあぐねる状態となる。

「……………」

（お父さまも、あの仮面の方も、徐々に思考が殺人鬼として最適化され始めている……。言葉を発しなくなっただのがその初期段階。言葉を放てば、呼吸が乱れ、意図が知られ、無駄に体力を消耗するから……）

言葉が消えれば、エクレールとドミネイトへのスキル指示もできなくなるが、そもそも登録されたスキルにはある程度の「決まった動作」が存在し、それを逸れた行動をするとスキルの威力増強を得られなくなる。

予備動作の長いスキルを使えば、その動作中が明確な隙になる。その隙を突いた攻撃を躲そうとすればスキルは発動しない。ならば最初からスキルを発動しない方がリス

クは少ない。予備動作の少ないスキルであっても、仮面の男ほどの相手にとつては大した差はないだろう。それは希繫が仮面の男のスキルの隙を突く際にも同じことが言える。

だからこそ、二人は互いにスキルを使用しなかった。ユナイトギアによつて底上げされた身体能力と、蓬萊寺としての殺人技能、そして互いが積んできた経験から来る直感だけを頼りにしたシンプルな戦いが、互いをどこまでも高め合い、そして「殺人鬼」へと変えていく。

（これほど殺人鬼に近付いてもユナイトギアが解除されないということは、お父さまと仮面の方が抱く感情は未だにマイナスへと堕ちてはいない証拠……。お父さまの力は「希望を繋ごうとする意志」……。つまり絆を信じることに。でも、だとしたら仮面の方の持つプラスの感情って……？）

ウイルフの時がそうであったように、蓬萊寺がユナイトギアを用いようとすれば、戦いが激化するほどに冷静になっていく感情が、プラスの感情の昂りを動力源とするユナイトギアとあまりにもアンマッチであるせいで、基本的にはあまり有用な戦力とはならない。

しかしこの仮面の男は、多くの装着者たちと同様に、戦いが激化することにユナイトギアの出力が高まっている。それはつまり、彼の心には誰の目から見ても明らかだ。「プ

ラスの感情」があり、それが真つ当な形でボルテージを上げているということになる。だとすれば、いったい彼はどんな感情を胸に抱きドミネイトを纏っているのか。あの金の仮面の奥に隠された彼の表情を除くことさえできれば、或いは――。

攻防を兼ねつつ左の逆手に握る雷切ライキリと、攻撃に特化した右の順手に握る御霊鎮みたましずめのくるり之紅瑠璃は、本来であれば希繫のスピードも併せて二刀必殺を意味する二振りだ。

しかし、仮面の男が携える小脇差は二刀どころか一刀すらまともに通させてはくれない。それどころか、雷切には特異機能である「不壊」によって決して傷つかず切れ味も落ちないという無敵のエンチャントがついているにも関わらず、何故かあの小脇差による攻撃を防ぐ度に、目に見えるほど大きな刃毀れを起こしてしまっている。

「その短刀、この『絶斬タチキリ』で斬れないところを見るに、まともな硬度ではないらしいな」「そつちこそ、俺の『雷切ライキリ』に刃毀れさせるとかどういふことだ。蓬萊寺の技術をどんなに掻き集めてもそんな業物そうそう出来ないはずだぞ」

「……いや、そういうことか」

「……ああ、なるほど」

――「不壊」の特異機能か。

――「切断」の付加能力か。

そう、希繫の持つ雷切が「絶対に壊れない刃」であるように、仮面の男の持つ絶斬と呼ばれる小脇差は「絶対に一刀両断する刃」であった。

そしてその矛盾を解決するため、逆に言えば絶対に矛盾を成立させるために、両者のエンチャントは半端な形で成立し、そして成立しなかった。傷つかないはずの雷切は傷つき、両断するはずの絶斬はそれができなかった。しかし絶斬は間違いなく雷切に刃を入れ、そして雷切は絶斬の攻撃を傷つきながらも防ぎ切った。

希繫も、そしておそらくは仮面の男も同様に、互いの切り札のひとつがただの得物と成り下がった。しかしそれでも、互いに切り結ぶ手が緩むことはない。だが——均衡は間違いなく崩れた。

「……………ぐツ……………」

『お父さまー』

仮面の男が絶斬を鞘に戻し、希繫の二刀を全ていなし切った直後に抜刀、そのまま希繫の左肩を貫いた。

本来なら、狙いはおそらく左腕を丸ごと落とすつもりだったのだろう。希繫であったからこそ、それは防ぐことができたが、そのまま引き抜いた絶斬による二の太刀で彼の右手に握った御霊鎮之紅瑠璃を両断してしまい、ついに希繫は膝をついた。

バチン、という音を立てて体を雷撃体に変換し、即座に傷口を塞いで肉体に再変換す

るが、その再生のための一瞬は、仮面の男にとってあまりにも長すぎる瞬間であった。
「……勝負あつたな」

喉元に突き付けられた絶斬によつて動作が完全に制止した瞬間、ドミネイトの『支配』が希繫の体の自由を奪つた。この状態で白露がコントロールを代わつたとしても、さすがに絶斬が希繫の喉を穿つ方が早いだろう。

あちらには希繫たちを殺す意図はないようだが、それを利用することはできまい。蓬萊寺にとつて、殺さない程度に傷つけることなど造作もない。首の皮一枚だけを切りつけることさえ容易いほどに。

「……お前の目的はなんだ」

「言葉を喋れるのか。……なるほど、お前の中に居る「子供」に言語のコントロールだけを取り返させたということか。だが、残念ながら俺に目的などない。依頼を遂行しているだけだ」

「お前ほどの蓬萊寺が、当主とはいえあんな小娘に従うのか？」

「従っているわけではない。あの女が提示した条件が俺にとつて都合が良かっただけだ。お前たちを連れ戻すだけで、俺は妻を取り戻せる。妻と共に平穩に暮らせる。俺はただ、妻と一緒に生きていたいだけだ」

妻と一緒に生きたい。それが彼の本音か建前かは彼だけが知ることだ。しかし、白露

はそれが本音だと薄々気付いていた。おそらくは、希繫も同様に。

ここまでの戦いで、仮面の男は決してドミネイトの装着を解除しなかった。それはつまり、ドミネイトの出力がまったく下がらず、足手まといにはならなかったということだ。その理由は明確で、彼が「正しいプラスの感情」を抱き続けていたこと。そしてそのボルテージを高め続けていたこと。

つまり彼の正の感情とは「愛」——それも逢依あいつのように他者に慈悲を与えるという「慈愛」ではなく、特定の個人にのみ注ぐ「愛慕」の感情が、ドミネイトを動かしていたのだ。

「お前の妻が蓬萊寺に捕われているというのなら、俺が手を貸そう。だから俺の家族に手を出すな」

「それは無理だ。俺の妻は蓬萊寺に……誰に捕われているわけでもない。むしろある意味で捕われているのは俺の方だ。この……「命」という檻にな」

「命が……檻？」

まさか、と思つて希繫がその仮面を見つめると、彼は絶斬を握っていない方の手で仮面を外して、その素顔を晒した。

紅蓮の髪に凜とした金色の瞳。小転こころの伶俐な印象と、希繫の穏やかな顔つきのどちらにも近いその顔は、間違いなく「純血の蓬萊寺一族」の証明。

「俺の名は蓬萊ほうらい寺統司じとうし。誰かは俺を「蓬塵鬼ほうちんき」などと呼ぶこともある。そうだな……今から120年前に息絶えたお前の先祖と言え、わかってもらえるか？」

「……………ッ！」

蓬萊寺統司。蓬萊寺の名が全人類のトラウマとして刻まれた120年前の「惨劇」を引き起こした元凶であると同時に、当時の地球人口の約3割を殺害した史上最悪の殺人鬼として今なお名高く、息絶えてなおその体から放たれる威圧感、近づく者の呼吸すら許さず死してなお殺し続けたという。

だが、今こうして対面する彼からは、決して呼吸もできないほどの威圧感ではない。それどころか、感じるのはただの威圧感だけだ。殺意や敵意といった攻撃的な雰囲気を感じて纏っているようにはまったく見えない。しかし——その恐ろしさは同じことを普段している希繫だからわかる。

彼はこちらに向ける威圧感を、決して殺さない程度に緩めているのだろう。殺意や敵意がないのは、それを逸早く察知して反撃しようとする殺人鬼の技能を封じるためか。単純な威圧感はこちらの行動を制限し、殺意も敵意もない攻撃は察知が遅れる。だからこそ言える。彼は——統司は、間違いなく本物の「蓬萊寺統司」なのだ。

そして、それがわかった今になって、希繫は絶対に戦ってはならない相手と戦ったことを、そしてその相手に敗北し自由を奪われた現状の危険性を理解した。

このままでは、抵抗すらままならない。仮にこの支配を逃れられたとしても、逢依と小転を連れて逃げ出せるような状況ではない。

万事休す——そう思った時だった。

『リストレイントチエーン!』

先端に小さな錨が付いた紫紺の鎖が、希繫たち三人の体を縛り付け、そのまま後方へと引つ張った。

完全に不意を衝かれたことでドミネイトの支配が解けたのか、逢依の口から出たその声の主の名は——。

「望月ちゃん!？」

「お待たせ、逢依ちゃん。本当はこういうの、希繫さんの役目なんだろうけど……今だけはナイト役をやらせてもらおうね! ……行こう、メアをナイト様にしてくれるメアだけのギア……ナイトメア!」

退避——アヴオイド——

希繫^{きづな}たちが振り向いた先に立っていたのは、いつもの気の抜けた表情を戦意に染め、のんびりと垂れた目尻を吊り上げながら目の前の「敵」を睨みつけ、紫紺の鎖を尾のうに生やした——望月^{もちづき}芽愛^{めあ}であつた。

その両手首のブレスレットから希繫たちを縛るように伸びた鎖はアームズだろうか。逢依^あのクリユスタルスに比べると、やや群青に近い色に彩られていて、それでもその「紫」を誇るかのように輝いている。

「ごめんね、希繫さん。いつもなら希繫さんに任せるところなんだけど……今日だけ、今だけ、ちよつとだけ、出しやばらせてもらうね」

「よせ望月！ ユナイトギアの慣らしも済んでないのに、よりにもよつてこいつに敵うわけがない！ こいつは——！」

「蓬萊^{ほうらい}寺^じ統^{とう}司^し、でしょ？ さつきまでの会話はエクレールを通してオペレーションルムが中継してくれてたよ。でも、そんなことどうだっていいんだ。わたしはただ、この人にこの感情をぶつつけたいだけ」

アームズの拘束から三人を解放すると、ブレスレットから二本のチェーンを短く伸ば

して握り締める。

「あのさあ……蓬萊寺にまともな倫理観を語っても意味ないから正論を言う気はないんだけどさ……。でも、それにしたっていくらなんでも、よりによって、なんでそういうことするかな……？」

「……何を言っている？」

「なんで、他の誰でもなく、他のいつでももなく……今、この子を！ 念願の子供がお腹にできて幸せ真つ只中の逢依ちゃんを狙ったんだよ！」

まるで矢のようにブレスレットから伸びた鎖を、統司の絶斬タチキリが難なく切断する。ここまで何度か希繫が防いできた絶斬の閃きは、不壊の雷切ライキリだからこそ防ぎ切れていたのだと痛感する。

しかし、それは望月にとって絶斬の「切断」の概念的エンチャントを確認するための作業にすぎない。「鎖」とは、無数に繋がれた「輪」の連続体だ。故に、途中のどこを切断されたところで、ナイトメアのアームズ『ヴァリアンナイツ』はそれを根本から無制限に伸ばし続けていく。

斬れば斬るだけ伸び続けるだけならば、と統司は早々にその軌道を逸れ、望月へと接近する。

「希繫！」

「わかってる！ エクレール！」

逢依の声を聞き届けるが先か、あるいはそれよりも早く、希繫のエクレールはその姿を変え、雷光を迸らせた。

リミットブレイク。その最大の利点である、エモーショナルエナジーのチャージを必要としないスキル発動のために。

「必殺級の牽制だ！」

『スパークステインガー』

希繫の周囲に漂う雷球から放たれる雷撃槍が統司に迫る。いくら絶斬があらゆるものを切断するとはいっても、雷や水のように「通り過ぎるもの」を斬ることに意味はない。しかしそれでも当時は表情ひとつ変えず、雷速で迫るスパークステインガーを「見て」回避し、そのまま接近の歩みを止めることはない。

だが、そもそも「一時凌ぎ」「時間稼ぎ」という意味では、希繫よりも最適な人材がいる。

「ヴァリアブルチェーン！」

伸ばした鎖が統司の横を通り過ぎると、その先端は電柱にぶつかり、ガードレールにぶつかり、いくつもの跳ね返りを繰り返して、当時の右足と左腕を拘束した。

「スキルを、ノーチャージで？」

「スキルじゃない……これは、技術だ！ さあ、覚悟さとさん！」

ぐおん、という独特の音と共に、希繫たちの背後へと現れる時空の隙間。

統司は自らを縛る鎖を即座に引き千切り、彼らを捕まえようとするが、それよりも僅かに早く「隙間」は閉じる。

「……今回はここまで、か」

目論見は間違はなく崩れた。しかし、それでも当時の表情が曇ることはなかった。

それはまるで「仕損じたところでいつでも取返しが利く」と言っているかのようで、そんな彼をモニター越しに見るオペレーターたちは、その肝をぞつと冷やしたという。



「本つつつ気で死ぬかと思った……!!」

「よくやった！ 本当によくやってくれた望月！ 無理させて悪かった！ でもありが

とう!!」

「ありがとう……！ 望月ちゃん、ほんとうに……心からありがとう……！」

覚悟の持つユニイトギア、ヴォイドの力によって引きずり込まれた先は、レイドリベ
ンジャーズの永岑支部でもなければ、桐梨家でも優芽ゆめと覚悟がルームシェアしているア

パートでもなかった。

そこは周囲を無数の木々によって覆われた日本家屋。それはいかなる偶然か——かつて義陰よしかげと陽乃はるのが一時的に利用していた「マヨイガ」であった。

「覚悟ちゃん、()は……?」

見覚えのない場所に連れてこられた小転こころは、不思議そうに周囲を見渡しながら、言葉だけで彼女に問いかけた。

「以前、ソールとルーナを解析していた時に偶然知った場所です。まさか、こんなことに使う日が来るとは思いませんでしたけど……」

「そうだ！ 永岑支部は!? レイドリベンジャーズのみんなは無事なのか!?!」

「今、情報部の優芽に確認をとっています。今、我々がここにいることは、私たち自身と優芽だけです。他には総交そうまさんにも悠生ゆうきさんにも伝えていません」

永岑市において、あの二人の防衛ラインを突破できる者はまずいない。だからこそ、蓬萊寺はあの二人の背後に希繫たちが隠れていると想定するだろう。その裏をかくために、あの二人に黙ってここに連れてきたのだ。

本当なら、情報部という真つ先に狙われかねない部署に所属する優芽にも黙っておきたかったが、覚悟覚悟する人と希繫希繫の人の居場所が途切れてしまえば、さすがの彼女もその明晰な頭脳を使ってマヨイガに「辿り着いて」しまうだろう。

そうになると、その経過途中で優芽の動向を蓬萊寺が察知し、彼女よりも早くここに辿り着くかもしれない。そのため、希繫たちと優芽の両方を守るために、覚悟は敢えて彼女にこの場所を伝えたのだ。

「どうやら、蓬萊寺は退いたようです」

「そうか……なら、よかった。だが、さすがに状況が想定以上にマズいことがわかったな」

「ええ、ひとまずわかつている情報をまとめましょう」

希繫はここ数日ほとんど装身したままだった白露しろろを体から出すと、全員が集まる居間に布団を敷き、小転が添い寝をしながら彼女に睡眠を促した。

希繫の「内側」にいる状態でも、眠ることは可能だ。寝込みを襲われるのが一番危ない、ということ、ここ数日はずっと装身状態のまま眠っていたこともあり、それには白露もある程度は慣れただろう。

しかし、最低限の休息では、体の疲れも精神の疲れも万全までには癒せない。布団の柔らかさと温もりに包まれながら眠る白露は、普段なら仰向けで大人しそうに眠っているのに、今日はなぜか甘えるように小転に抱き着いて眠っていた。

それは彼女の精神の幼さを示しているだけでなく、この非日常的な日々を送る中で疲弊した精神が、他者の体温によって安らぎを得ようとする本能によるものでもあり、彼

女の精神状態が本人や周囲の思っているものよりも遥かに深刻だということを表して
いた。

「……まずは、敵の正体と目的。これははつきりしたわね。敵は蓬萊寺。現当主の蓬萊寺撫月なつきと、なんらかの方法で復活した120年前の悪夢、蓬萊寺統司。目的は私と希繫と小転、そして白露ちゃん。つまり……蓬萊寺の正統なる血統」

「隊長の場合、どちらかといえば狙われているのはお腹の赤ちゃんって感じでしたね。もし赤ちゃんが生まれて、それを取り上げられれば、隊長の身の安全はさすがに……」
「だろ。俺たちの両親がそうだったように、そもそも蓬萊寺はその血を濃く残すために近親間で交わって子を残す。撫月のように妾との間に生まれた子供というのも存在はするが、基本的に多くはない。なぜなら蓬萊寺は本能的に自分のきょうだいに惹かれるからな」

事実、蓬萊寺の血が流れる希繫も幼い頃は小転を異性として見ていたし、小転もまた他の誰よりも希繫のことを愛していた。しかし小転はその恋心よりも、希繫の「姉」であることに何よりも誇りを持っていたし、逢依の恋心を誰より早く察していた。

だからこそ、小転は自分の恋心に区切りをつけた。希繫に自分の想いを告げた上で、その想いが「人間」として間違っていることをじっくりしつかりと言い聞かせた。そして、ようやく彼は「蓬萊寺の本能」に打ち勝ち、姉以外の人間に目を向けるようになって、

たのだ。

「敵の戦力はわからないけれど、とにかく一番の脅威は蓬萊寺統司で間違いないわ。あの「ドミネイト」と呼ばれるユナイトギアは、直接それを見なくても「それがそこにある」という認識をしてしまうだけでその効果を受けてしまうもの」

「だね。逢依ちゃんが仮面を見た瞬間におかしくなったから、わたしは咄嗟にその視線を彼の手元に移したのに、その影響を受けてしまった。だからたぶん、あれは「見る」とじゃなく「認識する」ことがトリガーになってるんだと思う」

「それに加えて、向こうに「認識される」のもトリガーのひとつだと思う。俺がドミネイトの支配を抜け出せたのは、ドミネイトを認識していてもドミネイトに認識されていない白露が「統司の決定した選択」を即時修正してくれたからだし」

装身状態では、シンクロナイザーの使用権を希繫も得られるだけでなく、白露のエモーショナルエナジーを自身のそれに上乘せしたり、あるいは肉体の持ち主では知覚できなくとも白露が知覚したものをそのまま認識させることができたりする。

つまり、シンクロナイザーによる「装身」とは、簡単に言えば白露というソフトウェアを他者の肉体というハードウェアにインストールすることなのだ。だからこそ、ハードウェアを支配するだけのドミネイトでは、ソフトウェアである白露には手出しができなかった。

「白露ちゃんのシンクロナイザーは未来の私が託したものだし、私も現代のシンクロナイザーは大事に保管しているわ。けれど、そもそもシンクロナイザーによる装身は……」

「装着者同士の呼吸が合わせて、なおかつ装着者のエモーショナルエナジーの相性がよくないといけない。俺と逢依なら呼吸は合うだろうが、問題はエモーショナルエナジーの相性が致命的に悪いことだよな……」

「私がクリュスタルスを持つようになった原因も、もとはと言えば相性が悪い状態でシンクロナイザーを運用し続けて、その依り代にあなたを使い続けてしまったからよね……。あの時は、本当に悪かったわ。あなたにとつて一番相性がいいのは私だと、意地になって……」

「わかってるよ。俺だって、本当だったらお前が一番でいたかった。けど「希望」と「愛」の相性の悪さは仕方がない。愛情は隣り合う人を支えるために強くなるが、希望は孤独や絶望の中で最も強く輝く。愛に満たされた希望は大きく育まれるが、その「強さ」を発揮することができないんだ」

だが——白露はそうではない。彼女はシンクロナイザーを動かす自分の感情を「使命感」だと思っているが、本当のところ、シンクロナイザーが彼女を認めているのは使命感などではない。

白露のエモーショナルエナジーの源、それは「純真さ」だ。他者を信じ、思い遣る気持ち。助けたい、支えたいと思う気持ち。それが彼女の強みだ。だからこそ自分の全てを他者に捧げるシンクロナイザーの「装身」をこなすことができた。

そして純真さとは、他のあらゆるものを受け入れる感情でもある。言い換えれば、他のものを決して否定しない感情ともいえる。「愛」もまた他者を支え補う感情ではあるが、その思想や捉え方によって受け入れられないものも存在する。しかし「純真さ」は他者を疑うことはあれど否定することなく受け入れようとする。

だからこそ——希繫のエモーショナルエナジーを「受け入れる」ことができたのだ。

「蓬萊寺撫月のユナイトギアは……少し、心当たりがあるわ。情報部に調べてもらう必要はあるけれど」

「教えてください。優芽に連絡して、秘密裏に調べてもらいます」

「……正式なナンバリングはわからないわ。私が知っているのは、蓬萊寺統司を復活させることのできる唯一のユナイトギア。厳密には、そのギアがリミットブレイクした時にだけ可能なギア特性だけ」

おそるおそる、という様子で逢依が口にしたそれは——。

「歴史上の生物・無機物を複製して再現する禁断のギア特性——アカシツク・リヴァイブ」

正邪―エモーション―

アカシック・リヴアイブ。歴史という過去の産物を再現する脅威にして驚異のギア特性。しかし、だとすれば逢依の「心当たり」というのは、おそらく――。

「なるほど、あの歴史再現ギア的能力なら確かに蓬萊寺統司とうじが蘇ったことにも説明がつく……」

「だとすれば、あの蓬萊寺統司は本物ではなく、その能力と思考と記憶と経験を完全にコピーした模倣体ということになりますわね。こういうのにお決まりの「本物じゃないからなんとかなる」理論でどうにかありませんか？」

「いや……そもそも創作とかでよくある「偽物なら本物ほど強くない」理論は意味わからんからな。能力・思考だけならまだしも、それらを得るために学んできた記憶と経験まで完全コピーされたらそれはもうスペック的には同じ存在と言っても過言じゃないだろう」

アカシック・リヴアイブによって再現された模倣体であるとすれば、あの蓬萊寺統司は120年前に悪夢の惨劇を引き起こした蓬萊寺統司とは別の個体ということになり、本物は未だに蓬萊寺本家のある世挽山よもぎやまに眠っているはず。

となれば、おそらくあの蓬萊寺統司が言っていた「妻」とは、かつて蓬萊寺統司が唯一愛したとされる女性——蓬萊寺二並ほうらいしじふなみだろう。

120年前の惨劇はそもそも、成り上がりの蓬萊寺の一人が起こした謀反から息子をかばい、二並がその命を落としたことによつて激昂した統司が起こした大量殺戮事件だった、と記録されている。

「それどころか、蘇つた蓬萊寺統司には最凶最悪のユナイトギア、ドミネイトまである。こうなつたら鬼に金棒どころの話じゃ——」

「いや、それはどうか……？ さつきの戦いを見た感じだと……蓬萊寺統司の、本来の動きは……あの脇差を用いて……音もたてず……速攻を仕掛ける、暗殺術だったように思えるよ……。確かにドミネイトは強力なギアだけど……たぶん、あれは彼の言葉通り、本当にただの「新しい玩具」なんじゃないかな……」

「えっ。じゃあ何、あのおじさん全然まだまだ本気じゃなかったってこと？」
「姉さんの予想が正しいなら、本気じゃないどころか、ドミネイトのコントロールにまだ慣れてなくて足手纏いを連れた状態だった、ってことじゃないか？」

何それバケモノじゃん、という望月の率直な感想に苦笑いしつつも、その表現はこの上なく的を射ていた。蓬萊寺は殺人鬼である。殺人鬼とは人を殺す鬼と書く。だからこそ蓬萊寺は皆、自分たちを「鬼」と称してその力を振るう。

希望もまた、その純粹なる鬼の血をその身に宿している以上、人並みでは収まりきらない脚力を有し、小転に至っては全細胞が非人類レベルまで発達している。故に——蓬萊寺統司がどれだけ人間離れした技術と身体能力を持っていたとしても、それは何ら不思議なことではない。

現状、蓬萊寺統司に対抗できるだけの「希望」は皆無に等しい。おそらく世界中のレイドリベンジャーズを全て集めて対峙したとしても、いたずらに被害を拡大するだけで、彼にまともなダメージを入れられる存在は、きつと片手で数えるほどもないだろう。

蓬萊寺としての力を隠さずに発揮した希繫でさえまともに相手にされなかった。となれば、いくら「最強のレイドリベンジャーズ」である悠生や、「最速のレイドリベンジャーズ」であるリディアが力を合わせても、意味のある攻撃をいっただれほど叩き込めるだろうか。

「あいつが蓬萊寺統司なら間違いなく蓬萊寺の戦闘技術は全て修めているはずだ。だとすれば一番ダメなのはあいつに敵意・悪意・殺意を向けることだ。蓬萊寺は目が潰されても自分に向けられた敵対的な意識を感じ取って間髪入れずに迎撃してくる」

「だからといって、毒とかも効かないんだよね……。子供の頃から、食事に毒を盛られて……慣らされてるから……。自分の体に害を為す薬や毒は、完全に無効化しちゃう……」

「希繫のスピードを捉えてたところを見るに、視界の外から光の速度で接近する物体すらも捉えるみたいね。それだけの動体視力と観察力があるなら、たぶん一度見た攻撃は二度と効かないと思っただ方がよさそうね」

「じゃあ、メアのヴァリアブルチェーン受けてたのは単純に「あの技に体を傷付ける攻撃力がないことを見抜いて」なおかつ「いつでも抜け出せるから」だったんだね……。実際、逃げようとした瞬間に引き千切って向かってきたし」

「それと、シンプルにあの脇差の持つ能力が厄介すぎますわ。なんですか「絶対に一刀両断する刃」って。希繫さんの持つ不壊の雷切ライキギ以外ではそもそも防ぐこと自体できないということでしょう？」

各々の意見を出し合えば、現状がどれだけ絶望的な状況なのかを理解できる。

順々にまとめれば、統司に対してはあらゆる指向性を持つ攻撃が通用しない。また、指向性のない攻撃であつても毒や薬による攻撃は無効化されてしまう。そして一度使用した技は二度と通用せず、雷切ライキギ以外では攻撃を防ぐことができないため全ての攻撃を回避しなければならない。

そしてこれらを全てにできるだけの動体視力と身体能力を併せ持ち、観察力と判断力にも秀でているとなると、いよいよもって打つ手がない。

「これはもう、まともな手段では倒せそうにないわね」

「だったらどうする？　まともじゃない手段だつて限られてるぞ」

「あら、あなたらしくない言葉ね。こういうのはあなたの得意分野じゃない」

「……ああ、なるほど。確かにこれは希繫向きかもしれないね？」

悪戯っぽい微笑みを向ける妻と姉の視線を受けて、希繫は不思議そうに首を傾げた。

今ここにいる誤認の中でも、希繫の戦闘力は決してトップというわけではない。蓬莱寺としての力を使ったところで、同じ条件なら小転の方が戦闘能力は高いはずだし、レイドリベンジャーズとしての力だけで言えば、この中では言わずレイドリベンジャーズ全体でも下位に入るだろう。

だとすればこそ、希繫に出来ることというのは決して多くはない。強いことが蓬莱寺を攻略する条件とまでは言わないにしても、強ければできることも増えるはず。だったら、その対極であるはずの希繫でなければできないことなど――。

「忘れたの？　希繫、あなたは蓬莱寺でもあるけれど、それ以上にみんなからどう思われているか。あなたは最弱のレイドリベンジャーズであると同時に――」

『慈愛のレイドリベンジャーズ』でも、あつたはずだよ……？』

逢依あゆと小転の口から発されたそれは、希繫にとって衝撃的なものだった。

蓬莱寺の家に生まれ、幼くして人殺しの鬼となるべく稽古をつけられ、それが悪いことだということも知らず人を殺めた。そしてそんな自分を憂いて、小転がその身を懸け

て共に蓬萊寺を抜け出させてくれた。

その道中で親の暴力から逃げ延びた逢依と出会い、逃避行を共にしつつも行き倒れた先で婚代と出会ったことで、真つ当な倫理観を得てようやく自らの罪に気付いた希繫は、その名を捨てることになった。夜に縋るのではなく、夜を照らす希望を繋ぐ者になるために。

だが、自らの悪と罪を自覚すればするほどに、真つ当な倫理観を得て人と接し、人の醜さと美しさを見るたびに、自分が——そして蓬萊寺が究極的な「悪」であるという認識が彼の中で根付いてしまった。

事実として、蓬萊寺は間違いようもなく悪である。どんな事情があるにせよ、人を殺めるといふ行為を手段として是とするのなら、それは紛れもなく悪なのだ。そして、そんな「悪」と「罪」を煮詰めたような存在に対して、希繫は「蓬萊寺」としての側面を隠そうとしなくなった。

普通の人間なら、悪行を行ったとしても、もしかすれば改心の余地があるかもしれない。だが、蓬萊寺にはそれがない。繰り返すが、彼らはどんな目的にせよ人殺しという手段を是とするからこそ蓬萊寺なのだ。そこに躊躇や葛藤はない。

故に——希繫はただの悪人に対しては「レイドリベンジャーズ」として対処し、それで力が及ばなければその運命に殉じようとも思っているものの、相手が蓬萊寺であるの

なら、自らも蓬莱寺として「殺す」ことで対処することを躊躇わない。

「……無理だ。相手は蓬莱寺、それもあの蓬莱寺統司だ。俺の話をもとに聞くとはいえない。いや……それは言い訳か。俺が蓬莱寺を嫌ってるんだ。あいつらを受け入れられない。あいつらが……憎い」

「希繫、思い出して。他の蓬莱寺と蓬莱寺統司には、決定的に違うところがあつたでしょう？ 確かに彼は人を殺すことに対して躊躇のない人間だけれど、それだけだったわ」「確かに……。言われてみれば、彼はわたしたちに遭遇するまで……その道中で、無意味な被害を出したという、声は聞いてないね……。むしろ……望月ちゃんに対しても……ほとんど殺意を向けていなかった、気がする……」

確かに、逢依と小転の言う通り、蓬莱寺統司は「ドミネイト」を装着するに相応しいだけの「愛」を宿し、そしてその目からは一切の殺意を向けられなかった。

先にも述べたが、蓬莱寺は敵意・悪意・殺意に対して敏感であり、他者に対してもそれを感知されないように感情を隠す技術に長けている。しかし、それは「隠している」だけだ。いくら彼のギアが「仮面」の形をしているとしても、殺意があれば体の動作からは滲み出てしまう。だが、彼にはそれがなかった。

それはつまり、彼には積極的な殺意というものが無い——120年前の資料を基にもっと深く掘り下げるのなら、殺意という感情がそもそも「欠如」しているのだろう。彼

にとつて、感情を揺さぶる全てが妻・二並であり、それ以外に対してはなんの興味も感
動もなかったという。

「良くも悪くも、彼は純粋なのよ。愛のために生き、愛のために死ぬ。だから私の予想が
正しいなら、120年前の惨劇の原因には間違いがあるはずよ。彼は妻を殺された怒り
や憎しみで大量殺戮をしたわけではなく——奥さんのいない世界に対して興味がなく
なったの。だから殺しという手段に指向性を失い、ただ呼吸するように当たり前に身の
回りのものを「片付けた」だけなのよ」

「だとすれば……アカシック・リヴアイブはそのまま蓬萊寺統司の首輪になるかもしれ
ない、ということか。あるいは、あいつが二並を手に入れさえすれば落ち着くのか？」
「なら、わたしたちの敵は……蓬萊寺統司じゃなく、その背後にいる……当主つてことに
なるね……」

「蓬萊寺撫月……。でも、彼女は希繫さんとお姉さんの……い」
「腹違いの妹、と語ったそうですね。いくら蓬萊寺とはいえ、血の繋がった妹を手にか
けるのは……」

やろう、という小さな声が、マヨイガの静かな居間に響いた。

「蓬萊寺は……特にその純血の血統は、存在するべきじゃない。本当なら、俺や姉さん
も。けど……俺たちは幸いにも婚代さんという「優しく温かく厳しい母」がいてくれた。

婚代さんの教えが胸にあるのなら、俺たちは大丈夫なはずだと信じて……俺は撫月を殺す。腹違いだとしても、妹だとすればなおのこと、この手で……！」

希繫の白い手がその瞳のように赤く染まるとしても、彼は蓬萊寺にだけは手を差し出せない。向けてやれるのは刃だけ。だとするのなら、その刃を握るのは他の誰でもなく自分でありたい。

それは蓬萊寺を絶やしたいという自らの殺意からくる欲求でもあり、そして同時に、他の誰かに「殺す」ということを知ってほしくないからでもある。どっちが建前でも、本音でもない。正邪入り乱れる混沌としたこの感情こそ、彼の守りたい「人間」の最も自然な感情なのだと思じて。

迷惑—コンフィデンス—

「よもや、貴方ほどの鬼が仕事をしくじるとは思いませんでした」

「そうだな。悔り、驕りがあつたことは否定できない。何より、永く眠り続けた影響で老碌したのをこの身で感じた。まさか、蓬萊寺でもなんでもないただの人間にしてやられるとは」

「本来であれば厳罰は避けられません、こちらとしても貴方を失うのは大きな痛手となります。次の機を逃さぬよう、お願い申し上げます」

「承ろつ」

ほうらいじとつ

蓬萊寺統司が任務をしくじつたという報せは、蓬萊寺家の中だけでなく、裏社会のネットワーク全体に激震を与えた。そもそも、蓬萊寺統司の復活という話自体が眉唾であつたのに加え、任務を成功させられなかつたという情報は、彼が「蓬萊寺統司」という存在であることに疑いをもたらしした。

そしてその情報をどれほど吟味できたかもわからないような手柄に逸るいくつかの傭兵や暗殺者は、彼の首を獲ることに躍起になった。仮に蓬萊寺統司が偽物であれば、国際的犯罪者集団第一位の『蓬萊寺』の名に泥を塗るには十分な手柄となるし、本物で

あれば今は間違いなく不調であり、討つことができれば『蓬塵鬼殺し』の名を得られる。しかししてそれは獲らぬ狸の皮算用であり、彼に襲い掛かった者たちが生きて帰ることはなかった。そもそも、彼が任務をしくじったのは「体を束縛された状態でその場水面にいない者覚悟による空間接続で捕縛対象を撤退されたこと」によるものであり、慢心があつたとはいえ完全に不意を衝いた逃げの一手によるものだ。

「二並ふなみ……。すぐに、また会える……」

殺人鬼の王——蓬塵鬼とさえ畏れられた蓬萊寺の鬼とは思えないほど優しい声をかきながら、自らの左手の薬指に宿った銀色の絆を見つめる彼の瞳には、もはや「愛」以外のなにかもが映ってはいなかった。



蓬萊寺統司から命からがら逃げ延び、討つべき相手を蓬萊寺撫月なつきに定めたマヨイガの面々は、ひとまず桐梨家の四人をマヨイガに残し、望月と覚悟さとりは一度レイドリベンジャーズに戻ることを決めた。

少なくとも、蓬萊寺統司がすぐに襲ってくる気配は見られないし、彼の思考回路は彼の能力に基づいて極めて理路整然としている。簡単に言ってしまうと、「また邪魔され

る可能性があるから望月と覚悟を先に狙う」などという可能性は、彼が「初見殺し以外の技を必ず学習して対策できる」以上、ありえないものとして考えていい。

だからこそ、彼が狙うのはシンプルに捕獲対象である桐梨家の四人であるはず。少なくともこのマヨイガはあらゆる電子ネットワークから切り離されている場所であり、まして原始的な方法ではほぼ発見不可能な場所である以上、そうそう簡単には見つからない。

もしも見つかってしまった場合にも、希繫きづなが即座にマヨイガに落雷を起こすことによつて狼煙代わりにできるため、覚悟の持つヴォイドの能力で増援を送れる。そう判断して、彼らは二手に分かれた。

「覚悟、あいつらは無事だったか？」

覚悟がレイドリベンジャーズに戻ると、彼女を迎えたのは意外にも接点のあまり多くない悠生ゆうきであった。

待っていた、というよりは、たまたま彼女が空間連結した先がレイドリベンジャーズ第一前線部隊のオペレーションルーム前だった、というのが理由だろう。

彼は片手にドリンクを持っていて、ちょうどオペレーションルームに戻るところであつたようだ。

「ええ、望月さんの奮闘の甲斐あつて、ひとまず逃がすことには成功しました。何かあれ

ばすぐに落雷を使つて知らせる手はずです。場所はそれなりに離れているので、情報の流出を防止するため私と優芽の二人だけで交替しながら周辺の気象チェックをする予定ですが、構いませんか？」

「わかつた。第二前線部隊は隊長および前線指揮と実質的なサブリーダーの不在を理由に、しばらくウチが預かることになりそうだな」

「はい。希繫さんと逢依さんからもそのように引き継ぎを願うよう、支部長にお伝えすることを頼まれています。特に希繫さんは申し訳なさそうにしましたが、まあこればかりは致し方ないでしょうねえ」

では、と言つて支部長室の方へと歩き去つていく覚悟を見送り、自らが率いる第一前線部隊のオペレーションルームへと入ると、そこには困つたような表情で待機状態のギアを見る総交と望月がいた。

どうやら、総交の持つ『ディープブルー』と、望月の『ナイトメア』が言い争つている……というよりは、どちらかといえばナイトメアの方が突つかかつていて、ディープブルーはそれに対し文句も言わず受け止めているらしい。

一時的な配属とはいえ、異動初日から先達メンバーのギアと言い争いというのは拙いというの自由人の望月でもわかつているのか、ナイトメアを宥めようとしているようだが、直接持ち去ろうと手を伸ばせば罵声が飛んでくるからか上手くいっていないよう

だった。

『だから、その女々しい態度をどうにかなさいと言っているでしょう。私のような後続ギアにいいように言われたままで悔しくはないんですか?』

『ナイトメアの指摘は至極真つ当なものです。故に僕が反論できる余地はありません。悔しさがあるとするなら、己の未熟さに対するものです』

『この……ッ、そういうところですよ! 私の意見が明らかに私の主観だけに基づいたものだということは私にだってわかります! デイープブルーにも言い分があるはずでしょう! それを仰ってください!』

『ナイトメアの主観から僕の欠点が見つければ、それは僕には見つけれなかつたものです。貴重な意見に感謝こそしますが、反論など決してありません。また、私の主観で得られる情報は既に反映済みですので、それを申し上げても意味はないと判断します』

『どんどんヒートアップしていくナイトメアに反して、デイープブルーはまったく余裕を崩さないまま、それを受け止めていた。』

傍から見れば受け流しているようにも見られたが、少なくとも今の持ち主である総交からすれば、デイープブルーは間違ひなくナイトメアの意見や主張を真つ向から肯定する形で受け入れているらしかった。

それがデイープブルーというギアの個性であるのなら、総交もここまで言い争いが発

展するまで放置はしなかったが、彼の知るディープブルーは、本当に不満がある時はそれをきちんと口にするギアであるため、総交としても二機の様子を見て対応をどうするか判断に迷っている段階なのだろう。

「総交、技術開発部にナイトメアとディープブルーの関係を問い合わせろ」

さすがにこれ以上は職場の空気が悪化すると考えたのか、悠生が原因の究明を総交に命じる。

「既に問い合わせている。どうやら、こいつらの何代か前の持ち主がバディを組んでいたらしい。ただ、主たちに反してこいつら自身は元々あんまり仲がいいわけではなかったようだ。というより、ナイトメアがとにかくディープブルーに対して辛辣な態度だったみたいだな」

「……辛辣な態度？ いや、アレは辛辣っていうより……」

「いいや、当時は本当に辛辣だったみたいだ。今のアレは……ナイトメアがディープブルーに対して歩み寄ろうとしてるが、元々のキツイ性格が相俟って歩み寄り方がド下手になってる上にディープブルーが関係を悪化させまいと距離を置こうとしてるせいで状況が悪くなってる感じだ」

ようは、昔は本当に不仲だったが会わなくなった期間で冷静になり、謝ろうにも今さら何から謝ればいいかわからないし、いつそ怒ったり憎んだりしてもらえればまだ良

かったのに、相手はそれを自分の非だと思いこんで距離を離されつつあるので仲直りのための会話すら上手くいってない、みたいな状態だろう。

ナイトメアが執拗に語気を荒くしているのは、デイープブルーに自分への怒りや不満をぶつけてほしい——言い換えればナイトメアにも非があることを認めてほしいからなのだろうが、デイープブルーの性格上、他者を傷付ける考え方ができないせいで状況は悪化の一途を辿っている。

『どう考えたって私が悪いじゃないですか！ 私は私の自分勝手な考えであなたを傷付ける言葉ばかりかけているんです！ なのに——！』

『ナイトメアは悪くない。僕の思い至らなさがナイトメアの苛立ちを刺激してしまった。貴女の隣に居たかつてを誇らしく思いながら、そのせいで貴女に僕の隣という不名誉を与えてしまった。本当にごめんなさい』

『——ッ！』

不名誉。それはナイトメアにとって、何よりも冷たく思い罪悪感という名の槍となつて彼女の心を突き刺した。

かつてのナイトメアは、「絶対的な防御能力」を持ちながらも「積極的な攻撃能力」を持たないデイープブルーに対して「貧弱で軟弱なギア」とことあるごとに口にした。

そうした日々の中で、デイープブルーは自らを「弱いギア」だと思ふようになってい

き、どんどん自己評価を下げていった。それは生来の素直さが悪い方向に働いた結果でもあるが、同時にナイトメアのことを誰よりも信頼しているからこそ、彼女の言葉を鵜呑みにしてしまったからでもある。

そして月日が経ち、自らの評価を下げ続けたディープブルーは、装着者に対して非常に従順なギアへと変化していった。それは「レイダーに対抗する兵器」としては極めて都合の良いものではあったが、同時に「感情と心を持つAI」としては非常に好ましくない状態でもあった。

『へい、シリーガール！ 行きましょう！』

「尻軽!? えっ、メア今のところ清い身体のままなのに尻軽呼ばわりされた!?!」

心外だ! と言わんばかりの望月に、誰も「Sおilてly Gほir娘l」の意味を教えようとはせず、スルーしたままその背を押した。

「言われてないから、もうさっさとそいつ持ってパトロール行ってこい。これ以上ディープブルーと一緒に居させると仕事に影響が出る」

「ついでにオマエんとこの新人も連れてけ。まだ業務ほとんど覚えてないだろ」

了解、という威勢のいい返事を返すと、望月は早智と土中を連れてオペレーションルームを後にした。

デスクワークに集中している天宮と空宮の二人を抜いて、第二前線部隊メンバーの中

で一人ぼつんと取り残された諸星は「お前は第一メンバーと一緒に訓練室行ってこい」と言われ、数名の第一メンバーに引きずられるように連行されていく。

「総交、第二部隊の業務は何割くらい引き継げそうだ」

「第二前線部隊長権限がないと認証できないものを除けば、ほぼ全て引き継ぎ可能だ。隊長のお前にしか出来ないものも含めてな」

「ある程度は第二メンバーに分配しつつ、希繫と逢依の業務はできるだけ俺に回せ」

「お前にやらせてたら仕事が積みあがるだけだろう。なんのための部下だと思ってる。それに、こういうのは俺向きだ。大人しく部下にも回せ馬鹿」

上下関係の使い方に関しては、やはり悠生よりも「上の立場」として実歴の長い総交に一日の長があるのか、悠生は何も言うことなく押し黙る。

上司が仕事を抱え込んで困るのは、上司だけではない。上司の仕事が滞ることによって、部下への指示も滞ってしまう。そして部下にも「教える側」と「教えられる側」が存在する以上、下の方で作業が凍り付くよりも、上の方で凍り付く方が組織全体に迷惑であることは明白。

だからこそ、急に舞い込んだこの大量の仕事、確かに上司にしかできないものもあるが、そうでないものはできるだけ広く分配して作業を効率化するしかない。逢依は元より別の体調に引き継ぎ予定だったので問題ないが、希繫はそうした迷惑をかけることも

込みで悠生を頼ったのだ。

普段はできるだけ周囲に迷惑をかけないように気を遣っているはずの希繫が、相手にメリツトが一切無いただの迷惑をかけてしまう相手に、悠生を頼った。その意味を理解できないほど、悠生は鈍感ではない。

「……たまには兄貴らしいところ、見せてやるか」

ぼつりと零す悠生の言葉を、捉えた者はいなかった。

天禍—ディザスター—

「さて、あれから一週間が経過したわけだが、状況は……芳しくはなさそうだな」

「はい。お兄さんたちが潜伏している県内で、既に蓬萊寺ほうらいじ統司とうしの目撃情報が五件。少しずつですが、お兄さんたちのいるエリアに近付いています。このまま行けば……おそろくあと四日程度で潜伏先がバレるものと思われます」

「どこに隠れてるかオレにはわからねーけど、いったいどうやって探ってたんだ？」

「あたしも疑問に思つて調べてみたんですけど、どうやら蓬萊寺は元々、江戸幕府に仕える忍者の末裔だそうです。殺人鬼と変わり果てたのは、江戸幕府の解体に伴つて忍者としての暗殺技術を商売にした結果かと……」

そう言われてみると、悠生ゆうきも「希繫きづなの戦い方」というものに納得がいった。彼自身の戦闘スタイルは、攻撃の直前に相手に自分の居場所を敢えて知らせることで、相手に防御させてスキルの殺傷力を落とし、なおかつ電撃で相手を麻痺させて行動不能に持つていく。

しかし、そもそも彼の適正スタイルはスピード型。しかも同じ系統の中でも特に上位のものであり、その速さゆえに相手に一切の気配を気取られず、一方的に攻撃すること

を得意とする。まして、彼は蓬萊寺とレイダー以外の相手には殺意や敵意を持たないため、それを辿って迎撃することすらできない。

つまり、彼の戦い方は完全な「暗殺向き」であり、忍者として言うなら諜報と暗殺のどちらにも適性のある、極めて「蓬萊寺らしい」スタイルなのだろう。

「なるほど。となると希繫のあの戦闘スタイルも道理つてわけか。適性スタイルのままやっていたら殺しちゃうからな。まあ、だからつてあの正面突破スタイルは前々から希繫にや向いてねーなとは思ってたが、それを聞いちまえばさもありませんって感じだな」

「そうですね。というか、殺意とか敵意が剥き出しだったとしても、お兄さんのスピードを見切れる敵なんてそうそういませんしね。あたしだつて純水の鎧を着たり水の重さでデバフかけたり水路を作つて電気の通り道を誘導したり……色んな対策をしてようやくつて感じでしたから」

「あいつ、あれでどうして最弱のレイドリベンジャーズなんだ……?」
「蓬萊寺とレイダー以外の相手に全力が出せないからでは?」

事実、優芽との戦いでも希繫はまともに勝つてはいない。あれは優芽が服用した昂揚剤デトネイターの効果時間切れによる自滅であつたし、ウィルフの襲撃に關しては希繫・逢依・優芽・総交そうまの四人がかりで取り逃がしているし、義陰よしかげと陽乃はるのとの戦いでは優芽を守るためとはいえ倒れている。

「まともに勝利した戦いは、それこそ蓬萊寺としての力を遺憾なく發揮したウィルフと征十郎を殺害した二回のみだろう。ただ、あの時の希繫は「レイドリベンジャーズ」であることを捨てて「蓬萊寺」として戦っていた。だからこそ、彼が「最弱のレイドリベンジャーズ」であることを未だに返上してはいない。」

「ともあれ、早急に対策をとらなければ、蓬萊寺統司もすぐに——ッ!」
 そろそろ覚悟との交替の時間かと思ひ、時間を確認しようと連絡用の端末を手に取つた瞬間、けたたま 喧しいアラーム音が彼女の手の内に鳴り響く。

明らかかな非常事態に、優芽は逸る気持ちを抑え込みながらパネルを操作すると、希繫たちの潜伏するマヨイガ付近で大規模な落雷が確認された。間違いなく、希繫による緊急事態を報せる狼煙だ。

「お兄さんからの救助要請です! 情報統制部として正式に通達します、第一部隊は速やかに山梨県青木ヶ原内部に存在する屋敷『マヨイガ』へと急行してください!」

山梨県青木ヶ原——かつては「富士の樹海」とも呼ばれたその森は、平坦な道と足場の悪さ、そして衛星写真から見ても緑しか映らないことから、地元の間からは「不逃のがれずの森」ともいわれる。

かつては方位磁針やGPSが使えないのは俗説であったが、一週間前に希繫がここに逃げ込んだ際、森全体に強力な電磁場を張り巡らせたおかげで、本当に方位磁針とGPS

Sが使い物にならなくなった。これなら仮に樹海内に行ることがバレたとしても、ここまで辿り着けないはずだと思っていたのだが――。

「急行しろつつつても、あの樹海の中じやミイラ取りがミイラになりに行くようなもんだぞ」

「覚悟さんがヴオイドを装着して待機中です。あちらもヴオイドには対策をとつているでしょうから、万が一のために訓練室で救護班と共に待機しています。第三・第四部隊は覚悟さんの護衛をしていますので、そちらに増援は望めません。それでも、お願いできますか？」

「つたりめーだろ。オレを誰だと思つてんだ。オレは最強のレイドリベンジャーズで、永岑支部の最大戦力で、何より……アイツらの兄貴だ」



「さすがに早過ぎないか……！　よくここがわかつたな。樹海の中までは探れても、ここまで来るにはそれなりに時間が掛かると思つただけだな……！」

「確かに、蓬萊寺の気配を探ろうとしても、殺意や敵意をほとんど持たないお前とその姉は探り切れなかった。だが……一人だけ明らかにその殺意や敵意を隠しきれてない奴

がいた。……そうだろうか？」

「そう言う統司の視線を辿れば、そこには幼く潤む二つの赤い瞳があった。

「白露……！」

「ご、ごめんなさい……ごめんなさいお父さま！　ごめんなさいお母さま！　わたしの、わたしのせいで蓬萊寺を……！　わたしのせいで、また……！」

白露はかつての未来において、蓬萊寺の手によつて目の前で逢依を喪い、そして彼女の無残な姿を見た希繫は娘である白露を優芽に託し、世界から姿を消した。

そんな未来を書き換えるために白露はその時代の全てを捨ててこの時代に訪れ、若き日の両親の前へ現れた。全ては愛しい両親を守るために。だが———なんの皮肉か、その蓬萊寺に対する怒りが、よりもよつて最凶最悪の蓬萊寺である統司をここに呼び寄せてしまった。

かつてのトラウマ。そして誰よりも蓬萊寺を疎み、その脅威から両親を守ろうとしていた自分が、今まさに両親の目の前に蓬萊寺を呼んでしまったというジレンマと罪悪感が、彼女から冷静な判断力を奪いつつあった。

「シンクロナイザー！　白露を俺に入れろ！」

『了解。桐梨白露およびシンクロナイザー、桐梨希繫に装身そうしんします』

「エクレール！」

『了解。ユニティバレットに拡張接続します』^{アクセスロード}

白露の身体が光の粒子となつて希繫の身体へと吸収され、その首には白銀のマフラーが装着され、そして装填された紫色のバレットをロードしたことにより、頭部には二本のツノが現れる。

「頭にツノを戴くとは……なるほど、鬼となるに相応しい姿というわけか」

「ああ。だけど俺は人殺しの鬼になんてならない！ 俺は人を守るためにレイドリベンジャーズになつたんだ。そのために、鬼の力が必要なら……鬼であることが罪なら、俺はその罪を償いながらこの力を使う！ 全ての鬼が殺してきた人の数だけ、俺はこの力で救つてみせる！ 鬼殺しじゃない……俺は、罪を殺す鬼になる！」

「罪を殺す、か……。まるで二並^{ふなみ}みたいなのを言う奴だな。そういう人間は、嫌いではない。二並のようであればなおのこと。しかし……それが愛する二並を取り戻すためなら、俺はお前を蓬萊寺へと連れ戻さなければならぬ。……恨みたいなら好きに恨めばいい。全ては愛する妻のためだ……！」

愛刀の絶斬^{タチキリ}を構える統司^{トミンネイト}が、その仮面を外す。もはや彼にとつてはユナイトギアすら邪魔だということか。希繫もまた同様に雷切^{ライキリ}を逆手に、御霊鎮^{みたましずめのくるり}之紅瑠璃を順手に構え、その意識を彼に集中させる。

できることなら逢依と小転もその戦闘に加勢したいが、逢依は身重ゆえに自由には動

けず、小転はそんな彼女を護衛しなければならぬため、戦闘には参加できない。さらには、白露の加護を受けていない二人では、いざ統司がドミネイトを使用した際に自己防衛ができなくなってしまう。

「エクレーール！ 最初から全力で行くぞ！ シンクロナイザーはEXスタイルの準備！」

『リミットブレイク。グロワール・エクレーール・ルミエールの展開を完了しました』

『了解。サンダーブレイド・エクスターミネイションスタイルを使用します。エモーションナルエナジー、充填開始』

シンクロナイザーのチャージ開始と同時に、希繫の姿が光と消える。直後、背後に姿を現したと思えば再びそれは幻影となり、正面から御霊鎮之紅瑠璃が統司の喉元へと突き立てられる。

だが統司もまた史上最悪と称された蓬萊寺。希繫の仕掛けた背後からのフェイントには目もくれず、正面から繰り出された一撃は半身を捻るだけで躲し切ってみせた。そして伸びきった右腕から潜り込ませるように彼の腹を絶斬が貫かんとするも、雷切の刀身がそれを防いだ。

切っ先を受け止めたまま、腕の力で振り払うと、そのまま空中上段二段回し蹴りジャックナイフで統司の顔面を狙う。が、統司はそれも上体を逸らすだけの小さな動作で避けきると、そのまま

ムーンサルトキックで顎を打ち抜かんとするも、希繫はこれをバク転することで距離を開けつつ回避する。

「こいつ……マジで俺のスピードを見切ってる!」

『充填完了。サンダーブレイド・エクスターミネイションスタイル、いけます』

「一斉掃射! あいつの脳天から爪先までブチ貫け!」

樹海の上空を埋め尽くす無数の雷刃が、希繫の号令に合わせて一斉に統司へと降りかかる。だがしかし、これで終わる相手だとは希繫も思っていない。即座に体を雷撃体に変化させ、サンダーブレイドの発動に併せて出現した雷雲へと飛び込む。

雷雲の中で発達した希繫という名の雷は、その規模をより大きくさせて、サンダーブレイドが落ちた場所へと再び落ちる。

「これが俺の持ち得る最大にして最速の一撃——!」

『天禍・降雷砲!』

天上を灼く禍いの雷が、砲となって地に降り注ぐ。

蓬萊寺統司—エディター—

大地を砕かんとばかりの衝撃と轟音を伴って降り注いだ紅蓮の雷撃は、間違いなく統司へと直撃した。雷撃体から人体へと再変換して息を切らす希繫も、彼を貫いた感触を確かに感じていて……それでもなお、彼は残心を解かなかつた。

自分の「中」に居る白露に逢依と小転の無事を確認させつつ、希繫はその視線を雷撃によつて巻き起こった煙の中に向けたまま、気配を探っている。

「——ッ！」

「さすがに、ユナイトギアの扱いにはそちらに一日の長があるというわけだ。俺がドミナイトを使つたところで、これだけの威力は見出せないだろう。……だが、それだけだ。どれだけの威力があらうと、これは感情のエネルギーを用いただけの、ただの雷撃に過ぎない。雷を捌く技術なら、ある」

『降雷砲が、いなされた……?!』

「いなした……いや、間違いなく俺はあいつをブチ貫いた。だとすれば、耐えきつた理由にも想像はつく……！」

立ち込める煙が突風によつて吹き消されると、その中から現れたのは無傷の蓬萊寺統

司の姿であった。

「アカシックリヴアイブで歴史再現されている蓬萊寺統司は、もはや生きていたとは言えない。心臓も血液も脳も役割を果たしてはいない。お前は「蓬萊寺統司の再現」という、外見とスペックと思考回路を完全にコピーした実体のあるホログラムのような存在なんだろう?」

「察しは悪くないようだな」

「だから雷撃を受けても内臓にダメージがいかなかった。最初から内臓がないからだ。体表を焦がすことはできただろうが、蓬萊寺家秘伝の霊薬「蓬萊の妙薬」の再生力の前じゃ……!」

「なるほど、幼くして出奔した身と聞いていたが、この霊薬の効果を知っているとこのとは「当主の試練」はクリアしていたようだ。その上でこれを飲んでいないということとは……姉とは交わっていないということか」

蓬萊の妙薬。それは蓬萊寺家に代々受け継がれてきた秘伝の霊薬であり、命が尽きない限り全ての外傷を瞬時に万全にまで仕上げ直すと言われる。

ただし製造の手間やコスト、材料の希少性などの理由から蓬萊寺家当主のみが服用を許されており、一人前の純血の蓬萊寺の証明である「当主の試練」をこなした後、次世代の蓬萊寺を生み出すための儀式を行ってからでなければ使用は許されない。

そして、希繫と小転が出奔したのはまさしく当主の試練——『親殺し』をこなした直後であった。そのため、二人が交わることもなければ、蓬萊の妙薬を口にする機会もなかったのだ。

「そう言うお前は……」

「妙な思い違いはよせ。俺は妻である二並ふなみ以外を愛したことはない。これは……この力は、二並と愛し合った証だ」

「だったら……愛する妻を自分で選んだお前ならわかるだろう！」

それは——今まではただ統司を「蓬萊寺」として否定し続けた希繫が、彼の言葉を肯定した瞬間だった。

彼の愛が妄執的な偏愛だということは間違いない。だがそれだけに彼は一途だ。決して愛する相手を間違えない。常にたった一人にその愛を向け続けている。だからこそ——希繫は彼を認めながら、自らの想いも認めてもらおうとしていた。

「俺は逢依を愛してるんだ！ 姉さんは大事な人だけど、あくまで俺の姉さんなんだ！ 愛する人は自分で決める……誰にも口出しされたくない！ 俺は……蓬萊寺の掟なんかで自分の想いを縛られたくない！」

「……………」

希繫の言葉を聞いて、統司はその無感情な視線を逢依へと向けた。脳裏に過るのは、

いつも快活に笑いながら自分の愛を受け止めてくれる妻の笑顔で、それは逢依とは似ても似つかなかった。

ただひとつ気になったのは、この状況で逢依が視線を送っていたのは、警戒すべき敵の自分ではなく、自分よりも弱いはずの希繫だったこと。そうして再び希繫と向き直った時、ようやく理解した。

希繫と逢依の関係は、自分と二並のそれによく似ている。希繫が二並で、逢依は自分なのだ。惜しみない愛情を注いでいる自分だけでなく、愛情を受け止め続けた希繫でさえも逢依に対してこれだけの想いを口にしたのだから、きつと二並も同じ想いでいてくれたはずなのだ、統司はようやくそれを自覚したようだった。

「……俺は、愛していられば幸せだった。二並を愛して、二並がそれを受け止めてくれれば、俺の愛が間違っていないのだとすれば、それだけで幸せだった。二並が俺を愛していなくても、二並を縛った俺を恨んでいても……ただ、この愛を受け止めてさえいてくれるなら、それでよかった……」

「……………」

統司の言葉を聞いて、希繫は彼の黄金の瞳の中に移るものが自分でないのだと気付いた。視線は間違はなく自分に注がれているはずなのに、なぜか統司は自分に誰かを重ねて見ているのだと、希繫は彼の言葉を黙って聞いていた。

愛とは支配だ。誰かを愛することは、誰かを支配したいと願うことと同じなのだ。全てのものを愛することも、ただの一人を愛することも、相手を束縛し、相手を支配し、自分だけを見て欲しいと願ってしまふことなのだ、希繫は幼い頃に逢依から聞かされた言葉を思い出していた。

だがその愛が昇華し、博愛となった時——人は初めて、見返りを求めない真の愛に気付くのだと、婚代こんざいから聞かされた。彼は——統司はまだ、その博愛へと辿り着いていない。未熟だが、必死な愛なのだろう。それを理解して初めて、希繫は彼が——彼の心と感情が幼子のように純真なのだと気付く。

「だが、お前と二並はよく似ている。お前は愛を口にするような男ではない。お前はきつと二並と同じように、愛を受け止める側の人間だ。そんなお前が、あの女にそこまでの愛を抱いているのなら……二並も同じように、俺を愛していてくれたのかも知れない。だとすれば、俺は……!」

「……手を貸してくれとは言わない。お前を手伝うとも言えない。だから取り引きだ。俺は撫月なつきを殺し、蓬萊寺を滅ぼす。それを見逃し、全てを終わらせるまで干渉してこないなら、撫月からアカシックリヴァイブの力を持つユニイトギアを奪い、正式な装着者を探し出して二並を再現してやる。時間は掛かるかもしれないが……必ず見つけ出す」

「……仮にもあちらは蓬萊寺当主となった女だ。男兄弟はお前しかいないせいで蓬萊の

妙薬は口にしていないが、少なくとも純血の蓬萊寺として一人前の域に達していることは違いない。そんな女を、当主の試練をクリアした純血の蓬萊寺とはいえ鬼として15年ものブランクがあるお前に全てを託すほど、俺はお人好しではない」

統司は懐から『ドミネイト』を取り出すと、静かにたった一つの言葉を口にする。

「ドミネイト。リミットブレイク」

『了承。第一一号ユナイトギア・ドミネイト、リミットブレイクします』

リミットブレイク
限界突破。卓越したユナイトギア装着者にのみ許される、限定的かつ絶対的な力の解放。

しかし既に希繫はリミットブレイクから2分が経過。残るのはたった1分間だけ。故に、これ以上の言葉を交わす余裕は既がない。

『リミットブレイク。ロンリネスドミネイターの展開を完了しました』

「……交渉は決裂か」

「それはお前次第だ。お前が本当にあの女を討つだけの力があるかどうか、見定めさせてもらう」

瞬間、二人の姿が逢依と小転の視界から消えた。そう——希繫には蓬萊寺の子供に時折見つかる、特異な力がたったひとつだけ宿っていたことを、二人はこの時ようやく思い出した。

「「適応」した……！ ああの蓬萊寺統司に！」

逢依が「適応」と称するその力の正しい名前は、「サブバイバルシンクロニシテイ生存的同調化現象」——相手の力量を見極め、それが自分よりも明らかに格上の存在だった時、一時的に自分の地力を相手とほぼ同じ状態にまで引き上げようとする生存本能。

多くの蓬萊寺は常にあらゆる生命の「格上」であるからこそ、ほとんどがこの力を発揮できないが、希繫は違った。スピードこそ生まれつき伸びやすい傾向にあったが、パワーや頑丈さは貧弱そのもので、多くの蓬萊寺が無効化できる毒や薬すら影響を受けてしまう。

だがそんな彼だからこそ、この力と非常に相性がよかった。弱いからこそ、強い者と渡り合えるのだ。

「わたしでも……目で、追えない……速度……。これは、もう……リニアちゃんすら……超える、本当の……「最速」……！」

圧倒的なスピードの中で、希繫と統司は互いの出し切れる手札を全て使いながら切り結んでいた。

ロンリネスドミネイターの「絶対支配」によって思考を「選択↓中断↓再選択↓決定」するプロセスを途中でカットすることで思考停止状態にさせようとする統司に対し、希繫の「適応」によって適合係数が飛躍的に上昇した白露によってノータイムで再選択し、

彼がすべき本来の動きを再現される。

攻撃の手に関してはやはり統司が上手であった。元々、ユナイトギアに頼らず世界人口の数十パーセントをこっそり地獄に叩き込んだだけあって、ユナイトギアによって身体能力を底上げされた彼の攻め手は、希繫に防げる手数と技術を明らかに超えていた。

だが希繫もまた、蓬萊寺を出てレイドリベンジャーズとして戦い続けた身であり、ユナイトギアの扱いは彼が上であった。リミットブレイク、ユニティバレット、逆流現象による基礎能力の向上に加え、何よりスキルの使用タイミングとコンビネーションが巧みであったことが統司と切り結ぶにあたって極めて大きな意味を成している。

目晦ましの雷光「エナジースパーク」によって統司の視界を奪い、彼を囲むように「スパークステインガー」を展開・一斉掃射。しかしこれらを全て『絶斬』のみで断ち切った統司が希繫に急接近。避けても逃げても意味がないと察した希繫は雷撃体に変換しつつ「アクセルアクション」でさらに加速し、統司の身体をすり抜ける。

実体がないため相手にダメージを与えずすり抜けるものの、仮にも希繫の身体は雷撃体。高圧電流が統司の体を焼くものの、歴史再現によって形作られた彼に内臓はなく、外傷は蓬萊の妙薬によって全快してしまう。しかも通り抜ける瞬間に絶斬に切り付けられた左腕は空中に霧散して消滅。すぐに再生するものの、痛みに表情が滲む。

外傷もダメ、内部破壊もできない。だからこそ解決手段は「和解」だけであったはず

なのに、彼はそれを拒むことさえしないものの、無暗に肯定もせず希繫を品定めしている。

「白露、あいつに有効そうなスキルは？」

『えつと……クリムゾンインパクト、サンダーフォールは隙が大きすぎます。エレクトロシヨック、フラッシュパルス、レイジングデイスチャージは触れさせてもらえないでしょうし論外です。防御用のリアクターシールドに至っては絶斬がある以上、足場にか使えません』

そうなると、隙が少なく接触必須でない攻撃技は「エナジースパーク」と「スパークステインガー」のみ。補助技として「アクセルアクション」があるが、この三つは既に使い切った。

どう足掻いたところで手詰まり。万に一つの勝ち目もなく、一万と一つめの策も浮かばない。だが、それでもやらなければその先にあるのは地獄だけ。

「ならスキルはもう使わない。エクレール！」

『ユニティバレットを——』

「そうはさせない」

希繫の意図を読み取り、エクレールが右足のホルスターバッグから赤色のユニティバレットをプレスレットに装填しようとすると、十字型の何かがそれを阻むように弾き飛

ばした。

「手裏剣……ッ!？」

「どうした。忍者が手裏剣を使うのがそんなに珍しいか？」

そう、蓬萊寺は元々殺人集団ではなく忍者の家系である。そのため蓬萊寺の中でも歴代最高峰の蓬萊寺である彼が手裏剣の扱いにも秀でているのはなんらおかしいことではない。

互いに木の枝や幹を足場に、さらに加速して攻防を繰り広げ——そしてついに、希繫とエクレールに「その時」が訪れた。

『申し訳ありません、ディアマスター……ッ!』

「いいや、よくやってくれたエクレール」

『リミットブレイクの使用限界に到達しました。桐梨希繫への同調接続^{アックセス}を遮断します』

グロワール・エクレール・ルミエールの使用限界により、エクレールが待機状態へと戻ってしまった。そしてそれに伴い、絶斬に対する唯一の対抗手段である雷切をも失ってしまう。

残されたのはシンクロナイザーと御霊鎮之紅瑠璃のみ。

「……までのようだな」

「……いいや、まだだ。俺の心の滾りは、まだ燃え尽きてない！」

既に手札の大半を失った。彼の切れる札はもう皆無に等しい。

でも、だからこそ——。

『シンクロナイザー！ お父さまをお願いします！』

『了解。第四六六号ユナイトギア・シンクロナイザー、リミットブレイクします』
自分だけでは切れない手札が、今この時ばかりは切り札ジョーカーとなるのだ。

月輪―クレセントリング―

『リミットブレイク。イグナイテッド・シンクロナイザーの展開を完了しました』

希繫きづなの背後に出現する月輪型のオブジェクトと、彼の首根から伸びる白銀のマフラー。そして何より特徴的なのは、無数のブレードを纏った尾のようなアーマーパーツと、頭部に生えた大きな耳のようなアンテナパーツ。

そう、それは間違いなく人の命を吸って生き続ける蓬萊寺ほうらいじを討つための、白銀の弾丸であり白銀の狼――この窮地に爆発するかのように燃え盛った希繫の感情と、そんな彼にどこまでも同調し続けた白露しろろの心だけが生み出した奇跡の形態。

「これが白露のリミットブレイク……なるほど、逢依の時と比べると少し癖は強いが、それでも十分！ イグナイテッド・シンクロナイザーの「癖」は俺によく合う！」

グロワール・エクレール・ルミエールとは異なり、イグナイテッド・シンクロナイザーの装着者は希繫ではなく白露であるため、全てのスキルの発動とそのタイミングは白露に委ねられている。

また、身体能力の向上配分がエクレールとは違うため、先ほどまでと比べてパワーと強靭性が高くなった代わり、スピードが僅かに低下しているばかりか、ギア特性も「相

互変換」ではないため雷撃体になることもできなければ、ユニティバレットにも頼れない。

ましてや、ギア特性にいたっては希繫の肉体に宿って感覚を共有していること自体がそれにあたるため、あとは底上げされた身体能力とスキルだけで戦わなければならぬ。

——それでも、相手が蓬萊寺統司^{とうじ}であるからには、むしろ無暗にスキルを発動できないこの状況こそが最大のメリットになっていた。

『申し訳ありません、お父さま。シンクロナイザーはわたしのスタイルに合わせて身体能力を強化してくれているので、お父さまのスタイルには……』

「構うものか。トップスピードが落ちたくらいなら俺がいつも以上に速くなれば補える。どうせあいつ相手にスキルの発動はデメリットが勝ちすぎる。この場じゃどうしようもないパワーとタフネスを補ってくれただけでも、俺にとっちゃ万々歳だ！」

雷撃体になれない以上、もう超光速では動けない。だが移動速度と動作速度に関しては元よりあちらも同じ条件。統司が希繫の攻撃を全ていなしでこれたのは、あくまで常人離れた動体視力と経験から来る直感によるものだ。だからこそ、希繫も同様にあちらの攻撃をかわすことも、理論的には可能はず。

しかし動体視力に関しては希繫も劣っていないはずだが、さすがに直感に関しては天

性の才と経験の数が違いすぎた。希繫は蓬萊寺の生まれとはいえ、婚代に保護されてからレイドリベンジャーズに所属するまでの数年間を平和な時の中で過ごした身。それに対し、あちらは生まれてから死ぬまでを殺すか殺されるかの世界で生き続けた殺人鬼。

「……なるほど、速さが犠牲になった分、攻撃と回避の正確さが増したか」

『お父さまの言う通り、彼が相手ではスキルを使う暇がありませんね。むしろ、スキルの予備動作が隙になってしまいますし……』

「俺に出し切れるトップスピードで攻めて躲してらつてのに、涼しい顔で避けてすり抜けてきやがる……ッ！」

リミットブレイクの最大の特徴であるチャージなしのスキル発動も、おそらくは彼に對してまったく意味を成さないだろう。

逢依^{あいつ}が戦える状態であれば、あるいはどうにかなったのかもしれないが、身重の彼女を戦力に数えるわけにはいかないし、彼女を放り出して小転^{こころ}をこちらに加えるのも危険が伴う。共に戦ってくれる白露が居てくれるだけでも、希繫のメンタルはかなり助けられていた。

だが、白露の武器であるシンクロナイザーの真骨頂は自身を他者に託してしまう。つまり、1＋1＝1になってしまおうというデメリットを抱えていた。しかしそれでも――

この「一」を孤軍奮闘の「孤」などとは誰も言うまい。希繫は間違いなく白露と共に戦っていて、白露も間違いなく希繫を支えている。この「一」は、一騎当千の「一」なのだ。希繫の上段回し蹴りを上体を逸らして躲した統司が、その軸足に足払いをかけて絶斬タチキリを振り下ろす。さつきまでなら雷切ライキリで受け止めたところだが、御霊鎮之紅瑠璃みたましずめのくるりに「不壊」のエンチャントは無いため、希繫はこれを体を横に捻ることで回避。

そして地面に突き刺さった絶斬を持つ腕に裏拳を打ち込むと、その痛みで顔を顰めた一瞬で間合いを開けて立ち上がると、得意の飛び蹴りを放った。エクレールのスキル『クリムゾンインパクト』ほどのスピードはないが、体を電気に変換しない分、こちらはその突進力がそのまま威力になる。

とはいえ、それをまんまと受けるような統司ではなく、希繫の突き出した左足を左手で外へと受け流すと、通り過ぎた背後に絶斬を突き立て——ようとして、それをシンクロナイザーが彼の腕ごと巻き取って阻み、そのまま対角線上に生えていた木を足場に、再び統司へと反転——『反転キック』を叩き込んだ。

「くっ……！」

「絶斬を持たない左腕一本で俺の蹴りを受け止めた……ッ!?」

「悪くない一撃だ……なら、こちらも相応の手札を切らねば無作法というものだろう。せめてその真紅の瞳に焼きつける、蓬萊寺流忍法の荒々しくも美しき妙技を！」

イグナイトテッド・シンクロナイザーの月輪が白銀に輝くと同時に、統司の姿が希繫の視界から消失する。スピードでこそ追えなかったが、彼の爪先の向きから希繫がすぐさま左へと向き直ると、そこにあつたのは無数の統司の分身であつた。

しかし統司の持つロンリネスドミネイターの能力が『決定権の支配』である以上、あれらは実体を持たない幻影かあるいは残像だと判断し、希繫はその無数の分身へ怯むことなく迎え討つた。

「蓬萊寺流忍法——クラスターハザード群生飛蝗の術」

「分身がさらに分かれ身となつて……ッ!?　だがそれでも、俺と白露のシンクロナイザーならッ!」

今にも視界を埋め尽くしかねないほどに増殖し続ける分身たちを、尾に装着された小型ブレードで迎撃するが、分け身とはいえ相手は蓬萊寺統司。ブレードによる直線的で単調な攻撃をまともに受けるものなどほとんどなく、数体の分身を消すことができたのも、彼ら自身が自分の分身を盾にしたからだろう。

それでも、迎撃のために自らの視界を分身で覆つた個体は、その一瞬が命取りとなつて希繫の蹴りを叩き込まれ、これもまた消滅。直後、数十の分身が同時に絶斬を突き出してきたものの、希繫はこれらの刃を全て空中兩足回し蹴りバラフーズで押し折る。

いくつかの群れはシンクロナイザーを伸ばして巻き付け、地面や木に叩き付けて一

掃。ある群れは御霊鎮之紅瑠璃による刺突攻撃でひとつひとつを的確に対処、そして他の群れも先程の反転キツクの応用——複数の木を足場にした『多段反転キツク』による連続・多角度からの攻撃でその数を減らしていった。が——しかし。

「こ、これはッ！」

「ふむ……さすがに気付くか」

『これは……お父さまが足場に使った木の葉……!?』

「動くモノを自分の分身に見せかける技か……！」

それだけではない。動くモノを術者の分身に見せかけるだけではなく、その分身によつて受けた『傷』は現実として現れずとも、その『痛み』は残る。傷を受けたと誤認した脳が、その痛みを本物さながらに再現してしまうからだ。

「白露ッ！」

『誤認識を修正……目視による知覚映像の再認識を行います！』

「やはり知覚情報の誤魔化しではすぐに対処されてしまうか……ならば、今度はシンブルに行こうか」

そう言つて取り出したのは、たったひとつの手裏剣。いくら統司といえど、手元を離れて放つ攻撃では希繫なら容易に躲してしまうことなど想像しているはず。なのに何故、とは敢えて考えないようにする。

ここは対処に余裕を持ったため、統司の先手を待つ。すると彼は躊躇なくその手裏剣を希繫へと向けて投擲。当然、希繫はこれを避けて接近を計ろうとするも――、

「蓬莱寺流忍法——手裏剣メタルトルネード旋風の術」

「竜巻……ッ!?!」

手裏剣を追尾するように出現したいくつもの竜巻が、希繫の行く手を阻み、そしてそのまま彼の体を吸い上げて上空へと放り投げた。

足場のない空中ならば、とさらに数本の苦無クナイが投擲されるも、希繫はこれを空気をキックすることで回避、迫る数本の苦無を掴み取り、逆に統司へと投げつける。

「白露——」

『わかりました！ シンクロナイザー！ 月の光を！』

希繫の背後を追尾する月輪が、この夜を照らす光を集めて白銀の輝きを増していく。

「隙だらけだとは思わなかったのか？」

しかし、光を集めるために滞空状態を保ち続けなければならず、その場から一切の動作が行えないこの一瞬を逃すような統司ではない。

四つの苦無を組み合わせて巨大手裏剣へと変化させると、彼は躊躇なくそれを希繫へと向けて放つ。

——だが。

『ゴウカケンラン
劫火拳乱』

この天空を橙に染める太陽にも見紛うような巨大な炎の塊が、その巨大手裏剣を阻—
—否、溶かし尽くした。

「橙の、炎……?」

「よお、祭りの場所はここか? オレも混ぜてくれよ」

月に光を与え続ける太陽が、この地上を焼き尽くさんと現れる。

父親―ガーディアン―

「よお、祭りの場所はここか？ オレも混ぜてくれよ」

「大郷悠生、だと？ 何故ここに……いや、なるほど。俺の技で吹き飛ばされた時に大郷悠生を見つけ、あの隙だらけの技で自分の場所を教えつつ、攻撃を誘って俺の場所まで知らせた、ということか。だが俺の連ね手裏剣も生半の技ではない。必ずしもお前を守ってくれるなどという確信は――」

「確信ならあった。なぜなら悠生は俺の兄貴で、俺たちのことをずつと守ってきてくれた家族だ。だから、俺が危険だとわかった以上、絶対に守ってくれとわかっていた。お前の攻撃がどんなに強力だとしても、家族を守るためなら悠生の「最強」がそれに負けることなんてありえない！」

希繫きづなが繋いだ希望は悠生という名の炎を聖火パトーンのように渡すのではなく、松明のように互いに分け与えながら輝きを増す。

ここは暗闇。目の前に立つのは蓬萊寺統司という最凶にして最悪の『死』の象徴。だがそんな状況だからこそ、ほんの少しの松明の光がより眩しさを強くする。絶望の中で輝く希望のように。

希望はそれ自体が強いものではない。夜空に光る星のように、それ自体はただひとつの小さな点だ。だが——それを繋ぐキズナこそが希望と希望を繋ぎ、星は星座となる。

そして今——ここに七つの星を束ねたもうひとつの星座が現れようとしていた。

「お兄さん！」

「優芽！」

空中に開いた虚空の裂け目から現れ希繫と悠生の前に着地したのは、今まで何度も希繫を救い、助けてくれた最高の仲間——和泉優芽。

「ひとつひとつは決して恐ろしい存在ではないが、それを束ね連ねて数以上の力にする……キリなしのキズナ、か……。それがお前の力……。お前の強さか、桐梨希繫！」

「…………… そうだ、これが俺の……。俺たちの強さ！ 家族や仲間との繋がりが、他のどんなアームズよりも強い、俺のアームズ！ 俺の絆ユナイトギアの武器だ！」

虹色は七つ色。複数の色が絶妙に混ざり合い、それでいて決して反発せず溶け合う色。

橙色は燃える色。天上に頂く光となってあまねく全てを照らし出し、闇を振り払う強き色。

赤色は生きる色。あらゆる生命に巡り、決して立ち止まることなく全身を駆け抜ける眩き色。

真紅と橙と虹。三つの色はここに揃う。間違いなく繋がっているのに各々の色を滲ませることも汚すこともなく、だどいうのに離れているわけでもない。混ぜり合っていて、混濁としない——これが絆だというのなら、これが希繫が繋いだ希望であり、力だとするのなら、それは……。

「それは……蓬萊寺にはない力だ」

「何……？」

「ユナイトギアなら奪えばいい。蓬萊寺の力なら備わっている。生存的同調化現象などただの病だ。だから……お前がどんなに力を誇示しても、俺はお前を認めるつもりなどなかった。その程度なら、蓬萊寺撫月には敵わないからだ。だが、桐梨希繫……お前はついに蓬萊寺にはない力を示した」

たった一人でできることは、たった一人分のことだけだ。それがどんなに強大な力を持つていたとしても。だが、二人でいけば……三人、四人と数を増やし、信頼と親愛を紡いでいけば「数」以上の力が発揮できる。それが希繫の示した「絆」の力だ。

弱くてもいい。強いならなおいい。だが、たった一人の力では「たった一人の蓬萊寺」には敵わない。なぜなら蓬萊寺は「たった一人」の災厄なのだから。しかしだからこそ、たった一人じゃなければ勝ち目はある。烏合の衆ではなく——揺らぐことのない絆で繋がれた者たちならば。

「……桐梨希繫。お前に二並の命を託す。そして二並を取り戻せば、二並に危険が及ばない限り誰も殺さない」と約束しよう。だから、必ず撫月から『リライズ』を……妻の命を奪い返してくれ」

リライズ。それが蓬萊寺撫月の持つユナイトギア——『アカシック・リヴアイヴ』を引き起こす歴史再現ギアの名前。

希繫はその名を確かに刻み込むと、静かに頷き、そしてその真紅の瞳で統司を見つめ返した。

「統司、俺を連れていけ」

直後、全員の視線が希繫へと集まった。

「他のみんなは俺を庇って死んでしまったことにして、俺だけを連れていけ。仮にも当主の試練はクリアした身だ。俺が蓬萊寺家にいれば、リライズの在り処がわかる。運がよければ奪えるかもしれない」

「だが、あれは腹違いとはいえ、あれはお前の妹だ。混ざりものでも蓬萊寺の血が流れている。だからこそ、家臣たちは必ずお前に撫月との子を成せと強要してくるぞ」

「仮にも当主の試練はクリアした身だ。殺人鬼としてのリハビリは必要だろうし、場合によっては「仕事」もこなさなければならぬだろう。だが、子供を作る時期くらいは選ぶ権利があるはずだ。どんなにあちらの気が短くとも、一年くらいは」

一年。それは希繫の提案する、最短のタイムリミット。

「二年……。まさか、希繫……!!」

「そうだ。俺は一人で戦うわけじゃない。統司が俺を認めてくれたのも、俺が一人じゃないからだ。大事な家族がいて、たくさんの仲間がいて……。俺を愛してくれる人がいる。だから、俺は一人じゃ戦わない」

そう言うと、希繫は白露との装身を解除し、彼女を抱きしめた。

「白露。逢依……。お母さまと、そのお腹の子を守ってあげてくれ」

「いや……。いやです……。そんな、おとうさま……。そんなこと……!!」

シンクロナイザーによって思考も行動も同調していた白露は、希繫のやろうとしていることの全容を把握していた。

そして希繫は、白露はその全容を理解できると知って、今思いつく限りのあらゆる策を彼女に共有させた。

「悠生、優芽……。必ず取り戻しにくる。必ず帰ってくる。だから……。それまで俺の大切な家族を、頼む」

「二年もいらねーよ。すぐにテメーを取り返してやる。せいぜい実家暮らしを満喫してろ」

「必ず取り戻してみせます。それまでどうか、ご健勝で」

希繫の真意を理解した二人は、彼を止めることなく、それに頷いた。

そして、未だ泣きじやくる白露を優芽に任せると、希繫は逢依の元へと近づき、彼女の視線に合わせるように跪いた。

「逢依、どうか元気な子を産んでくれ。そして俺を助けてくれ。俺はいつでも、お前だけを愛している。お前以外の女なんて、抱きたくない」

「……この子が産まれる時、あなたは居ないのよ？ この子に名前をつけてあげられないのよ……？ この子を私の次に抱くのは、あなたじゃないのよ……！」

「そうだな。正直、悔やむことばかりだ……。でも、俺だけなんだ。統司を止められるのも……蓬萊寺の進攻を止められるのも……お前と白露とお腹の子を守るのも、俺だけなんだよ」

「ズルいわ、そんな言い方……」

人質じゃない。蓬萊寺じゃない。希繫は——父親なのだ。

家族のためなら……どんな傷も、どんな屈辱も受け入れて、他の何を犠牲にしても絶対に家族を守り抜く。それが父親の——家を守る者の使命なのだ。

「俺は蓬萊寺夜縋ほららいじよすがじゃないんだ。俺は桐梨希繫なんだ。だから頼むよ逢依……。俺を、桐梨家の父親でいさせてくれ。お前たちを守らせてくれ。そして……俺を奪い返してくれ」

「……約束よ。絶対に、他の女なんて抱かないで。私以外の肌になんて触れないで。私たち家族だけを、愛して……っ！」

「ああ、もちろんだ」

二人はどちらからともなく口づけを交わすと、まるで互いを刻み込むように強く抱き締め合った。

互いの温かさを忘れないように。互いの柔らかさを忘れないように。互いの絆と愛を忘れないように。

「……姉さん。逢依をお願い」

「うん……。……希繫、こういう時は……。我慢、しなくていいんだよ。泣きたいなら……。泣いて、いいし……。父親として、他の誰にも弱さを見せられないなら……。お姉ちゃんの前でくらい、泣いてもいいんだよ……。だってあなたは……。わたしにとっては……。父親でも大黒柱でもない、ただの……。大切な弟だから……」

そう言つて小転が大きく手を広げると、希繫はとうとうこみ上げる熱を堪えきれず、彼女の胸に縋つて泣いた。

「行きたくない……。……！ 本当はみんなと一緒にいたい……。……！ 蓬萊寺になんて戻りたくない！」

「うん……」

「初めて逢依のお腹に命が宿つてるところを見たんだ！ 生まれたら一緒に居たい！ 逢依によく頑張つたって、ありがとうって言いたい！ 逢依と一緒に名前を考えて、ああでもないこうでもないって言い合いたい！ 生まれた子を最初に抱くのは逢依にだって譲りたくない！」

「うん……」

でも、と小転から離れると、希繫はその涙を拭つて、周りにいるみんなを見渡した。「逢依を守りたい。白露を守りたい。お腹の子も、姉さんも。悠生も、優芽も……家族も仲間もみんな守りたい。そう思つたら、俺が蓬萊寺を食い止めるしかないんだ。そして、その間の家族をずっと守つていられるのは姉さんだけなんだ。だから姉さんまで連れていくわけにはいかない」

「うん……。わたしがついていけば、蓬萊寺の、血が流れる子供を……お腹に宿す逢依ちゃん……白露ちゃんが、危ない……。だから……絶対に守るよ……弟の、家族を……。そして……弟のあなたも、決して見捨てたりしない……。奪われた家族は、必ず奪い返す……！」

ちらり、と小転が視線を向けると、統司は何も言うことなくそれに頷いて希繫の肩に手を乗せた。

「希繫のことは俺に任せておけ。直接は干渉できないが、さすがの撫月や家臣たちも、ま

してや純血でない成り上がりの蓬萊寺など、決して俺を敵に回すつもりはないだろう。水面下での動きなら、こちらが対応しておく」

「ありがとう、統司。しばらく世話になるよ。そして……みんなごめん。でもきつと帰ってくるから。みんなが俺を奪い返してくれるって信じてるから、行ってくる。だからその時までしばらくのお別れだ」

——行ってきます。

5. 5th season — 雌伏の復讐者編

雌伏—バイド—

桐梨希繫きりなしきづなが蓬萊寺ほうらいじによつて連れ去られてから半年。レイドリベンジャーズ永岑支部では部隊編成の大幅な変更を余儀なくされた。

最強のレイドリベンジャーズ・大郷悠生おほさとゆうきを隊長に据えた第一部隊からは、優秀なサブリーダーを務めていた海風総交みなぎそうまが第二部隊の隊長として引き抜かれた。

その第二部隊では、前線指揮の担当者としてまだ加入して間もない土中美蓮つちなかみれんが抜擢され、主戦力もちづきめあに望月芽愛もちづきめあを置いた戦略パターンを一から構築し直すことになる。

また、桐梨希繫きりなしきづなが連れ去られたことで、同時に彼の所在を探っていた四条杏樹しじょうきようきもまた、その役目を終えたことで自らの今後の振る舞いを迫られた。

今ここで蓬萊寺ほうらいじに戻れば、早智さちと九衣くいを危険に晒すことはなくなるだろう。しかし、そうなれば彼らとは二度と会えなくなってしまう。しかし、彼らと共に居れば蓬萊寺ほうらいじが自分を取り戻すために二人に危害を加えるかもしれない。

そうして苦しみ、悩み抜いた先で得た答えは、意外にも蓬萊寺ほうらいじへの帰還であつた。彼女は自らの意思でその旨を二人に伝えると、当然ではあるが反対された。しかし、自分

が蓬萊寺に戻ることで二人を守り、そしてもしかすれば抜け鬼として戻ってこられるかもしれない可能性を提示したことで、二人はそれを不承不承ながら了承した。

そして——ここはレイドリベンジャーズ永岑支部の情報統制部。世界中のレイドリベンジャーズ・ネットワークとあらゆる情報を共有し、それぞれの部隊に正確な情報を与え、そして預かる部署。

その情報統制部に所属する期待のホープこと和泉優芽は、第二前線部隊に務める早智づてに協力を得られた杏樹と連携し、蓬萊寺家について調べていた。

とはいえ、蓬萊寺は裏切りを決して許さない組織。一度ウィルフに刃を向けたことのある杏樹は、一部の蓬萊寺から特に警戒されていた。

故に杏樹は蓬萊寺の内部で抜け鬼を目論む仲間を作り、その仲間が優芽に接触し、紙媒体で情報を与えるというアナログな手段を強いられることとなる。

「——ということ、今わかつている情報をお二人に共有しますので、どうか内密に」
「任せろ。隠すことと騙すことに關してはそれなりに長けてるつもりだ」

「その人選、本当に僕たちでよかつたの？」

優芽が状況を共有するために選んだのは、西郷叶枝さいこうかなえと月村義陰つきむらよしかげ。そう、かつて優芽が対峙した者たちであり、叶枝は時折レイドリベンジャーズと協力体制をとるものの、基本的には『レイドリベンジャーズ』からも『杏樹の友人』からも遠い二人であった。

しかし優芽が声をかけると、二人は驚くほどすんなりとその呼びかけに応じた。叶枝は「友人の菊菜を助けるために」、義陰は「自分を信じてくれた恩を返すために」と、両者どちらも希繫を助けることに異論はないとのことだった。

「ではまず、お兄さんの無事は確認されています。しかし……お兄さんが蓬萊寺に到着して間もなく「任務」にあたり、この手紙が届くまでに既に8名を殺害。心を擦り減らしながらも、家臣からの再三にわたる代継ぎ作りコールだけは頑なに無視しているとのことです」

「確か、蓬萊寺ではその血筋を色濃く残すために兄妹あるいは姉弟で子供を作るんだっただな。それ、桐梨希繫がガン無視するのはわかるが、もう一人の方は納得してるのか？」

「そのようですね。蓬萊寺撫月の背景については、以前お兄さんが蓬萊寺ウィルフと対峙した際にある程度の背景を掴んでいます。元々はお兄さんの父親……先代当主とその妾の間に生まれた、蓬萊寺としては「混血」の子であり、お兄さんからすれば異母妹ということになるそうです」

希繫の腹違いの妹——撫月。彼女は母親から引き離され、蓬萊寺当主としての教育を受ける過程で「蓬萊寺らしい考え方」を植え付けられ、兄妹での交わりや人を殺すことへの抵抗・忌避感を失っていったという。

幼少時代の希繫もその「教育」によって人格形成されており、小転こころに手を引かれて逃

げ延び、婚代こんざいによって矯正されるまで、それが当然だと思っていた。

しかし、矯正されて一般的な常識や良識を備え、十何年も過ごしてきた希繫でさえ、彼らに施される教育という名の洗脳を振り払うにはエクレールによるショック療法を用いているという。

「……ちなみに、桐梨希繫を取り戻したとして、彼が蓬萊寺として行い続けた殺人行為はどうやって処断するつもりなんだ？」

「蓬萊寺による洗脳、殺人教唆と強要、情状酌量の余地もろもろを鑑みても、さすがに潔白とはなりません。お兄さんも、それは望んでいないでしょうし」

「ま、あのクソ真面目の桐梨希繫らしいっちゃらしいか」

「だろうね。僕もそれが最適解だと思っよ」

できればすぐにでも妻や子供たちの元に戻り、レイドリベンジャーズとして人々を守る仕事に従事したいというのが本音ではあるはずだ。しかし、そのために自分が背負うべき罪と与えられるべき罰を投げ捨てるようなことは、他の誰でもない彼自身が最も許さないだろう。

だからこそ、その罪を少しでも減らすために、希繫がこれ以上の殺人を犯す前に、一日も早く彼を取り戻さなくてはならない。

そして、そうしなければならぬ理由はもう一つ……。

「杏樹さんがお兄さんに接触した際、直接聞いた話によれば、このまま代継ぎ作りを断り続けられ、強硬派の家臣が何かしらの手を打ってくるかもしれないとのことでした。純血の蓬萊寺であるお兄さんに普通の薬や毒は効きませんが、蓬萊寺謹製の薬は多少なりともその効果を受けてしまうかもしれません」

「あー……蓬萊寺謹製つてあれだろ、現代技術では再現不可能と言われるオーバートゥテクノロジー埒外超常技術。「切断」の概念を付与された刃なら物質・概念の区別なくあらゆるものを切断してしまうし、「淫蕩」の薬を飲ませれば周囲の生物全てに死ぬまで発情して最終的に発狂するつていう」

「えっ、こわ……。埒外にも限度つてものがあるでしょ。何、その「切断」つてペーパーナイフで7ミリの鉄板をスパッと切るみたいなこと？」

「なんなら東京タワーの鉄骨もふやふやのバターみたいに切断するし、人と人との縁だつて切つちまうらしいぞ」

人と人との縁を切られる。そう言われて義陰の脳裏に浮かんたのは誰であったか。口にした叶枝もまた、一人の少年との絆を想い、身を震わせた。

「蓬萊寺ヤバすぎない……？」

「ヤバいに決まつてるだろ今さら何言つてんだ」

さも常識だろという様子の叶枝ではあるが、彼自身も希繫と同じ絆ファミリーの家族の一員であ

る望夢^{のぞむ}經由でそれを知った時は腰を抜かすほど驚いたものだ。

「続けますよ？ お兄さんと接触した杏樹さんは、蓬萊寺内部で抜け鬼を企てる仲間を数人集い、我々が蓬萊寺を襲撃するタイミングに合わせて反旗を翻す用意をしているそうです。蓬萊寺統司の助力もあり、現時点ではまだ尻尾を掴ませてはいませんが、それも長引くほど危うくなります」

「タイミングは早けりや早いほどいいのは間違いない、か……。こつちの切り札はやはり大郷悠生か？」

「戦力的にはそれで間違いないだろうね。けど、もしも力だけで桐梨希繫を取り戻せなかった場合には、その声が届くのは彼の姉でも娘でもなく、桐梨逢依だけだ。彼女の復帰を待たずに狼煙は上げられない。……予定日は？」

「3月の14日。妊娠後期でお腹もすつかり大きくなつていて、とてもじゃないですが戦えるような状態じゃありません。それに、出産後しばらくはリハビリも必要です。体型も戻さないと戦闘なんて出来るはずありませんし……」

赤ん坊が生まれればすべてが解決、とはならない。産後しばらく母親は身体的にもダメージが残った状態であり、その状態のまま赤ん坊にも対応しなければならず、睡眠時間も削られるため体力・精神力もどんどん削られていく。

幸い、桐梨家にはそういう意味で理解者となる小転がいる他、現在彼女たちは笹倉家

で隠遁生活を送っているため、婚代もその手伝いに参加してくれろということ、逢依は療養とりハビリに集中していいと言われてる。

だがやはり夫である希繫の不在は、精神的に多大なダメージを与えるだろう。ただでさえ不安定な精神状態で、夫は蓬萊寺に連れ去られ、あまつさえ強制的に他の女を抱かされそうになっている。彼をどれだけ信じようとしても、弱ったメンタルでそうした不安を振り払うことは難しい。

「僕ら男にはわからないから聞くんだけど、リハビリつてどれくらい必要なの？ えつと、期間的な意味で」

「まず、まともに立ってシャワーを浴びていいのが三日くらい経ってからです。一か月でようやく簡単な家事をしてもいい程度で、体がちゃんと元通りになるには一ヶ月半から二ヶ月かかることもあります」

「最長二ヶ月として、桐梨希繫の読み通りならタイムリミットは7月中旬。産後二ヶ月ってことは、5月も半ばじゃねえか……!」

「いえ、体型を戻す運動に併せて、戦闘感覚を取り戻すためのリハビリもしなければなりません。生半可な状態では、蓬萊寺との戦場では足手纏いになってしまいますから。なので、どんなに早くても逢依先輩が「完成」するのは——」

7月上旬。それが優芽の導き出した答タイムリミット えであった。

「ギリッギリすぎるだろ……!」

「そうだけど……愚痴つても意味がないよ。ここはポジティブに考えよう。その「ギリギリ」までこつちは対策を練って準備できるんだ。つまり、出来る限りの戦力と情報を集めるために使えるってことだよ」

「義陰さんの言う通りです。逢依さんの「完成」を間に合わせつつ、こちら最大限の準備をするべきです。そのために、お二人に協力を要請したんですから」

そう、優芽がこの二人を選んだのには理由がある。

「義陰さんはORBから武城誠実たけしろせいじさんに接触、彼に協力を要請してください。私はレイドリベンジャーズで、お兄さんとも個人的に繋がっていますし、何より蓬萊寺とも接触したことがあるので、蓬萊寺の注目を引いてしまいますから」

「わかった。誠実さん伝いに抜け鬼にも接触しろってことだよね」

「はい。叶枝さんは大郷先輩とは別の意味で、こちらの切り札になってももらいます。そのため、望夢さんを伴ってしばらくあたしの護衛をお願いします。上手く行けば……蓬萊寺を出し抜けるかもしれません」

「……なるほど、それならお手並み拝見といくか。望夢にはどこまで話していい?」

「叶枝さんの裁量に委ねます」
「ここから、リベンジが始まる。」

主命—オーダー—

逢依あひの出産予定日まで残り二週間というところまで近づいた3月の頭。京都府世よもぎやま挽山の山奥、蓬菜寺ほうらいじの屋敷では、「任務」を果たして帰還した希きづな繫に対して、一人の少女がタオルを手に彼を迎え、周囲の蓬菜寺たちは全員が深く頭を下げた。

杏樹きょうき。俺の不在の間、撫月なつきに変わりはなかったか？

「はい。小夜さよと共に……札遊びさしあそびに戯れ……先ほど、お眠りになりました……」

「統司とうじの様子は？」

「最後の報告では……厨で、食事を……作っていたようですが……彼には、あらゆる情報けいほうが……意味を、持ちませんので……」

それもそうか、とタオルを受け取って汗を拭うと、彼は杏樹を伴ったまま屋敷の奥へと入り、撫月なつきの元へと向かう。

その間にも、周囲から感じる異様な雰囲気は、まるで心を蝕む膿うみのように、彼の感情をじくじくと喰らっていくのを、彼だけではなく杏樹も感じ取っていた。

「撫月」

「夜縫よすがお兄様！ どうぞ、お入りください」

返事を待つて部屋に入ると、そこでは布団から起き上がり、服を着替えようとしている長い黒髪と黒目を持つ長身の女性が、彼の顔を見るなり嬉々とした表情で素肌を隠そうともせず近づいてきた。

しかし希繫はそれになつたく表情を変えることなく、あるいは逆に興奮を削ぎ落されるような気持ちで彼女を迎えると、その真紅あかく昏い瞳くろで彼女の奥に佇む小夜を見つめた。

「此度の任務について、少し話がある」

「いかがされましたか？」

「単刀直入に言えば、こちらの襲撃を予測した警備が行われていた。結果的に支障はなかったが、明らかにこちらの情報がどこから流れているのは疑うべくもない」

「では、お小夜に探らせましょう。お兄様の飼いだでは目立ちますから」

当主の飼いだとされるだけあって、杏樹の殺人鬼としての腕前は間違いなく優秀であるが、ユナイトギアを使用した場合においてもそうでない場合においても、彼女の得意とする殺人スタイルはその圧倒的なパワーを利用した大量殺人である。

そんな彼女とは逆に、もう一人の当主の飼いだである小夜は、単独での戦闘能力こそ杏樹に及ばないものの、闇討ち・毒殺などによる暗殺を得意とし、他人に自分の存在を覺らせないことについては希繫にも匹敵するかというほどで、主である撫月でさえその

気配を探ることはできない。

「報告はそれだけだ。俺は部屋に戻る」

「あつ、お兄様……」

「なんだ？」

「……いえ、ごゆっくりお休みくださいませ」

希繫が部屋を出ると、撫月は小夜に諜報を任せて布団へと戻り、掛け布団を頭まで被つて――。

「うとうとう！ 今日もお兄様とあんまり喋れませんでしたあああ！ それもこれも統司がお姉様とお兄様の奥様を殺してしまつたせいです！ わたくしはただ血の繋がる家族に会いたかつただけなのにいいいい！」

――盛大に愚痴つた。それはもう恥も外聞もなく。あるいは、恥も外聞も顧みてこそ布団の中で悶えている分、まだ理性は残っているのかもしれない。

しかし、そうばやきたくなる気持ちも致し方なし。蓬萊寺前当主の妾の娘として生まれた撫月は、希繫と小転が蓬萊寺を抜けたことで実母と離れ離れになり、実父は既に希繫によつて殺されてしまつており、血の繋がりというものに飢えていたのだ。

実姉に会いたい。実兄に会いたい。そう願つて部下たちに「本来の当主を探し出し、連れてこい」と命じたのだが、生憎とここは殺意と狂気の渦巻く蓬萊寺家。部下たちの

約三割が「連れ戻して当主にする」と捉え、残りの七割が「首を持ってこい」という意味に捉えてしまった。

「お姉様が生きていたら、お兄様ももつとわたくしにも優しくしてくれましたでしょうか……。お姉様と一緒に連れてきたら、お二人ともわたくしのことを妹として可愛がってくれたのでしょうか……」

もしも、もしも……。そう呟く撫月であったが、その確率はほとんどゼロに等しい。

希繫と小転こころにとって、互いや白露しろろを除く「蓬萊寺の血」が通う者はすべて例外なく抹殺対象である。蓬萊寺を捨て、絆フアミライの家族として生きることを決めた時点で、蓬萊寺としての教育を受けた血縁者を根絶やしにする誓いを立てていたのだ。

幸か不幸か、蓬萊寺は殺人鬼としての遺伝子を色濃く残すため、基本的に兄弟姉妹でしか子供を作らない。それは、永い時の中で近親者とばかり交わり続けたことで、純血の蓬萊寺は無意識に「理想の異性」を兄弟姉妹に定めるからだ。希繫の理想の女性が小転であることも、ここに由来している。

撫月のように、妾との間に生まれる子というのは、純血の蓬萊寺でない異性のことを慰みのための存在としてモノのように扱う先代当主だからその出来事であり、また真逆に蓬萊寺としての本能を上回るほどの愛で妻・二並ふなみを迎えた統司もまた、同じく例外的な存在である。

「でも、家老たちの言葉通り、本当にお兄様は素敵なお方でした……。凜とした佇まい、鋭い視線……何より女性の素肌を見ても動じない紳士的な態度……。いえ、これは将来のことを思えば短所なのかしら。それでも、がつつく御仁よりは素敵ですわね。ああつ、もつといっぱいお話がしたいわ」

撫月は母の境遇から、女性を慰みの道具のように見る者を嫌う傾向にあつた。百年以上前なら男性だけだったかもしれないが、今は同性同士でも油断ならない。

いずれは蓬萊寺当主として、将来的に兄と交わることについては受け入れていたものの、その兄がどんな人間かわからない時期は、彼女自身も少なくない不安を感じていた。だが、彼女もまた混ざりものの血とはいえ蓬萊寺。兄に対してほとんど無条件に恋慕の想いを募らせていた。そして、だからこそ希繫の憎悪は高まつた。

もしかすれば、混ざりものの血ならば「蓬萊寺の常識」を捨てられるかもしれない。引き返させてやれるかもしれない。正気に戻せるかもしれない。彼女から向けられる恋慕の視線は、そんな希繫の期待を打ち砕くに十分すぎた。

ただの「教育」の結果であれば、まだ取返しがついただろう。しかし兄に恋慕の視線を向ける彼女は、もはや教育による知識や技術に關係のない「本能」のレベルにまで蓬萊寺に染まつていた。

彼女の飼い犬である小夜に聞くとところによれば、撫月は最初こそ抵抗したものの、教

育を始めてひと月もする頃には一人前の殺人鬼と呼ぶに差し支えないほどに殺人技術を習得し、何より「人を殺す」ということに一切の躊躇を失っていたという。

そうなってしまうえば、もはや彼女は紛れもなく「蓬莱寺」である。引き返すことも、正気に戻すことも、もう不可能なのだ。



「杏樹」

「はい……」

「抜け鬼になろうとしていた者たちは今どれだけいる？」

「7名、です……」

自分も含めて、というのは、敢えて口にはしなかった。

この蓬莱寺家において、杏樹のポジションは極めて特異なものだ。元々殺人鬼として蓬莱寺に入った「成り上がり」でもなければ、当主の血族である「純血」でもなく、当主に代々仕える「家臣」でもない。

撫月が「クライアント」からのオーダーに従って襲撃した研究施設で拾い、殺人技術を叩き込んで自らの手足として使っている「飼い犬」であり、小夜もまた杏樹と同じ境

遇の一人であり、しばしば「忠犬」や「狂犬」などとも称されている。これらは主に前者が小夜を、後者が杏樹を指す場合が多い。

しかしその研究施設から救い出された蓬萊寺は他にもいくらか存在するが、「飼い犬」とされるほど優れた殺人鬼となったのはこの二人だけで、他の多くは任務中に命を落としていたり、レイドリベンジャーズに拘束され法によって裁かれている。

だがそんな特別な存在だからこそ、成り上がりはともかく家臣たちからは煙たがられることも多い。

家臣は蓬萊寺家が発足した江戸時代から脈々と「蓬萊寺に仕えるため」に教育され、その生涯を蓬萊寺のためだけに捧げてきた一族であり、そんな彼らを差し置いてぼつと出の「飼い犬」が家臣よりも主に近い位置に居れば、もちろん良い感情は抱けないだろう。それをわかっているからこそ、杏樹や小夜を追い出そうとする家臣はあまりにも多い。事実として研究施設から救い出された優秀な蓬萊寺の何名かが、そうした家臣によつて暗殺されたと聞く。

「彼らを集めることはできるか？」

「可能です……。しかし、気付かれないように、となると……」

「……ではその者たちに特秘任務を言い渡し、一所に集めよう。俺がそれを追う形で始末をつける」

事情を知らない者が利けば「裏切者を肅正する」と聞こえるように話す二人だが、実際は仲間を集めて顔を合わせる事が目的だ。

主語のない会話は、事情を知らなければ認識に齟齬が生まれやすい。そのため、これは希繫が普段「絶対にやらない」ようにしていることだ。しかしそれは裏を返せば、それだけ情報齟齬が恐ろしいということを理解しているからでもある。

時に「慈愛のレイドリベンジャーズ」と言われるように、彼は戦闘ではなく言葉で事態を収めようとする傾向があり、そのために語彙や文法、そして「自分の意図を相手に明確に伝える大切さ」というものを痛感している。故に、こうした「意図した相手以外には伝わらない言葉選び」というのも理解している。

「任せたぞ、杏樹」

「主命のままに……」

誕生―バースデー―

その日、愛知県幸盛町の山奥にある笹倉家は大騒ぎであつた。出産予定日まであと一週間を残していた逢依が、急に産気づいてしまったのである。既に臨月に入っており、家族たちも用意を済ませていたとはいえ、不意の出来事であつた。

普段はおっとりしている婚代が、この時ばかりは他の誰よりも機敏に動き、いち早く病院に連絡を入れると、留守を家族に任せて小転と白露を伴つて車を出した。車中でも苦しげに呻く逢依を、白露が不安そうに励まし続けている。

こういう時、やはり彼女を支えられるのは実の子である白露だけだと言ひ聞かせ、小転は敢えて自分から声をかけようとしなかつた。自分が声をかけてしまえば、逢依への情が移りすぎてしまう。「彼」が戻つてきた時、小言を洩らしてしまうと思つたからだ。

それでもやはり、一番後ろの席で普段の涼しげな表情を崩して玉のような脂汗を流す彼女と、そんな彼女に泣きそうになりながら、それでも必死に声をかけている少女を見て、小転は思わず拳を握り締めた。

(こういう時、本当なら……希繫が、声をかけてあげなきゃ……ダメなんだよ……！
か……！)

陣痛から出産までは、初産なら約半日、二人目以降なら7時間ほどかかるという。繋と逢依の間には既に白露という血の繋がる娘がいるものの、彼女は「未来の逢依」が産んだ子供であるため、「現代の逢依」はこれが初産である。

元々、これから行く病院は婚代のかかりつけということもあって、絆ファミリーの家族という関係の特異性を理解してくれている病院であるため、初産で二人目の子供であることは、既にあちらも納得済みだ。

あえて一人目が養子であると書面通りの弁明をしなかったのは、出来る限り白露のことを養子として扱う人間を減らしたいという、逢依の思いからだ。

「うっ……うっ……うっ……し、ろろ……ちゃ……ああっ！」

「お母さま！ 大丈夫です、しろろがついております！ お父さまも今頃、きつとお母さまが元気な子を産んでくれることを祈っております！ がんばってください！」

「おねが、い……い……いっしょに……いて……！」

「……ッ！ はいッ！ もちろんですッ！」

それは、普段決して弱みを見せない母が見せた、自分の守るべき子供にも縋ろうとする、不安と切なさの込められた瞳であった。

本当なら、一番声をかけてほしい人は他にいるのだろうか。自分ではなく、もつと強く、頼り甲斐があつて、やさしく母の手を握りしめながら励まし続けてくれる存在がい

るのだろう。それは、幼い白露にも理解できた。

だがその人物は今、ここにいない。「彼」だって本当ならここにいたいだろうが、それでもやっぱりここにいないのだ。自分では彼の代わりにはならないことなどわかつている。それでも白露は必死に母の手を握り締めた。この小さな手が彼の代わりにならなくても、彼の血を受け継いだこの手が彼と同じくらい温かいことを願って。



逢依が分娩室に入って、既に1時間経過した。初産婦でも、早ければ出産を終える頃だが、未だに扉の向こうからは逢依の苦し気な声が聞こえてくる。

彼女が産気づいたと連絡を受けて数時間もすると、今日の業務を早々と終わらせた悠生ゆうきも駆け付けた。第一部隊の仲間に無理をさせた、といつも通りの快活な笑みを浮かべて待合室に入ってきた時は、その場の全員がようやくひと呼吸入れられた瞬間だった。

本来なら「彼」がここにいるべきなのだろうが、今ばかりは何を言っても仕方がない状態だというのは誰もが理解していた。しかしいざという時に男手がないというのは、然しもの小転にも不安はあった。だからこそ、長男の登場は彼女たちに精神的な力強さ

を与えた。

「名前はもう決まってるのか？」

「はい。わたしとお母さまの二人で考えました。男の子なら——」

「いや、それは実際にその子供に会ってから聞く。あと、オレがいる時はお前たちの誰かがその子を抱いてやっててくれ」

「それは構いませんが……赤ん坊は苦手ですか？」

「逆だ。赤ん坊なんてそれこそ絆ファミリーの家族なら他のどの家より接してる。でもだからこそ、その赤ん坊を最初に抱いてやる男は、オレじゃないだろ」

それは、この数か月の桐梨家を陰ながら見守り続けてきた悠生だからこそその拒絶の言葉であった。むしろ、逢依としても白露としても、希繫がいらない今、最初に赤ん坊を抱いてあげられる男と言えば、彼の兄である悠生だけと心に決めていた。

しかし、その悠生こそが誰よりも希繫の帰還と無事を願っている張本人であった。絆ファミリーの家族の長男として、あの日あの時、希繫を止められなかった——止めるだけの言葉と力を持っていなかった自分への戒め。それこそ、彼以外の男にその赤ん坊を最初に抱く権利を与えないことであつたのだ。

「婚代さんは？」

「今、分娩室で、逢依ちゃんについてる……。母親の痛みとか、苦しみとか……。わかつて

あげられるの、婚代さんだけだから……」

分娩室はこの待合室の真向かい。待合室のドアと廊下側の壁は全て透明の強化プラスチックで出来ているため、何かあればすぐ気づけるようになっていた。

そうでなくとも、10分おきに誰かしらがドアの外のベンチに言つてドアの向こうの声を聞きにいくが、その度に苦しそうな逢依の声と、それを励ます婚代の声しか聞けず、逆に不安を抱えながら戻ってくる。

それでも、今この場にいる誰もが、他所事をできるほどの余裕はなかった。何かあれば一秒と言わず一瞬でも早く気付けるように、全員が分娩室のドアをじっと見つめていた。

そして、次は白露が部屋を出てベンチに座ろうとドアを開けた、その時であった。

——おぎやあ、という甲高い泣き声が、分娩室の奥から聞こえたのを、誰もが聞き逃さなかった。

『生まれました！ お母さん、よく頑張りましたね！ 元気な男の子ですよ！』

助産師のよく通る声がドアを挿んだまま聞こえてきた時、白露は思わず小転に抱き着いた。それは逢依の息子の誕生であり、悠生と小転の甥の誕生であり、そして——白露

の弟の誕生であったのだ。

「小転さま……こころさまっ！ おとつ、おとこのこつ……わたしのっ、おとうとがあつ……！」

「うんうん、今まで……よく、がんばったね……。ずつと……気を、張つてたもんね……。これから、白露ちゃんも……おねえちゃんに、なるんだよ……。」

しばらくすると、病院のスタッフが「これから保育器に入れますので、今のうちに赤ちゃんにお会いになりますか？」と声をかけてきたので、それに促されるまま足早に3人は待合室を出た。

廊下で立ったまま待つっていると、スタッフに「どうぞ」と言われて分娩室に入ると、ここではこの数時間の間にずいぶんと弱った様子の逢依が、それでもしっかりと赤ん坊を抱えて微笑んでいる。

「お母さま……！」

「白露ちゃん、ここに来るまでずつと応援してくれてありがとう。白露ちゃんのおかげで頑張れたわ。ほら、名前を呼んであげて」

「はいっ！……霧久、おねえちゃんですよ。おねえちゃん、霧久に会いたくて会いたくて、ずっと待つてたんですよ……。これから、いっぱい一緒に幸せになりましょうね」

桐梨霧久。それが逢依と白露で決めた、この赤ん坊の名前であった。草花に白露を降

ろす霧のごとく清らかで無垢な子であつてほしいと願つて与えられた、彼だけのための最初の贈り物。

未だに白露の懐でおぎやあおぎやあと泣く彼を、その場の誰もが笑顔のまま見つめていた。

「では、そろそろカプセルに入れてしばらく様子を見ますので。お母さんもお部屋に入りましょう」

どれだけそうしていたかわからないが、スタッフに声をかけられて、ようやく全員が我に返り、婚代も揃つて分娩室を後にした。保育器の中の霧久を見たいと言う白露を連れて悠生がそちらに向かい、逢依の部屋には婚代と小転が向かう。

現状、逢依たちの存命に蓬萊寺が気づいた様子はないが、それでも白露と霧久は蓬萊寺の血を継ぐ子供であり、もしもこちらの現状に蓬萊寺が気づけば間違いなく奪いに来るだろう。だからこそ、悠生はできるだけ白露と霧久から離れないようにしながら、第一部隊に連絡を入れた。

「警備の様子は？」

『全員、配置についています』

「OK、敵にはもちろんだが、病院スタッフにも患者にも気づかれるな。ここは産婦人科だつてことを心得ろよ」

『もちろんです。子供の命と母親の心を守れないレイドリベンジャーズなんて、恥ずかしくてやってられませんよ』

いい返事だ、と返すと、悠生はそのまま通話を切った。

このまま何もないことを願いながら。

白無垢―ピュアホワイト―

霧久むくの誕生から約二ヶ月。医師によれば、ようやく色とおおまかな形がわかるようになり、手足をバタつかせる力も強くなるだけでなく、感情や表情が見てとれる程度に発達し始める頃。予防接種だとか、うんちチェックだとか、気にすべきことも同じくらい増えていく。

そして希繫を取り戻すまでの間、実質的にシングルマザー状態の逢依あいは、小転こころや悠生ゆうきだけでなく白露しろろにまで、頼れる者を躊躇なく頼っていった。これは前もって決めていたことで、妊娠期間や産後しばらくは精神的に不安定になることを見越して、自ら「頼れるものは全て頼る」と言い聞かせたからだ。

先月あたりから家事を再開し、体型もようやく元の落ち着きを取り戻しつつある。とはいえ、さすがに戦いから退いて久しく、シルエットこそ元通りに見えても、実際の身体は筋肉が衰え、運動能力が著しく低下している状態だ。特に戦闘の感覚については、もはやほとんどが失われている。

逢依自身も、出産による体力の低下によって、全盛期の力を取り戻すことは二度と不可能になったということも実感していた。事実、医師からは「次の子は諦めてください」

と言ひ渡されている。元々、小柄で出産に不安のあつた逢依は、霧久を生んだ際に子宮が疲弊しきつてしまい、少なくとも次の子を産める状態ではなくなっているらしい。

逢依としても、それは薄々感じ取っていた。霧久が無事に生まれるにせよそうでなかつたにせよ、霧久が自分の産んであげられる最後の子だということを、彼女自身がわかつていた。しかし、それでもこうして専門の医師に言われてしまうと、一縷の希望も絶たれたような気がして、さすがに落ち込んだ。

とはいえ、霧久は逢依にとつて念願の腹を痛めた子供。笑つた時の穏やかな表情だとか、鼻の形だとか、ふとしたところに希繫きづなの面影を感じるが、この明るい茶色の髪は間違ひなく自分の子供だと、逢依はとにかく霧久と接する時を喜んだ。

「白露ちゃん、抱っこ代わつてくれる？ ミルク作つてくるから」

「お任せください。むくー、おねえちゃんといっしょにあそびましようねー!」

そして何より幸いであつたのは、白露が霧久に対して極めて好意的に接していることだ。逢依にとつて、白露が大切な娘であることは疑いようもない。しかし、心のどこかで自分のお腹で産んだ霧久を優先してしまうのではないか、それを聡い白露は感じ取つて、姉弟の仲が拗れるのではないかと、逢依は案じていた。

しかしそんな逢依の不安はすっかり杞憂となつていた。白露の霧久に対する愛情が、逢依にも負けず劣らずやや過剰気味なほど大きかつたからだ。本人曰く「長いこと一

人っ子だったので」ということらしく、心配したほど弟に母親をとられることに危機感を感じていないとのことだった。

むしろ霧久の世話で手いっぱいになりがちな逢依のために、今まで以上に率先して家事や育児を手伝ったりと、霧久の姉として相応しい行動や振る舞いに気を遣っているようにすら見えるせいで、逢依の白露に対する愛情は今まで以上に振り切れていき、ひと月も経たないうちにどつちに愛情が偏るなどという不安は消し飛んでいた。

「むく、おねえちゃんのお顔、わかりますかー？　そうそう、そこがほっぺ、そこがお鼻。むぐぐつ……お口はめつ、ですよー？」

「きやつきやつー！」

「えへへ、むくはおねえちゃんほっぺが大好きですなー？」

白露の頬をぺちぺちと叩きながらはしゃぐ霧久に、彼女の表情筋は既にふやふや、弟のやることなすこと全てが可愛く映って仕方のない姉バカと化した彼女を、いつたい誰がからかえただろうか。

白露にとって、霧久の存在は一種の奇跡なのである。白露の居た未来では、弟の存在は在り得なかった。今の逢依と同様、白露の居た未来の逢依も、白露を生んだことで二人目は作れないと宣告されたからだ。だからこそ両親の逢依を一身に受けて育ったし、それに対して不満はまったくなかった。

もちろん、学校に通っていればきょうだいの話をするクラスメートを羨むことは人並みにあったが、だからといって不満を親にぶつけるほどでもなかった。どんなに言っても、それが叶わないことを理解できてしまうほど、白露は聡かったのである。

しかし、この時代においてはまだ未来の白露に等しい存在は生まれていない。白露にとって、霧久はただの弟ではなく、異なる時間軸における自分自身。誕生日や見た目は違えど、この時代の希繫と逢依の最初の子ということは、つまり自分とニアイコールの存在であることは疑う余地もない。

「むくー」

「あいー……?」

「そうですよー、あなたがむくですよー。あつ、お鼻をぺちぺちするのはやめてください……」

「きやいー!」

そしてそんな風に弟のことをはちやめちやに可愛がっていたせいで、彼女は気づくことができなかったのだ。

背後に迫る、その気配に。

「……えつと、お邪魔、しちゃったかな……?」

びくつ、と肩を震わせ、視線をゆっくりと背後に向けると、そこに居たのは苦くも朗

らかな微笑みを浮かべる雨零うれいであつた。

昨年、白露を守つて負つた怪我は未だに大きな傷跡として背中に残つてゐるものの、既に痛みも引いて学校にも通つており、今では当人たちだけでなくクラスメートたちも認める親友同士となつた二人は、以前よりも頻繁に互いの家を行き来するようになった。

こうして白露が霧久を抱つこしている光景を見るのも、これが初めてではないし、雨零の中では白露は将来的に立派なブラコンになるだろうな、というのはほとんど確定事項にも等しい予想となつていた。

「う、雨零くんといえど、部屋に入る時はノックを……」

「えつと、一応したけど……もしかして聞こえてなかつたかな？　ごめんね、今度から返事がなかつたらもう少し間を置いてからノックし直すね……」

「あ、いえ……それはさすがに、わたしが悪かつたです……」

互いに苦い笑みを交わし合うと、雨零は自然と白露の隣に座り、霧久を構い始めた。少し前までは互いに一人っ子同士だったこともあつて、雨零も霧久に興味津々な様子で、白露はそんな二人の様子を見るのがとにかく幸せで仕方がなかつた。

白露と雨零が揃うと、やはり話題の中心は本の話が多い。雨零は童話や昔話、白露はやはりというか凶鑑を引っ張り出そうとして雨零に止められ、雨零の持ってきた本の中

から霧久に読み聞かせるものの選別を行う。

赤ん坊にとつて、最初に発達する感覚は聴覚だと言われている。そのため、逢依の助言で白露はできるだけ霧久の前で赤ちゃん言葉を使わない。正しい言葉と発音で、できるだけたくさんさんの言葉を聞かせるために、雨零の持つてくる本はとも役に立った。

なにせ、この桐梨家には絵本というものがない。この家に希繫たちが住み始めたのは彼らが高校に上がる直前であつたし、白露がここに来た時、彼女はもう10歳であつたからだ。だからこそ、雨零の持ち込む絵本の類は白露だけでなく逢依からしても非常にありがたかつた。

「お待ちせ、白露ちゃん。霧久のお世話ありがとうね。それに雨零くんも。向こうのお部屋にジュースとお菓子を用意しておいたから、二人で食べてちょうだい」

「ありがとうございます。あ、これ今日もつてきた本です。またむくんに聞かせてあげてください」

「あら、いつもありがとう。うちにはこういうの無いから、本当に助かつてるわ。じゃあまた今度、白露に持たせて返すわね」

こうして絵本を借りるのも、これで何回目だろうか。霧久が生まれて以来、それまでは交互に互いの家を行き来していたが、最近はおつぱら雨零が桐梨家に訪れている。その際、最初に霧久のお土産用に持つてきた絵本を、霧久がたいそう喜んだのをきっかけ

に、雨零はたびたび童話や昔話の本を持ってくるようになった。

そして、上記の通りそれには逢依も白露も大助かりだった。言葉を正しく、たくさん聞かせるといっても、ただ話しかけるだけではネタも尽きる。そういう意味で、絵本というものは極めて有用であったのだ。

特に生後一年以内にどれだけたくさんの言葉を聞いたかで、赤ん坊が言葉を発するようになった時の滑舌や発音にも影響が出ると聞いた白露は、学校でわざわざ一学年下の雨零のクラスまで来てお願いしたほどだ。おかげで雨零がクラスメートから微笑ましいからかいを受けたことを、白露は知らない。

「じゃあむくがミルクを飲んでる間に、わたしたちもおやつにしましょう」

「うん。おととい学校で言ってた新しい図鑑の話とか聞かせてよ」

どちらからということもなく、自然と互いに手を繋ぎながら部屋を出ていく二人の背中を見て、逢依はぼつりと呟いた。

「……あの二人くらいの頃の希繫って、あんなに自然と手を繋いでくれたかしら……？」

招集—サモンズ—

希^{きづな}繫奪還作戦まで残りひと月を切った。逢^あ依は断腸の決意で子供たちの面倒を小^{こころ}転に任せ、自らは運動能力と戦闘感覚を取り戻すための訓練に勤しむ日々を送っている。

そんな中で、優^{ゆめ}芽のところに入った電報にレイドリベンジャーズ永岑支部が揺れた。差出人の名は「マスカレイダー」、つまり優芽の指示で潜入任務を遂行中の西^{さいごう}郷叶枝からであった。

基本的に定期連絡以外の遣り取りを控えるよう言い含めている彼から突如として送られたその文章に、優芽は即座にそれが急を要する用件であることを察した。

『A1。B2。C不明。D2・6。E2。F2』

AからFまでの項目はそれぞれに「A∥接触」「1∥肯定、2∥否定」のような意味である。

つまりこの文章からわかることは、

A1：接触「可」

B2：緊急の応援「必要なし」

C不明：相手の素性は「不明」

D 2・6：相手の目的は「救援」「リーク」

E 2：相手の危険性は「やや低い」

F 2：返信「不要」

そして何より——マスカレイダーが今、護衛として潜入任務についているターゲットとは、国連直属の防衛部隊である『国際脅威的侵略性生命体対策自衛集団』すなわちレイドリベンジャーズを支援・協力してくれている日嗣ひつぎ防衛大臣である。

マスカレイダーは現在、日嗣防衛大臣を護衛しつつ、彼に接触する人物の中に蓬萊寺またはそれに与する勢力とその情報をレイドリベンジャーズヘリークすることが目的であるのだが、どういいうわけか今回の相手は自らその情報をレイドリベンジャーズへ流し、救援を求めてきた。

ただし、マスカレイダーには確証のない推測での素性は「不明」として送るよう言いつけてあるため、彼自身の見解を得られれば情報はさらに得られる可能性もある。

「このタイミングで「救援」を求めてくる組織……蓬萊寺ほうらいじに捕われている桐梨隊員からという可能性は？」

「現時点では可能性は最も高いが、他の組織からの救援かもしれない。あちらに国際脅威性あるいは侵略性を含む戦力がなければ警察の仕事だ。素性もわからず手出しは出来ない」

「警察と協力体制をとって接触を試みるのは？」

「国際脅威となる組織や勢力なら日嗣防衛大臣の命が危険だ。安全を確保できない限り安易な手を打つべきではない」

「マスカレイダーとの秘匿回線の責任者は君だろう、和泉担当官。彼に連絡を取り、より詳細な情報を求めたまえ。彼自身の所感や推測も無駄にはなるまい」

重役の一人がマスカレイダーを「彼ら」ではなく「彼」と称するのは、彼らの正体が二人組であることを知る者がそもそも多くないからだ。

彼らは自分たちの特異性を「一人ではなく二人」であることに強みを見出しているが、同時に一人なら回避できる危険性を二人だからこそ呼び込んでしまうこともある。

たとえば、片方が不在であれば変貌不能なことを悟られてしまったらどうか、片方だけが相手に囚われれば叶枝も望夢も言いなりにならざるをえないからだとか、そういう理由だ。

「秘匿回線は緊急時を除き、定期連絡のみ行っています。次の連絡がとれるまであと四時間弱もあります」

「その間にトラブルが起きていたらどうする！」

「そうなれば彼が対処します。彼だけでどうにもならなければ、それこそ定期連絡ではなくあちらから緊急の報せが届きますので、少なくとも現時点で冷静にならなければな

らないのは我々です」

優芽が日嗣防衛大臣の護衛にマスカレイダーを選んだのは、まさしくこういうことがあつた時のためだ。

彼らは基本的に二人で行動し、片方が柔らかな表情と態度で相手を懐柔し、片方が威圧的な雰囲気と柔軟な対応で相手を丸め込む。戦闘力だけではなく対人能力の高さが彼らの最も強みとするところだ。

一人では役割も限られるし選択肢も少ない。しかし彼らは各々が異なる役割を持ち、異なる視点から選択肢を擦り合わせられる柔軟さと判断力を持つている「二人」だ。だからこそ、優芽は「二人で一人」の彼らを選んだのだ。

そして、だからこそ優芽は現状が決して楽観視できるものではないことも痛感している。おそらく十中八九、このSOSを飛ばしてきたのは蓬萊寺の者だろう。

なぜなら、優芽はこれまでも何度か秘密裏に蓬萊寺家の者と接触し、統司とうじの動向や希繫の近況を確認していた中で、抜け鬼を目論む人物が希繫と協力して蜂起の時を待っていると聞いていたからだ。しかしそれは一部の信用に足る人物を除いて、レイドリベンジャーズの内部にも洩らしてはいない。

希繫奪還作戦も基本的には永岑支部とその周辺の支部だけで計画されていて、レイドリベンジャーズ全体の問題にまで発展していかないにもかかわらずオープンにしている

のも、あくまでそれは蓬萊寺も予想しているから隠す必要はないだろうと判断したからだ。

だが逆に、だからこそ襲撃タイミングの秘匿には特に気を遣った。優芽がそれを危険と知りつつもできるだけ多くの「信用に足る人物」を作ったのも、そうでない大勢の人物にそのタイミングを知らせることなく各々のチームに統率をもたらすためである。

つまりは「信頼できるリーダー格」を増やすことで、各部隊・各チームがこの作戦に協力してくれるよう、それぞれのリーダー格となる人物の選別に細心の注意を払った。おかげで周辺支部の一部の部隊には協力を得られなかったのは、それなりに痛手であったと言わざるを得ない。

「日嗣防衛大臣の護衛を増やすという理由で、マスカレイダー以外にも人員を増やすというのは？」

「マスカレイダーはレイドリベンジャーズにとってもイレギュラー的存在です。そのために彼らに對して疑心暗鬼あるいは攻撃的な者も少なくありません。不安要素を増やすのは得策ではないでしょう」

「和泉担当官。君は斥候・隠密・戦闘・交渉のどれにおいても優秀な結果を出している。連絡担当官を他に任せて君が出向くというのは？」

「いえ、マスカレイダーが心から信用しているレイドリベンジャーズは決して多くあり

ません。和泉君を現在のポジションから外せば、それこそ最大の不安要素が日嗣防衛大臣の傍につくということになります」

「マスカレイダーは基本的に我々に協力的ですが、それは彼らが我々のことを——ひいてはあたし自身を値踏みしているからです。故にマスカレイダーはまだ「飼い犬」ではなく、彼は彼に首輪をつけるに足る人物を探しているだけの「賢い野犬」なのです」

そう、IQ190の二人組というだけあって、彼らはとても聡い。

自分たちに利をもたらす存在と害をもたらす存在を即座に見抜くだけの目を持っていて。しかし、いざ疑わしい人物を目にした時、即座に警戒する望夢と違い、叶枝はその疑いの根がどこにあるのか。どれだけの深さがあるのかまで観察し、そして判断を下す。

だからこそ彼らはレイドリベンジャーズに協力している傍らで、彼らが自分たちが協力するに相応しい人物なのかどうかを常に見極めている。

現状、レイドリベンジャーズは「数」という面でマスカレイダーに利を与えているが、その数の一部がマスカレイダーに対して害を与える存在になりかねないことも、彼らは理解している。

しかしそれはレイダーという存在の歴史や、それによって根深く残る人類共通の敵対認識のせいだからと彼らが見逃してくれているに過ぎず、ユナイトギアと対等に渡り合

える戦力を持った「レイダー」である彼らがこちらに牙を剥けば、決して無傷のままというわけにもいかない。

故にレイドリベンジャーズ——を代弁する立場にある優芽は、彼らに対して常に警戒しながらも真摯な姿勢を崩さず、意見を違えれば両者が納得できる妥協点を探すために方々へ頭を下げ続ける日々だ。

そんな面倒で得のほとんどない立場を、誰が好き好んで引き継ぐというのか。仮に引き継いだとして、彼らへの姿勢やそのための手回しも含めて、ネガティブな印象を与えない表情でこなしきれぬだろうか。少なくとも、優芽ですらたまに表情に出てしまつては苦言を呈されているのに。

もしもそれを苦とも思わずこなせるとすれば、それは優芽以上の苦労を苦労と思わず笑顔を保つていられるメンタルとスタミナがある人物。そんな人物を、優芽は一人しか思い浮かばなかった。

「あたしの仕事を引き継ぐとするなら、桐梨隊員並みの精神力と体力がある人物でなければ務まりません。誰か候補でも？」

「ちなみに精神力というのは包容力や理解力という意味を含むし、体力というのは持久力というだけじゃなく普通に運動的な意味も含みますよ。まさか、情報統制部が椅子に座つて画面を睨むだけの楽な仕事だとは思つておりませんか？」

「う、うむ……。しかし、ではどうする？　マスカレイダーだけに護衛を任せるのが得策でないことは明確だ。そこは君たちにも理解できるところだろう」

「……実は、以前よりとある人物たちを真透戦技教導官に紹介し、個人的に訓練を頼んでいます。彼らならばレイドリベンジャーズでもありませんし、マスカレイダーの警戒も多少なりとも軟化するのではないでしょうか」

「ほう、その人物とは？」

——つきむらよしかけ月村義陰と日向陽乃です。

優芽の口から出たその名はこの会議室にどよめきを生んだ。

なぜなら彼らは以前の装着者暴走事件において、特にレイダーが頻出するため国内屈指の防衛力を持つこの永岑市のレイドリベンジャーズ支部を強襲し、決戦時に用いられる緊急指令室まで突破。

以降は希繫と悠生に終始押されがちだったとはいえ、あの『最強』が「やりすぎないではいられない」と称した戦力は並大抵のことではない。

「桐梨隊員は以前、彼らの起こした事件を収束、その顛末をまとめた資料やそこに至るまでの経緯を繰り返して訴え、信用に足る担当刑事を紹介するなど、最大限のアフターケア

を行っていました。その恩返しのために、彼らは個人にできる範囲で我々に協力してくれていました」

「彼らが仮釈放になつてから真透戦技教導官に指導をつけられ始めるまでおよそ半年ほどありましたが、その間に永岑支部へ寄せられたレイダー出現の通報にはほとんど彼らのものが入っていましたし、時には我々が到着するまで警察と共に市民の避難誘導を手伝つてくれていたそうですよ」

「少なくとも今の彼らにこちらに対する敵対的な意図はない、と言いたいのか？ 一歩間違えば対レイダーにおける最前線基地を失うところだったんだぞ！」

「ですが、そうはなりませんでした。そもそも彼らの矛先はレイドリベンジャーズではありません。彼らを虐げた人間です。当時の彼らは冷静さを欠いて桐梨隊員にまでその矛先を向けましたが、彼らにも情状酌量の余地は多大にあつたわけですからね」

おかげで弁護士は仕事が捗りに捗つたらしいが、それはさすがに彼らの知るところではない。

「マスカレイダーを含め三人。護衛には十分な数と戦力では？」

「……仕方あるまい。早々に向かわせろ。ただし、下手な動きをすれば即座に確保。和泉管理官、君の立場も今のままではおらせんぞ」

「では、しばらくは安心して今の椅子の感触を堪能させていただけるということですね」

た。につこりと、少女らしくない飾った愛嬌を振りまく笑みを皮肉たつぷりに返してみせ

忍耐—シノビー—

蓬萊寺ほうらいじの屋敷に怒号が飛び交う。凡そ代継のことだろうと、希繫きづなは夜縫よすがの仮面の下で辟易ひやくいしていた。昨夜も腹違いの妹のはずの撫月なつきが自分の寢室に夜這いを仕掛けてきた。これで何度目かもわからないが、おかげでこのところまともに眠れていない。

睡眠はレム睡眠とノンレム睡眠の繰り返しだ。眠りの浅いところで周囲を警戒しながら睡眠をとり、眠りが深くなる直前に起きて眼だけ閉じておく。そしてまた浅い眠りになれば警戒をしながら睡眠に戻る。幼い頃に蓬萊寺で学んだこの技術を、まさか蓬萊寺の屋敷に戻されて活かすことになるとは希繫自身も思っていなかっただろう。

とはいえ、蓬萊寺を出てかれこれ16年が経過している。もうすぐ一年となるものの、この数か月あまりで蓬萊寺としてのブランドをほとんど全て取り戻せてしまったのは、やはりこれも血筋ということかと自嘲せざるをえない。

「夜縫お兄様、お勤めも昨日で一区切り。いかがでしょう、今日はこの撫月めと共に、ごゆるりとお休みになられては」

「……撫月、このところお前も随分と根を詰めていただろう。お前は蓬萊寺にしては体もそう強くない。そうだな、食後に軽く散歩にでも付き合おうか。そののち、お前

が眠るまで傍らにて俺の幼き話でも聞かせよう。だから安心して眠るといい。お前が眠れば、俺もすぐ寢床に戻ろう」

「夜縫お兄様、わたくしの身をそうも案じて……！ では、お言葉に甘えて今日は共に体を休めるよう努めましょう。お小夜、お兄様のせつかくのお気遣いです。わたくしが眠るまで誰もわたくし共に近付けぬように」

「心得ました」

この時の希繫の精神は、ほとんどギリギリの状態で『桐梨希繫』を保っていた。純血の蓬萊寺として、並の毒や薬には強いという自覚のある彼だったが、さしもの蓬萊寺謹製の薬が相手となれば、いくらなんでも抗いきるに限度があつた。

ようは盛られたのである。それも一服どころではない。この数か月、「毒や薬に強い純血だからこそ気付かないような」量の媚薬を盛られ続けていた。挙句、これらの薬は全て遅効性であつたことも災いした。

誰がそれを行ったかは然したる問題ではない。そもそも希繫がここに連行された理由が、撫月との間に代継を作らせるためであつて、家臣にとつても撫月にとつても、これは願つたり叶つたりの状態であることは明らかだからだ。

むしろ、媚薬によつて興奮状態であることを撫月に見抜かれれば、今まで以上に強硬手段を用いて関係を持つとうとしてくることは目に見えている。だからこそ、希繫は彼女

に対して穏やかな態度を取るフリをしながら、とにかく彼女から離れていなければならなかった。

「……差し出がましい言葉かもしれませんが、やはり夜縋お兄様の方こそ顔色が優れないようです。わたくしも今日は早々に休ませていただきますので、先にお休みになられたほうがよろしいかと……」

「このところ任務が立て込んでいたせいだろう。……いや、そうだな。撫月、頼みがあるんだが、聞いてもらえるか？」

「は……はいっ！ 夜縋お兄様の頼みとあらば何事であれどもこなしてみせましょう！ なんなりとお申し付けくださいまし！」

「そうか。なら小夜に統司とうじの見張りを頼めないか。どうやら彼はこここのところ俺の旧友を狙っているような様子を見せている。俺はお前たちに家族を奪われ、ここに来た。せめて旧友だけでもと思うのは、蓬萊寺にあるまじき情けだと啜うか？」

それは、希繫にとつてひとつの賭けであった。蓬萊寺として生まれ、蓬萊寺の代継を作るために連れ戻された希繫は、ここでは桐梨希繫ではなく蓬萊寺夜縋であることを求められている。そのために統司によって妻子を殺され、怒り心頭でここに来ていると誰もが思っているはずだ。

だからこそ、彼の心にまだ「桐梨希繫」としての思いを残していることを是とするか

非とするか。前者ならいいが、もしも後者ならば逆に統司ではなく希繫に対して今まで以上の厳しい監視が付けられることは間違いない。そうなれば、今まで以上に動きにくくなることは明白。

加えて、統司も統司で来たるべき日のためにリライズの在り処を探す役割を担っている。あわよくば、その奪還も含めて。しかし今に至るまで当時から報告はなく、接触らしい接触すらない。

もちろん、彼ほどの人物がそうそうその首を断たれるとは思っていないが、こうも音信不通が続けば不安も募る。彼の安否確認も含めて、この賭けをし損ねることは避けたかった。

「まさか。わたくしも元を正せば蓬萊寺の外からここへ連れ戻された混ざりモノ。外に置き去りにした思いを捨てきれぬ気持ちにはわたくしも同じこと。今ここで夜縋お兄様があわたくしを真つ直ぐ見てくださるのなら、そのために外の憂いを断つためならば、どのような危険を賭してもお兄様のご友人をお守り致しますよう。……お小夜」

「仰せの通りに。杏樹、お二人を任せたぞ」

「……了解、した……」

杏樹が希繫の飼い犬であるように、もしも希繫と撫月の間で対立すれば、間違いないく撫月の側につくのが小夜だ。せめてこの両者を分断できれば、それだけで脅威性はいく

らか軽減される。

そして一人が欠ければ、単純計算で2対1の構図が出来上がる。ただの数字の偏りは力量の差で補えるというのなら、それは浅はかだ。数とはそれだけで力の差になり得るのだ。それは、これまで集団の中で生きてきた希繫だからこそ最もよく理解している。

小夜が撫月から離れていけば、不寝の番ねずをしてくれる杏樹の負担もいくらか緩和されるだろう。そもそも、希繫が眠るための番なのだから、杏樹にとっては今までが1対2の状態で、これからようやく1対1になるのかもしれない。

「すまないな。お前の飼いだを俺のために使わせてしまつて」

「いいえ、わたくしはいずれお兄様の妻となるのですから、いずれはお小夜も夜縋お兄様のものとなるのです。今のうちからこうして慣らしておくのは当然のことですわ」

「そうか。では杏樹もそのようにしよう。杏樹、小夜の不在中、俺の声が掛からない時は出来る限り撫月の傍についていてやれ」

「主命のままに」

まるで撫月を案じるかのような素振りを見せつつ、実のところそれが監視や行動の制限の意味を含むことを、杏樹は即座に読み取っていた。

統司の見張りとなれば、さすがの小夜もそう簡単に戻ることとはできないだろう。当時の監視を続けるのももちろんだが、去る際にはなおのこと注意を払わなければならな

い。人間の緊張感は危険の最高潮ではなく、危険が終わると思つた時に途切れやすい。そこを見逃す統司ではないと、この屋敷の者たちは熟知している。

そして、そのためにこの危険な賭けにベットしたのだ。この機会を最大限活かすための鍵は杏樹に委ねられているといつても過言ではないが、だからこそ希繫自身もここでコンデイションを取り戻さなければならぬ。

希繫がこの屋敷に来てから、もうひと月もせず一年になる。そうなれば、家臣たちもいよいよ強硬手段をとつて希繫と撫月に代継の儀を執り行うよう仕向けてくるに違いない。

だがそれは元々わかつていたこと。逢依やレイドリベンジャーズの仲間たちが、もうすぐ助けに来てくれる。そう願いながら、希繫はこの数週間を乗り切るつもりなのだ。しかし、ここでひとつだけ懸念すべきことを、希繫は見逃していた。

確かにレイドリベンジャーズにとって、希繫は最弱でありながら——いや、最弱だからこそ、影響力の大きい人物だと言えるだろう。しかしそれでも、レイドリベンジャーズという組織にとつて希繫はあくまで「一人の組織構成員」でしかないのだ。

つまりは、国際的犯罪者集団である『蓬萊寺家』と交戦してでも取り戻さなければならぬ人物かといえ、決してそうではない。言い方を悪くするならば、組織を守るための犠牲として切り捨てても問題のない人物であることは否定できないのである。

もしもレイドリベンジャーズの決断が非情なものであったとして、悠生ゆうきや逢依あはきつと自分を助けに来てくれるだろう。もしかすれば優芽ゆめも。しかし、彼らだけでこの屋敷にいる数百人の蓬萊寺を全て対処し切れるかといえ、それはあまりにも希望的観測が過ぎるというもの。

まともな思考回路を持ち合わせる者であれば数名。ここに蓬萊寺としての殺意を携えた希繫が加わっても、さすがに十数名が関の山。とてもではないが百を超える蓬萊寺の群れには敵うべくもない。

だからこそ希繫はその楽天的な思考だけは持ち合わせてはいけなかった。思考を止めてはならなかった。だが蓬萊寺謹製の媚薬の影響で、希繫の思考はほとんどまともに動いてはいなかったのだ。

「さて、腹もほどほどに膨れた。では約束の通り、庭を軽く歩くこうか」

「はい、お兄様。……よろしければ、お手をお借りしても？」

「……ああ。気が利かない兄ですまないな、撫月」

そう言つて、希繫はその右手を差し出した。

それが当然であるかのように、それだけは譲らないと言うかのように、決して左手だけは彼女に触れさせようとしなかった。

——銀色の約束を嵌めたその手だけは。

「いよいよタイムリミットまで二週間を切ったわけだが……正直なところあまり芳しくないな。本部としても希繫を見捨てるつもりでいるらしい」

『最強の英雄』の名前を出しても、か……?」

「そりゃーな。いくらオレが最強のレイドリベンジャーズとはいっても、それだけで立場が偉くなるわけでもない。オレからの不信を買ってでも、蓬萊寺との抗争は避けたってことだろーよ」

同刻。レイドリベンジャーズ永岑支部の第一部隊では、部隊長の悠生とその実質的な補佐を務める総交が、迫る希繫奪還作戦に向けての進捗について話し合っていた。

とはいっても、その進捗は悠生の言葉の通りあまり好ましくない方向に進みつつあった。「人類のトラウマ」とも言うべき「本物の蓬萊寺統司」が引き起こしたかつての惨劇は、今なお教科書にも残る歴史的イベントとして記録されている。

あまりにも現実離れたその事件は、今やその事実の真偽を疑う歴史学者すらいるほどだ。しかし——レイドリベンジャーズの前身ともいえるべき当時の日本の防衛チーム『ウォークライ』が残した資料が、その事件に一切の誇張がない——それどころか正確な

数字はそれ以上に夥しいことを裏付けていた。

だからこそ、本来であれば人類を守護すべきレイドリベンジャーズにおいても、蓬萊寺と出会ってしまえば即座に撤退が原則化しているだけでなく、彼らとの戦闘行為はたとえあちらが無勢でこちらが多勢であつても避けるべきだとしている。

そんな中で、希繫というたった一人の職員を取り戻すために蓬萊寺家との全面戦争を仕掛けるということが、レイドリベンジャーズにとつてどれだけ多大な被害を被るか。それを正しく捉えるほどに、彼を見捨てようとする組織としての正しさが理解できてしまう。

「悠生。それでもお前は、行くつもりなんだろう？」

「つたりめーだろ。他のヤツらがなんだつてんだ。自分の弟も守れねーで、絆ファミリイの家族の兄貴を名乗れるもんかよ。その相手があの蓬萊寺だろーが、そこは変わんねー。逢依も、小転だつて同じだ。自分の家族すら護れないで、オレたちはなんのためにレイドリベンジャーズやつてんだ」

レイドリベンジャーズは人類の守護者である。だが人類を守るためには、まず自分の周りのみんなを護れなければならない。周りのみんなを守るためには、家族を護れなければならぬ。それすらできないのなら、誰かを護るなんて出来るはずもない。

それを知っているからこそ、絆ファミリイの家族は決して家族を見捨てない。仮にレイドリベン

ジャーズが頼れないとしても——それならば世界中に散らばった40を超えるファミリーの家族たちが希繫を取り戻すために一丸となるだろう。たとえそのためにどれだけ傷付き倒れても、構うことなく。

「オマエはどーすんだ、総交。オレと一緒に地獄の社会見学がいいか、ここで優等生らしくレイドリベンジャーズの模範となるのか。オレはどっちでも構わねーぜ。別に責めたりもしねーよ。けど、どっちにするかくらいは聞かせてもらう。中途半端に関わられちゃ足手纏いになるかもしれないねーからな」

「……お前はとも、俺のことを随分と買っているらしいな。そうだ、俺はお前ほど馬鹿ではない。物事の損得を数えられる人間だと自負してる。お前が関わるなど言えば、俺はそれに従おう。——だが、それがレイドリベンジャーズの命令なら知ったことではない。俺は元よりあいつに恩があつてここにいるんだ。組織のために恩人を護れないなど本末転倒も甚だしい」

——あまり俺をナメるな。

そう言うと、総交は一通の封筒を彼に手渡した。

「今朝、季節外れの外套に身を包んだ男から渡された。目深に被ったフードで顔は見え

なかったが、あの特徴的な声は明らかに常人のそれではなかった」

「声？」

「爽やかな青年のようにも聞こえた。幼い少女のようにも、意地の悪い老婆のようにも、あけすけな好々爺のようにも聞こえた。だがそのどれとも区別がつかなかった。ただ聞くだけで焦燥感や不安に駆られるような、そんな不気味な声だった」

「……蓬萊寺統司か」

蓬萊寺は忍者の末裔である。姿はもちろんのこと、必要とあれば声も体格すらも変えて敵を欺き、必要な情報を持ち帰るのが忍者の本領。

だからこそ、その極致ともいべき統司であれば、その七百七十七色の声にも説明がつく。むしろ、彼以外の誰がそんな真似をできるだろうか。

「どーやらあいつが希繫の側にいるのはマジらしいな」

「そういうところは相変わらずさすが慈愛のレイドリベンジャーズだと言っておこう」

休眠—コクーン—

希繫奪還作戦まであと数日。ギリギリで間に合わせた逢依の特訓。しかし、出産による体力の低下はどんなに訓練を繰り返しても全盛期の力を取り戻すことはできなかった。

作戦時、白露と霧久は実家の笹倉家に預けることが決まり、確定している参加メンバーは逢依・悠生・優芽・総交を中心とした永岑支部のレイドリベンジャーズたち。本部には何度も掛け合ったが、結局いい返事が返ってくることはなかった。

優芽によると、マスカレイダーと義陰・陽乃の計四人は別ルートで現地合流。全員が決死の覚悟でこの作戦に臨んでいることは言うまでもなかった。

「……はい。両親の都合で、一ヶ月ほどおばあさまの家に行くことになりました」

『そっか。なんだか、ちよつと……ううん、すごく寂しいよ。でも、一ヶ月したら帰ってくるんだよね?』

「はい。我が家はとても親類が多いので、そういう意味では寂しくないのですが……やっぱり、雨零くんのいない日々というのは、寂しいです」

白露を実家に預ける旨は、母親である逢依から学校に伝えるだけでなく、白露自身も

親しい友人たちに打ち明けていた。友人やクラスメートはもちろんのこと、やはり最も白露の不在を惜しんでくれたのは、彼女の一番の親友である雨零うれいであった。

おかげでこのところは帰宅して宿題を終わらせると、夕飯までの時間をほとんどビデオ通話に充てている。話題は尽きることなく、しかしたまに訪れる静寂にも不快感はなく、互いにその会話と静寂を楽しんで——そして数日後に訪れる各々の寂寞に身構えているようでもあった。

『ねえ白露ちゃん。戻ってきたら、一緒にお出かけしよう。最近は霧久くんと一緒だったから白露ちゃんの家で遊んでたけど……今度は、二人だけで遊ぼうよ。久しぶりにさ』

「はい……では、その時を楽しみに待っています。雨零くんと二人っきりの……ふたり、きりの……。……あれ、なんででしょうか。今までもいっぱい二人で出掛けたのに、なんだかちよつと気恥ずかしい気がしますね」

『そうかな? ……いや、うん。確かにちよつと、改めて二人っきりって思うと、ちよつと緊張するね。今までだって、二人でいろんなことをしてきたはずなのにね』

その気恥ずかしさの由来はどこなのか。それを理解する間もなく、二人はそれを呑み込んだ。

「……では、わたしはそろそろ荷造りをしますので、今日はこれで」

『ぼくも、明日の授業の支度をしなきゃ。またね、白露ちゃん』
 「はい。また今度、雨零くん」



同時期、蓬萊寺家で孤軍奮闘する希繫にもいよいよ限界が近づいていた。蓬萊寺謹製の薬——その正体は媚薬、ではなく、心の欲望を表面化させる興奮剤だったのである。

希繫の血に宿る蓬萊寺の本能が「近親者への愛欲」を求め、そして桐梨希繫としての感情が「ここにいない妻への愛情」を爆発させ、その情欲は際限なく希繫の理性を貪り続けていたのである。このままでは撫月なつきだけでなく、男女の性差が恋愛の壁とならなくなつたこの現代2184年において、周囲の全員が彼の欲望の対象となりかねない。

そう判断した希繫は屋敷の離れに立てこもり、エクレールによる高出力電磁バリアを展開。仲間たちの救助が訪れるまでの間、そのバリアの中でさらに雷撃体となり、さらには撫月が突入し、意識のない希繫を襲うことがないよう人としての形を敢えて保つことなく繭の状態で過ごすことを決め込んだ。

しかし、これは希繫にとつても危険な状況であつた。

そもそもユナイトギアとは感情を糧に力を為す兵器である。つまり、装着者の感情が

高まることでその力を増し、そしてそれを維持する。逆に言えば——感情の起伏が穏やかすぎたり、あるいは意識を保てなくなれば、ギアの力も維持できなくなるといふことである。

加えて、ユナイトギアの糧となる感情は正の感情のみであり、憎悪・恐怖・不安・猜疑心といった負の感情がそれを上回ってしまった場合、ユナイトギアはそのエネルギーを反転させ、レイダーギアへと変貌してしまう。

レイダーギアとなった装着者は「正の感情」を「負の感情」によつて呑み込まれ、他の者の感情を無差別に喰らい始める。それはまるで、人類の敵——レイダーと同じように。

希繫はこの一年間、蓬萊寺への憎悪を抑え、蓬萊寺への恐怖を抑え、蓬萊寺としての不安を抑え、蓬萊寺に対する猜疑心を抑え込んできた。それは偏に、レイドリベンジャーズとして、エクレール・ルミエールの装着者として、正の感情を保つためだ。

しかし負の感情を抑え込もうとすればするほど、希繫の心は擦り減つていった。憎んではならない。恐れてはならない。不安になつてはならない。疑つてはならない。必死に、必死に感情を抑え続けたことで、そもそもその感情の源である『心の激しさ』までもを抑え続けてしまったのである。

そんな中、応急処置とはいえ咄嗟に装着したエクレールであつたが、このエクレール・

ルミエールは「桐梨希繫」という、レイドリベンジャーズの中でもトップクラスに感情の起伏が激しい装着者に使用されることを前提として改造されたギアであり、そのせいで消費する感情エネルギーが他のユナイトギアたちの比ではなかった。

つまりは、消耗した希繫の感情エネルギーでは遠からず限界が来てしまう——最悪の場合は、負の感情が上回った状態で。

それを察した統司とうじは、即座に行動を移した。希繫の「飼い犬」として仕えていた杏樹きょうじを蓬萊寺から逃がし、ドミネイトの支配力によって撫月と小夜の意識が「蓬萊寺杏樹」という存在に向かないよう仕向けたのである。

ドミネイトの最大の弱点は、基本的に一度の発動で対象にとれるのはドミネイトが認識できている数人までであり、この屋敷の全員が意識を向けている希繫を逃がすことはできないということ。

しかし杏樹に意識を向けているのは、せいぜいが上記の二人くらいで、その二人も今は希繫へ注意が向いている以上、杏樹の不在がバレないようにアフターケアとしてドミネイトを使用したものの、この混乱に乗じて彼女を逃がすこと自体は難しいことではなかった。

そして統司によって蓬萊寺を抜け出した杏樹は即座に京都を離れ、一直線に愛知県永岑市——ではなく、道中三重県のレイドリベンジャーズに助けを求めた。自分が蓬萊寺

であることを打ち明けた上で、永岑市への連絡を繋いでくれと訴えたのだ。

直後に彼女はそのレイドリベンジャーズ支部で拘束されることとなったが、職員の見下で永岑支部への連絡を繋いでもらい、そこで希繫の状況と、蓬萊寺が彼に行った仕打ち、そして「リライズ」の本当の能力を打ち明けた。

そう、歴史を再現する能力だと思われるいたりライズのギア特性は、実際にはまったく違う能力であることが、統司によって明かされていたのだ。

『リライズ……第五号、ユナイトギア……『リライズ』の……ギア特性、は……『逆行再生』……。あらゆる時間を、巻き戻して……元の形、元の状態まで戻す……『不死』の属性を付与する、ユナイトギア……！』

その連絡を受けた永岑支部のレイドリベンジャーズは、三重県のレイドリベンジャーズに杏樹の保護と永岑市までの護送を指示。彼女の安否を心配していた早智は早々に九衣へ連絡、永岑のレイドリベンジャーズに許可を得て、両者は杏樹と共に希繫奪還作戦へと参加することとなった。

杏樹の協力を取り付けた参加メンバーは、不意の戦力増強に驚きつつも、杏樹のポテンシャルを最大限引き出してカバーできる二人にも驚いていた。蓬萊寺ですら「飼犬」とは名ばかりの「狂犬」であった彼女が、早智と九衣の指示にはまったく疑いや苛立ちを見せずに従っている。

仮に狂犬でなくとも、そもそも蓬萊寺が一般人の言葉に耳を貸すという状況自体が特異なのである。早智は杏樹の動きをまったく阻害することなく、むしろ動きやすいように露払いとしての動きを見せ、九衣は杏樹では対処できない相手や討ち洩らしを淡々と処理していく。この三人だからそのコンビネーションであった。

「希繫は雷撃体の繭になって沈黙状態、か……。あつちに攻め込んだ時、すぐに希繫を奪還できるかってなると、ちよつと厳しそうだな」

「雷撃体はあらゆる物理攻撃を受け付けないし、電気や磁力を由来とする攻撃を飲み込む性質を持つけど、雷という特性上、外部の音に気付けないものね……」

雷撃体とはそもそも、「雷」という性質と「人間」としての意識を融合した状態であり、本人の意識があれば言葉を聞くことも発することもできるし、他の五感もまっとうに機能する。

しかし雷撃体で休眠状態になってしまった場合、「人間」としての部分が眠ってしまうため、ほぼ雷としての性質しか残らない。雷が「光」と「音」を伴う電気であるため、雷撃体の繭は「光の繭」という形でその存在を目視できるし、雷鳴という形で休眠状態の彼の感情を聞き出すこともできる。

だが、雷は光や音を放つことはあっても、光や音を観測することはない。つまり、休眠状態の希繫は周囲の状況がまったく見えていないし聞こえていないのである。

「おそらく希繫は時間経過ではなく、なんらかの条件をトリガーとして覚醒する休眠状態に入っているはず。ただ助けに行つて繭に近付いても、連れ帰るどころか目を覚ませることすらできないだろう」

「加えて、お兄さんは一年間にも渡る蓬莱寺謹製の興奮剤を飲まされています。目を覚ましても薬効が残つていれば、周囲の人間を襲うかもしれません。至急、解毒剤を用意する必要があります」

「解毒剤つつつても、サンプルがねーだろ。まして蓬莱寺謹製だ、サンプルがあつても数日以内になんてできるわけがねーよ」

悠生の言う通り、蓬莱寺謹製の薬はその効果の強さ以上に、製造方法が不明であることが最大の難点なのである。

仮にサンプルが存在したとして、それがどのように作られているのか、何と何が組み合わせらつてその効果を發揮させているのか、その薬効を打ち消せる物質をどう作ればいいのか。何もかもが未知なのだ。

そんな状態で特効薬を作れと言われても、まして薬のサンプルもなく投与された人物もない状態であれば、もはや無茶ぶり以外の何物でもない。

「……考え方を変えましょう。希繫が興奮状態にあるのは、おそらく蓬莱寺としての本能と、桐梨希繫としての私への愛よ。この愛欲を上回る感情で塗りつぶすことができる

のなら、一時凌ぎかもしれないけれど希繫の理性を取り戻せるかもしれないわ」
「毒を持つて毒を制す。感情の興奮をより強い感情の興奮で塗り潰すというわけか。荒療治だが、現実的に可能なのはそれしかないだろうな。だが具体的にどの感情をどうやって引き出すつもりだ？」

毒に勝る毒——蓬萊寺としての本能にも逢依への愛欲にも勝る極大の感情。

逢依にはひとつだけ心当たりがあつた。

「希繫にとつて一番大きな感情なら、まだ残っているでしょう？」

6th season—蓬萊寺戦争編

決起—ラウンチ—

西曆二一八四年、七月七日。おそらく歴史上初めて、人類がレイダー以上の脅威である『蓬萊寺家』に挑むことになったこの日が、奇しくも囚われの身である希繫きぎづなの誕生日であることに、逢依あいは唇を噛みしめた。

この一年間、彼を想わない日など一日とてありはしなかった。子供たちの母としても、彼の妻としても——そして、そうなる以前からの『家族』としても、逢依の心において希繫の存在が占める部分の大きさを自覚する日々が続いた。それはきつと彼も同じはずだと信じて一年が過ぎた。そして今、その愛おもいが彼を苦しめ、蝕くんでいる。

愛と性欲。その境界がどこにあるのか、などという議論を胸の中で繰り広げる暇などなく、彼は議論ではなくただの事実としてその二つの間で板挟みになっている。

ユナイトギアは感情の兵器だ、というのは誰もが知るところで、そしてその言葉の「正しさ」と「間違い」を今こうして痛感する。ユナイトギアは正しく感情の「兵器」なのだ。使い方が正しければ正しく使えるなんて甘いものではない。意図せず正しくない使い方ができてしまう。それがユナイト……否、『レイダーギア』なのだ。

「これより、桐梨希繁奪還作戦を行う。再三に亘る本部への協力要請に返事はない。この春から入った者の中には、なぜたった一人の人間のために蛇が蝮局とくろを巻く藪をつつくのかという意見もあるだろう。そう思うのなら逃げてもいい。……いや、逃げてくれ。ここから先は、確かな覚悟の無い者にとつて、ただの地獄にしかならない」

作戦の大まかな流れは既に各部隊の隊長陣から通達されているが、士気向上と注意喚起の意を込めて、永岑支部のトップである霧島支部長による演説が行われている。

これまでも何度か触れてきたが、二一八四年現在、蓬萊寺家は国連が指定する国際的犯罪者集団の第一位。末端の蓬萊寺家ですら、一騎当千を称するレイドリベンジャーズを束にしても一方的に鬪り殺されるだけ。そのため、人類守護を使命とするレイドリベンジャーズが唯一「撤退優先」を認めている対象である。

その蓬萊寺の当主がレイドリベンジャーズにおいて「最弱」とまで称される『彼』なのだから、実は蓬萊寺も大したことないのではないか、と言う者もごく少数ではあるが存在している。嘆かわしくも。

しかしそれは大きな間違いというものだ。彼が「最弱」であるのにはそれ相応の理由が存在する。出生と幼少の教えはどうあれ、婚代に拾われてからの情操教育による人格形成がその最たる例ではあるが、それだけではない。彼の「優しさ」がそのまま「弱さ」に直結しているわけではないのだ。

彼が『弱い』と称される理由はシンプルだ。「そういう戦い方」をしなければ殺してしまふからだ。敵を……救うべき時も、護るべき時も。

「元を辿れば、蓬萊寺家は江戸時代には既にその存在を確認されている。幕府に仕える忍の一族であり、幕府の内に巢食う悪を討つ『悪を殺す悪』であつたとされる。そして幕府の解体と同時にその理念が崩れ、徐々に現在のような殺人鬼集団となつた」

一部を除いて、彼らは概ねユナイトギアを持たない。正の感情を威力とするユナイトギアと、感情を抑えこんで理性に特化させた『殺人術』を駆使する彼らでは相性が悪すぎるし、たとえ感情を表に出せる者であつても、それらは凡そ『悪感情』を強く抱いてしまつているからだ。

だからこそ死体への『芸術美』を強く抱くウィルフや、主や友人に対して狂氣的なほど『忠誠心』を燃やす杏樹きょうき、あるいは妻への『支配欲』あいじようを募らせる統司とうじなどは、蓬萊寺にとつても貴重な人員であり、その三人は現在一名が死亡、二名がほぼほぼこちら側についている状況。決して分は悪くはない。

それでも、杏樹はあくまで「希繫と統司に対する恩」と「早智さちと九衣くいに対する友情」に報いるための協力関係であり、統司が期待しているのは希繫のみであることも合わかり、作戦に組み込めるほど信頼関係が成り立っているわけでもない。

故に、こうして作戦に参加するレイドリベンジャーズたちの意識と指揮を統率する必

要があつた。

「元とはいえ忍者の末裔であり、その本丸にはいくつものシノビギミックが施されていると思つて間違いない。加えて暗所・閉所での戦闘技術に関しては明らかに向こうが上だ。故に、あちらにはないもので対抗しなければならぬ。そう、作戦参加者全員の信頼関係でね」

蓬萊寺の殺人術は「不確定要素」を極限まで取り除いた先にその強さの神髄を見出す。そのため、常に裏切りの可能性を孕んだ『協力』という術を取ることは決して無い。武器ですら「壊れたら使い物にならない」という理由で、真つ先に徒手格闘術を叩き込まれるほどだ。

希繫が「素早い動き」と「暗所や閉所を得意」として「蹴り主体の格闘術」を用いていたのは、おそらくそうした理由も多分に含んでいるだろう。だからこそ、過剰なほど自分の実力を抑え込んだ戦い方しかできずに『最弱のレイドリベンジャーズ』という称号を背負っていたのだ。

「彼らは急場凌ぎの協力関係を結ぶことはあれど、利害を逸した信頼というものを知らない。我々が彼らの予想を超えて虚を衝けるとすればそこだけだ。真つ向勝負など考えない方がいい。彼らの頭には「一対一」や「正々堂々」などという言葉はない。不意打ち・騙し討ちはお手の物だ」

希繫と蓬萊寺の關係性は、彼の無意識の根幹として表れがちだ。ここまで述べて戦闘スタイルの話だけでなく、そもそも彼が逢依を妻として選んだことすらも、ある程度は「蓬萊寺としての影響」がないとは思えない。

蓬萊寺の純血として誕生した以上、彼は誰に教わるよりも早く、本能的に異性を意識する相手が居た。それが姉・小転こころである。何代にも亘つて兄妹あるいは姉弟で子を成してきたため、蓬萊寺としての無意識がそう求めてしまうのだ。

そして、希繫は蓬萊寺を出て、婚代の下で真つ当な倫理を学び、そして逢依を愛するようになった。絆フアミリアの家族において『姉』として接し続けていた逢依のことを。

逢依はそもそも、親の虐待から逃れるために蓬萊寺から逃げる途中の彼らと行動を共にし、そしてその道中で既に希繫に対して強い信頼を置いていた。そして婚代の下で育ち、人並みの平穩を得て自分を振り返るようになって、その恋を自覚した。だからこそ、家族愛と異性愛の違いを十分に区別できる段階での気付きであった。

だが希繫はそうではない。苦難を共にし、ただ同じ屋根の下で同じ食事をとっている間に彼女を意識したのではなく、彼女が「家族」であり「姉」であると当然のように思っていた高校時代に、彼女への気持ちで自覚してしまった。それが「姉への恋」なのか「逢依への恋」なのか。それを確かめることもなく。

「いいかい。しつこいかもしれないがもう一度言わせてもらおう。ここから先は地獄だ。

瞬く隙すら与えられず、ほんの数瞬前まで隣にいた仲間の首と胴が離れているかもしれない。そして次の瞬間にはそれが仲間ではなく自分なのかもしれない。そういう場所に臨むんだ。だから……少しでも怖気づく者は即刻逃げてくれ。これは命令だ」

脅しというには幼稚な——けれどきつと何一つ誇張ではないのであろう霧島支部長の言葉に、その場の誰もが息を飲み、そして……誰もがその場を去ろうとしなかった。

「桐梨隊員は俺ら永岑支部のレイドリベンジャーズにとつて、最高の仲間でした。彼の仕事は常に周囲を慮り、そして対峙する者への敬意があつた。たとえそれが討滅すべきレイダーであつても」

「希繫さんは私たち技術開発部にも積極的に協力してくれる素晴らしい方です！ 彼のギアの改造に協力できたことは私の誇りですし……そんな彼と彼のギアの未来を、ここで途絶えさせるわけにはいきません！」

「桐梨はよく他の管轄の仕事まで取つちまつて、俺も散々あつちこつち頭下げまくつたけどよ……アイツン時だけですよ、向こうが笑つて許してくれるなんてのア。あんなに愛されてるレイドリベンジャーズを見捨てたら、俺ア家内や娘にどんなツラ下げて帰りゃあいいんです？」

「私たち、新人時代はよく桐梨さんに面倒を見てもらいました。部隊は違いましたけど、仕事だけじゃなく人付き合いと個人的な悩みとか……色んな事を一緒に悩んで考え

てくれた人なんです！　いつ死ぬかわからない仕事なら……そういう人のために、この命を使いたい！」

希繫は弱いしお人好しだ。蓬萊寺として生まれ、人殺しの役目を押し付けられ、そこから逃げて、真つ当な「親」の元で優しく温かく育っていった。まるで蓬萊寺としての自分を殺すように、ひとつの善行でひとつの罪を贖うように、生きている間の善行では償いきれない罪滅ぼしをするように、彼は優しかった。

そしてその優しさの理由を、誰もが訊ねようとはしなかった。それが彼の為^{ひととなり}人なのだと思います。そういう性格に育ってしまうほど優しい環境で生きてきたのだとみんなが思っていた。それは半分だけ正解で、それは半分だけ間違っていたということ、口にしなないせいで。

罪の数だけ償わなければならないとすれば、今まで彼が償ってきた罪はどれほどののだろうか。そして、あとどれだけ償わなければならないのか。それは、彼自身にしかわからないが、少なくとも、彼はその罪を生きている間に償いきれるとは考えていないようにも思える。

「現時点で桐梨隊員の存命は確認済みだが、蓬萊寺家が彼を傀儡としている可能性も決してゼロではない。今回の作戦の最優先目的は『桐梨隊員の確保』、次に『退路の確保』、そして『リライズの確保』だ」

とにかく迅速に対象を奪還し、退路を作り、撤退する。そして全戦力撤退の準備が完了するまでに第五号ユナイトギア『リライズ』を確保し、それもろとも蓬萊寺を抜け、そして――。

「全ての目的を達したのち、その時点での生存者全員の点呼を取り次第、大郷隊員が蓬萊寺家の屋敷を燃やす。この地上において最大の火力を持つ、彼のリミットブレイクで」
もはやこの戦いに躊躇や加減などというものは必要ない。今までのように『まも守護る』ための戦いではない。これは、蓬萊寺という国際脅威を討滅するための――『た殺す』ための戦いなのだ。

これまで幾つもの死線を潜り抜け、脅威性生命体『レイダー』を一騎当千の活躍で討ち続けてきたレイドリベンジャーズたちが、ここに集結し、ただ一人の人間を救い出すために力を結している。一人の――、

(私の、家族のために……)

逢依の瞳に、力強い冷気が宿る。

蓬萊寺撫月—アドマイヤー—

希繫きづなのククーン化は、蓬萊寺ほうらいじ家に多大な混乱をもたらした。そもそも彼が好意的に蓬萊寺に戻ったという考え方をしていた者などほぼ皆無であっただけに、なおのことこの事態の緊急性と危険性を理解しているのだろう。

ユナイトギアが負の感情を原動力にしてしまうと、ギアと装着者はライダーギアとして融合し、知性も何もないただの感情喰バケモノらいに変わり果ててしまうというのは、蓬萊寺も周知しているようで、だからこそどう扱うこともできず、ククーンがある離れを一時的な禁足地とした。

だがこの苦し紛れのククーン化は、意外な形で蓬萊寺の切り札を奪っていることに、希繫自身は気付いていなかった。彼がククーン化する直前、彼らには最終手段として、生き残った希繫の育ての親や、あるいは友人・知人を人質とすることも視野に入れられていた。

しかし、もしも今それを盾にしてしまえば、彼の精神は間違いなく追い詰められ、負の感情が正の感情を上回ってしまうだろう。さすがにライダーギア化してしまえば撫月は子を宿すことができないうし、そもそも声が届かないということを知らない蓬萊寺

は、彼の周囲の人物に一切の手出しができなくなつてしまつたのである。

「夜縫お兄様……。やはり、貴方様の御心は彼方に置いていらつしやるのですね……」

「撫月様。まことに遺憾ながら、重ねて良くない報告が入つております」

「杏樹のことでしょう？ 構いませぬ、放つておきなさい。それよりもお小夜、屋敷の者たちに戦の準備をさせなさい。きつと……今までに無いような、大きな戦になるでしょうから」

杏樹の脱走は、既に撫月の知るところであつた。あるいは、それを見逃してでも希繫コクーンを優先しなければならなかつた、とも言えるのかもしれない。

杏樹が蓬莱寺を裏切り、この屋敷を出たとなれば、抛り所となる人物には撫月にも心当たりがある。過去、ウィルフからの報告にあつた古谷早智と久繰九衣という男女だろう。この二人の居所は把握しているし、捕えようと思えば今でなくてもよい。むしろ問題は両者の所属だ。

片や地球の守護者。片や人類の守護者。いずれにせよ蓬莱寺を敵対勢力として認識しており、拳句には多くの人員がユナイトギアを所有している。単純な戦闘力においては、自衛隊や警察とは比較にならない。

それでも蓬莱寺である以上は、非装着者であつてもユナイトギアとやり合うことは出来るが、いずれも侮つていい相手でないことは蓬莱寺としても認めざるを得ないのだ。

「恐らくこちらの状況は既にレイドリベンジャーズとORBにリークされていると思っ
ていいでしょう。この混乱に乗じて、あちらも研ぎ澄まし続けていた牙を剥いてくるは
ず。なれば、こちらにも相応の準備が必要となるのは必至。お小夜、家臣をここへ。腕利
きを夜継お兄様の防衛につけ、他は全員屋敷の内外の索敵、臨戦態勢」
「心得ました」

とはいえ、混乱と同様は統率によって収束が可能だ。撫月はその場を小夜に任せ、自
らが向かった先は蓬萊寺の地下宝物庫。その最奥に封印されたものこそ——第五号ユ
ナイトギア『リライズ』であった。

「おいでなさい、リライズ」

『はい。ユナイトギア第五号・リライズ、蓬萊寺撫月に同調接続します』



『各員、配置につきました』

『よし、なら手はず通りにいくぞ。まずは逢依からだ、行ってこい』

『了解。……行くわよ、クリュスタルス。この世界を凍てつかせてしまいなさい』

『了解。あらゆるものの運動量をゼロに固定します』

瞬間、時の運動が凍結され、この世界で動くことのできる存在は逢依だけとなった。この凍結された世界の中では、あらゆるものが凍結している。それは単に物質的な運動だけに留まらず、意識や知覚能力までもが凍り付き、彼女はいかなる干渉も受けない「不在の存在」となる。

体力と精神力を著しく消耗する代わりに銀河全体を凍らせるワールドフリーズとは異なり、この能力で凍結できるのはあくまで半径8 km圏内のみ。そのため凍結を解除すれば、周囲との時間のズレを修正するため「本来その凍結された時間内に動くはずだったもの」は周囲の時間と同期するまで加速してしまう。

故に逢依は基本的にこの能力を「一瞬の移動・回避」以外のために使用することはない。そもそも凍結した時間の中では、逢依以外の時間も凍っているため、たとえナイフを突き立てたところで対象の時間が動かないなら豆腐すら傷一つ付かないのだ。

だからこそ、この能力の性質を把握しているレイドリベンジャーズたちは、指定された場所ですじつと息を潜めた。それは蓬萊寺に気取られないようにするためだけでなく、凍結領域内で動こうとしなければ時間同期の際の事故を防止するためでもあるのだ。

(……)の凍結領域内ならまず間違いないく私の姿を認識できる人はいない。けれど相手は蓬萊寺。もしかしたら私を認識できる力を持つ者がいてもおかしくはない)

蓬萊寺に常識的な思考は意味を為さない。それは逢依でなくとも、蓬萊寺という存在

を知る者にとっては共通認識だ。たとえ凍り付いた世界であっても、蓬萊寺に対して完全なマウントをとることは不可能だと判断した逢依は、凍結時間を長引かせてでも息を殺して侵入することにした。

しかし蓬萊寺家の外壁周りは「成り上がり」たちによってぐるりと囲われていて、どうしても「止められた視界」の外からは侵入できそうになかった。そこで、逢依は正面の門とは真逆の裏側の堀に「凍結状態の爆弾」をばら撒き、そのまま堀の上に飛び乗ると、そこから敷地内の敵・施設の配置を記憶し、屋敷内に侵入する。

クリュスタルスの基本機能によって視覚・聴覚・嗅覚を数十倍に引き上げられている逢依には、彼女に近づくあらゆる存在の位置・大きさ・種類が把握可能だ。加えて、現在地から半径8km圏内の熱源を感知できるクリュスタルス本体の機能の相俟って、こうした潜入任務にはとことん強い。

戦闘能力こそギアによって引き上げられた逢依の身体能力と大味すぎるギア特性に依存するが、そもそもクリュスタルスは「戦闘にならない」ことを目的として造られたギアであるため、戦闘能力の低さは問題になりづらいのだ。

「クリュスタルス、もういいわ」

『固定されていた運動を再開します』

直後、庭から聞こえる無数の悲鳴。凍結された時間が本来の時間に同期するために加

速したことで、動いていた何人かの蓬萊寺が接触事故を起こしたのだろう。

この時間同期の際、完全に違うルートを進む者たちは単純な加速に警戒心を高めるが、本来なら避けて通り過ぎるルートを辿っていた者たちは、その加速に対応できずぶつかってしまったのが前述した「同期事故」だ。

そしてほんの数瞬ほど遅れて、塀の外で爆発音が聞こえた。先程ばら撒いた起爆寸前の爆弾が、凍結を解除されたことで一齐に爆発したのだろう。屋敷の内外を問わず、大多数の気配が一気に正門から離れていくのがわかる。

同時に、クリュスタルスから待機中の全レイドリベンジャーズに先程の敷地内の敵施設を撮影した画像を送り、突入開始の号令を出した。

（エクレールの反応は向こうの離れただけ……さすがにまだ警備が厳重ね。突入部隊と合流しなければ、一人では近づけない。できればその間にリライズの確保をしたいけれど……たぶん、あれは既に撫月が装着しているでしょうね。だとすると……残る役目は屋敷の間取りのスカン、かしらね）

既に何度か見かけたが、この屋敷は間違いなく忍者屋敷としてのギミックを採用している。逢依が蓬萊寺の気配を避けつつもきちんと廊下を歩いているのも、そうしたギミックを回避しながらスカンを行うためである。

実際、試しに入った部屋では、掛け軸の裏に隠し扉があるのが確認できたし、八畳あ

る畳のうちの一枚は落とし穴になっていた。前者は気配を感じ取れる逢依には意味のないギミックだが、後者のような人力を介さないトラップは回避が難しい。

だからこそ、そういったトラップも含めて全てのギミックがどこに・どういうものがあるかを含めた間取りマップを行わなければならず、常日頃から人が通る廊下であれば、そういったギミックも少ないはずだと踏んで、こうして息を殺しながら歩いているのだ。

（既に私に気付いているのは……一人だけ？ さつきから私の方に向かってくる気配がひとつ。どこかに誘導されてる……わけではなさそうかしら。となると、そろそろ私が向こうに気付いていることも悟られそうね。まあ、だとしても逃げさせてもらうけれど）

はつきり言って、戦える体に仕上げたとは言っても、相手が蓬萊寺となれば逢依の勝率はほぼゼロと言っていい。そもそもクリュスタルス自体が戦闘向きではないし、逢依もどちらかといえば軍師向きで前線に出張るタイプではない。

だが、そうであるからこそ彼女は逆に自分の役割を正しく把握し、自らのできること、できないことを理解していた。戦っても勝てないなら、戦わなければいいのである。今回の襲撃における最大の目的は希繫の奪還。幸い、クリュスタルスは逃げて避けてに最適なギアであるし、そもそも戦闘そのものを回避することに長けている。

故に逢依は慌てふためくことなく、この近付く気配を常に把握しながら屋敷の中を練り歩いた。途中、どう考えても間取りを無視した移動を行う気配に対して、「なるほど屋根裏」と、途中からは屋根裏のスキャンも行った。かなり近くまで近づかれたこともあったが、即座に凍結領域を展開してまったく違う位置まで移動して接敵を回避した。

『スキャン完了。作戦メンバーの各ユナイトギアに一斉送信します』

「ええ、お願い」

スキャンデータの送信と同時に、中庭から怒号が響いた。作戦メンバーがとうとう突入したのだろう。その音を聞いた逢依は即座に凍結領域を展開し、中庭へと向か——

「あら、そんなにお急ぎで、どちらに——」入用でしょうか」

「——ッ！」

凍結した世界に響く、鈴の鳴るような凜とした声。

そして、この凍り付いた世界よりも冷たく、静かな声。

「蓬莱寺、撫月……ッ！」

「生きていらっしやっただね、お義姉様」

齧齧—ジレンマー—

「蓬莱寺、撫月……ッ！」

「生きていらっしやっただんですね、お義姉様」

凍結した世界の中、冷徹に燃える瞳を向ける目の前の少女に、逢依はすぐさま得^{マルチブルダガー}物を構えた。

「この絶対的なゼロに凍り付いた世界に、どうして……！」

「ふふ、どうやら相性がよろしかったようで」

「相性……？ ……なるほど、こういう状況も「再生」できるのね……！」

第五号ユナイトギア『リライズ』のギア特性「復元再生」とは、ありとあらゆるものを『再生』させることのできる能力。

即ち、この凍り付いた世界を「一時停止した世界」と言い換えるのなら、その停止を「再生」することで世界、あるいは自分自身を再び動かすことができるのだ。

「蓬莱寺統司の持つ『ドミネイト』は、他者が行う思考・行動の選択を自由に操作し、時にその選択を放棄させることもできますので、ドミネイト対策に「自分の思考が止まった際に自動再生する」ようリライズに命じていたのですが……思わぬ収穫でしたね」

（時が凍り付いたこの世界では、私と彼女を除いた全てのものが凍結している。仕方がない……増援がこないことを祈るしかないわ）

逢依の溜息と同じくして、世界の時が脈動を取り戻す。

凍り付いた世界は、そもそも「逢依以外の誰もが行動不能になる」ということが最大の強みであり、目前に動く対象がいるのなら、もはや発動する意義などほぼ無いに等しい。まして相手がリライズであるのなら、世界ではなく撫月自身の時を止めても「再生」されてしまう。

しかも時間が流れない以上、温度も変化しない。リライズの効果範囲外から攻めるには、物理的に彼女を凍らせるのが一番効率的だが、そのためには温度の変動が必須条件となる。それでも、それがどれだけ意味のある効果を及ぼすかは怪しいところではあるが。

「ああつ、よかつた……！　生きていてくださって、本当にうれしいですっ！」

「……嬉しい？」

「はいっ！　だって、お兄様の奥様ということとは、私にとつては義理の姉。家族と同然ですもの。庭の方が騒々しいのは後でわたくしが処理いたしましょう。誰だって夫が囚われれば心配ですものね。さあさあ、歓迎いたしますわ。いけません、すぐに宴のご用意をしなければ！」

無邪気な喜色の声。罨を疑う逢依であったが、それはすぐに掻き消えた。明らかに過剰なほどの戦闘力を持つ者だけが纏う、あの独特にして異様な雰囲気。腹違いとはいえず希繫と小転と同じ血を持つ妹というのは嘘ではないらしく、あの二人と同じ「敵意をまったく感じない視線」が警戒心を剥き出しにした逢依の視線をなぞる。

言葉の奥に隠された意味までもを読み取ることができなかったのは、さすがに蓬萊寺として教育された振る舞いゆえか。それでも、少なくとも「うれしい」という言葉に裏がないように感じられる。しかし、だからこそ逢依はその言葉に心を許しはしなかった。

「蓬萊寺は殺人鬼としての本能を強く残すため、血の繋がる男女のきょうだいで子孫を残すと聞いたわ。ならば、あなたは希繫の妻である私を生かしてはおかないでしょう？」

「ええ、蓬萊寺としてはそうなります。けれど、わたくし個人としては血を分けた家族に会えればそれでよろしい。お兄様が誰と結ばれていようと構いません。それに、貴女様が生きているということは、お姉様もきつと生きていらつしやるのでしょうか？　ぜひ、この蓬萊寺で共に暮らしませんか？」

「……私と希繫の邪魔をするつもりはない。私たち家族を引き裂く真似もしない。だから自分を傍に置いてくれ、ということ？　蓬萊寺にしては、随分と低姿勢なのね。私と

しては受け入れられないこともないけれど、それをこの家の者たちは許してくれるのかしら?」

「いいえ。家臣にとつて蓬萊寺の掟は当主の意思よりも尊重するもの。わたくしが何を言おうと、お義姉様を妻として許しはしないでしょう。よくて妾、場合によつては他の家に放り投げることも。けれど私がお義姉様を守ります。兄夫婦のためでしたら、妹としてそのくらいの労力を割くのは当然ですわ」

それは言い換えるのなら「蓬萊寺の改革」であろう。殺人鬼集団としての血脈を緩やかに断ち、ただ普通の、ただひたすらに濃い血の繋がりを少しずつほどこいていく。そのための第一歩として、希繫と逢依を受け入れる。

だがその目的の主となる部分は「改革」ではなく、撫月個人の「家族と一緒に暮らしたい」という純粹な願いだけ。けれど――、

「お兄様とお義姉様の笑顔を守り、その傍らに妹として置いていただく。これ以上の幸せなどありません。そういうえば、お二人にはお子様もいらつしやいましたね。必要なら必要なだけお世話のお手伝いをいたします。お二人が望まないのなら蓬萊寺の教育だつて撥ね退けてみせます。ですから、ここで一緒に暮らしましょう?」

「……私、嘘を見抜くのは得意よ。だからこそわかる。あなたは本気で私たちと家族になりたいだけだつて。希繫は最初はゴネるかもしれないけれど、私はあなたみたいな子

が嫌いじゃないわ。一緒に暮らすのも悪くはないと思うし、あなたみたいな義妹はとても可愛いとも思う」

「でしたらー！」

「けれど、希繫は決してこの家には戻らない。あなたのことは時間をかければ受け入れられるでしょうけれど、少なくともこの場所を受け入れることは決して無いわ。希繫にとつて、ここは居るだけで肌を灼く地獄のような場所だもの。だから……「ここで」一緒に暮らすことはできない」

逢依の静かな一言は、その場の空気すらも凍らせるようであった。

構えを解くことなく撫月を睨み続けると、彼女は今にも泣きだしてしまいそうなほど切ない視線を逢依にぶつけた。

「わたくしは、蓬萊寺の父とその妾の間に生まれました。けれど混ざりものの血が流れる私と母は、父の手引きで蓬萊寺を抜け、そのまま地方の田舎で静かに暮らしながら、蓬萊寺家で暮らしているであろう姉と兄の存在をしばしば想い耽っておりました」

「……けれど、希繫と小転はその蓬萊寺を出た。そして、あなたは蓬萊寺に連れ戻された」

「はい。逆らえば母の命はないと脅され、蓬萊寺で当主として、殺人鬼として、一人前になるよう教育を受けました。何度も母に縋りたいと思いましたが、それは叶いませんで

した。それでも母が生きていてくれるのならと、わたくしは家臣に従いこの当主の座に就きました」

「けれどその抑圧され続けた母への想いは、いつしか家族への執着へと変わった。希繫や小転を蓬萊寺に連れ戻そうとしたのは、それが理由ね」

撫月はただ何も言わず、ゆっくりと頷いた。

「姉に会いたい。兄に会いたい。二人と一緒に暮らしたい。妹と認めてほしい。そんな願いが渦を巻いて……そして当主となったことでそれが可能になりました。成り上りの者たちに、お二人をここに連れ戻すよう命じました」

「ウィルフと統司をけしかけたのは、あなたらしくないミスだったのね。それとも、それだけ焦っていたのかしら。あの二人はあなたから「連れ戻せ」と命じられた理由をきちんと把握しておらず、力づくで連れて行こうと希繫に対して攻撃してしまった」

「わたくしの説明不足でお兄様やそのご家族を傷つけてしまったことは、今でも深く後悔しています。けれどお兄様は蓬萊寺——ひいては「純血の蓬萊寺」を特に嫌っていらつしやるようで、わたくしが出向けばどちらかが息絶えるまで戦い続けてしまうことがわかっていました。ですので、わたくしが何うことはできませんでした」

「なるほど。希繫の身を守るためにも、周囲を自分の味方で囲う必要があったということね。そして、それを持続するにはこの蓬萊寺家が最も適していた、と……」

蓬萊寺家ならば、いくら希繫でも単独で撫月に向かつて攻撃を仕掛けようとはしない。そして攻撃されなければ、撫月もそれに応戦する必要がない。お互いに身の安全を確保しつつ、希繫を傍に置いておくためには最も合理的な手段といえるだろう。

しかし、それは彼の精神状態を摩耗させるには十分すぎた。確かに彼はこの家で撫月に対して攻撃的になることはなく、これといった問題も起こさなかった。それでも、蓬萊寺の当主として戻ってしまえば「蓬萊寺のお役目」からは逃げられない。

そもそも希繫がレイドリベンジャーズになったのは、蓬萊寺であつた頃に犯した罪を贖うためであり、自分が奪った命の何倍もの命を救うことでその精神状態を保つていた。なのに、彼はその「誰か救えるはずの力」で争いを起こし、傷つけ、殺めてしまった。

それは古代ローマのコロッセウスのように、戦い殺めることを強いられ続けた奴隷にも等しい環境なのだ。——この、蓬萊寺家という場所が。

「希繫はもう「夜縋」じゃない。小転だつて「美珠」じゃない。二人はもう誰も殺めることのない「桐梨姉弟」なの。だから、あの二人をここに還させはしない。二人の帰る場所はもうここじゃない。だから……あなたが二人を求めるのなら、あなたがこつちに來ればいい。そのための助力なら、いくらでもしてあげる」

逢依はクリユスタルスのバイザー部を解除し、その深い紫の瞳のまま、その手を差し

伸べた。

かつて母がそうしてくれたように。いつも希繫がそうしているように。ただ、武器を持たない左の手を開いて。

「……それは、できません……」

けれど、その手が掴まれることはなかった。

苦境—シビア—

「それはできません」

あの二人にも似た、鮮やかな朱色の瞳には、憂いと切なさの入り混じった昏い光を宿していた。きつと、その手を握り返りたい気持ちがあるのだろう。それは、今こうして対峙する逢依あひにも伝わってくる。けれど彼女は、その伸ばしたくてたまらない手をぐつと握りしめ、顔を伏せる。

「わたくしは混ざりものとはいえ蓬萊寺ほうらいじの血族に残された『最後の血族』です。お兄様だけでなくお姉様のご存命まで知られ、さらにわたくしまでこの家を去ってしまえば、臣は血眼ちまなになってわたくしたちを探すでしょう。そのせいで、お兄様とお義姉様のお子様こどもにどのような危険あやしみが及ぶか、想像に難くありません」

「けれど、それはあなたが守ってくれるんでしょう？」

「蓬萊寺家ほうらいじけでなら、家臣とは別に当主であるわたくしを優先してくれる部下もいますので、お守りすることは不可能ではありません。しかし……当主の座を退けば、それは叶いません。いくら当主といえども、全ての蓬萊寺をたった一人で相手取れるような者は、それこそあの『蓬塵鬼ほうおんき』くらいのもんです」

蓬萊寺は、その異常な性質から見失いがちではあるが、ひとつの「組織」である。そのため基本的に単独行動する『成り上がり』や『飼い犬』とは違い、『純血』と『家臣』は敵だけではなく「味方」という概念がきちんと存在しているのだ。

しかし、それは蓬萊寺の当主がこの世界における一種の『支配者』であり『王者』であるからこそその概念であり、基本的に蓬萊寺家当主にとつての「味方」というものは「王の支配を望んで受け入れる者」とも言い換えることができ、彼女に「当主」という概念が適用されなくなった時点で「味方」で在り続けるかと問われればさすがに怪しい。

「わたくしと家臣が立場を二分した時、互いの味方の数はさほど大差がつくものではありません。しかし、それはわたくしがこの家の主だからこそ成立します」

「あなたが当主でなくなった時、共に逃げてくれるか連れ戻そうとするかといえは——」
「当然、後者がほとんどでしょう。連れ戻した後で、わたくしの敵になることはないと思います。少なくとも蓬萊寺を裏切つてまでわたくしと行動を共にしようとする者はほとんどいないでしょうから」

そういう意味で、希繫きづなと小転こてんの脱走劇がいかに大胆で鮮やかな手際であったかがわかるだろう。当時の希繫はまだ蓬萊寺の「教育」が抜けきつておらず、蓬萊寺のお役目にもまったく疑うことなく従っていた時代。いずれ妻となる実姉に対してもほとんど従順かつ肯定的で、だからこそ小転は行動できたのだろう。

つまりは、この蓬萊寺家という組織を裏切ることに対するリスクが、当時の希繫にはまだわかっていなかったのだ。だからこそ、最も近い存在である小転が「逃げる」という選択をとった時、他の全てを振り払ってでも彼女に従うことができたし、小転はそうなることがわかっていたから彼を連れ出すことができた。

そしてそのタイミングも完璧であった。二人が脱走したのは「当主の試練」——つまりは次世代の当主となる「継ぎの代」ではなく、次の当主が一人前になるための生贄となる「捧げの代」の親を殺した直後であり、蓬萊寺家の指揮系統が麻痺したほんの一瞬を衝いた出来事であった。

加えて、そもそも二人が七歳という幼年期に「当主の試練」を与えられたのは、そもそも先代の「継ぎの代」である二人の祖父母が急逝し、急ぎ次世代の当主を作らなければならぬ状況であったためだ。故に、当時の姉弟を追っていたのは家臣ではなく「成り上がり」だけであった。

「今こうして話すほどに、かつてお姉様がお兄様を連れて蓬萊寺家を飛び出したのがどれほど勇敢で力強い行動であったのかを痛感します。少なくとも、わたくしは一人ですら逃げられません……」

「二人じゃない。希繫と小転を説得するには時間が掛かるかもしれないけれど……それまでは私や仲間たちがあなたを守ってあげる。そしてそんな私たちをあなたが守って

くればばいい。互いに守り守られながら生きていく。それが……『人間』でしよう?」
 「……人間。そう……そう、なのです。そうだからこそ……わたくしは……わたくしはもうそちらには行けません! わたくしは蓬萊寺……人を殺す鬼と書いて殺人鬼! わたくしは! 蓬萊寺は! すでに人を捨て去った『鬼』なのですから!!」

突然、何が前触れであったのかすら悟らせることなく、撫月なつきがその刃を逢依へと向けた。

「小太刀……ッ!?!」

「そう、これがわたくしの持つ蓬萊寺謹製の愛刀。その名も『子枯丸』……この刃に施された能力を見出すのが先か、お義姉様の命脈が尽きるが先か、この目で見極めさせていただきます!」

希繫ライキリの雷切や白露の御霊鎮みたましずめのくるりの紅瑠璃、そして統司タチキリの絶斬もそうであるように、蓬萊寺の血筋は閉所での戦闘を阻害しないよう軽く短い刃物を得意とする傾向にある。

逢依が短剣型のアームズ『マルチプルダガー』の取り回しに優れているのも、希繫と小転からそうした技術を教わったからであるが、さすがにその技術を実際に使い続けることで死線を潜り抜けてきた彼ら彼女らを相手に通用するかといえば、それはさすがに蓬萊寺を甘く見すぎというものだろう。

「クリュスタルス! 足止めを!」

『了解。あらゆるものの運動量をゼロに固定します』

クリュスタルスの『瞬間凍結』は時を支配する能力ではなく、あらゆるものを「凍結」させる能力である。これまでのように時間を止められないのだとすれば、その使い道は当然、シンプルな『凍結』へとシフトする。

逢依の掛け声に従い、撫月の足元を凍り付かせて動きを止める逢依であったが、それでも彼女はここを好機と攻めることをせず、即座に逃げの一手を打った。たとえ時間凍結が彼女に対して時間稼ぎにすらならないとしても、他の蓬萊寺に見つからずに仲間と合流するには十二分に意義を見出せる。

だが、彼女の存在に気づけないのは敵ばかりではない。彼女の危機に対して、仲間すら気付くことができないのが「凍った世界」の最大の弱点といえるだろう。だからこそ、彼女は敵に遭遇しそうになる瞬間を小刻みに時間凍結し、その足を動かし続けた。

「……おかしいわね。ねえ、クリュスタルス」

『はい。どうやら我々を中庭に出さないよう、進路を誘導されているようです』

「部屋に入ればモンスターハウスならぬトラップハウスさながらに罠まみれ……廊下を移動している限りは誘導を避けられない。このままでは蓬萊寺撫月との戦闘は避けられない……!」

背後に伸びる鋭い気配。身に着けたコートの時間を凍結させ、その気配の正体を弾

く。

「銃弾を弾く外套……否、それが汝の持つ武装の能力……!」

「……蓬萊寺の家臣とここで接敵とは、ツイてないわね」

「己の不運を嘆くとは浅はかなり。この屋敷に訪れたからには我ら蓬萊寺家臣との交戦は必定! よもやご当主様の手を煩わせるまでもあるまい。ここでしめやかに朽ち果てるがよい」

振り返った先でこちらに銃口を向けていたのは、その立派な袴に似合わぬゴツイライダーブーツとライダークロップを小具足のように身に着けた老齢の大男。その腰の下緒に吊るされた蓬萊寺の家紋を掘った木彫りのプレートは、家臣にのみ与えられるものだ。

「私の名は桐梨逢依。あなたは?」

「……雑兵なれども名乗られたからには返すのが礼儀。答えよう。我が名は蓬萊寺藤吉郎……この名に討たれる榮譽、三途の渡し賃には余りあろう」

小柄な逢依と比べればおよそ50センチ以上の身長差。「雑兵」とは称するが、その身丈や性差を軽んじるような視線は感じられない。間違ひなく逢依を一端の戦士として認識し、その上で彼女を必倒するという意思が見て取れる。

手にした銃を捨てて構えたのは、その身なりに似合わぬ異国風の短剣、シャマダハル。

しかしこの殺人鬼ひしめく屋敷において「家臣」の座に就く男が、装飾もなく豪華な色使いでもないその得物を持つからには、強者特有の異様なオーラを纏っているようにも見えてくる。

「悪いけれど、あなたに倒されるつもりはないわ。代わりに……私の名前を渡し賃にしてみらえるかしら？」

「胡蝶風情が吠えおるわ！」

両者が構えるのは両手に携えた二本の短剣。奇しくも同じ武器を持つ者同士がこうして相対するのはなんの偶然か。

先んじて動けば癖がバレる。しかし先手を取られれば主導権がとられる。どちらも互いを睨み合つて動けないのは、それが互いを強者だと認めるからか。

そんな静寂とした駆け引きの末——先に動いたのは逢依の方であった。

「投擲……？ 得物を手放すとは愚かなり！」

手にした二本の短剣を同時に放つが、無論それらは難なく弾かれ、藤吉郎の接近を許す。しかし直後、彼女の姿が藤吉郎の視界を外れ、彼の背にぞわりと悪寒が走った。

「……今のをかわした？ さすがに蓬萊寺、殺気には鋭いわね」

「今の術……空間移動の類か、それとも時間移動か。いずれにせよ得物はいつでも回収可能ということか。だが！ ならば『避けられぬ攻撃』を与えればよいだけのこと！」

瞬間、藤吉郎の姿がぬらりと消えた。この現象に見覚えのあった逢依は、即座に時間を凍結させる。すると目の前に居たはずの彼ははるか20メートル以上先からこちらに向かつてきており、凍結を解除した瞬間に逢依に向かつて「超スピードの一撃」を叩き込もうとしているのがわかる。

そう、逢依にとつて最も苦手とする相手。それは世界を凍結させたところで「逃げられない追跡」と「避けられない攻撃」を可能にする『超高速機動型』の戦士。つまり、希撃のようなタイプであった。

「凍結を解除したら攻撃は直撃する……！　しかもここを避けても超高速機動型の多くは動体視力や認識速度が半端じゃない……攻撃対象が移動したことを理解するのと、攻撃対象がどこにいるかを認識するまでのラグがコンマ1秒ほどもあるかどうか……」

『最悪のケースです』

「今まで希撃が味方でよかったと常々思っていたけれど、やっぱりこうして敵対すると厄介だつてことを痛感するわね……！」

手立てがないわけではない。しかしそのチャンスはたった一度。それも敵の攻撃が接触するまでの秒数小数点以下の一瞬。

加えてこの手立ては相手が高速攻撃を仕掛けるたびに全て成功させなければそもそも「戦闘」にすらなりえないというシビアにシビアを重ねた継戦条件。

それでも、やらないという選択肢はなんの解決にもならない。

「やるわよ、クリユスタルス！」

『了解。凍結された時間を解除します』

破壊——デストラクト——

世界の解凍と同時に、ガチン、という激しい金属音が長い廊下に響き渡る。それは、逢依あいの纏う凍結の防壁——身に纏うコートとうきちろうの時間を凍り付かせることによって「あらゆる影響を受けない」絶対の盾が藤吉郎の持つシャマダハルの刃を弾いた音だろう。

時間が流れていないものに対してどれだけ攻撃をしたところで、その衝撃や熱量は「流れている時間」の中で影響を及ぼすものだ。逆に言うのなら、動いている時間の中で「特定の物質に流れる時間」だけを止めれば、その物質はどんな衝撃も熱量も通さない。逢依が凍結した時間の中で攻撃できないのは、この「影響を受けない」という状態が逢依以外の全てに対して適用されているせいだが、今は逆に逢依の任意の対象のみがこの絶対的な防御能力を得ることができる。

「一撃にして必殺を成し遂げし我が『神貫』かんぬきを防ぐとは、胡蝶と侮るには早計であつたか……！」

「だとしたら、どうするつもりかしら？」

「我が刃の奥義は一撃必殺。一突きに葬れぬ恥を背負つた以上、もはや貴様を生かして帰さぬために手段など選んでいられようか！」

懐から飛び出したのは、またも古風な風貌に見合わぬ二挺の近代拳銃。最初に逢依に放たれた銃弾は、この二挺のどちらかから撃ち出されたものだろうか。それを見た瞬間、逢依の背筋をクリュスタルスの冷氣以上に冷たい何かがなぞった。

今度は世界を凍結させるのではなく、この廊下を物理的かつ瞬時に凍結させ、クリュスタルスの知覚能力向上機能を最大限に引き上げて、目の前の藤吉郎を睨む。

凍つて滑りやすくなった足場では、高速機動型はその本領を發揮できない。まして、相手はこの屋敷に住まう家臣。外から強襲した逢依と違い、藤吉郎の足を保護しているのは滑り止めすら施されていない白い岡足袋であり、この状況では最悪の装備といえるだろう。

「我が神速を奪うか……敵ながら天晴！　されどもこの狭い廊下において、最奥まで用意に届くこの銃弾をどれほど躲し続けられるか、見せてもらおうか！」

「逃げて躲しては……私の得意分野だわ」

「ふん……よかろう！　では右に六発！　左に六発！　合わせて両手十二発の弾丸が貴様を阻む最後の壁だ！　貴様がここを生きて進みたいのなら……号砲十二発を迎え、我が懐にその小さな刃を徹してからだッ！」

往くぞ、という合図と同時に、藤吉郎の右の銃から一発目の弾丸が放たれた。逢依はほぼ同時にコート時間を凍らせるが、藤吉郎は両手の銃を背後に放ち、その過剰な反

動をブースター代わりにして逢依へと急接近。

すぐさま世界の時間を凍結させ、その背後に回って構えた逢依だが、解凍とまったく同時に藤吉郎の身体がぐるりと向き直り、ほぼゼロ距離にも等しい位置から左右の轟砲が逢依に放たれた。

「ほう、これも防ぐか……！」

「凍結だけが私の武器じゃないわ」

だが逢依はこれを両手のマルチプルダガーでなぞるように弾道を変え、それを防いでみせる。銃撃だけでは弾道を読まれると察したのか、藤吉郎は左の弾丸を放つと、逢依がそれを防ぐことも見込んだ上で、彼女の短剣が銃弾を逸らすと同時に足元を払う。

しかし体術と高速機動戦闘の組み合わせ、特に相手の足元を狙った攻撃は奇しくも希繫とまったく同じ戦術であった。だからこそ、逢依はその狙われた足を床ごと氷で覆うことで防ぎ、逆にあちらの足を負傷させ、痛みに歪んだ顔に向けてマルチプルダガーを突き出したが、あちらもこれをフラッシュキックの要領で後退。

着地と同時に左右の拳銃のテンポをずらして二発ずつ発射。一撃がそもそもべらぼうに重い銃弾が、同時にではなく僅かにズレたテンポで発射されたことで、逢依の判断が鈍った。

「くっ！ うっ……きゃあっ！」

一発目は問題なく弾くことができた。しかし二発目でタイミングがズレ、三発目が逸らしきれず左肩を掠め、四発目がついに逢依の右腕を貫いた。

思わず痛みにも目を瞑りそうになるが、瞬きすら死に直結しかねないこの距離で藤吉郎から目を逸らすわけにはいかず、逢依は菌を食いしばって堪えながら、右手に持ったマルチプルダガーを藤吉郎へと投げけるも、それは易々と躲されてしまう。

「その状態で咄嗟に使い物にならなくなつた方の手を空にしつつこちらに牽制を放つとは……余程の視線を潜り抜けてきたとみえる……！　だがそれもここまで——」

「——ええ、——までよ」

ゆつくりと左の短剣を突き出した無防備な構えに、藤吉郎はそれを諦めと断じて両手の銃を突きつけ——「その背後から」轟音が鳴り響いた。

「……さすがに、私の力じゃどんなに切り付けてもあなたを殺せないもの」

彼女に寄りかかるような体勢の藤吉郎は、逢依がその脳天に突き刺さつたマルチプルダガーから手を放すと、そのままゆつくりと床へと崩れ落ちた。

そう、あの轟音は逢依の放つたマルチプルダガーに括りつけられたプレート型爆弾が起爆した音であつたのだ。その衝撃と爆風に煽られた藤吉郎は、ほとんど受け身をとることもできず倒れこんだ彼は、その体重分の重みそのまま逢依の構えたマルチプルダガーの剣先に集約され、その脳天に深々と突き刺さる結果となつた。

「いくら蓬萊寺でも、脳を損傷すればさすがにどうにもならないでしょう?」
『とはいえ、こちらマルチプルダガーの修復に時間を要します。空手のまま歩き回るのは悪手と判断します』

「それはそうだけれど、さすがにこの銃は使えないわね。さっきの戦闘を見てわかったけれど、威力の高さはともかく彼ほどの巨漢が発射の衝撃こちらに接近できるほどの反動は、万全の状態でも一発すらまともに撃てないわ。ましてや、今は利き腕がこんな調子なのだから、なおのことね」

何か適当なものはないか、と周囲を見渡すが、さすがにそんなに都合よくものが落ちていないわけがない。

致し方ないか、と足元に転がる遺体の両手に握られたシヤマダハルを奪うと、その内側に掘られた銘を見つけた。

『因果』『輪廻』……ね。この刃を両の手に携えたあなたの結末がこれならば、私もこの二振りを借りる間はそう胸に刻みつけておくわ。あなたの名前と一緒にね」



逢依が合流を試みながら撫月の追走から逃げていく頃、屋外では無数の『成り上がり』

とレイドリベンジャーズたちによる大規模な戦闘が繰り広げられていた。

しかし戦況は圧倒的にレイドリベンジャーズの劣勢。最初こそ不意を衝いたことで勢いのままに攻め込んでいたものの、幾らかの時間の経過と共に状況は少しずつ押し返されている。理由は単純にして明快。相手が蓬萊寺だから、の一言に尽きる。

「オーヴァー……ッ、デストラクトオツ！」

「クソッ、あのレイドリベンジャーズには複数人で当たれ！ 他のは各個撃破できるだろうッ！」

犠牲者は時間を追うごとに増していく中、それでも戦況を保っているのは『最強』である悠生ゆうきのおかげだろう。

そもそも熱——ひいては炎というものは、大規模戦闘において最も優秀な攻撃手段である。まして、相手に対して情けや手加減を必要としない場面においてはなおのこと。

「苛烈、拳衝オツ！」

「チッ、あれ本当に人間かよ！ 蓬萊寺でもない奴がなんであんなに化物みたいなパワーしてるんだ！」

「例の最強のレイドリベンジャーズだ、気を抜くところちがやられるぞ！」

超破壊の拳から放たれた圧殺火炎と、扇状に拡散する衝撃波による広範囲攻撃は蓬萊寺たちを少なからず葬り、あるいは負傷させてはいるが、『高速で多数を各個撃破』

できる希繫きづなとは違い、『大火力の一撃で多数を撃破』する悠生は、どうしても狙った相手以外のものも巻き込んでしまう。

だからこそ周囲の仲間たちを庇いながらの行動は彼の攻撃性質に反しており、そのせいで思うように動けていないことも否定できない。

「お前らここは俺と悠生に任せて希繫の奪還に向かえ！　ここに居ても邪魔なだけだ！」

「了解！」

「ラジャー！」

「任せました！」

戦いにくそうにする悠生に気付いた総交そうまが指示を出すと、仲間たちはすぐさま持ち場を切り替え、二人は互いの背中を預け合いながら身構える。

「アイツらマジか、オレらだけに預けることに躊躇とかないのか？」

「躊躇？　何言ってるんだ、あいつらが下がって助かったのはお前の方だろう。いい加減、我慢が利かなくなってきた頃だろう？」

「……それもそうか。スヴィルカーニイ！　とっておきのとっておきだ、アレ出せ！」

「オレのアームズを！」

悠生のアームズ。

それは、有り余る力を過剰に發揮しないため——だとか、周囲への被害を考慮して——だとかではなく、単純に「だいたいオーヴァーデストラクトだけで解決できる」という理由からめつたに使われないアームズであり、そして同時に、このアームズの一撃に耐えた者は、あの「真透りデア」を含め今のところ皆無にして絶無。

だからこそ、彼の『最強』の象徴たるオーヴァーデストラクトの真意、『超破壊』ではなく『過剰な破壊』の本来の形。

『了解。纏火武装・極《キワメ》を展開します』

それは、明らかに人が振るうことを想定していない体積と重量をしていた。身丈は二・一四メートルを誇る悠生の巨体が、その全長の10パーセントに及ぶかどうかというほど巨大なそれは、鎚と称するにはあまりに野蛮で、あまりに無骨で、あまりに乱暴だ。

それでも——「それ」の形状、使用手段、何をどう言い訳しても間違いなく『鉄鎚』としか呼ぶことのできないそれを、彼はまるで鉄パイプかのように軽々と持ち上げている。

「おら、死にたくねーならうまく避けるよ」

瞬間、纏火武装・極のハンマーヘッドがオレンジ色の炎に包まれ、周囲が灼熱に包まれる。間違いなく、あれはなんの比喩でもない純粹にして絶対の「必殺」があのハンマー

ヘッドに集まっているのだと察した蓬萊寺たちは、一斉に彼に群がるが――。

「別に通してやったところであいつは傷一つつかんだろうが……隊長を守るのが俺の仕事なんぞな」

総交はそれらの蓬萊寺たちの膝関節や脛を的確に蹴り抜き、対処のしきれないものは全てプロテクトヴェールで防ぎ、動揺に乗じてその喉元や鳩尾に拳を打ち込んでいく。

悠生のようなパワーも、希繫のようなスピードも無い彼だが、相手の急所や癖を見抜く目、何よりそれを躊躇なく打ち抜ける非情さは、ある意味で蓬萊寺にも近いものがある。しかし、彼と蓬萊寺の明確で絶対的な違いは――。

「あとは頼んだぞ、悠生」

「応ッ！ 時間稼ぎご苦労、まずはこれで篩いだ！ せいぜい足掻いてみせろやア！」
過剰破壊の鉄槌が、振り下ろされる。

償い—アトーンメント—

世界が震えるような感覚に、彼の意識もぐらりと揺れた。そして数瞬の微睡みを経て、ゆつくりと瞼を上げてみれば、そこに居たのは「居るはずのない人物」たち。

穏やかに笑う老父。無邪気にはしゃぐ幼い女の子。複雑そうに苦笑いする少年。擦り切れそうな記憶の中、数十人に及ぶ人々がそれぞれに笑みを浮かべながら、希繫きづなを見ている。

そして——凜とした表情でこちらに敬礼する六人の男たちと、その一人が持つ深紅のグローブを見て、ここに居る人々が「どんな存在」なのかに気が付いた。

希繫の前に立つ人々——それは、かつて希繫が「殺した」人物たち。そして彼らの前に立つ「六人」こそ、第二前線部隊に配属される前、希繫を残して全滅した諜報部隊の仲間たちであった。

そして、その仲間の一人が持つグローブこそ第五五号ユニトギア『アバター』であり、彼らと共に最後の任務で失われてしまった希繫のかつての相棒なのだ。

同時に、その六人を思い出したことで、その後ろに立つ全ての人々の顔も、希繫は思ひ出すことになる。そう——あれはまだ『桐梨希繫』が『蓬萊寺夜絶ほうらいじよすだ』であった頃、自

らの手で殺めた者たちであることを希繫は思い出す。

「……俺を祟り殺しにでも来たのか？　なら、俺に抵抗する意思も権利もない。俺はそうされても仕方のないことあなたたちにしてしまった。だから、俺が死ぬことであなたたちに償いができるのなら、むしろ望むところだ」

自然と全身から力が抜けて笑みが零れた。意外なことに、その脱力感がどこから来るものか、希繫はなんとなくわかっていた。これは、背負い続けていた荷物つみを降ろした感覚だ。婚代に拾われ、人の愛に触れ、自らの罪を自覚してからずっと背負い続けていたそれを、希繫はここでようやく降ろせるのだと安堵したのだろう。

けれども、目の前の人々はただ彼を見るばかりで、祟りだの呪いだのという感じもなく、本当にひたすらに、希繫を「見守って」いた。

「俺を、殺すつもりじゃ、ないのか……？　どうして！　俺はあなたたちを殺したんだぞ！　この手で、この手に握った刃で、あなたたちを無残に無慈悲に無感情に殺したんだ！　あなたたちは、そんな俺を恨んでるんじゃないのか！」

気付けば、背中に押し掛かる重みは以前の倍にも感じるようになった。彼らがここで自分を裁いてくれないのなら、自分が背負い続けた罪は、いったいいつまで背負い続けられるのだろうか。

もちろん、目の前の彼らが自分を裁くその日まで、希繫はその生涯を全て使っても

——否、あるいはその生涯を終えたとしても、地獄まで持っていくつもりでいた。だが、それでもやはり、その罪の重さに嘆くことが一度もなかったと言えば嘘になる。

アバターをその手に持つ青年が、希繫に近づく。だが希繫はそれに身構えることもなく、或いはこの青年が、祟りだとか呪いだとかまだるっこしいことをせず、その手で自分を裁いてくれることを願って、その場を動かなかった。

「隊長……」

「……………」

その青年は、その諜報部隊の隊長を務めていた人物であり、当時まだ学生であった希繫にとつては年上であつたが、今となつては同じ年になつてしまったことに、場違いな違和感を感じていた。

隊長と呼ばれた青年は、希繫の目の前に立つと、先程までの凜とした表情を朗らかにほどき、そして微笑みと共にその手のアバターを希繫へと手渡した。

「どうして、アバターを……。俺を恨んでるはずじゃ……ッ！」

「……………」

隊長はゆつくりと首を横に振った。そんなバカな、と希繫は隊長の背後の人々に視線を向けなおすと、そこにはやはり——「笑顔」で希繫を見つめる人々だけが立っていた。

「俺は、ここに居るみんなをこの手で殺した！俺は殺人鬼なんだ！どんなに笑顔の

仮面で自分を偽っても、鬼の本性が消え去ることはない！ そのお爺さんを殺した時のことも！ その女の子を殺したことも！ その隣の男の子を殺したあの日のことも！ 今でも覚えてる！ 本当に酷く、惨い、殺し方をした……！」

「……………」

「痛かっただろう……苦しかっただろう……。理不尽な痛みや苦しみと、生きたいと願う気持ちで混濁とした意識がゆっくりと薄れていく中で、きつと俺を呪いながら、恨みながら死んだはずだ！ なのにどうして！ そんな俺に対して笑顔を向けられるんだ！ 俺は……そんな笑顔を向けられていい存在じゃないんだ……！」

「……………」

隊長も、他の誰もが、希繫の叫ぶような独白を静かに見守り、それでもやはり……苦く笑っていた。

『マスター。あなたは罪を償いました』

「……アバ、ター……？」

『あなたは、ここに居る全ての人のことを覚えていました。自分の罪から目を逸らしませんでした。自分の罪を償うために、殺した数以上の人々を救おうとしました。彼らは——そして僕も、それをずっと見守っていました』

「見守って……いた……？」

『そうです。最初こそ、誰もがあなたを恨んでいました。あなたを呪つてやりたいと思つていました。けれど、あなたが人の心を得て、その罪を自覚し、それを必死に償おうとするところもまた、彼らは見ていたのです。あなたが『希繫』となつてから何年も、ずっと』

だからあなたの背負う罪など、とうの昔に償いきつていたのです、とアバターは続けた。

犯した罪が消えることはない。どんなに償つたとしても。しかし、償い続けければ罪は無くならずとも受けるべき罰は軽くなつていく。そして希繫は、もはや受けるべき罰などなくなつてしまうほどに償つていたのだ。殺した数だけ——ではなく、殺した数よりも多くの人を救い続けてきたことで。

故に、ここに居る誰もが希繫を「裁く」ことはない。罪は未だに残るが、すでにその罪には「重さ」がない。重さなき罪に、罰は与えられない。与えるべき罰がないのなら、誰も彼を裁けない。むしろ今ここに居る人々はみな、もう彼を裁こうとも思つていない。

『僕らがマスターと共にいられなくなつた時、マスターは僕らの死をマスター自身の罪だと思つたでしょう。でも、僕らはマスターを救いたかつただけです。結果としてマスターとは一緒にいられなくなつてしまいました。それでも……みんなマスターを想つ

て死にました。それを悔いたことも、まして恨んだことなんて、一度もありません」

「そんなわけない！　嘘だ……みんな俺を恨んでるはずだ……恨んでるんだ……恨んでくれよ!!　俺は……許されたくなんてない……!　俺は！　あなたたちに裁いてほしかった！　裁かれて楽になりたかった！　浅ましくも、楽になりたいと……思っていたんだ……!」

『……マスター。僕らを信じてください。マスターがマスターを信じられないのなら、マスターのことを信じてその罪を許そうとする僕らを、信じてください。僕らはいっただってマスターと共にいて……その背中を見守っています』

「そんな……。……そんな言い方、ズルいだろ。俺が俺を責めることが、お前たちを信じていないことになるなら……。お前たちを信じたいと思うなら、俺は……自分を許すしか、ないじゃないか……!」

『口の巧さはマスター譲りですので』

日本の古い考え方に——それこそこの地球にまだ神社や寺、教会のような神仏を崇める概念があつた頃、『怨霊』や『物の怪』を神として祀ることでの怒りを鎮め、時にその恩恵を受けようとするというものがあつたことを、希繫は思い出した。

神というものが人の信仰によって力を得て、その存在を保っているのなら、今ここに居る全ての人々が、かつて希繫を呪い殺そうともした『怨霊』だったものなら。

希繫はその罪を償い、それ以上の救いを体現することによって「徳」を積み上げ、それらの徳を全てこの怨霊たちに捧げ続けていたとするのなら。今、彼をこうして見守っているこの人々は——。

『マスター。僕の名前を呼んでください。心の底から、ありったけの気持ちを込めて』
アバターに促され、希繫はその瞼を閉じた。瞼の裏側は真っ暗で、自分の周りに見えるものを全て遮り、どんどん、どんどん、その暗さの深みに沈んでいく。

もしもこの深みが、心の奥底に繋がる「深み」なら、きつとその一番深い場所に眠っているものは——！

「おはよう、『アバター』」

『まかせて。第五五五号ELBシステム、再起動。装着者認証、桐梨希繫。登録感情『希望』を修正。……修正完了。登録感情『継』を確認。いつでも行けるよ』

「ああ、一緒にいこう、アバター。そして、これからもよろしく……俺の神様たち」



希繫だつたはずの雷の繭いかずちは、他の誰を受け入れようとしなにかのように、その真紅の輝きを放ち続けていた。しかし戦況がやや蓬萊寺に傾きつつあったその時、突如として

繭はある変貌を遂げた。

「マズい、繭の規模が大きくなっている！ 全員離れを出ろ！ 巻き添えをくらうぞ！」

「退避！ 退避だ!!」

繭の防衛を任されていた蓬莱寺たちは、肥大化する繭を見てすぐに離れを出ると、繭はその離れを雷撃で焼きながら宙に浮かび、直径15メートルほどの巨大な球体となつて、それを護るかのように真紅と深紅のスフィアが球体の周囲をぐるぐると回っている。

おそらくはこれが、希繫を保護しようとする「何か」の第二形態なのだろうと察した数名の蓬莱寺が、撫月にこれを伝えようとその場を離れた。

もちろんこの異様にして威容の球体は、その巨大さからレイドリベンジャーズたちの目にも入った。当然、この劣勢を敗北に繋げまいと奮戦する悠生ゆうきの目にも。

「成程、あれが希繫か！ ならもうテメーらに用はねーな！ いくぞスヴィルカーニイ！」

『お任せを。グレイテスト・オーヴァーデストラクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

「さて……チャージが終わるのが早えーか！ テメーらが全員くたばるのが早えーか！

試してやろーじゃねーか！」

仮面—マスク—

巨大な球体——『キヅナコクーン・第二形態』の存在は、その屋敷の誰もが認識可能なほどの圧倒的な存在感と、それ以上の威圧感を伴ってその場に顕現していた。それは外で戦う悠生と総交だけでなく、屋敷の中で迫り続ける撫月の追走を躲しつつ、どうか中庭へと抜け出た逢依も、その威容を目にした。

外部から希繫の姿は確認できないが、それでも球体の周囲を飛び回る二つのスフィアには、見覚えがあつた。真紅のスフィアは、間違いなく彼の相棒であるエクレール・リュミエールによるもの。そして、もう一つの深紅のスフィアは、かつての相棒であつたアバターのそれに酷似している。

ならば、あの二つのスフィアが守ろうとする中心の球体こそ、希繫そのものなのだろうと、逢依はすぐさまキヅナコクーンへと駆け出した。しかし——。

「さすがに、鬼事に戯れるのもこの辺りにしましょう。お義姉様をお兄様の元へは行かせません」

「撫月……あなただつて、こんな今を変えたくて希繫を求めたんでしよう!? 蓬萊寺が混乱して勢力が弱まっている今なら、貴女の願いも叶えられる! 私も、希繫だつてそ

のためになら力を貸してくれる！」

「いいえ、それが……互いに手を取り合い、共に助け合って歩むことが『人間』の在り方なのだとすれば、わたくしはもうその手を掴みません……ッ！ わたくしは蓬萊寺！ わたくしは鬼！ わたくしは……『人』に非ずッ!!」

悲痛な表情のまま子枯丸こがらすまるを構えて接近する撫月に、逢依は思わず反応に遅れた。利き腕である右腕の痛みが体を硬直させたのも一因か、逢依は回避に遅れ、左のダガーで突き出された刃の軌道を逸らすことはできたものの、そのまま流れるように繰り出された袈裟斬りが逢依のコートを裂き、胸元に皮一枚ほどの傷を与えた。

「やっぱりこういう時は胸が小さくてよかったって思うわね……!」

『同感です』

軽口だということは互いにわかっていても、この状況で緊張感に押し潰されないようにするためには、それも必要だった。

しかし、そうしなければ身を震わせてしまいそうなほどに、目の前の彼女の表情は不気味に微笑んでいた。

「いいえ、薄皮一枚でも掠めることができれば上々です」

「……………?」

「今ので一回。次で二回目。さて……あと何度で気付くでしょうか?」

「……ッ！ その小太刀、まさか……！」

「そう、この子枯丸は「斬った回数」が増すほどに意味を為す。毒よりも遥かに強かに相手の身体を蝕んでいきます」

たった一度では気付かないかもしれない。だが二度目ならば。あるいは三度目。相手が「逢依ならば」どれだけ遅くとも四度目には気付くだろう。子枯丸の腹の底が冷えるような驚異の能力に。

しかし、であればなおのこと逢依はその能力を知る前に撫月を倒すか、あるいはこの場を脱さなければならなくなった。しかし、片腕を負傷したまま蓬萊寺の当主と戦えるほど、逢依の戦闘能力は高いわけではない。

元々、クリュスタルスの能力を用いない直接的な戦闘力は、レイドリベンジャーズ全体的中でも低い部類の逢依だが、出産の影響で体力が落ちて全盛期ほどの運動ができなくなった今、ともに撫月とやり合ってしまったえば数刻と待たずその刃の餌食となることは猿でもわかる。

「これは……窮地、かしらね？ 私が鼠だったのなら、一矢報いることもできたのかしら」

『残念ですが、マスターを鼠と称すにはお美しすぎます』

「あら、思いがけず褒められてしまったわね。ありがとう、クリュスタルス」

軽口はここまで、と言うように、撫月の刃が今度は逢依の喉を狙いと定めた。胴に比較して狙いの範囲が狭いため少しでも軌道を逸らしてしまえば有効打にはならないが、逆に逸らしきれなければ確実に致命的な一撃となるそれを、逢依は身を屈めることで回避し、そのまま懐へと入った。

突き出された小太刀は狙いを外されると同時に逆手に構え、そのまま懐の逢依の無防備な背中に突き立てようとするものの、その刃が彼女のコートを貫くことはなかった。

「コートの時間を凍結させて……い、けれど、いつギアにそれを……ッ！」

「希繫の得意技よ。装着者とギアの接続が最高潮に高まっている時、ギアが自分の考えを読み取ってスキルや特性を自ら発動してくれる。まさか、こんな土壇場でないと出来ないくらい難しいとは思わなかったけれどね」

「お兄様の……ッ！」

ワールドフリーズほどの空間制圧力はなくとも、特定の物質に流れる時間を凍結させることさえできれば、それは実質的な破壊不能オブジェクトを生成するに等しい。

如何に蓬莱寺謹製の刃といえど、時間が流れていない物質を斬ることはできないし、それができるとするならばそれは凍結された時間そのものを「切断」する能力を持つ統司とうしの『絶斬』タチキリくらいであろう。

「クリュスタルス！」

『了解。第一四四〇号ユナイトギア・クリユスタルス、リミットブレイクします』

「ここで、リミットブレイク……!? そうはさせません! リライズ! こちらも——」
『不可。エモーショナルエナジーの上昇値がリミットブレイクの必要最低ラインに達していません』

ここで初めて、撫月の表情に焦りが見えた。

リミットブレイクは三分間という時限式の力ではあるものの、その影響力は絶大にして極大。それは鬼の女王の地位に就く撫月であつても無視できないものであつた。

『リミットブレイク。ペルフエクトウス・クリユスタルスの展開を完了しました』

通常時はバイザーのように目の周囲だけを覆っていた本体は頭部全体を覆うヘッドギアに変化し、ポニーテイルをほどいて収納された髪に替わるように後頭部で大きく展開されているのは蝶の羽を模した薄氷。その薄氷から洩れる冷気の影響か、空中の水分や埃が凍結してダイヤモンドダストを引き起こしている。

「顔を覆う、ユナイトギア……。そんな……。それが、そんなものが許されるのなら、どうして……。!」

「……………?」

「……………ッ! だったら、わたくしももう出し惜しみはしません! あなたが顔を隠すのなら——ッ!」

そう言つて撫月が懐から出したのは、朱色の鳥を模した仮面らしき何か。少なくともユナイトギアではない。しかし、だとしたらそれは――、

「刮目なさい！　これが歴代の蓬萊寺当主にのみ許されし、人を殺す鬼の仮面!!　これ
を被る時、蓬萊寺は真に「鬼」となるツ！　いざ、狂い咲きツ！」

「なっ……………」

それはリミットブレイクほど劇的な変化ではなかつただろう。しかし鳥の仮面を被つた瞬間リライズが待機形態に戻つたことからして、逢依はその状態がどれほど危険なものなのかを瞬時に察した。

「それは――リミットブレイクの真逆…………ツ!?」

リミットブレイクの逆。つまり、感情の昂ぶりを極限まで削ぎ落とすことによつて「殺人」に最も効率的な行動のみを可能とする思考誘導外部端末。それが「鬼の仮面」の正体であつた。

出来ることや出来そうなことを高めるリミットブレイク。無意味なことをギリギリまで無くす鬼の仮面。互いに対峙してわかる、各々の限界が時限式であることと、その制限時間を超過すれば自分の感情がその力に食い殺されること。

故に――この戦いはそう長くは続けられない。

「……………ツ！」

「クリユスタルス！」

早々に終わらせたいと思うのが同じであれば、動くのも同時であった。撫月の突き出した子枯丸を左の前腕を氷の盾に変化させて防ぐが、撫月は右手のグリップを敢えて甘く握っていたのか、弾かれた子枯丸を左手で掴み、そのまま負傷した逢依の右腕を斬りつけた。

その瞬間、逢依の全身に言いしれない一瞬の脱力感と、それとは真逆に体力の漲りを感じた。少なくとも、体力が回復したというわけではない。今もこうして撫月と対峙しながらも息は荒くなっているし、疲れや痛みが引いた様子はない。

しかし確かに、体に力が入りやすい。息は切れるが疲労が遠ざかっているようにも感じる。この違和感の正体に、逢依は逡巡の末に結論を出した。

「その小太刀、まさか年齢を……！」

「……………」

その沈黙は確かに逢依の言葉を肯定していた。そう、子枯丸の正体とは『年齢を削り殺す刃』であり、相手の年齢に等しい回数を斬りつけることでその存在ごと完全に消滅させることのできる「生」そのものを否定する力を持つ。

「……までに既に2回……あと21回なんて悠長なことを言っている場合じゃなさそうね……いくら私の身体が児童並に幼いとはいっても、本当に児童レベルまで肉体を退行

させられたら戦えない……ッ！」

肉体年齢が減算されていくとはいっても、肉体の時間そのものを遡らせるわけではないことは、逢依には既にわかっていた。

もしも肉体の時間ごと遡る力があるのなら、一度目の攻撃が触れた時点で、逢依のお腹には霧久がいるはず。「他の生命」には干渉できないとしても、去年一年は霧久のために普段以上の栄養をとっていたことは間違いない、体型が変わらないというのはおかしい。なら、子枯丸はシンブルに「肉体年齢」を減算させているということになる。

だとすれば、小学生時代から成長がストップした逢依が撫月と対峙していることは幸運だったと言えるだろう。これがもし他の誰かであったなら、小学生まで遡るまでもなく身体的に大きな成長が始まる前まで戻してしまえば、リーチと体力だけでなく、精神が肉体の若さに引つ張られる可能性もある。

肉体に精神が寄っていくという事象に関しては、希繋は肉体を女性のものに変換して「菊菜」となっている際、実際に「女性の肉体」に精神が引つ張られて「自分を女性だと思いつ込む」という現象があることを、逢依は希繋から聞かされていた。

「さすがにこの縁側じゃ狭すぎるー！」

『アイシクルレイン』

空中の水分を急速冷却して氷柱に換えて射出すると、撫月がそれを防いでいる隙に中

庭へと飛び降りた逢依は、そのままキツナコクーンの方へと踵を返した。ここをまともに戦り合うよりも、少しでも早く目的を果たして安全圏に逃げるべきだと判断したのだろう。

だが、そんな彼女の目論見に気付いた撫月は、全てを氷柱を捌ききると懐から取り出した手裏剣を彼女へと投擲。ペルフエクトウス・クリユスタルスが氷の弾丸でそれを弾こうとするが、いったいどれほどの力で投げられたのか手裏剣はそれらの弾丸を全て弾き、それでもどうにか軌道は逸らせたのか、逢依の左肩と右足を掠めた。

しかし、その痛みに膝をついた逢依に対して、撫月は一瞬で数十メートル分の距離を詰め、彼女に馬乗りになって子枯丸を振りかぶる。希繫のような長い脚なら彼女の背中を蹴って、あるいは悠生のような怪力なら強引に振りほどいたのだろうか、逢依の小柄な体型ではそれすら能わず、思わず瞼を閉じそうになった、その瞬間——。

『ナイトメア・チェイン』

『リデアキック』

じやららら、と幾つもの金属が擦れ合う音を伴った線が子枯丸を弾き飛ばし、突風を伴った強烈な衝撃が逢依の上に覆いかぶさる鬼を吹き飛ばした。

「王子様が不在とはいえ、ナイトとして鬼にお姫様を好き勝手させるわけにはいかないんだ」

「久方ぶりの弟子の嫁との再会だ、挨拶代わりのスキンシップ……と行きたいとこだが、まずは仮面のカワイコちゃんと熱烈コミュニケーションしてことでもいいよなア！」

「望月ちゃんと、真透先輩……？ どうしてここに……!？」

逢依を庇うように現れたのは、永岑支部で待機中のはずの望月と、既に前線を退き戦技教導訓練に就いているはずのリデアであった。

「レイドリベンジャーズ本部の情報管理部に匿名のリンクがあった。蓬莱寺家がこれまでに殺害してきた政府要人全員分の各種データ、政府から横流しされたELBシステムの数、種類。そしてお前さんが作ったこの屋敷のマップデータもな」

「希繫さんの救出だけじゃ動いてくれなかつたけど、さすがに国が保有するはずのELBシステムが国際犯罪者集団に横流しされてたとわかつた以上、それを放置はできないでしょ？ しかも今なら日本屈指の実力者が揃う永岑支部のレイドリベンジャーズが蓬莱寺を襲撃中。だったらこのタイミングを逃すわけにはいかないんだってさ」

「……なるほど、だから彼はこの屋敷から逃げなかつたのね……。レイドリベンジャーズと蓬莱寺の動きをギリギリまで間近で見極めるために……この混乱を最大限活かせるタイミングを見計らうために……!」

——そうでしょう、蓬莱寺統司。

声には出さずとも、誰を指した言葉なのかは望月にも通じた。

そして二人は互いに構えると、撫月に視線を向けたまま逢依に櫓を飛ばした。

「行け、嬢ちゃん！ このクソ忙しい時に呑気に寝てるお前さんの旦那を叩き起こしてハッ—」

「眠りの姫を目覚めさせるのが王子様なら、王子様を起こせるのはお姫様だけだよ！
こういう荒っぽいのはお姫様を護るナイトに任せて、行って！」

芽愛とリデアに背を押された逢依は、少し迷いつつも背を向けて——、

「あの小太刀に斬られると一回ごとに年齢がひとつ削られるから注意して」

「そりゃあ理想のアンチエイジングだ」

「それとあの仮面、感情の起伏を極限まで削り落として殺人に最適な動きをさせてる。

あれを取れば勝機があるかもしれないわ」

「見たヤツ全員ぶっ殺すマシーンじゃん、こわ……」

じゃあ、と一息おいて。

「……必ず、無事でいて」

そう言って駆け出した逢依に、撫月がすぐさま追いかけようとするものの、

「まあそう慌てなさんな。まずはあたしサマとのデートに付き合ってくれよ」

「そうそう。それに、逢依ちゃんの綺麗な体にあんなにも傷をつけてくれちゃったお返しをしなくちゃだしね……？」

撫月の突き出した刃は望月の腰から伸びる鎖の先端についた錨に阻まれ、そしてその腕をリデアによつて掴まれていた。

「邪魔を、しないで……！」

「ふざけんな！　するに決まってるだろ！　こっちはただでさえ大好きな友達をあんなにボロボロにされて頭に来てんだからそっちの都合なんて知ったこっちゃないんだよ！　あーもう！　色々言いたいことはあるけど、今はシンプルにひとつ！」

——ここぞでくたばれ！

拠り所—ファミリィー

「はあ……はあ……っ！ やつと、ここまで来た……やつと、あなたにもう一度会えた……！」

リデアと望月の協力でようやくキツナコクーンまで辿り着いた逢依は、一年ぶりに再会した彼へと手を伸ばした。

しかし、それを阻むかのように真紅と深紅のスフィアが逢依の手を弾き、彼女の前で静かに浮遊する。

「エクレールと……あなたは、アバター？」

『ディアマスターは現時点でもなお休眠状態です。第一形態と比較して物質的な甲殻を持つ繭になっているためわかりにくいですが、この繭は未だに超高電圧の電気の塊です。触れようとするのは自殺行為と言えるでしょう』

『そして外部からの音はマスターの意識まで届いていません。この一年間で負った心の傷を、休眠状態になることで少しずつ癒しているのです。今この繭を出してしまえば、マスターの心は……』

エクレールとアバターから、キツナコクーンの内部に居る希繫きづなの状況を聞いた逢依

は、彼の現在の精神状況を慮りながらも、クリュスタルスを解除してそのコートの内部に隠していたそれを露わにした。

白銀に煌めく「それ」の名は、シンクロナイザー。そう、ここまでの戦いで決して使うことのなかった、かつてクリュスタルス以前に逢依が使用していたもうひとつのユニトギアが、既に起動状態で彼女の首に巻かれている。

『シンクロナイザー……?』

『まさか……!』

「この繭が超高電圧の電気の塊でも、あなたたちはそうじゃない。さっき、私の手を弾いた時もまったく痺れたりしなかった。そしてユニトギアは装着者と『同調接続』した状態であれば起動状態を維持できない。なら、あなたたちを経由すれば希繫の精神にアクセスできるってことよね?」

『お父さまのことは、わたしたちにお任せください。わたしが、お母さまが、小転さまが……絆の家族みんなです、お父さまを支えてみせます。だから……力を貸してください!』

逢依と白露の狙い、それはエクレールとアバターを介して希繫の精神へと直接アクセスをかける方法であった。だが、この方法には明確なウィークポイントがあることに、エクレールとアバターは気付いていた。おそらくは、逢依も。

『確かに僕らはマスターの精神と直接繋がっています。説得を試みるとすればそれしかないでしょう。でも、だからこそ、それはさせられません』

『精神に直接アクセスするというこの意味をわからないとは言わせません。お二人は、他者にアクセスする『シンクロナイザー』に選ばれた装着者なのですから』

「わかっているわ。シンクロナイザーで他人の精神へアクセスした場合、自分の本心を偽った言葉はアクセスしている相手に伝わってしまう……だから、決して嘘をつくことはできないってことは」

『ディアフレンドは『説得』というものを甘く見すぎです！』

普段あまり声を張り上げることのないエクレールの珍しくも明確な怒りの叫び声に、その場の誰もがたじろいだ。しかし——この場の二人と二機の中で、逢依以上に一日あたりの接する時間が長かったのはエクレールであった。

諜報部隊の壊滅と同時に大破してしまったアバターは知らない。希繫が戦い傷付くところをバックヤードで見守ることしかできなかった逢依は知らない。父の帰りを願って待つことしかできなかった白露は知らない。

希繫が今までどんな思いで対峙した人々に『説得』をしてきたか。言葉だけの説得で助けられなかった者がどれだけいたか。避けようのない戦いの中で助けられなかった者がどれだけいたか。

自分の手の届くものを必ず救う者が英雄だとするのなら、希繫はそうではなかった。彼は——桐梨希繫という『人間』は、手に届く全てを救おうとして、それでも救いきれなくて、なのに手の届かないものさえ救いたくて。そして、救えなかった命のために涙を流し続けてきた。

幼い優芽ゆめを助けた時、優芽の両親を助けられなかったことに泣いた。

未来から来た白露を受け入れた時、幼い我が子を見捨てた自分に憤り、それでも自分を父と慕う白露の姿に泣いた。

叶枝かなえと望夢のぞむがレイダーとして孤独に戦い続けていた時、レイドリベンジャーズの自分では救えないのだと知って泣いた。

義陰よしかげと陽乃はるのの境遇を知り、真の悪がなんなのかわかっていても捕えることしかできない自分の無力さに泣いた。

蓬萊寺ほうらいじとの戦いが激化し、自分の存在が周囲を巻き込み傷つけ続けていることに、ただただ泣くことしかできなかった。

説得というものは、言葉だけでも行動だけでも意味がない。真摯に向き合うために必要な嘘だつてたくさんあるし、嘘をつかなくても真実から遠ざけなければならぬことだつてある。

ただバカ正直に綺麗な言葉を並べるだけで救える命があるのなら、希繫が『慈愛のレ

イドリベンジャーズ』などと呼ばれているわけではない。

彼は常に行動し続けたのだ。相手の心がどこに向いているのか。相手がどんな言葉を求めているのか。相手が自分のどんな行動で言葉の真偽を見極めているのか。それを全て読み取って、最適な言葉を紡ぎ続ける。たつたひとつ言葉を間違えただけで零れ落ちるかもしれない命を、そうやって拠り救ってきた。

「エクレール……」

『……失礼。しかし、本音しか言えないまま説得を試みるなんてことは前提から破綻しています。説得というものは正直な言葉だけではどうしようもないこともたくさんあります。真摯に向き合うために必要な嘘や詭弁や欺瞞がたくさんあります。貴女たちは、それを知らない』

「……それは希繫でも?」

『ディアマスターでも、です』

ユナイトギアという性質上、基本的に一日の中で最も希繫に接している時間が長く、平時・有事を問わず、彼が何を考えどう思いながら言葉を選んでいるのか、その性格や思考を含めて彼の意図を読み取っているのはエクレールだ。

事実、逢依でさえあれだけの窮地に追い込まれてようやく火事場的に使えるようになった「指示を出さずユナイトギアに意図したスキル発動を促す」という技術も、希繫

とエクレールの繋がりが大多数のレイドリベンジャーズよりも飛び抜けて強い繋がりがああるから成立しているようなもの。

であるからには、エクレールの言葉を無視して強硬手段に出ることは、逢依にも白露にもできなくなってしまう。これだけエクレールが「希繫にも出来ない」と言い切るのであれば、それは「出来ない」ことなのだ。逢依の素早い判断能力が「不可」の印を出した。

しかし、そうなってしまえばキツナコクーンから希繫を呼び出す手段は潰えてしまう。ここで足踏みする時間が長引くほど、蓬萊寺も希繫を防衛するためここに押し寄せてくるだろう。故に、逢依は最後まで頼りたくはなかった最終手段を最初に切ることにした。

「なら、こんな雑な手段で解決したくはなかったけれど……」

『ええ、どうか他の手段で……雑？ 雑な手段でつて言いました？』

「悠生^{ゆうき}なら今ちようどアームズ出してると、この繭を物理的に破壊できるでしょう？」
『雑にも限度がありませんか?!』

しかし実際のところ、このキツナコクーンは一億ボルトの高圧電流を内包した球体であると同時に、「内部に希繫がいる」タイプの繭ではなく「この繭そのものが希繫」であるため、その形状を破碎させることで一時的にその電力を分解すると、再構成の過程で

希繋の意識がわずかに外部に出る。その瞬間が、逢依の声が届く一瞬なのだ。

「この繭はエクレールの『肉体を電気に変換する力』と、アバターの『流動体を分身に変換する力』を合わせたものでしょう？ 通常、アバターの分身はどんな形状であっても本体と一部感覚を共有するのに、この繭が外部の景色や音を認識できないなら、それは感覚を向けるベクトルが内部に向いてるはず」

『確かに、お母さまの言う通りだとすれば、この繭を一時的に破壊してしまえば再構築が完了するまでの僅かな時間は外部を認識できることになりませんが……』

『この繭を破壊するということはディアマスターの肉体を破壊することに等しいはず』

「いいえ。アバターの作った分身は破壊されても本体にダメージはないし、エクレールの力で肉体を電気に変換している場合、霧散レベルの分解をしなければ肉体が消滅することはなくはずでしょう？ 悠生のアームズで破壊するにしても、繭を「消滅させる」のではなく大きな破片を残すように「破壊する」なら、必ず再構築を開始するわ」

『なるほど、マスターが僕らを外部ユニットとして構築したのは、繭が破壊された場合の保険ということだったんですね。僕らも一緒に破壊されてしまえば、再構築にかなりの時間と手間が掛かってしまいますから……』

そう、だからこそ——。

「希繫を取り戻すための言葉なら持つてきた。再構築までの一瞬、一度きりでいい。それでダメなら、私は希繫と一緒にこの場所で散るまで希繫を護る。白露とシンクロナイザーは悠生に託す。それだけの覚悟でここに来たわ」

『……………』

『エクレール・リュミエール。一度、彼女たちを信じてみましょう。彼女たちはマスターの最も愛する家族です。きつと、マスターの心を救ってくださいます』

『…………一度きりです。それでダメなら、この蓬萊寺の地から去ってください。自ら命を絶つことも許しません。それは、ディアマスターの心を最も深く傷つける。これらを約束してくれませんか？』

逢依は静かに頷くと、通信機から悠生へと指示を出した。まだ交戦中の様子であったが、返事待つまでもなく悠生の巨大に巨大を重ねたアームズ『纏火武装・極』テンカムソウ キワメが天を衝き——キヅナコクーンへと振り下ろされた。

無数の破片となつて破壊されたキヅナコクーンは、それぞれの破片が再び赤い光となつて再結集を開始するが——。

「おかえりなさい。おつかれさま。ずっと待つてたわよ——『希繫』」

逢依がそう言つて両手を広げると、それらの赤い光はゆつくりと人の形を構築していき、逢依の幼い体軀を抱きしめた。

「ただいま。今もどつたよ、逢依……」

不並—ロンリーワン—

「いやあ、さすがに蓬萊寺家のご当主サマ、さすがのあたしサマでも一人じゃ辛かったかもんじゃないね」

「メアだけなら十秒だって無理ですよ」

「で、何回斬られた？」

「3回。肉体的には20歳まで若返ったからか体は軽いんですけど、さすがにあと3回までが限度です。それ以上は……」

「接近し続けているせいかあたしサマなんて7回だ。つてこたあ23歳か。肩のコリも取れるわけだ。が、さすがに20を切るのはマズい」

人間の身体は男女で差異はあるものの、健全に成長し続ければおおよそ20歳で完成すると言われている。そこから生活習慣によつては劣化していくわけだが。

言い換えるのなら、子枯丸こがらすまるによつて削られる肉体年齢のリミットは20歳を基準にするべきだ、というのがリデアの予想。つまり30歳のリデアなら十回。23歳の望月は三回ということ。そこまでなら肉体は『若返る』ためコンディションが上昇するが、それ以上は体が『未成熟』に逆行するため低下していく。

実力としては、かつて「最強最速」と呼ばれただけあり、望月よりもリディアの方が格段に上だが、オールレンジ対応の望月がリディアのサポートのため後衛を務めていることもあり、接触回数は彼女の方が少ない。

だが、そもそも年齢的な猶予が違いため、既に望月には後がなく、リディアも全力を懸けてなお残り3回というところまで追いつめられている。

「……………ッ」

だが余裕がないのは意外にも撫月なつきも同じであつた。

彼女がその美貌を覆い隠している『鬼の仮面』とは、装着した者の感情を一時的に削ぎ落とし、最も効率的かつ合理的に殺人に必要なだけの思考を促すものだ。だがそれは言い換えるなら、感情を喰らい続ける呪いの仮面。長時間の使用は装着する者の心を蝕み、ヒトとは呼べぬモノへと変えてしまう。

本来、蓬萊寺とは「殺人鬼」ではなく『忍者』の家系。人を殺めるのなら「相手に気取られず」「二の太刀を要さず」「音も気配もなく一方的に殺す」が原則。こんな風に真つ向勝負で長時間の戦闘行為は想定外の範囲外。時代の流れによつて蓬萊寺の在り方こそ変化はしたが、代々受け継がれる『鬼の仮面』は不変のまま。

つまりは、彼女の纏う『鬼の仮面』は短期間——もつと言うならほんの数秒間の使用を前提に作られた最終兵器である。それを十分以上も持続して装着すればどうなるか、

それがわからない彼女ではない。

「……………つぐ、ううっ……………」

「攻めの手が、止んだ……………」

「だったらチャンスは今しかないッ！ ヴァリアブルチェーン！」

アームズだけでは軌道を読まれると判断した望月は、両手首のブレスレットからチェーン型アームズ『ヴァリアンナイツ』を多重展開。尾のように伸びる本体のナイトメアも含め、それらを周囲の障害物にぶつけて反射させながら多角度から撫月を縛ると、強引に引っ張り上げて地面へと強かに叩きつけた。

すぐに起き上がろうとする撫月だったが、チェーンの重さに加えて、切り離れたチェーンが錨のように地面に突き刺さり、その場に拘束されてしまって、まともに身動きすらできずにいる。

スキルによる攻撃は、基本的にエモーションナルエナジーのチャージを必要とする。だが望月は持ち前の戦闘センスによってギアには最低限のスキルのみ登録し、他の攻撃方法は全てアームズと本体を利用した純粋な技能のみで補っている。

ユナイトギアがこの世界における最小にして最強の戦闘兵器となった現代、スキルを使用しないユナイトギアによる攻撃手段はユナイトギアの持ち味である「感情を乗せた攻撃」ができないため無意味にも思えるが、相手がレイダーでないのなら、それでも十

分が過ぎるといふもの。

「ナイスだタレ目ちゃん！ 決めるぞストーム！」

『イエス！ リデアキックを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始！』

「こつちも行くよ、ナイトメア！」

『了解。ナイトメア・チエインを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始』

吹き荒れる竜巻がリデアの体を宙に持ち上げ、望月の周囲に無数に連なった巨大な錨がついた鉄鎖が現れる。二人の持つ最大火力。これを受ければ、さしもの撫月といえども――。

「リライズ」

『了解。第五号ユナイトギア・リライズ。見上撫月に同調接続します』

それは、完全に想像だにしない選択。「感情エネルギーが底を尽きる前に鬼の仮面を外す」というところまでは理解ができる。しかし、鬼の仮面によって感情がボロついた今、感情の昂ぶりがなければ維持することさえ出来ないユナイトギアの装着などできるわけがない。

もはやそれは蓬莱寺としてはあり得るはずのない思考。効率が悪い、合理性などあるわけもない。これは、ただの意地。水をかけ続けてすっかり熱を失った湿気まみれの薪に無理やり超高熱の炎をぶつけて湿気を飛ばし、火をつけるような行為。

だがそんな方法で強引に火をつけられれば、蔭こもりがもつはずもない。

「わあああああああつ!! ……ツ、リライズ! この状況を切り抜けるための最後の切り札を!」

『充填完了。レツツゴー、リデアキック!』

『充填完了。ナイトメア・チェイン、いけます』

リライズの装着と同時に、チャージを終えるストームとナイトメア。

「ここを逃せば次はないと、二人はすぐさまスキルを放った。

「だあああああああああツ!」

「ていあああああああああツ!」

風を纏いながら突風に撃ち出されたリデアキックと、槍のようにまっすぐ突き出したチェインが、間違いなく撫月を貫いて――、

――アカシック・リヴァイヴ。

「……畜生ッ! このタイミングで、よりにもよって……!」

「この人は……ッ!?!」

撫月を守るようにリデアの脚と望月の放った鎖を左右の手で受け止め、それを放り投

げてみせたのは、たった一人の細身の女性。

月光のように美しい亜麻色の髪と、ぴったりと閉じられた双眸。すらりとした肢体に長い手足。間違いなく、この世の美をそのまま形にしたようなその美女は、撫月にとつて本当に最後の最後まで使いたくはなかったとつてきおきのとつておき。

「人を殺すこと……それは間違いなくわたくしども蓬萊寺家の最も得意とすることであり、だからこそ蓬萊寺は世界脅威度ナンバーワンとして全人類に恐怖を与え続けています……が、それはあくまで「殺す」ことに限った話。彼女は……世界脅威度ナンバーツ一の『金峰院』はそうではありません。殺すことにこだわらないのなら、彼らは蓬萊寺さえも超えるでしょう」

「金峰院家……人を殺すのではなく「戦いに勝利する」ことに重きを置けば、常勝無敗の戦闘鬼……しかもこの女はッ！」

「蓬萊寺統司が最も愛した女性……！」

そう、彼女は『金峰院家』でありながら『蓬萊寺』の正室として迎え入れられた歴史上唯一無二の存在。統司がこの世界で唯一その感情を動かされた女性であり、同時に以降の人類の総人口を大きく変える遠因となった人物。

その美貌は二つと並ぶ者を許さず、そして生涯愛した者の隣を他の誰にも譲ることなく二人並び続けた。

「蓬萊寺二並……！」

「随分と過激な目覚ましだけれど、いったい何事かな？ 見たところ、ここはボクの家で間違いないようだけれど……はて、こんなに荒れていただろうか。……うん？ 統司が見当たらないな。夫の不在に家を守るのが妻の役目だというのに、こうも好き勝手を許したとあつては……家臣たちのお叱りは避けられそうにないな」

「これは、割と本気でマズいなあ……ッ！」

リデアと望月は、この状況の危険性を即座に理解した。

何せここは蓬萊寺家。レイドリベンジャーズに情報をリークした匿名の人物が何者であるのかも、先だつて把握している今、二人はこの女性——二並に一切の攻撃ができなくなつてしまった。

今ここには現れていないが、「彼」は未だにこの屋敷のどこかにいるはず。もしも「彼」がこの状況に気付き、二人が二並に攻撃を仕掛けているところを見られてしまえば、間違ひなく「彼」は二並を守るため敵対するだろう。彼——蓬萊寺統司は。

「タレ目ちゃん、攻撃対象は依然あの撫月だ、絶対にパツキンねーちゃんには当てるな」
「わかつてる。幸い、鎖はオールレンジで使える武器の中でも技量次第で誤射を防げる武器だから、なんとかかなると思う。けど……あの金峰院家と蓬萊寺を相手に、言うほど簡単じゃないよ……！」

防ぐ、守る。言葉にすれば容易いが、実のところそれは攻める、倒すことよりも遙かに難易度が高い。

相手を攻めて打ち倒すためなら、強力な力や技をできるかぎり一方的にぶつけ続けられれば、いつかは成し遂げられるだろう。だが、防いだり守ったりというものは、確実に相手を打ち倒す力を持った上で、同じように攻め続ける相手をいなし続ける体力と技量を求められる。

逆に言えば、戦闘鬼とも呼ばれる戦いのプロフェッショナル『金峰院』たちが世界脅威度ナンバーツーに落ち着いている理由もそこにあると言えるだろう。殺人鬼として「人を殺す」ことに特化した蓬萊寺には、守るものがない。必要ならば同胞や妻子でさえ見捨てて対象を抹殺することを目的としているからだ。

だが「戦い」のプロである金峰院は、時に「同胞を守るための戦い」を強いられることもある。そうした場合は、自らの同胞の存命こそが彼らの「勝利」であり、『撤退』は『敗走』ではないのだ。故に、レイドリベンジャーズでも対応可能な場合・状況も多からず存在している。

そして今、ここにはリデアと望月を「殺す」ために立つ蓬萊寺撫月と、彼女を守りながら「戦う」ことを選んだ金峰院出身の蓬萊寺二並。今ここで最も揃ってほしくない二大勢力が揃ってしまった。

「君たちが何者かは知らないし、今のところ君たちに好印象も悪印象もないのは間違いないのだけれど、ボクの後ろにいるのが蓬萊寺の少女のようだし、そうなると相対的に君らが外部からの強襲者、ということになるんじゃないか？」

「……何もわかんねーんならそのまま下がってくんねーかな。あたしサマもアンタと戦り合う気はないんだ。用事があんのはそっちのお姫サマだしよ」

「ボク個人としてはそれでも構わないんだけどね。これでもボクは蓬萊寺家当主の妻だから、こうして目の前に居る狼藉者を放置するわけにはいかないんだ。すまないね」

「あつ、さつきからなんかイラつとするなって思ってたら、そうだこの人の態度めっちゃ希繫さんに似てるんだ。目の前の敵に対して敵意も悪意もないところがそっくり。そっかー、自分より強いくせに敵意のない敵ってこんなイラつとするんだ……」

一触即発の空気の中、いよいよ互いに一步を踏み出そうとした、その瞬間のことだった。

——この時を待っていた。

静かで穏やかな、それでいて重苦しい声が屋敷の奥から響いたと思うと、二並はその閉じたままの双眸を屋敷へと向け、嬉しそうな笑顔のままゆっくりとそちらへ歩み始め

た。

アカシック・リヴアイヴによって歴史再現された対象は、ある程度の自律行動を認めた上で、必要に応じてリライズによる操作が可能はずだが、撫月がどれだけ操作しようとしても、二並はそれに応じることなく歩みを止めることはない。

「おや、家にいたんだね。外はこんな騒ぎだけれど、放っておいていいのかい？」

「構わん。これは俺が認め、求めた結果だ。二並、お前を取り戻すために」

「どういうことだい？」

「すまないが、今は説明をしている暇はない」

屋敷の奥から姿を現した統司は、庭に面した廊下からふわりと飛び降りると、そのまま二並を抱えて視線をリデアと望月に向ける。

「希繫に頼んだ内容とは少し経緯が異なるが……結果的に、希繫を蓬萊寺に取り込んだことで得られた成果だ。これで希繫との契約は満了ということにしよう。約束通り、俺と二並は両勢力のどちらにも加担しない。身にかかる火の粉は払うが、そうでなければ穏やかに過ごす。それでいいだろう、真透リデア、望月芽愛」

「おい、ドミネイト返せ」

「お前たちがリライズを手に出れたなら、そうしよう。しかし今はできんな。リライズによる歴史再現は、再現対象をある程度まで操作する。ドミネイトの『絶対支配』によつ

てそれを遮断している今、これを手放せばお前たちにもいい結果にはなるまい」

「じゃあ全部終わったら返せ」

「そうしよう」

統司は懐から革袋をひとつ出すと、それを望月に向けて放り投げる。

じやらり、と音のする革袋の中身を望月が確認すると、そこには何十機もの待機状態のユナイトギアが乱雑に詰め込まれていた。

思わず「こんなに横流しされてたのか……」と呆れと驚きの混じった声を洩らすと、望月はそれを腰の軍用ポーチにしまい込み、再び統司へと視線を向ける。

「二並を取り返してくれたこと、感謝する。さらばだ」

「統司が世話になったね。けど、もう出会わないことを祈るよ。君たちのためにも。じゃあね」

ゆらりと影のように消える二人の姿を見送り、二人は目の前の「敵」へと集中する。しかし……、

「元より私の手に負えるものではないと思っておりましたが、よもやこれだけの戦いを妻の奪還のためだけに企てていたなんて……。彼にとつては我々も、レイドリベンジャーズも、妻奪還のための駒に過ぎなかった、というわけですね」

「あたしサマたちも利用されてたつて言いてえのか？ だつたらお生憎だ、レイドリベ

ソソジャーズだつて希繫を取り戻すためにアイツを利用した。一方的に利用されてたのはお前さんら蓬萊寺だけさ」

「そのようですね。ですが、それでも彼は十分な働きをしてくれましたよ。お兄様がこの屋敷に来てくださった。そしてあなたたちを呼び出し、お兄様をあゝ忌々しい繭から出してくれた。あとは……そのお兄様の周りに集る虫を払うだけでいいのですから」

ぬらりと禍々しい光を放つ瞳の奥に、どろどろとした濁りを見出した瞬間、彼女の纏うリライズがその形を禍々しく変化させ始める。

曰く——「ユナイトギアを持つ者は、常に正しい心を持ち続けなければならない」という。だがそれは、単純な出力の安定を求めるがための言葉ではない。

正しい心——正の感情を喪つた装着者は、ユナイトギアの在り方さえも歪め、この世で最も多くの命を脅かす存在に成り果てるからだ。

「おい！　すぐにユナイトギアを解除しろ！　負の感情を抱えたままギアを運用し続けたら、お前さんも無事じゃすまないぞ！」

「無事……？　そう、無事ではすみません！　わたくしがこの世界の何よりも求めたもの……お兄さん、血の繋がつた本当の家族……！　それを取り戻そうとするのなら……リスクもなく得られるだなんて、都合が良すぎたのです！」

「あーもう！　必要もないのに無駄な責任感で頑張つてる優等生つてこうだからめんど

くさいんだよ！ 逢依ちゃんみたいになんとガス抜きしろよ！ あーもーこんなの
ほつといて逢依ちゃんとか行っちゃダメかなあ!？」

「ダメに決まってるだろ。クソツたれ、もう手遅れだ、こうなっちゃまったら止められない
……! 来るぞタレ目ちゃん……!」

レイダーギアだ!

兄妹—ヒューマン—

レイダーギア。感情エネルギーの正負反転現象による『装着者のマイナス化』が引き起こしたユナイトギアの変質であり——「負の感情を抱いたままユナイトギアを運用してはならない」と言われる最大の要因である。

今、リデアと望月の前に聳える20メートルを越える巨大な朱色の女性型巨人は、紛れもなく今しがたまで二人が対峙し続けた『蓬萊寺撫月』その人であり、そして今となつてはどうあがいても『蓬萊寺撫月』に立ち戻ることはないレイダーギア——『ナツキレイダー』なのである。

今まで、撫月がユナイトギアを運用できていたのは、蓬萊寺特有の「感情を削る」という方針とは真逆の、「姉と兄を取り戻したい」という目標のために燃やし高め続けた感情によるもの。それは、執着でもありこだわりとも言えるが、より適切な言葉に書き換えるのなら——『懐き』だと置き換えられるだろう。

彼女はこの数年間、蓬萊寺に囚われるにあたって別離を余儀なくされた母との再会を願う一方で、自分と同じ血を流す姉と兄の存在を知り、血の繋がる家族というものを求め続けていた。それは自らの孤独を生めるための防衛手段でもあったが、同時に純粹で

無邪気な「姉と兄への懐き」から来るものだったのではないだろうか。

だとすれば、彼女が今こうしてレイダーギアとなった原因——『マイナスエモーショナルエナジー』の原因も自ずと知れてくる。

つまるところ、彼女のレイダーギア化の引き金を引いたのは『孤独感』とみて間違いないだろう。

逢依との会話の中で、彼女は希繫が既に『鬼』ではなく『人間』なのだど気づいてしまった。人間から鬼となった自分とは違い、姉と兄は「鬼から人間に」なった。それが『純血の蓬莱寺』としてどれほどの意味を持つのか、それを理解できない撫月ではない。さらに加えて、最大の切り札——手段はどうあれ、少なくともリライズが自らの手の中にある内は「絶対的な味方」だと思っていた統司の裏切り。そして何よりそれを促したのが自分の切った手札『蓬莱寺二並』のせいだとするのなら……。

彼女は繋ぎ繋がれると思っていた三つの『縁』を失ったのだ。「蓬莱寺の運命を脱した姉」「蓬莱寺の血に抗った兄」「蓬莱寺の掟に逆らった先祖」の三人によって、「蓬莱寺の血を引き運命を受け入れ掟に従った撫月」は自らの『選択』を否定された。

どこから狂ったのか。切り札に「蓬莱寺統司」を選んだ時か。それとも屋敷へ「桐梨希繫」を連れ戻した時か。あるいは真つ先に「桐梨小転」を狙った時か。きっとそうではない、ということはおわかつている。全てが狂ったのは、あの日——「鬼になった

日」以外のいつでもない。

「チツ、厄介なことになったな……！ タレ目ちゃん、レイダーギアとの交戦経験はあるか？」

「ごめん、ない」

「聞いておいてなんだが、だろうな。いいか、レイダーギアとの戦闘で最も気をつけなきゃならないのは「至近距離を維持しない」ことだ。見た目がどうあれマイナス感情の塊だからな、こつちまで負の感情を誘発させられる。それだけは絶対に避けなきゃならない」

マイナス感情を糧として成長するレイダーと明確に異なる点は、レイダーギアはそれそのものになった時点でそれ以上の成長をしないこと。そしてその代わりと言うかのように、並のレイダーでは決してありえないほどの強力な『負の感情』を内包し、そしてその許容量が常軌を逸していることだ。

そして、そうした負の感情の『許容量』が存在するということは、当然ながら最初から内包している負の感情だけで体を維持しているわけではないということでもある。レイダーがそうであるように、レイダーギアもまた人を襲い、恐怖と不安と絶望を振りまき、それを食む。人の命と体を害し、心を食る。

『オオオオオオアッ！ ……フウ——ッ……！ ハア……！』

「弱点は胸のクリスタルコア。装着者とギアはもう助からないが、少なくともあれを破壊すればレイダーギアは活動を停止する。が、同時にあそこがレイダーギアにとつても頑強な部分でもある。正直、あたしサマのリデアキックでも一撃とはいかない」

「メアのと同時に行けば……」

「それでも一撃じゃ無理だ。だったら二、三とブチ込んでやりたいが、あちらさんも元は人間。あんなナリでも知能は元々のそれと変わらない」

一撃すら厳しい、という言外の忠告は、望月の脳裏に不穏な気配を感じさせるには十分であった。

目視でわかる限りで全長およそ20メートル。朱色の混じる女性型の巨人。知能は元々の素体となった撫月と同レベルのまま。必要以上に近づけば負の感情を誘発させ、弱点であるはずのクリスタルコアはリデアキックとナイトメアチェインの合わせ技すらも耐え抜く。加えて――、

『オオオアッ!』

「あつぶな!?! えっ、あの巨体でこんなに速いの!?!」

「速いだけじゃないぞ。レイダーギアになって直線的な行動パターンになったとはいえ、元が蓬萊寺の直系だ。蓬萊寺流の体術は使えなくともそれなりに悪辣な戦術は組み立ててくるだろうよ」

「最終兵器メンヘラ女巨人とかどこ向けの性癖なの？」

「少なくともあたしサマ向けじゃないのは間違いない」

二人は軽口を叩きながらも、ナツキレイダーの繰り出す無数の猛攻を全て躲し続けた。スピードは元のそれと遜色ないが、その大きさゆえに相手の攻撃を見切ることも幾ばくか容易くなっている。

無論、相手の攻撃面積も同様広がっているため、本来の回避以上に距離を伸ばさなければならずスタミナの消費は激しいし、あちらも知能は蓬萊寺としてのそれを多く引き継いでいるため一、二度も避けられればフェイントを加えてくる。

スタミナは当然ながら、とにかく精神がすり減っていく状況で、退路確保のため玄関近くで無数の「成り上がり」を相手取っているはずの悠生から、時折なんの前触れもなく火球による援護射撃が来るため、その不規則な攻撃に怯んだ隙を衝きながら何度か攻撃は打ち込んではいいる。が……、

『オ……オオオオ……！』

「ダメだね。ナイトメアはオールレンジで攻撃・捕縛・援護いろいろできる代わりに決定打に欠くギアだから、ナイトメアチェイン以外のスキルが軒並み効かない」

「しかもどうやらこいつは他のレイダーギアより遙かにタチが悪いみたいだな……『リライズ』の「再現」「再生」する能力が暴走してるのか、傷を負えばすぐさま肉体を自己

再生してるみたいだ。負の感情を誘発されずに奴さんを倒すには、ヤツの防御を掻い潜って一撃でクリスタルコアを破壊するしかない」

ナイトメアでは致命的な一撃どころか、そもそもまともなダメージすら与えられない。リディアのストームも、しばしば『最速』の象徴とされるが彼女が単独で出すことのできるスピードというものは、公式記録において『準最速』とされる希繫のそれよりも遙かに下である。

彼女のストームが『最速』となっている最大の要因は、自分よりも速いものが巻き起こしたスリップストリームを自らのブースターとして「現時点で最も速いものよりさらに速くなる」からだ。だからこそ、彼女の『最速』は常に『準最速』がいることで成立しているのである。

今、目の前に対峙するナツクレイダーは、そういった意味では最悪の相手であった。必要に応じて攻防ともに凄まじいパワーとスピードをもって対応してくるが、攻撃と防御以外のタイミングは常に隙の少ない体勢でこちらの動きを観察している。そのため、「攻防の一瞬」しか強力な風が発生しないのだ。

無論、その風を利用してある程度の加速は可能だが、短期間の風が発生したところでトップスピードを維持し続けることは不可能だ。ならば相手の攻撃を躲しながら加速して攻めに転じればあちらが防御のために動き回って長期的に強風を維持できるかに

も思えたが——、

「敢えて致命的でない一撃を受け入れて自ら減速、風を殺しつつ損傷を「自己再生」で無かったことにする……か」

「見た目がどうあっても頭の回転はそのままだっていうのはマジみたいだね」

しかしこれ以上はどう足掻いてもジリ貧。決定打を欠いたまま戦闘を続けたとしても先にスタミナ切れすることは目に見えていた。どうにか増援を呼ばなければ、と思考を巡らせた。——その瞬間のこと。

「——リデアさんッ！」

「……タレ目ちや、ん……?」

最も接近と離脱を繰り返し、攻防共に動き続けてスタミナと集中力を欠いていたリデアの背に迫る微細な『殺気』を捉えた望月は、チェーンを伸ばす間もなく彼女を庇うように突き飛ばした。

「あ、ぐっ……!」

「おい……おい! タレ目ちやん! くそっ、この無数の手裏剣は……!」

「蓬莱寺流忍法『手裏剣包圍網の術』は、囲い込んだ獲物を決して逃がさない」

リデアを庇い、その背に手裏剣を受けた望月は、その場に倒れたままびくりとも動かない。リデアは彼女を肩に抱え、ナツキレイダーの気配を敏感に感じ取りながらドーム

状に配置された手裏剣を縫うように、声の方へと視線を向ける。

目元と足の指先以外の全てを黒い忍装束に覆い隠した彼女は、蓬萊寺撫月の懐刀であり、蓬萊寺当主の『飼い犬』の一人、『小夜』であった。既に『蓬萊寺撫月』とも呼ばないナツキレイダーを目にしながらも、彼女はその忠心を揺らぐことなく「飼い主」の敵に牙を剥く。

「わずかにでも動けば同時に発射される回転手裏剣の包囲網は、既に貴様の半径20メートルに待機浮遊している。全方位から繰り出される無数の手裏剣を全て躲しきることなどできはしない！」

「チツ……！」

「受けてみる『最速』ッ！ 半径20メートル、全2750振りの『手裏剣包囲網』をッ！」

退路は既に断られた。竜巻を発生させて吹き飛ばそうにも、風を起こそうとすれば十分な風力の竜巻を形成するよりも遙かに速く全2750振りの手裏剣が二人を襲う。

万事休す。絶体絶命どころではなく『絶対』絶命とも思えるこの瞬間にこそ——『英雄』はその怒りの雷を振り下ろす。

——『サンダーブレイド・E エクスターミネーション X スタイル』！

2750の手裏剣が発射された直後、それらを追って撃ち抜くには十分すぎるほどの速度と熱量を持った2750本の雷の短剣が、それらを一つ残らず的確に捉えて焼き溶かした。

腹に響くような雷鳴の如き轟音。大地を踏みしめる軽やかな足音。立ち込める土埃の中から二人を守るように現れたのは——誰もが求めた『英雄』に違いなかった。

「師匠。望月を逢依のところまでお願いします。逢依なら今は悠生と合流しているはずです」

「……大丈夫なのか？」

「エクレールがいる。アバターもいる。シンクロナイザーと……白露も居る。今の俺なら、師匠を置き去りにできるくらい速く走れます。だから……任せてください！」

両脚には真紅のブーツ。首元には白銀のマフラート、左腕に深紅のグローブ。そしてその背に雷光を放ちながら輝く月輪を戴くその姿は、まさしく『雷神』にも見紛うほどの神々しさを放っていた。

「……ならこの子を送り届けたらすぐに戻って——」

「いえ、それなら大丈夫です。もう、これでもかつてほど『心強い仲間』がこっちに向かって来ていますから」

「仲間……?」

「俺の……後輩ですよ」

——『レインボーストリーム!』!

——『『エクリップス・デュアルハートストリーム!』』

ナツクレイダーの頭上に叩きこまれる虹色の奔流と、背後から打ち込まれた黒白の轟砲。それはまさしく、かつて希繫を苦しめた二発の『必殺』によるもの。

「お待たせしました、桐梨先輩!」

「どうやら間に合ったみたいだね」

「レイドリベンジャーズがアタシらの相棒を出し渋ったせいで、随分とギリギリの到着になっちゃったけど」

これまで幾度も希繫を助けてくれた優芽^{ゆめ}。そして希繫に恩を返そうとこれまで人知れず人助けをしていた義陰^{よしかげ}と陽乃^{はるの}。その三人が、今は希繫と共に並ぶ戦友としてここに立っている。

「いい後輩だ。大事にしろよ」

「……望月をお願いします」

望月を抱えてその場を抜けたリデアに、体を修復したナツクレイダーが追い打ちの光線を放とうとするも、希繋の雷撃がその横つ面に叩きこまれ、ナツクレイダーは行動の中断を余儀なくされた。

そしてそんな彼に背を向けるように、三人は小夜と対峙する。

「三人には小夜の相手を頼んでいいか？」

「はい。そちらは？」

「どうか。だがこれはそもそも俺とあいつの兄妹喧嘩だ。あいつを「終わらせる」なら、俺がやるしかない」

現在、希繋が装着しているユナイトギアは三機。厳密には二機と別途一機と一人。相手が「独りの強敵」だとしても、彼は英雄として戦機を纏うことを厭わない。「一人」としてその視線の先に妹を捉える。

かつて「鬼」であった者は母の愛によつて「人」となり、そして「人」として「鬼」の罪を償い続けた彼は、全ての贖罪を終えて『英雄』となる。他の誰にも妹を殺させるわけにはいかない。他の誰にも「鬼殺し」の罪を背負わせるわけにはいかない。

故に彼は贖罪を終えた果てに最後の罪を背負う覚悟で、この地上で最後の鬼討伐——
「妹殺し」を胸に掲げた。

『オオア……オ……ニイ、サ……マ……』

「……俺がなんでお前を妹と認められなかったか。認められなかったのか、今やつとわかったよ。俺はお前に、普通に生きてほしかったんだ。鬼と人の間に生まれたとはいえ、お前は人として育っていた。こんな鬼が島みたいなところに連れてこられて、鬼として育てられて、心まで鬼になっちゃうのも理解はできる」

『オオ……オオオオ……』

「でも、それでも俺はお前に立ち止まってほしかった。お前は俺と違って半分は「人」だったんだよ。鬼の血や運命に逆らえたはずなんだ。お前が人に戻りたいと言うのなら、俺はお前を妹として守りたいとすら思えたかもしれない。……けど、そうはならなかった。お前は鬼であることを受け入れていた」

『オア……』

「……だから、俺はお前をここで殺す。お前がこれ以上『鬼』にならないように、俺を未だに「兄」と慕ってくれる『人の心』が微かにでもある内に……鬼殺しじゃない！俺は「妹」を殺すんだッ！」

これが最初で最後の、兄妹喧嘩。

小夜—ナイチンゲール—

三人がハナからリミットブレイクを発動したのは、何も示し合わせたわけではない。何よりその時、優芽ゆめにとって意表を突かれたのは、その背の向こうに聞こえる彼の「妹を殺す」と言うその言葉。

希繫きづなにとって、蓬萊寺ほうらいじという存在がどれほど憎く許しがたい存在であるかを知る優芽にとつて、それがどんな意味を持つのか、わからないはずがなかった。これまで多くの人々を救い続けてきた彼は、たとえそれらの事件を引き起こした主犯であつても更生を促し、時には身を削つて守つてきた。

それは、未来から来て行く当てのない自分たちのために治療費を私財を切つたり、あるいは今こうして並ぶ義陰よしかげと陽乃はるのの罪状を軽くするためありつたけのコネを使つて彼らの弁護に奔走したりと、その目と耳で見聞きしたことだからこそ実感がある。

だが同時に、彼は「家族」というものをとて神聖視している。「家族」というものは血の繋がりの有無に関係なく絆で繋がるものだと思つているからこそ、絆なき血の繋がりは「単なる血縁者」と見做すはずの彼が、憎くてたまらないはずであろう撫月に対して「妹」という表現をしたことに、彼女は驚きを隠せない。

「この私を前にゆるり余所見とは度し難い！」

「それは失礼。けれど、それでも問題なしと判断しての余所見です」

『アクアショット』

忍者らしい容貌に違わず、その身軽さと素早さを活かした驚異的なスピードで優芽へと攻撃を仕掛ける小夜。しかし、優芽はそれを落ち着いた目で見つめながら、的確に小夜の逃げ場を奪う誘導射撃で後退を促す。

そして小夜が再び態勢を整えたところで、その両側から挟みこむように黒白の巨大な拳が彼女に迫るも、蓬萊寺特有の危機察知能力によつてすぐさまこれを回避、無数の手裏剣で牽制するが、義陰は影を利用した壁で、陽乃は体を光に変換することでこれをやり過ぎす。

小夜の戦闘能力は杏樹にこそ劣るものの、それでも当主自らが首輪を繋ぎ手綱を握る「飼犬」である。どう足掻いても「成り上がり」では足元にすら及ばず、十全の装備ならば数人の家臣すら抑え込むはずの彼女が、どういうわけか名も知れぬたつた三人のユナイトギア装着者に手間を取らされている。

しかしそれも無理からぬこと。なぜなら――、

「アイツと違って「風を切る音」が聞こえる」

「彼なら気付くこともできない」「わずかに視界を遮る影」が見える」

「何よりシンプルに——お兄さんより「遅い」ッ！」

そう、優芽がこの二人を連れてきた最大の理由は、まさしくこれ。自分も、彼らも、「準最速のレイドリベンジャーズ」と呼ばれる希繫と対峙したことがある。そして希繫は「準最速」であるものの、リデアは「最も速い者を追い越す」という『風』の性質によって「最速」であるため、「現時点の最速」という明確な指標がなければ「真の最速」は彼なのである。

優芽はこれに対して「電気」「体質」などの性質的な部分から希繫そのものを対策し、義陰と陽乃は「影」と「光」によって正面から彼のスピードに対抗した。故に——あくまで「質量を盛ったままの超高速機動」くらいでは驚くにも値しないというのが、彼らの本音であった。

加えて、小夜の戦闘スタイルは「高速機動」＋「殺気の霧散」＋「速度を活かした突進」による『一撃必殺』に忍法を加えたもの。それはつまり、忍法にさえ注意してしまえば残った部分は希繫の完全下位互換なのである。むしろ殺気・敵意を隠すという意味では、そもそも蓬萊寺以外にそういうものを向けることすらしない希繫が格段に上であり、単純なスピードに関しては言うまでもない。

そして忍法に関しては未知数だが、希繫は自らの脆弱性・貧弱性を理解しているからこそスキルのバリエーションがレイドリベンジャーズの中でも特に豊富な方である上、

当然「戦う術」である以上は蓬萊寺の技術をスキルに落とし込んでいるものも少なくない。故に、優芽はいくつかの忍法にも対応していた。

「ならばッ！ 蓬萊寺流忍法——幻影霞玉ミラージュユミストの術ッ！」

小夜が放り投げた煙玉が爆発し、三人の周囲を数百人という数の小夜が囲い込む。元より小夜の得意とするところは真つ向からの戦闘ではなく、持ち前の身軽さを利用した諜報と、毒を用いた暗殺。

なればこそ、忍法においても様々な毒を利用したものを得手とするのは自明の理。中には手ずからブレンドしたオリジナルの毒もあり、彼女の研鑽の結晶こそがこの「霞玉」である。

「幻惑効果のある毒煙……確かにお兄さんならその手の技は使いませんが——！」

『大気中の水分を操作します』

「なっ……!!? 霞がが、晴れて……ッ!?!」

しかし、今ここに立つのは「希繋のトツプスピードに対応できる」というだけでなく、大気に粒子や蒸気を霧散させる毒を「大気を浄化する」ことで無効化できる優芽。

「ではこれならッ！ 蓬萊寺流忍法——幻惑閃光玉パニッショウテイクスの術ッ！」

大気中に毒の蒸気や粒子をいくら撒いても意味がないと判断し、即座に「視力に直接的な効果を及ぼす」幻術に切り替えた小夜は、間違いなく判断力に優れる術者と言えよ

う。

加えて、閃光玉の影響を回避するために自らの視界をシャットアウトする間に攻撃を受けられないよう、手裏剣で牽制したまま顔を覆つて後退したのも賢い判断だと言える。が、しかし。しかしである。

「ソール」

『シヤドウアブソープ』

「ルーナ」

『シャインアブソープ』

義陰と陽乃の持つユニイトギアは自らの肉体を光と影に変換し、同時に自らに取り込むことのできるそれらを操る特性を持つ。光と影とは、それ即ち目に見える景色そのものであり、視力に訴えたあらゆる影響はルーナとソールによつて掻き消されてしまう。

そして、そこでようやく小夜は気付いた。彼らは自分よりも速い相手との交戦経験があり、そして自分が最も得意とする毒や幻術を無効化する手段を持つ。それは即ち、意図せずして構築された、しかしながら最悪とも呼べるほどの、天敵となる存在だということ。

だが気付いても既に遅い。特に、視覚に訴えた幻術を無効化できる人物が複数人いるというのが、小夜にとってはとにかく致命的である。故に、彼女が真つ先に狙いを定め

たのは優芽であった。

少しでも出し惜しめば間違いなくやられるとわかっているからこそ、彼女は自らの全力を躊躇せず出し切り、優芽では捉えることのできないスピードで彼女の背後を取った。先程までの余裕はなく、ただ「殺す」ことに集中し、気配も殺気も呼吸さえ気取られることのないよう、細心の注意を払って。

「イーリス、盾を」

『DDーインタラプトシャッター』

「水の大盾……ッ?! いや、そも何故この攻撃に反応できた……ッ?!」

「言ったでしょう? 『遅い』んですよ、あなたの攻撃は」

しかし、優芽はまるで後ろに目がついているかのように、手にしたディアドロップを大盾の形状に変え、背後からの攻撃に反応した。最初から予想していたわけではない。こうして距離をとつても、彼女はゆっくりと振り向き、その視線は全て小夜を捉えている。

ならば、と残る二人にも高速移動したまま手裏剣を放つものの、それは全て義陰が持つルクス・ルーナのマシンアームによつて弾かれ、そのまま体を光に変換した陽乃によつて接近された挙句、マシンアームによる連撃を打ち込まれてしまう。

背中から伸びるルクス・ルーナのマシンアームとは異なり、ルクス・ソールのマシン

アームは非接続状態の浮遊型ユニット。故に、その拳は——、

「叩き込めッ！」

『サンライトメテオ』

——射程距離の際限なく、吹き飛ばされた先の小夜に追い打ちをかけるようマシンアームを飛ばして殴り飛ばし、屋敷の雨戸へと叩きつけることに成功する。

単純なパワーにおいては、この三人の中でも特に抜きんでるのが陽乃だ。今の攻撃も、直前で防御しているようには見えなかったが、そうであつてもこれだけ叩き飛ばされているところを見るに、小夜が受けたダメージは少なくないことが見て取れた。

雨戸に身体を打ち付けられたのは彼女にとっては不運であつたかと思えば、「とりあえず逃げ場からは逸らせたみたいだ」と誰に向けるでもなく零した陽乃を見るに、狙つてそこにぶつけられたのだろう。

少し軌道が逸れていれば、彼女の体は屋敷の中に放り込まれていたはず。忍者屋敷の中に入り込んだ忍者を探すのはさすがに一苦労だと判断したからだ。

「イーリス、手錠を」

『DD—バインド』

「一応、手だけでなく全身まるっと拘束しておきましょう」

『アクアコート』

アクアコートは基本的に優芽を守る鎧としての役割を持つが、それは彼女が全身の動きに合わせて厚い膜状に覆われた水を操作しているからであつて、そうでないアクアコートは邪魔でしかない。

そも、水という物質自体がこの世で最も柔らかく変幻自在に形を変えるウエイトなのである。優芽は基本的に「液体」としての水を多用するものの、イーリスの力をフル活用すれば気体にも固体にも変化させることができる。実際――、

「水のアクアコートを凍らせないように、その上から氷のアクアコートで覆つて」

『アクアコート』

「蓬莱寺家の小夜。あなたを国際脅威として Defensive measure to International 国際脅威対策特殊機構本部まで連行します。抵抗はできないと思いますが、できれば大人しくして

ください」

「くっ……この小夜、DeMITHの虜囚となり撫月様の手枷足枷となるくらいなら――
――夜啼ッ！」

小夜の叫びに呼ばれ、一羽の鳥が彼女を目掛けてやってくる。

あの鳥を用いて攻撃するつもりかと身構えた三人をすり抜けて、その鳥――夜啼は自らの主である小夜の喉元へとその小さくも鋭い嘴を突き立て、そこにある彼女の『声』を食い千切つて飛び立っていった。

(これで——たとえ主より長く生き永らえる辱めを受けようと、主の不利益を囀る恥知らずな小夜啼鳥にはなるまい……)

そう、彼女が最も恐れたのは自らが生き残ることで撫月に不利益をもたらす情報を洩らしてしまうこと。毒の扱いに秀でた彼女は、自白剤などの薬品はもちろん、忍者として拷問にも耐え抜く修練を積んできた。しかし、「声」が残っていれば何かしらの方法が通用し、自らの信念に反してしまうかもしれない。

だからこそ、彼女は自ら手塩にかけて育て上げた伝書鳥『夜啼』ヨナキに自らの声を奪えと命じたのである。

(撫月様……あとは、ご武運をお祈り申し上げます……)

もはや「小夜を照らす月すら撫でる尊き君に、近付き啼き囀ること許されし唯一人」と称されたその鳥が、暗がりに啼くことはない。

弾丸——リトルライト——

妹を殺す、そう告げた意思の中にどれほどの後悔と怒りを隠し通したのか。それはきつと、その口から放った本人でさえ気付いてはいないだろう。桐梨希繫きりなしきづな。暗く昏い夜に縋るとされた鬼が、その名を捨てて自らに課した使命——『限界なしの絆となること』が、彼の存在を示し続けている。

ここまで、どれだけの希望を繋いできたのか、その道筋を彼はもう振り返ることすらできない。希望とはこの薄暗く浮かぶ地球という名の星に灯った無数の光だ。その光はどれも眩く、そして儂い。ひとつひとつをどれだけ集めようとしても、今ここに聳える妹すら救えないほど弱い光だ。

だが、彼は希望ではない。彼は——希望を繋ぐ限界なしの絆なのだ。

統司とうじと対峙したあの時、白露しろろという希望が未来からやってこなければ、希繫は彼の支配から免れることはできなかつた。

統司との和解を決したあの戦いで、悠生ゆうきという希望が駆け付けてくれなければ、希繫はただ無力に蓬萊寺に屈することしかできなかつた。

蓬萊寺に来て精神を擦り減らす日々の中、杏樹きょうきという希望がいなければ、希繫は既に

蓬萊寺という鬼に身を墮としていた。

耐え切れず繭の中に逃げ込んだ時、逢依あいつという希望が救い出してくれなければ、希繫は「桐梨希繫」であることを見失っていた。

自分が駆け付けるまでの間、リデアと望月という希望が戦い続けていなければ、希繫は目の前の妹と向き合うことすらできなかった。

今こうして戦っている中、優芽ゆめをはじめ義陰よしかげと陽乃はるのという希望が背中を守ってくれなければ、希繫はこの兄妹喧嘩に集中することはできなかった。

ここに至るまでの道程に、全ての希望が彼の今に至るまで繋ぎ繋がれ続けてきた。そんな「希望の連続」こそ、この世界を結ぶ一本の糸——『継』なのである。

『オオオア……!!』

「アバター！ エクレール！」

『了解。アナザーワンを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始チャージ』

『了解。ユニティバレットに多重拡張接続マルチアクセスロードします』

ナツキレイダーは20メートルという巨体と重量をシンプルな威力に変換し、蓬萊寺の技術を駆使して見た目からは想像もつかない技巧と機敏さを保ったまま、言葉こそ失ったもののヒト並の知性は衰えていない。まさしく『巨大な鬼』の姿である。

対し、希繫はその圧倒的な速度と、それを利用した突貫力を威力として変換する。そ

のため、レイダーギアは接近し続けた者の心を掻き乱し、不安を植え付け、負の感情へと変換する性質を持つが、希繫であればヒット&アウェイによつて絶え間ない攻撃を行える。

理屈だけなら相性は希繫に分がある。加えて「妹を殺す」と宣言した通り、希繫は『レイドリベンジャーズとしての技術』だけでなく『蓬萊寺としての技術』をも惜しみなく使つて、とにかく一撃必殺級の攻撃を既に何発も叩き込んでいる。

レイダーとは存在を異とするものの、負の感情で体を構築し、それを糧として行動するという点においてレイダーギアは共通する。ならば、ユナイトギアを使った希繫の攻撃は間違いなくレイダーギアにとつて致命的なものになるはずだ。だが、ナツキレイダーはそうではなかった。

ナツキレイダーはレイダーギアでありながら、希繫の攻撃を何度も受けてなお立ち続けている。なんとなくだが、希繫はうつつすらとその理由を頭でなく感覚的に理解していた。おそらく特殊な能力や相性の問題ではなく、彼女の内包した『絶望』という負の感情が強すぎるのだろう。

この家に——蓬萊寺に縛られながら『家族』を求めたのは希繫も撫月なつきも同じだ。

だが希繫は小転こしるという信頼できる姉が傍にいて、彼女の手に引かれたことで『絆フアミリイの家族』という家族を得た。だが、撫月はそうではなかった。誰も彼女の手を引いて

はくれなかつたし、求めた兄も姉も蓬萊寺としての自分を拒絶した。

あるいは、蓬萊寺を捨てる覚悟があれば拒絶を解いてくれたかもしれない。ただ一人の少女として、妹と認めてほしいと言えば、兄も姉も受け入れていたのかもしれない。だが、彼女はそれができなかつた。蓬萊寺に縛られる内に、自分の全てを投げ出して信じる心を殺されていた。

他の誰か。兄でも姉でもなく、たとえ彼女がこの屋敷を捨てて逃げたとしても、その身ひとつで彼女の傍らで微笑み囁く一羽の鳥の存在に気付けていれば、きつと——。

だが、そうはならなかつた。

撫月は蓬萊寺としてのお役目を果たし、無数の命を殺し続けたことで、他の誰でもない自分自身の心を殺してしまった。「他の誰かを信じる」という子供のように純粋な気持ちを持つてしまった。故に、彼女はその殺した心に崇られた。

彼女を突き動かし続けた「執着」——あるいは「懐き」とも呼べるその感情は、誰かと繋がることを強く求めるといふ点において、もしかすれば「絆」とも呼べたかもしれない。だが「懐き」は「絆」ではない。互いに認め合い、共に繋がることを求めあう『絆』と違い、『懐き』は一方的な想いだ。

否、だからこそ彼女は求め続けて、そしてその求め続ける手を払われ続けたのだろうか。だとすれば、『月』を——今こうして月輪を背に負う一人の青年と対峙し、それを撫

でることすらできず一方的に追い詰められ続けている彼女が、その存在を「撫月なつき」と名付けられたのはどんな皮肉だろうか。

『ディアマスター、七つのユニティバレットの同時展開はリミットブレイク相当のエモーションナルエナジーを消費します。機能上の継続時間に制限はありませんが、ディアマスターの体には限界があります。どうか、無理をなさらず』
「わかつてる」

七つのユニティバレット。

両脚部に追加された赤のブースターはキックの威力と速度を増強し、額から伸びる二本のツノのような紫のアンテナは大気の微細な温度や振動を感じ取るため、この二つは希繫と極めて相性がいい。

左腕全体に展開されたそれは「腕」と「装甲」の二つの意味で「アーム」と称して間違いない、希繫の貧弱な防御を左腕を盾とすることで補うものだろう。腰回りを覆う白銀のスカートアーマーも、同じく彼を保護する鎧であると同時に、攻撃の瞬間どうしても片足立ちになる彼の姿勢制御をも担っている。

首に巻かれる群青のチョーカーと体の各関節部に現れた緑の発光パーツは、どちらも探知機の意味を持つ。前者はエクレールと連動して周囲の生体電気を確実に捉え、後者はあらゆる光学迷彩を無効化し、視覚への幻惑作用を全て打ち消す。

そして背中から広げられた虹色のウィングは言うまでもなく空中での行動を可能にし、加えて周囲の水分を増幅させることで狙った相手を湿らせることができる。エクレールの存在を知る者なら、その「湿らせる」だけの能力を囓う者はいまい。

『充填完了。アナザーワン、発動可能です』

「やれ」

希繫の返事と同じくして、ナツキレイダーの周囲を取り囲む無数の希繫の分身。ユナイトギアとユニティバレットの機能効果まではコピーできていないが、身体能力やユナイトギアを使わない技術に関しては全てが現在の希繫のコピー。

故に、ギアを用いないとしても音を置き去りにする彼のトップスピードで無数の影が飛び交うこの状況においては、単純な手数増加だけでなくナツキレイダーの攻撃対象を定めさせない効果をも生み出す。

スキルは使用のためにどうしてもチャージ時間を要する。普段の希繫であれば、その時間をあえて相手の防御態勢を整えさせて「殺さないように」攻撃する隙として利用していただろう。

だが、今こうして対峙するのは半分は自分と同じ血を巡らせた妹であり、蓬萊寺の技術を惜しみなく注がれた『鬼』である。故に、希繫はとにかく蓬萊寺の体術と暗殺術を駆使して継続的な攻撃と退避を繰り返した。攻撃こそ最大の防御だと、反撃の余地を与

手にした虹色のバレットをホルスターに戻すと希繫は再び立ち上がり、ナツキレイダーへと再攻撃を仕掛けようとするが、その視界の端にキラリと光った「それ」を見ると、僅かに思考を巡らせてそれを無造作に掴み、駆け出した。

表に出れば、既に優芽・義陰・陽乃の姿はなかった。あちらは既に勝負を決したのか、小夜の姿もない。おそらくは、彼女を連行してこの場から退避したのだろう。

「撫月……！」

『オオア……！』

ウイングを失ったことで空中での自由飛行手段を失っただけでなく、単純にユニティバレット一つ分の出力を欠いたことにもなるが、同時にそれはユニティバレット一つ分の継続消費エネルギーを取り戻したということでもある。

希繫は強く地面を蹴り、ナツキレイダーの頭上に跳んだ。そしてその背に頂く月輪を眩く煌めかせると、彼の姿は闇夜に消える新月のようにゆらりと姿を消し、僅かな間を置いてナツキレイダーの胸のクリスタルコアに強烈な一撃が叩き込まれた。

「ゼエエああああアアアアアッ!!」

シンクロナイザーによって白露一人分の感情エネルギーを上乗せしたエクレールの雷撃を、キックと同時に叩き込むこの攻撃は、複数のユニティギアを同時使用できる今だからこそ成立するイレギュラーな一撃。だがその性質上『スキル』として成立しない

からこそ、エモーショナルエナジーの充填配分を考えずありったけを叩き込める。

『オオオオオアアアアーツ！』

「今だ、やれえええッ！」

『了解、肉体を電気に変換します。アバターツ！』

『了解、流動体を分身に変換します。シンクロナイザーツ！』

『了解、桐梨白露と桐梨希繫およびシンクロナイザー、ナツキレイダーに装身そうしんします。後を頼みます……和泉優芽ツ！』

そう言つて、白露と三つのユナイトギアをその身に宿した希繫は、ナツキレイダーの『内側』へと姿を消し……、

「任せてください、シンクロナイザー。こちらの準備は……万全ですッ！」

そうして並び、ナツキレイダーと相対する三つの影。

誰より希繫に憧れた少女と、誰より希繫を導いた兄と、誰より希繫を支えた妻が、そこに小さくも大きく聳えた。

縁—ユナイト—

シンクロナイザー。第四六六号ELBシステムにして、数あるユナイトギアの中で唯一、適性を持たない人物にアクセスすることのできるユナイトギア。

通常のユナイトギアと同じく、装着者の武器として戦うと同時に「装着者を感情エネルギーに変換して『装着者と心を通わせている人物』にアクセスする」ギア特性を持つ。

そうすることで、装着者が持つ能力の全てを対象の人物に譲渡し、対象の感情エネルギーの制御を行うことを可能とする。通常、この力は装着者である白露しろろの肉体を希繋きづなや逢依あいに移すことで彼女の身軽さや鋭敏な知覚能力を宿主である彼らに与えるものだが

「オ、オオオオアアアアッ！」

「レイダーギアの動きにさつきまでのキレがなくなった……。お兄さんたちの『プラスの感情エネルギー』がレイダーギアの性質と反発して、蓬萊寺ほうらいじ撫月の意識が肉体と乖離を始めた証拠です」

「でも、だとすれば理性を欠いたあの巨体は……！」

「人間の負の感情を喰らい尽くそうと暴れまわるレイダーと同じってことだろ！ 遠慮

が要らなくてお誂え向きだ！」

ナツキレイダーの巨体は、彼女の膨大な負の感情エネルギーをマイナス化したユナイトギアが増幅し、物理的な肉の鎧として膨張させたものだ。つまり、彼女の存在自体が濃密な負の環状の塊とも言える。

しかし、負の感情エネルギーの影響を近付いた人間が受けるのであれば、逆に相應の正の感情が内側に入り込めば、レイダーギアへの影響も大きいはず。そう予想したのは、今こうしてナツキレイダーに立ち向かう逢依と優芽の二人であった。

先ほどの攻防で、希繫はナツキレイダーの攻撃を全て躲すことは不可能ではないと判断していたが、同時にナツキレイダーへの決定打もないと見込んでいた。このまま戦えば、人間である希繫は徐々に疲労と体力の低下によってコンディションを落としていき、いつかはやられるだろう。

そんな時、シンクロナイザーに入った通信によって逢依の分析と優芽の対抗策が告げられた。それがこの賭け、あるいは特攻にも等しい逆転の一手。

「希繫なら彼女を説得できる、なんて甘いことを言うつもりはない。けれど……彼女を変えられるとしたら、それは希繫しかありえない。だから……それまでの時間を稼ぐ！　こんなところで、希望を絶やしたりなんかしない！」

「希繫ア！　オレが！　オレたちが！　レイドリベンジャーズが！！　いや、今となつち

まえばこのままじゃ世界中がテメーに頼らざるを得ねーんだ！ オレの弟なら、このくらしいの期待は応えてみせろ！」

「あたしの見た未来は、お兄さんはレイダーから人類を救って絶望した。白露ちゃんの見た未来は、お兄さんは蓬萊寺から人類を救って絶望した……。だけど！ 今この世界の未来はその両方を掻き消して最高の未来に繋げられるかもしれない！ お兄さんの繋ぎ続けた未来が、ここで結実するかもしれないんです！ だから……諦めないで！」

理性を失い暴れまわると同時に、その肉体は徐々に規模を拡大させていく。既に全長は50メートルにも近付き、その背には朱色の翼が生え、その姿は天使のようにも見えるが、対峙する三人にとつては赤あにに近付こうとする朱いもつとのようで、言葉を嚙む。

『オオオオアアアアアアアッ！』

「オイオイオイ、レイダーギアは成長しねーんじゃねーのかよ！ なんでこいつこんなデカくなってんだ！」

「ボヤかない！ 彼女の顔に向けてありったけの火力を叩き込んで！」

「チツ、炎だけでいいんだな！ スヴィルカーニイ！」

掌の熱を使って生み出した超高温の火球をナツキレイダーの顔面へと投げつけると、これまであらゆる攻撃に対してほとんど制止する素振りの無かった巨体が、僅かに怯んだ。

どれだけ分厚い肉の装甲を持っていても、目や口元の形が違っていても、その表皮が薄いのは人の形をしている以上は変わらない。単純な衝撃に耐えられるかもしれないが、悠生ゆうきの放つ炎は彼の「勇気」が滾れば滾るほどにその温度を増していく。

単なる火球であつても、並の敵なら一撃で蒸発せしめるその攻撃を受けて、無反応というわけにはいかなかった。

「動きを止めるわ！ 優芽ちゃん、手伝って！」

「任せてください！ イーリスッ！」

『レインボーストリーム』

頭上に現れた巨大な水のスフィアから発射された虹色の奔流は、ナツキレイダーの胸のクリスタルコアを的確に捉え、明確なダメージとはならないまでもその巨大な体を叩き飛ばし、仰向けに倒すことに成功する。

だが優芽はそれを見てなお、レインボーストリームを放出するスフィアの位置をナツキレイダーの真上に移動させ、その水圧によって彼女の動きを封じた。ダメージにならないことをわかつていて、悠生すら直撃を受ければ無傷ではいられないこの大技を、そう長く維持できないこともわかった上で、その奔流を止めなかった。

「今ですッ！」

「クリュスタルス！」

『了解。あらゆるものの運動量をゼロに固定します』

瞬間、レインボーストリームのスフィアごとナツキレイダーの全身が氷漬けになり、その活動を停止する。

「やった……んでしょっか？」

「いえ、さすがに恒久的な封印は無理でしょうね。持つて数分……さすがに次も同じ手を通じるとは思えない。それまでに希繫が戻らなければ、今度は……」

「希繫と白露ごとあのデカブツを殺る、つてんだろ。ハッ、いらねー心配して心を擦り減らしてる暇なんざねーぞ。あいつが戻っても戻らなくても、あの粗大ゴミを焼却処分するのは変わらねーんだ」

「……お兄さんを、信じましょう」



（寒い。体が冷えていくのを感じる。体の表面だけでなく、まるで氷菓を急いで掻き込んだ直後のように、お腹の奥から冷えていくような感覚……）

肉体の主導権を手放した撫月は、ナツキレイダーという肉体の牢獄の中、ただ静かに精神の死を受けれるだけの時を過ごしていた。

姉にも兄にも拒絶され、蓬萊寺であることを捨てられず、ヒトであることを諦めて化け物に身を墮とした。最後に誰かの声を聞いたのは、兄に「お前を殺す」と言われたこと。あれが最後の先の最期だとするのなら、ナツキレイダーではなく「蓬萊寺撫月」として殺してもらえらることを喜ぶべきか。

最後まで手放せなかつた蓬萊寺の姓は、決して望んで手に入れたものではないが、それでも色んなものを投げ出して手元に残ったたった一つがそれならば、それを懐に抱えて死ねるだけで、撫月は納得する術を持たなかつた。

「最期に……兄さんの手で殺されるなら、それもわたくしの運命であつたのでしょ……」

「勝手に決めないでくれ。お前だけならまだしも、俺までお前の運命に巻き込まれちゃ堪つたもんじやない」

「えっ……っ？」

幻を見ているのかと、撫月は自問を繰り返した。あるいは、精神だけの存在となつた今、この空間こそが幻の世界にも似たモノではあるが、それでも、あまりにも出来過ぎた光景に撫月は目を疑つた。

まるで月を映すような真紅の瞳。夜空を染めたような美しい黒髪。レイドリベンジャーズの証である黒いロングコートに身を包んだその人物は、撫月の四肢を呑み込ん

だ肉の壁に電撃を叩き込むと、その肉壁が弛緩する一瞬の隙を衝いて撫月を引きずり出した。

「…………お兄、様…………？」

目の前に立つ彼は、この一年間を共に過ごした「蓬莱寺夜縋」でありながら、そうではなかった。まるで濁った血のように淀んでいた瞳には、既にかつての輝きが蘇っていて、とてもそれを撫月の知る夜縋と同じものとは思えなかった。

「撫月」

「…………はい」

名前を呼ばれて、撫月はもう普段の凜とした態度を維持することができなかった。既にもう、そんな意地を保つ余裕など残っていない。これから終わりを待つばかりの彼女は、既に何もかもを諦めてしまっている。

「お前は、俺によく似てるよ」

「え…………？」

身に纏うもののない撫月にコートを羽織らせながら、希繫と視線を合わせようと腰を落とした。

思えばこの一年間、彼が積極的に撫月と視線を合わせることなどなかった。それは、蓬莱寺を抜けるタイミングや画策を見抜かれなかったためでもあったが、それ以上に彼自身

が撫月という人物自体を忌避していたからだ、今なら理解できる。

だが、今こうして真つ直ぐに撫月の目を見つめる希繫の瞳に、そんな「嘘」や「虚勢」は残っていないかった。

「お前は、あの日あの時、蓬萊寺から抜け出せなかった俺だ。姉さんを信じられず、その手を振り払っていたら……あるいは姉さんに置いて行かれたら、俺もお前のようになっていただろう。そう思うと、やっぱり俺たちはどこまでも兄妹だ。血の繋がりのつてのは、どう切つて刻んでも捨てられないものらしい」

「けれど……お兄様は救われた。お姉様や、お兄様を拾ったご家族によつて。そして多くの縁を結びながら、今こうして血の繋がりよりも遥かに強固な「縁」が、兄さんを繋いで離さない。それが命綱となつて、この世界がどれほど崩れ落ちても帰る手立てがあり、帰るべき場所がある。けれど……わたくしには、もう……」

「確かに。お前の名前が「誰かに繋がろうとする縁」だとするのなら、俺が自分に刻んだ名前は「誰でも繋がれる縁」だろう。だがな撫月、自然と繋がれる俺と違つて、お前の「縁」は自分から誰かに繋がろうとするものだ。最初は一方的かもしれないが、その「繋がろうとする意思」は受動的な俺よりもよっぽど強固に縁を結ぶ」

見ろ、と言つて希繫がこの肉に塗れた醜い世界の奥を指さすと、どこからかひらりと飛んできた一枚の羽根が撫月の手に乗つた。

朱色に煌めくその羽根は、色こそ違うが見慣れたサヨナキドリのものであった。

「お小夜……！」

「あいつは……小夜は、その身を化け物に墮としたお前を見てもなお、その忠義を尽くした。お前は愛されてたんだ。俺や姉さんですら見放したお前を、小夜だけは変わらさず愛してくれてたんだよ。お前がそれに気づけば……あいつは蓬萊寺を捨ててでもお前とどこまでも一緒に逃げてくれたんだ」

「あ、ああ……っ！ お小夜……お小夜お……っ！ わたくしは……わたくしはあつ！
お小夜お……！」

撫月が本当に欲しかったもの。それは家族。だがそれは血の繋がりにではなく——無条件に自分を愛してくれる『目には見えない何か』で繋がった家族。

そう、撫月が求めていたものと、希繫が手にしたものは同じだったのだ。婚代に拾われ、婚代によって広がった『絆フアミリイの家族』の輪を、彼女は自分の手で作り、広げようとしていた。

「撫月。お前がこれから先、蓬萊寺を捨てて無限キリなしに縁を繋ぎたいと願うなら、俺もお前と手を繋ごう。兄として、お前をどこまでも守って——いや、違うな。そうか、こういうことを言つて、俺は優芽をあんな風にしたのか……つたく、道理で逢依にも怒られるわけだ」

「……………？」

「兄として、俺はお前に寄り添おう。だが同時に、お前にも助けてもらいたい。これから先の未来に進むために、どうしてもお前の力を借りなきゃならない時が来る。だから、俺と一緒に来てくれ」

今、彼はいつかの未来で希繫が優芽にそう告げたように、自分が誰かを「守るもの」に——言い換えるなら誰かを守るための「犠牲者」になろうとした。

だが、その選択が作り出す未来があらゆる「絶望」の根幹だと彼は気付いた。そう、未来を救うのは英雄などではない。英雄とは、誰かのため、大義のための『犠牲者』なのである。だが彼らの進むべき未来に、犠牲者などあつてはならない。

犠牲者を尊び弔う気持ちと、犠牲を前提に作り上げられる未来は、決して同じではないのだ。

「撫月。俺が「妹」を殺さなくていいように……俺が「鬼」だけを殺せるように、手伝ってくれ」

希繫に差し伸べられた手を見て、撫月は思わず逡巡する。

ここまでずっと求め続けた手。だけど何度も自分の手を撥ね退け続けた手。何度も、何度も、どれだけ求めても自分を拒絶し続けた手が、今は自分を求めている。

この手を撥ね退けてやれば、あの時の自分の気持ちを、この兄に思い知らせてやれる。

そう思つて——、

「お兄さん……」

「……………」

「手を、繋いで……！」

「おう」

それでも、その手は月を撫でることを諦めきれなかった。

別離—ベリーヴメント—

ナツキレイダーの行動が停止して約30分。突如としてナツキレイダーの胸のクリスタルコアから放出された真紅の光の正体が何者かなど、その場に居た誰もが疑わなかった。

光が散ってその姿を露にしたのは、希繫きづなと彼のコートを着せられた撫月なつき——の、シルエットをした赤いエネルギーの結晶。そう、彼女の意思が既に憎しみや絶望を離れたとしても、彼女の肉体はナツキレイダーへと姿を変えた。既に、彼女の肉体は彼女のものではないのである。

「彼女は……撫月は、助けられなかったの?」
 「いいや。さすがに肉体を取り戻すことはできなかったが……肉体だけならどうにかなった」

希繫の腕の中で、その赤いシルエットは形を変え、徐々に見覚えのある「誰か」になっていく。そうして一定の姿に変化を終えると、ようやく「赤いシルエット」ではなく、一人の人物としてその容貌を現した。

「これは……きくな菊菜?」

「アバターの能力はあくまで「装着者の分身」しか作れないが、俺はエクレールの能力で何度か女の姿になってたからな。こっちの姿も「アバターの装着者」には違いないだろ？」

「なるほど、口八丁手八丁が得意なオマエらしい抜け道だ」

しかし、これはあくまで咄嗟の思いつきによるものだ。アバターの能力によって作り出された肉体ということは、撫月の肉体を維持するために、希繫は彼女が死ぬまでアバターを維持し続けなければならないということでもある。

最も理想的なのは、撫月自身がアバターに適合して自分の力で体を維持することだが、現時点ではアバターはあまり撫月に対して好意的ではない。

だが、それは逢依にとつてはある意味で好都合でもあった。何かと無茶をしやすい希繫を自制させる意味で、自身の負傷や危険がそのまま撫月の肉体の意地に直結する現状では、彼は無茶をしない。

あとは残ったナツキレイダーの肉体を処理すれば——と、そう思った瞬間の出来事であつた。

「——ッ！　なんだこの揺れ……地震か?！」

「いいえ！　あれを見てください！」

優芽の指差す先を見た逢依と悠生は、即座に残りのレイドリベンジャーズに回避命令

を出した。既に負傷しているメンバーはもちろん、一定の戦力を持つ少数の人員を除いて、大半のメンバーを撤退させた。

単なる巨大なレイダーギアというだけなら、むしろ残った全人員で総攻撃を仕掛ければどうにかなったかもしれない。だが、目の前に聳える「それ」は、そんな生半可なものではなかった。

「レイダーギアじゃ、ない……!?!」

「いや、おそらく中心核として存在するのはレイダーギアとしての肉体だ。だがリライズに登録した撫月の感情「執着」^{なつき}が暴走して「他の全ての生命体が持つ感情にアクセスする」性質を持つて暴走してる……!?!」

「他者にアクセスして悪感情を吸収するブラックホールのような「懐き」の性質と、内包する悪感情を周囲にまき散らす太陽のような「レイダーギア」の性質を兼ね備えてるってわけか……」

「悪感情を吸収する、とだけ言えば聞こえはいいけれど、そもそもヒトの心は善も悪も兼ね備えて成立しているわ。もしもヒトの心から全ての悪意を奪い取られてしまえば、それはもう「ヒト」とは呼べない」

ナツキレイダー「だった」ものは、その形状を醜く変貌させ、やがて完全なる真球状の物体——黒い太陽のような形へと変化した。それは先程までのキヅナコクーンにも

似ているが、まるで神々しさすら放つていたキツナコクーンとは真逆に、この黒い球体からは純粹な悪意だけが感じられる。

だが最も異様と言えたのは、その「悪意」が目の中の希繫たちに——否、そもそも誰に対しても向けられていないこと。悪意とは、ある程度の指向性を持つ。むしろ、指向性のない悪意というものは逢依が言う「本質的な悪意」のみであり、表面化しないものしか存在しない。

にもかかわらず、目の前の「それ」は間違いなく指向性のない悪意を表面化させていた。それは即ち、今こうしている間にも、この球体は世界中の全生命にアクセスし、その本質的な悪意を吸収し続けているということ。

「……逢依、悪いが撫月を連れて撤退してくれ。全体の作戦指揮をするお前がここで負傷するのはマズい。俺も、折を見て一時撤退するが、まずは周囲の救護が先だ。俺のスピードなら、今この場の誰よりも速くそれができる」

「わかった。優芽ちゃん是我的護衛として同じく撤退。悠生はここで時間を稼いで、希繫が負傷者を回収したら一緒に退がって」

「あいよ。本当ならこんなブツ倒し甲斐のありそうなヤツはオレだけで相手してーんだが……見る限りコイツ、レイダー以上に「悪感情の塊」すぎて実体がねーからな。さすがのオレも、殴れねーんじやどうにもなんねーわ」

「撫月さんはあたしが背負います。お兄さん、大郷先輩、どうかお気をつけて」
直後、それぞれが散開すると同時に、とうとう球体が活発に行動を始めた。

球体から伸びる無数の触手が逃げ遅れた蓬萊寺たちの体を貫き、負の感情を吸収する。球体の持つ「他者にアクセスして悪感情を奪う」性質とは異なり、物理的な接触を必要とするこの吸収方法は、おそらく球体にとって最も素早く、効率的に悪感情を奪えるのだろう。しかし、奪われるのは感情だけではない。

肉体を貫く触手は、霧のように曖昧な本体から伸びた一部でありつつも、明確な実体を持っている。当然、そんな触手が体を貫けば肉体は損傷する。

「純血でない蓬萊寺は全て明確な『殺意』を買われて成り上がった殺人鬼……。あいつにとっては恰好の餌ってわけか……ッ！」

希繫は負傷した者を敵・味方の区別なく回収し、安全圏——と呼ぶにはあまりにも心許ない距離ではあるが、少なくとも世挽山の麓まで即座に運ぶも、あの触手の有効範囲が測れない今、この措置に意味があるかどうかも怪しい。

山の上り下りなど希繫にとっては一跳び、ほんの一瞬で済むことでありながら、それでもその「一瞬」はあの球体が「餌」を捕えるには十分すぎる時間なのか、二・三度の往復を繰り返すごとに確実に一人・二人ほどの犠牲者が生まれてしまっている。

「希繫ア！」

「……………」

「蓬萊寺は捨て置き！ 負傷の度合いに関係なく、レイドリベンジャーズの保護が優先だ！」

「けど…………ツ！」

「敵を見捨てろつつつてんじゃねー！ だがこの状況だ、優先順位はつけなきゃならねーだろ！ 今、ここに残ってんのは身動きのとれねー怪我人か、この黒いデカブツを相手取れる人員か、死人だ！ だが蓬萊寺はこつちと連携を取る気がまるでねーし、ハッキリ言つて邪魔だ！ なら少しでもこの黒い玉を相手できる人員は確保すべきだ！」

既にこの球体と戦つて生き残れそうにないレイドリベンジャーズは撤退済みか、あるいはこの庭のあちらこちらに横たわり息を絶やしている。ならば、連携を取るどころか隙を見て攻撃を仕掛けようとする蓬萊寺は、単純な敵以上に厄介な意思を持った地雷のようなもの。

それならば、この球体と対峙して生き残っているメンバーを少しでも確保しておきたいというのは、レイドリベンジャーズ永岑支部第一部隊を預かる将として真つ当な判断だろう。しかし、それでも負傷者を放置して味方を優先的に救助することに躊躇いそうになる希繫だったが――。

「今は押し問答してる暇はねーんだよ！ さつさとしろ希繫！ 躊躇えば躊躇った分だけ、そのツケをここにいるヤツらの命で払うことになる！ お前が蓬莱寺も救いてーんなら！ さつさと味方全員回収して、そこから好きにしろ！」

現状、最もこの前線である球体の猛攻を受けているのは悠生だ。蓬莱寺の攻撃を全ていなしながら、実体のない球体に対して「パワー」ではなく「炎」で迎撃している。やはり、球体の核となる霧状の部分も、実体のある触手も、元を正せば「感情」であることには違いない。

ならば、ユナイトギアのギア特性によって作られた「炎」は「正の感情」の結晶であるため、あの触手にダメージを与えられるという悠生の予測は間違っではないなかった。それでも、やはり本体に与えるダメージがあまりにも微々としている。

「……もう少し、堪えてくれ！」

誰に向けたのか、それは希繫自身もわかっていないだろう。

それでも、この球体への対抗手段として、現時点で真つ当に戦闘を維持できている人員の確保という判断は間違いではない。むしろ、彼らを欠いた状態で後々のリベンジ戦を挑むのはあまりにも危険が伴う。

加えて、今この状況でレイドリベンジャーズに対して球体が積極的な行動をとらないのは、ユナイトギアという「正の感情」の結晶が表面化していることで「内在する負の

感情」の感知が遅れているためだろう。つまり、この球体の攻略にユナイトギアと装着者は不可欠なのである。

悠生を除いた全てのレイドリベンジャーズの回収に要した時間はわずか2分にも及ばなかった。しかし、それでも有効な戦力を欠けば欠くほどに、現場に残された者の負傷は加速していった。

いくら悠生がレイドリベンジャーズにおいて「最強」の「英雄」だとしても、この絶对的な悪意の結晶体と、不意を衝くように茶々を入れる蓬莱寺の攻撃を掻い潜りながら仲間を守ることは容易ではない。

希繫が生き残っている全てのレイドリベンジャーズを回収した時点で、先程の押し問答から二名の死者を出してしまった。あの時、自分が迷わず悠生の言うことを聞いていれば生きて回収できたかもしれない命だった。

「……後悔してる暇はない、まずは負傷者の回収だ」

扉に凭れ掛かるように脱力して目を閉ざしている蓬莱寺に近付き、その呼吸を確かめると、まだ息をしている様子だった。

希繫はすぐさまその蓬莱寺の体を抱えて駆け出そうと――、

「捕、まえ、たあ……ッ！」

「しま……ッ！」

「デカブツウ！ 貴様の欲しい「憎悪」ならここに有るぞオ!!」

無防備に近付き、羽交い絞めにされた希繫は、すぐさま抜け出そうとするが彼の貧弱なパワーではそれも適わず……。

「ごめん、みんな……!」

事態に気付いた悠生だが、既に球体の伸ばした触手は希繫の目の前まで迫り……、

「お兄様あッ!」

「……な、つき……!?!」

彼の目の前に現れた撫月の体を貫いた。

媒体—メディア—

家族が欲しかった。どんな自分でも受け入れて抱きしめてくれる家族が欲しかった。抱きしめられて家族の愛に触れたかった。

色んな苦難があった。やってはならないこともした。人として償いきれない罪を犯し、鬼にも成り下がった。それでも、兄はそんな自分のことを慕い傍らに在り続ける小鳥の存在に気付かせてくれた。

だから、これはほんの恩返し。身を纏う真つ黒な衣が大好きな兄を守ってくれるのなら、兄の感情を借りて作られたこの身体とこの黒衣を返そうと、「そうする」ことを躊躇はしなかった。

「お兄……様あ……っ！」

最期の力を振り絞って放った針が希繫きづなを拘束する男の脳天を打ち貫き、希繫はすぐさま撫月なつきへと駆け寄った。あんなにも憎かった血と同じものを通わせる妹を抱き留め、彼は必死にその名を呼び続ける。

「撫月！ 撫月ッ！ 目を覚ませ！ 生きることから目を背けるなッ！」

「生きる」ことから……ふふつ、いいえお兄様、わたくしは目を逸らしてなんていませんよ

……

「撫月……！」

「生きる」とは、死と向き合うこと。死を認め、怖れ、受け入れること……。けれどそれは、諦めなどではない……。そんなこと、お兄様であればおわかりでしょう……。？」

死と向き合うこと。死を真つ向から認識し、正しく恐怖し、そこから逃げ出すことなく受け入れること。その意味は、蓬萊寺という「命を奪う者」の血に抗い続けてきた希繫だからこそすぐに理解できた。

死と向き合い、受け入れることとは「諦める」ことではなく、死そのものから目を背けることなく、逃げることなく、それを乗り越えた先の未来へと「向かおうとする」と。その未来が、目の前にある「死」よりも輝かしいものであることを信じて。

「お兄様……。わたくしはこの「死」を受け入れます……。けれど、わたくしの「死」は決して無駄ではないと信じています……。この「死」が、お兄様の命という「希望」を繋いだのだと、自惚れてもよいのなら……」

「……ッ！ ああ、もちろんだ！ お前は間違いなく俺の命を救ってくれた！ お前の決死の行動は、絶対に俺や俺の家族、仲間……。この世界そのものをも救う「希望」のひとつへと繋がる！ 俺が繋いでやる！ だって俺は——！」

「希望を繋ぐキズナ……。本当に、お兄様に相応しい名前です……。夜に縋ろうとする月

などでなく、星々の軌跡を繋ぐ月のような……。そんなお兄様の胸の中で眠れるだなんて、なんて贅沢な妹なのでしょう……」

足元からゆっくりと、少しずつ撫月の体が赤い光の粒子へと変わっていく。これが最期なのだと、どちらが言うまでもなかった。

「お兄様、出来ない妹の最期の願いです。どうか……お小夜をお願いします……。あの子を守ってあげてく……」

「ああ、約束しよう。彼女だけに苦難を与えたりなんかしない。罪滅ぼしは、俺も一緒にしてみせる」

「そして、もうひとつ……」

どうか——そう言う彼女はもう瞼さえ閉じていた。

「どうか、私のことを忘れないで……。家族を求めて足掻いた、あなたのため一人の妹のことを……」

「当然だ。たとえ死んだって忘れてたりしない。お前は……『桐梨撫月』きりなしなつきは、俺のため一人の妹だ……!」

その言葉を、彼女は聞いて逝けただろうか。まるで舞い散る花びらのように散っていった赤い光は、希繫の体へと消えていき、彼の心に染みていく。

僅かな逡巡の後、希繫は白露しろつるぎとの装身を解除し、彼女に逢依あと合流するように命じた。

そして、白露が駆けていく姿を見送ると、反転、悠生と交戦中の「球体」を睨みつけた。
「リミットブレイクだ、エクレール」

『ディアマスターは今日すでにリミットブレイクを発動しています。それだけでも並のレイドリベンジャーズなら感情の疲弊で茫然自失になってもおかしくはありませんが、加えて七つのユニティバレットの同時展開で、実質的にはリミットブレイク2回分の「感情の過剰摘出」エクシードチャージを敢行した状態です。これ以上は……」

「二回できたんなら三回目もできるだろ。俺の感情が、俺の心がどうなったって構わない。今日に使える分がもう無いなら、明日や明後日の心を使い果たしてもいい！ 今戦わなきゃ……撫月が俺に繋いでくれた希望のバトンを、光差す未来に繋がなきゃいけないんだ！」

だから、と希繫は言う。

「エクレール！ もう一度だけリミットブレイクさせてくれ！ 俺の心がどうなったって構わない！ 撫月の想いを、この星のみんなの未来を——守りたいんだ!!」

『……もう一度だけですよ』

『正気ですかエクレール!? 既にマスターは心も体も満身創痍！ こんな状態ではリミットブレイクどころか戦闘行為自体不可能です!』

『あなたもわかっているはずですが、アバター。こうなったディアマスターに、真つ当な理

屈なんて通用しませんよ。この人はやると言ったらやる人です」

『……っ、ならいつそ僕も一緒にリミットブレイクしてもらいますよマスター。この状況、あんな敵を前に、たかだかりミットブレイク一回でどうにかなるとは思えない。3回目の限界突破なら、4回だって大して変わらないでしょうし!』

それでこそ俺のギアだ、と軽口のような称賛を贈ると、希繫はすぐさま姿勢を整えた。アバターも言う通り、既に希繫は心も体も満身創痍。リミットブレイクはおろか、まともな戦闘行動すら継続不能な状態。普通に考えれば今日だけで実質的に「3・4度目のリミットブレイク」を同時に行おうとする彼の決意は蛮勇にすら値しない無謀だ。

それでも彼の瞳には真紅の煌めきがその眩さを増していた。体と心に残るエネルギーは既にガス欠を起こしているのに、見えない何かを彼を「前へ」と進ませようとする。まだ走れるはずだ、と言わんとするマシンのように、彼の戦意は雷鳴のようなエンジン音を立てていた。

「おおおおおおおオオオツ!!」

『第四号ユナイトギア、エクレール』

『第五五五号ユナイトギア、アバター』

——リミットブレイク・オーバースロットルツ!

果たしてそれは人の姿であつただらうか。その額に戴く雷霆の如きそれは、まるで天を衝かんとする鬼のツノのようではなかつたか。

両脚を覆うエクレールの形状は禍々しく変貌し、その左腕に纏うアバターは貧弱な彼の上半身のシルエットをアンバランスにさせるほど巨大化している。何より、その顔を覆う真つ赤な仮面はまさしく——蓬萊寺の証である『鬼の仮面』のようではないだらうか。

「ぜえええあああああああああああああッ!!」

「希繫!?! オマエ、その姿は……!」

球体の攻撃を捌いていた悠生の横を駆け抜けた希繫は、その圧倒的なスピードを存分に使つて球体へと接近、物理攻撃の効く触手を全て切断し、霧状の球体部に対してありつただけの感情を込めた雷撃を叩き込む。

「お前が撫月から「他者にアクセスする」性質を引き継いだということは、本来その性質を持つていたのは撫月つてことだろ!　そしてそれを可能にしているのが「懐き」であるとするのなら、それと同じことが「継」である俺にもできるはずだ!」

愛が「横に誰かがいれば」強くなるように。勇気が「後ろに誰かがいれば」強くなるように。憧れが「前に誰かがいれば」強くなるように。継と懐きは「周りに誰かがいれ

ば」強くなれる。一方通行か相互に向け合ったものかの違いはあれども、継と懐きは非常に近い感情なのである。

そしてこの場合における「周りに誰かがいる」というのは、言い換えてしまえば「自分が中心にいる」という意味でもある。世界中のあらゆる人の中心になれる感情。それが「継」と「懐き」だとするのなら、あの球体が撫月から受け継いだ「他者にアクセスする性質」は、同じことを希繫にもできるという証左ではないか。

だが、この球体が「悪意を吸収する」という性質はレイダーによるものであつて、「他者にアクセスする性質」＋「悪意を貪る性質」の結果が、「世界中の生命の悪意を貪る力」へと変化しているのである。故に、ただの人間である希繫が他者にアクセスできたとしても、なんの力も得ることはできないのではないか、悠生はそう思っていた。

しかしそれは違う。

「だが撫月の力と俺の力、あまりに似通った性質じゃあるが、たったひとつだけ明確な違いがある！ それは撫月の「懐き」という力は、感情のベクトルは相手にだけ向いている。「一方的な性質」まで再現してることだ！ だからこの黒い玉はレイダーの力で悪意を奪つてるんだ！」

継とは「互いに繋がりが合おうとする性質」を持つ。希繫からだけでなく、アクセスされた方もその継を辿って希繫に「与える」ことができる。故に——！

「アバター!!」

『了解。世界中にアバターをばらまきます』

「エクレール!!」

『了解。世界中の電子ネットワークにアクセスします』

希繫が見出した最後の希望。それは自らの持つ性質やユナイトギアではなく、撫月に渡されたバトンを世界そのものに託す——「メディア」であった。

降雷—サンダーボルト—

これまでもしばしば「負の感情」のことを「悪感情」と表現してきたせいで誤解されるが、そもそも「正の感情」とは「人類を行動的にする感情」であり、「負の感情」とは「人類を停滞的にさせる感情」であつて、決して「負」だからといって「悪」というわけではない。これは表現上の利便性からそう称されるだけである。

元より人とは、生きるために「正の感情」を途絶えさせない動物や植物とは違い、その種類や比重に多少の差異はあれども必ず正負の両方を心に抱えて生きている。そして、それらの正負のバランスを取り合つて、感情と感情がぶつかり合つて「結果」として行動的になつたり停滞的になつたりする。

だが球体はそんな人々から「負」を奪い、「正」だけを残す。「結果」がどんなものになれども、人々は「行動的になる」ことへと躊躇を失う。言葉だけ聞けば聞こえはいいかもしれないが、負の感情はこうした「根柢のない行動」に歯止めをかけるストッパーとして非常に重要なのである。

また「行動的にする感情」というのは、人としての倫理観を前提にオブラートに包んだ表現である。もっと直接的な言い方をすれば「思考よりも行動を優先する感情」とい

う意味であり、「停滞的な感情」というのは「行動よりも思考・思案を優先する感情」ということになる。

つまり、本来ながら憚れるべき欲望を、倫理という名の「思考」をスキップして行動に移してしまふ。例として、憎悪はだいたいの場合においてマイナスなイメージを持ち、行動的なようにも見えるが、その実「憎悪」が行動を誘発することは稀である。

なぜなら憎悪は「溜め込む」という一種の停滞を引き起こすからだ。この溜め込んだエネルギーを発散させ、行動的にさせているのは「憎悪」ではなく「怒り」であり、発散だけなので溜め込めず、一時的に爆発的なエネルギーを放出するが、そのエネルギーは継続されない。

このように、人が定めた『人道的・倫理的な考えや行い』を保つためには、正負の感情は「どちらもある」ことが重要なのである。

希繫きづなの提案した「今生きる全ての人類にアクセスして正の感情を与えてもらう」という作戦は、先んじて撤退し、スヴィルカーニイを通じてモニタリングしていた全レイドリベンジャーズの耳に入った。

確かに、彼の言うことが確かなら、撫月なつきが持つ「懐き」の性質がああ負の感情の結晶体、作戦便宜名『デミス・マリス・マキナ』のエネルギーを無限に供給させている元凶であるならば、無尽蔵の再生能力もまたそれらのエネルギーを利用している可能性が高

い。

そして、撫月がそうしたように、「懐き」と類似した性質を持つ「継」のエネルギーをユナイトギアの運用に用いている彼ならば、同じく「あらゆる生命と繋がれる」性質を持ち合わせているということにもなる。

しかし、本部はそんな彼の提案に対して及び腰であった。彼の言う通り、確かに希繋なら世界中の誰もと「アクセス」することが可能だろう。そこについて疑っているわけではなかった。しかし、デミス・マリス・マキナによつて負の感情を奪われた今の人類は、真つ当な思考を保ちきれていない。

現時点でデミス・マリス・マキナの影響を逃れられているのは、ユナイトギアによつて正の感情が表面化している装着者と、ギアを用いなくとも正の感情が表面化するほど強靱な精神力と真つ当な正義感を持つ極々限られた人間だけなのである。

「今はまだ大郷隊員と桐梨隊員の二名で食い止められています、そもそも彼らは……桐梨隊員は対人戦闘以外に限られますが、どちらも我らレイドリベンジャーズの最大戦力です。その彼らが被害の抑制に留まるという時点で、デミス・マリス・マキナの脅威性は疑うべくもありません！」

これまで『最弱のレイドリベンジャーズ』と称され続けた希繋であったが、それは彼の経歴や戦歴を知らない職員による「マイナス」の意味と、対峙した相手を決して傷つ

けない彼のスタンスを知っている職員による「プラス」の意味の両方が込められていて、そもそも彼は決して「一番弱い」という意味の「最弱」ではない。

そもそも高校の卒業と同時に就職して今に至るまで、いくつもの死線を潜り抜けてなお生き残り、数えきれないほどのレイダーたちから市民を守ってきた彼が「弱い」わけがなく、彼は「人を傷つけられない」「人に対する攻撃にあまりにも消極的」だからこそ『最弱』なのである。

そして、悠生や逢依という優秀なレイドリベンジャーズに近い者として注目を受けていた彼は、レイドリベンジャーズの実力者の間では『リデアに追い縋った者』『悠生が仕留めきれなかった者』という点で評価され、本人はおろかほとんどの平職員の与り知らぬところで悠生やリデアにも並ぶほどの評価を受けていた。

「桐梨隊員の意見は確かに筋が通っています。実際に可能かどうかはやってみなければわかりませんが、少なくとも現在の彼がエクレール・リュミエールとアバターを稼働させている登録感情は『希望』から『継』に変更されていますし、そうであるなら桐梨隊員とそのギアなら理論上は可能です」

「現時点で装着者が決まっているユナイトギアの中から、稼働中のギアが全体の何パーセントか確かめろ」

「……結果出ました。ユナイトギア全機から「登録している装着者」が存在するものに限

れば、およそ86%……残る14%は、おそらく蓬萊寺戦で亡くなられているか、あるいは装着が間に合わず……」

「ならばその内、レイドリベンジャーズに所属している装着者は？」

「62パーセントです。残る27%がORBで救助活動のため全機稼働、9%がいくつかのELBシステム研究施設で管理者が自衛のため稼働中。2%は行方不明となっているギアです。稼働中であることは間違いありませんが、どこで誰が使用しているかはわかりません」

「『英雄』と『最弱』でどこまで耐えられる？」

「桐梨隊員の使用しているギアですが、既に彼はリミットブレイクを行い、加えて七つのユニティバレットの同時展開をしています。後者は時間制限はありませんが、維持コストとしてリミットブレイク相当のエモーションナルエナジーを要求されます」

「つまり、今の彼は既にリミットブレイク二回分の感情を消費して、二機のギアをリミットブレイクさせているということか……。確かに彼はレイドリベンジャーズの中でも特に感情豊かな戦士だったからな。逆に言えば、彼でなければとつくに心が壊れているはずだ」

「なんにせよ、長くは持ちません。大郷隊員がリミットブレイクすれば多少は時間を稼げるかもしれませんが、彼のリミットブレイクは周囲への被害が大きすぎますし、彼で

もダメだった場合、我々は最大戦力の最大火力を失った状態で再度リミットブレイク可能になるまでの24時間を耐え続けなければなりません」

オペレーターの分析結果は、今の状況がどれだけ二人に——もつと言えば人類そのものにとつて驚異的な脅威であるかを露骨に物語っていた。

加えて、誰もが口にはしなかったが、希繫の限界をいくつも超えた『リミットブレイク・オーバースロットル』は、たとえエモーションナルエンジンの再充填に必要な「24時間」を経過したとしても、彼の体とギアが「次のリミットブレイク」に耐えられる保証がないことを察していた。

だからこそ、なおさら本部は『悠生ジョーのリミットブレイクカー』を切るタイミングを決めあぐねているのだろう。リミットブレイク・オーバースロットルは間違いなく『奇跡のりミットブレイク』と称するに値するし、戦力の逐次投入は悪手であるが、これらを「耐え凌がれた後」の保証がないことへの不安を振り切れないのだ。

今すぐ切り札を切って決着に持ち込むべきだ、という者。相手の力の限界がわからな以上はオーバースロットルの限界が訪れた後の保険にすべきだ、という者。そのどちらにも理屈は通っている。どれほどの議論の末に、彼らをまとめる一人の人物がとうとう決断を下した。

「本来なら、戦力の逐次投入は悪手とされるべきだが、今回の敵はデミス・マリス・マキ

ナという神話級災害。人と人の戦争やレイダーとの戦闘とは異なり、力の底はおろか一端すら見えていない今の状況では、全ての戦力を使い切つて仕留めきれない可能性も十分にある」

「では……」

「桐梨・大郷の両名は桐梨隊員のオーバー스로ットルのタイムオーバーと同時に撤退。24時間で可能な限りのデータを集め、桐梨隊員の提案を元に対抗策を実行に移す。人員・資材を惜しむな、あらゆる手段とアイデアを出し切つてこの神話級災害を乗り越えろ。作戦名は……」

——オペレーション・リベンジ。



「希繫！ 聞いたな！」

「タイムオーバーと同時に撤退、か……！ エクレール、アバター、反応は？」

『世界中のあらゆる電子ネットワークを通じて呼びかけていますが、ほとんどなんの反応もありません』

『こちらには全世界に展開した分身を用いて口頭での説得を呼びかけていますが、まともな会話すら成立しません。もはや彼らはただの暴徒……いえ、本能と行動力だけで暴れる『獣』です』

希繫はこの危機的状況の突破法として、電子ネットワークでの書き込みと口頭による現状の説明・協力の要請を行おうとしていた。しかし、思考を司る「負の感情」を奪われた人々は、行動を司る「正の感情」だけで動くようになってしまっていた。

思考なき行動とは、単なる欲望と本能に身を任せたテロ行為となんら変わらない。しかもそれを取り締まるべき組織もまた人によって構築されているため、取り締まりという義務はおろか組織としての体裁すら保てずアバターの言う『獣』へと堕ちていた。

「くそっ……！　せっかく撫月が俺に希望を繋いでくれたのに、俺は何も報いることができないのか……！」

「バカ言え！　今ここでオマエが死んじまったら、それこそ撫月は無駄死にだ！　大事なのはあいつをぶっ潰して、その向こうにある未来ってヤツを取り戻すことだろーが！　逃げることの大切さ、それがわかんねーオマエじゃないだろー！」

「……ッ、わかってる！　悔しいが……今逃げるのが未来への希望に繋がるなら、そうするしかない！　悠生……悪いが後を任せるぞ！」

そう言った希繫は、アバターを纏った左腕で触手を掴むと、「赤」のユニティバレット

を展開、地面に大きなクレーターを作るほどの力で跳躍すると、攻撃加速用のブースターを推進力に転用、最大出力で空高く上っていく。

本体となる「霧」のような実体のない部分はどれだけ攻撃しようとするり抜けてしまうため、触れることができないが、この触手はここに至るまでも見た通り物理的な影響を与えている。そして、それを動かしているのがデミス・マリス・マキナであるのなら、触手が引つ張られれば当然その本体もそれに引き摺られていく。

「エクレール！ 俺たちのありつたけを叩き込むぞ！」

『どこまでもお付き合いますッ！』

本来なら雷雲を呼び出して叩き落す必要があるが、リミットブレイクさえも超えた今の希繫とエクレールなら、自然界の「それ」を遥かに凌駕する威力のそれを叩き込める。薄れていく空気が保たれる大気圏ギリギリで手を離れた希繫は、自らを含めゆつくりと降下していくデミス・マリス・マキナを睨みつけながら、雲放電を起こしている周囲の雷雲から集められる限りの電気を掻き集め、自身の放つそれに加えていく。

「どうせ復活するだろうが、やられっぱなしは撫月に顔向けならない。だからせめて八つ当たりくらいはさせてもらおうぞッ！」

『——いけます』

真つ赤に輝く電気の球体はやがて荷電粒子気体へと昇華、真紅のプラズマとなって—

し、

『天禍アツ！ 降オ、雷イイ……ツ、砲オオオオオオオオオオツ！』

デミス・マリス・マキナを呑み込むほどの光の奔流となる。

桐梨逢依—アフエクシヨン—

——希繫きづなの放った天禍・降雷砲によつてデミス・マリス・マキナが行動停止に陥つてから三時間。

ほとんど無限にも等しいエネルギーの供給を受けているとはいえ、降雷砲による損傷率と再生スピードから計測された結果、次にデミス・マリス・マキナが積極的な活動を起こすまで12時間の猶予が与えられた。

当初の予定では、デミス・マリス・マキナの行動を止められないとしても24時間は物的被害をある程度まで度外視して人命救助とデータ収集を優先しようとしていたこともあつて、希繫の稼いだノーリスクの12時間はレイドリベンジャーズの中でも大きく評価された。

しかし、だとしてもその代償は小さくないものであつた。希繫は実質的にリミットブレイク4回分のエモーションナルエナジーを燃やし尽くしたことで、言葉通り限界を突破してしまい、感情こころの枯渇状態に陥つていた。

「このまま……せめてデミス・マリス・マキナとの戦いが終わるまでは、眠っていた方がお父さまのためになるのではないでしょうか……」

この一年間、父親が蓬萊寺で受けた苦痛や、目覚めてすぐに戦いに身を投じ、そして理由はどうかあれ血を分けた妹を喪うことになったことを思えば、白露しろろの口からそんな言葉が洩れるのも当然だったのかもしれない。

彼は——桐梨希繫は、後にどのようなように変化するにせよ、確かに元々は蓬萊寺の当主となるべく生まれた者であつたのかもしれない。しかし、仮に彼が蓬萊寺であつたとしても、さらにさかのぼってしまえば単なる一人の人間なのである。

苦しいものは苦しいし、つらいものはつらい。泣きたいこともあれば、昂る激情のままに暴れ散らしてしまいたくなることだって、皆無とは言いきれない。むしろ、彼はそういういたた激情を「セーブする」のではなく、「コントロールする」のが上手いからこそ、莫大な感情エネルギーを秘めていたのだ。

しかし今この時ばかりは、その感情が彼自身を追い込んでしまわないかと、白露はとも心配そうにしながら傍へと寄り添った。

「……私も、できることならそうしたい。全てが終わるまで眠らせて、起きたらみんなの笑顔で迎えてあげたい。……だけど、だけどね白露ちゃん。私たちの大好きな希繫つて、自分の身が危険だからって身の回りで困つてたり傷付いてたりする人を放つて寝ていられるような人間だったかしら？」

「……………」

意地悪な言い方をしてしまった、という自覚は逢依にもあるのだろうか。しかし、それは果たして白露を言い聞かせる言葉であつたのだろうか。あるいは、自分を言い聞かせるためのものではなかつたか。

未だに目蓋を閉じる夫の手を握りながらも、彼女は縋るように俯くことだけはしなかつた。まつすぐに、目蓋の向こうの赤い瞳を見つめていた。

「私の愛する希繫なら、きつとそうじゃないわ。今もし自分にできることがあるなら、そのためにちよつとおバカなくらい必死になる。それが、私が信じた希繫らしい希繫だと思ふから」

「わたしは、そうならない未来のために、この時代に來ました。だから今のお父さまを戦場に送り出すような現状を、看過したくはありません。……ですが、わたしがどんなに止めても、お父さまはきつと止まつてはくれません。わたしの大好きなお父さまは、そういうお父さまですから」

希繫にとつて何よりも守りたいものは、愛する妻と二人の子供に他ならない。彼女たちのためにできることなら、たとえどんなに自分を投げ出してでもそれを成し遂げるだろう。

しかし少なくとも、そのために他の大切な誰かを犠牲にすることはできない。大切な人を守るために大切な誰かを犠牲にすれば、それはもはや桐梨希繫ではなくなつてしま

うのだ。

もう決して「鬼」にはならない。鬼ではなく——鬼の力を受け入れただけの「人」として、彼はその身をあまねく全ての命に捧ぐのだろう。

「……白露ちゃん。ここまで本当にありがとう。あなたが一緒に居てくれなければ、希繫は帰ってきてはくれなかったと思う。けれど、あなたは先に婚代さんのところに戻りなさい。そしてもしもの時は、霧久や絆ファミリーの家族のみんなを守ってあげてほしい」

「そんなー！ いやですー！ お父さまとお母さまを置いて戻るだなんて……わたしはお父さまとお母さまを守るためにこの時代に来たんです！ 今ここで共に戦わなければ、わたしはいつたいたいなんのためにここにいますか！」

「生きるためよー！」

普段の穏やかさや冷静さなどまったく感じさせないほどに、力強く白露の肩を掴み、逢依は叫ぶように声を荒げた。

紫色の瞳が、まるで抑えきれない激情が洩れ出るように光る。

「生きるためよ……」。白露ちゃんが生まれ、育ち、シンクロナイザーと共にこの時代に来たのは、あなたがあなたとして生きるためよ。死ぬかもしれない戦いに臨むためなんかじゃなく」

「お母さま……」

「シンクロナイザーは戦う誰かを助けるためのギア。自分ひとりでは本領は発揮できない。でもそれを私があなたに託したということは、きっともうひとつの未来の私は、あなたに生きてほしかったのよ。幸せと平和がまだ残る時代で、隣に立つ人のために憂う気持ちを持つような誰かと穏やかに生きてほしいから。その子は……シンクロナイザーは戦うためのギアじゃない！ その時代のその世界を生きる誰かに「独りじゃない」と伝えるためのギアなのよ！」

白露はシンクロナイザーをもうひとつの未来の逢依から託され、それを父と母を守るために振るうことこそ自分に課せられた「使命」なのだと思っていた。

この力を守るための力であって、争いに勝利するための力ではないことは理解していた。だが、他の誰かに頼らなければ本領を發揮できないシンクロナイザーの能力には「どうしてもっと直接的に父と母を守る力をくれなかったのか」と思わなかったと言えば嘘になる。

シンクロナイザーの力のおかげで窮地を脱したこともあったし、シンクロナイザーによる装身能力は希繫の戦いを強く支えてくれた。それでも、できれば「共に戦う」のではなく「代わりに戦う」力がほしかった。父と母には、もう戦って傷付いてほしくはなかった。

だが———それに理由があるとするのなら、それはそもそもが「戦い」とは関係のない

ところにあるはずだと逢依は言う。

自分だけではどうにもならないギア。

それは言い換えるのなら「共に生きる」ためのギア。

隣に立つ人のために憂う気持ちを持つような誰か。そう聞いて、白露の脳裏をよぎったのは一人の少年の微笑みであった。

彼は今頃どうしているだろうか。デミス・マリス・マキナの「悪感情吸収能力」による影響で、彼もまた倒れてはいないだろうか。そんな思いが心の奥でぼつぼつと熱を灯す。

「白露ちゃんは私と希繫の子供だからわかっているとと思うけれど……継とは「周囲の誰かとの繋がり」によって力を増すもの。そして愛とは「隣に立つ誰かとの繋がり」によって力を増すもの。でも白露ちゃん、あなたはその両方であって、そのどちらでもないわ」「えっ……う？」

「あなたは「希望」なの。希望は自ら輝くもの。小さく、微かで、弱々しい光だけ……決して絶えることのない星の光のように静かにそこにあるもの。もしもあなたが、隣に立つ誰かや周囲を囲む誰かと繋がることができれば……それは星座となって「ただの光」が「意味のある光」となるのよ」

だから、とひと呼吸おいて。

「あなたを……希望を絶やすわけにはいかない。子供は大人の姿を見て育つものだから、大人は子供の前じゃカッコよくいなくちゃいけないの。ましてそれが親なら……子供は命と未来を守れない親なんて、世界で一番カッコ悪くて情けないわ！」

そう言つて、逢依は白露を抱きしめた。

もしもの時、この子の未来を見守つてあげられなくなるかもしれない。この子が進むべき道を照らすことも、導いてあげることもしれないかもしれない。だけどそんな時、少なくとも白露は自分と希繫にとつて何にも代えられない大切な存在だったのだと、何よりも愛していたのだと思ひ出せるように、強く強く抱きしめた。

「……愛してるわ、白露ちゃん。でもだからこそお願い。私と希繫が愛するあなたを守らせてほしい。そして同時に、私たちが愛した家族を守ってほしい。少なくとも今の私たちには、それができないから……」

白露はもう、溢れる大粒の涙をこらえることもできず泣いた。もしかすれば、これが彼女にとつて二度目の「両親の最期」になるかもしれない。それがわかつていながら、逢依は幼いこの子の手を引いてこの戦場を逃げ出すことはしなかった。

確かにこの状況は人類にとつて絶望的。デミス・マリス・マキナの力は、今戦える全ての人類の力を結集させてもようやく拮抗に値するかどうかというところ。それでも、彼女はあの幼い体躯でありながらも白露にとつては「母」であり「大人」であつたのだ。

親は子供を守るためになら他の何が敵になっても味方で居続けてくれる「カッコいい存在」でなければならぬ。大人は子供を導くためになら正しい道も間違つた道も示すことのできる「すごい存在」でなければならぬ。

だからこれは——意地だ。

親として、大人として、この先の世界を創つていく子供の未来を守ること。

それが、今の逢依が恐怖に震える体に打てる唯一の鞭だったのだ。

「——この部屋を出て右にまっすぐ進んで。突き当りの部屋に覚悟がいる。彼女に「ヴォイドで笹倉家に送ってください」って言うのよ」

「……お母さまは、一緒に行つてくださらないのですか？」

「ふふつ、最初と比べて随分と上手に甘えられるようになったわね。そうね、もっと甘やかしてあげたいけれど……ごめんさい。本当は今も他の偉い人たちと一緒にお話をしてなきやいけない身なの。だから、今はここでお別れ」

「……帰つてきてくれますよね？」

「もちろん。白露ちゃんが私のことを信じて待つていてくれるなら、絶対に帰つてくるわ」

まだ何かを言いたそうにしていた白露だが、彼女はそれを呑み込んで、泣きそうな笑顔で「では、お待ちしていますね」と言つて部屋を出ていった。

「あの笑顔……。誰かを信じるためにワガママを押し潰して必死に笑うあの顔……。本当に白露ちゃんって、私とあなたの子だわ。……。あんなところまで、あなたに似なくてもよかったのに」

Final season——絶対悪討滅戦

英雄——レイドリベンジャーズ——

希繫の決死のオーバースロットルによつて与えられた12時間という猶予は、驚くほどに早く早く消耗していった。

既に6時間が経過した今なお、レイドリベンジャーズはデミス・マリス・マキナへの確実な有効打を見出せないまま、現時点で最も可能性の高い手段として、希繫の考案した「善の心へのアクセス」を現時点での最終手段としている。

なぜそれを真つ先に採用しないのかといえば、単にそれが可能な装着者である希繫自身が、今現在ほとんど行動不能状態に陥つてしまつてゐるからだ。

現在、ユナイトギアを稼働状態で保つてゐるレイドリベンジャーズは780名ほど。希繫も、今は意識が無いながらもアバターとエクレールが交替で稼働を維持している。

本来なら、意識のない装着者からエモーショナルエナジーを抽出し続けることはしないが、現状的にそうせざるをえないことは、ユナイトギア全機が理解していた。

「桐梨隊長、彼の意識は？」

「まだ戻りません。申し訳ありませんが、現時点での方針を聞かせてもらえますか？」

逢依が会議室に戻ると、レイドリベンジャーズの重役がおよそ60人近く集まっていた。彼女はその内の、永岑支部長の霧島と、永岑支部第一前線部隊長である悠生の間に立ちながら、霧島へ状況を尋ねた。

今のところ、希繫を中心とした作戦『オペレーション・リベンジ』は最終手段。というよりも、彼が目覚めたとしても十全なコンディションを取り戻せない限り凍結。しかし問題は、デミス・マリス・マキナの性質上、彼を除いて有効なダメージを与えられる存在は限られてしまっているということ。

そもそもデミス・マリス・マキナとは「負の感情の結晶体」という、極めてレイダーに近い存在である。ただ明確な違いは、ユナイトギアによる攻撃が通用するのはあくまで実体化した「触手」部分だけであり、中心核となる球体はユナイトギアでさえ触れられない霧のような存在。

希繫の天禍・降雷砲が直撃できたのは、彼がリミットブレイク——それもオーバースロットル状態だったからこそ、通常のリミットブレイクではありえない密度の正のエモーショナルエナジーを放出できたからだ。

つまりは、デミス・マリス・マキナに対して有効打を叩き込むためには、オーバースロットル以上の正のエモーショナルエナジーを叩き込まなければならぬ。しかし、単純な威力だけならともかく、ただでさえ感情エネルギーの豊富な希繫のオーバースロッ

トルを上回るほどの感情を持つ者など多くはない。

だからこそ、レイドリベンジャーズの共通認識として「感情エネルギーのぶつけ合いによる正攻法」は希繫にしかできない、ということになっていた。そこでもうひとつ、有効打となるであろう手札として提案されたのが――。

『不離の仲』と『マスカレイダー』を使う……？ 確かに彼らは今回の希繫奪還作戦に尽力してくれた心強い仲間です。しかし、それでも彼らはレイドリベンジャーズではありません。あくまでユナイトギアやレイダー因子に適合するだけの一般人です。そんな彼らを最前線に送り込むつもりですか？」

「君の意見は尤もだよ。しかし、彼らの持つ『ルーナ』と『ソール』は心の影を減衰させ、心の光を増幅させうる可能性を秘めている。加えて、マスカレイダーは『感情因子傾向』インヒレントアピリティと呼ばれる負の感情を操作する能力を持つらしい」

「それでも、彼らが守るべき市民であることに変わりはありません」

「その通り。人類の未来を守るため、今を生きる全ての生命を絶やさないうため。どんなに大義を並べたとしても、そのために強いられた犠牲が彼らだとすれば、まさしく彼らは英雄と呼べるだろう。しかし今この状況で我々が残酷なほど求めているものもまた、英雄なんだよ」

英雄。なんて美しくして残酷な言葉なのだろうかと、逢依は思わず唇を噛みしめた。大

義と民衆のために矢面に立ち、背中に向こうの名前も顔も知らない誰かのためにあらゆる自己犠牲を強いられる。それこそが「英雄」なのだ、きつとここに居るみんながわかっているはずなのに。

そして、レイドリベンジャーズは自らを「英雄」に仕立てることで、市民たちを決して「英雄」にはしないために、これまで命がけで戦ってきたはずなのに。それなのに、今この場の全てのレイドリベンジャーズが、その志に目を背けようとしている。

「俺なら大丈夫だ……。オペレーション・リベンジを進めてくれ……」

それまで意見が飛び交っていた指令室に、息も絶え絶えという様子の小さな声が、なぜか響き渡った。

そこに居た誰もがその声に振り向くと、指令室の入り口に立っていた声の主は、未だ荒い息をどうにか整えようとしながら、肩で息をしていた。

「桐梨！」

「桐梨くん!？」

「希繫さん！」

数名のレイドリベンジャーズが駆け寄ると、そんな彼らに肩を借りながらも希繫はど

うにか逢依の元まで辿り着き、作戦統括隊長に向けて言葉を続ける。

「俺ならいけます。今のデミス・マリス・マキナは活動を停止してると聞きました。つまり、それだけダメージを与えられたことですよね？ だったら、わざわざあつちが回復しきるまで待つ必要はないはずだ。叩くなら今です」

「それはこちらと同じ意見だ。しかし、今の君にデミス・マリス・マキナを討ち斃すほどの体力と感情エネルギーが残っているのか？ 既にリミットブレイク4回分相当のエネルギーを抽出されている君に」

「そうです！ 既に桐梨隊員の感情エネルギーは底をついていて、むしろどうして今こうして意識を保っているかすら理解できないほどです！ もしもこのまま戦えば、今度こそあなたの心は……！」

「構わない。この心と引き換えにでも守らなきゃいけない未来があるはずだ。この命を使い切つても救わなきゃならない命があるはずだ。そのためなら、どんなに傷付き倒れても構わない」

これまで、希繫は様々な無茶を繰り返してきた。だが白露との出逢いや逢依との結婚を機に、どんな無茶にしても「必ず家族の元に帰る」という一線は引いていた。

しかし、今の希繫の瞳には既にその一線を越えた先の「覚悟」が宿っていた。今ここで自分が命を懸けなければ、帰るべき家も、守るべき家族もなくなってしまうかもしれない

ない。そう思うからこそその「決死の覚悟」が。

「この星の未来を創る子供たちを守り、今この時代を動かす市民を守る。そのためのレイドリベンジャーズだったはずです。なのはどうして高校生こどものマスカレイダーや、市民の義陰と陽乃を巻き込んでるんですか」

「しかし、彼らは君を蓬萊寺から奪還する際にも協力してくれた。だからこそ——」

「それは彼らが俺の個人的な知り合いだからです。彼らは「作戦」に協力したわけじゃありません。あくまで「俺の奪還」に協力してくれただけです。もし俺が戦わないとなれば、彼らは速やかに俺を連れて撤退するだけです。そして俺たちにそれを引き留める権利はない」

「……………」

「もう一度言います、彼らは「子供」と「市民」です。俺たちの英雄じゃありません。俺たちみんなが、この星の子供と市民を守るための英雄にならなきゃいけないんです。だったら、俺はそれを躊躇わない」

希繫の言葉は、言ってしまえば理想論のひとつにすぎない。確かに彼の言う通り、レイドリベンジャーズは市民を守るための組織であり、そのためにはあらゆる尽力を惜しんではならない。

しかしだからといって、そのために命すら投げ出して戦える者がどれほどいるだろう

か。——そう、この平和な国の市民ならば誰もが思うだろう。

だが彼らは違った。

「確かにそうだ。桐梨隊員の言う通りだ。俺たちは国際脅威から人々を守るためにレイドリベンジャーズに入団したはずだ。たとえどんなに恐ろしい敵が相手でも、どんな危険な任務でも、俺たちが戦うことで築かれていく時代が、未来があると信じて戦つてきた！」

「俺だつて同じだ！ 確かに今回の敵はレイダーとは格が違う。蓬萊寺以上に大規模な問題かもしれない。けれど、だからこそ俺たちが戦わなきゃいけないはずだ！ 俺たちが逃げたら、誰があいつを倒すんだ！ 俺たちが逃げたツケを、未来へと進む子供たちや、今を生きる市民に押し付けるわけにはいかない！」

「これまでも色んな国際脅威と戦つてきたからわかる！ 「僕」よりも強い敵はたくさんいたけど、「僕たち」よりも強い敵はいなかった！ 僕たちは勝てるんだ！ みんなが手を繋ぎ合ひ、力を重ね合わせれば、きつと今じゃ届かない未来だつて掴み取れるはずなんだ！」

「今はあいつの懐にある「未来」かもしれないが……だとすれば奪い返せばいい！ たとえそのために自分の命が果てたとしても、この命が繋ぎ紡いだ未来は決してその犠牲を無駄にはしないはずだ！」

彼らはレイドリベンジャーズ。

大義と民衆を守るために矢面に立ち、背中の向こうに居る名前も顔も知らない誰かのためにあらゆる自己犠牲を惜しまない者たち。

レイドリベンジャーズという名が何故、組織の名でありながらそこに所属する職員をも指す単語になっているのか。それは彼らが「同じ志」を持つ個人であり団体であることとの証なのだ。

強襲者に屈することなく立ち向かい、いずれは必ず反逆し、市民が味わった苦痛と屈辱を晴らすため己の命を賭して復讐を果たす。それこそが「レイドリベンジャーズ」の名前の由来なのだから。

「統括隊長。お願いしますが、俺を使ってください。そしてみんなも、俺のバカに付き合ってください。絶対に、みんなの希望を繋いでみせるから」

「……勝算はあるのか?」

「勝機なら、あるはずですよ」

戦士―ソルジャー―

笹倉家に到着した白露しろろは、自宅で恐慌状態に陥っている数名の絆フアミリイの家族が笹倉婚代ささくらこんぎくに襲い掛かろうとする光景を前にして、すぐさま仲裁に入った。

どうやらデミス・マリス・マキナによつて負の感情を奪われた者たちが、この中で唯一「正の感情」を自力で制御していた婚代に対して「正気を奪う」という目的で攻撃を行つているようだった。

普段はのんびりしている婚代であるが、元々はユナイトギアの研究・開発に携わるレイドリベンジャーズの一人であった。戦闘部隊に配属されていたわけではないので他のレイドリベンジャーズとは比べるべくもないが、少なくともユナイトギアを持たない一般人に押し潰されなくらいの実力は持ち合わせていたのである。

だが真つ当に戦うだけならばまだしも、攻撃を仕掛けてくるのは彼女が愛してやまない大切な絆フアミリイの家族たち。どうにか全ての攻撃を捌きながら対処していたが、彼らを止める術を持たないだけに、白露の加勢は大きかった。

しかし、全員の鎮圧を終えた直後、婚代から状況の経緯を聞いた白露は、すぐさま何処いずこかへと駆け出した。

負の感情を奪われてなお、正の感情を制御できる人物が、その正気を奪うために襲われる事案が発生している、というのは逢依から聞いていた。しかしそれを目の当たりにしたことで、その意味をようやく痛感した彼女は、ある一人の人物を想起した。

そしてよりにもよって、その人物というのが婚代と違って一切の戦闘力を持たないにも関わらず、抵抗のためにも人を傷つけられない性格だということも。

「婚代さま！……はお任せします！」

「白露ちゃん!?! いくらシンクロナイザーがあるとはいっても、こんな時に外に出たりしたら……!?!」

デミス・マリス・マキナの『マリスゲイン』は物理的な隔たりに関係なく、地下にさえもその影響を及ぼす。そのため、レイドリベンジャーズはデミス・マリス・マキナを中心として半径20km以内の地下シエルターの使用を禁止、その範囲内の住民を一時的に撤退させ、その範囲を超える者には自宅での待機・防犯を徹底させた。

そしてデミス・マリス・マキナは蓬萊寺家に未だ留まり続けているため、幸盛市の笹倉家や、白露の目指す永岑の地に住む「その人物」は自宅待機をしているはずなのだ。――

――は、ず、なのに。

「雨零うれいくん!?!」

「し、白露ちゃん!?!」

彼は——雨零は自宅ではなく、永岑の街のど真ん中に立ち尽くしていた。一切の車両も通行していないとはいえ、永岑市において最も交通量が多く最も栄えているはずの街の中で、彼はまるで何かに怯えるかのように周囲を見回しながら立っていたのだ。

「どうして白露ちゃんがここに……!　　そ、それに大丈夫なの!?　　周りの人たちみんな変になっちゃって……白露ちゃんは平気なの?」

「全てを説明する時間があればそうしたいのですが、ひとまずわたしと一緒に来てください。安全なところまで案内します。それに、わたしはこのマフラーがある限りは正気を保てますから」

「マフラー?　　えっ、本当にいったいどういう——うわあっ!」

雨零を腕に抱えた白露は、シンクロナイザーを信号機に巻き付け、伸縮を利用して宙へと跳んだ。振り返れば、その交差点のすぐ近くまで、暴徒たちは四方から回り込むように迫っている。もしも白露の到着があと一分遅れていたら、雨零は無事では済まなかつただろう。

思わず、白露は雨零に対して言葉を洩らした。

「あんな……命の危険があるかもしれない状況でも、どうして雨零くんは抵抗さえしやうとしないのですか……?」

「えっ?　　うーん……なんでかなあ。……テレビのヒーローみたいに、誰かのためなら

自分の痛みはこわくない、なんて言えたらカツコよかつただけだね。ぼくは、やっぱり痛いのはこわいよ。でも、だからかな。痛いのが嫌だつてわかるから、他の誰かにもこういうのを与えたくないんだ。その人が痛がつてるのを見るのが、こわいんだよ」

痛いことが嫌なことだとわかつているからこそ。誰かの痛みを自分のことのように感じてしまうからこそ。彼はその痛みを誰かに与えることを極端に嫌うのだと言う。誰かを傷付けることに恐怖を感じ、萎縮することを「臆病」だと誰が言えるだろうか。彼の身を削る重い槍は、彼が相手を思い遣り続けたからこそ鋭さを増す。他者から与えられる理不尽から自らを案じる心、他者のために自らを理不尽に晒す勇ましき心。誰よりも「負の感情」と向き合い続けたことで育まれてきた「正の感情」を持つ雨零だからこそ、負の感情を奪われてなお「正の感情」を律し続けている。

「けれど、雨零くんが傷付けばわたしは悲しいです。他の誰を傷付けてもいいから、あなたに傷付けてほしくない……。そう思ってしまうわたしは、いけない子ですか？」

「……ううん。白露ちゃんもそんなにもぼくを想ってくれるのは、本当に嬉しい。でも……やっぱりぼくは臆病者で、泣き虫な弱虫だ。きっと、ぼくは誰も傷付けられない。ぼくが傷付くことで、誰かが傷付かないなら……ぼくは何もできないんだ。こんな情けないぼくで、ごめん」

「情けなくなんかない！ 情けなくなんか、ありません……！ どんな暴力を振るわれ

ても、あなたは決して暴力でそれを返さない。その「優しさ」と「勇気」は、きつとこの世界の誰にも越えられない」

幾度か戦場に足を踏み入れた白露にとって、それまで「優しさ」と「勇気」の象徴とは、『慈愛』と『最強』を戴く二人の男を意味していた。だが、今こうして雨零の根源的な部分に触れた彼女は、その認識を改めた。

「『慈愛のレイドリベンジャーズ』と『最強のレイドリベンジャーズ』……そんな名前を、雨零くんは知りませんよね」

「うん……有名な人なの？」

「わたしは両親がレイドリベンジャーズなので。はい、その界限では有名なお二人です。弱く優しい『慈愛』、強く勇敢な『最強』……どちらも、素晴らしい方々です。願わくば、そんな人とずっと一緒にいられたら、と思うこともあります」

「あはは、そうだね。そんなカッコいい人と、一緒にいられたら楽しいよね」

いつものようににつこり微笑みながら白露の話聞く雨零は、やはりこんな時でも雨零のままです。

「……何を他人事のように言っているんですか？」

「へあ……？」

「他の誰がなんと言おうと、わたしの中で『慈愛』や『最強』以上に優しくて勇敢な人は

「あなただけですよ、雨零くん」

「……………えっ?」

この顔は、きつとこちらの真意には気付いていないのだろう、と白露は困ったように苦笑いしつつも、それもそれで雨零らしいと続く言葉を呑み込んだ。

「だから、ずっと一緒にいてくださいね、雨零くん」

「え? あー、そういうこと? もちろん。白露ちゃんが望んでくれる限り、ぼくはいつでも白露ちゃんと一緒にいるよ」



「正負のバランスが真つ当な一般人がこんだけやべーことになってるのに悪感情の権化みたいな俺らが無事なのマジで笑う」

「まあ悪感情の権化だからこそ無事みたいなどころあるからね」

一方で、マスカレイダーの二人は『日嗣ひつぎ防衛大臣護衛』の任務が暴徒化した彼を拘束・護送する任務に急遽変わったことで、予想しない形でレイドリベンジャーズと合流することになった。

本来、負の感情の塊であるはずの彼らは、デミス・マリス・マキナにとって格好の工

サであり、また負の感情を制御する力については、優先的に対処すべき危険な要因であるはずだ。しかし、なぜかデミス・マリス・マキナは彼らに手出しをしなかった。――否、出来なかつたのである。それは……。

「ただまあ、タイプアルファじゃなかつたらヤバかつたな」

「オメガだと悪感情ダダ洩れでもんねえ……」

タイプアルファの感情因子傾向インヒレントアトリティである『悪感情拒絶』は、悪感情を由来とする一切の影響を受けない。さすがにデミス・マリス・マキナの体を構築するほどのそれによる直接的な攻撃ならまだしも、超遠距離からのマリスゲインだけならば、拒絶可能な範囲であつた。

ただ、それでもデミス・マリス・マキナが活動を再開すれば継続的なマリスゲインによつてマスカレイダーもまた疲弊する。拒絶できることと疲労しないことはイコールではないのだ。

「さて……メッセンジャーさん、俺らはこの後どうすりやいいんだ？　といつてもこんな能力だ、最前線で元凶の悪感情を拒絶する盾にでもなりやいいのか？」

そう言つてマスカレイダーが視線を向けた先に居たのは、虹色の髪と瞳を持つ少女、優芽ゆめであつた。

以前の一件から、優芽は彼らとレイドリベンジャーズを繋ぐメッセンジャーであり、

同時に彼らを制御できるハンドルとブレーキを兼ねていた。

「いいえ。お二人の役目はここまでです。これまでのご協力に感謝します」

「……は？ この状況で、囷と盾を両方こなせるのがここにいるんだぞ？ なんて使わない。俺らの力を侮つてんのか？ それともマスカレイダーじゃどうにもならねえほどやべー相手なのか？」

「お二人の力を侮るわけではありません。しかし、ここまでです」

優芽がそう言うと、彼女の後ろに控えていた二人のレイドリベンジャーズが彼を拘束し、マスカレイダーの背後に「虚空の穴」が開く。

「なっ……！ これはいったいどういうつもりで——！」

「レイドリベンジャーズはこれより市民を戦闘区域から排除し、決死の決戦に挑みます。なので……『善良な市民』のお二人には下がっていただきます」

市民。それはレイドリベンジャーズが守るべき対象であり、『善良な市民』とはレイドリベンジャーズにとって最も愛し敬意を示すべき存在である。

故に——マスカレイダーに対してレイドリベンジャーズの「口」を任されている優芽からの言葉は、レイドリベンジャーズの総意であることを意味していた。

「先にこれまでの戦いに巻き込んでしまったことを謝罪します。そして、ここまでの尽力に感謝を。ここから先は、我々レイドリベンジャーズが任されます。マスカレイダー

……あなたのような素晴らしい市民と出会い、共に戦えたこと。そしてそのために戦いに赴けること。その全てが我々の誇りです」

「待て……どういふつもりだ。まさか……バカ言うな！ 俺は納得しねえぞこんなの！

確かに俺たちじゃどうにもならねえ相手だつてことくらいわかつてる！ だがそれはお前らだつて同じことだろうが！ だつたら俺らを連れて行けよ！ 最後までちゃんと巻き込めよ！ そのために俺らは手を取り合つて戦つてきたんだろうが！」

「あれほどの……ぼくらでさえ全力で拒絶してようやく抗えるほどの悪感情をぶつけてくる相手に、ただの人間が立ち向かうなんて自殺行為だ！ いくらユナイトギアが悪感情に対して特効があるといっても、それはレイダーを基準とした話のはず！ あんなのに対して真つ当なダメージなんて見込めるはずがない！」

「それでも、市民を巻き込むわけにはいきません。我々レイドリベンジャーズの使命は「未来を創る子供たちを守り、現代を支える市民を守る」こと。市民であり子供であるマスカレイダーあなたちを守るこそ、レイドリベンジャーズの本懐であり本望です」

どうか、お元気で。

そう告げると、マスカレイダーは「虚空の穴」へと呑み込まれた。

「……彼らは素晴らしい戦士でした。どうか、これからは素晴らしい市民であることを願います」

彼らの消えた跡へと敬礼し、
優芽はその場を後にした。
ここから先は、戦士の道だ。

絶対悪―デミス・マリス・マキナ―

『総員、配置につきました』

『同じく。いつでも行けます』

「頼んでいたものは？」

『いつでも出せます』

「了解。だったら……やってみせるぜ、オペレーション・リベンジー！」

デミス・マリス・マキナの再起動予想まであと1時間。準備段階でかなり時間を使ってしまったが、それでも完全な状態で復帰する前に仕掛けられるのは僥倖と言うほかない。

あの巨大な悪感情の結晶の前に立つのは希繫きづなひとり。ここで仕掛けを仕損じれば、人類の未来はない。故にこの一撃だけは――無抵抗の今しか打ち込むタイミングはない。「登録者、桐梨希繫。登録感情は『継』……これより第四号『エクレール・リュミエール』と、第五五五号『アバター』との同調および接続を開始する」

先のデミス・マリス・マキナとの戦闘で感情エネルギーの大半を消費し、完治しきらないまま戦場に戻った希繫には、既にユナイトギアにすぐさまアクセスすることすら容

易ではなくなってしまうっていた。

ゆえに、このアクセスが途絶えれば二度目のアクセスよりも遥かに早く、彼の心と命が悪意によって喰い殺されることは明白であった。それでも、今ここで彼は「ひとり」で立たなければならなかった。

『エクレール・ルミエール、いけます』

『アバター、いけます』

ふたつのユナイトギアを纏うことのできる希繫は、リデアと同じくマルチギア装着者ということになるのだろうか、そもそもペアで使用することを前提として作られたストーム&ホップパーや、ルーナ&ソールと異なり、エクレールとアバターは本来なんの関係もない二つのギアである。

故に、上述の四機とは異なり、エモーショナルエナジーの消耗量はマルチギア前提のものではないため、シンプルに通常の二倍の速度で摩擦していく。だからこそ、文字通り心身ともに疲弊している希繫には気を抜くだけで視界の霞むような状況ではあるが

「エクレール、アバター……辛い戦いばかり付き合わせて悪いが、泣いても笑ってもこれが俺たちのラストバトルだ！俺たちの全てを出し切って……こいつの懐に奪われた『未来』を奪い取るぞッ！」

『どこまでもお付き合いますッ!』

『さあ、いこうマスター!』

—— アクセスッ!

真紅と深紅の光に包まれた希繫の体には、エクレールとアバター……そして虹色のウイングが装着され、そのウイングはまるで彼を抱きしめるかのように両脇から胴体部を覆っている。

「エクレール」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始——
いけます』

明らかに今までよりも格段に早いチャージタイムに疑問を持つこともなく、雷撃体の最大スピードによる突進力突き出した右足に一点収束させながら、接触の瞬間に雷撃体を解き質量を取り戻す。

「ぜえええああああああッ!」

『アアア——』

それまで沈黙していたデミス・マリス・マキナから、まるで歌うかのような断末魔が、

蓬莱寺の広い庭に響く。

「寝起きの電撃アラムは効いたかよ!」

『アアア——ウウ——、アアアア——!』

「……何?」

再起動したデミス・マリス・マキナの攻撃を全て躲しながらも、攻め手の止んだ希繫の様子を見た待機組にどよめきが広がるよりも早く、悠生ゆうきが希繫に通信を入れた。

『どうした希繫、何があつた』

「こいつ、言葉を……!」

『言葉……? オイ希繫、こつちには歌声みてーなソイツの鳴き声しか聞こえてねー。ソイツの言葉が聞こえてるのはオメーだけだ』

「……なるほど。つてことは……そういうことだな。なら作戦は続行だ、このまま段階を進める!」

無数の触手が迫る度、希繫はそれを躲すばかりで手にした雷切ライキリを振るおうとはしない。まるで何かを待つように、デミス・マリス・マキナを見つめている。

「さて……『なぜ邪魔をするのか? なぜその体を成立させてしまうほどの悪感情を溜め込む矮小で愚かな人類のために身も心も擦り減らすのか?』だったな、デミス・マリス・マキナ」

『アアア——オオ——、ウウウウ——！』

「高潔な魂、ね。そう言ってくれるのは嬉しいが、どうやら俺とお前じゃそもそも魂こゝろの解釈が違うようだ。俺たち人類は、お前の言う「愚かな『陰』の心」と「高尚な『陽』の心」を併せ持っている。そして、その二つが常に自分の中でぶつかり合いながら、答えのない答えを探して行動している」

触手による攻撃だけではダメージどころか触れることさえ適わないと理解したのか、デミス・マリス・マキナはその中心部から漆黒のスフィアをまるで誘導弾のように放ち、希繫への攻撃を過激なものにするが、希繫は白銀のユニティバレットをロードし、レイドリベンジャーズの証であるコートを脱ぐ。

希繫の腰に装着された白銀のスカートアーマーの姿勢制御能力によって、ウイングでの空中戦闘に安定性を増すと同時に、コートを脱いだことよってスカートアーマー追加分の重量を軽減。防御力を捨てて機動性の維持を試みている。

「俺は確かに人様から褒めてもらえることも多いし、そう言ってもらえるような行動をしてきた。だがそれは俺の心に陰の心が無いわけじゃない。陰と陽の心がぶつかり合っている、どちらが正しいとかじゃなく、どこで折り合いをつけるかを無意識に決めているだけなんだ。俺だけじゃなく——この世界に生きる誰もが！」

『ウウウウ——オオ——オオオオ——』

「違う！ 人類は確かに間違いを犯すけど……それは心が弱いからじゃない！ 人々が間違っているのは他人に「正しき」を求めた時だ！ 心がどんなに強い人でも、その「正しき」に狂い、道を踏み外す！ だが心が強いからこそ、その間違いを認めて改めることもできる！」

『オオオオ——アア——』

「間違いを改められない人、心が弱くて間違いと向き合えない人……確かにそういう人がいるのも本当だ。でも、だからこそ俺たちは手を差し伸べなきやいけないんだ！ 独りじゃ気付けない間違いを、独りじゃ直せない間違いを、俺たちは「みんな」でどうにかしようとする！ そのために、人類は滅ぶわけにはいか——うあああああッ！」

突如、躲したはずの誘導弾が彼の背後で爆発、その爆風に煽られバランスを崩したところ、無数の炸裂誘導弾が殺到した。

『オオオオ——』

「勝ち誇るには……まだ……早い……！」

「これほどの負の感情……喰い尽くすには骨が折れそうだな」

「くくちゃんとアンジュを守ってくれた桐梨先輩を……墜とさせたりしない！」

炸裂誘導弾の放った爆煙がゆっくりと晴れていき、明らかに希繫一人分ではない人影が現れる。

「お前たちは……!!」

『『テイラン』……四条杏樹……蓬萊寺として……先の恩返しに……きたよ』

「同じく『イーター』の久繰九衣だ。ORBとして、この地球の未来をレスキューしにきた」

「そしてご存知『マエストロス』の古谷早智！ レイドリベンジャーズとして、人類守護の使命を果たすために現着です！」

それは——決して交わるはずのない三つの勢力。蓬萊寺・ORB・レイドリベンジャーズの三人が共に手を取り合い、希繫を守るように囲んでいた。

「……ッ、見ろデミス・マリス・マキナ！ 互いに違う理想を持ち、互いに違う「正しさ」を持つ三人が、こうして手を取り合っている！ それはこいつらが決して自分の正しさを持ちながらも、それを他者に押し付けなかった結果だ！ こいつらは……違う「正しさ」を受け入れあつて共に生きているんだ！」

『オオオオ——アア——アアアア——』

「この駄々っ子め……！ 早智、九衣、杏樹……手を貸してくれ」

希繫のアイコンタクトに合わせて、三者は散開。希繫に向けられる攻撃を少しでも分散させるため、四方からの攻撃を行うが、デミス・マリス・マキナの猛攻は勢いを留めるばかりか激しさを増していく。

だがそれでも——この三人のコンビネーションは凄まじかった。あれほどの猛攻を受けながら、まるで三人全員が追加二人分の視点を持っているかのように、一人では補えない四角からの攻撃を、他の二人で庇い合っている。

「だけどこのままじゃ攻め手が足りない……!」

アバターで分身を作り、多角度からの同時攻撃を行えば、もしかすれば隙を作ることはいずれも可能かもしれない。だが満身創痍のまま戦闘を行っている今の状況では、せいぜい追加できる分身は一体分が限度。

たった一体の分身が追加されたところで、付け焼刃にすらならないというのは子供でもわかるだろう。

「数が必要なら……こっちに任せてもらおう! 黄金鍊成・ゴールディックビースト! チャージ用のエモーショナルエナジーはゴールドタブレットで払う。多重発動しろ!」

『オーケイ、ゴールディックビーストを多重鍊成する!』

『『アオオオオオオオオオオオオ!』』

「この黄金獣たちは……美蓮か!」

十、二十、三十……五十頭をゆうに超えるほどの黄金獣を一度に鍊成し、それらを全て手足の如く使役するのは、蓬萊寺に発つ直前に入隊し、ほとんど世話を焼いてやるこ

ともできないままだった彼——。

「第二前線部隊、土中^{つちなかみれん}美蓮！ レイドリベンジャーズとして……と言いたいが、こつちをほっぽって実家帰りましたヤツを部隊に連れ帰るため……この闘争に参戦する！」

「美蓮……ああ、お前の黄金鍊成は菜咲のお墨付きだ！ 頼らせてもらうぞー！」

群れで攻撃を行う黄金獣は、美蓮によって統率された一糸乱れぬ連携によってその数を一頭たりとも欠けさせないままに触手の動きを鈍化させていく。

そして、三人組^{フレンズ}と黄金獣によってそれまでは希繫に集中していた触手と誘導弾が明らかに分散し、希繫が攻撃に転じるにあたって十分な活路が見出せるほどになった。

「ふっ、はっ、せえやツ！ ここだツ、エクレーール！」

『了解。リアクターシールドを多重使用します。エモーショナルエナジー、充填^{チャージ}開始。』

——いけます』

デミス・マリス・マキナを取り囲むように展開される100を超える電磁シールド。それそのものに攻撃力はもろくないが——、

「エクレーール！」

『了解。クリムゾンインパクトを使用します。エモーショナルエナジー、充填^{チャージ}開始。——いけます』

希繫はリアクターシールドの一つを足場としてクリムゾンインパクトをデミス・マリ

ス・マキナへと叩き込むと、蹴りつけた反動で別のリアクターシールドへと跳び、そこからさらに二回目のクリムゾンインパクト——それを二度、三度……全てのリアクターシールドを利用しながら、多角度からの多重クリムゾンインパクトを放つ。

アクセルアクションによって空気を蹴りながら多重攻撃を行うアクセルクリムゾンインパクトと異なり、この多重クリムゾンインパクトには明確な足場と反動を利用したものだけに、ひとつひとつのクリムゾンインパクトが一切威力を落とすことなく、それほどばかりか加速し続けることで威力を増しながら打ち込まれていく。

「すごい……！ あれが桐梨先輩の全力……!？」

「あれだけの攻撃を叩き込めば、少しは堪えるか……?」

「いや……パッと見は……大きく見えるけど……中心核以外は……霧みたいなもの……。物理ダメージを与えるために……あんなに奥深くまで……何度も攻撃を打ち込んでいたら……心への負担が……大きすぎる……!」

「それに、どれだけダメージを与えてもあつちはすぐに自己修復してしまう……!」

それでも希繫は、まるで何かを「待っている」かのようにその攻撃を続けている。

それまで三人組フレンズと黄金獣にも向けていた触手を全て希繫に集中し、彼を捉えようとするデミス・マリス・マキナだが、既に彼の速度は彼以外の誰にも認識できない領域に到達している。当然、速度に特化しているわけでもない触手がそんな彼を捉えられるはず

もなく――。

「ぜあああああッ！」

全てのリアクターシールドが彼の速度を受け止めきれずに崩壊するまでの1000発以上の多重クリムゾンインパクトを、デミス・マリス・マキナはその身に刻まれることになった。

連繫—エクステンダー—

希繫きづなの猛攻は、晴れゆく爆煙の中から現れるデミス・マリス・マキナの健在によつて空虚に終えた。

少なくとも、希繫のクリムゾンインパクトは並の相手なら一撃にて必討を成し遂げるほどの威力を持つているにもかかわらず、1000を超すそれを受けてなお、デミス・マリス・マキナの歌うような雄叫びはそんな彼を嘲笑うように響き渡る。

思わず舌打ちが出るが、瞬くほどの猶予も与えないまま、デミス・マリス・マキナがその触手を天に掲げると、天上に浮かび上がる無数の罅。そしてそれを割つて現れる勢カレベル「軍勢」300頭以上級をゆうに上回るレイダーの群れ。目測換算にして——およそ100万！

「……に来て、レイダーだと……ッ!?!」

負の感情をエサとするレイダーの体もまた負の感情の結晶であるのなら、デミス・マリス・マキナはレイダーにとつて格好のエサであると同時に、レイダーもまたデミス・マリス・マキナの格好のエサである。

しかしその間にある力の差は明白。ゆえに、デミス・マリス・マキナは敢えて自らを

撒き餌のごとく晒すことで、現存する全てのレイダーを召喚・使役しているのだろう。

『躊躇うなッ!』

「——悠生ゆうきッ!?!」

『レイダーの発生は世界各国で同時多発的に起きてる……が、心配すんな!』

「でも……!」

『同時多発発生したレイダーには、世界中のレイドリベンジャーズが総力を挙げて対処してる! オマエは目の前のソイツにだけ目エ向けてりやいーんだよ!』

悠生との会話をどう傍受したのか、その会話を聞いていたかのように、デミス・マリ
ス・マキナは再び希繫に問いかけた。

『アアアア—— オオ——アアアア——!』

「……ああ、そうだ! お前の言う通り、これまで人類はレイダーという恐怖の元で繋がってきた! 恐怖への対抗手段として手を取り合い、協力してきた! だがそれも今日までだ! お前が残存する全てのレイダーを召喚してくれたおかげで……その「恐怖」を一網打尽にできるんだからなあッ!」

『オオ——ウウウウ——アアアア——!』

「いいや違うな! 最初は確かに恐怖に抵抗するために繋がり合ってきた絆だ! だがこの先の未来には、恐怖を越えるほどの「希望」を繋ぎあう絆になるんだ!」

『アアアア——!』

「……ああ、希望は小さく脆い! なぜなら希望とは「光」だからだ! この空を彩るひとつの星の光のように、小さく儂いものだ! それでも、その小さな光をひとつひとつ掬い上げて結んで繋いでいけば——「点」でしかなかった希望は、絆という「線」に繋がれて、思い描く理想という「絵」を描く!」

一度の接触がどれほど短い時間であろうとも、デミス・マリス・マキナの中心核に1000回以上近付いた希繫の心は既に負の感情による浸食にギリギリで耐えている状態だというのに、希繫のエモーショナルエナジーはさらにその輝きを増していた。

その輝きがなんなのか、なぜ眩さを増しているのか。それは希繫自身にもわからなかったが、たった一人だけ、それに気づいた者がいた。

『希繫! デミス・マリス・マキナの言葉に、あなたらしい本音で答えなさい!』
 「逢依……!」

『あなたの感情が……エモーショナルエナジーが活性化しているのは、あなたの「絆」と「希望」を否定したがるデミス・マリス・マキナに、あなたの心の奥底ですつと抱えていた「答え」を出し切っているからよ!』

「答えを、出し切る……?」

『デミス・マリス・マキナはあなたの鏡なのよ! 撫月が「蓬莱寺から抜け出せなかった

あなた」なら、デミス・マリス・マキナはその撫月から生まれたあなたの鏡！ だからあなたのことを否定しようとする！ だけど、だからこそあなたはデミス・マリス・マキナへの「答え」を全て持っているはず！」

「……………」

『そして、その答えはあなたの「希望」と「絆」に由来するものばかり……………だからその答えを口にすればするほど、あなたのエモーショナルエナジーは活性化する！』

その会話を遮ろうと、デミス・マリス・マキナの触手と誘導弾は他の全てを差し置いて希繫へと殺到した。しかし、狙いのわかりきった攻撃ならば——。

「言葉で負けそうになったから力尽きたあ、随分と子供染みた知能だな、デカブツ」

「師匠……………」

「おうよ。可愛い弟子のためだ……………。レイドリベンジャーズ戦技教導官、真透リデアと愛機『ストーム&ホッパー』……………全力で好き勝手させてもらおうか！」

希繫が蓬萊寺としての力を躊躇わなくなったことで、既に「最強」でも「最速」でもなくなつたが——それでも「準最強」と「準最速」をたつた一人で持ち合わせる歴戦の勇士、リデアによって、全ての攻撃は散り散りに飛び散つた。

だがバラバラに引き千切られた触手たちは地上に堕ちると同時に、それぞれが小型の悪感情結晶体の獣に変化し、美蓮みれんの操る黄金獣たちへと襲い掛かる。いかに連携の練度

が高い黄金獣であつても、複数の『悪獣』を相手にすればどうしても数が足りなくなる。追加の黄金獣を召喚するためのゴールドダブレットにも数に限りがある。まだデミス・マリス・マキナの手札が全部わかつていない状態でゴールドダブレットを使いきるのは避けたい、そんな美蓮の一瞬の躊躇いを、デミス・マリス・マキナの誘導弾が鋭く襲い掛かる。

「エクリップス・デュアルハートストリーム！」

迸る黒白の奔流。希繫と優芽の二重のシールドを拮抗すら許さず撃ち破つたその一撃は、デミス・マリス・マキナの誘導弾と数頭の悪獣までもを一度に呑み込み、葬つた。

「義陰^{よしかげ}！ 陽乃^{はるの}！ どうしてお前たちまで……避難させたはずだろ！」

「どうしたはこつちのセリフだよ、希繫。僕と陽乃を助けてくれた恩を返しきらないまま死なせたりしない！」

「アタシは義陰と違つてバカだから……まだ、迷つてる部分もある。義陰のためになら、今すぐにも逃げた方がいいんじゃないかって……。でも、その義陰が逃げないんだ！ ならアタシだって腹を括つて戦う！」

陰の心、陽の心。互いに相反する力を根源としながら、互いの手を繋ぎ合いここに立つ二人は、共に視線を交わす。

「ルーナ！」

「ソール！」

『ラジャ。シャドウアブソープを使用します。エモーショナルエナジー、チャージ充填開始』
『ラジャー。ブライトリリースを使用します。エモーショナルエナジー、チャージ充填開始』

互いを信頼し合うことによって共鳴振幅し合う二人のエモーショナルエナジーは、優芽のような高速チャージとは別の意味で特別な作用を發揮する。

『コンプリート充填完了。シャドウアブソープ、いけます』

『コンプリート充填完了。ブライトリリース、いつでもできます』

「デミス・マリス・マキナ！ お前の負の感情を……」

「希繫！ アタシたちの正の感情を……」

——もうぞで！

——受け取れ！

義陰の翳した腕から放たれた漆黒の竜巻がデミス・マリス・マキナの負の感情を吸収し、それをルーナがプラスでもマイナスでもない『ニュートラルエモーショナルエナジー』に変換。そしてそれをソールが正のエモーショナルエナジーとして再変換し、陽乃のそれと同調・増幅させ、翳した腕から希繫に向けて放出する。

これこそ、正と負の感情を打ち消すことなく共鳴振幅できるルーナとソールの本領であり、そしてそれを可能にするだけの全幅の信頼を持ち合う義陰と陽乃だからこそ可能にした「理論上可能な奇跡」の力。

「これは……！ エクレールツ！」

『了解。ユニティバレットを多重拡張接続します』
マルチアクセスロード

「そう、それでいい！ あれだけ膨大な感情結晶から奪い取ったエモーショナルエナジーなら……たとえほんの一片だとしても満身創痕を万全にもっていくには十分すぎるはずだ！」

「だから……アタシと義陰の心と一緒に、ありったけを持つてけえええっ！」

ギア特性をフルドライブさせたスキル発動。加えて通常駆動を明らかに上回るエモーショナルエナジーの流動に耐え切れず、ルーナとソールの機体は悲鳴を上げるが、義陰と陽乃も、そして二機のギアたちもまた、それを止めはしなかった。

「お願いだ希繫……僕たちの希望を、繋いでくれッ！」

「アタシたちの希望、確かに託したからね……ッ！」

本来ならばとくに全壊していてもおかしくないほどの超過駆動を行いながらも、ルーナとソールはギリギリでその損傷を抑え込むものの、デミス・マリス・マキナはシャドウアブソープを強引に振り切り、二人を貫かんと触手を伸ばす。

「どこのどつちだか知らないが、チャージの時間は十分に稼いでもらった！ 黄金錬成・ゴールディカゴレム！」

『オーケイ、ゴールディカゴレムを錬成する！』

しかしその触手が捉えたのは10メートル級の黄金の巨人、ゴールディカゴレム。

シヤドウアブソープによってマリス・デミス・マキナの身動きがとれなくなっている間にチャージしていた美蓮によって召喚されたそれは、彼の「黄金錬成」が作り出せる最大級オブジェクトであり、切り札であった。

「ゴールディカゴレムはそつちらの盾として存分に働け！ ゴールディックピースト共もこつちに気を取られる必要はない！ 全霊をもってデミス・マリス・マキナに食らいつけ！」

「アンタ……アタシたちを守ってくれるのか？」

「こんなでも一応、扉の向こうから出てきた身なんだけど……」

「出てきた」んなら市民だろ。レイドリベンジャーズが守らなきゃいけない市民だ。ホントはすぐにでも退場させたいが……あつちを助けるためにここに来たんだろ。なら最後までやり切ってみせろ！ ……やり切ってもどうにもならなかったら、レイドリベンジャーズとして市民が逃げる時間くらい稼いでやる」

これまで、自分たちを認めてくれたのは希繫だけではないにしろ、レイドリベン

ジャーズからは良い目では見られていないと思っていた。それもそうだろう。義陰と陽乃は支部とはいえレイドリベンジャーズの施設中樞まで侵攻、たつた二人で壊滅的被害を出した敵勢力だったのだ。

しかし、今日の前の美蓮が口にしたのは美蓮としての言葉だけではない。彼は「レイドリベンジャーズとして」二人を守り、もしもの時は逃げるまでの時間を稼ぐとまで言ったのだ。それは、個人の関係性の良し悪しを越えて、公的な立場として、義陰と陽乃を「味方」だと認めてくれた証左に違いない。

「俺と師匠でこいつを攻撃する！ 美蓮はゴールディックピーストで触手を止め、早智・九衣・杏樹はそれぞれの方法で誘導弾を防いでくれ！ 義陰と陽乃は地上四名の防衛、余裕があれば援護射撃をくれ！」

もはや誰の口からも「了解」の一言さえ出なかった。それほどにデミス・マリス・マキナの攻撃は激しさを増していた。加えて、攻撃に指向性があれば悟られると理解したのか、まるで獣のように不規則な攻撃ばかりが繰り返されて、防衛の薄い希繫は躲すことにも苦勞しながら、それでも掠めることも許さないほどの速度で避けきっている。

だが、全員が希繫の指示に対して即座に順応した。これまでレイドリベンジャーズの第二前線部隊で、後方指揮を執る逢依と共に前線指揮を任されていた希繫だからこそ、瞬時に的確な配置を導き出せたし、その指示がどれだけ適切なものかということ、全

員が理解できた。

「アアアア——！」

「いいや、無駄じゃない！ みんなが俺に希望を見せてくれる……託してくれる！ そうして託されたひとつひとつの希望を、俺が繋いでいく！ とつくにお前を縛り付ける「針」は刺してあるんだよ！ あとはありつただけの希望をこの絆で縫い付けるだけだ！」

「アア、アアアア——ウウ——オオオオオオオ、アア——！」

「いまさら気付いたのか？ そう、お前のブチ貫いた最初のクリムゾンインパクト……あれが「針」だ！」

そしてその針に通された絆という糸が、希望を連ねて巨大な悪感情を縛り付ける。

相棒—XD400R—

希^{きづな}繫たちのチームワークはまるで全員が思考を共有しているかのように、一切の合図や目配せもないまま各々の役目を完璧な連携でこなしていたが、それでもデミス・マリス・マキナの無尽蔵の再生能力を突破することができなかつた。

レイドリベンジャーズの技術開発部とオペレーターたちの共同解析によれば、デミス・マリス・マキナの再生能力の根源——即ち中心核となつていゝ部分を構成しているのは、ナツクレイダーとなつた『リライズ』の「再生」の力であることは間違いないとのこと。

しかしユナイトギアであつた頃のリライズのギア特性に、これほどの無限修復能力はないことはリライズの開発データからわかっている。つまり撫^{なつき}月の「繋がろうとする力」とリライズの「再生する力」がレイダーギア化し、マイナスエモーショナルエナジーと混ざりあつて「負の感情にアクセスし、それを糧に再生を行う」力となつたのだ。

だが、だからこそ綻びを入れられるとすればそこだというのが、技術開発部とオペレーターたちの出した答えであつた。撫月と同じく「他者と繋がる力」を持つ希繫の攻撃ならば、中心核の「再生する力」に対して負ではなく正のエモーショナルエナジーを

流し込み、デミス・マリス・マキナのシステムにアクセスできるはずだ、と。

「これだけの攻撃を叩き込んでも、まだアクセスできないのか……ッ！」

「焦るな希繫！ まだ万策どころか四十八手も尽くしてないだろ！ それに今この場ではお前があたしサマたちの指揮官だ、あいつの中に突っ込むのが怖いならあたしサマで練習してみてもいいんだぜ！」

（降雷砲をもう一度撃ち込めば、修復機能を一時的に止めることくらいはできるか？

いや、さっきのでさすがに警戒されてるはず。レイジングデイスチャージは……接近どころか攻撃する間は接触し続けなきゃいけない。リミットブレイクは……今度こそ廃人コース一直線だ）

そもそも、希繫のスキルが他の装着者と比較して圧倒的に数が多いのにはいくつかの理由がある。

ひとつ、『超スピード』が多様な状況や手段に対して応用が効いた。ひとつ、相手を出来る限り傷つけない戦いをするために「倒す」だけなら必要のない技が増えた。ひとつ、それらを可能にするだけの潤沢なエモーションナルエナジーを有していた。

だが、それでも「継続的に接近してはならない」というデミス・マリス・マキナの性質は、そんな希繫であつても打てる手札を否応なく減らされた。

「アアアア——！！」

「絶望？ 諦める……？ ハッ、バカ言え！ むしろお前のその一言のおかげで断然やる気が出たぜ！ 俺は……俺たち『絆フアミリイの家族』は、諦めなかつたから婚代さんに救われた！ 諦めなかつたから家族になれた！ そんなヤツが諦めたせいで世界が滅んだら、俺は二度と他の絆フアミリイの家族に顔向けできないんだよ！」

「オオ——アアアア——ウウ——エエアア——！」

「そうだ！ 人は絶望する！ 恐怖する！ 憎悪する！ 殺意を抱き、闘争をもたらす！ だが——それら全てが「正」でなく「負」をもたらすこともわかっている！ なぜならそれらのもので得られるとすれば、それは『停滞』だけだからだ！」

デミス・マリス・マキナはこの世界の多くの人類が抱く負の力が自分自身をここまで育て上げ、多くの人類の負の力が自分という「形」によって滅亡へと歩ませようとしていることを主張してきた。

だが希繫は僅かなタイムラグさえないまま、そんなデミス・マリス・マキナへの回答を口にした。やはり逢依あゐの言う通り、デミス・マリス・マキナの「言葉」とは希繫という存在を否定するためだけに用意されたものであり、だからこそそれに対する答えもまた希繫の中にすでに用意されているのだろう。

「さっきも言ったろ！ 人の心は陰と陽を共に持つていて、常にぶつかり合っている！ だがお前の言葉は俺の心の「陰」の部分でしかない！ 俺の心の中で常にぶつかり

あっている内の片方だけ——単なる借り物の言葉なんだよ、お前のそれは！ だからこんなにも簡単に答えられる！」

「ウウ——エエアアアア——！」

「……………ツ！ それがお前の……………本当の言葉か。なるほど、ようやくわかったぞデミス・マリス・マキナ。なぜお前がこれほどまでに俺を否定しようとするのか。なぜ人類の醜さにこだわるのか。なぜ頑なに他の攻撃手段を使わないのか。お前は……………誰の借り物でもない『自分自身』を認められたかつたんだろ……………」

瞬間、デミス・マリス・マキナの攻撃が止んだ。

「お前の中心核を構成する『リライズ』、他者とアクセスする力を授けた撫月と、その霧みたいな体を構築する『人々の悪感情』……………どれもこれもが他人の力だ。お前のオリジナルはアクセスして集約させた『力の使い道』だけ……………」

「アア、オオ——ウウ——」

「俺を否定しようとするのは、お前のその思考回路が「俺の鏡」であることが由来だと理解してしまっただからだろ。人類の醜さにこだわるのは自分の体がその醜さで出来ていることを否定してほしかったからだろ。他の攻撃手段がないのはリライズの戦闘サポート用サブルーチンを使いたくないからだろ」

「——」

「おかしいと思ったんだ……それだけ高密度の悪感情の結晶体なら、そんな黒い霧の玉みたいな姿じゃなくて、もつと思ひ描く通りの「形」を得られるはずだからな。でもお前はそれを嫌がった……それは今のその「形」こそが間違いなくお前のオリジナルだからだ」

デミス・マリス・マキナの動きが止まったことで、リデアたちもまた警戒しつつも攻撃を中断した。

これまでの希繫の言葉を聞く限り、デミス・マリス・マキナには明確な「意思」を持つオブジェクトだということがわかっていたからだ。だとすれば、ここで横槍を入れて状況をこじらせるよりも「言葉」でぶつかつた方が被害は最小限で留まるはず。

「デミス・マリス・マキナ……お前が人々の悪感情にアクセスし、それを力と振るうのなら、お前の「意思」は間違いなくその悪感情に影響されてるはずだ」

「オオオオ——エエイイアアアア！」

「そうじゃない、そういうことを言いたいわけじゃない！ お前がもしも憎しみや恐怖を理解できているのなら、あらゆる理不尽に怯える心も、戦いや争いを憎む心も理解できるはずだ！ もしそうなら……世界中の「負」を受け止めたお前なら、世界中の何にも真似できないくらい「優しさ」があるはずだ!!」

「アア——ウウウウ——」

「そうだ！　そして誰にも真似できないものがお前にあるのなら……お前は誰の真似をしたわけでもない！　それがお前のオリジナルになるんじゃないのか？　お前だけの……お前だからこそそのものになるんじゃないのか！」

希繫の言葉は間違いなく、デミス・マリス・マキナの『心』とも言える部分に届いていた。

これならばデミス・マリス・マキナを討滅できなくとも、むしろそれ以上の結果を得られるのではないか。モニター越しにそんなことを思う者も決して少なくはなかった。

しかし――、

「オ、ア……エ……イ――ア、ア……イ……」

「……は？」

――次の瞬間、デミス・マリス・マキナは風船が破裂するように広がり、希繫を呑み込んだ。

「希繫さん！」

「あのバカ……！」

すぐさま反応したのは、第二前線部隊新人組の二人であった。

早智^{ささち}はマエストロスのアームズ『音叉剣ユリア』を手にデミス・マリス・マキナに接近、希繫を呑み込み「人の形」となった泥のようなそれに切りかかり、美蓮^{みれん}が『ゴルド

コンドル』を黄金鍊成して牽制と早智の護衛を命じるが、デミス・マリス・マキナはまるで動じもせず、ただただ「人の形」のままその場に佇んでいる。

「攻撃が通らない……!? さっきまで霧みたいに触れることも適わなかったのに、今はまるで水のように柔らかく動く巨大な金属の塊みたいに硬い……!」

やや遅れて、九衣くいと杏樹きょうじゅも攻撃を仕掛けようとするが……。

「つとと、なんとか出られ——うわつぶね!」

攻撃が当たる直前、デミス・マリス・マキナが希繫を吐き出したことで、九衣と杏樹の攻撃は到達することなく直撃の軌道を逸れた。

せつかく、希繫という「天敵」とも呼べる存在を行動不能に陥らせるに至ったにもかかわらず、それをあっさりと手放したデミス・マリス・マキナの行動に全員が警戒心を増すが、一向に動きを見せないそれに対して最適解を見出せないでいた。

その時——、

——うまく避けるよ。

ノイズがかかったようなその声に、全員がすぐさま跳び退いた。

『どはっしょうてん
怒撥翔天!』

純銀の鎧を纏った何かがデミス・マリス・マキナへと衝突し、松葉色の光を放ちながら巨大な爆発を引き起こした。

「この純銀の煌めきは……！」

「俺の『タイプオメガ』は溜め込んだ悪感情を放出して威力に変える！　だが特にその本質は「悪感情を放出する」って部分だ！　デミス・マリス・マキナだったか？　お前が溜め込んだもんをまるっと全て、放出させてやる！」

『どうしてマスカレイダーがそこにいるんですか!?!』

通信から届く優芽^{ゆめ}の叫ぶような声に顔を顰めながらも、マスカレイダーは敢えてそれに答えようとはしなかった。

『マスカレイダー！　何か考えがあるんですね!?!』

「こいつの本質は「悪感情」なんだろ！　だったら俺が放出する！　それとその黒いの！　お前さっきの中継で見たぞ、こいつの悪感情を吸収できるんだってな！　だったら俺が散らした悪感情を飲み干してくれ！」

「けど、ルーナは既にかなり負担がきていて、これだけの悪感情を全部呑み込むなんて……」

「だったら半分は俺が喰ってやる。俺の『イーター』は感情エネルギーを喰って・溜めて・吐き出すことができるからな」

それまで、デミス・マリス・マキナに対して意味のあるダメージを与えることができたのは希繫と義陰よしかげだけだった。しかし義陰のあれは二度目のない使い切りの手札。そんな中で、明確なメタを張れる手札が1枚増えたことで、一気に形成は人類側に傾いた。「よし……マスカレイダーが悪感情を放出、義陰と九衣が散った悪感情を回収！ 早智と陽乃はるので回収組の護衛！ 美蓮は全体の状況を見ながら適宜援護を！ 師匠はマスカレイダーの、杏樹は俺のサポートに入ってくれ！ マスカレイダーの攻撃でデミス・マリス・マキナの守りは必ず綻びが生まれるはず！ 今度こそ俺があいつにアクセスする！ その一瞬を作ってくれ！」

『希繫あつ！』

「うるせつ……菜咲なさけか、この状況でなんの用だ！」

『この状況だからこそ、希繫にびつたりの応援を送ったよん！ 存分に使いこなしてよねん！』

応援、というそれが何かと問うよりも早く、それは空から訪れた。

地に着く瞬間の閃きはまるで稲妻のごとく。唸るエンジン音は雷鳴のごとく。その者の名は——、

『『XD400R』……ッ！』

桐梨希繫——アクセス——

「XD400R！」

『その子のカウルを今までの「極限状況対応装甲」から軽量型ユニティオン合金で作り返しておいたよん！ おかげでロボットモードへの変形機能はオミットすることになっちゃったけどねん！』

「菜咲！ お前って奴は……最高の仕事だ！」

希繫はXD400Rに跨り、その真紅のマシンを電気へと変換させた。

エクレールのギア特性『雷光変換』は、肉体と雷を相互変換する能力であり、無機物であるはずのバイクを雷に換えることは不可能なはずだが、これは体とバイクが一体となる感覚を利用してエクレールに「体の一部」と誤認させることで効果範囲を広げるといふ、希繫だからこその力業。

こうすることで希繫とXD400Rは大地を離れ、空を駆けることを可能とし、質量を失ったものが光の速度で「動ける」のならば、質量を失ったものが「駆ける」ことによつて生み出される速度は光をも遙かに凌駕する。

「アアアア——オ、オ、アアアアアアッ！」

さつきまでの触手と炸裂誘導弾だけではない。

触手の先端を刃に変えて斬りかかり、狙いを外せばその勢いのまま刃を射出、誘導制御されたブーメランのように人馬一体となった希繫へと襲い掛かってくる。

加えて、炸裂誘導弾とほとんど形の変わらない高速直射型のエネルギー弾がマシンガンのように発射され、他の仲間たちへを巻き込まないために希繫は滞空戦闘を強いられた。

「てめえの敵はあいつだけじゃねえぞ！」

「あたしサマの相手もしてもらおうか！」

「ア、オオオ、ウウウウ……アアアアツ！」

マスカレイダーとリデアによる息の合った連携格闘には目もくれず、これまで攻撃を妨害することで守りを果たしていたデミス・マリス・マキナは、既に希繫以外に対する興味を失ったようにその頑強な防御力にものを言わせて、無防備なまま希繫への攻撃だけに注力している。

「この耳に届くそれは、悪意に心を冒されたお前の悲鳴なのか……！」

希繫は胴体に巻き付けていた虹色のウイングを広げると、左右七色七対の羽根を発射、デミス・マリス・マキナと同じく誘導制御されたブーメランのように扱い、全ての触手を切断。

それらの羽根を再び翼の元に戻すと、全速力で上空の雲の中に突っ込み、夥しいほどの電力を全て制御し、それらをデミス・マリス・マキナに向けて放電させた。——しかし、それでも外殻がわずかに焦げるばかりでまともなダメージとは言い難い。

「だとすればもういい……！　もう、苦しまなくていい……ッ！」

デミス・マリス・マキナが自らの「優しさ」を自覚したことにより、寄せ集めた「負の感情」が纏まりを失い、暴走状態に陥っているのだらうと判断した希繫は、そうなつてしまった「それ」を止める術がたつたひとつだということも理解できてしまっていた。

そもそもデミス・マリス・マキナには意思こそあれど命などない。確かに中心核になつているのは紛れもなくリライズであるのだが、デミス・マリス・マキナとして降臨した時点で、それは既に『ネガティブ』の塊でしかなく、それを纏め上げるのが中心核の役割であつたはずなのだらう。

しかし、だとすればデミス・マリス・マキナとは『感情』であり『プログラム』である。即ち——命なくして言葉放つものである。命の宿らない言葉——それがあの歌声のような絶叫であつたのなら、『ポジティブ』を持ち合わせ、命ある言葉を持つことさえできればどれほど美しい旋律となつたのか。

希繫は優しさに冒されたデミス・マリス・マキナへの憐みと、それを受け入れることのできないネガティブへの怒りを叫んだ。

「なら……もう叫ばなくていいッ！ 俺たちが眠らせてやるッ！ ——もういいだろッ、誠実せいじいッ！」

『——ああ。「見極め」は完了した。レイドリベンジャーズにも報告済みだ』

『これまでの対話と攻撃で、既にデミス・マリス・マキナに打ち込んだ『針』はシステム最奥部に侵入しています!!』

希繫の嘆きにも似た叫びに、それまで水面下で沈黙していた誠実と敬意けいがシグナルを青に変えた。そしてそれとほぼ同時に、希繫への応援に待機していたレイドリベンジャーズに通信が入る。

『レイドリベンジャーズ総司令部長官……『笹倉』より通達。桐梨隊員によるデミス・マリス・マキナへのアクセスを許可する。同時に、待機中の全レイドリベンジャーズはこれより、デミス・マリス・マキナからのあらゆる攻撃から桐梨隊員を守護せよ。——人類の希望を繋げ。以上』

通信の終了と同時に、無数のレイドリベンジャーズが虚空の穴より召喚され、デミス・マリス・マキナとの戦闘体勢に入り、希繫も上空から地上へと戻ると、XD400Rに跨ったまま、雷撃体から肉体へと再変換。デミス・マリス・マキナと向き直る。

そんな希繫を守るように虚空から召喚された悠生ゆうきが前に、支えるように隣あに逢依いが立ち、後ろから優芽ゆめに声をかけられた。

「お兄さん」

「優芽か」

「……帰りを待ちしています」

「ああ、すぐに帰る」

希繫はエクレールを待機状態に戻し、XD400Rを優芽に預けると、人型ピクトグラムのような形に姿を変えたデミス・マリス・マキナと向き合い、左腕のアバターを翳した。

「人と繋がる力……それが撫月なつきと同じ俺の力なら、その名は……」

深紅の光が、デミス・マリス・マキナの中心核と希繫とを結び――、

「絆……アクセス！ うおおおおツ！」

「ア——ウ——エ、ウ……！」

その真つ直ぐな軌跡が輝きを放つと同時に、希繫の意識はそこで途絶えた。

「これより……希繫防衛戦を開始するわ！ 各々、配置と陣形を確認！ 連繫を密にとり、希繫の防衛を最優先にしつつも、必ず生還する戦いを見せなさい！ ——戦闘用意！」

意識を失った希繫を優芽が抱えながら経過を見守っていると、希繫と『繋がった』ことによつてしばらく沈黙していたデミス・マリス・マキナは遂に、その本性を露呈させ

た。

人型ピクトグラムのようであったそれが罅割れて中から現れたのは、漆黒と呼ぶにはあまりにも純粹で純潔な——『純黒』の体を持つ腕も足も表情もない人型存在。

人の心から形を獲得し、人の形を否定したが故に手足を失ったのだとすれば、表情どころか顔の一切のパーツがないのつべらぼうのマスクは、人の「心」を否定するが故だろうか。

先ほどまでと同様の悲鳴にも歌声にも聞こえるその声の合間合間には、ポロロロロロロ、という機械的な電子音がノイズのように混ざっている。

「これが……デミス・マリス・マキナが導き出した『希繫を否定する形』……い」

そう、この手脚を削ぎ落され磔に括られたようにも、無慈悲に悪を串刺しにする鉄の乙女のようにも見えるその姿は、まさしく『罪人を裁く』ために最適化されたようなフォルム。

加えて、その顔に一切のパーツがなく表情を読み取ることもできないことから、感情そのものを否定することで「ポジティブ」「ネガティブ」のどちらでもない、感情的に最もニュートラルな存在だということを示しているようにも見受けられた。

「アアアア——！！」

「きやあツ！」

「うあ……ツ！　なんですか、この音……！！　解析班！」

『……………』

「電波障害を引き起こす音波攻撃のようね……！！　早智^{さち}ちゃん！」

「まかせてください！　マエストロス！」

『了解。音を操作します』

早智の持つマエストロスは、アームズ『音叉剣コリア』に衝撃を与えて振幅させることによって、音の波を自在に調律する力を持つ。

単純な電波攻撃にはどうすることもできないが、この攻撃が音波に乗せた電波妨害ならばと見抜いた逢依の指示は的確で、マエストロスによって音を電波妨害を引き起こす音波を相殺・ミュート化に成功。同時に無数のレイドリベンジャーズが攻勢へと転じる。

「こいつに攻撃に転じる隙を与えるな！」

「基本はヒットアンドアウェイだ！　欲張るなよ！」

互いに声を掛け合い、多少は臆病にも思えるほどの警戒心を保ちながら、一方的なほどの攻撃を数十人がかりで叩き込んでいく。

クロスレンジのアタッカーが前に出ている間、ミドルレンジの繋ぎがデミス・マリスマキナの様子を注意深く見定め、前衛が危険を感じて後退すると同時に中距離からの射撃を殺到させ、とにかく防御態勢を維持させる作戦なのだろう。

しかし、全員の攻撃はクロスレンジアタッカーが一撃目を打ち込んだ時点でまっとうなダメージになっていないことが、その場の全員の背筋を凍らせた。攻撃が接触するよりも早く、デミス・マリスマキナの体を守るように球形のバリアが発生しているからだ。

「攻撃してこない……バリアを張っている間は動けないの？ それとも、まさか攻撃手段がないとでもいうの……？」

確かに逢依の言う通り、目視で確認する限りデミス・マリスマキナの体は人間から手足を削ぎ落したようなフォルムであり、球形の姿や人型ピクトグラムのような姿だった頃のように、無数の触手すら存在しない。

今そこにあるのは、単に浮遊するだけのオブジェだと言われればそれでも納得するよ
うな——それほどに攻撃の意図が感じられない「虚無」の塊のようであった。

「あのバリア……優芽ちゃん、あれに水をかけてあげなさい」

「お兄さん抱えながらでは戦えないんで、ほんとにただの水にしかならないですよ」

「構わないわ。前衛、後退！ 攻勢準備のまま対衝撃・閃光、防御態勢！」

全員の防御態勢を確認するまでもなく、それができていて当然とばかりに躊躇の無い水鉄砲がデミス・マリス・マキナに放たれるが、無論それも阻まれ——バチン、という音を立ててバリアは霧散した。

「オーヴァー、デストラクトオオオツ！」

その一瞬の出来事に周囲が呆気に取られる中、その僅かな一瞬を埋めるように叩き込まれた灼熱の拳は、間違いなく必殺の一撃。

デミス・マリス・マキナもこれには危機感を持ったのか瞬く間に悠生から距離を取るが、そうした時には既に周囲も我に返り、再び無数の攻撃がデミス・マリス・マキナへと殺到する。

「いい中継ぎだったわ、悠生」

「おう。だが電磁バリアか……水をぶっかけて強制的に放電させりや確かにバリアは解けるが、ちつと雑すぎねーか？」

「効率的と言つてほしいわね。手段が雑でも手早く結果を得られるのなら、それが一番いいに決まっているわ。それに、あの電磁バリアから察するに、おそらくデミス・マリス・マキナは……」

「ああ、一応全員なんとなく察してるだろうぜ。今は確証待ちだ。だからアイツの攻撃を誘う程度にわざと回避優先で隙を作らせてる」

もしもこの予想が正しいのなら、デミス・マリス・マキナへの攻撃の指針にもなる。このまま手数と人数にものを言わせて完封できればそれに越したことはないが、最悪のケースも想定して今のうちにあちらの手札を見ておく必要もある。

「アアアア——オオ——エエエエエエ——」

叫びと共に眩いほどの黒い光を放つと、デミス・マリス・マキナは一気に高度を上げ、40メートルほどの高さから無数の雷撃を放つ。

「あれは希繫の『エナジースパーク』とさっきの『放電』ね……。なら間違いないわ。警告！ 対象は桐梨希繫のスキルを使用する傾向あり！ 各々の手段で対策、攻撃を続行！」

繫がることと、呑み込まれること。

その違いがあるとすれば、それは——。

自己証明―アイデンティティ―

ついに最終形態となったデミス・マリス・マキナの攻撃は、これまでとは比較にならないほどに苛烈にして猛烈なものとなった。

これまで触手と炸裂誘導弾というたった二つの手札だけで希繫きづなたちの連携を圧倒していたデミス・マリス・マキナであったが、希繫と「接続」したことで逆に彼自身のスベックを読み取り、それを再現してみせたのである。

そもそも、希繫の持つ多彩なスキルの中には、「敢えて自分の攻撃を相手に悟らせて防いでもらう前提で構築したスキル」も存在し、何も考えずにそのまま使えば致命的な殺傷力を誇るものも数多く存在する。

加えて、希繫の基本の戦闘スタイルがキックを中心とした格闘術であるため、十八番のクリムゾンインパクトを除いてほとんどのスキルが射撃・砲撃などの放特技であり、手足を必要とする格闘技以外のものであることも、デミス・マリス・マキナにとっては好都合であった。

「おおおおおっ！」

「怯むな、畳みかけろ！ 相手の動きをよく見て、的確に攻め込むんだ！」

「退避！ 退避！ さっきの放電攻撃が来るぞ、下がれええっ！」

レイドリベンジャーズたちの連携は「見事」の一言であった。元より前線で戦うレイドリベンジャーズはチーム行動を基本方針としているが、それでもこれだけ大掛かりな集団戦闘——しかも相手がたった一騎だというのに、これだけの人数を割いた戦いは初めてだというのに、彼らの連携は間違いなく一流の戦士たちのそれであった。

逢依あいつが指揮を執っているとはいえ、最前線に加わらなければ見えないものもある。そもそも、逢依は前線指揮よりも本営からの全体指揮を得意とする指揮官であるのだから、こうした状況で各々がまとまって行動できるのは、逢依の指揮というよりもレイドリベンジャーズ全員の士気あつてのことだろう。

そして、その士気を保っているのは逢依ではなく、ミドルレンジから戦況を見渡しながからも全員が下がると同時に攻撃が止む一瞬に中継ぎの大火力を打ち込む『英雄』おおさとゆうき大郷悠生の存在が大きい。彼がクロスレンジに攻め込む全員の背中を見守っているからこそ、誰もが安心して冷静さを保つことができる。

「アアアア——オオ——！」

『カラミティブラスト、いけます』

「秒速98メートル……ボクの、最大瞬間風速を……くらえ……ッ！」

「そいつあいいい！ だったらあたしサマも嬢ちゃんの自慢のそいつを貸してもらおうか

！」

『レッツゴー、リデアキック!』

杏樹きようきの放った災害級局地暴風竜巻は、周囲のレイドリベンジャーズを数名吹き飛ばしつつも、デミス・マリス・マキナへと直撃。直前で電磁バリアを展開するも、またもや優芽ゆめが横から放ったイーリスの水鉄砲がその電磁バリアを強制放電させ霧散、さらにその暴風を利用して加速したリデアのリデアキックが痛烈に打ち込まれた。

加えて、蓬莱寺の飼犬として育った杏樹は、普段の眠たげな印象からは予想だにしないほどの豪腕を誇り、シンブルに叩き込まれる拳のひとつひとつが10トトラックが時速150キロでぶつかる衝撃に等しい威力を持つ。つまり、杏樹の拳は悠生ほどでないにしろ、通常のパンチが必殺級の意味を持つことになるということ。

それを悟ったのか、デミス・マリス・マキナは杏樹から距離をとろうと再び空に逃げようとするが――、

「オオオオ——アア——」

「逃がしませんわ! 夢椿!」

何処からか軌跡が弧を描くように回転しながら飛来した巨大な刃がデミス・マリス・マキナへとぶつかり、電磁バリアでそれを防ぐデミス・マリス・マキナをバリアごと地面に叩きつけた。

「あの鯨包丁を使ったギミッククウエポンは……!」

「遅ればせながら、この古崎敬意、誠実様のご命令により香坂さんたちの応援に馳せ参じましたわ!」

「古崎さん! まさか、あなた一人で……!?!」

「それこそまさか。わたくし、死に場は誠実様のお傍だけと決めていますもの。そうですわよね、誠実様?」

——その通りだ。

地面に叩きつけられたデミス・マリス・マキナがふわりと起き上がろうとしたところで、その体をワイヤーのような何かに絡めとられ、まるで水底に呑み込まれるかのように地面に沈んでいく。

首から上だけを残して、体のほとんどが地面に呑み込まれたところでその動きは停止し、同時にそのすぐ真横の地面から魚が跳ねるように飛び出してきたのは、左腕に青い籠手を装着した不愛想な男。

「武城くん!」

「人類だけじゃない……このまま放っておけばこいつは地球すらも悪意に染めてしまう

！ ORBとしてそれを見過ごすわけにはいかない！ 手を貸すぞ、レイドリベンジャーズ！」

「あれがORBで最も苛烈で最も穏やかと言われるORBの『牙』……、武城誠実とフアングバイト……！ くっ……おとおおおとおおおッ！ これは、いよいよ泣き言を言っている場合じゃなくなった！」

「誠実さん……ッ！ 誠実さんまでもが、地球のため……いや、希繫のためにこの戦いに臨んでくれているのなら……！ 僕だってもう、情けない僕のままじゃいられない！」
雄々しく猛る『牙』の背中を見て、思わず咆哮を上げたのは九衣くいと義陰よしかげの二人であった。

レイドリベンジャーズにおける悠生と同じくORBの象徴的存在である誠実の参戦によって、現役ORBの九衣と、かつて誠実の部下であった義陰の士気が目に見えて上がったのは、彼の狙いの内にあっただろうか。



「………は？ ……なるほど、デミス・マリス・マキナの『内側』か。普段、白露しろろが俺の『内側』に居る時はこんな感じだったのか……。そう考えると、シンクロナイザーは

俺や撫月なつきのような『繋がる力』を人工的に再現したギアってことだが……まあ、今はそんなことどうでもいいか」

「……………」

真つ暗な闇の中、「何か」が頂垂れるように座り込んでいるのを見つけた希繫は、ここがデミス・マリス・マキナの『内側』だということを承知の上でなお、無警戒に近付くと膝をつけて視線を合わせた。

そこに居たのは撫月——ではなかった。顔も体つきも、全てが撫月のそれと同じだというのに、目の前にいる「それ」には撫月のような『執着』がなかった。むしろその逆——癩癩を起こして何もかもを放り捨ててしまった子供のように、今にも泣きだしそうな目で俯いていた。

「デミス・マリス・マキナ」

「……………」

「殺風景なところだな、ここは。本当に何も無い……まるで今のお前を見ているようだ」

「うるさい！」

煽るように——しかし本音のままに吐き出した希繫の言葉に、撫月——否、デミス・マリス・マキナは今までとは明らかに違う『声』で叫んだ。

「その目をやめろ！ その口を閉じろ！ その耳を塞げ！ 私を哀れむその目を、私を

否定するその口を、私の嗚咽を聞くその耳を……私がどれほど羨み憎んだか！ お前には……『正の心』を持つお前にはわかるまい！」

「ああ、わからないな」

「私は求めただけだ！ 私が私である証を、私以外の誰でもない証明を！ なのに何故、求めれば求めるほどに遠ざかる！ 私が私でないことを突きつける！ 私は——私とはなんなのだ！ どうして、私は生まれてしまったのだ……！」

デミス・マリス・マキナは誕生直後、真つ先に作り出したものは『触手』であった。それは黒く蠢く不気味なものであったが、あれはデミス・マリス・マキナ自身が「求めていた」からこそ生み出されたのだ。何かを求める者が『手を伸ばす』ように。

そうして静かにデミス・マリス・マキナの嘆きを聞いていた希繫は、徐々にだがこれまであやふやだったデミス・マリス・マキナの目的に一貫性を見出してきていた。

これまで、デミス・マリス・マキナの目的は2つあると希繫は睨んでいた。「自分が自分である証明」と「希繫の否定」……その二つのために行動を起こしているのだと。しかし、それは間違いだった。目的は二つではない。——もつと根源的な『一つ』だったのだ。

「お前は「繋がりとうとする力」を持つ撫月の「絶望・憎悪」が「再生する力」を持つリライズに流れて生み出されたレイダーギアだった。だが、レイダーギアの中から「正の心」

を担っていた撫月が抜けたことで、お前には「負の心」だけが残ってしまった」

「……………」

「そこでお前は自分に残された「繋がるうとする力」と「再生する力」を使い、世界中の人たちにアクセスし、自らの存在の維持を試みた。自分を保ち続けようと……言い換えるなら『停滞』しようとしたんだ。なぜなら、お前を成り立たせている負の感情の本質とは『停滞させる感情』だからだ」

「自分が自分でいようとすることが……自分を保とうとすることが、そんなにも悪いことなのか！」

「だがお前にとつて不幸だったのは、その思考能力はリライズのAIの一部をフォーマットして転用してしまっていたことだ。誕生と同時に高度な知能を持っていたお前は、自らを構築する全てが他人のものであることに気付き、アイデンティティの確立に躍起になった」

「私は……ただ私でいたかっただけだ……！」

「そして、俺の降雷砲を受けて修復作業に入っていたお前は、同時にその時間を使って自らを成立させる「何か」を探していたが——そこに横やりが入った。俺の「針」……クリムゾンインパクトがお前のファイヤウォールを解析・突破、アクセスを開始した。そうすることで、お前としては不本意ながらも俺と「繋がって」しまった」

希繫が放った最初の一撃——デミス・マリス・マキナを縛る「糸」を通すための「針」であつたはずのそれは、どんな因果か希繫自身の「繋がる力」と、デミス・マリス・マキナの中にある「繋がるうとする力」が共鳴し合い、互いの予想だにしないところで繋がつた。

そうすることで、誰もが聞くことのままならなかつたデミス・マリス・マキナの「声」が、希繫にだけは届いていたのである。しかし、同時にそれを似た現象がデミス・マリス・マキナにも起きていた。

敵対する者たちの言葉は元より理解できていたが、希繫と繋がつたことでそれまで悪感情にしかアクセスできなかったデミス・マリス・マキナが、直接的に「人の心」というものに触れてしまった。

そして、触れ合つたことでデミス・マリス・マキナの全ての感情の矛先は、「撫月を受け入れなかつた希繫への絶望」という根幹的な感情と共鳴した「負の感情」と共に希繫へと向けられた。それゆえにデミス・マリス・マキナが「希繫を否定する」という目的を持つに至つたのだろう。

「お前の中にあるその温かい感情をどれほど羨んだか……！ 私にはないそれを持つお前をどれほど妬んだか……！ お前が持つそれを私に与えなかつたこの世界をどれほど憎んだか……ツ！！ お前は私に「優しくなれるはず」だと言つた！ だが、だとすれ

ばどうして私の心はこんなにも冷え切って、寒く冷たいんだ！」

「俺はそうは思わない」

握り拳を地面を強く打ち付けながら泣きじやくるデミス・マリス・マキナの手を掴むと、希繫はその指をひとつひとつ解いて開かせた。

「俺の手は温かいか？」

「……憎々しいほどに。それに比べて、私の手はこんなにも……！」

「お前の手が冷たいのは、こうやって手を繋いだ時、相手の温かさをより強く感じるためだ」

「なんの皮肉だ……！」

「他人の温かさを誰よりも強く早く感じ取ることができる。それは、この手の冷たさじゃ冷やしきれないほどの温かさが、お前の心にあるからじゃないのか？」

希繫はデミス・マリス・マキナの体を自らの懐に抱き寄せると、その頭を自分の胸へと当てさせた。

「俺の鼓動が聞こえるか？」

「……私にはない鼓動だ。もう、鳴ることのない鼓動だ……！」

「お前の胸に鼓動がないのは、相手の鼓動を静かに聞き取るためだ」

「……………」

「この鼓動を誰よりも強く感じ取れるお前は、誰の悲鳴も聞き逃したりしない。泣いている誰かの心の声を聞かなかつたフリなんてできないはずだ」

希繫は再びデミス・マリス・マキナと向き合い、その瞳を真つ直ぐに見つめる。今はもう真つ赤に染まつた自分のそれとは違う、かつての自分と同じ「真つ黒な瞳」を持つそれに、にこりと微笑んだ。

「デミス・マリス・マキナ。何が「他の誰でもない自分がほしい」だ、お前はこんなにも「誰の代わりでもないお前」じゃないか」

「誰の代わりでもない、私……？」

「おうとも。それに、最初の出会いがあんなだったからこんなにも仰々しくなつちまつたけど、この世界のどこのどいつが「デミス・マリス・マキナ」なんて名前を持つてると思う？ そんなの、世界の端から端まで探したつてお前だけだぞ」

「名前……。デミス・マリス・マキナという、私の名前……。？」

静かに頷くと、希繫はゆっくりと立ち上がり、その手を差し伸べる。

「——その薄ら白い痩せ細つた手を退ける。私は、一人でも立てる……。立ち上がってみせる。こんな……。嫌われ者の手で握り返していい手など無い」

遺志—ウィル—

「アア——オオオオ——ウウ——オオオオ——！」

ポロポロポロという甲高いノイズを打ち払うのではなく、まるでそれを旋律として乗せるかのように響き渡るその歌声は、まるで自分に向けられた鼓動を探るかのように周囲へ広がり、その波動を受けた者たちの胸に熱い何かを滾らせた。

「デミス・マリス・マキナの動きが変わった……!?!」

「だが、この冷たくも清らかな旋律と雄叫びはどういうことだ……!」

レイドリベンジャーズも、希繫きづなの仲間たちも、その「声」が今までとは明らかに違う「何か」を秘めていることを感じ取っていた。

そして、その雄叫びと共に一切の動きを停止させたデミス・マリス・マキナを前に、全員の動きが止まりそうになった、その背中に——。

「デミス・マリス・マキナ！」

待ち望んだ「その声」が力強く鳴り響く。

この場集う無数の希望を繋ぐ声が。

「どうしてアクセスを遮断した！ お前も……お前だって救われていいはずだ！ なの

にどうして！」

「ウウウウ——アア、オオオオ——」

だが、彼は優芽^{ゆめ}の肩を借りながら弱々しく立ち上がると、まるで泣きじやくるような表情でデミス・マリス・マキナへと問いかけた。

震える声で、潤む瞳で、彼は未だに繋がる「糸」を通じて、デミス・マリス・マキナの声聞いていた。

「そんなことない！ お前だつてこの地球の一部だ！ 人の心が集まつてできたひとつの命だ！ 世界中のみんなの負の感情を返して、最後に残った何かがお前自身だろ！ そうして一緒に俺たちと生きていけばいいだけじゃないか！」

「アアアア——ウウ——」

「……そんな、こと……！」

デミス・マリス・マキナの言葉は「糸」で繋がる希繫にしか聞くことはできない。だが、同じく「負の感情の結晶体」として同じ言語器官をもつ「彼」には、その言葉がなんとなく理解できていた。

『『そう、私はこの地球の一部であり、ひとつの命だ。だが同時に、それはこの世界の無数の命たちが持つべき一部であり、私というひとつの命は存在してはならないものだ』か……。こんな場面で、これまであれほどの脅威性を見せていたデミス・マリス・マキ

ナにあんな言葉を言わせるほどのお人好しか。呆れるぜ」

「え、マスカレイダーさんってデミス・マリス・マキナの言葉わかるんですか?」

「考えてることのニュアンスだけはな。でもまあ、言葉として翻訳すればそんなに的外れじゃないだろうよ」

「ならこれからの言葉もウチらにもわかるように翻訳してくださいよ」

マスカレイダーを経由して、二人の会話はその場の全員に伝わっていく。

「だったら……だったらなおさらだ! 命ある者は常に前に進んでいく! お前が許されざる命だとしても、それを償い続けるためにもお前は生きなくちゃいけない! 生きて……俺たちと一緒にその罪を償っていけばいいんだ! 俺は……かつて蓬萊寺として多くの人の命を奪った俺はそうやって生きてきた! お前にもできるはずだ!」

『『バカを言え。私は私だ、誰の代わりでもない私だと教えてくれたのはお前だろう。だから私も、私なりに私らしく償いケジメをつける。お前とは違う方法で……私自身が考えて見出す答えで』

「それは……! ……本当に、そんな方法しかないのか? 俺はもう、お前にどうしてやることもできないのか……!」

『『いいや。むしろ最期の大仕事を手伝ってもらうぞ、桐梨希繫。ここから先は——お前にしか頼めない。私を……逝くべき未来へと導いてくれ』』

そう告げると、デミス・マリス・マキナはその形状を最初の黒い球体の姿へと戻し、その靄を晴らしていく。そこに残ったのは、拳ほどの大きさの中心核——『マリス・リライズ』が浮遊している。

「……解析班。あの核のデータをすぐにごつちに送ってくれ」

『了解。しばらくお待ちください』

「優芽、ここまでありがとうございます。後は俺がやるよ」

「……あまり無理をしないでくださいね」

希繫がマリス・リライズへと近づくと、逢依あいつと悠生ゆうきの指示によって周囲のレイドリベ
ンジャーズは後退。互いを見つめ合う希繫とマリス・リライズを見守るように取り囲
む。

「ここまで、幾つもの希望が俺を助けてくれた」

雨粒のようにぼつりぼつりと零れる言葉が、稲妻のように駆け抜ける追憶が、溢れて
止まらないのがその場の全ての人々に伝わっていく。

「優芽という希望は、俺の命だけでなく俺が俺であることを常に肯定してくれた」

希繫の胴体に巻き付いていた虹色のウィングがバレットモードへと戻り、彼の手に握
られる。

「白露しろろという希望は、ただ償いのためだけに戦っていた俺を「父親」に変え、戦う理由を

くれた」

その虹色のユニティバレットに、ホルスターにしまっていたユニティバレットから白銀の光が加わる。

「誠実せいじという希望は、俺に過去の罪と向き合う機会をくれ、方法は違えどそれに付き合っ
てくれた」

それに呼応するかのように、群青の光も虹色へと加わる。

「叶枝かなえと望夢のぞむ、ふたつでひとつの希望は、偽りの仮面を被ることで救える命があることを
教えてくれた」

緑色の光もまた、ふわりと浮かび虹へと沈む。

「義陰よしかげと陽乃はるのの希望は俺を「最弱」から抜け出すチャンスくれたし、師匠という希望は
行き詰っていた俺の可能性を広げてくれた」

そして赤く染まっていたユニティバレットから放たれた光は真紅と深紅に分かれ、虹
色へ込められる。

「望月もちづきや諸星もろぼし、空宮そらみや、天宮あまみや……それに土中つちなか、第二前線部隊というチームの希望が、ここに
至るまで何度も鬼へと堕ちそうになった俺を「レイドリベンジャーズ」でいさせてくれ
た」

そんな真紅と深紅を追いかけるように、紫色の光もまた虹色の中で浸る。

「そして……同じチームだけじゃない。この場に集まってくれた「レイドリベンジャーズ」という家族が、俺に数えきれないほどの希望を託してくれた！」

最後に、眩いほどの橙色の光が虹色のユニティバレットに入ったことで、「それ」は完成した。

そこに存在したのは、無数の希望を束ねて包んだ弾丸——黄金のユニティバレット。

「デミス・マリス・マキナ！ 俺はお前を救えるほど大きな希望なんかじゃない！ けど……みんなが俺に希望を与えてくれた！ だから俺は……その希望を繋ぐ『継』^{きつな}であり

たい！ お前と俺とを繋ぐこの「糸」のように、ただ漂うばかりの小さく儂いこの光を繋いで結んで紡ぐものでありたい！」

「アアアア——^{友よ}ウウ……^{小さく儂く}エエエエアア、^{美しい光の軌跡よ}ウウアアアア——」

その言葉を、マスカレイダーは敢えて言葉にはしなかった。それはきつと、たとえば叶わぬとしても共に歩むという道を示してくれた希繫にだけ伝うべき想いだから。

「叶えてやりかつたらうな……／……望んでくれてたら、違ったのかな」

ぼつりと落ちたその言葉は、すぐ隣に立つレイドリベンジャーズたちですら聞き零すほどに小さかった。

『解析結果、出ました。あの中心核——『デミス・リライズ』は、デミス・マリス・マキナが集積させた負の感情を管理・制御する器官、いわゆる悪感情の檻です。あれを破壊

すれば奪われたネガティブを解き放つことはできませんが……」

『デミス・リライズの周囲を覆い隠していた霧状のネガティブも全て集積した結果、驚異的な硬度・強韌性を持っています。桐梨隊員の発揮できる威力では、あれを破壊するだけのパワーには至りません……』

『加えて、あれほどの小型ターゲットとなると、複数人での攻撃を集中させるには互いの動きがその攻撃を阻害してしまう可能性があります。となれば、やはり誰か一人での攻撃が、結果的にアレに対して最も有効なダメージとなるでしょう。ここは大郷隊長に——』

「構わない、俺がやる」

統司とうじとの戦いで蓬萊寺へと戻った後、蓬萊寺家当主としてのお役目をこなし続けて、希繫きよづきの心は摩耗し続けていた。杏樹きょうじという味方が中継役となつて統司と連携し、どうか心を保ち続けたが、薬によって増大する欲望を抑える内に、希繫は冷静さを失つていった。

エクレールの助力で繭となり、蓬萊寺から身を守りながら過去の罪と向き合い、アバターを取り戻すことはできたものの、逢依や白露がいなければ希繫は「こちら側」に戻ることではできなかつただろうし、手遅れになればついには心までもが蓬萊寺に——いや、撫月なつきに堕ちていただろう。

そして、撫月との戦いでは逢依だけではなく悠生や優芽にも背中を任せ、ついに妹・撫月と向き合うことができ、そこからデミス・マリス・マキナに敗北した後も、多くのレイドリベンジャーズが希繫のために力を貸してくれた。

そこに至るまで無数の希望を繋ぎ結んで紡いできたからこそ、その一筋の軌跡は未来を描き世界を連ねる糸となる。

「優芽……悠生……逢依……。そしてここに集まったみんな！ もう一度だけでいい！ この癩癩持ちでワガママばかり言うけど、俺の大事な家族の一人を、希望の未来へと送るために——」

——みんなの力、借りるぞ！

「アバター！」

『了解。ユニティバレットに拡張接続します』
アクセスロード

「エクレーラー！」

『了解。ディアマスターに向けられた全ての希望にアクセスします。希望の願い、
エモーショナルエナジー充填開始』
チャージ

黄金のユニティバレットを依り代として、希繫の左腕に集まる無数の希望。そしてそ

の希望に乗って、何人かの声と共に何かが希繫に目掛けて投げられた。

「希繫！ コイツも使え！」

「お願い、希繫を支えてあげて！」

「お兄さん、この子も！」

その声に振り返った希繫は、自分に向けて投げられたそれが何とも知らないまま掴み取ると、それを見て驚愕の視線を送った。なんとその手にあったのは、紫、橙、虹の光彩を放つクリスタルコア。クリュスタルス、スヴィルカーニイ、イーリスの三機であった。

希繫が再び視線をそちらに向けると、三人はマリス・リライズが放つ悪感情に中てられ、その場に蹲るようにながら彼にサムズアップを送っていた。

「……ああ、お前たちの力も借りるぞ！ 頼むクリュスタルス！ スヴィルカーニイ！ イーリス！」

『了解。ユナイトギア第一四四〇号・クリュスタルス、桐梨希繫に同調接続します』

『了解。ユナイトギア第九一三号・スヴィルカーニイ、桐梨希繫に同調接続します』

『了解。ユナイトギア第七号・イーリス、桐梨希繫に同調接続します』

真紅の脚と深紅の左腕。虹色の翼に橙の右腕。そして頭には紫のツノを戴くその姿は、もはや人にも鬼にも非ず、まして神でも悪魔でもない、英雄の如く戦場を駆ける機

兵——英雄戦機のそれであった。

「イーリス！」

『了解。大気中の水分を操作します』

「クリュスタルス！」

『了解。あらゆるものの運動量をゼロに固定します』

「エクレーール！」

『了解。リアクターシールドを使用します。エモーショナルエナジー、充填開始——い
けます』

イーリスの能力によって大気中の水分をマリス・リライズリライズの周囲に集め、クリュスタ
ルスの能力で凍結、小さな氷の粒の表面を今度は水蒸気でコーティングし、それらすべ
ての氷の粒をマリス・リライズへとぶつけた。

ぶつかった氷は当然ながらマリス・リライズに大したダメージを与えないまま反射さ
れるが、反射した先には最低出力のリアクターシールドが待ち受けており、それによつ
てさらに反射された氷の粒は微細な静電気を帯電しながら他の氷の粒やマリス・リライ
ズとぶつかり合い、その荷電量を増幅させていく。

そうした衝突を繰り返しながらも氷の粒の弾速が落ちないのは、リアクターシールド
と氷の粒に付着した電気が同極の磁気を纏っていることで互いが反発し合っているか

らだろう。

「スヴィルカーニイ！」

『了解。温度あるものの熱量を操作します』

「アバター！」

『了解。流動性エネルギーを分身に変換します』

そして希繫は自身の体温を上げることと血流を円滑にすると同時に筋肉を柔らかくほぐし、軽く屈むと一気に上空へと跳びあがると、分身をさらに超高高度へと投げ飛ばし、その高さで分身を解除、流動性エネルギーである雷へと戻すと、形を保てなくなつたそれが最も近い逆電荷の高エネルギー体である希繫へと落雷。

勢いよく落ちた雷の衝撃と位置エネルギーに加え、大気を蹴り付けることでさらに加速した希繫は、その右足をマリス・リライズへと突き出すと、一筋の稲妻となつて降り注ぐ。

『翔脚・紅蓮冥雷——いけます』

「ぜえあああああああああああッ!!」

希繫の放つた最後にして最大の一撃、翔脚・紅蓮冥雷の衝撃になおも耐えるマリス・リライズであったが、希繫の突き出した脚に付加されていた正電荷に反応し、周囲を漂い続けていた大量の負電荷が突き出した右足と、それに接触しているマリス・リライズへ

と殺到。

膨大な電力が集中している両者であるが、希繫の体はあくまで雷撃体。対象に物理的な衝撃を与えられない電撃体と違い、雷撃体は「雷」であるため接触の瞬間に周囲の水分を一瞬で蒸発させて水蒸気爆発を発生させることで結果的に衝撃を起こす。

こうしてマリス・リライズと拮抗状態を持續させているのも、氷の粒が溜め込んだ大量の電気と、分身の雷、そして雷撃体としての電力が、イーリスが周囲の大气から水分を集めて補給させることで継続的な水蒸気爆発を引き起こしているからだ。

「デミス・マリス・マキナ！ みんなが俺に託し、俺が繋ぎ、お前へと結んだこの希望が、お前に贈る最後の餞別だ！ ありったけの俺の感情と一緒に受け取れッ！ おおおおおおおおおッ——」

希繫は自分に残された全ての感情を注ぎ込み、その心に込められた全てを突き出した右足に込め、そして——、

「——ぜあああああああッ!!」

突き出した紅蓮の稲妻が、人々の心の欠片と……デミス・マリス・マキナを閉じ込めていた檻を貫いた。

終結—エンディング—

『デミス・マリス・マキナの反応消失……それに伴い、世界各地で暴徒化していた人々の鎮静化を確認しました。——作戦は成功です』

本部のオペレーターからの通信が入った瞬間、誰もが沈黙した。そして僅かな間を空けて、怒号のような歓声がその場に響き渡る。

「……終わった。デミス・マリス・マキナ……お前が終わらせてくれたんだ。俺と蓬莱寺の因縁も、人類とレイダーの戦いの歴史も……」

デミス・マリス・マキナが自らを餌として召喚したレイダーは、各レイドリベンジャーズによつてただの一端すら残すことなく殲滅。この世に残されたレイダーは、マスカレイドーのみとなった。

そして蓬莱寺家は希繫と小転を除き、混ざりものとはいえ唯一「純血の蓬莱寺」の血筋であつた撫月を失つたことで、実質的に崩壊。レイドリベンジャーズと警察が連携しながら、希繫が避難させた『家臣』や『成り上がり』を確保し、逃げ延びた数名の残党は長期戦を覚悟の上で追跡・確保に臨むことになるだろう。

「……さて。霧島刑事、頼むよ」

希繫が振り向くと、永岑支部の支部長を務める霧島によく似た顔の男性の刑事が立っている。それは義陰と陽乃の引き起こした「装着者暴走事件」を担当した霧島支部長の弟、霧島刑事であつた。

「いいのかい？ 君の奥さんやお兄さんはまだ意識が戻ってないみたいだけど、少し会話するくらの時間は与えるつもりだけど」

「いや、そうすると覚悟が鈍りそうなんだ。あいつらが起きない内にやってくれ」

「……：日本政府要人18名、警察関係者2名、レイドリベンジャーズ関係者7名、ORB関係者1名殺害の容疑者として蓬萊寺夜緋……あなたに逮捕状が出ています」

希繫と霧島刑事の様子を見守っていた周囲のレイドリベンジャーズたちが一斉にどよめく。

それは希繫の逮捕に対してか、それとも彼が行つたという犯罪の内訳についてか。どちらにせよ、何人かのレイドリベンジャーズは霧島刑事に食つて掛かろうとするのを、別のレイドリベンジャーズによって取り押さえられていた。

「お兄さん！」

「……：優芽。もう目が覚めたのか」

「……：わかつてます。それがお兄さんの犯した罪で、お兄さんが償わなければいけないことだつて。でも！ お兄さんはもう十分すぎるくらい苦しんだじゃないですか！

償ったじゃないですか！ お兄さんは、奪った数よりも遙かにたくさんの命を救ったじゃないですか……！」

「違うんだよ優芽。そうじゃない。どんなに償ったところで、軽くなるのは罰であつて、罪は決して消えることはないんだ。たとえ俺がどれだけ命を救つても、奪った命はもう戻つてはこないし、奪われた者の遺族の怒りや苦しみを晴らすには、俺という予先が必要なんだよ。たとえそのためにこの生涯を使い切つても」

「じゃあ……それじゃあ逢依あさんは！ 白露しろつらちゃんや霧久むくくんはどうかですか！

もう一年も待つてたんですよ……！ 霧久くんなんて、未だに男の人に抱っこしてもらつてないんです……お兄さんが抱っこするまでは、誰にも抱っこさせないつて大郷先輩が言つて、みんなそれに賛成して……！ なのに！」

「霧久……そうか、生まれた子は霧久つていうのか。……なあ優芽。逢依に伝えておいてくれ。もしも俺の帰りを待つのが辛いのなら、いつでも自由になつていい。お前と子供たちの幸せを何よりも優先してほしいつて。俺に負い目なんて感じる必要はないぎツ！」

そう言つて切なげに微笑む希繫の言葉を、齒を食いしばりながら聞いていた優芽がその血の滲むほどに固く握つた拳を振り上げた瞬間、見えない衝撃が希繫を吹き飛ばした。

「おう。これでいいのか、逢依」

「ええ、ありがとう悠生^{ゆうき}。それにしても、人が未だにクラクラする頭で黙って聞いていれば、本当に勝手なことばかり……」

それは悠生が繰り出した拳の衝撃波——苛烈拳衝。とはいえ、さすがに威力はほとんどない単純な衝撃波に過ぎないようだが、蓬萊寺の屋敷の障子を2つ3つ巻き込んで吹き飛ばされた希繫は、目をぱちぱちとさせながら元いた方向へと視線を向けていた。

そこにいるのは、最愛の女性。再開してから今に至るまで、連戦に次ぐ連戦のせいでもともな会話などまったく交わせなかったが、それでも彼女の存在が希繫の無理や無茶を精神的に支えていた。

「希繫……あなたはいつも私のことを「自分には不釣り合い」だとか「自分がいなくても相手に困らない」だとか言うけれどね！ 私があなたに何年片思いしてきたと思ってるのよ！ あなたと出逢ってからあなたが私の好意を自覚してくれるまで、9年よ9年！ 自覚しても特別何かが変わりもせず、なんとなく両想いして！ いざ両想いがわかってても、結婚するまで好意は伝えてくれるのに「恋人」と言葉にしてくれたこともない！ 片思いからあなたのプロポーズを受けるまで13年！ しかも結婚してやっと念願の赤ちゃんが出来たらあなたはいないし！ やつとあなたが戻ってくると思つたら今度は「別れたかったら好きにしてくれ」!? ふぎけないで!!」

ゆつくりと、けれど決して弱々しくはない足取りで屋敷に上がり、壊れた障子に背中を預けて倒れている希繫の胸倉を掴み上げると、その紫色が赤色を捉えた。

「あなたは私がどれだけあなたのことを愛しているか全然わかっていないわ！ 私にとつての幸せは桐梨希繫よ！ あなたが好きだから9年も片思いできた！ あなたが好きだから1年も待てた！ なのはどうして！ そのあなたが私に「自由になつていい」なんて言うのよ！！ あなたはいつも私の愛を受け入れてくれるけれど、あなたの中から愛を伝えてはくれない！ あなたの言葉は……優しい「好意」しか伝えてはくれない……！！ 自由なんていらぬから、私はあなたに……束縛あひされたい……！！」

それは、希繫が初めて見る景色だった。

逢依は強い女性であった。絆フアミリイの家族の次女として、希繫のもう一人の姉として共に育ち、同齡の友としていくつもの苦楽を共にした。けれど希繫の知る限り、逢依が泣いている姿を見るのは、降りしきる雨の中で互いの両親から逃げ延びた先で出逢ったあの日だけ。

そんな彼女が——泣いていた。もう二度と見ることはないだろうと思つたそれを流させているのが、自分が無神経に放つた言葉のせいだというのなら。

「逢依」

希繫が目の前で幼い泣き顔を晒す妻の体を強く抱き寄せると、彼女はそれに抵抗もなく静かにその懐へと納まった。

「……俺はこんだからさ、お前からの愛を疑ったことはないけど、お前からの愛に応えられる自信がなかった。お前の方から向けられる愛情の心地よさに甘えて、お前に何も与えてやれなかった。だから、いつか愛想を尽かされる日が来るんじゃないかと勝手に覚悟してただ」

「バカね。そんな覚悟、さつきとくしやくしやくに丸めてゴミ箱に捨ててしまいなさい。私の愛に応えようなんて、そんなのあなたにできるわけないじゃない。だってあなたは「継」だもの。誰かの希望を繋いで結ぶのがあなたの役目。私の役目は……「誰か」なんて曖昧なものじゃなくて、今こうして繋がっているたった一人を「愛」すること」

「はは……まったく、敵わないな。だったら俺は俺なりの方法で、今までよりもっとちゃんと言葉にしようと思う。それまでしばらくは待たせることになるけど……俺が帰るまで、家の留守を任せてもいいか？」

「ええ。でも早くしないと、霧久があなたのことを「お父さん」って呼んでくれなくなるわよ？」

それは嫌だな、と言って逢依の手を借りながら起き上がった希繫は、再び霧島刑事の元へと歩いていき、その手に輪っかを受け入れた。——直後、その輪っかは繋がりを解

かれた。

「……………え？」

「容疑者・蓬萊寺夜縋の確保にご協力ありがとうございます、ご迷惑をいたしました、『桐梨希繫きりなしきづな』隊員」

「え、いや……………まさか、そんな……………」

「蓬萊寺夜縋逮捕のため、レイドリベンジャーズに協力を要請したところ、あなたが蓬萊寺家に潜入捜査を行い、蓬萊寺夜縋および蓬萊寺家がこれまでに行ってきた犯行の証拠や、蓬萊寺家謹製の違法薬物・違法兵器を確保してくれたおかげで、蓬萊寺夜縋を捉えることができました」

「いや捕まつてないし……………」

「おや、おかしいですね……………。どうやら蓬萊寺夜縋は逃走を凶つたようです。蓬萊寺夜縋は音もなく姿を消し、韋駄天のごとく闇を駆ける忍者の末裔ですからね。その逃げ足の速さには我々も悩まされています。他にも蓬萊寺家の残党が数名いるようですし、今後もご協力を願えますか？——『桐梨希繫』隊員？」

「いや職務放棄だろこれ！ それでいいのか現役警察官！ おい誰か他のお巡りさん連れてこい！」

周囲のレイドリベンジャーズやORBに声をかけるが、誰ひとりとして希繫の言う通りにする者はいない。

罪は消えない。軽くなることもない。
だが罰は償うほどに軽くなる。そして、軽くすべき罰すらも残らないほどに償った者に与えられる称号とは――。

この物語は

たった一人では何ひとつ守れなかつた青年が
人々から託された無限の希望を繋いだ

キリなしのキズナの物語。

E p i l o g u e

親子—ミライ—

——絶対悪討滅戦から10年。

国際脅威的生命体であるレイダーもまったく出沒することなく、徐々にその活動規模を縮小させていたレイドリベンジャーズは解体、自然災害から人類を守護する超常レスキューフォース『JOIN T』として再編成されることになった。

現在、かつての前線部隊は全てのチームが統合、チームリーダー「大郷悠生」が率いる主力部隊『チーム・オレンジ』には、彼の片腕ともいえる「海風総交」や、チームのマスコットでありながらエースメンバーとなった「望月芽愛」が在籍。

また、教導チームである『チーム・グリーン』では、古参教導官である真透リディアのほか、新米教導官として彼女のサポートに入っているのが、かつての第二前線メンバーである「古谷早智」であった。リディアからは「呑み込みは悪いが、覚えれば同じ間違いをしない」と概ね悪くない評価を得ているものの、まだ本人としては自信に繋がっていないようだ。

そうして現在も活躍し続ける者たちとは逆に、レイダーとの戦いを終えて目的を果た

し、退役する者も少なくはない。レイダーの撲滅を目標に掲げていた「諸星雄介」や、チームの解散によって新たな居場所を探し始めた「天宮晴斗」と「空宮潤璃」。そして「彼」の助けになるためにレイドリベンジャーズに入団した「和泉優芽」がそうであった。また、前線メンバー以外では、悠生の恋人であり優秀な技術者であった「仲嶋菜咲」が多くの職員に惜しまれつつも退職。

仲嶋菜咲の退職の影響は大きく、同じく技術開発部のチームメイトであった「水面覚悟」にありつただけのノウハウを叩き込んだと公表して彼女のハードルを限界まで上げて去っていき、彼女への恩返しのために入団していた土中美蓮もまた、自らの夢を追って新たな道へと進んでいった。

変化があつたのはかつてのレイドリベンジャーズだけではない。

絶対悪討滅戦にあつて共同戦線を張つたORBのメンバーもまた、各々の未来に向かつて歩み続けていた。

ORBの『牙』と呼ばれていた「武城誠実」は、蓬萊寺の崩壊と共に『裏切り者』の解散を呼びかけ、互いに二度と出会わないことを誓い合い、それまで以上にORBとしての活動に注力し、彼と行動を共にしていた「古崎敬意」は蓬萊寺や裏切り者としての立場を失つてなお、生涯に亘つて彼の隣に寄り添い続けた。

そして地域常駐型であつたレイドリベンジャーズが全職員住込み型のJOINTに

再編成されるにあたり、早智との連絡がとりにくくなった「久繰九衣くくりくい」はORBを退職、親友である「四条杏樹しじょうきょうき」と共にJOINT本部のすぐ近くへと引っ越し、たまに帰る彼女を待ちながら二人で喫茶店を経営している。

また、レイドリベンジャーズでもORBでもないが、現代に唯一生き残っている「レイダー」である『マスカレイダー』の「西郷叶枝さいごうかなえ」と「東条望夢とうじょうのぞむ」の二人は、その後もなんだかんだで続く腐れ縁がとうとうルームシェアするにまで至り、望夢からの再三のプロポーズを断り続けてきた叶枝であったが、古くからの友人は「そろそろ観念しかけてる」と述べる。

そんな中、JOINTには新人メンバーが入団しようとしていた。

その新人の名は――、

「今日からJOINT『チーム・オレンジ』に配属されました！ 笹倉咲桜ささくらさくらです！ よろしくお願ひします！」



「あーもう！ レイダーがいなくなつてからもう10年も経つのに、今度は人と人との

戦争とか、バカなんじゃないの！ 希繫の頑張りはなんだったのさ！」

「逆じゃないかな。本来なら争いや諍いって言うのはこの地球に住む人同士が勝手にやるべきことなんだ。レイダーっていう共通の敵ができたからって共同戦線を張っただけで、それは仮初の繋がりがりだ。希繫が目指した継って言うのは、こうやって争ってぶつかりながら落としどころを見つけ、そうやって「繋がる」ものなんだと思う」

「あつそ！ でも今はそんな理屈とか後回しにして、目の前のバカな争いをしてる奴らはどうにかするんでしょ！」

「そうだね。いずれ「繋がる」時のために必要な争いだとしても、今その争いで失わなくともいい命を巻き込むのは、ちよつと見過ごせない！」

月村義陰つきむらよしかげと日向陽乃ひゅうがはるのの二人は、レイダーという共通の敵を失ったことで『ユナイトギ

ア』という限りのある兵器の奪い合いを始めた人類同士の争いによって傷付いた人々を助けるべく、国境を越えながらボランティア活動に出向いていた。

そして同時に、そうした地域の人々に降りかかる火の粉があれば、時には相棒たる二機を携えて今もお戦い続けているという。

「お困りの、ようだから……力を、貸すね……？」

そして、そんな彼らの活動の様子をどういう経路を用いてか見に来ては、「ほどほど」と呼ぶには余りあるほどの物資と資金を持って協力している人物がひとり。

「小転！ 相変わらず最高のタイミングで来るじゃん、アンタら姉弟はヒーローになる宿命でも背負ってんの？」

「別に……。たまたま、散歩してたら……。見かけたから……。それに、困ってる人を助けるのは……。お姉ちゃん的に、褒めてあげたくなるだけ……」

「アンタの妹になつた覚えとかないんだけど？」

「そんなこと言ってる暇あつたら目の前の状況に集中して！」

「これまでも何度か行方をくらませては出所のわからないお金を家に入れていたきりなしこころ「桐梨小転」だったが、実は当時のお金は今の義陰と陽乃のように世界を股にかけてながら様々な事件や抗争を治めて稼いだものであった。

ただ、相応の見返りを要求した小転と違い、この二人は完全なボランティアであるため時には資金的な厳しさもあり、こうして小転を挟んで日本にいる仲間たちから物資や支援金が届けられている。

「まったく……。世話の焼ける弟と妹で、お姉ちゃんはどううれしい……」

「勝手にお姉ちゃんぶるな！」



そして——日本。愛知県永岑市A—10ポイント改め、永岑市仲守。ながみね なかもり

いくつもの家が立ち並ぶ住宅街に、他よりもほんの少しだけ敷地の広いその一軒家では、賑やかな声が何かを待ちわびるかのように玄関へと押し寄せていた。

「ねーねー、お姉ちゃんいつ帰ってくるの?」

「さつき駅を出たって言ってたから、もうすぐ来るわよ」

「お母さんが待ちきれずに玄関で待つって言ったから飽きたかな。霧久、お姉ちゃんたちが帰ってきたらめいっばい遊んでくれるだろうから、もうちよつと我慢しな」

母・「桐梨逢依」に「逃げないように」と手を繋がれたままこれ十分ほど立たされ飽きと疲れが出たのか、「桐梨霧久」は不満を漏らしつつも、父・「桐梨希繫」の励ましを受けてどうにかこらえた。

すると、ついに待ちわびたその足音が玄関のすぐ前まで聞こえてきた。その音が、気配が、ドアを開けると——、

「お邪魔します」

「た、ただいま戻りました」

10年経つても未だに気弱さの隠れきらない優しい雰囲気となりうれいの青年「戸鳴雨零」と、彼
のやや後ろに付き添うように立っていたこの家の長女が、なぜか緊張した様子で立っていた。

「まあ挨拶はいいから、早くあがっていきな。霧久も楽しみに——」

「あ、あのっ!」

「……なんか様子がおかしいけれど、久しぶりに帰ってきて緊張してるのかしら。ここはあなたの家なんだから、そんなかちこちにならなくても——」

様子がおかしい、ということはその場の全員がわかったが、どうしてか次の言葉の出せない彼女を見て、雨零は何かを察したように声をかける。しかし、時すでに遅し。

「ちよつと待って白露ちゃん、まさか「アレ」を玄関こで言うつも——」

「わた、わたし……雨零くんの苗字をもらうことになりました!」

「……リビングじゃなくて、座敷に行きましようか?」

「逢依、落ち着こう」

「落ち着いてるわ。だから座敷で話しましょう? こういう大事な話は相応の場所と姿勢が必要でしょう?」

「……二人は霧久と一緒にリビング行って待っていてくれ」

「はい……」

その日——22年間を共にした「桐梨」に別れを言って、新たな「戸鳴白露となりしろろ」と名乗る自分に挨拶を告げる。

『だって私の可愛い白露ちゃんが! 雨零くんがいい人だつてことくらい私だつてわ

かってるわよ！ 白露ちゃんの命の恩人だつてことだつて！ でも私の白露ちゃんが！』

『お前ホントそういうところだけは昔から変わつてないな……。大丈夫だつて、雨零君ほんとにいい子だから。絶対白露のことを幸せにしてくれるから』

『そんなのどこに確証があるのよ！』

『確証なんてあるわけないだろ。でもそう思えるくらい雨零君は俺たちにも白露を大事にしているところを見せてくれてたじゃないか』

『わかっているわよ。わかっているけどおお……。』

桐梨夫婦の部屋から聞こえる阿鼻叫喚を背に受けて、白露と雨零は苦笑いを浮かべながら霧久の遊び相手をしている。

そんな、どこにでもある日常を——10年前のあの日、願つて掴み取つたのだと、希繫と白露はこぼれる微笑みを抑えきれなかった。